

茨城県教育財団文化財調査報告第384集

千 天 遺 跡

主要地方道大洗友部線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成26年3月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第384集

千^ち天^{てん}遺跡

主要地方道大洗友部線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成 26 年 3 月

茨城県水戸土木事務所
公益財団法人茨城県教育財団



袋状土坑出土繩文土器



第 27 号土坑出土「竹垣薄双鳥鏡」

序

茨城県では、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、一般国道や主要地方道などの広域的な交通ネットワークの整備を推進しているところです。

その一環として茨城県水戸土木事務所は、大洗町夏海地区において、主要地方道大洗友部線道路改良事業を計画しました。しかしながら、その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である千天遺跡が所在し、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県水戸土木事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成24年1月から平成24年9月までの9か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、千天遺跡の調査の成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者であります茨城県水戸土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、大洗町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成26年3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長 鈴木 欣一

例 言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団（現 公益財団法人茨城県教育財団）が平成23年度から平成24年度にかけて発掘調査を実施した茨城県東茨城郡大洗町神山町796番地ほかに所在する千代遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

調査	平成24年1月1日～3月31日
	平成24年4月1日～9月30日
整理	平成25年4月1日～3月31日
- 3 発掘調査は、調査課長櫛村宣行のもと、以下の者が担当した。

平成23年度	
首席調査員兼班長	皆川 修
首席調査員	荒蒔克一郎
主任調査員	櫻井完介
平成24年度	
首席調査員兼班長	皆川 修
首席調査員	寺内久永
次席調査員	木村光輝
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、首席調査員寺内久永が担当した。
- 5 縄文土器の様式や時期については、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター普及資料課副主幹兼課長の塚本師也氏に御指導いただいた。
- 6 和鏡の名称や年代観については、國學院大學文学部教授の青木豊氏に御指導いただいた。
- 7 第1～3号墓坑から出土した人骨は、調査終了後、大洗町営公園墓地の無縁仏納骨堂に納骨した。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、X = + 32,320 m, Y = + 64,080 mの交点を基準点 (A 1 a1) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C …, 西から東へ 1, 2, 3 … とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c … j, 西から東へ 1, 2, 3 … 0 と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。





遺構 HG - 遺物包含層 P - ビット PG - ビット群 SB - 掘立柱建物跡 SD - 溝跡 SE - 井戸跡
SF - 道路跡 SH - 竪穴遺構 SI - 竪穴建物跡 SK - 土坑 SN - 粘土貼土坑 UP - 地下式坑
遺物 DP - 土製品 M - 金属製品 Q - 石器・石製品 TP - 拓本記録土器
土層 K - 攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・赤彩・施釉		炉・火床面
	竈部材・粘土範囲・炭化材・黒色処理		煤
●	土器	○	土製品
□	石器・石製品	△	金属製品
---	硬化面		

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は () を、推定値は [] を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

- 6 竪穴建物跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸(径)方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N - 10° - E)。

- 7 遺構名の表記は、当財団における既報告の竪穴住居跡を竪穴建物跡とし、それ以外は従来通りとした。

- 8 今回の報告分で、調査段階での遺構名を変更したもの及び欠番としたものは以下のとおりである。

変更 SK 1 → SH 1 SK 2 → SH 2 SK 14 → SH 3 SK 24 → SH 4 SK 83 → SH 5 SK 84 → SH 6 SK 86 → SH 7
SK 87 → SH 8 SK 88 → SH 9 SK 89 → SH 10 SK 90 → SH 11 SK 92 → SH 12 SK 95 → SH 13 SK 96 → SH 14
SK 97 → SH 15 SK 100 → SH 16 UP 8 → SH 17 SI 24 (P 14) → SK 110 SK 15 → 第 1 号墓坑 SK 22 → 第 2 号墓坑
SK 93 → 第 3 号墓坑 SK 107 ~ 109 → SK 81 (P 1 ~ P 3) SD 1 ~ 7 → SF 1 (側溝 1 ~ 7) SX 1 → SK 111
欠番 SK 106

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
千天遺跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	11
1 縄文時代の遺構と遺物	11
(1) 竪穴建物跡	11
(2) 土坑	16
2 弥生時代の遺構と遺物	92
竪穴建物跡	92
3 古墳時代の遺構と遺物	128
竪穴建物跡	128
4 奈良時代の遺構と遺物	130
竪穴建物跡	130
5 中世の遺構と遺物	150
(1) 竪穴遺構	150
(2) 地下式坑	168
(3) 井戸跡	182
(4) 粘土貼土坑	183
(5) 墓坑	187
(6) 土坑	191
6 江戸時代の遺構と遺物	194
(1) 道路跡	194
(2) 遺物包含層	199

7	その他の遺構と遺物	206
(1)	竪穴建物跡	206
(2)	掘立柱建物跡	206
(3)	土坑	207
(4)	溝跡	216
(5)	ピット群	218
(6)	遺構外出土遺物	225
第4節	まとめ	227
写真図版		PL 1～PL42
抄録		
付図		

ちてん 千天遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

千天遺跡は、大洗町おおあらいの南西部に位置し、東側に太平洋、西側に涸沼ひぬまを望む、南北に細長い標高 35 m ほどの鹿島台地平坦部に立地しています。主要地方道大洗友部線道路改良事業にともない、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、茨城県教育財団が平成 23 年度から平成 24 年度にかけて、総面積 6,700m²について発掘調査を行いました。



調査の内容

2 年次にわたる調査によって、縄文時代の堅穴建物跡 2 棟・土坑 23 基、弥生時代の堅穴建物跡 13 棟、古墳時代の堅穴建物跡 1 棟、奈良時代の堅穴建物跡 9 棟、室町時代の堅穴遺構 17 基・地下式坑 9 基・墓坑 3 基、江戸時代の道路跡 2 条などが確認できました。主な出土遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶器、磁器、石器、銭貨、和鏡などです。



調査区域全景（北上空から）



第 66 号土坑遺物出土状況



第 15 号竪穴建物跡完掘状況



墨書土器「大屋厨」



地下式坑群

調査の結果

調査の結果、縄文時代から江戸時代までの断続的な人々の生活の営みが確認できました。縄文時代では、集落に伴う袋状土坑と呼ばれる貯蔵穴ちようそうけつが存在し、弥生時代では、初期の十王台式土器を使った人々が暮らしていたようです。古墳時代の集落は、その中心が調査区域外にあったと推定できます。奈良時代では、建物の北壁に竈をつくって、煮炊きをしていたあとが発見できました。「大屋厨おおやくちや」と墨書された土器は、当時この地域が大屋郷に属していたことを裏付けてくれました。中世では、竪穴遺構や地下式坑が確認できました。土師質土器の皿・内耳鍋ないじなべや輸入磁器の八角小坏はっかくしょうつぎが出土しており、これらの遺構が室町時代に機能していたことが分かりました。また、地下式坑を掘り込んだ土坑からは、「竹垣薄双鳥鏡たけがきすすきそうちうきょう」という平安時代末期に制作された和鏡が出土しました。長く伝世した鏡が室町時代以降に埋められたようです。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成22年6月17日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道大洗友部線道路改良事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成22年7月6日、11月5日に現地踏査を、平成22年11月5日、平成23年2月3・4・22日、3月1・2日に試掘調査を実施し、千天遺跡の所在を確認した。平成23年3月24日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所長あてに、事業地内に千天遺跡が存在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要である旨を回答した。

平成23年4月22日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成23年4月25日、茨城県水戸土木事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成23年4月26日、平成24年3月1日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道大洗友部線道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成23年4月27日、平成24年3月1日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、あわせて調査機関として、財団法人茨城県教育財団（現 公益財団法人茨城県教育財団）を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成24年1月1日から9月30日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

千天遺跡の調査は、平成24年1月1日から3月31日までと平成24年4月1日から9月30日までの2次にわたり、総月数9か月間実施した。以下、その概要を表で記載する。

期間 工程	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
調査準備 表土除去 遺構確認	■								
遺構調査	■	■	■	■	■	■	■	■	■
遺物洗浄 注記 写真整理	■	■	■	■	■	■	■	■	■
撤収									■

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

千天遺跡は、茨城県東茨城郡大洗町神山町 796 番地ほかに所在している。

大洗町は県の東部に位置し、東端は太平洋に、西端は潟沼にそれぞれ面している。町域の地形は、鹿島台地の北端にあたる洪積台地と那珂川や潟沼川によって形成された河岸段丘などの微高地、潟沼や潟沼川沿岸の沖積低地と太平洋に面した海岸を含む低地に大別される。洪積台地は、標高 32～38 m ほどで、南部から北部に向かって傾斜し舌状を呈している。この台地を囲むように標高 0～20 m の低地が存在している。また、洪積台地や河岸段丘には、雨水により浸食された樹枝状の谷が深く入り込み、複雑な地形を形成している。

台地の地質は、石崎層や多賀層、大洗層を基盤とし、下半部は砂や礫、上半部はシルトや砂質シルトが層を成す見和層で形成されている。その上位には常総粘土層、関東ローム層が順に堆積し表土に至っている。低地は、那珂川や潟沼川等の河川の働きによって運ばれた土砂、砂礫、砂泥、砂等が堆積して形成されている¹⁾。

当遺跡は、町の南西部に位置し、東に太平洋、西に潟沼を望む標高 35～36 m の舌状台地上に所在している。遺跡の所在する台地の平坦部は、東西の幅が 0.8～2 km で、南北の長さが約 4 km である。遺跡の西側は潟沼川の河岸段丘で急斜面となっており、さらに西側は標高 3 m ほどの沖積低地で、水田面が広がっている。東側約 600 m には海岸段丘の急な斜面地があり、砂浜を経て太平洋へと続いている。遺跡の北部は、潟沼川沿岸から樹枝状の谷が入り込み、緩やかで起伏のある地形となっている。調査前の現況は畑地である。

第2節 歴史的環境

大洗町には、縄文時代から江戸時代までの大小 97 遺跡が確認されており²⁾、その多くは町域の台地上に所在している。ここでは、当遺跡と周辺遺跡の概要について記述する。

町域での旧石器時代の遺構は確認されていないが、ドンソン山遺跡、磐船遺跡の地表面から 6 点の石器が発見されている。この発見により町域の台地上に旧石器時代の遺跡が存在する可能性がある。

縄文時代前期の遺跡としては、中畑遺跡⁷⁴⁾、栗林遺跡⁷⁵⁾が知られ、勘十堀貝塚⁵⁸⁾も確認されている。この貝塚は、汽水産のヤマトシジミを主体としたもので、関山式土器が出土している。この時期は縄文海進が最も進んだ時期で、現在の河川や低地部の奥まで海水が流入し、淡水が供給される流域では汽水域も存在していたことが推測される。中期の遺跡としては、おんだし遺跡³⁾ (10)、釜堀遺跡⁴⁾ (10) があげられる。千天遺跡⁴⁾ (1) の昭和 53・54 年の調査では、加曽利 E 式期の住居跡 1 軒が確認されている。前回の調査区域は、今回の調査区域北端から北西へ 150 m ほどの距離にあり、台地上における中期の集落の広がりを示唆している。後期の遺跡は、大貫落神北貝塚⁵⁾ (69)、大貫落神南貝塚⁶⁾ (70) が挙げられる。両遺跡の貝層は、ハマグリやチョウセシハマグリを主体とし、スズキやクロダイなど海洋性の魚類が確認されている。骨格製の釣り針や石錘などの漁道具の出土もみられることから、食料の確保に海の恩恵を受けていたことが分かる。

弥生時代の遺跡は、南藤太郎遺跡⁷⁾ (36)、髭釜遺跡⁸⁾ (57)、長峯遺跡⁹⁾ (53)、官女平遺跡¹⁰⁾ (55) などが調査されており、後期の遺跡として周知されている。南藤太郎遺跡は、当遺跡の南西側に隣接しており、後期の竪穴住居跡 27 軒が確認されている。既報告の当遺跡でも十王台式期の集落が確認されていることから、当

遺跡から南藤太郎遺跡の範囲には弥生時代の集落が点在していたことが推定できる。髭釜遺跡は、後期の大集落で、竪穴住居跡は約 200 軒に上っている。長峯遺跡、官女平遺跡は、髭釜遺跡の対岸に位置し、潤沼や潤沼川沿岸に面する台地上に形成された集落である。このような河川沿岸の集落は、上流の茨城町の遺跡でも確認されており、台地上の集落が谷地を利用し、稲作を基盤とした生活を営んでいたと推定される。

古墳時代になると当地域の台地上には古墳が築造されるようになる。磯浜古墳群は、日下ヶ塚（鏡塚）古墳、車塚古墳、坊主山古墳、姫塚古墳等からなる町域の代表的な古墳群である。日下ヶ塚古墳からは、発掘調査によって人骨の細片とともに約 4000 点の副葬品が出土している¹¹⁾。竪穴住居跡はこれまでに、髭釜遺跡で 3 軒、吹上遺跡で 5 軒、長峯遺跡で 6 軒、千天遺跡で 6 軒が報告されており、前期から後期の集落が台地上に形成されていたと考えられ、古墳の築造に関わった人々の存在が推測される。

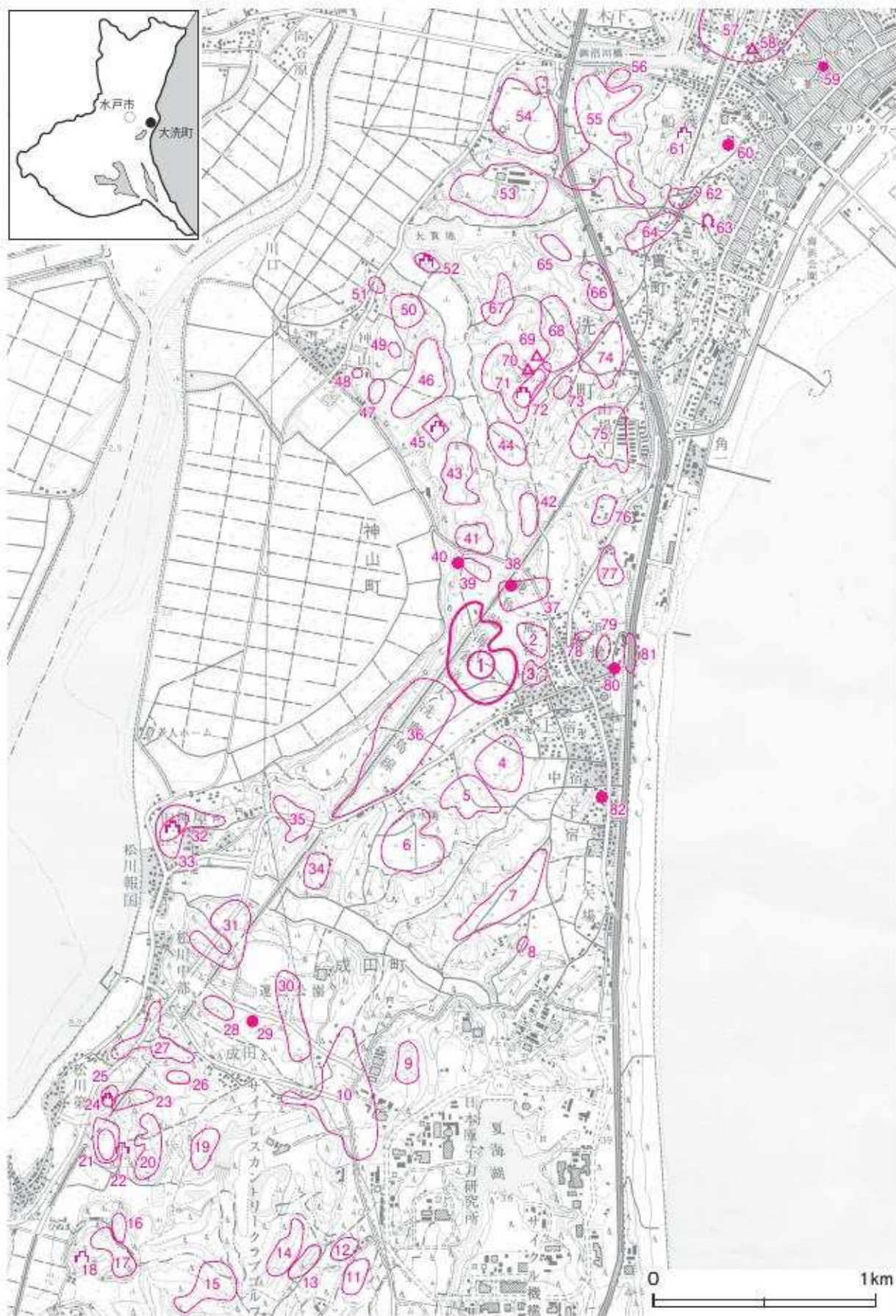
律令期になると、当地域は鹿島郡に属し、町域が宮田郷・大屋郷の二つの郷に分かれていたこと、大屋郷は町域の南南部から鉾田市（旧旭村）の北部を含む地域であったことが『大洗町史』¹²⁾に記述されている。町の南部に位置する皿沼遺跡¹³⁾（14）では奈良時代の竪穴住居跡 10 軒が報告されている。当遺跡の遺物包含層から出土した墨書土器「大屋厨」は、当地域が大屋郷に属していたことを裏付ける資料といえる。

鎌倉時代以降、町域は大塚氏やその一族の鹿島氏によって荘園が経営されており、当地域は成田郷と呼ばれていた。当遺跡の南西約 2.5km には、大館遺跡¹⁴⁾（21）、小館遺跡¹⁵⁾（23）が所在しており、両遺跡の各報告書には、中世の館跡の状況が記載されている。当遺跡から南西約 1.5km には、松川陣屋跡（32）があり、遺跡内の畑地には当時の建物の礎石が残り、江戸時代の守山藩の陣屋跡を今に伝えている。

※文中の〈 〉内の番号は、第 1 図及び表 1 中の該当遺跡番号と同じである。

註

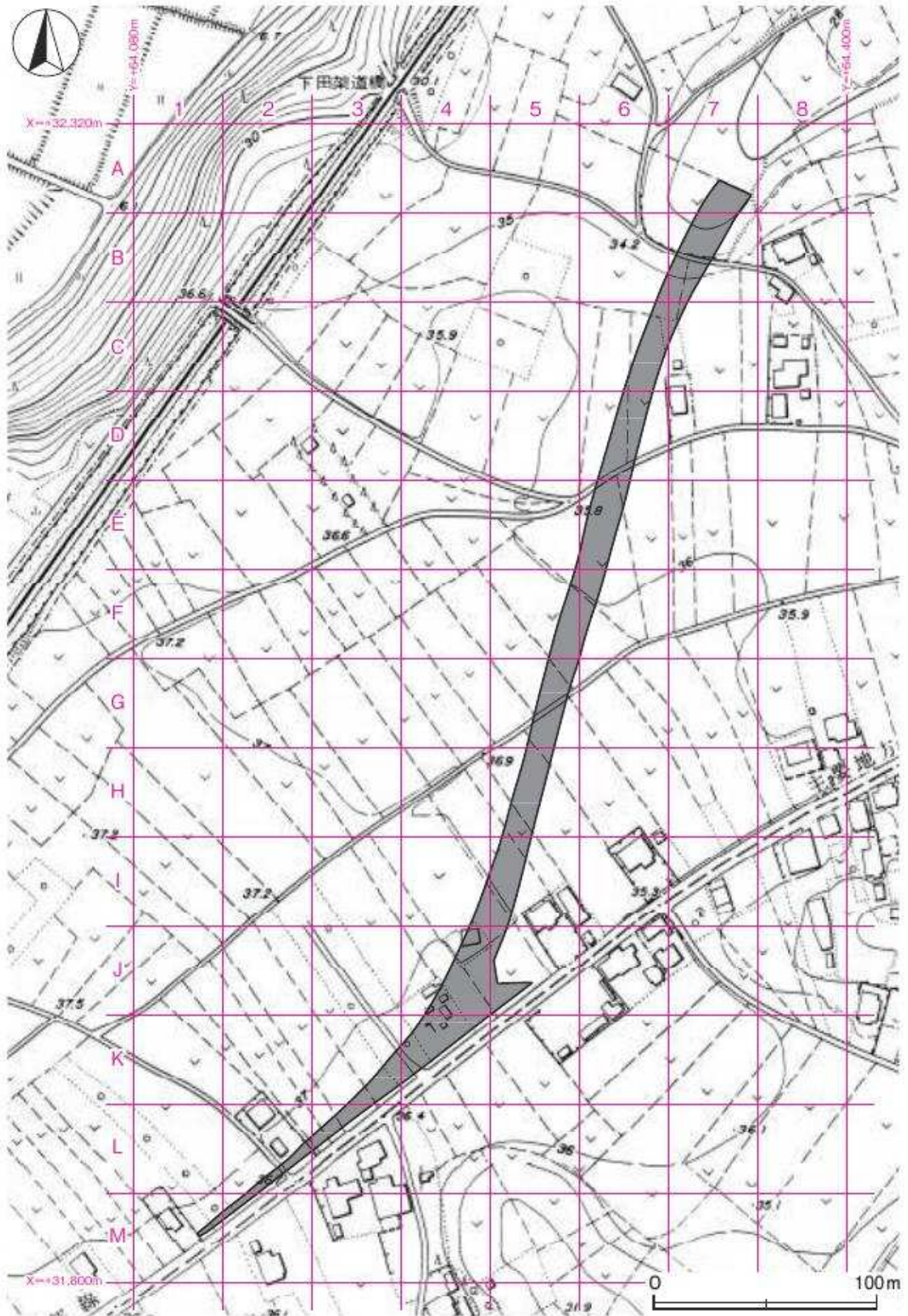
- 1) 大洗町史編さん委員会『大洗町史』大洗町 1986 年 3 月
- 2) 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001 年 3 月
- 3) 井上義安編『茨城県おんだし遺跡』『大洗文化財調査報告書』第 5 集 おんだし遺跡調査団 1975 年 6 月
- 4) 村田健二編『千天 鹿島線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』大洗地区遺跡発掘調査会 1980 年 3 月
- 5) 井上義安編『大貫落神北貝塚』『大貫台地埋蔵文化財発掘調査報告書』第 1 冊 2000 年 3 月
- 6) 井上義安編『大貫落神南貝塚』『大貫台地埋蔵文化財発掘調査報告書』第 2 冊 2000 年 3 月
- 7) 千種重樹編『南藤太郎 鹿島線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』大洗地区遺跡発掘調査会 1980 年 3 月
- 8) 井上義安編『髭釜 鹿島線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』大洗地区遺跡発掘調査会 1980 年 3 月
- 9) 大洗町長峯遺跡調査団編『茨城県大洗町長峯遺跡』『大洗町文化財調査報告書』第 4 集 1973 年 12 月
- 10) 小林健太郎「官女平遺跡 一般県道長岡大洗線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 221 集 2004 年 3 月
- 11) 註 1 に同じ
- 12) 註 1 に同じ
- 13) 井上義安・千葉隆司編『皿沼遺跡 サイプレスカントリー・クラブ造成地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』大洗町埋蔵文化財発掘調査会 1995 年 1 月
- 14) 中村敬治「主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 ヨナ川遺跡 大館遺跡 小館遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 71 集 1991 年 3 月
- 15) a 註 14 に同じ
b 寺門義範『茨城県大洗町小館遺跡発掘調査報告』大洗地区遺跡発掘調査会 1978 年 5 月



第1図 千天遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1「磯浜」）

表1 千天遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	千天遺跡		○	○	○	○	○	○	42	稲荷前遺跡		○	○	○	○		
2	田神遺跡		○		○	○			43	後新古屋遺跡			○	○	○		
3	保地畑遺跡			○	○		○		44	古内遺跡		○					
4	四反遺跡		○	○	○	○			45	龍貝館跡						○	
5	明後内遺跡			○		○			46	天子遺跡		○	○	○	○		○
6	日中内遺跡		○	○		○	○		47	神山塙遺跡		○					
7	小出山遺跡			○	○	○			48	長町遺跡			○				
8	井戸ノ上遺跡		○						49	前峯遺跡			○				
9	猪ノ川遺跡		○	○	○	○			50	蜂内遺跡		○	○	○			
10	おんだし遺跡		○	○	○	○			51	橋山遺跡		○	○				
11	南向B遺跡		○			○			52	一杯館跡						○	
12	高塚A遺跡		○						53	長峰遺跡			○	○	○		
13	南向A遺跡		○		○	○			54	へ口内遺跡			○	○	○		
14	皿沼遺跡		○	○		○			55	宮女平遺跡			○	○	○		
15	北山遺跡						○	○	56	船渡遺跡			○	○			
16	大田山遺跡				○				57	髭釜遺跡			○	○	○		
17	館遺跡				○				58	勘十堀貝塚		○					
18	下太田館跡						○		59	行人塚古墳				○			
19	小館館跡						○		60	富士山古墳				○			
20	石塚遺跡		○	○	○	○	○		61	ウツギ崎砦跡						○	
21	大館遺跡			○		○			62	富士ノ腰遺跡			○	○	○		
22	大館館跡						○		63	権現坂横穴墓				○			
23	小館遺跡		○	○	○	○	○		64	寺ノ上遺跡			○	○	○		
24	成田塙遺跡		○	○		○	○		65	鬼窪遺跡			○	○			
25	小館館跡						○		66	中丸平遺跡		○	○	○	○		
26	エモデ遺跡					○			67	落神遺跡		○	○	○	○	○	○
27	成田塙遺跡		○	○		○	○		68	常福寺遺跡		○	○	○	○	○	○
28	居尻遺跡		○	○	○	○			69	大貫落神北貝塚		○					
29	椎木古墳				○				70	大貫落神南貝塚		○					
30	椎木下遺跡		○	○	○	○			71	登城遺跡		○	○	○	○	○	
31	ヨナ川遺跡		○	○	○	○	○		72	登城館跡						○	
32	松川陣屋跡							○	73	飛城遺跡				○	○		
33	旧陣屋遺跡			○	○		○	○	74	中畑遺跡		○			○		
34	大峯遺跡			○	○	○			75	栗林遺跡		○		○	○		
35	興吾遺跡		○	○	○				76	御中山遺跡		○		○			
36	南藤太郎遺跡		○	○	○	○			77	矢場久保遺跡						○	
37	天神西遺跡		○	○	○	○	○		78	蒲沼遺跡		○		○			
38	宮久保古墳				○				79	今神遺跡				○			
39	神ノ前遺跡					○			80	塩貝塚古墳				○			
40	神ノ下古墳				○				81	夏海浜欠台場跡							○
41	清瀬遺跡			○	○	○			82	下宿古墳				○			



第2図 千天遺跡調査区設定図（大洗町都市計画図 2500 分の 1 から作成）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

千天遺跡は、大洗町の南西部に位置し、鹿島台地の北端に所在している。遺跡は、西に潤沼や潤沼川、東に太平洋を望む台地の平坦部に立地し、遺跡の範囲は東西約 320 m、南北約 480 m である。調査区域は遺跡の南部に位置しており、東西約 250 m、南北約 470 m の細長い範囲である。調査面積は 6,700㎡で、調査前の現況は畑地である。

調査の結果、竪穴建物跡 26 棟（縄文時代 2・弥生時代 13・古墳時代 1・奈良時代 9・時期不明 1）、掘立柱建物跡 1 棟（時期不明）、土坑 88 基（縄文時代 23・室町時代 3・時期不明 62）、竪穴遺構 17 基（室町時代）、地下式坑 9 基（室町時代）、井戸跡 1 基（室町時代）、粘土貼土坑 7 基（室町時代）、墓坑 3 基（室町時代）、道路跡 2 条（江戸時代）、遺物包含層 1 か所（江戸時代）、溝跡 4 条（時期不明）、ピット群 3 か所（時期不明）などを確認した。

遺物は、遺物コンテナ（60 × 40 × 20cm）に 110 箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢・浅鉢）、弥生土器（高坏形土器・広口壺）、土師器（坏・甕）、須恵器（坏・高台付坏・蓋・甕）、土師質土器（皿・小皿・内耳鍋）、陶器（天目茶碗）、磁器（小坏）、土製品（土玉・管状土錘・支脚・紡錘車・土器片錘・土器片円盤）、石器（鎌・石斧・石皿・磨石・敲石・石錘・凹石）、剥片、金属製品（刀子・鎌・釘・錢貨・和鏡）などである。

第2節 基本層序

調査区南部（I 4i9）にテストピット 1 を、調査区北部（C 6e8）にテストピット 2 を設定し、基本土層（第 3 図）の観察を行った。以下、観察結果に基づき層序を説明する。

第 1 層は、黒褐色を呈する現耕作土である。粘性・締まりともに弱く、層厚は 9～32cm である。

第 2 層は、暗褐色を呈するソフトローム層への漸移層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は 7～23 cm である。

第 3 層は、黄褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は 21～34cm である。

第 4 層は、明黄褐色を呈するハードローム層で、クラックが入っている。粘性・締まりともに強く、層厚は 10～47cm である。

第 5 層は、明黄褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は 22～42cm である。

第 6 層は、にぶい黄褐色を呈する鹿沼バミスへの漸移層で、鹿沼バミス粒子を少量含んでいる。粘性・締まりともに普通で、層厚は 10～20cm である。

第 7 層は、にぶい黄褐色を呈する鹿沼バミスへの漸移層で、鹿沼バミス粒子を中量含んでいる。粘性・締まりともに普通で、層厚は 4～13cm である。

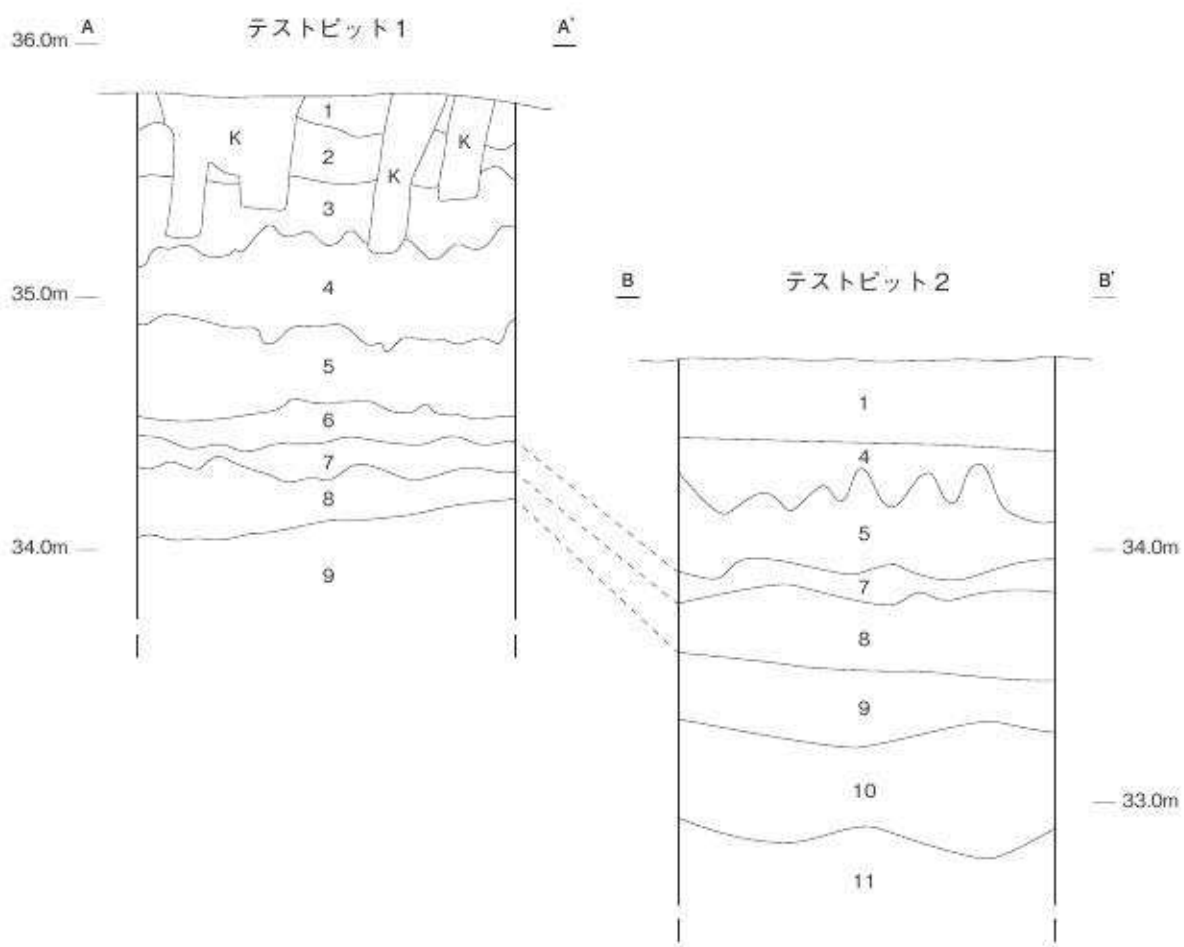
第 8 層は、明黄褐色を呈する鹿沼バミス層である。粘性は弱く、締まりは普通で、層厚は 9～34cm である。

第 9 層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性は強く、締まりは普通で、層厚は 44cm 以上である。

第 10 層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は 32～54cm である。

第11層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性は強く、締まりは普通で、層厚は40cm以上である。なお、テストビット1の第9層の下層とテストビット2の第11層の下層は、いずれも未掘のため本来の層厚は不明である。また、テストビット2では、第2・3層が耕作により攪拌されていた。

遺構は、南部から中央部においては第2層上面で、北部においては第4層上面で確認している。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡2棟、土坑23基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

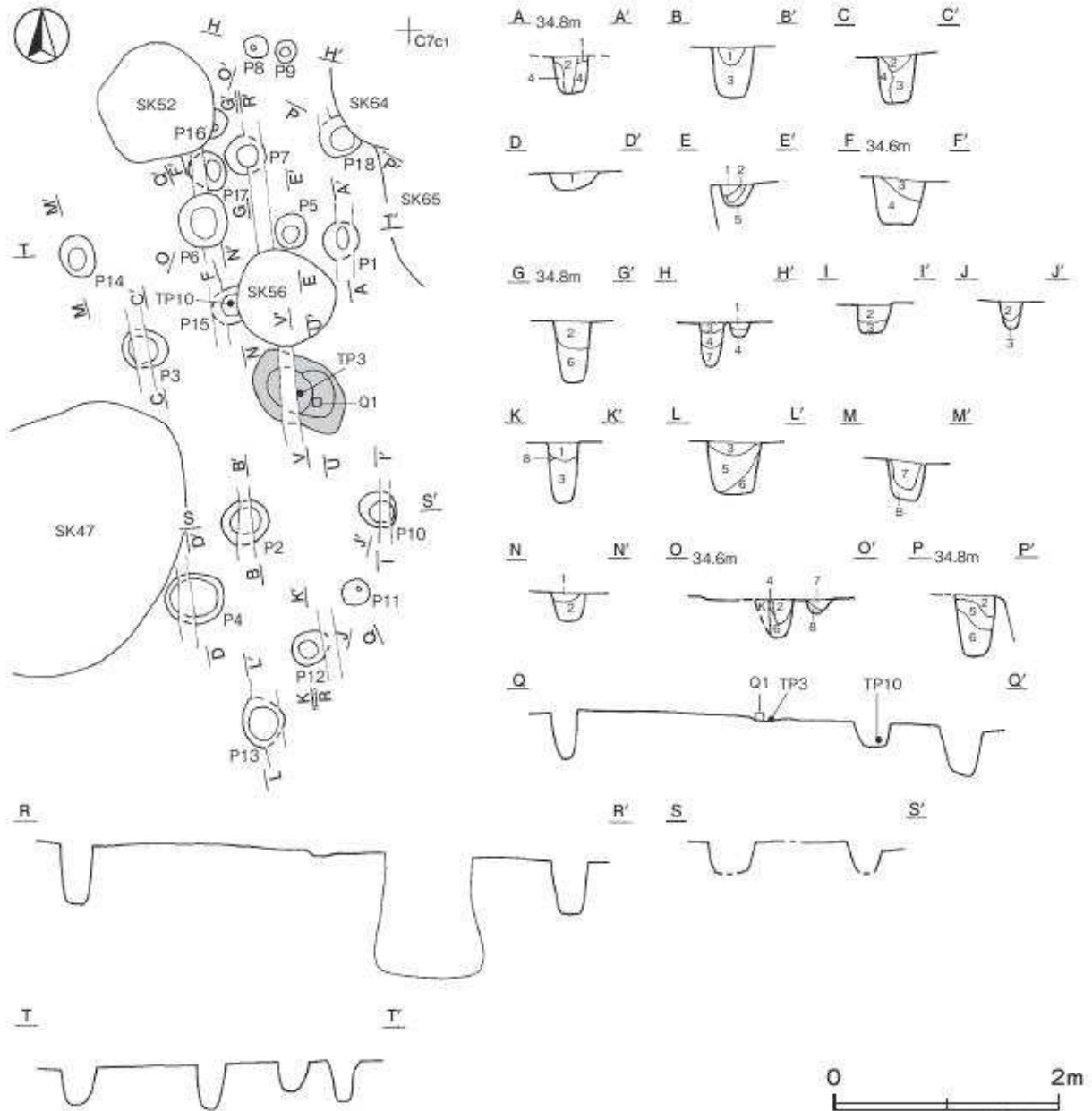
(1) 竪穴建物跡

第24号竪穴建物跡（第4～7図）

位置 調査区北部のC6c0区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

確認状況 確認面で、炉とピットを確認した。東部と西部は削平されている。

重複関係 第47・52・56・64・65号土坑に掘り込まれている。



第4図 第24号竪穴建物跡実測図(1)



第5図 第24号竪穴建物跡実測図(2)

規模と形状 削平されているため、規模や形状は不明であるが、炉と柱穴の配置から南北は6mほど、東西は5mほどの長さで、主軸方向はN-31°-Wと推定できる。

床 ほほ平坦で、明らかな硬化面は認められない。

炉 柱穴の配置から、ほほ中央部に付設されていると推定できる。長径94cm、短径62cmの楕円形で、深さ17cmの地床炉である。炉床は皿状に掘りくぼめられ、炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|--------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 4 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

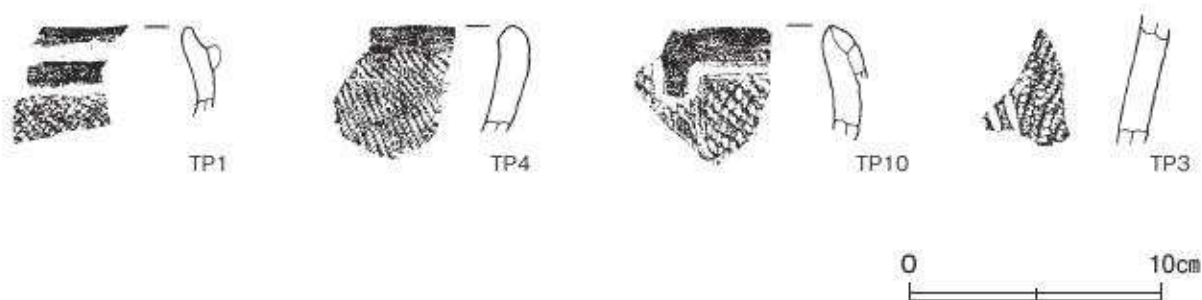
ピット 18か所。P1～P3は深さ26～37cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。明確な出入り口施設に伴うピットは確認できなかった。P4～P18は深さ7～56cmで、配列は不規則であるが、覆土の含有物や堆積の状況がP1～P3と類似していることから、補助柱穴や出入り口施設に伴うピットの可能性がある。

ピット土層解説 (各ピット共通)

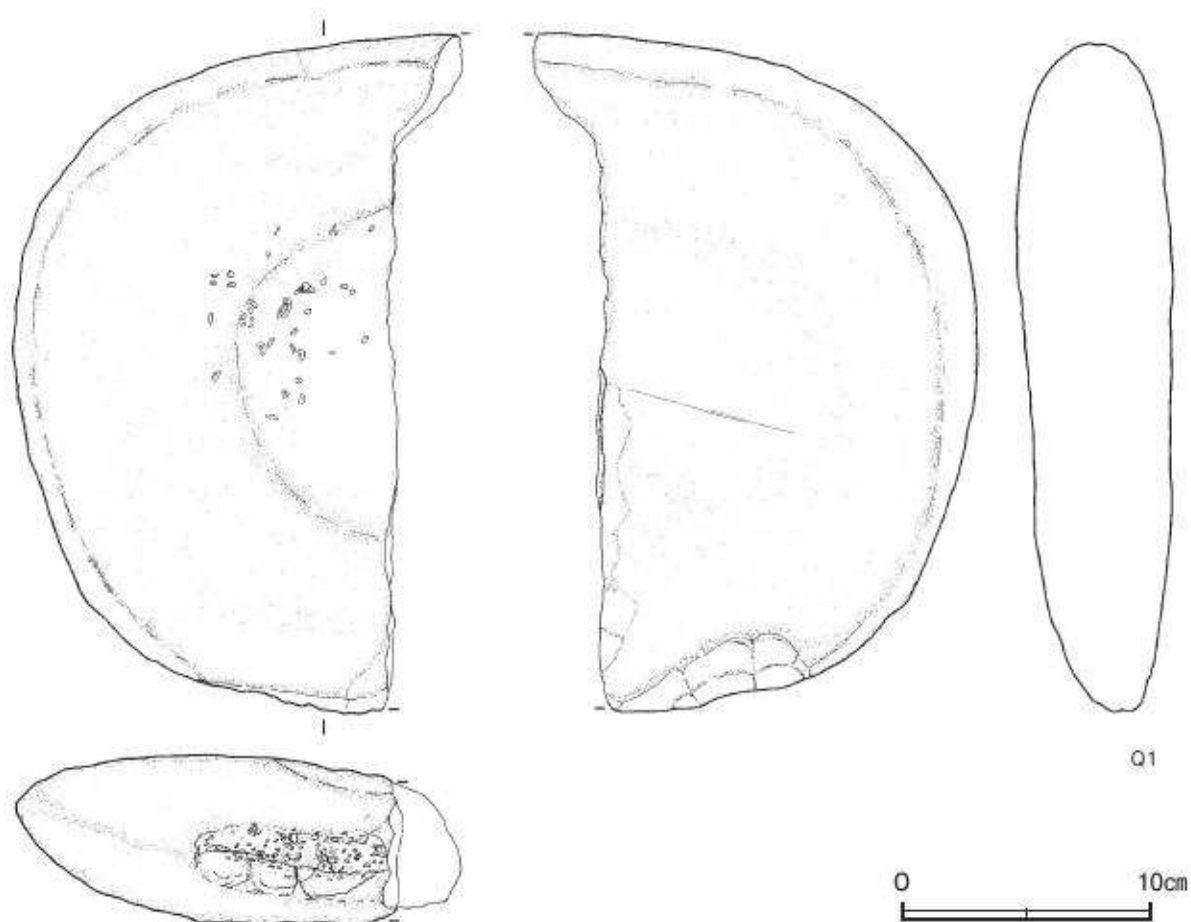
- | | | | |
|--------|----------------|--------|------------------|
| 1 極暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 6 極暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量 | 7 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 |
| 4 褐色 | ローム粒子多量 | 8 褐色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 縄文土器片43点(深鉢)、石器1点(敲石)が出土している。TP1は炉の覆土中、TP3は炉の覆土上層、TP4はP12の覆土中、TP10はP15の覆土下層からそれぞれ出土している。Q1は炉の覆土上層から出土しているが、火を受けた痕跡が認められないので、建物跡を廃棄する際、炉に遺棄されたものと捉えられる。

所見 炉と柱穴の配置から竪穴建物跡と認定した。時期は、出土土器から縄文時代中期後葉(加曾利E式期)と考えられる。



第6図 第24号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第7図 第24号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第24号竪穴建物跡出土遺物観察表(第6・7図)

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	単節縄文RLを施文後、隆帯貼付	伊覆土中	
TP3	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	単節縄文RLを縦紋回転で施文・2条の平行沈線文	伊覆土上層	
TP4	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	口唇部無文・単節縄文RL・施文	P.12 伊覆土中	
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	単節縄文RLを施文後、隆帯貼付	P.15 伊覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	敲石	274	(18.1)	67	(38204)	花崗岩	端部に痘痕状の敲打痕・皿状の凹みと疎らな敲打痕	伊覆土上層	

第25号竪穴建物跡(第8・9図)

位置 調査区北部のD 6b7区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

確認状況 確認面で、炉とピットを確認した。

規模と形状 床面が露出した状態で確認したため、規模や形状は不明であるが、炉と柱穴の配置から南北は5mほど、東西は5mほどの長さで、主軸方向はN-26°-Wと推定できる。

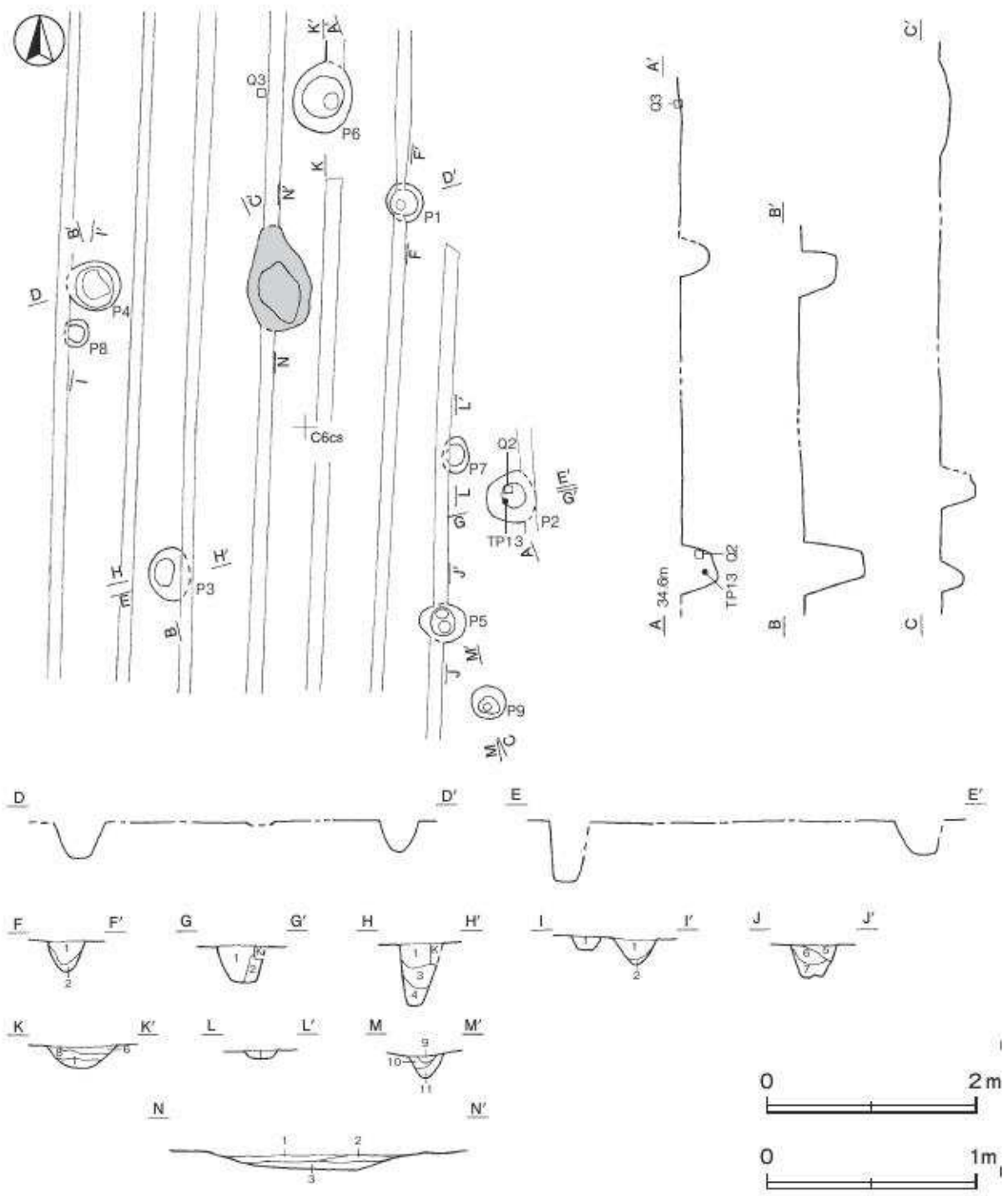
床 ほぼ平坦で、明らかな硬化面は認められない。

炉 柱穴の配置から、中央部北寄りに付設されていると推定できる。長径101cm、短径62cmの楕円形で、深さ9cmの地床炉である。炉床は皿状に掘りくぼめられ、炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 2 極暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量

ピット 9か所。P1～P4は深さ30～59cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ34cmで、炉とピットの位置関係から出入口施設に伴うピットと考えられる。P6～P9は深さ3～23cmで、性格は不明である。



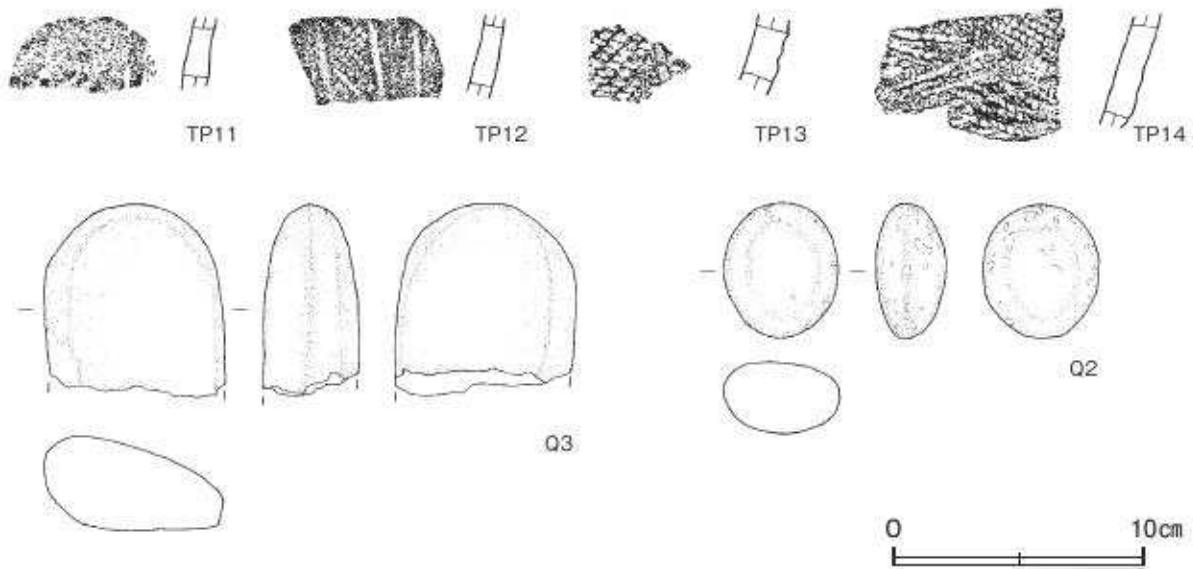
第8図 第25号竪穴建物跡実測図

ピット土層解説 (各ピット共通)

1	褐色	ロームブロック多量	7	暗褐色	ローム粒子中量
2	褐色	ローム粒子多量	8	褐色	ロームブロック中量
3	褐色	ローム粒子多量、鹿沼バミス粒子中量	9	黒褐色	ローム粒子微量
4	褐色	ローム粒子多量、鹿沼バミス粒子少量	10	暗褐色	ローム粒子少量
5	褐色	ロームブロック少量	11	黒褐色	ローム粒子少量
6	暗褐色	ロームブロック少量			

遺物出土状況 縄文土器片 31 点 (深鉢)、石器 2 点 (磨石) が、炉やピットから出土している。TP11・TP12 は炉の覆土中、TP13 は P 2 の覆土中層、TP14 は P 7 の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 炉と柱穴の存在から竪穴建物跡と認定した。時期は、出土土器から縄文時代中期 (加曾利 E 式期) と考えられる。



第9図 第25号竪穴建物跡出土遺物実測図

第25号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第9図)

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英・霏母	橙	外面無文	炉覆土中	
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	単節縄文 RL 施文 沈線刻を磨消	炉覆土中	
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英・霏母	黒褐	単節縄文 RL を縦位回転で施文後、沈線文	P 2 覆土中層	
TP14	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	に、50%橙	単節縄文 RL を施文	P 7 覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	磨石	5.4	4.7	2.8	105.0	泥岩	両面研磨	P 2 覆土中層	
Q3	磨石	(7.7)	7.2	3.8	(325.9)	閃緑岩	4 面研磨 下端欠損	深面	

表2 縄文時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸 (m)	面積 (m ²)				柱穴	出入口	ピット	軒・竪	貯蔵穴				
24	C 6 c d	N-31°-W	-	(6.00 × 5.00)	-	-	平坦	-	3	-	15	1	-	-	縄文土器、燧石	中期後半	本誌→SK17・52・56・64・65
25	D 6 b7	N-26°-W	-	(5.00 × 5.00)	-	-	平坦	-	4	1	4	1	-	-	縄文土器、磨石	中期	

(2) 土坑

土坑 23 基には、形状や遺物出土状況から袋状土坑と推定できる土坑 18 基を含んでいる。以下、遺構と遺物について記載する。

第 11 号土坑 (第 10～15 図)

位置 調査区北部の C 6 e8 区、標高 34 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 7 号地下式坑に底面付近が掘り込まれている。

規模と形状 開口部は長径 2.00m、短径 1.65m の楕円形で、長径方向は N-6°-W である。深さは 70cm である。底面は長径 2.24m、短径 2.15m の円形で、平坦である。北壁は外傾し、西壁から東壁にかけては内彎して立ち上がっている。

ピット 2 か所。P 1・P 2 は深さが 55cm・15cm で、東西の壁際に位置している。性格は不明である。

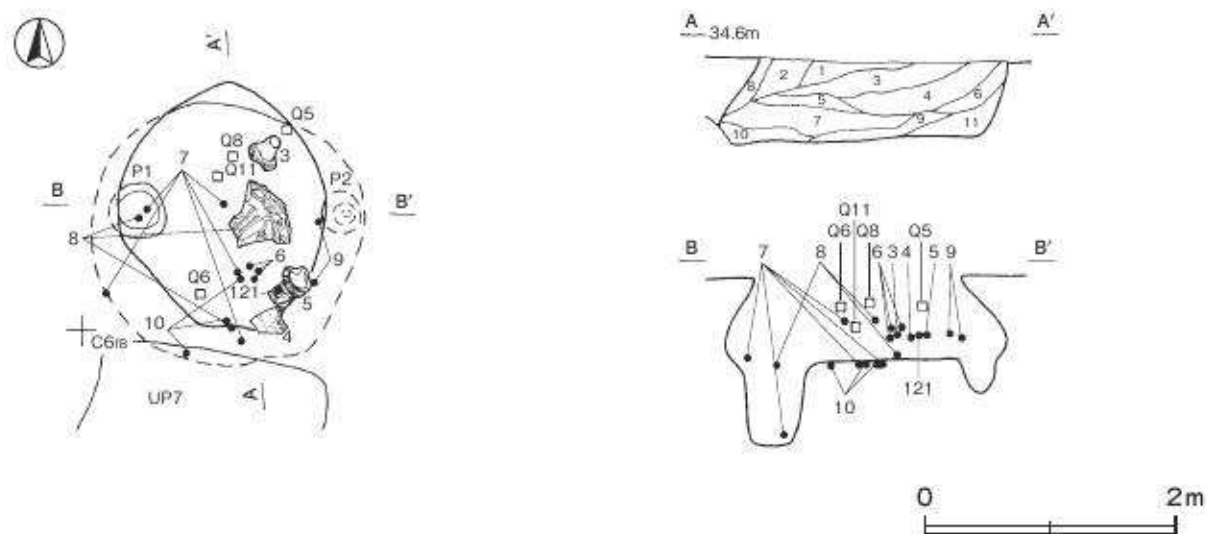
覆土 11 層に分層できる。ロームブロックや鹿沼パミスが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

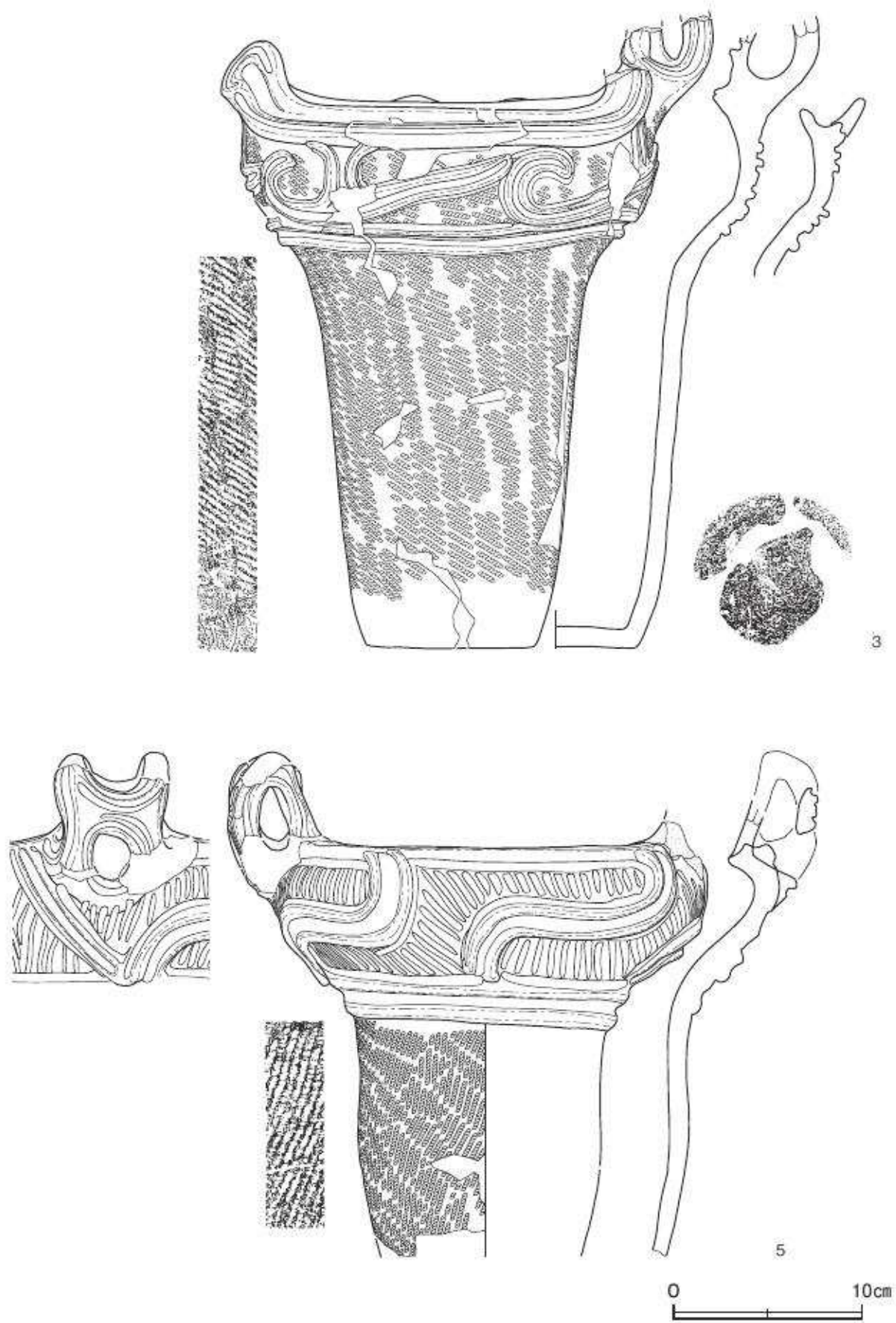
1 暗褐色	鹿沼パミスブロック中量、ロームブロック少量	7 におい黄褐色	ロームブロック多量、鹿沼パミスブロック少量
2 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス粒子微量	9 黒褐色	ロームブロック少量、鹿沼パミスブロック微量
4 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	10 褐色	ローム粒子多量、鹿沼パミスブロック少量
5 黒褐色	ロームブロック少量、鹿沼パミスブロック微量	11 暗褐色	ロームブロック中量、鹿沼パミスブロック・焼土粒子微量
6 におい黄褐色	ロームブロック中量、鹿沼パミスブロック少量		

遺物出土状況 縄文土器片 414 点 (深鉢), 石器 8 点 (磨石 1, 敲石 2, 石錘 5), 剥片 3 点, 破断面のある礫 17 点, 自然礫 5 点, 粘土塊 1 点が出土している。7 は底面と P 1 から出土した破片が接合したもので、8 は潰れた状態で、口縁部が北東方向の横位で覆土中層と底面から出土している。3 は口縁部が南西方向の斜位で、4 は口縁部が南東方向の横位で、5 は口縁部が北東方向の斜位で覆土中層からそれぞれ出土している。Q 5・Q 6・Q 8・Q 11 も覆土中層から出土している。底面から中層にかけて、ほぼ完形の土器も出土していることから、これらの遺物は、埋め戻す際に投棄されたと考えられる。

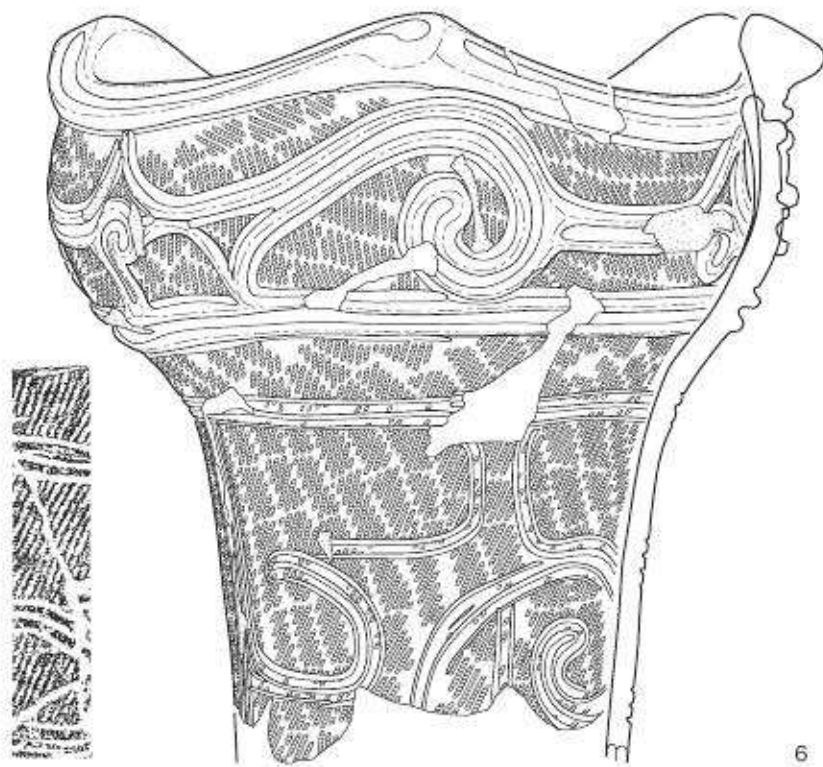
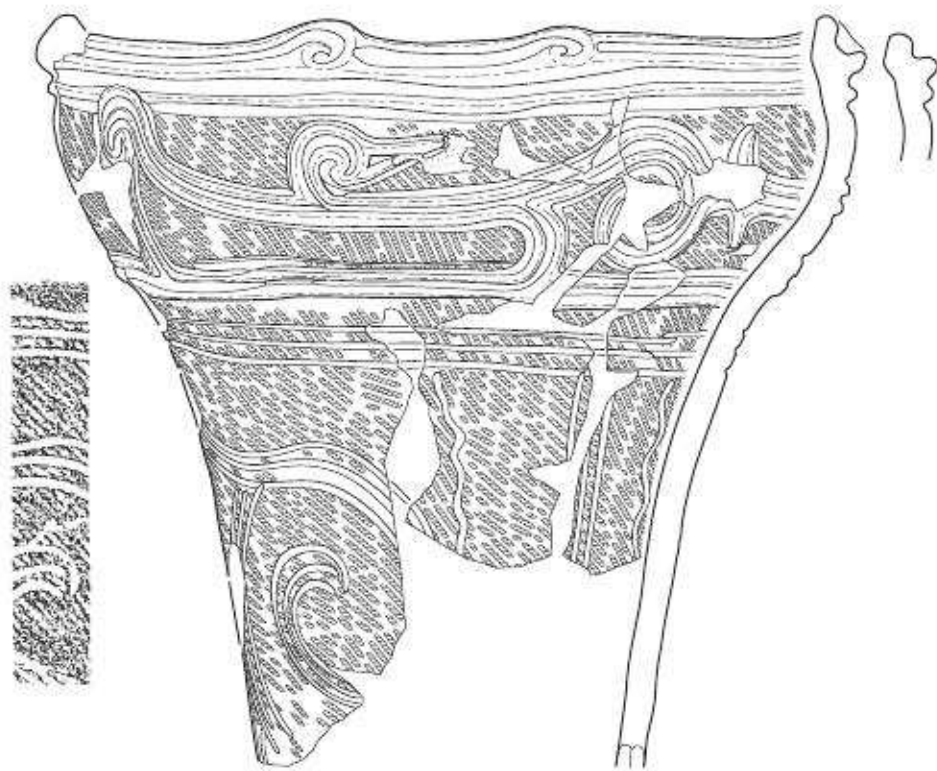
所見 形状から、袋状土坑の下位部分と推定できる。時期は、出土土器から縄文時代中期後葉 (加曾利 E I 式期) と考えられる。



第 10 図 第 11 号土坑実測図



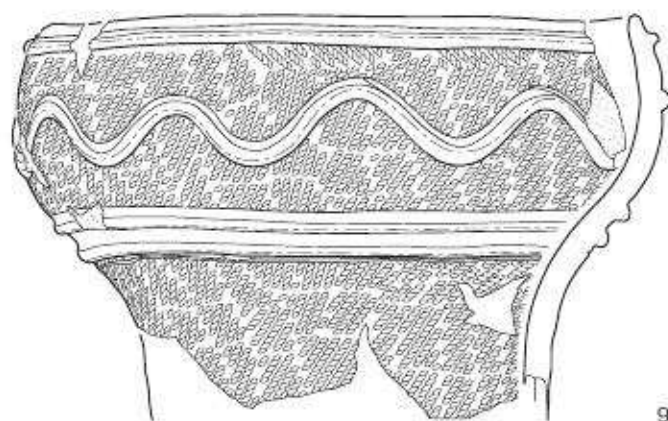
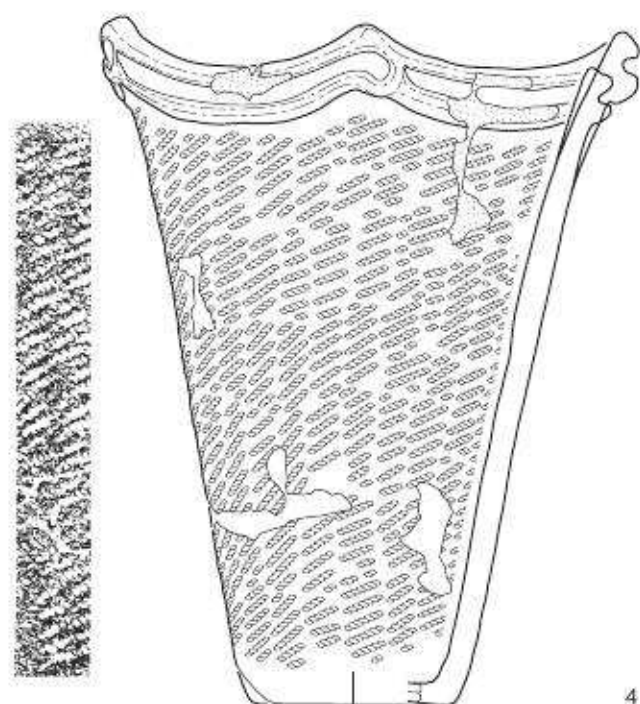
第 11 图 第 11 号土坑出土遗物实测图 (1)



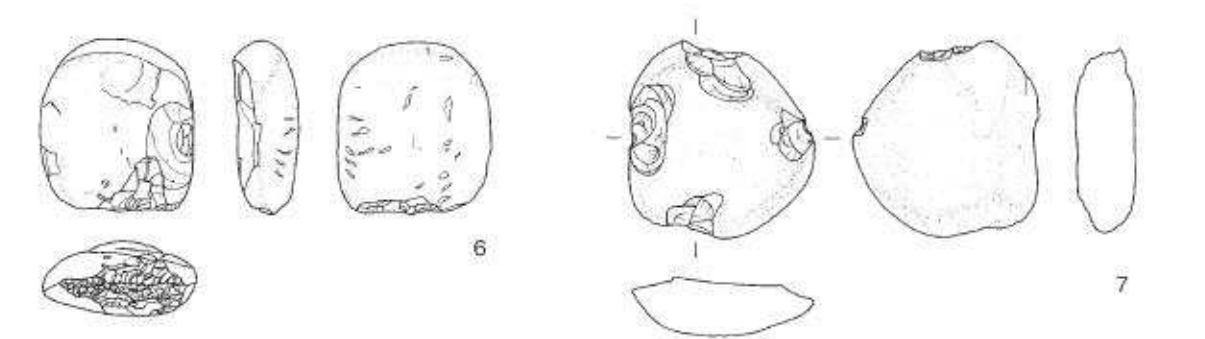
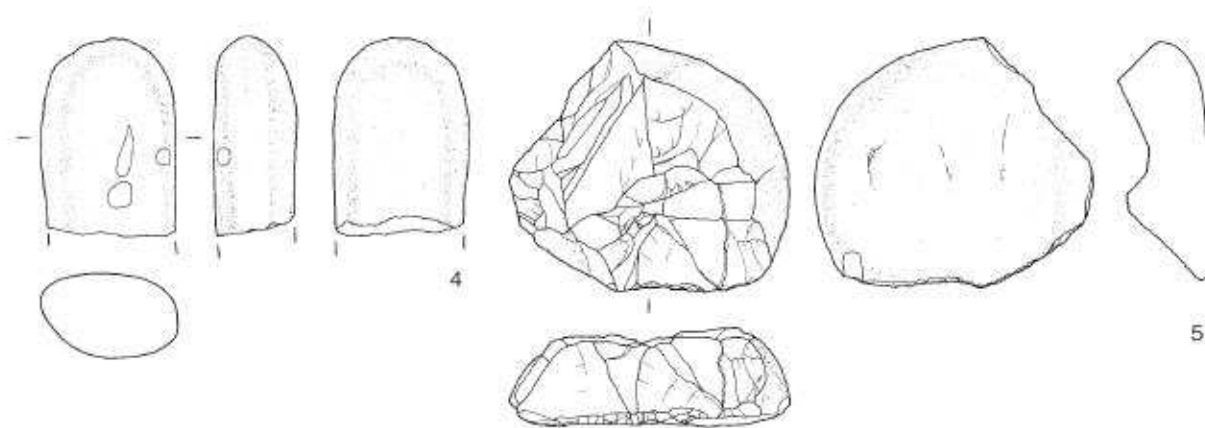
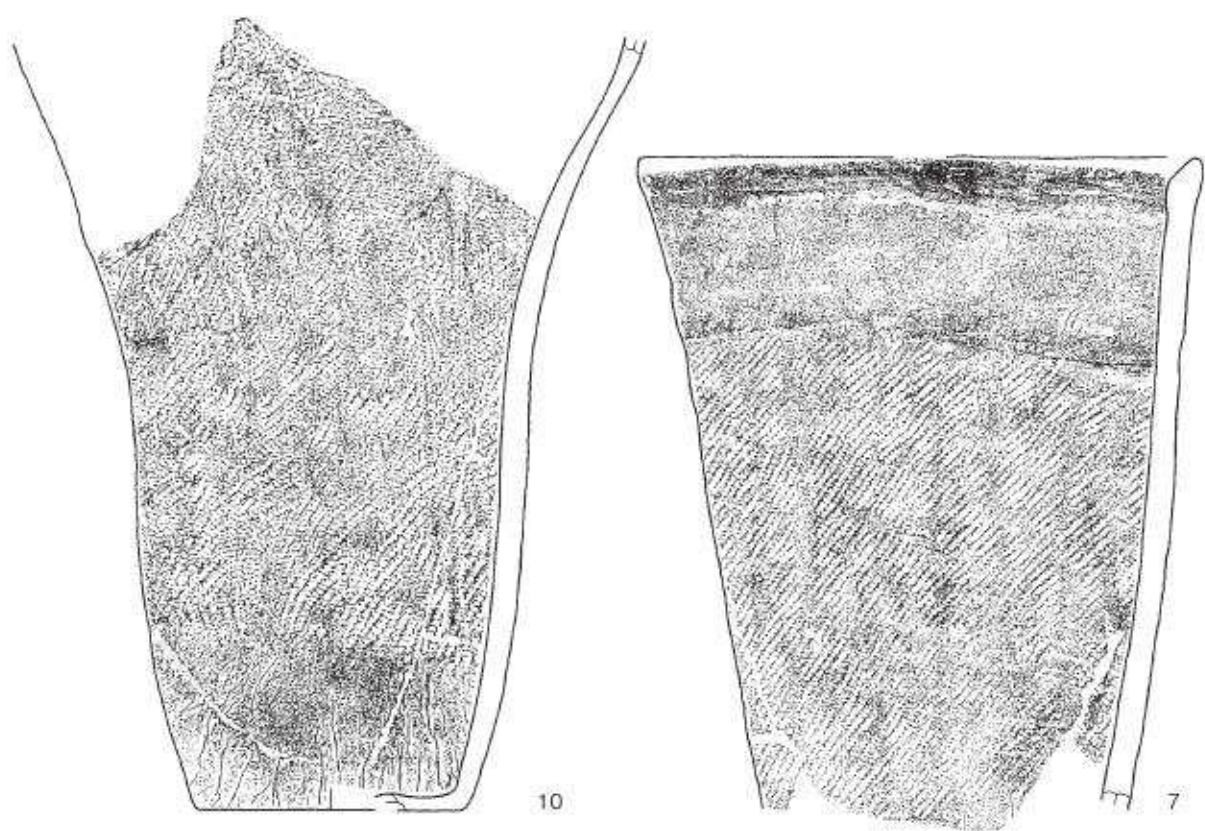
6



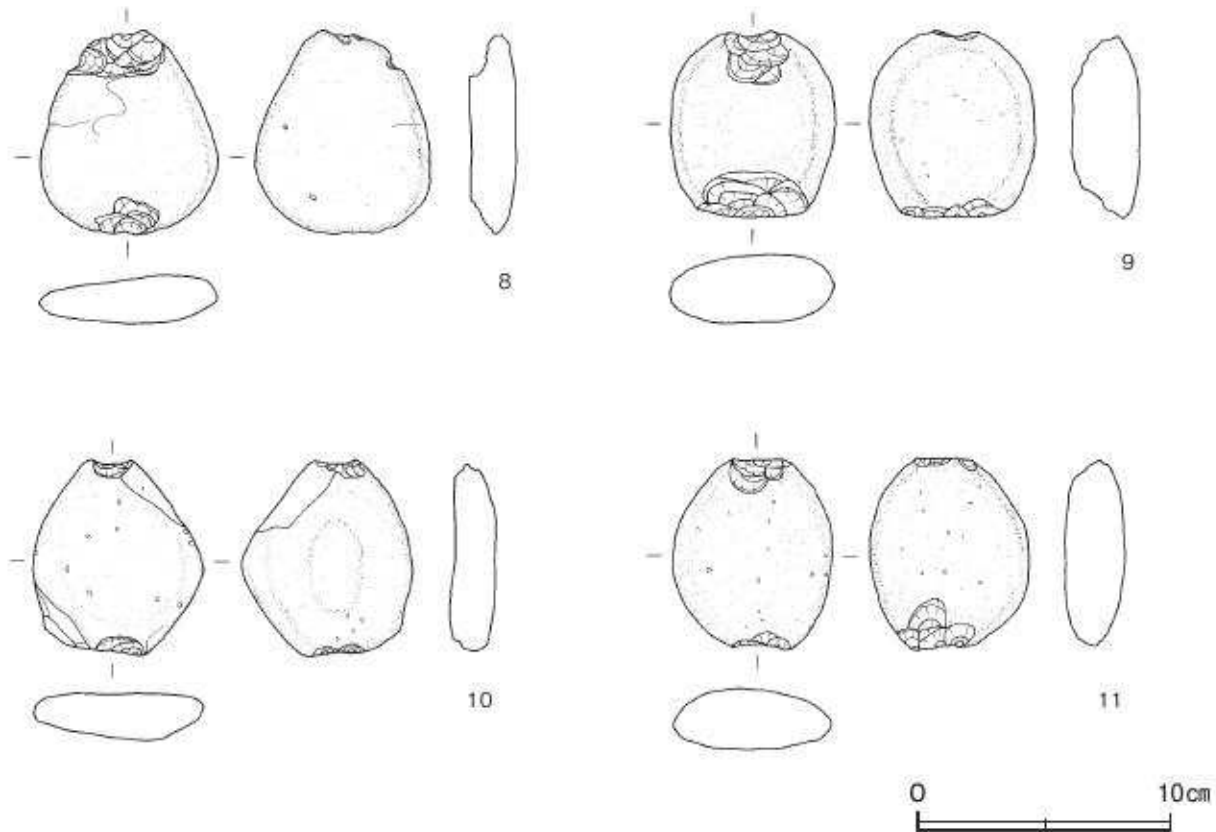
第 12 图 第 11 号土坑出土遗物实测图 (2)



第 13 图 第 11 号土坑出土遗物实测图 (3)



第 14 图 第 11 号土坑出土遺物実測図 (4)



第15図 第11号土坑出土遺物実測図(5)

第11号土坑出土遺物観察表(第11~15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
3	縄文土器	深鉢	18.8	(33.7)	[8.8]	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	口縁部沈線に伴う隆帯で渦巻き状のモチーフを描出。把手上か所残存。単節縄文RLを施文。	覆土中層	95% PL22
4	縄文土器	深鉢	19.9	(27.3)	[8.2]	長石・石英	にぶい橙	普通	単節縄文RLを縦位回転で施文。波状口縁に2条の隆帯貼付。	覆土中層	90% PL22
5	縄文土器	深鉢	21.0	(26.3)	-	長石・石英	灰褐色	普通	口縁部連続した太隆帯貼付後、隆帯に沿う沈線文。単節縄文RLを縦位回転で施文。隆帯と隆帯に沿う沈線によるクラック文。	覆土中層	90% PL22
6	縄文土器	深鉢	25.6	(29.7)	-	長石・石英	灰褐色	普通	単節縄文RLを縦位回転で施文。隆帯と沈線による渦巻状文。胴部手執竹管による渦巻状文。	覆土中層	80% PL22
7	縄文土器	深鉢	22.2	(26.2)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部施文。単節縄文RLを縦位回転で施文。	P1・底面	70% PL23
8	縄文土器	深鉢	29.8	(29.8)	-	長石・石英・赤色粒子	灰褐色	普通	単節縄文RLを縦位回転で施文。隆帯と隆帯にぞう沈線による渦巻状の文様を描出。	覆土中層・底面	80% PL22
9	縄文土器	深鉢	23.2	(16.1)	-	長石・石英	褐色	普通	単節縄文RLを縦位回転で施文。沈線に沿わせた隆帯による渦状の文様を描出。	覆土中層	40% PL23
10	縄文土器	深鉢	-	(30.9)	[10.8]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	単節縄文RLを縦位回転で施文。底部網代直。	底面	70% PL23
121	縄文土器	深鉢	-	(5.3)	8.0	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	縄文摩滅。底部下端無文。	覆土中層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q4	磨石	(8.0)	5.5	3.3	(226.7)	砂岩	表面研磨	覆土中	
Q5	敲石	10.1	11.3	4.0	567.9	チャート	端部に痘痕状の線打痕	覆土中層	
Q6	敲石	6.9	6.2	2.7	176.1	チャート	端部に痘痕状の線打痕。胴縁部に打ち欠き痕	覆土中層	
Q7	石鏢	8.0	7.5	2.6	212.5	チャート	長径・短径方向に抉り調整	覆土中	
Q8	石鏢	8.1	7.0	2.0	147.9	安山岩	長径方向に抉り調整	覆土中層	
Q9	石鏢	7.4	6.5	2.7	198.4	安山岩	長径方向に抉り調整	覆土中	PL42
Q10	石鏢	7.8	6.8	1.9	136.7	安山岩	長径方向に抉り調整	覆土中	
Q11	石鏢	7.6	6.3	2.4	181.7	安山岩	長径方向に抉り調整	覆土中層	PL42

第12号土坑 (第16・17図)

位置 調査区北部のC6d8区、標高34mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は径1.74mほどの円形で、深さは63cmである。底面は径2.38mの円形で、平坦である。壁は内傾して立ち上がっている。

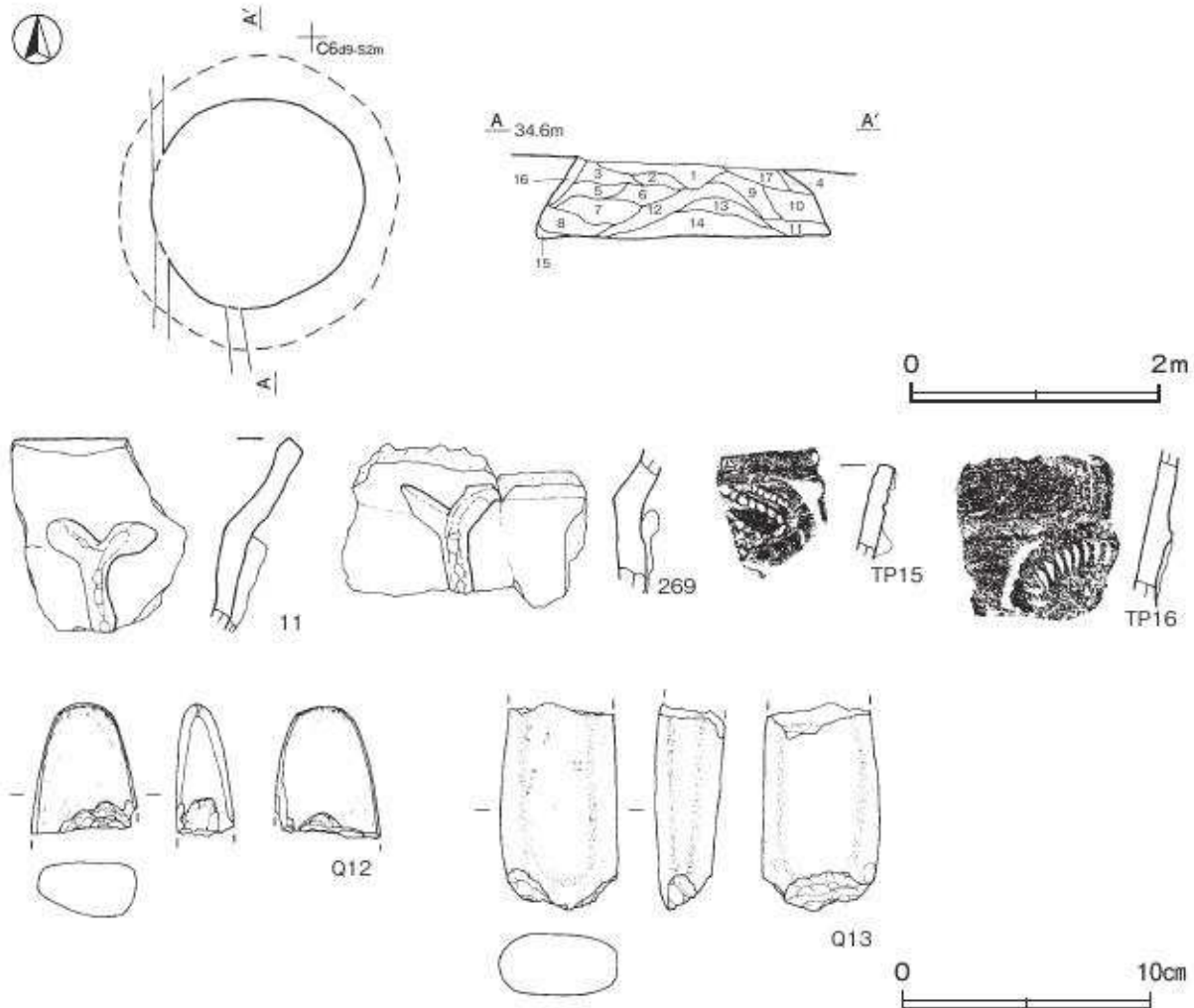
覆土 17層に分層できる。ブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

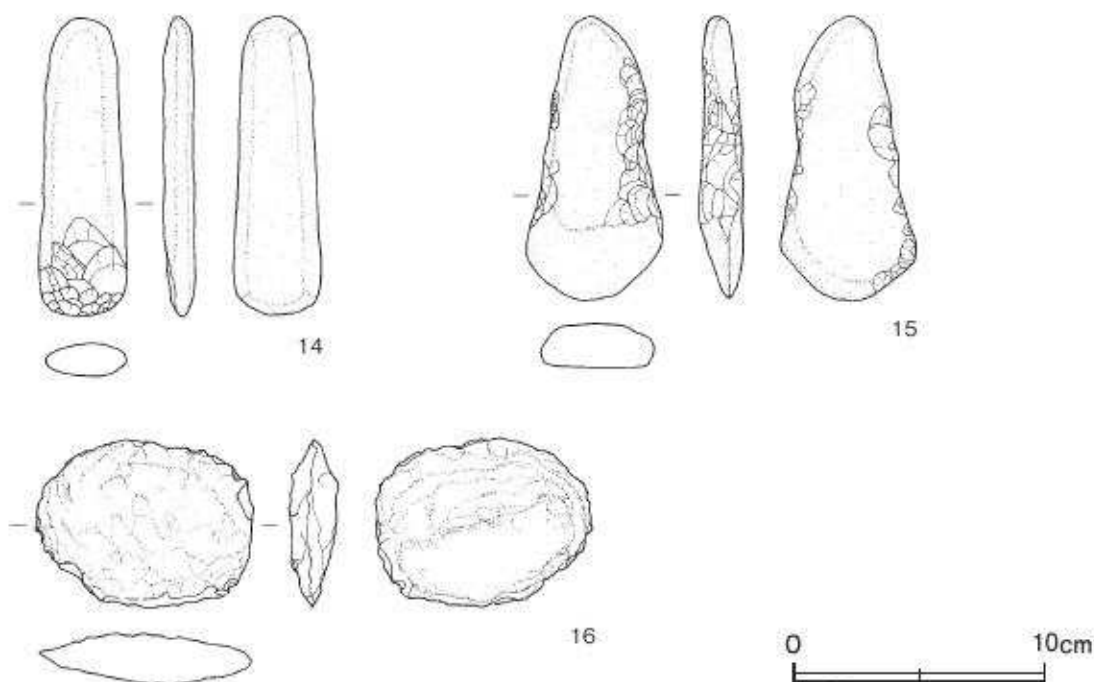
1 黒褐色	ロームブロック少量 (締まり強い)	10 黒褐色	ロームブロック少量
2 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	11 黒褐色	ロームブロック微量
3 暗褐色	ロームブロック中量	12 黒褐色	ロームブロック少量、鹿沼パミスブロック微量
4 褐色	ロームブロック多量	13 におい黄褐色	ローム粒子多量、鹿沼パミスブロック微量
5 黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	14 褐色	ロームブロック多量、鹿沼パミスブロック少量
6 黒褐色	ローム粒子微量	15 黄褐色	鹿沼パミスブロック中量
7 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	16 暗褐色	ロームブロック少量
8 黒褐色	ローム粒子少量、鹿沼パミス粒子微量	17 暗褐色	ローム粒子中量
9 黒褐色	ロームブロック中量		

遺物出土状況 縄文土器片76点 (深鉢)、石器5点 (磨製石斧4、削器1)、自然礫5点が出土している。11・269・TP15・TP16・Q12～Q16は覆土中から出土している。細片で図示できなかったが、口縁部や胴部に単節縄文RLを施文した破片も出土している。

所見 形状から、袋状土坑の下位部分と推定できる。時期は、出土土器から縄文時代中期中葉 (阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期) と考えられる。



第16図 第12号土坑・出土遺物実測図



第17図 第12号土坑出土遺物実測図

第12号土坑出土遺物観察表（第16・17図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
11	縄文土器	深鉢	-	(77)	-	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	口縁部Y字状に隆帯貼付後、隆帯上に押圧	覆土中	10%
269	縄文土器	深鉢	-	(66)	-	長石・石英・雲母	褐色	普通	Y字状に隆帯貼付後、隆帯上に押圧	覆土中	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐色	隆帯貼付後、有節状線文	覆土中	
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐色	微隆帯貼付後、隆帯上に爪形文	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q12	磨製石斧	(5.3)	4.2	2.5	(80.0)	緑泥片岩	砥磨調整 刃部欠損	覆土中	
Q13	磨製石斧	(8.4)	4.8	2.9	(182.1)	泥岩	全面研磨 刃部に剥離痕 銚線部に微細な擦痕 基部欠損	覆土中	
Q14	磨製石斧	11.9	3.5	1.3	91.3	ホルンフェルス	全面研磨 刃部に剥離痕	覆土中	PL39
Q15	磨製石斧	11.3	5.4	1.7	130.8	ホルンフェルス	刃部研磨 銚線部剥離調整	覆土中	PL39
Q16	削器	6.7	8.6	2.0	124.1	粘板岩	幅の狭い刃部を形成	覆土中	

第39号土坑（第18図）

位置 調査区北部のC 6 g8区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は径1.15mほどの円形で、深さは73cmである。底面は径1.01mの円形で、平坦である。壁は直立している。

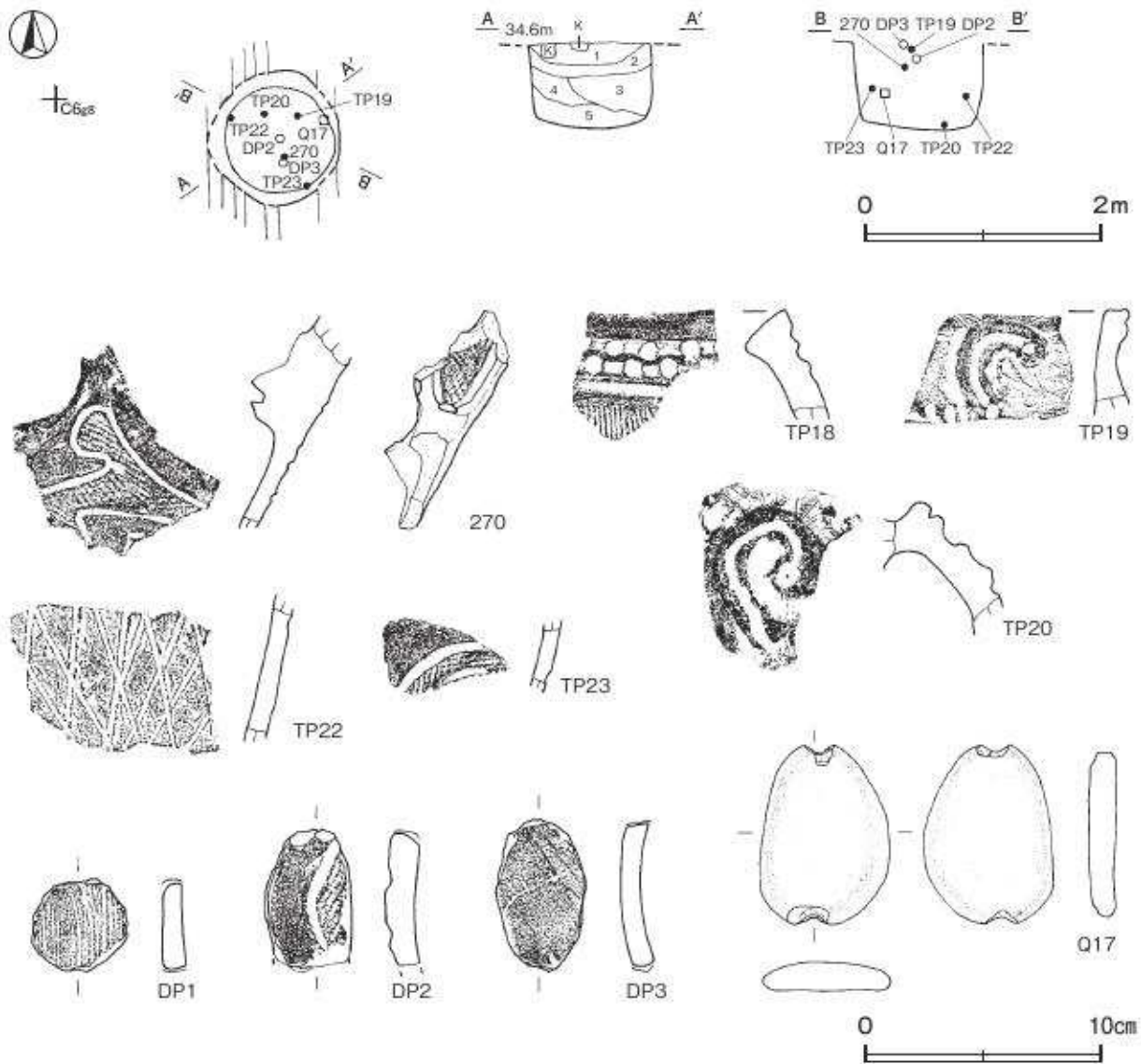
覆土 5層に分層できる。ロームブロックが混じるブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量、鹿沼パミス微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片 280 点（深鉢）、土製品 3 点（土器片錘）、石器 1 点（石錘）剥片 8 点、自然礫 5 点
 が出土している。TP20 は底面、TP22・TP23、Q17 は覆土中層から、270・TP19、DP 2・DP 3 は覆土上層
 からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代後期前葉（堀之内式期）と考えられる。出土土器には後期初頭の土器片
 も含まれており、廃絶時に混入したものと捉えられる。



第 18 図 第 39 号土坑・出土遺物実測図

第 39 号土坑出土遺物観察表（第 18 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
270	縄文土器	深鉢	—	(9.3)	—	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	単節縄文 RL を縄文後、磨消及び沈澱による文様を描出	覆土上層	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	口縁部横位の沈線を施した後、円形の研突文。以下に沈線	覆土中	
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	にぶい黄橙	隆帯によるJ字状のモチーフを描出	覆土上層	
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	隆帯によるJ字状のモチーフを描出	底面	
TP22	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	沈線による斜格子文	覆土中層	
TP23	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	単節縄文RLを施文。磨消及び沈線文。赤彩	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 1	土器片鉢	3.9	4.0	1.0	19.0	長石・石英・黒色粒子	暗灰黄	周辺部研磨。両端にわずかな刻み痕	覆土中	
DP 2	土器片鉢	(6.1)	3.7	1.5	(40.2)	長石・石英	にぶい褐	周辺部研磨。刻み痕1か所残存。下端欠損	覆土上層	PL41
DP 3	土器片鉢	6.5	3.8	1.4	27.9	長石・石英	褐	周辺部研磨。両端にわずかな刻み痕	覆土上層	PL41

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q17	石鉢	7.6	5.6	1.2	84.5	砂岩	長径方向に挟り調整	覆土中層	PL42

第41号土坑 (第19～22図)

位置 調査区北部のC6c9区、標高34mほどの台地平坦部に位置している。

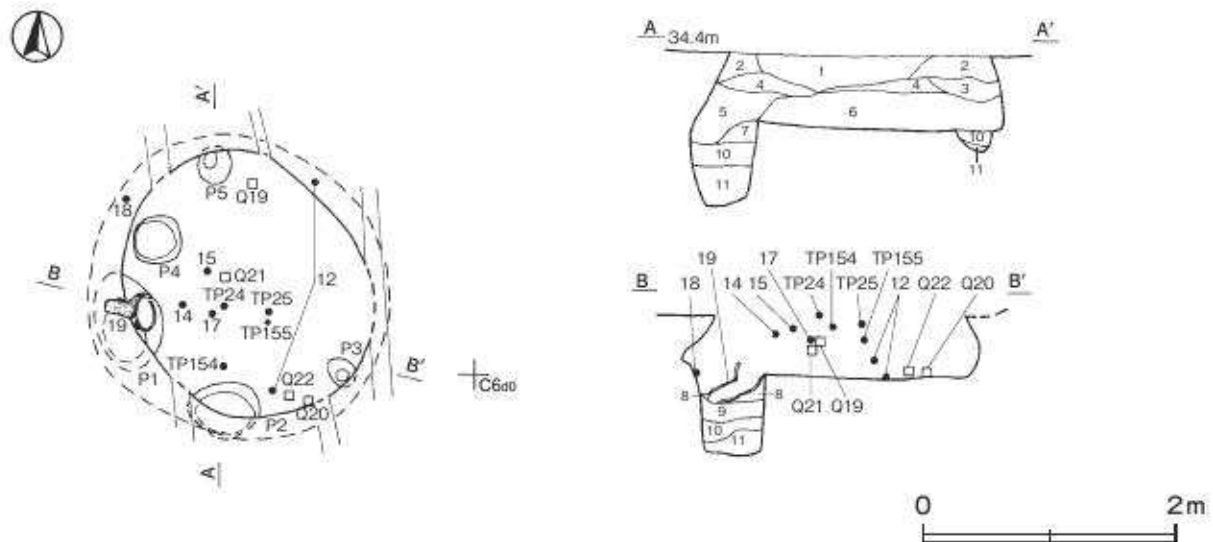
規模と形状 開口部は長径2.14m、短径1.18mの楕円形で、長径方向はN-27°-Wである。深さは56cmである。底面は径2.44mの円形で、平坦である。壁は内傾して立ち上がっている。

ピット 5か所。P1～P5は深さ20～72cmで、北東部を除いた北部から南西部の壁際に位置している。性格は不明である。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックや鹿沼バミスが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。第7～11層はピットの土層である。

土層解説

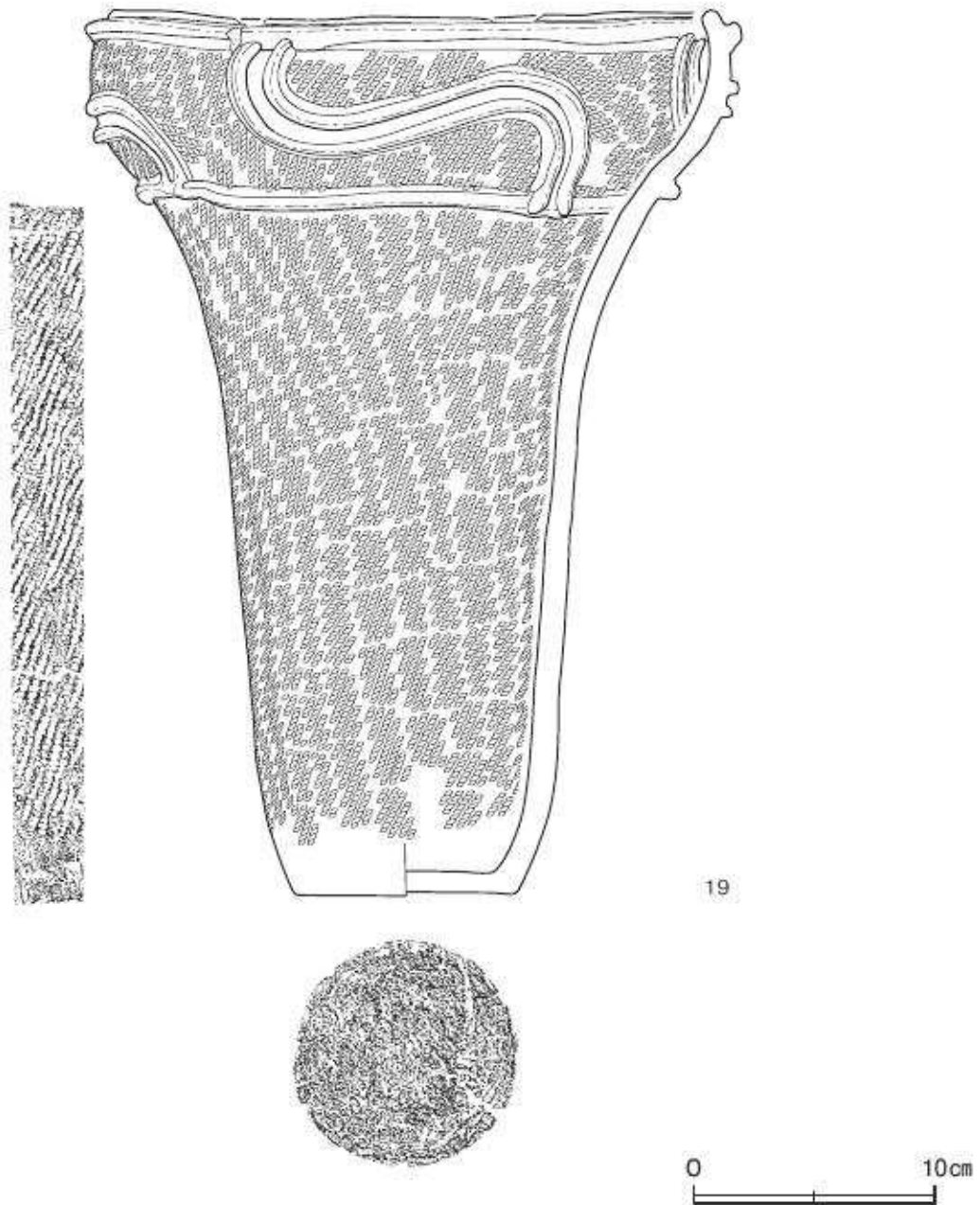
- | | | | |
|--------|---------------------|-------|---------------------|
| 1 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 7 褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼バミス粒子少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量 | 9 褐色 | ロームブロック中量、鹿沼バミス粒子微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック中量、鹿沼バミス粒子微量 | 10 褐色 | ローム粒子多量、鹿沼バミスブロック微量 |
| 5 暗褐色 | 炭化粒子中量、ロームブロック少量 | 11 褐色 | ローム粒子多量、鹿沼バミス粒子微量 |
| 6 褐色 | ロームブロック多量、鹿沼バミス粒子微量 | | |



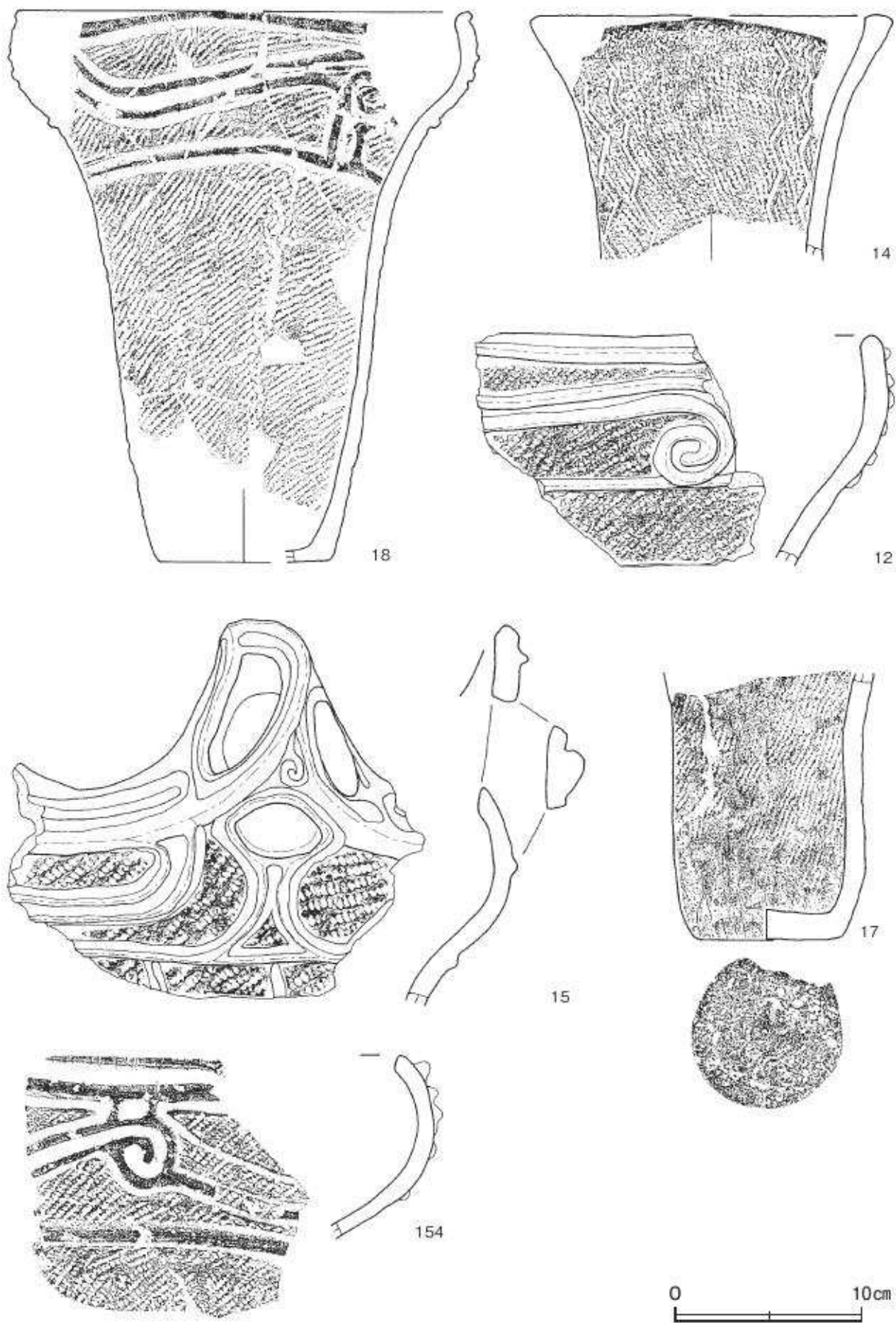
第19図 第41号土坑実測図

遺物出土状況 縄文土器片 168 点 (深鉢), 石器 4 点 (鼓石 3, 石錘 1), 剥片 39 点, 破断面のある碟 19 点, 自然碟 35 点が出土している。19 はほぼ完形で, P 1 の覆土上層から斜位で出土している。18 は北西部の覆土下層から出土している。12 は南部の底面と北東部の覆土下層から, 14・15・17, TP154・TP155 は中央部の覆土上層から中層にかけて出土している。

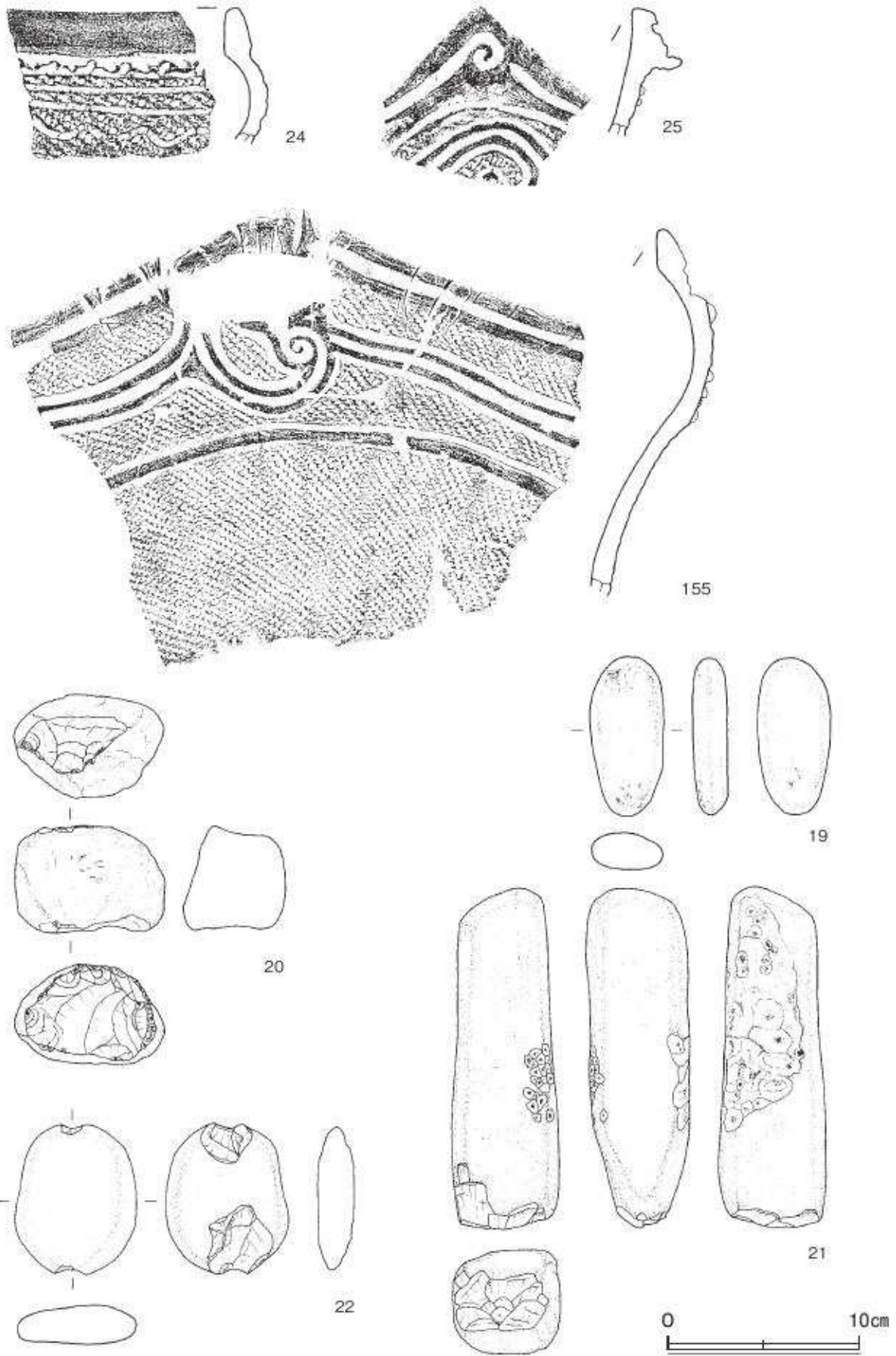
所見 形状から, 袋状土坑の下位部分と推定できる。時期は, 出土土器から縄文時代中期後葉 (加曾利 E 1 式期) と考えられる。19 は P 1 の埋め戻し後のくぼみに遺棄されたと考えられるが, P 1 の埋め戻しと 19 の遺棄との時期差については不明である。



第 20 図 第 41 号土坑出土遺物実測図 (1)



第 21 图 第 41 号土坑出土遗物实测图 (2)



第22图 第41号土坑出土遗物实测图(3)

第 41 号土坑出土遺物観察表 (第 20 ~ 22 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
12	縄文土器	深鉢	-	(12.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	単節縄文 LR 施文。隆帯と隆帯に沿う沈線による筒巻状の文様を描出	覆土下層・底面	10%
14	縄文土器	深鉢	[18.4]	(13.2)	-	長石・石英・雲母	黒褐	普通	単節縄文 LR を縦位回転で施文。平行する 2 条の波状懸垂文	覆土上層	20%
15	縄文土器	深鉢	-	(20.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	単節縄文 RL を縦位回転で施文。隆帯貼付後沈線。把手は 4 方向へ開口	覆土上層	10%
17	縄文土器	深鉢	-	(14.4)	7.8	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	単節縄文 RL を縦位回転で施文	覆土中層	20%
18	縄文土器	深鉢	[24.3]	29.8	[9.0]	長石・石英	にぶい赤褐	普通	単節縄文 RL を縦位回転で施文後、隆帯と隆帯に沿う沈線による文様を描出	覆土下層	60%
19	縄文土器	深鉢	25.2	37.0	9.3	長石・石英	にぶい褐	普通	単節縄文 RL を縦位回転で施文。隆帯と隆帯に沿う沈線によるクラック文を描出	P 1 覆土上層	100% PL23

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP24	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	口縁部無文帯直下に交互刺突文。単節縄文 RL を施文後、沈線文	覆土上層	
TP25	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	単節縄文 LR を縦位回転で施文後、隆帯貼付後隆帯に沿う沈線	覆土上層	
TP154	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	単節縄文 RL を縦位回転で施文。隆帯貼付後隆帯に沿う沈線	覆土上層	
TP155	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	単節縄文 LR を縦位回転で施文。隆帯貼付後隆帯に沿う沈線	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q19	敲石	8.3	3.9	1.9	99.0	ホルンフェルス	片面の両端部に微細な敲打痕	覆土中層	
Q20	敲石	5.7	7.9	5.4	326.6	石英	端部の縁辺に痘痕状の敲打痕	底面	
Q21	敲石	17.9	5.4	5.5	898.3	砂岩	端部に敲打による打欠痕。縁部部に痘痕状の敲打痕	覆土中層	PL38
Q22	石錘	8.0	6.5	2.0	160.4	安山岩	長径方向に挟り調整	覆土下層	PL42

第 43 号土坑 (第 23・24 図)

位置 調査区北部の C 6h9 区、標高 34 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は径 1.34m ほどの円形で、深さは 66cm である。底面は径 1.51m の円形で、平坦である。壁は内傾して立ち上がっている。

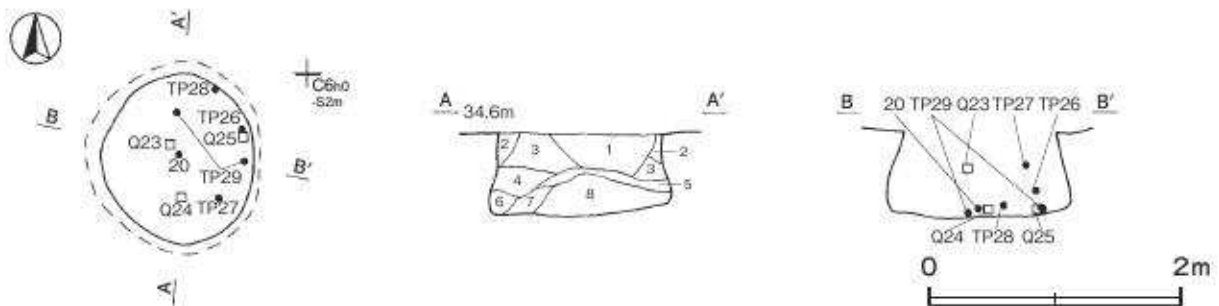
覆土 8 層に分層できる。ブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

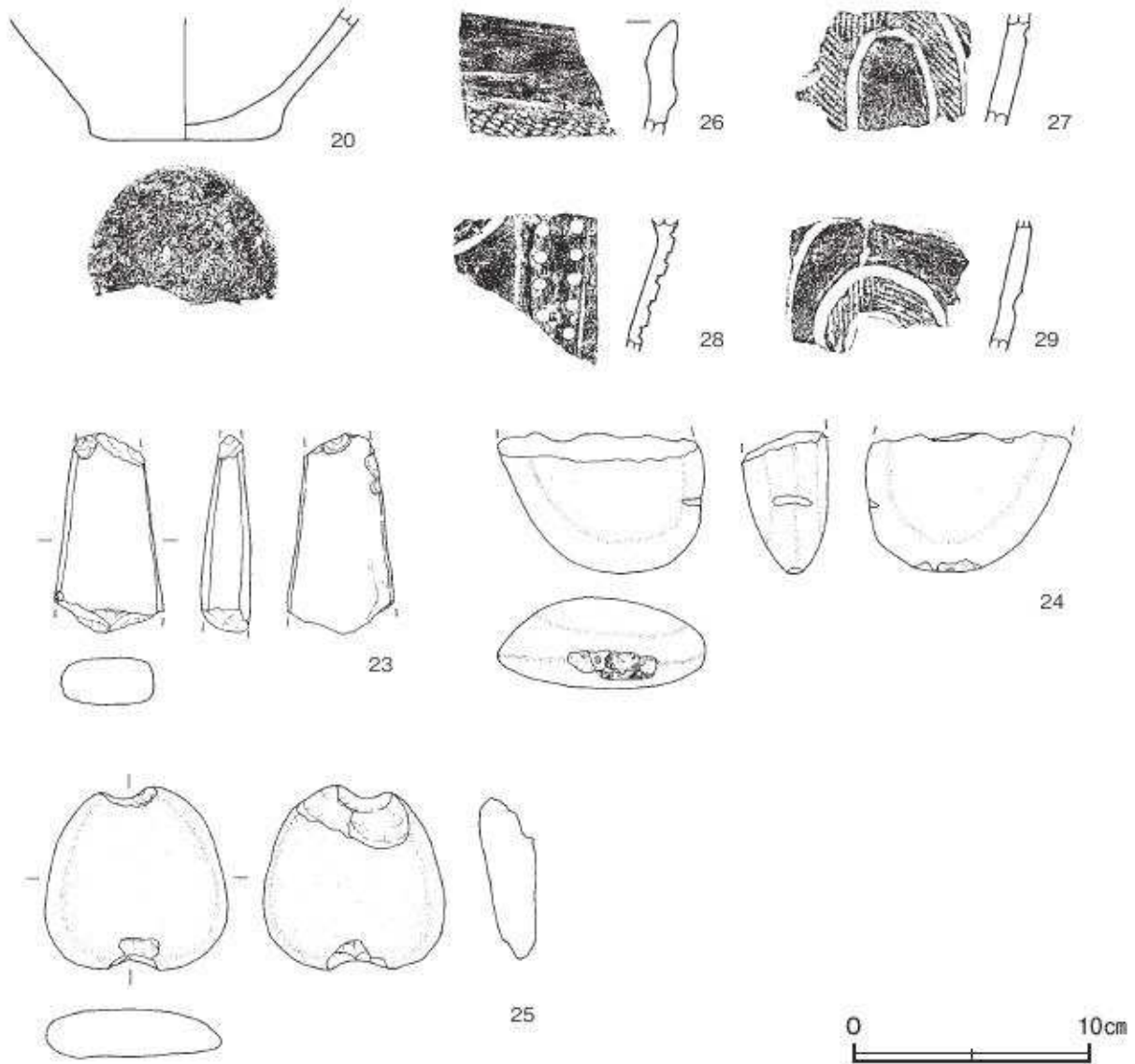
- | | |
|-----------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量 | 5 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 2 褐色 ロームブロック中量 | 6 暗褐色 ロームブロック少量、鹿沼パミス粒子微量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック微量 | 7 褐色 ローム粒子多量、鹿沼パミス粒子少量 |
| 4 黒褐色 ローム粒子少量 | 8 褐色 ロームブロック多量、鹿沼パミス粒子少量 |

遺物出土状況 縄文土器片 151 点 (深鉢 150、浅鉢 1)、石器 3 点 (磨製石斧、敲石、石錘)、剥片 1 点、自然礫 4 点が出土している。20 は中央部の覆土下層、TP26 は北東部の覆土中層、TP28・TP29 は北東部の覆土下層からそれぞれ出土している。Q 24・Q 25 は覆土下層から出土している。

所見 形状から、袋状土坑の下位部分と推定できる。時期は、出土土器から縄文時代中期後葉 (加曾利 E Ⅲ 式期) と考えられる。



第 23 図 第 43 号土坑実測図



第24図 第43号土坑出土遺物実測図

第43号土坑出土遺物観察表 (第24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文種の特徴ほか	出土位置	備考
20	縄文土器	浅鉢	—	(5.1)	6.5	長石・石英・針状鉱物	にぶい橙	普通	外面磨き	覆土下層	20%
TP26	縄文土器	深鉢				長石・石英	暗褐		口縁部磨き 単節縄文RLを縦位回転で施文	覆土中層	
TP27	縄文土器	深鉢				長石・石英	にぶい褐		単節縄文LRを縦位回転で施文後、磨消と沈線文	覆土中層	
TP28	縄文土器	深鉢				長石・石英	暗赤褐		隆帯貼付後、2列の円形刺突文	覆土下層	
TP29	縄文土器	深鉢				長石・石英	にぶい褐		単節縄文RLを施文後、磨消と沈線文	覆土下層	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q23	磨製石斧	(8.6)	4.6	2.1	(128.8)	チャーク	4面研磨 刃部・基部欠損		覆土中層		
Q24	燧石	(6.0)	8.9	3.8	(231.7)	安山岩	端部に稜状の敲打痕		覆土下層		
Q25	石鎌	7.8	7.8	2.2	190.4	安山岩	長径方向に狭り調整		覆土下層	PL42	

第44号土坑（第25～32図）

位置 調査区北部のC6c8区、標高34mほどの台地平坦部に位置している。

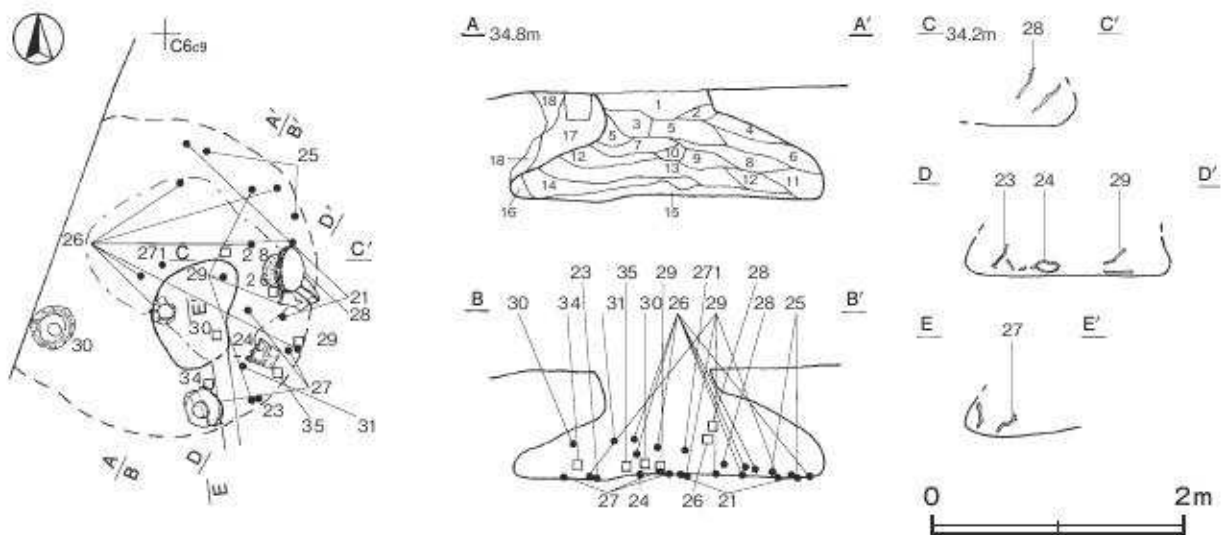
規模と形状 開口部は長径0.90m、短径0.68mの不整楕円形で、長径方向はN-24°-Eである。底面は平坦で、中央部に硬化した面が確認できた。北西部が調査区域外へ延びているため、底面の規模は短径2.51m、長径は2.18mしか確認できなかったが、底面は円形または楕円形と推定できる。深さは82cmで、壁は底面から内彎し、くびれ部からはほぼ直立している。底面からくびれ部までの高さは64cmである。

覆土 16層に分層できる。ロームブロックや焼土、鹿沼パミスが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。17層は地山部分が崩落した層で、18層は崩落時のクラックに流入したローム土である。

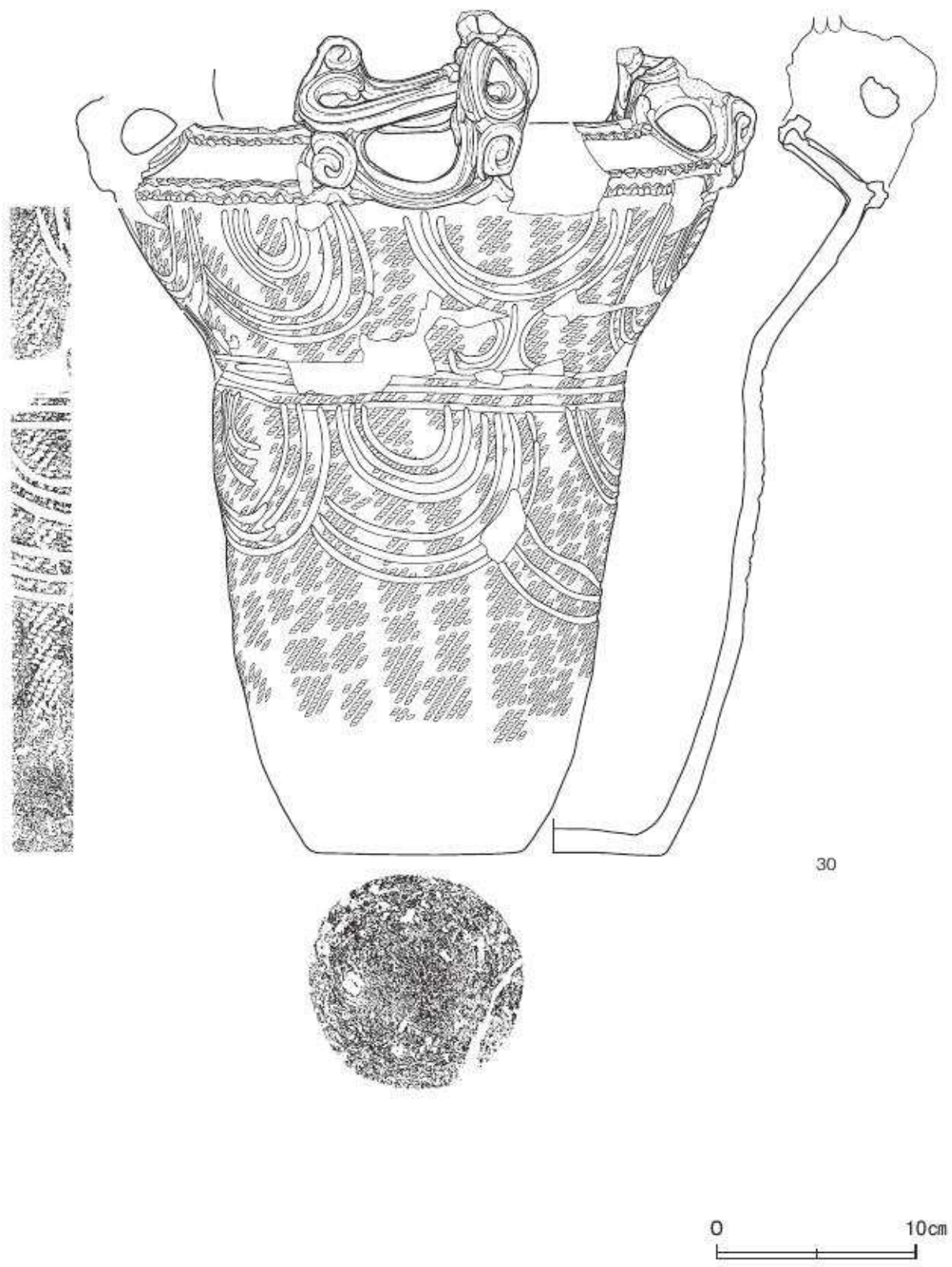
土層解説

1 黒褐色	ロームブロック微量	10 灰黄色	骨粉多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック少量	11 黒褐色	炭化粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック中量	12 暗赤褐色	焼土粒子多量、炭化粒子少量、ローム粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子中量	13 暗赤褐色	焼土粒子多量、炭化粒子少量
5 極暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	14 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
6 暗褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量	15 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
7 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	16 暗褐色	ロームブロック少量
8 極暗褐色	焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量	17 褐色	ロームブロック多量（締まり強い）
9 極暗褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量	18 褐色	ロームブロック多量

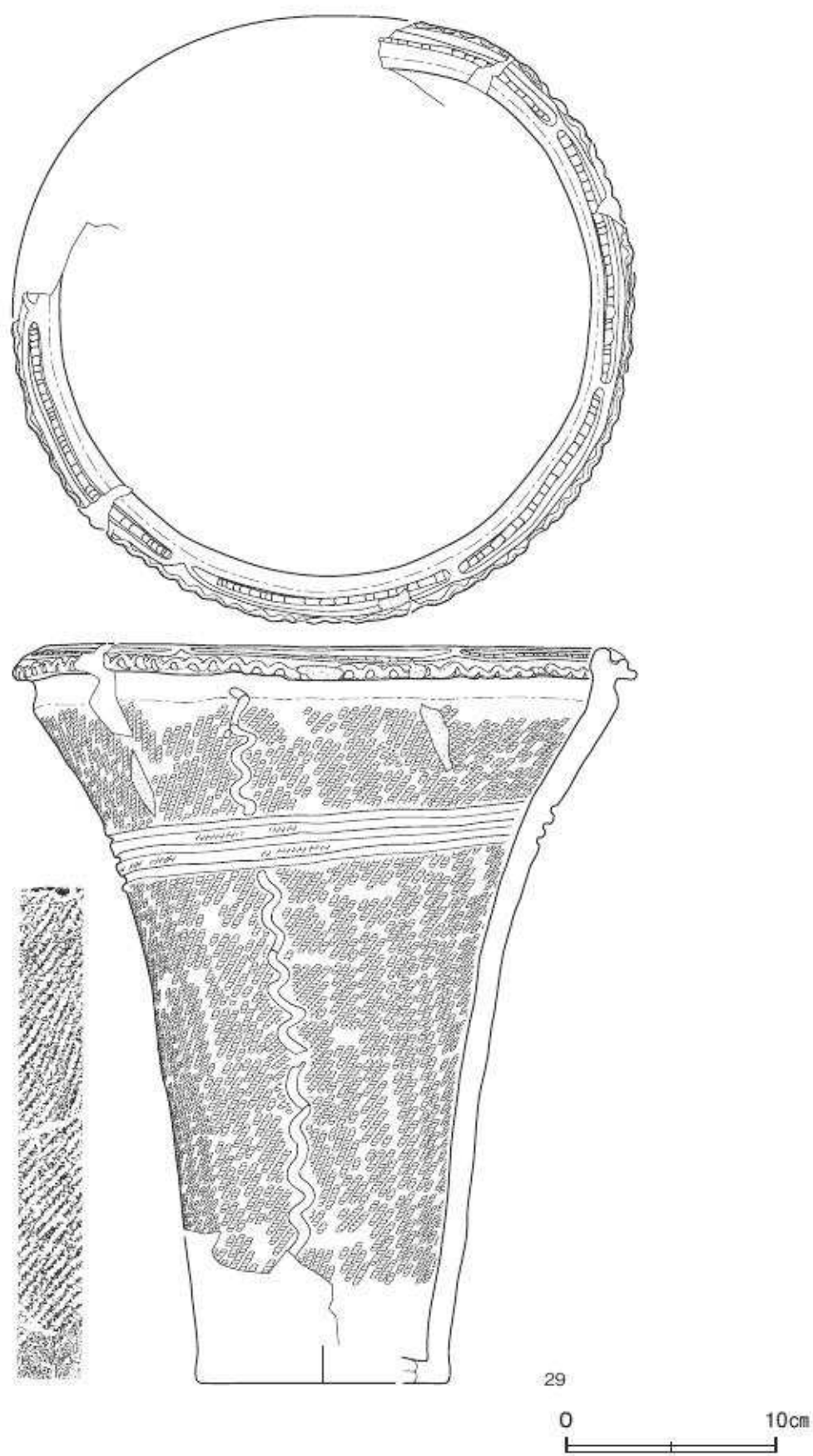
遺物出土状況 縄文土器片367点（深鉢）、石器10点（磨石1、敲石1、石錘6、凹石2）、剥片6点、自然礫29点が、中央部から東部の覆土中層から底面にかけて出土している。24は南東部の底面から口縁部が西方向の横位で出土している。27は南東部の底面から口縁部がやや北方向の斜位で出土し、東部から出土した破片と接合している。28は東部の覆土下層から口縁部が東方向の斜位で出土している。29は口縁部が北東方向の斜位で出土し、東部の底面から出土した破片と接合している。30は、南西部の覆土中層から逆位で出土している。底面から出土したほぼ完形の土器は、土圧で潰れた状態であることから、土器を遺棄したまま埋め戻されたと考えられる。覆土第10層に含まれた骨粉は5mm以下の微細なもので、種別等の判別は出来なかった。
所見 形状から、袋状土坑である。時期は、出土土器から縄文時代中期後葉（加曾利E I式期）と考えられる。



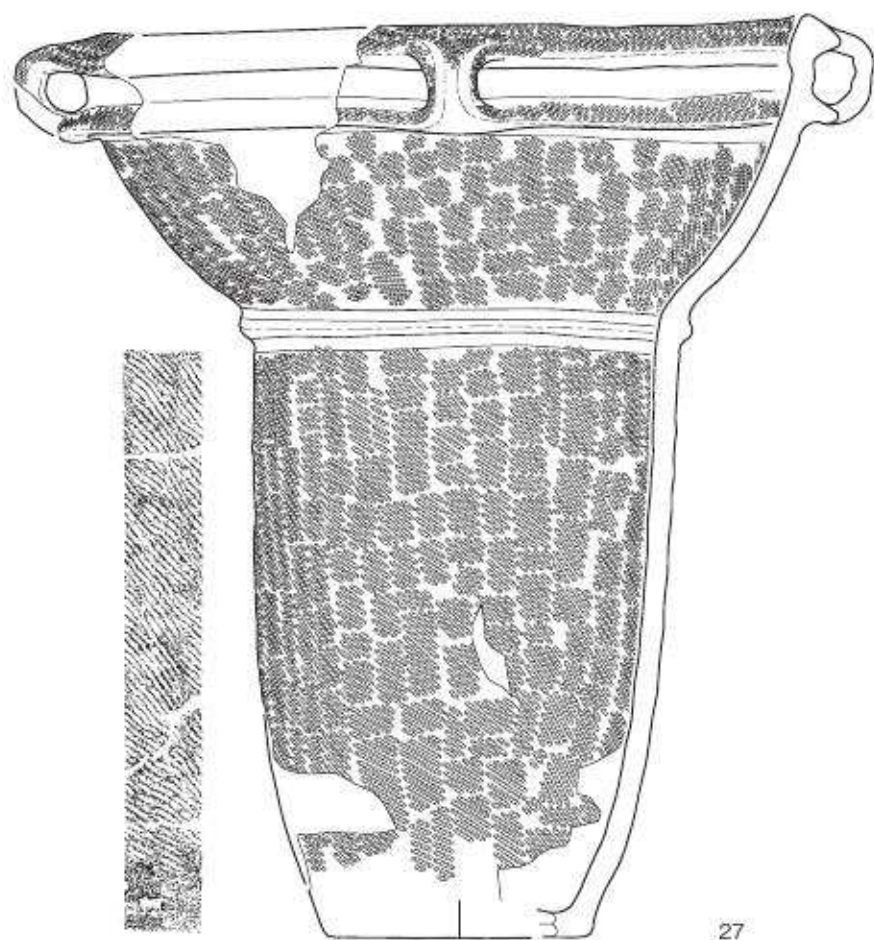
第25図 第44号土坑実測図



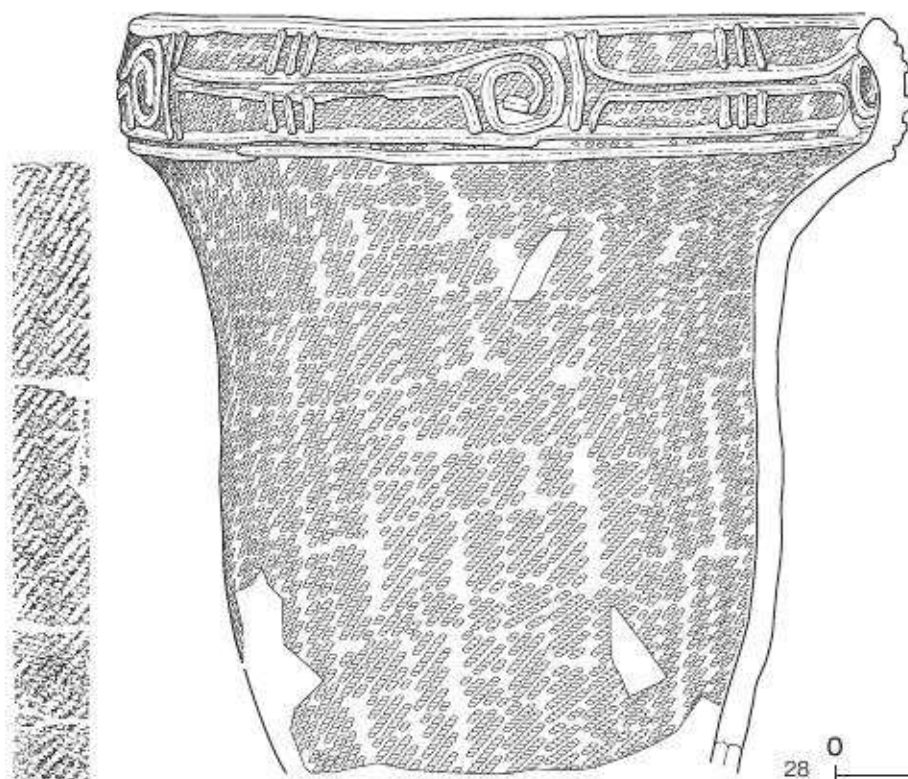
第 26 图 第 44 号土坑出土遗物实测图 (1)



第 27 图 第 44 号土坑出土遗物实测图 (2)

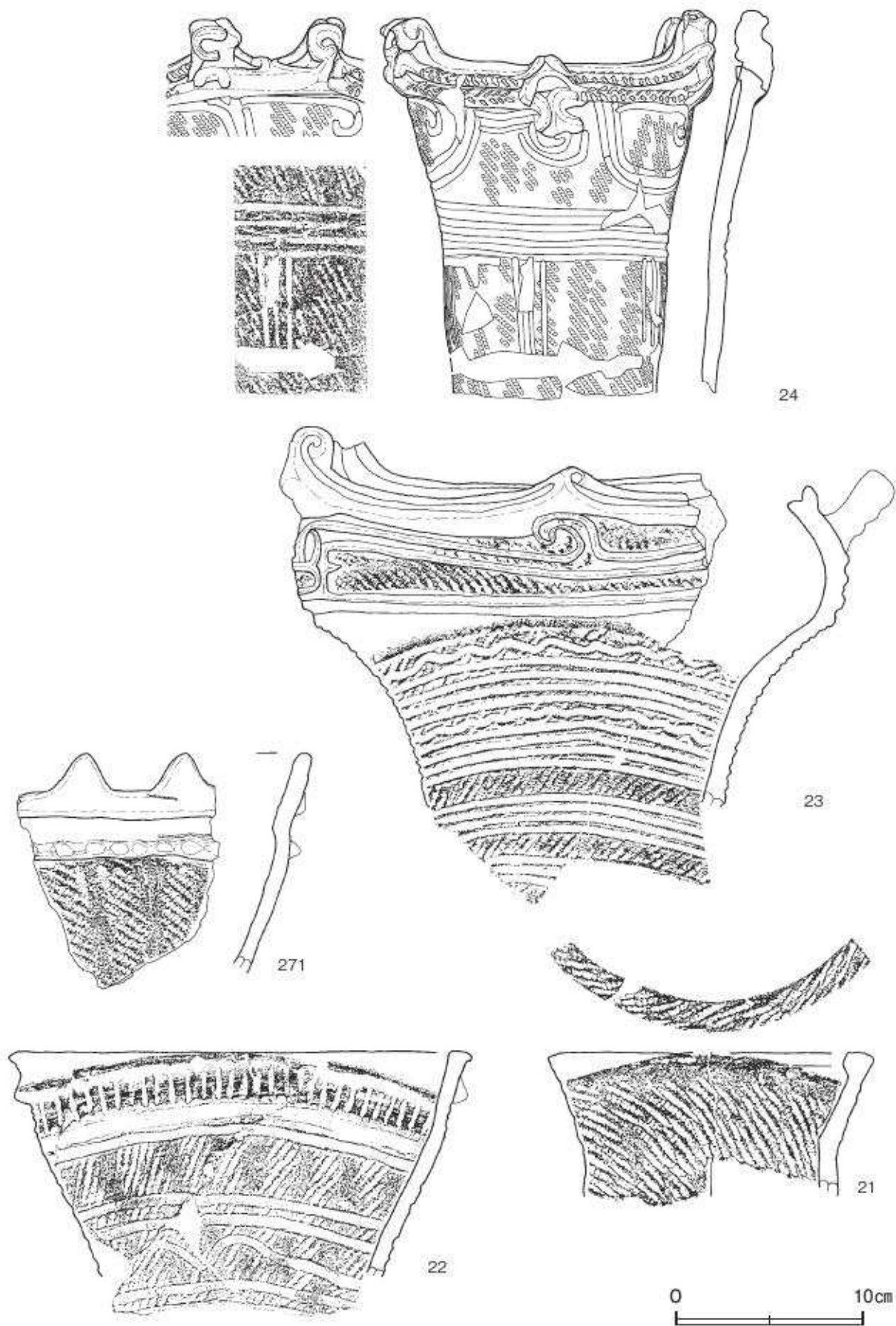


27



28 0 10cm

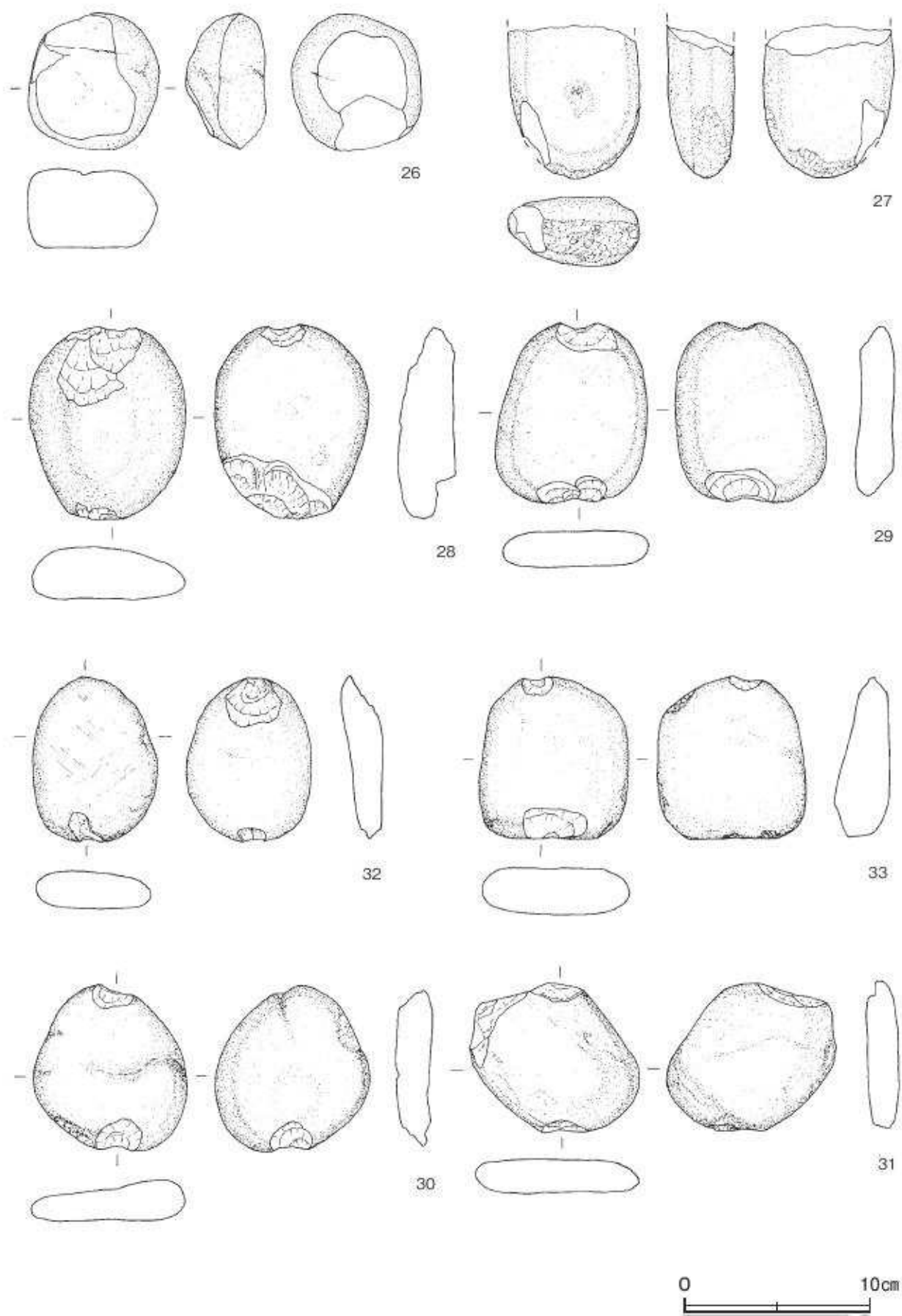
第 28 图 第 44 号土坑出土遗物实测图 (3)



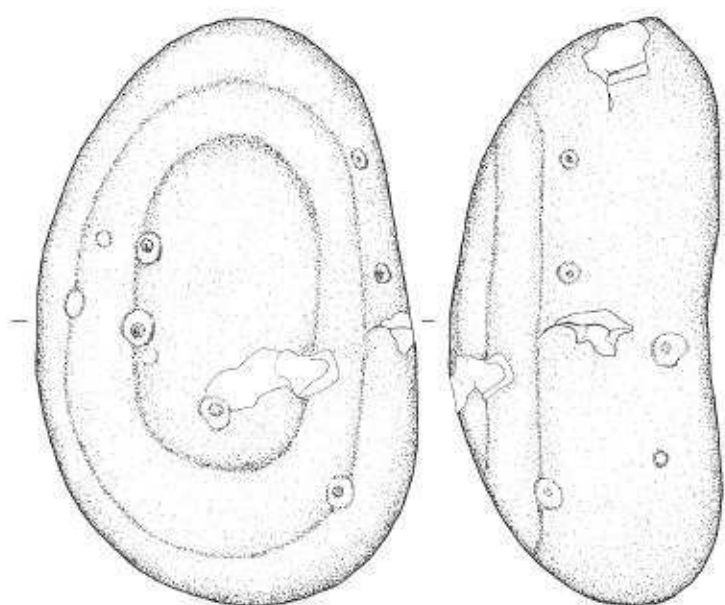
第 29 图 第 44 号土坑出土遗物实测图 (4)



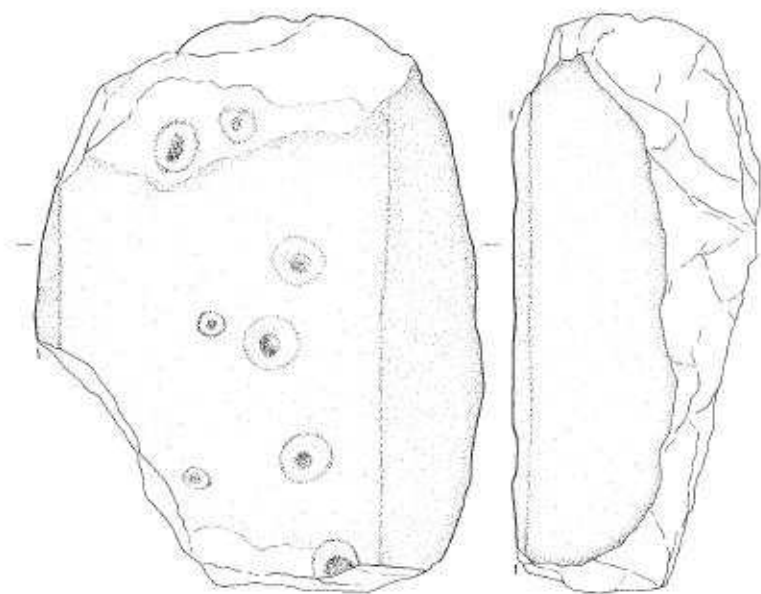
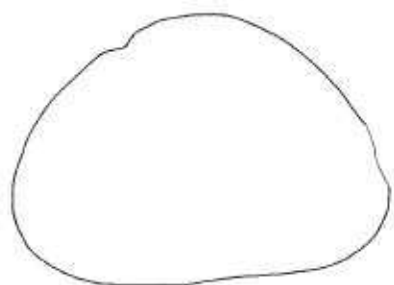
第30图 第44号土坑出土遗物实测图(5)



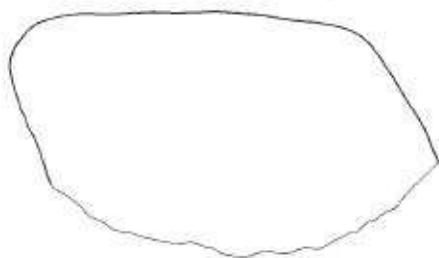
第31图 第44号土坑出土遗物实测图(6)



34



35



第 32 图 第 44 号土坑出土遺物実測図 (7)

第 44 号土坑出土遺物観察表 (第 26 ~ 32 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
21	縄文土器	深鉢	[15.6]	(7.7)	-	長石・石英	灰黄褐色	普通	単節縄文 RL を口唇部・胴部に施文	底面	20%
22	縄文土器	深鉢	24.0	(12.0)	-	長石・石英	褐色	普通	口縁部に短沈線を垂下。単節縄文 RL を縦位回転で施文後、沈線文	覆土中	40%
23	縄文土器	深鉢	[25.2]	(20.4)	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	口唇部渦巻状の沈線。単節縄文 RL を施文後、隆帯貼付及び沈線	底面	30%
24	縄文土器	深鉢	14.0	(20.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部交互刺突文。把手に渦巻状の隆帯貼付。単節縄文 LR を縦位回転で施文後、沈線	底面	70% PL24
25	縄文土器	深鉢	-	(23.5)	10.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	単節縄文 RL 施文	覆土下層	40%
26	縄文土器	深鉢	-	(41.8)	14.3	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい褐色	普通	単節縄文 RL を縦位回転で施文。底部新代瓦	覆土中層 - 底面	70% PL23
27	縄文土器	深鉢	28.2	36.7	[10.4]	長石・石英	暗赤褐色	普通	口縁部の把手4か所と隆帯に単節縄文 RL 施文。胴部単節縄文 RL 施文後、隆帯貼付と沈線	底面	70% PL24
28	縄文土器	深鉢	29.2	(30.2)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部細隆帯貼付による長方形の区画と渦巻文。単節縄文 RL を縦位回転で施文	覆土下層	70% PL24
29	縄文土器	深鉢	26.8	(35.3)	[12.0]	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部に波状の隆帯と有節沈線。単節縄文 RL 縦位回転で施文後、横位の沈線と波状沈線	底面	70% PL24
30	縄文土器	深鉢	[22.4]	(42.5)	10.6	長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁部に中空状把手を作出。縦節縄文 LR を施文後、3条1組の沈線で渦巻文や曲線を描出	覆土中層	90% PL24
271	縄文土器	深鉢	-	(12.6)	-	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	縄文 LR を縦位回転で施文後、隆帯貼付。隆帯上に棒状工具による押圧	覆土中層	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP31	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐色	単節縄文 RL を縦位回転で施文後、沈線による幾何学文	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q26	磨石	7.4	7.1	4.4	316.7	石英	両面研磨痕	覆土中層	
Q27	敲石	(8.3)	7.1	3.7	(299.5)	砂岩	端部に短痕状の敲打痕	覆土中	
Q28	石鏝	10.5	8.4	2.9	383.1	安山岩	長径方向に挟り調整	覆土中層	
Q29	石鏝	9.8	8.3	2.2	284.6	ホルンフェルス	長径方向に挟り調整	覆土下層	
Q30	石鏝	9.1	8.3	2.3	207.3	安山岩	長径方向に挟り調整	覆土下層	PL42
Q31	石鏝	8.1	9.2	1.8	199.2	頁岩	長径方向に挟り調整	覆土中	
Q32	石鏝	8.9	6.8	2.1	175.3	閃緑岩	長径方向に挟り調整	覆土中	
Q33	石鏝	8.8	8.0	3.1	322.2	安山岩	長径方向に挟り調整	覆土中	
Q34	凹石	31.1	20.3	14.5	1190.0	砂岩	断面V字状の凹み4か所。一方の面に磨痕	覆土下層	
Q35	凹石	(30.7)	(21.4)	(13.1)	(1145.0)	花崗岩	断面V字状の凹み8か所残存。2面を残し欠損	覆土下層	

第 45 号土坑 (第 33 図)

位置 調査区北部の C 68 区、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は径 1.93m ほどの円形で、深さは 33cm である。底面は径 1.72m の円形で、東部に向かって傾斜している。壁はほぼ直立している。

ピット 2か所。P1・P2 は深さ 60cm・30cm で、それぞれ東西の壁際に位置している。性格は不明である。

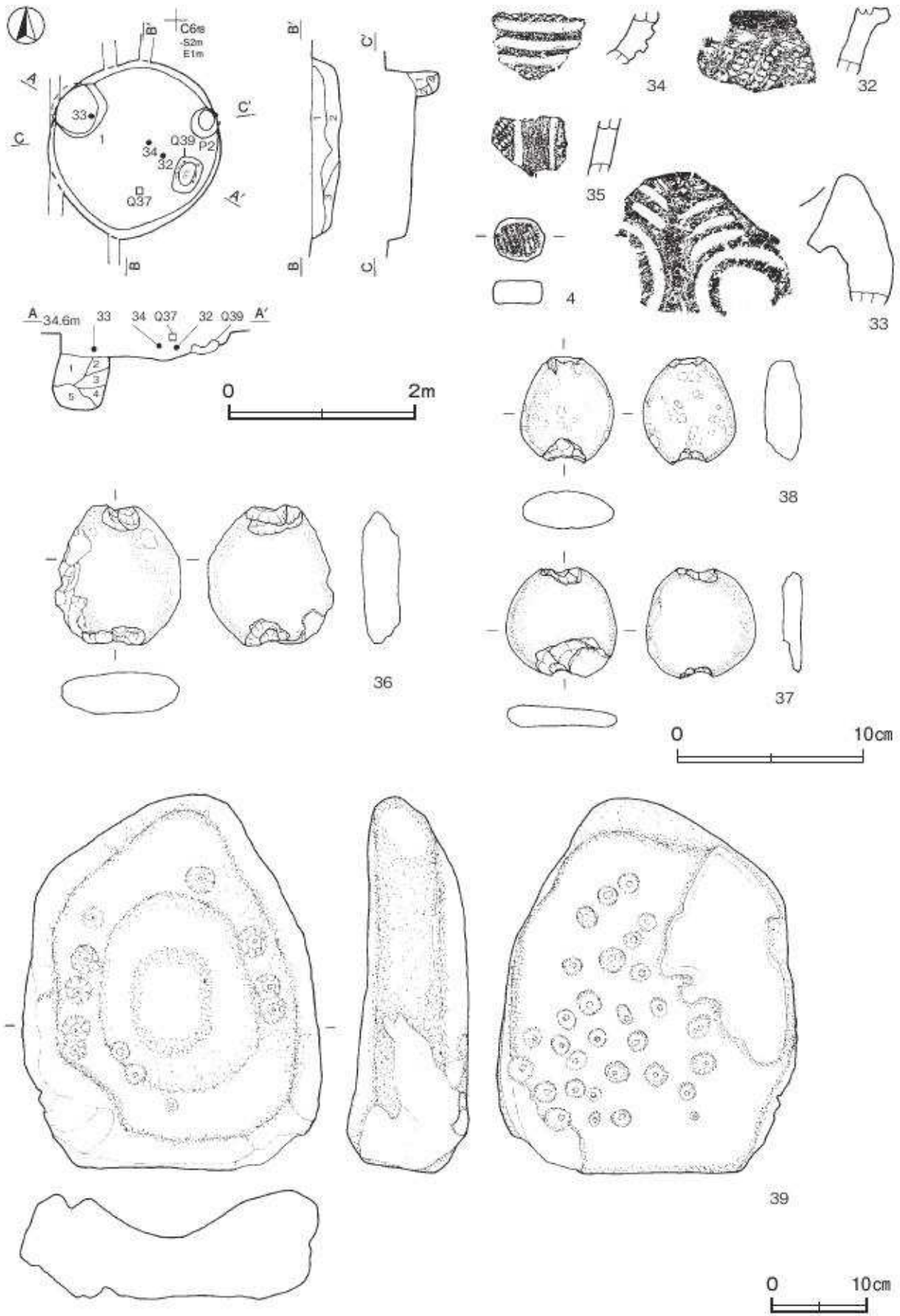
ピット土層解説 (各ピット共通)

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック微量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量 | 5 暗褐色 ローム粒子多量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量 | |

覆土 3層に分層できる。ロームブロックや焼土が不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|----------------------|----------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 3 褐色 ロームブロック多量 |
| 2 褐色 ロームブロック中量 | |



第33图 第45号土坑·出土遗物实测图

遺物出土状況 縄文土器片 43 点（深鉢）、土製品 1 点（土器片円盤）、石器 4 点（石錘 3、石皿 1）、破断面のある礫 9 点、自然礫 1 点が出土している。TP32～TP34 は中央部の覆土中層から出土している。Q 39 は南東部の底面から皿面を上にした状態で出土している。

所見 底面で小ピットが確認でき、類似した形状の土坑が周辺に存在することから、袋状土坑の下位部分と推定できる。時期は、出土土器から縄文時代中期後葉（加曾利 E I 式期）と考えられる。

第 45 号土坑出土遺物観察表（第 33 図）

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴はか	出土位置	備考
TP32	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	極暗赤褐	隆帯貼付後、単節縄文 RL 縦位回転で施文	覆土中層	
TP33	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	沈線による楕円状の文様を描出	覆土中層	
TP34	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	単節縄文 LR を施文後、隆帯と沈線	覆土中層	
TP35	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	単節縄文 LR を施文後、磨消及び沈線	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 4	土器円盤	2.3	2.7	1.3	9.7	長石・石英	にぶい橙	周辺部研磨	覆土中	PL41

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q36	石錘	7.6	6.8	2.2	146.4	ホルンフェルス	長径方向に挟り調整	覆土中	
Q37	石錘	5.9	5.9	1.2	53.9	砂岩	一方向に挟り調整	覆土上層	
Q38	石錘	5.8	5.1	2.0	81.8	安山岩	長径方向に挟り調整	覆土中	
Q39	石皿	40.5	32.3	13.2	2060.0	砂岩	皿面に 12 か所、裏面に 29 か所の断面 V 字状の凹みを有する	底面	PL39

第 47 号土坑（第 34 図）

位置 調査区北部の C 6 d0 区、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は長径 2.64m、短径 1.93m の楕円形で、長径方向は N-30°-E である。深さは 24cm である。底面は長径 2.46m、短径 1.79m の楕円形で、平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

ピット 4 か所。P 1～P 4 は深さ 35～59cm で、中央部と西壁際に位置している。P 1 は、底面に深さ 18cm の小ピットを有している。いずれのピットも性格は不明である。

ピット土層解説（各ピット共通）

- | | |
|------------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量 |

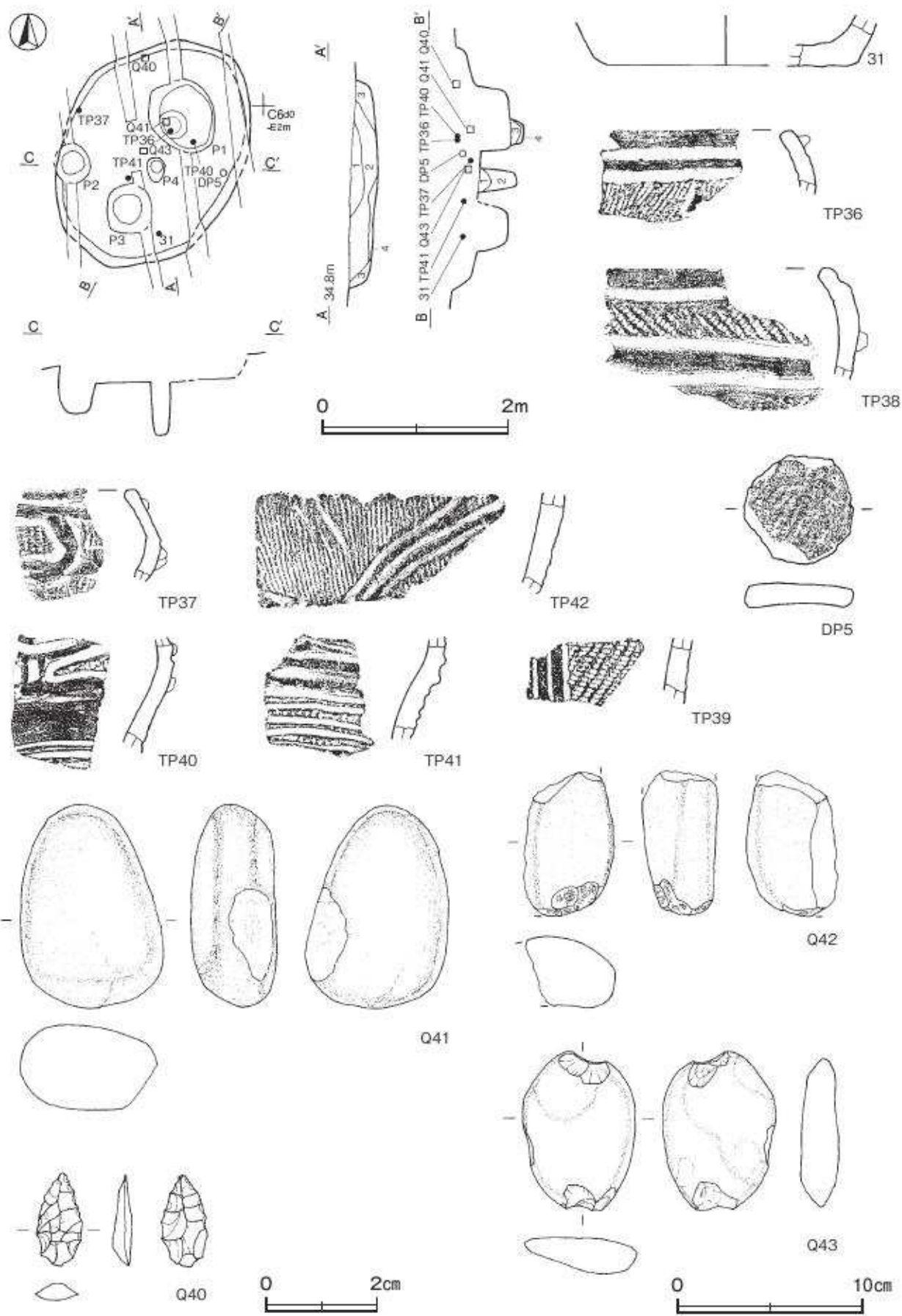
覆土 4 層に分層できる。ロームブロックや焼土、炭化粒子が不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片 94 点（深鉢）、土製品 1 点（土器片円盤）、石器 4 点（石鏃、磨石、敲石、石錘）、破断面のある礫 5 点、自然礫 11 点が出土している。31 は南部の覆土中層から出土している。TP36・TP40・TP41 は中央部の覆土上層から中層にかけて、Q 41・Q 43 は中央部の覆土中層から下層にかけて出土している。

所見 底面で小ピットが確認でき、類似した形状の土坑が周辺に存在することから、袋状土坑の下位部分と推定できる。時期は、出土土器から縄文時代中期後葉（加曾利 E I 式期）と考えられる。



第34图 第47号土坑·出土遗物实测图

第 47 号土坑出土遺物観察表 (第 34 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
31	縄文土器	深鉢	-	(25)	[13.0]	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい赤褐色	普通	胴部下端磨き	覆土中層	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP36	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	無節縄文LRを施文後、隆帯貼付	覆土上層	
TP37	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	単節縄文RLを縦位回転で施文後、隆帯貼付と隆帯に沿う沈線	覆土下層	
TP38	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	単節縄文RLを施文後、隆帯貼付と隆帯に沿う沈線	覆土中	
TP39	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	単節縄文RLを縦位回転で施文後、磨消と沈線を垂下	覆土中	
TP40	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰黄褐色	単節縄文を施文後、隆帯と沈線による区画	覆土上層	
TP41	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐色	連続した沈線を垂下後、横位の沈線	覆土中層	
TP42	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐色	捩糸文を施文後、沈線文	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 5	土師器	5.9	5.9	1.3	48.7	長石・石英・雲母	にぶい橙	周辺部一部研磨	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q40	石鏃	1.6	0.8	0.3	0.37	チャート	両面押圧割離 凸基	覆土上層	
Q41	磨石	11.0	7.8	4.7	586.1	石英燧岩	全面研磨痕	覆土下層	
Q42	敲石	(7.8)	5.0	4.0	(177.6)	砂岩	端部に短環状の敲打痕	覆土中	
Q43	石鏃	8.6	6.1	2.0	135.5	泥岩	長径方向に抉り調整	覆土中層	

第 48 号土坑 (第 35・36 図)

位置 調査区北部の C 6 i7 区、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は径 1.86m ほどの円形で、深さは 25cm である。底面は径 1.60m の円形で、平坦である。壁は直立している。

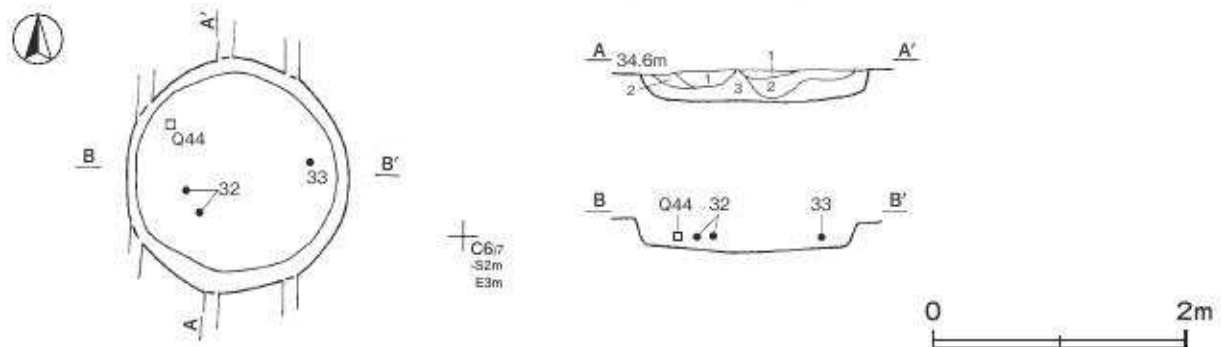
覆土 3層に分層できる。ロームブロックが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

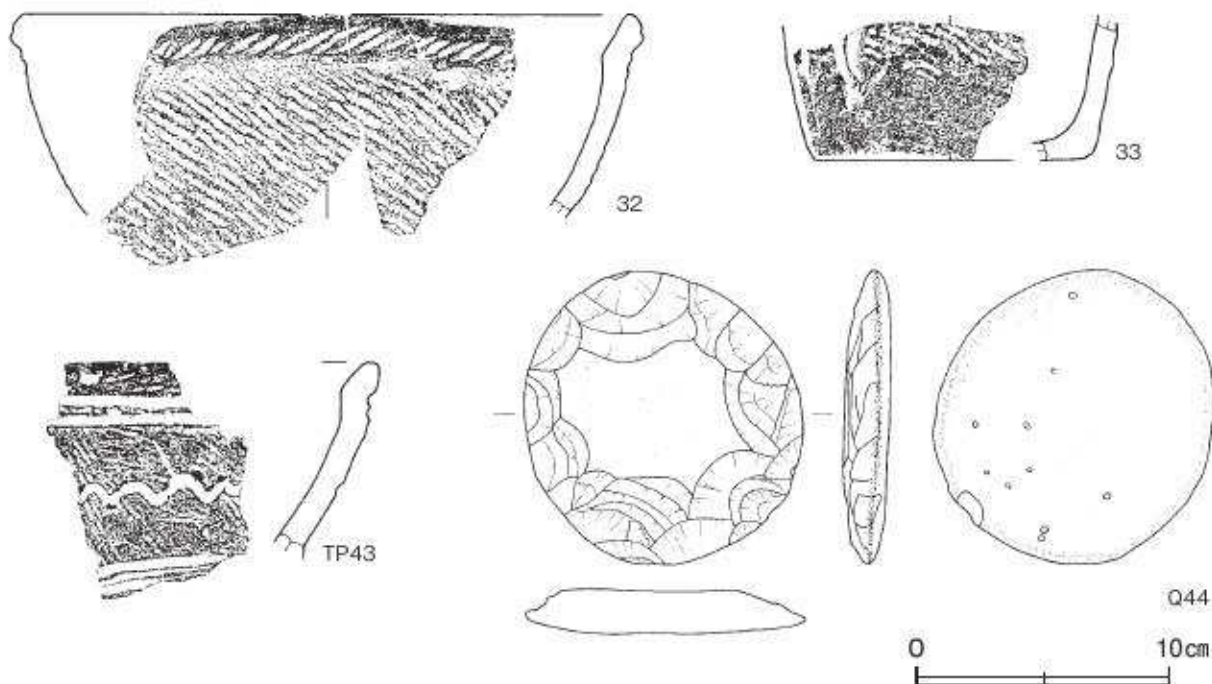
- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 縄文土器片 25 点 (深鉢)、石器 1 点 (環状石斧)、自然礫 5 点が出土している。32 は南西部、33 は北東部の覆土中層からそれぞれ出土している。Q44 は北西部の覆土中層から出土している。

所見 第 45 号土坑に隣接し、規模や形状が類似していることや遺物の出土状況から、袋状土坑の下位部分と推定できる。時期は、出土土器から縄文時代中期後葉 (加曾利 E I 式期) と考えられる。



第 35 図 第 48 号土坑実測図



第36図 第48号土坑出土遺物実測図

第48号土坑出土遺物観察表（第36図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
32	縄文土器	深鉢	[24.1]	(8.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部単節縄文LRを筋文、胴部単節縄文RLを筋文	覆土中層	10%
33	縄文土器	深鉢	-	(5.7)	[10.8]	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	単節縄文LR筋文、陸帯貼付後、沈線	覆土中層	10%
番号	種別	器種	胎土		色調	文様の特徴ほか			出土位置	備考	
TP43	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母		黒褐色	単節縄文RLを筋文後、沈線による山形文や横位の直線文			覆土中		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q44	環状石斧	116	11.2	1.9	318.4	砂岩	片面の全周に挟り調整 未製品。		覆土中層	PL42	

第49号土坑（第37～43図）

位置 調査区北部のC6b0区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第64号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は長径2.37m、短径2.04mの楕円形で、長径方向はN-34°-Eである。深さは92cmである。底面は径2.89mの円形で、平坦である。壁は内傾して立ち上がり、中位で直立している。

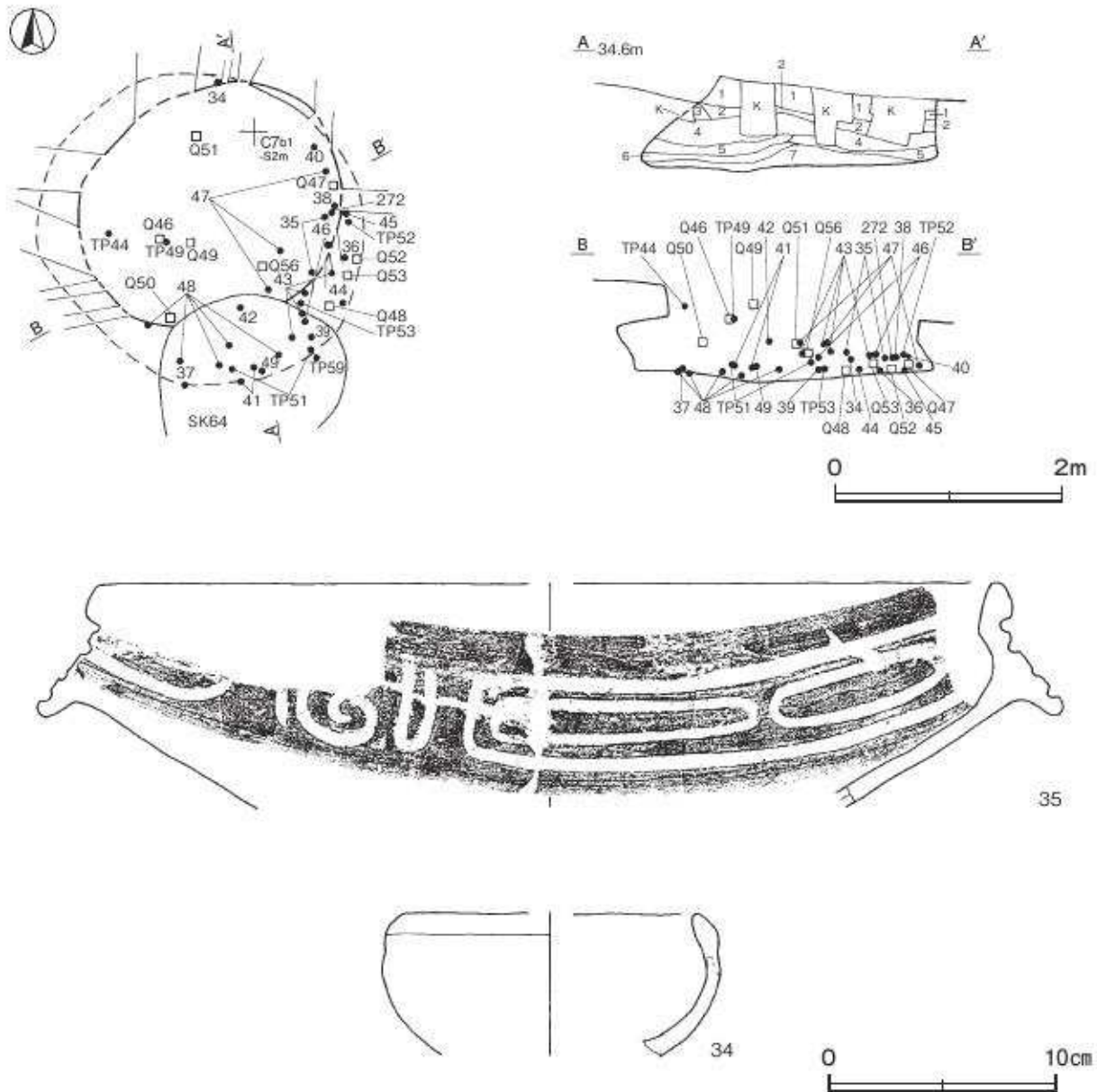
覆土 7層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子、炭化粒子が不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

1	褐色	ローム粒子多量、焼土粒子少量、鹿沼パミス粒子微量	5	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子中量	6	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量	7	褐色	ロームブロック多量、鹿沼パミスブロック少量
4	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量			

遺物出土状況 縄文土器片 395 点 (深鉢 393, 浅鉢 2), 土製品 1 点 (土器片 鍾), 石器 11 点 (石 鎌 1, 磨製石斧 1, 磨石 1, 石 鍾 7, 軽石製品 1), 剥片 1 点, 破断面のある 礫 27 点, 自然礫 6 点, 自然遺物 2 点 (炭化した堅果類, 巻貝) が, 東壁際から南壁際の覆土中層から覆土下層にかけて集中して出土している。45 は東壁際の底面から口縁部が北方向の横位で, 44 は南東壁際の覆土下層から口縁部が北方向の横位で, それぞれ出土している。46 は南東壁際の覆土下層から口縁部が北方向の斜位で出土している。48 は南部の覆土下層から底面にかけて出土した破片が接合したものである。44 や 45 はほぼ完形で出土しており, それらの土器を残したまま土器片や石器類が投棄され, 土砂とともに埋戻された状況と考えられる。なお, 堅果類や巻貝は微細なため種別等の判別はできなかった。

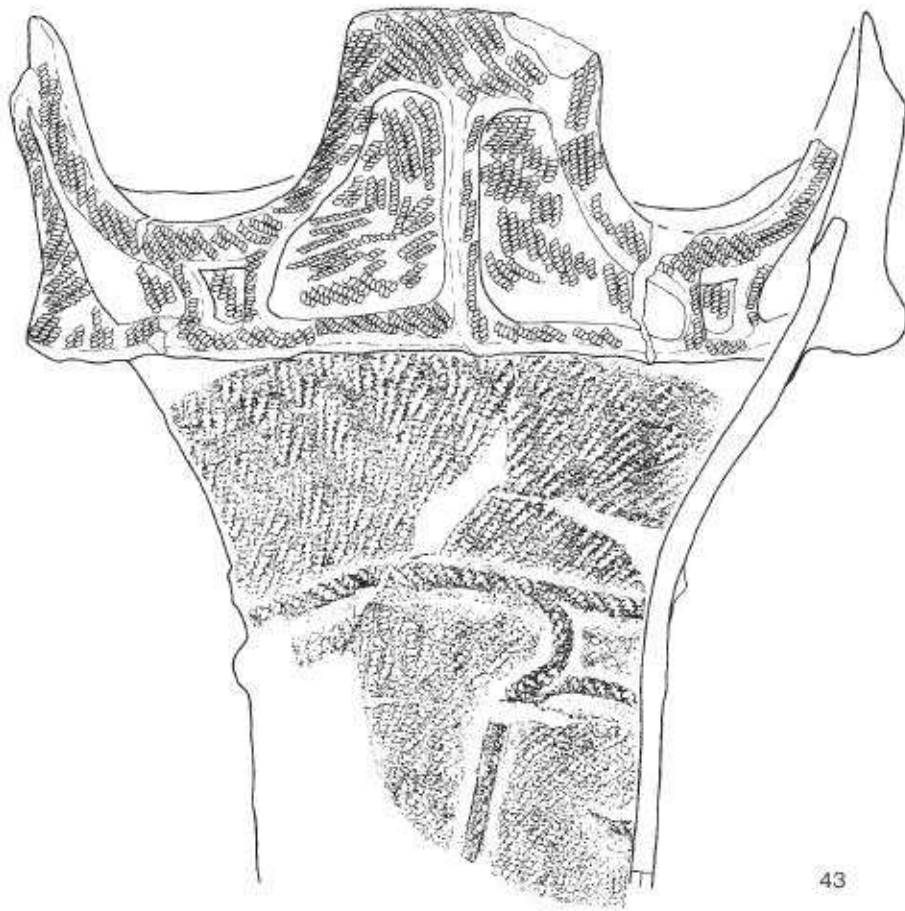
所見 形状から, 袋状土坑の下位部分と推定できる。時期は, 出土土器や重複関係から縄文時代中期中葉から中期後葉 (阿玉台 IV 式期 ~ 加曾利 E I 式期) と考えられる。



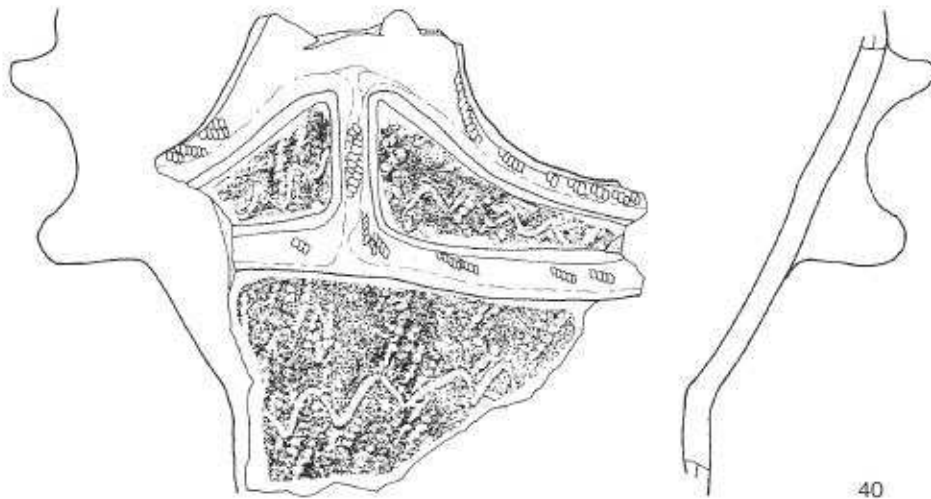
第 37 図 第 49 号土坑・出土遺物実測図



第38图 第49号土坑出土遗物实测图(1)



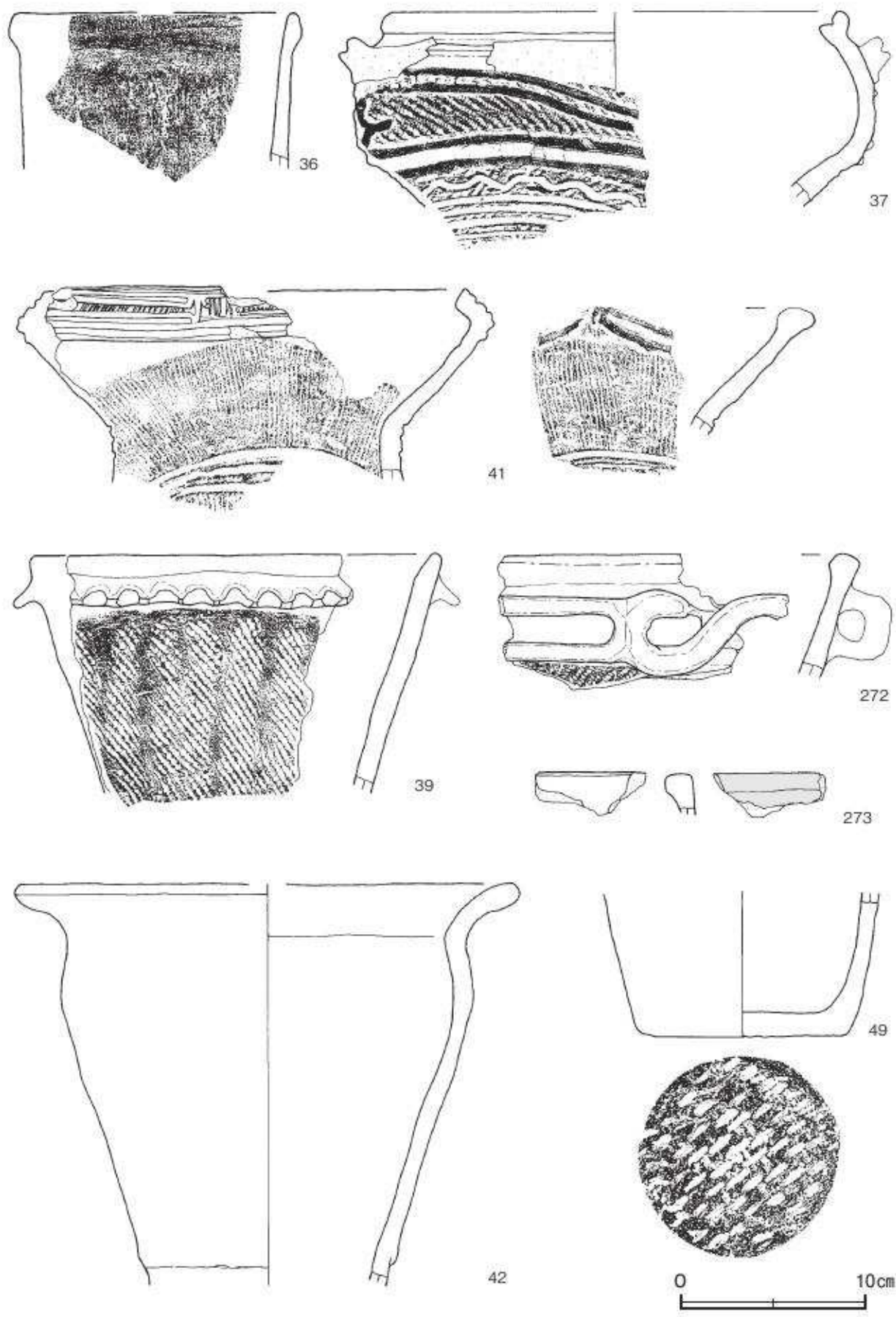
43



40



第 39 图 第 49 号土坑出土遗物实测图 (2)

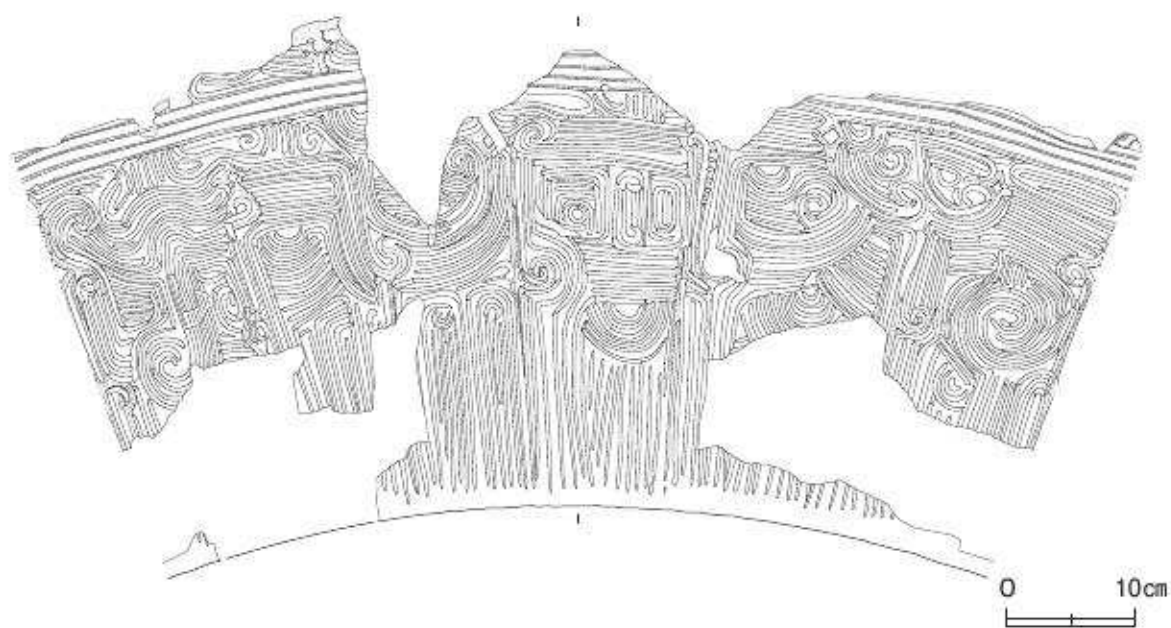


第40图 第49号土坑出土遗物实测图(3)



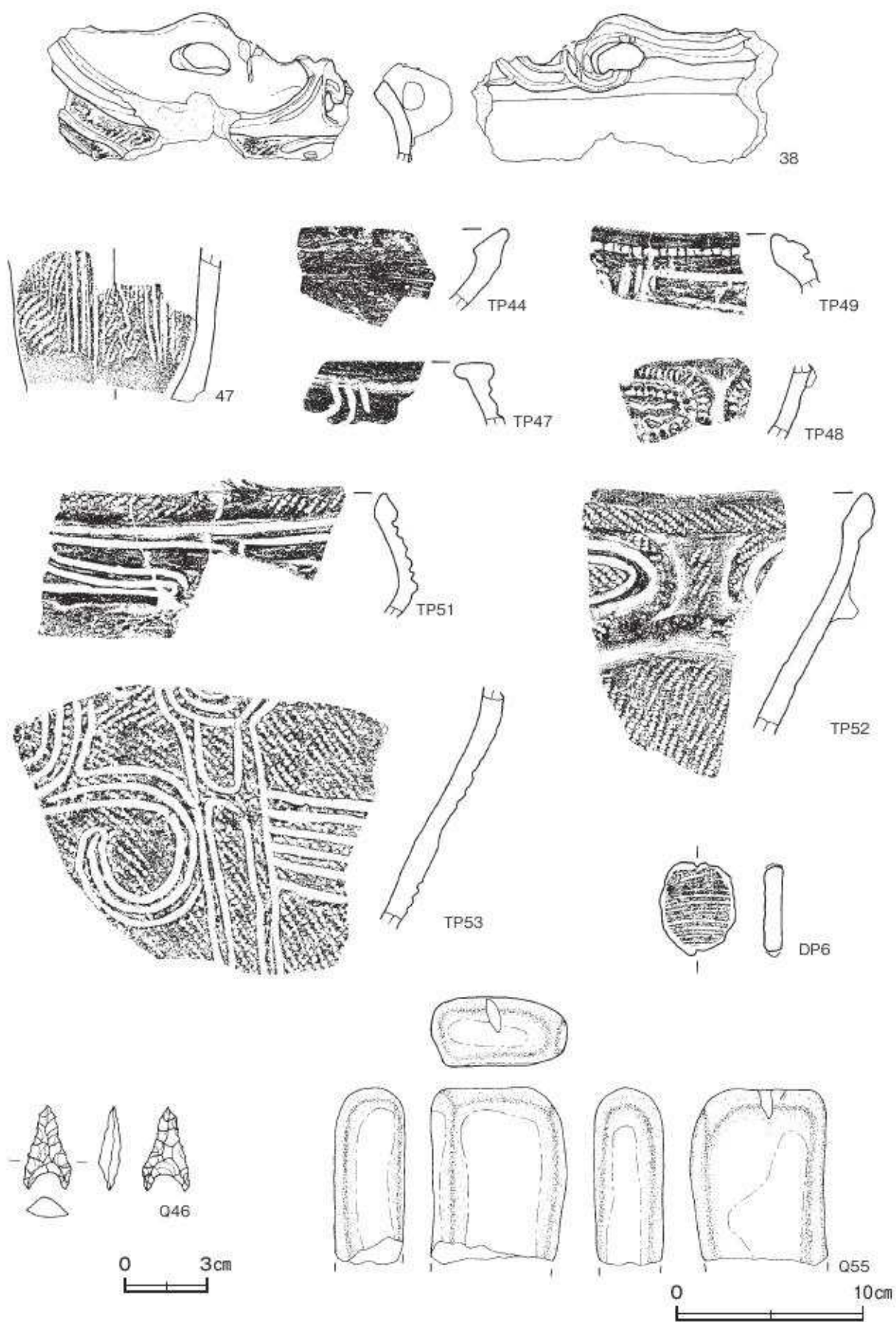
48

0 10cm

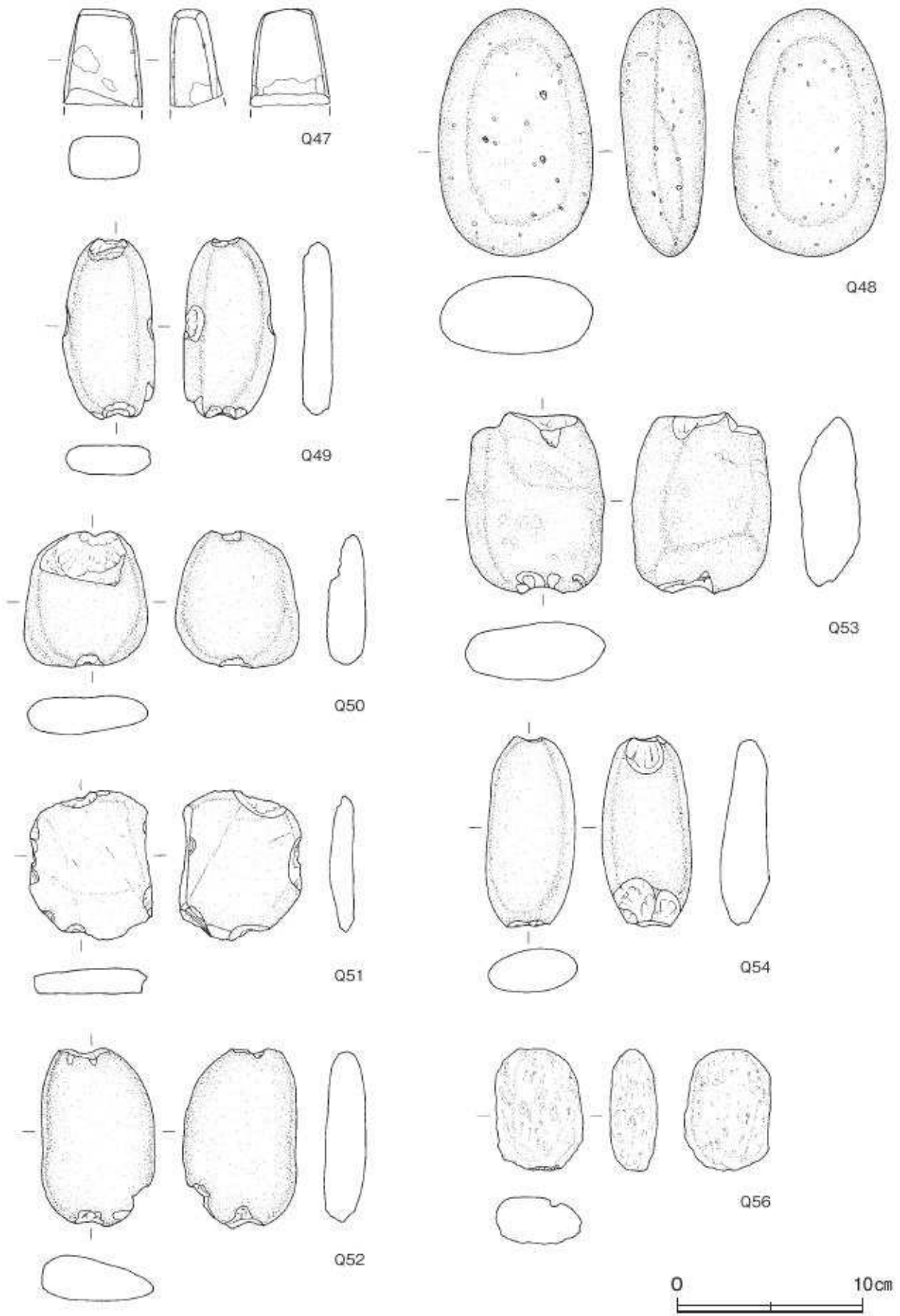


0 10cm

第 41 图 第 49 号土坑出土遗物实测图 (4)



第 42 图 第 49 号土坑出土遗物实测图 (5)



第 43 图 第 49 号土坑出土遗物实测图 (6)

第 49 号土坑出土遺物観察表（第 37～43 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
34	縄文土器	浅鉢	[13.0]	(6.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	外・内面磨き	覆土下層	10%
35	縄文土器	浅鉢	[39.6]	(9.9)	-	長石・石英・金雲母	赤褐色	普通	口縁部太い沈線で文様を描出 外・内面磨き	覆土下層	20%
36	縄文土器	深鉢	[15.0]	(8.5)	-	長石・石英・雲母	暗赤褐色	普通	外面磨き	覆土下層	10%
37	縄文土器	深鉢	[24.4]	(10.6)	-	長石・石英・金雲母	にぶい褐色	普通	隆帯帯貼付後、単節縄文 RL 施文 縦隆帯貼付と沈線文	覆土下層	10%
38	縄文土器	深鉢	-	(8.0)	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	単節縄文 LR を縦位回転で施文後、隆帯貼付 中学状把手を作成	覆土下層	10%
39	縄文土器	深鉢	[21.8]	(12.9)	-	長石・石英	黒褐色	普通	口縁部隆帯貼付後、波状に押圧 単節縄文 RL 施文	覆土下層	20%
40	縄文土器	深鉢	-	(19.2)	-	長石・石英・金雲母	明赤褐色	普通	口唇部に縄文 RL 施文、単節縄文 RL を縦位回転で施文後、隆帯貼付と隆帯に沿う沈線	覆土下層	10%
41	縄文土器	深鉢	[22.8]	(10.3)	-	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	口縁部縦方向の沈線を施文後、縦隆帯貼付 胴部捻糸文を施文後、沈線文	覆土下層	20%
42	縄文土器	深鉢	[26.5]	(21.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	外面無文 胴部隆帯残存	覆土中層	30%
43	縄文土器	深鉢	32.8	(34.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	単節縄文 RL を横位・縦位回転で施文後、沈線隆帯上に縄文施文	覆土中層 →下層	60% PL25
44	縄文土器	深鉢	12.0	15.4	7.4	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	口縁部隆帯に沿う有節沈線、単節縄文 LR を縦位回転で施文後、土ア、沈線による直線文及び円形のモチーフを描出	覆土下層	100% PL25
45	縄文土器	深鉢	17.5	20.7	7.5	長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁部沈線による渦巻文、単節縄文 LR を縦位回転で施文、3条1組を基本とする沈線文	底面	100% PL25
46	縄文土器	深鉢	16.0	(23.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部単節縄文 RL を縦位回転で施文後、交互斜交文、細い隆帯と沈線、箱型で開口部5か所の把手、胴部縄文 LR を縦位回転で施文後、沈線	覆土下層	50% PL25
47	縄文土器	深鉢	-	(8.3)	-	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	単節縄文 RL を縦位回転で施文後、半截竹管による直線と山形沈線文を垂下	覆土中層 →下層	10%
48	縄文土器	深鉢	-	(40.0)	17.0	長石・石英	にぶい橙褐色	普通	沈線による連続した直線と渦巻状の文様を描出	覆土下層 →底面	70% PL25
49	縄文土器	深鉢	-	(7.9)	10.9	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	外面磨き 底部網代痕	覆土下層	20%
272	縄文土器	深鉢	-	(7.2)	-	長石・石英・雲母	灰黄褐色	普通	単節縄文 RL を縦位回転で施文後、隆帯貼付による横 S 字文を作成	覆土下層	10%
273	縄文土器	深鉢	-	(2.2)	-	長石・石英	にぶい橙褐色	普通	口唇部・内面赤彩 外・内面磨き	覆土中層	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP44	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	明黄褐色	外面無文	覆土上層	
TP47	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	赤褐色	3条の沈線による文様を描出 外面赤彩	覆土中層	
TP48	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	暗褐色	隆帯上に爪形文 有節沈線文	覆土中層	
TP49	縄文土器	深鉢	長石・石英	暗褐色	口縁部に有節沈線文	覆土中層	
TP51	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐色	口縁部単節縄文 LR 施文 横位の沈線文	覆土下層	
TP52	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐色	単節縄文 RL を横位・縦位に施文後、隆帯貼付及び沈線文 口縁部・隆帯上に縄文 RL 施文	覆土下層	
TP53	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙褐色	単節縄文 LR を縦位回転で施文後、沈線による文様を描出	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 6	土器片鏝	5.0	4.1	1.1	24.8	長石・石英・雲母	にぶい褐色	両辺部打ち欠き痕 両端に刻み痕	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q46	石鏝	3.0	1.7	0.8	1.97	瑪瑙	両面押圧剥離 凹巻	覆土中層	
Q47	磨製石斧	(5.4)	4.3	2.8	(10.53)	緑泥片岩	全面研磨痕	覆土下層	
Q48	磨石	13.4	9.3	4.2	71.23	花崗岩	全面研磨痕	覆土下層	PL39
Q49	石鏝	9.8	5.0	1.6	131.2	ホルンフェルス	長径・短径方向に挟り調整	覆土上層	
Q50	石鏝	7.4	6.7	2.1	148.5	ホルンフェルス	長径方向に挟り調整	覆土中層	
Q51	石鏝	8.1	6.6	1.4	111.0	頁岩	長径方向に挟り調整	覆土中層	
Q52	石鏝	9.6	6.1	2.5	288.5	安山岩	長径方向に挟り調整	覆土下層	
Q53	石鏝	9.8	7.5	3.2	315.3	安山岩	長径方向に挟り調整	覆土下層	
Q54	石鏝	10.3	4.9	2.6	169.3	砂岩	長径方向に挟り調整	覆土中層	
Q55	磨石	(9.6)	7.3	3.7	(494.6)	チャート	全面研磨痕	覆土中層	
Q56	磨石製品	6.5	4.7	2.5	11.2	磨石	全面研磨痕 端部にわずかな敲打痕	覆土下層	

第 50 号土坑 (第 44 ~ 48 図)

位置 調査区北部の C 6 e9 区, 標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 63 号土坑に掘り込まれ, 第 51 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 開口部は長径 1.50m, 短径 1.32m の楕円形で, 長径方向は N-25°-W である。深さは 146cm である。底面は長径 2.20m, 短径 1.86cm の楕円形で, 平坦である。壁は内傾して立ち上がっている。

ピット P 1 は南東壁際に位置しており, 深さは 70cm である。P 1 底面の西壁際には, 深さ 38cm の掘り込みが確認できた。いずれも性格は不明である。

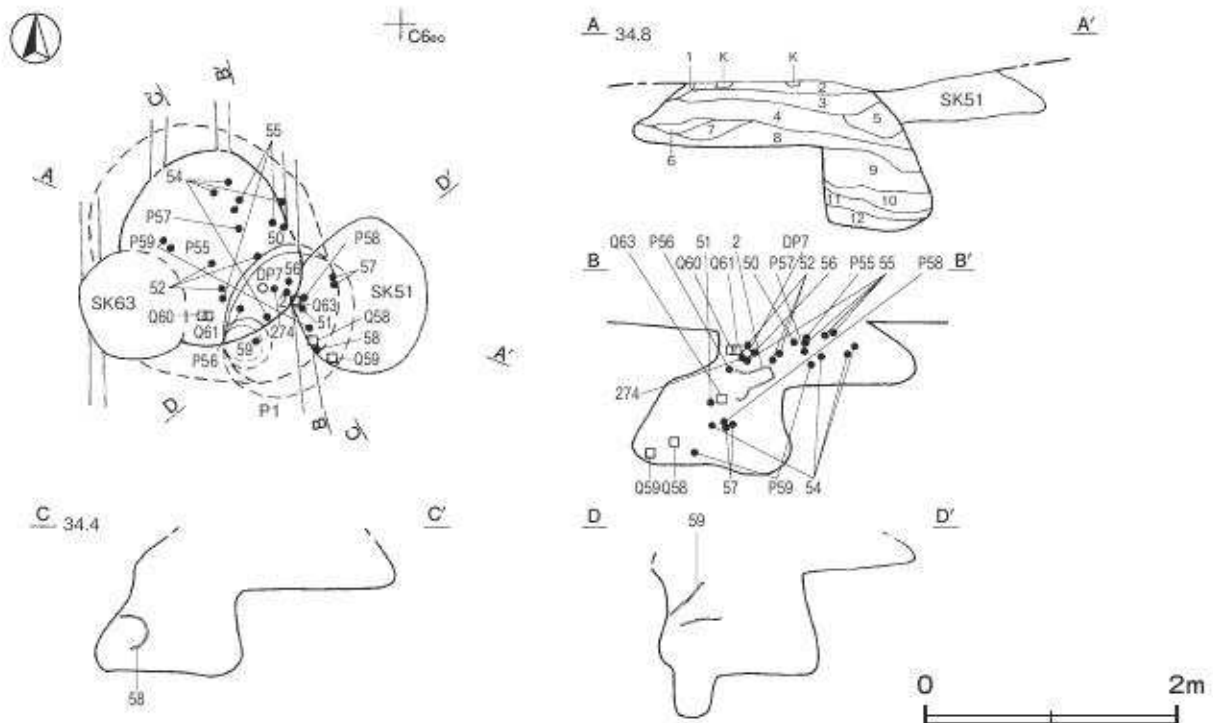
覆土 12 層に分層できる。上層には焼土粒子や炭化粒子を含む層が確認でき, 各層位を通してロームブロックやローム粒子が不規則に混じる堆積状況から, 埋め戻されている。第 8 層は土坑の底面から P 1 の上層まで及んでいることから, ピットと土坑全体が連続して埋め戻されたと考えられる。

土層解説

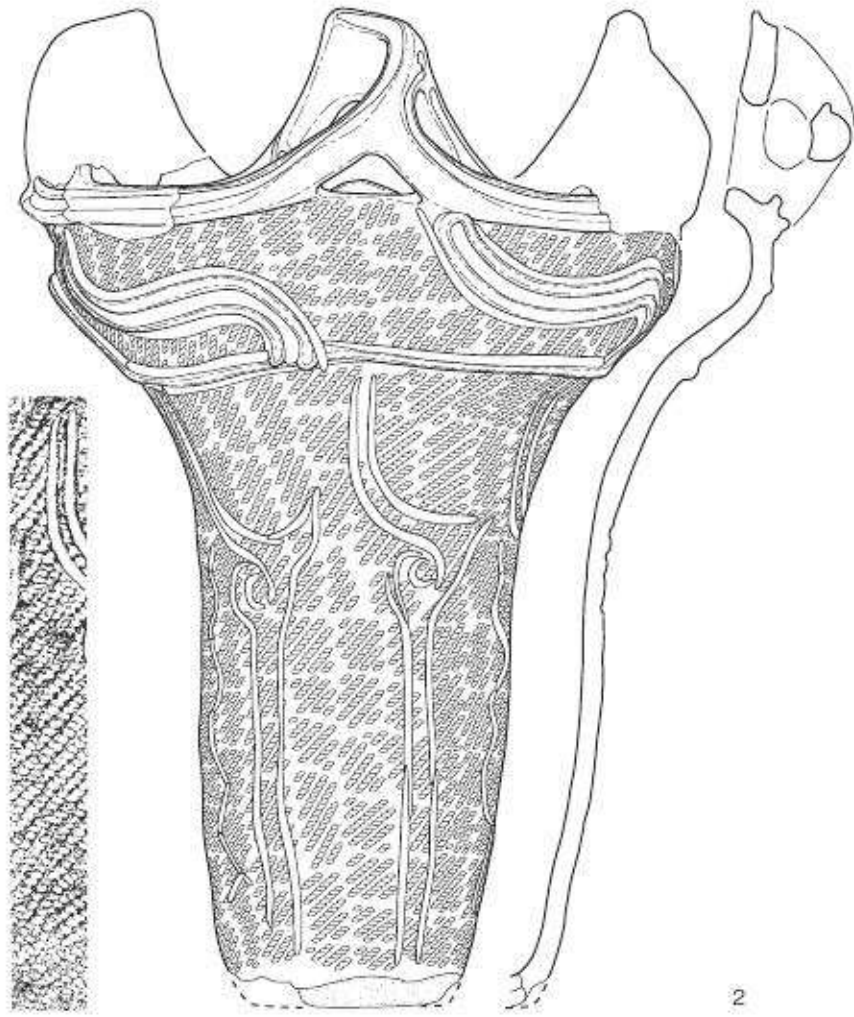
1	褐色	ロームブロック中量	7	黒褐色	ロームブロック少量
2	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	8	暗褐色	ロームブロック少量
3	黒褐色	焼土粒子少量, ロームブロック・炭化粒子微量	9	黒褐色	ローム粒子少量
4	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	10	暗褐色	ローム粒子中量
5	褐色	ローム粒子多量	11	極暗褐色	ロームブロック少量
6	褐色	ローム粒子中量	12	褐色	ロームブロック多量

遺物出土状況 縄文土器片 18 点 (深鉢 15, 浅鉢 3), 土製品 1 点 (土器片錘), 石器 6 点 (磨石 2, 石錘 3, 軽石製品 1) 剥片 2 点が出土している。58 は P 1 の覆土下層から口縁部を北東方向に向けた横位で出土している。59 は 2 の南西側のほぼ同じ層位で, 口縁部が北東方向の斜位で出土している。2 は, P 1 の覆土上層から口縁部が南方向の斜位で出土している。51 は 2 と 59 の下位から出土している。54 は覆土中層と P 1 の覆土中層から出土した破片が接合したものである。

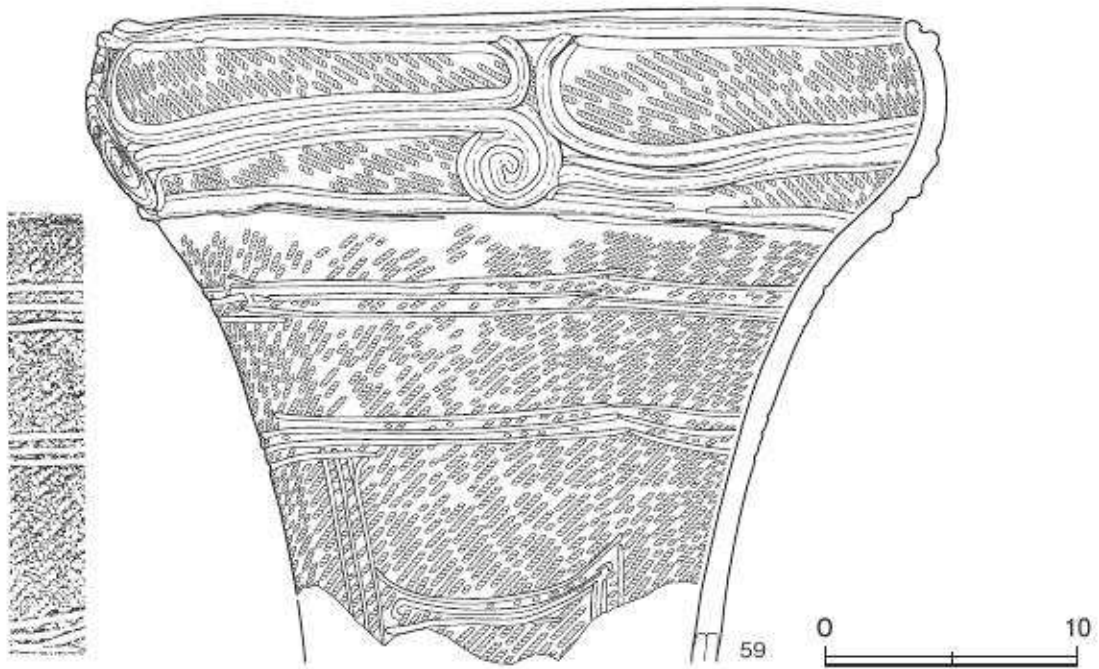
所見 形状から, 袋状土坑である。時期は, 出土土器と重複関係から縄文時代中期後葉 (加曾利 E I 式期) と考えられる。54 の接合関係から, P 1 を埋め戻した後, 2 や 59 のほぼ完形の土器を遺棄し, 大きな時期差なく土坑全体を埋め戻していった状況と考えられる。



第 44 図 第 50 号土坑実測図



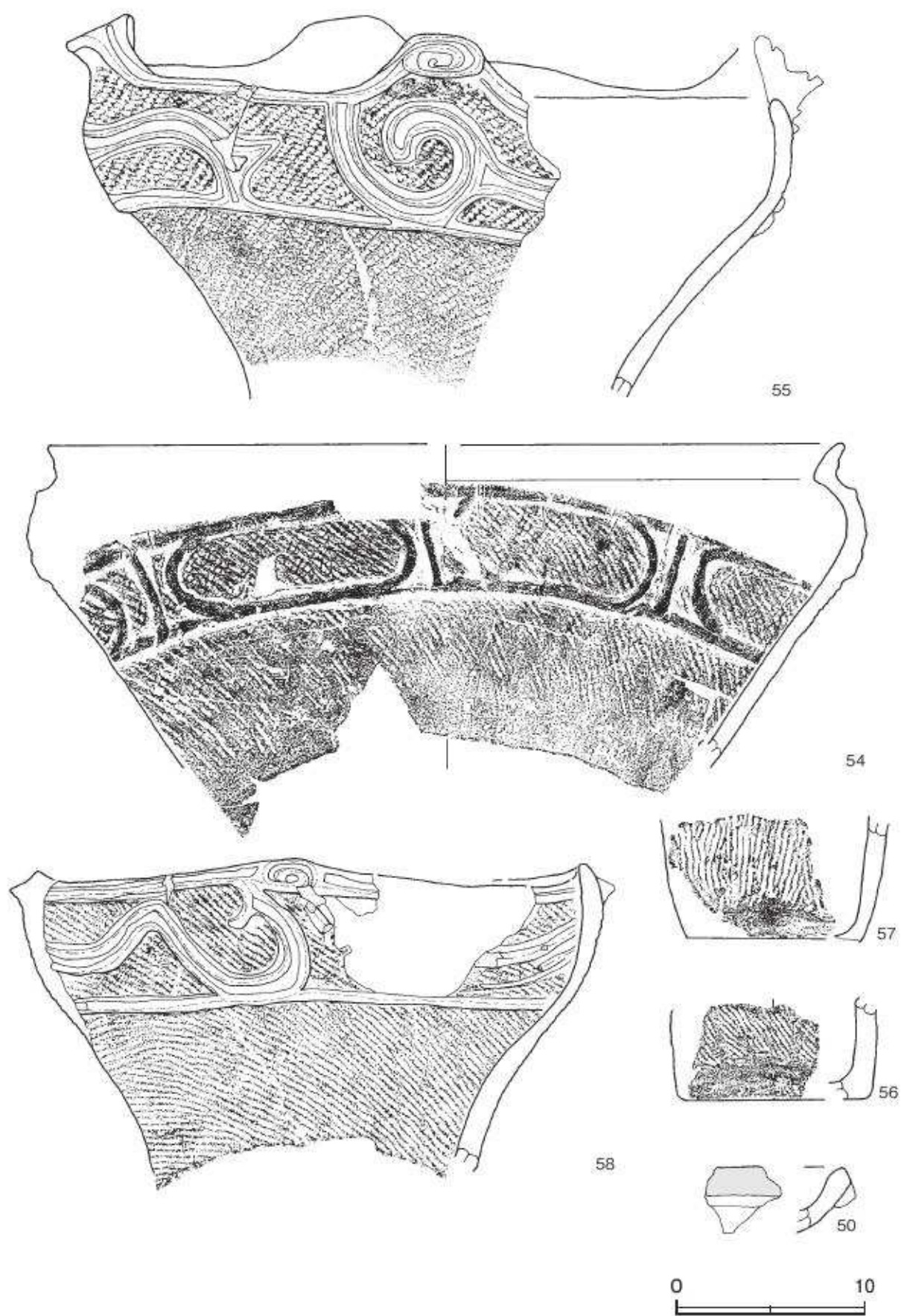
2



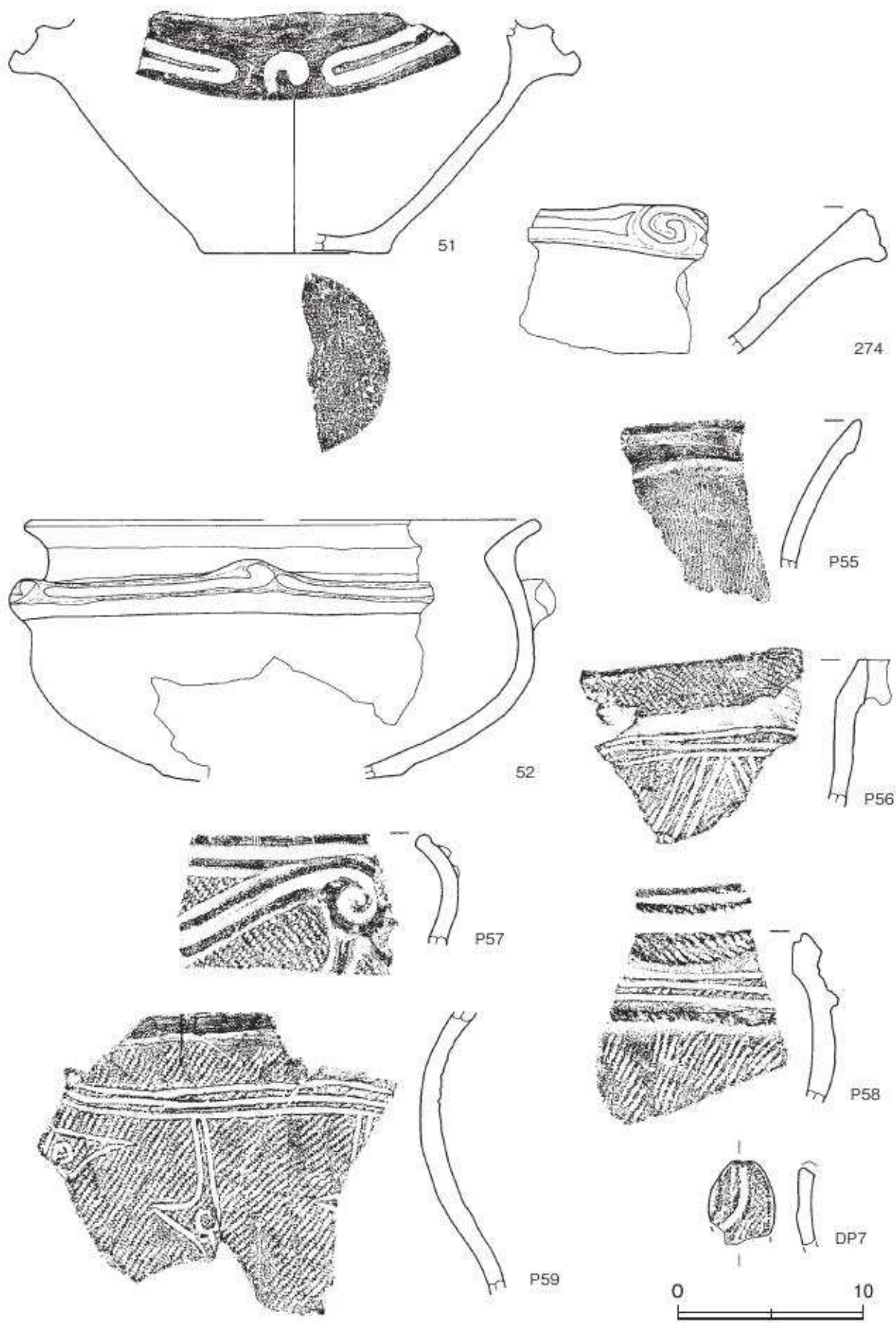
59



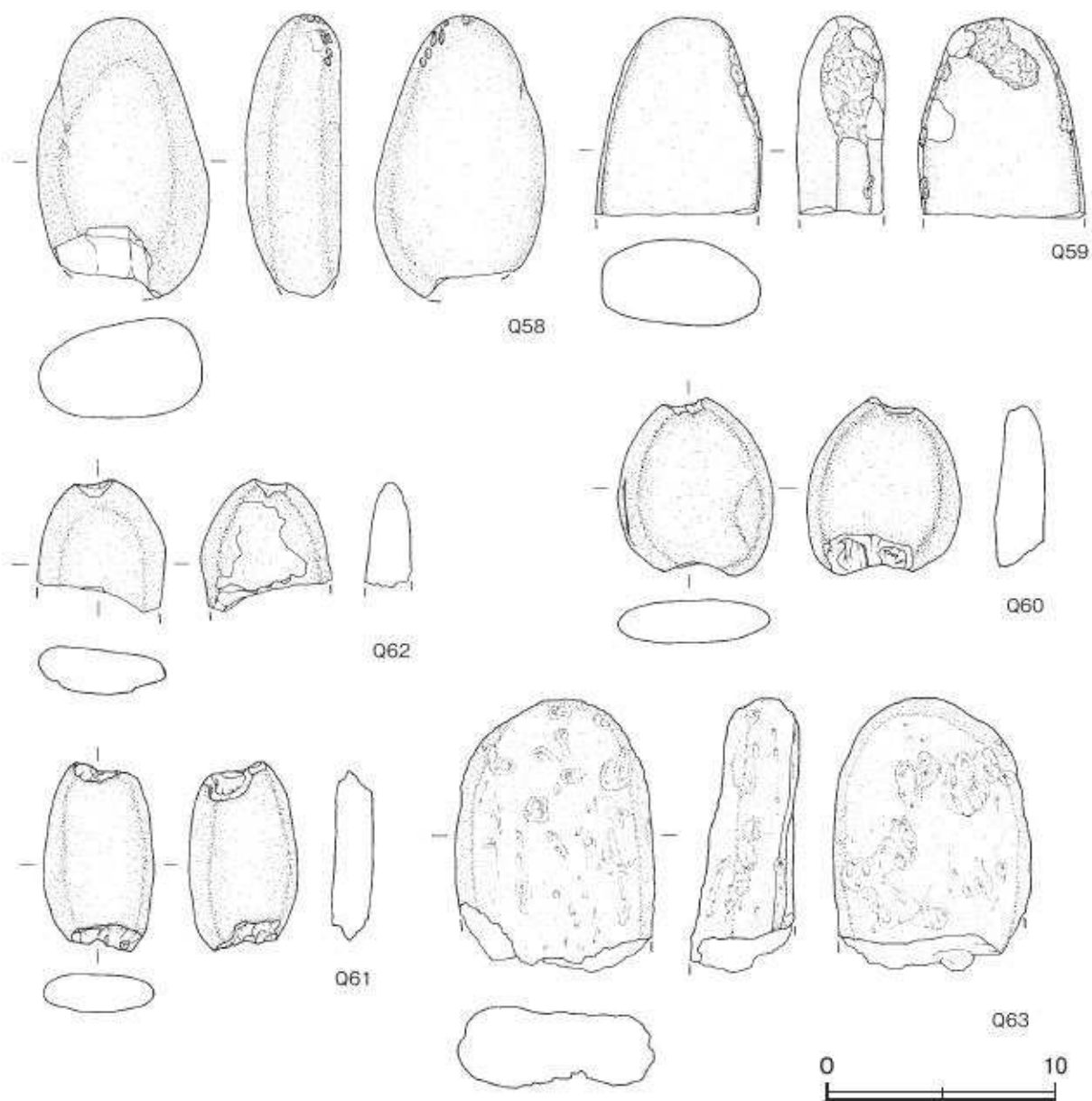
第45图 第50号土坑出土遗物实测图(1)



第 46 图 第 50 号土坑出土遗物实测图 (2)



第47图 第50号土坑出土遗物实测图(3)



第48図 第50号土坑出土遺物実測図(4)

第50号土坑出土遺物観察表(第45～48図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
2	縄文土器	深鉢	23.0	(39.6)	[7.9]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	単節縄文RLを縦位回転で施文。把手1が所残存。沈線を伴う隆帯でクランク文を抽出	P1覆土上層	95% PL26
50	縄文土器	浅鉢	-	(3.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口唇部隆帯貼付。赤彩	覆土中層	10%
51	縄文土器	浅鉢	-	(12.6)	[10.0]	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部太い沈線による文様抽出。外・内面磨き	P1覆土上層	20%
52	縄文土器	浅鉢	[27.2]	(14.0)	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	背に沈線を施された隆帯による薬手文	覆土中層	30% PL26
54	縄文土器	深鉢	[42.2]	(17.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	単節縄文LRを縦位回転で施文後、隆帯貼付。縄文施文後、ナゲ	覆土中層 - P1覆土中層	40%
55	縄文土器	深鉢	32.0	(19.4)	-	長石・石英・雲母	赤褐	普通	単節縄文RLを縦位回転で施文。把手に隆帯と沈線による渦巻文	覆土上層 - 中層	30% PL26
56	縄文土器	深鉢	-	(5.4)	[9.6]	長石・石英	にぶい橙	普通	単節縄文LRを縦位回転で施文	覆土中層	10%
57	縄文土器	深鉢	-	(6.7)	[9.4]	長石・石英・ 赤色粒子	褐	普通	単節縄文RLを縦位回転で施文	P1覆土中層	10%
58	縄文土器	深鉢	29.2	(16.7)	-	長石・石英・雲母	黄褐	普通	口縁部沈線に沿わせた隆帯による曲線文。単節縄文RL施文	P1覆土下層	30%
59	縄文土器	深鉢	31.4	(25.9)	-	長石・石英	灰褐	普通	口縁部縄文RLを施文後、隆帯と沈線による渦巻文を抽出。縄文RLを縦位回転で施文。胴部に3条1組の沈線文	P1覆土上層	50% PL26
274	縄文土器	浅鉢	-	(8.0)	-	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部隆帯による渦巻文。外面磨き	覆土中層	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP55	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐	口縁部隆帯貼付。以下条線文を垂下。	覆土上層	
TP56	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	口縁部縄文 RL を施文。単節縄文 RL を縦位回転で施文後、沈線文。	覆土下層	
TP57	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐色	単節縄文 RL を施文後、隆帯と沈線による渦巻文を描出。	覆土中層	
TP58	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	口縁部縄文 RL 施文。単節縄文 RL を縦位回転で施文後、隆帯と沈線文。	P1 覆土中層	
TP59	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐色	単節縄文 RL を縦位回転で施文。沈線による朝光文と渦巻文を組み合わせた文様を描出。	覆土下層 - P1 覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 7	土器片鉢	(4.6)	3.6	1.0	(19.8)	長石	褐	周辺部研磨。刻み痕 1 か所残存。下縁欠損。	覆土中層	PL41

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q58	磨石	(12.4)	7.5	4.2	(540.9)	砂岩	一面に研磨痕。端部にわずかな敲打痕。	P1 覆土下層	
Q59	磨石	(8.8)	7.3	3.8	(367.8)	砂岩	磨痕 2 面。磨縁部に粒痕状の敲打痕。	P1 覆土下層	
Q60	石錘	7.9	6.7	2.2	165.3	安山岩	長径方向に抉り調整。	覆土中層	PL42
Q61	石錘	8.3	4.8	1.7	105.4	安山岩	長径方向に抉り調整。	覆土中層	PL42
Q62	石錘	(5.8)	5.7	2.1	(75.1)	安山岩	端部に抉り調整。	覆土中	
Q63	軽石製品	(12.0)	8.7	4.9	(98.9)	軽石	磨縁部に研磨痕。	P1 覆土上層	

第 51 号土坑 (第 49・50 図)

位置 調査区北部の C6e 9 区、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

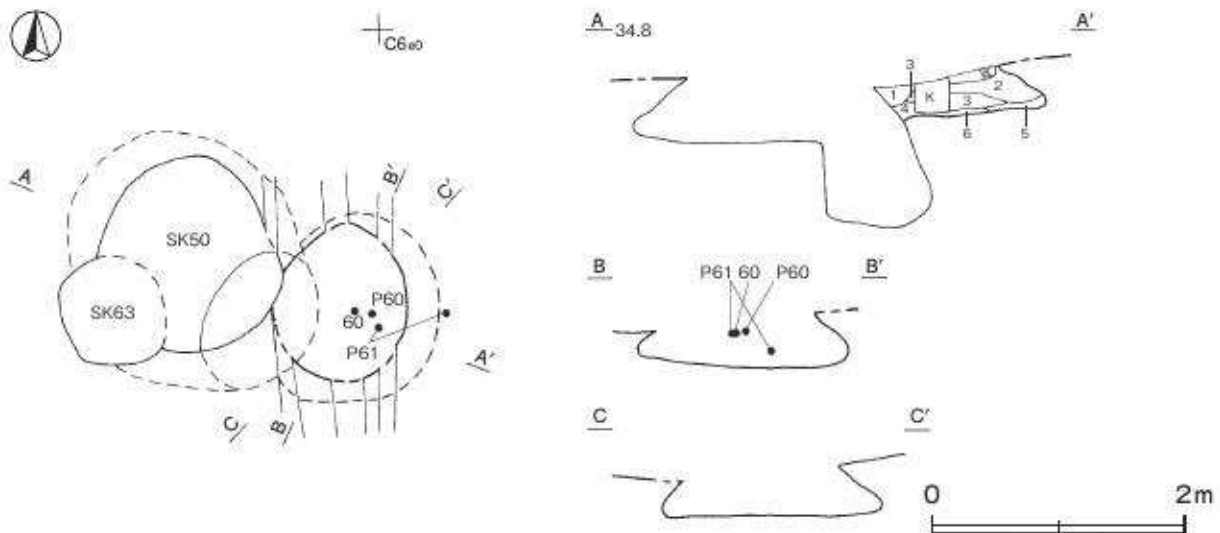
重複関係 第 50 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は長径 1.22m、短径 1.06m の楕円形で、長径方向は N-17°-E である。深さは 39cm で、底面は西部を第 50 号土坑に掘り込まれているため、南北径 1.56m で、東西径は 1.16m しか確認できなかった。底面は楕円形と推定でき、平坦である。壁は内傾して立ち上がっている。

覆土 6 層に分層できる。ロームブロックや炭化粒子が不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

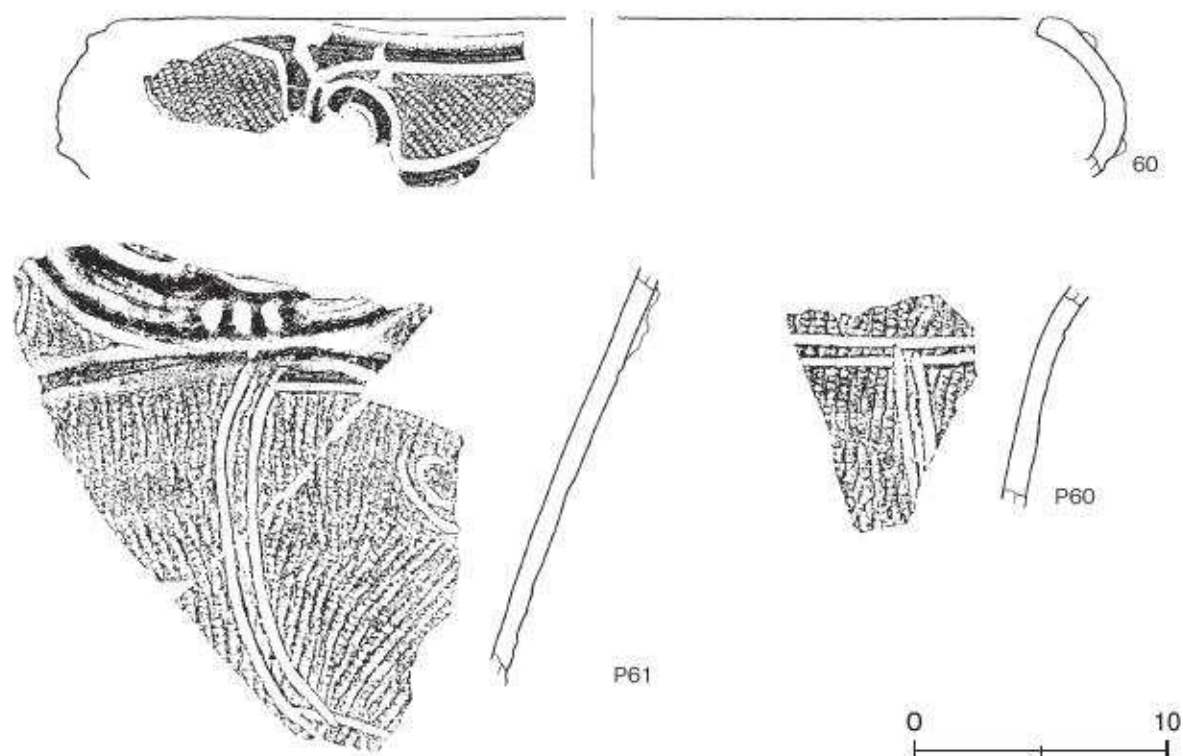
- | | | | |
|-------|------------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック・炭化粒子多量 |



第 49 図 第 51 号土坑実測図

遺物出土状況 縄文土器片 23 点（深鉢）、破断面のある碟 2 点が出土している。TP61 は、中央部と東壁際の覆土上層から中層にかけて出土した破片が接合したものである。60、TP60 は中央部の覆土上層から出土している。

所見 形状から、袋状土坑の下位部分と推定できる。時期は、出土土器から縄文時代中期後葉（加曾利 E I 式期）と考えられる。



第 50 図 第 51 号土坑出土遺物実測図

第 51 号土坑出土遺物観察表（第 50 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
60	縄文土器	深鉢	[36.0]	(6.3)	-	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	単節縄文 RL を施文後、陸帯貼付 陸帯に沿う沈線	覆土上層	10%
TP60	縄文土器	深鉢				長石・石英・雲母	にぶい赤褐色		単節縄文 LR を斜位回転で施文後、2 条の沈線文	覆土上層	
TP61	縄文土器	深鉢				長石・石英・雲母	にぶい赤褐色		単節縄文 LR を斜位回転で施文後、陸帯と沈線による文様を描出	覆土上層 - 中層	

第 52 号土坑（第 51 ~ 56 図）

位置 調査区北部の C 6 c0 区、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 24 号堅穴建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 開口部は径 1.04m の円形で、深さは 78m である。底面は径 2.24m の円形で、平坦である。壁は内傾し、くびれ部から北半部が内傾、南半部が外傾して立ち上がっている。底面からくびれ部までの高さは 44 ~ 53cm である。

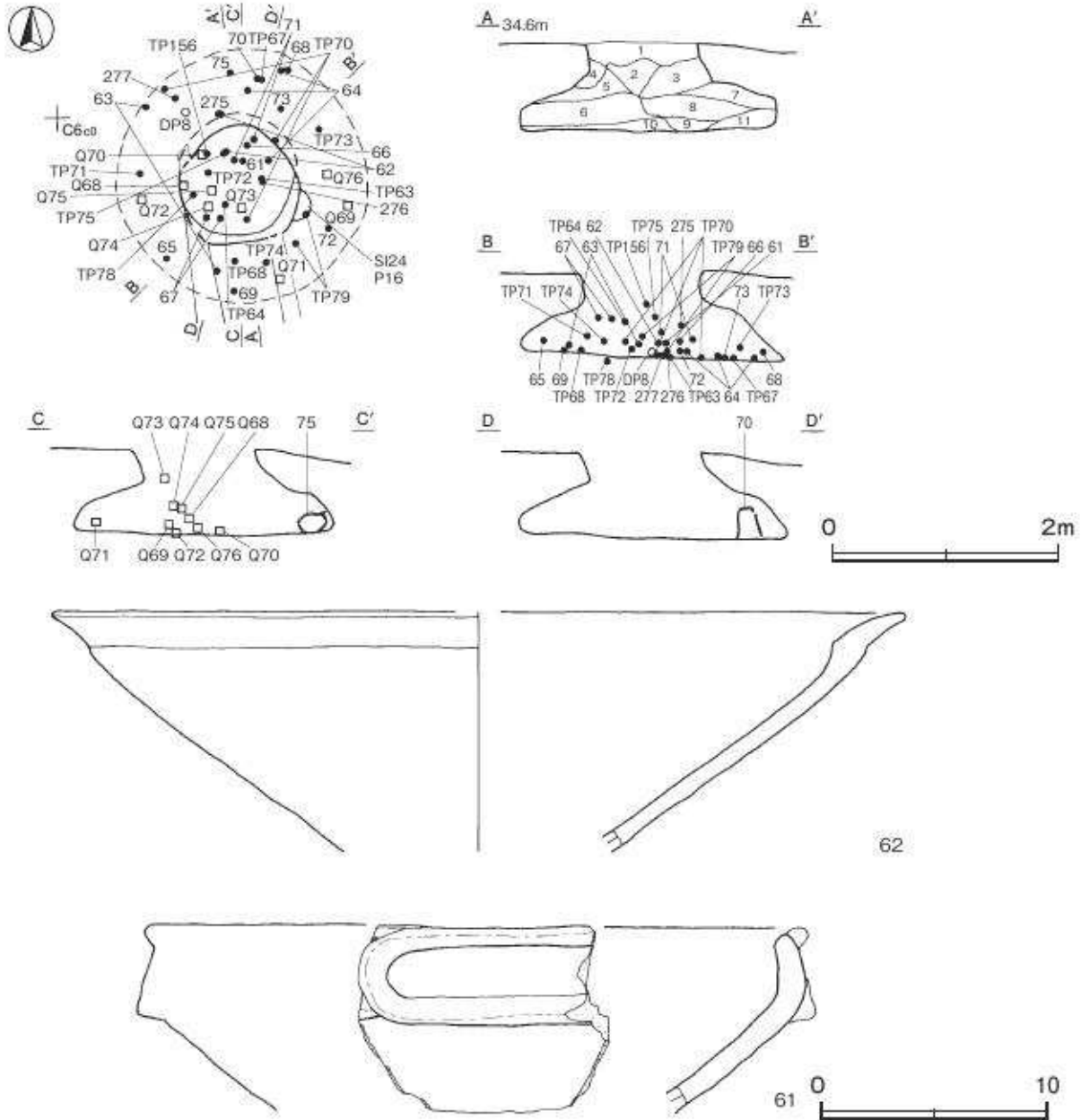
覆土 11 層に分層できる。ブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

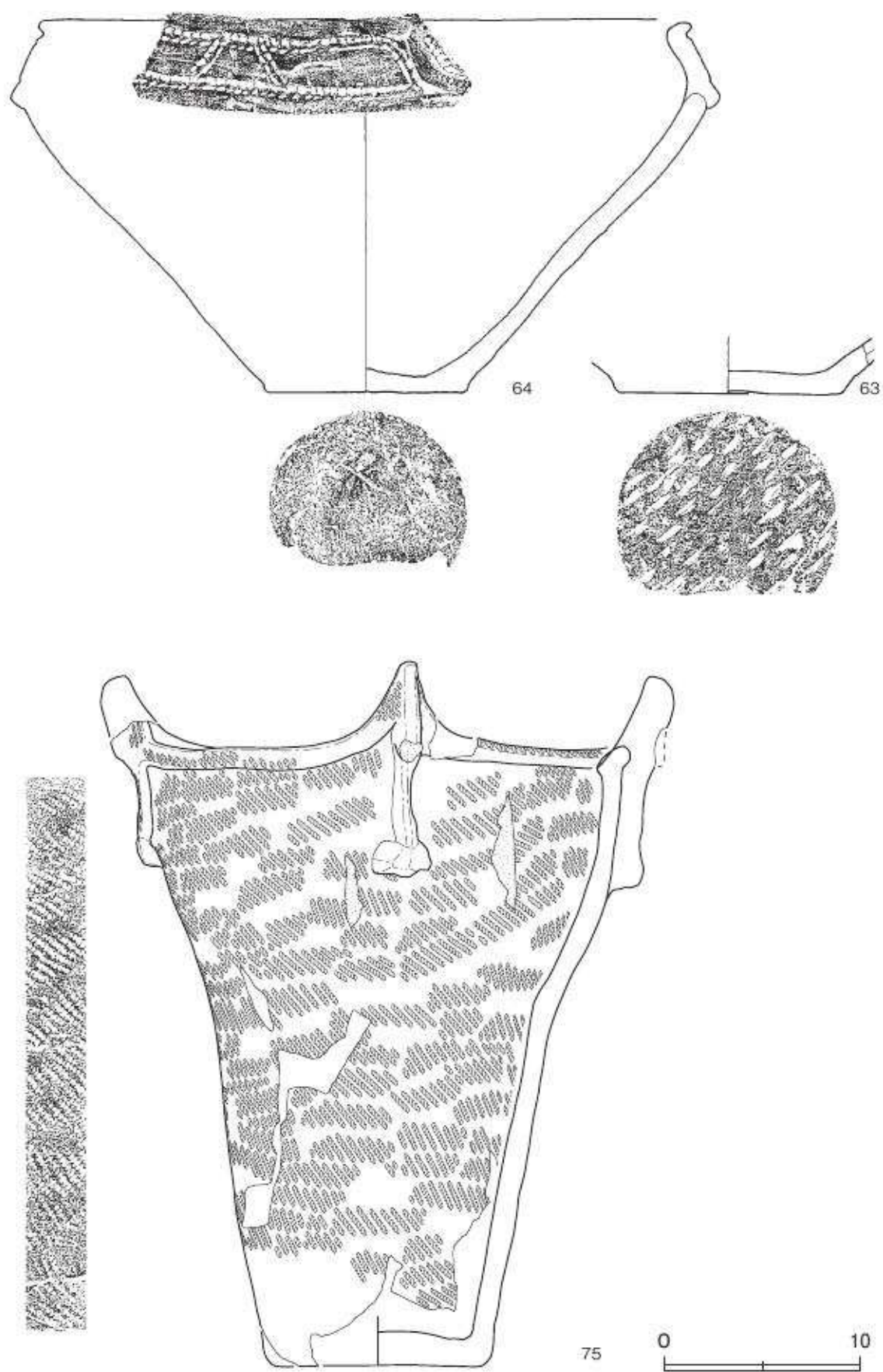
- | | | | |
|--------|-------------------|--------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量 | 7 極暗褐色 | ローム粒子・鹿沼バミス粒子微量 |
| 2 黒褐色 | 炭化粒子中量, ロームブロック少量 | 8 黒褐色 | ローム粒子・鹿沼バミス粒子少量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック少量 | 9 暗褐色 | 鹿沼バミス粒子中量, ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量 | 10 暗褐色 | 鹿沼バミスブロック・ローム粒子少量 |
| 5 褐色 | ロームブロック少量 | 11 褐色 | ロームブロック・鹿沼バミスブロック中量 |
| 6 極暗褐色 | ローム粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片 944 点 (深鉢 940, 浅鉢 4), 土製品 1 点 (土器片円盤), 石器 10 点 (石鏃 1, 打製石斧 1, 石皿 1, 磨石 2, 敲石 2, 石錘 3), 剥片 10 点, 破断面のある礫 17 点, 自然礫 32 点, 粘土塊 1 点が覆土中層から底面にかけて出土している。70 は北部の底面から逆位で出土している。72 は南東部の覆土下層から口縁部が南方向の横位で, 75 は北部の覆土下層から口縁部が北東方向の横位で出土している, 73 は北東部の覆土下層から出土している。70・72・75 を遺棄した後, 破片とともに土砂を埋め戻した状況と考えられる。

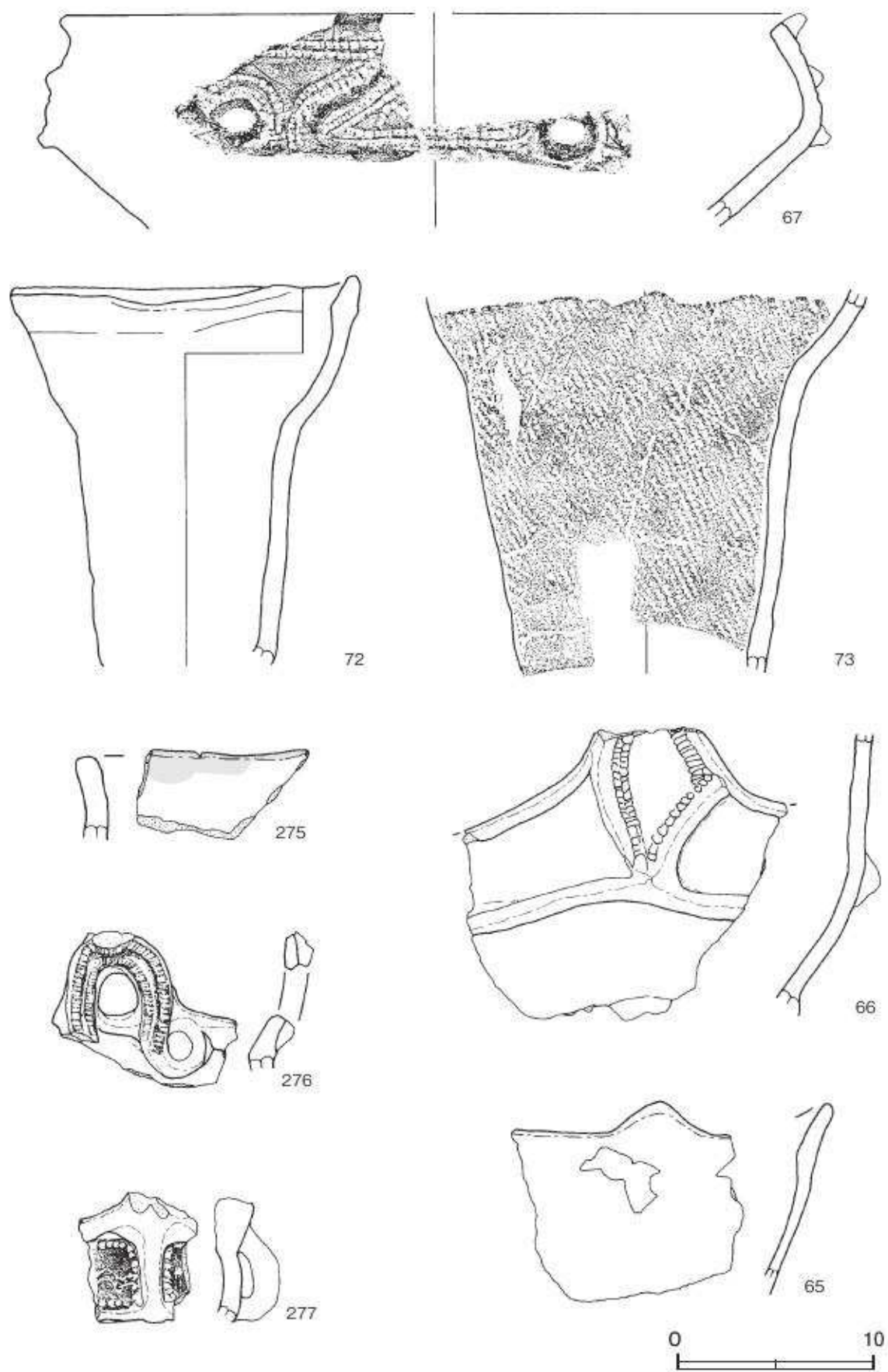
所見 形状から, 袋状土坑である。時期は, 出土土器から縄文時代中期中葉から中期後葉 (阿玉台 IV 式期~加曾利 E I 式期) と考えられる。



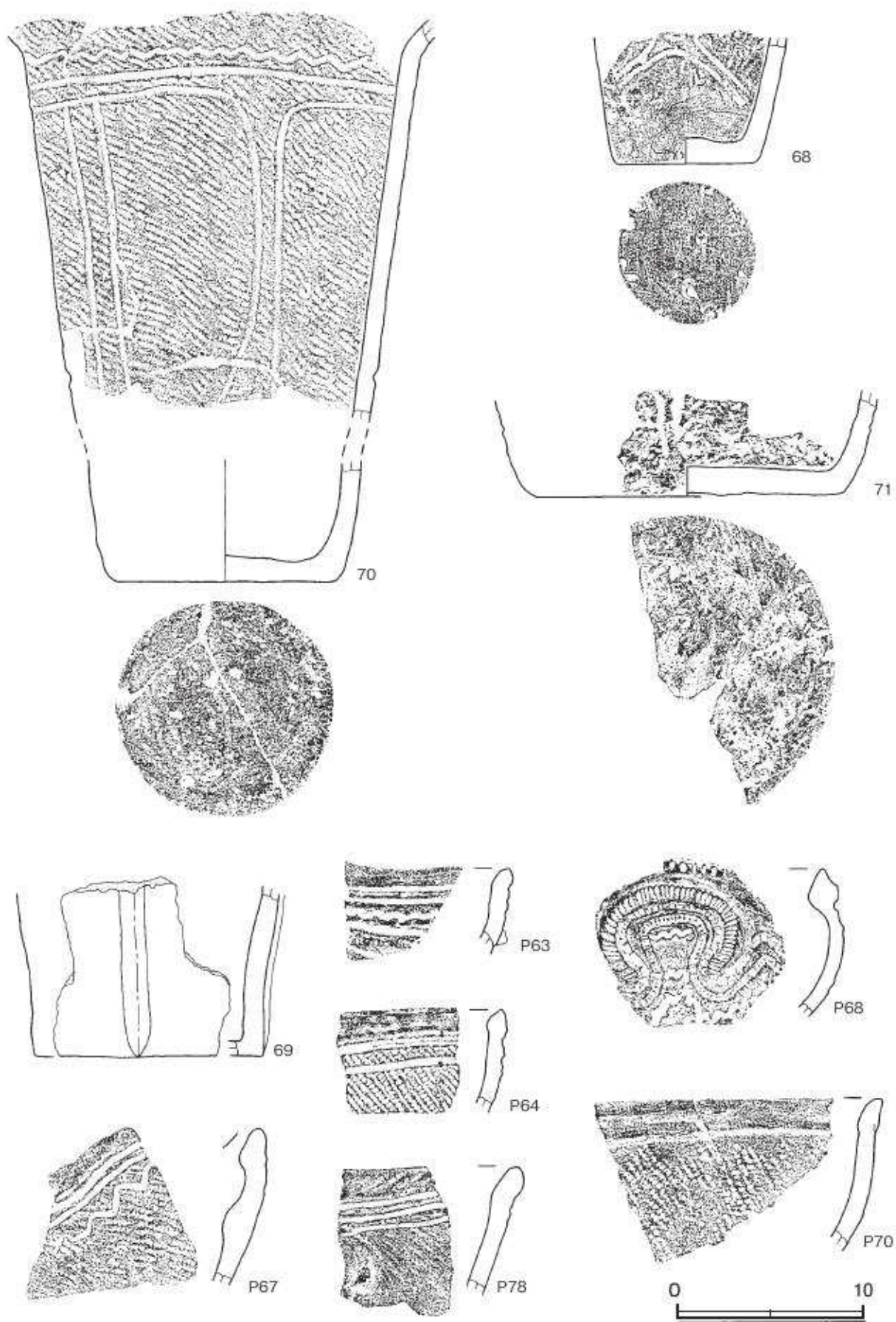
第 51 図 第 52 号土坑・出土遺物実測図



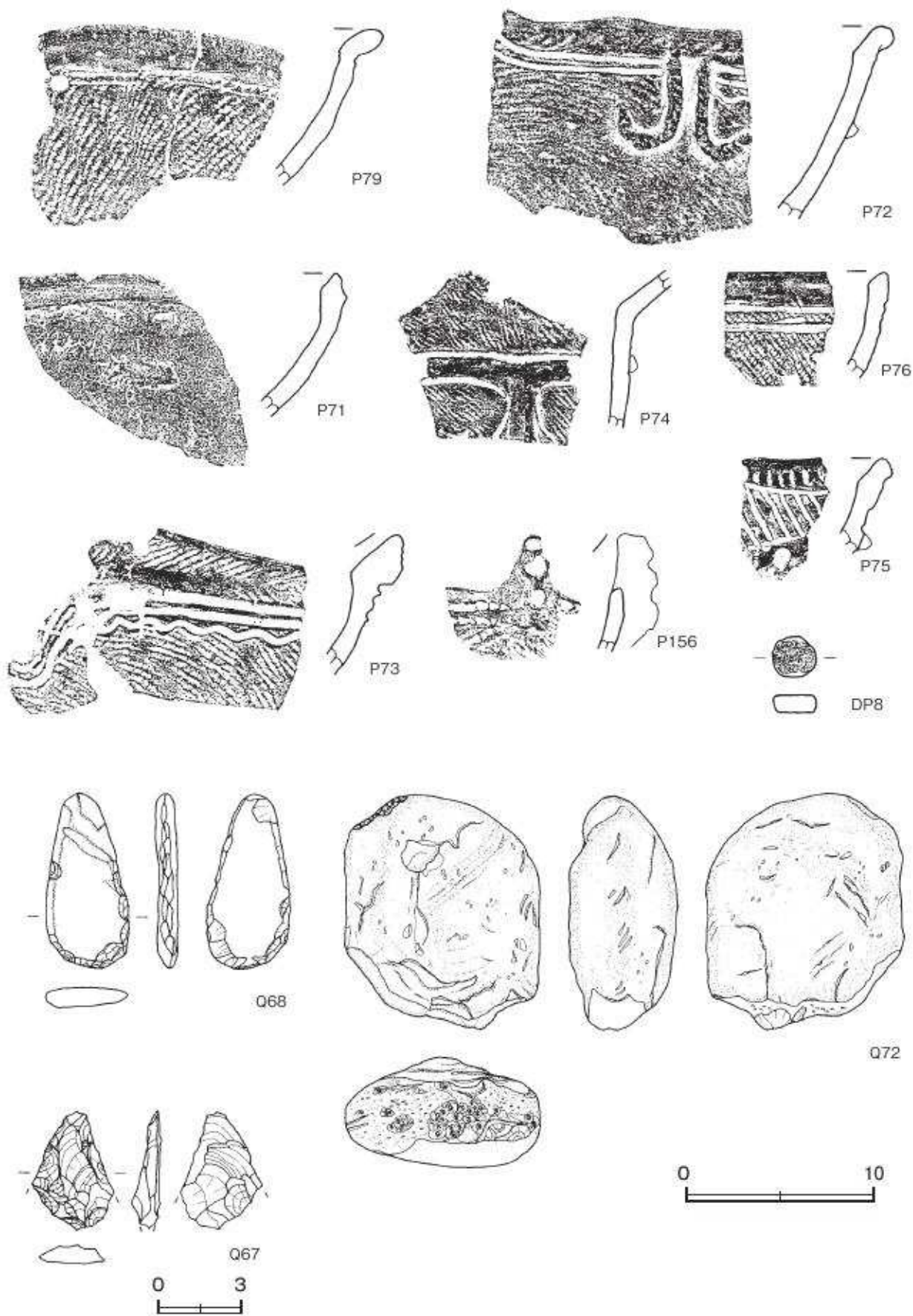
第 52 図 第 52 号土坑出土遺物実測図 (1)



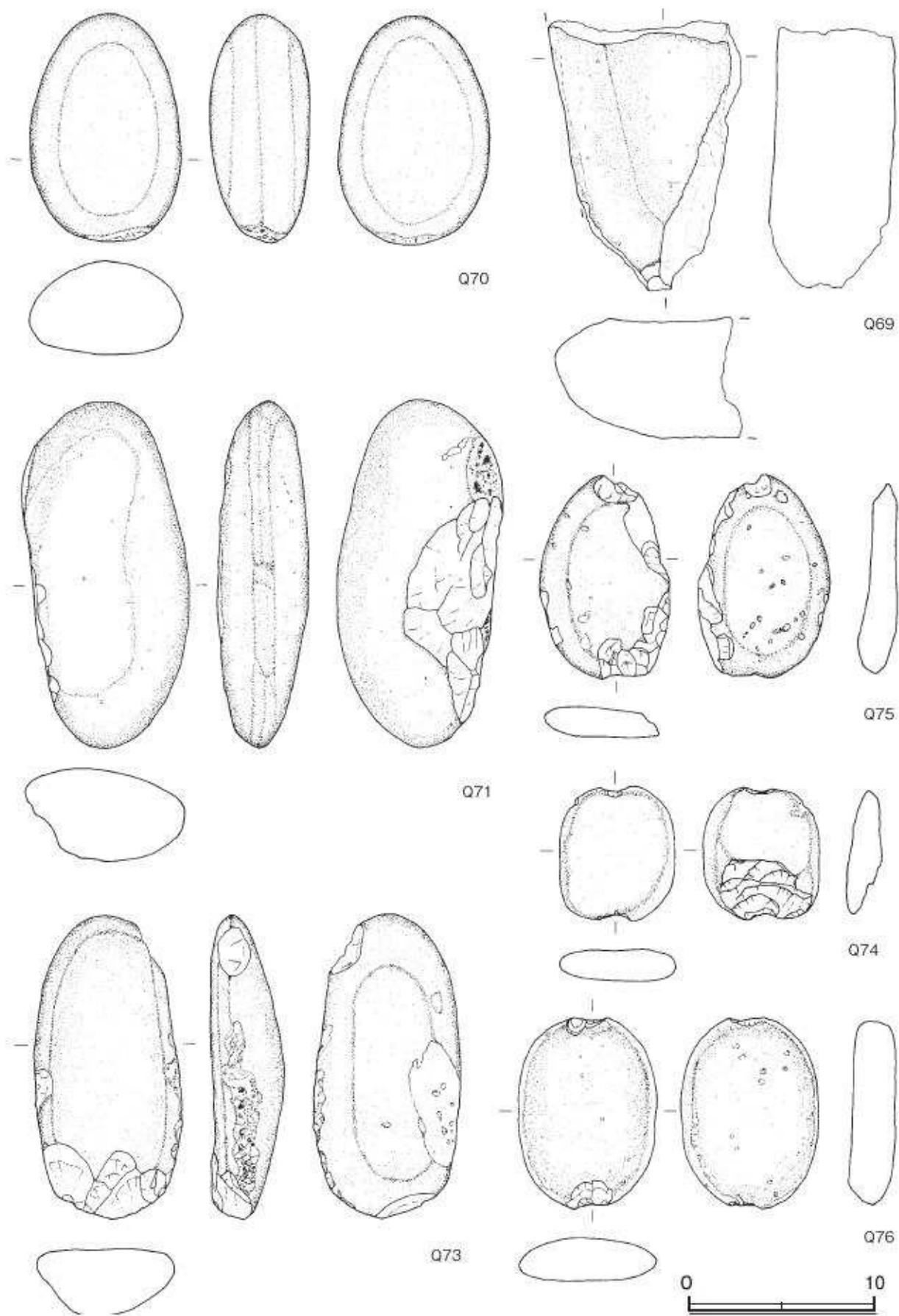
第53图 第52号土坑出土遗物实测图(2)



第 54 图 第 52 号土坑出土遗物实测图 (3)



第55图 第52号土坑出土遗物实测图(4)



第 56 图 第 52 号土坑出土遗物实测图 (5)

第 52 号土坑出土遺物観察表 (第 51 ~ 56 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
61	縄文土器	浅鉢	[27.0]	(82)	-	長石・石英	赤褐色	普通	外・内面磨き	覆土下層	10%
62	縄文土器	浅鉢	[37.6]	(106)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	外面磨き	覆土下層	20%
63	縄文土器	浅鉢	-	(29)	11.2	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	外面磨き 底部網代痕	覆土下層	10%
64	縄文土器	浅鉢	[33.0]	19.1	10.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部隆帯貼付 2条の有節沈線 外・内面磨き	覆土下層 - 底面	30%
65	縄文土器	深鉢	-	(102)	-	長石・石英・金雲母	暗赤褐色	普通	波状口縁残存 外面無文	覆土下層	10%
66	縄文土器	深鉢	-	(15.0)	-	長石・石英・雲母	褐色	普通	隆帯に沿う細い沈線と有節沈線	覆土下層	10%
67	縄文土器	深鉢	[37.7]	(11.0)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部隆帯に沿う2条の有節沈線 胴部無文	覆土中層	10%
68	縄文土器	深鉢	-	(6.8)	7.4	長石・石英	橙	普通	単節縄文 RL を縦位回転で施した後、沈線文	覆土下層	20%
69	縄文土器	深鉢	-	(9.2)	[12.2]	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	外面隆帯貼付け後、磨き	底面	10%
70	縄文土器	深鉢	-	[30.4]	11.6	長石・石英・雲母	暗赤褐色	普通	単節縄文 RL を施した後、沈線による区画文と山形文	底面	60%
71	縄文土器	深鉢	-	(5.6)	16.0	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	単節縄文を施した後、沈線文 外面ナデ	覆土下層	10%
72	縄文土器	深鉢	17.3	(19.9)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部隆帯上に磨き 胴部無文	覆土下層	70% PL26
73	縄文土器	深鉢	-	(19.5)	-	長石・石英・雲母	暗褐色	普通	単節縄文 LR を縦位回転で施文	覆土下層	40%
75	縄文土器	深鉢	24.3	36.1	[10.6]	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部突起状の把手4か所 単節縄文 RL 施文	覆土下層	80% PL26
275	縄文土器	深鉢	-	(4.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部無文 赤彩	覆土中層	10%
276	縄文土器	深鉢	-	(7.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	把手状の隆帯に2条の有節沈線を施文	底面	10%
277	縄文土器	深鉢	-	(6.3)	-	長石・石英・雲母	暗赤褐色	普通	隆帯貼付け後、有節沈線と沈線による山形文	底面	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP63	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	沈線によるコンパス文を施した後、ナデ 隆帯と沈線	底面	
TP64	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	単節縄文 LR を縦位回転で施した後、2条の沈線	覆土中層	
TP67	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	単節縄文 RL を施した後、沈線による2条の直線文や山形文を施文	底面	
TP68	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	暗赤褐色	波頂部に刻み 有節沈線と沈線による山形文	底面	
TP70	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐色	単節縄文 RL を縦位回転で施文	覆土下層	
TP71	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	外面無文 内面磨き	覆土下層	
TP72	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐色	口縁部隆帯貼付け後、単節縄文 LR を施文 以下単節縄文 LR を施文	覆土下層	
TP73	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐色	単節縄文 LR を横位・縦位で施した後、口縁部隆帯直下をナデ 沈線文	覆土下層	
TP74	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐色	赤彩文を施した後、隆帯貼付及び沈線文	底面	
TP75	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐色	横位の沈線を施した後、斜位の沈線文 口縁部に刻み目	覆土中層	
TP76	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐色	単節縄文 RL を施した後、2条の沈線文	覆土中	
TP78	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐色	口縁部単節縄文 RL を縦位回転で施文 以下単節縄文 RL を施した後、ナデ 3条の沈線文	覆土下層	
TP79	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	口縁部直下に2条の有節沈線 単節縄文 RL を縦位回転で施文	覆土下層	
TP156	縄文土器	深鉢	長石・石英	明褐色	口縁部突起状の把手	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP 8	土製円蓋	22	23	0.9	6.2	長石・石英	橙	周辺部研磨	覆土下層	PL41

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q67	石鏡	4.2	(3.0)	1.0	(7.26)	瑪瑙	両面押圧磨削 基部欠損	覆土中	
Q68	打製石斧	9.3	4.5	1.1	65.3	頁岩	両面調整 鋧縁部に連絡した割線調整	覆土下層	PL39
Q69	石皿	(14.6)	(10.4)	6.8	(17.0)	花崗岩	皿状の凹み残存	覆土下層	
Q70	磨石	12.4	8.3	5.1	766.3	砂岩	全面研磨痕 一部に痕状の敲打痕	覆土下層	PL39
Q71	磨石	18.7	9.0	5.0	1090.5	砂岩	全面研磨痕 一方の側縁部に痕状の敲打痕及び割線痕	覆土下層	
Q72	敲石	12.6	10.5	5.8	968.2	チャート	端部に痕状の敲打痕	底面	
Q73	敲石	16.5	8.0	3.7	704.1	凝灰岩	側縁部に痕状の敲打痕	覆土中層	
Q74	石鏃	7.2	6.3	1.9	101.5	ホルンフェルス	長径方向に挟り調整	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q75	石錘	11.0	7.1	2.1	200.3	花崗斑岩	長径方向に挟り調整	覆土下層	
Q76	石錘	10.4	7.5	2.4	304.4	安山岩	長径方向に挟り調整	覆土下層	

第53号土坑 (第57～59図)

位置 調査区北部のC6h7区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第55号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西半部が調査区域外へ延びているため、開口部は南北径1.52m、東西径は0.65mしか確認できなかったが、平面形は円形または楕円形と推定できる。長径方向はN-1°-Eで、深さは68cmである。底面は南北径が2.21mで、東西径は0.95m残存しており、円形または楕円形と推定でき、平坦である。壁は内傾して立ち上がり、くびれ部から直立している。底面からくびれ部までの高さは、45cmである。

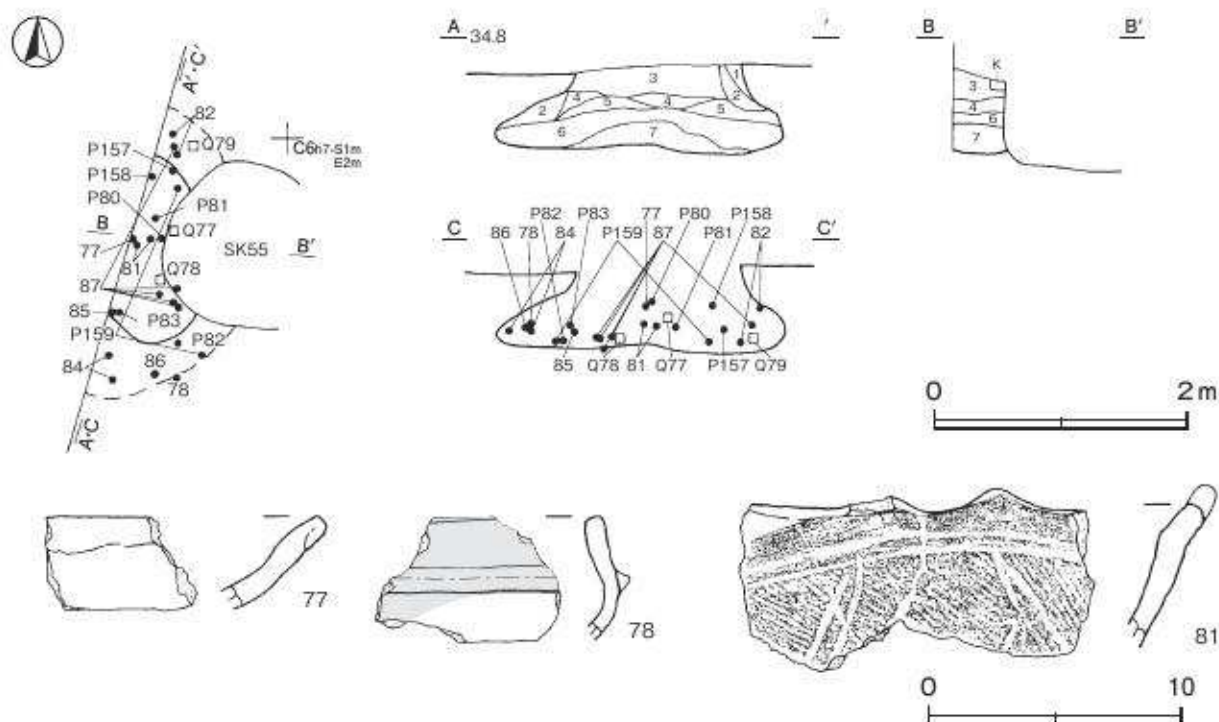
覆土 7層に分層できる。ブロック状の不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

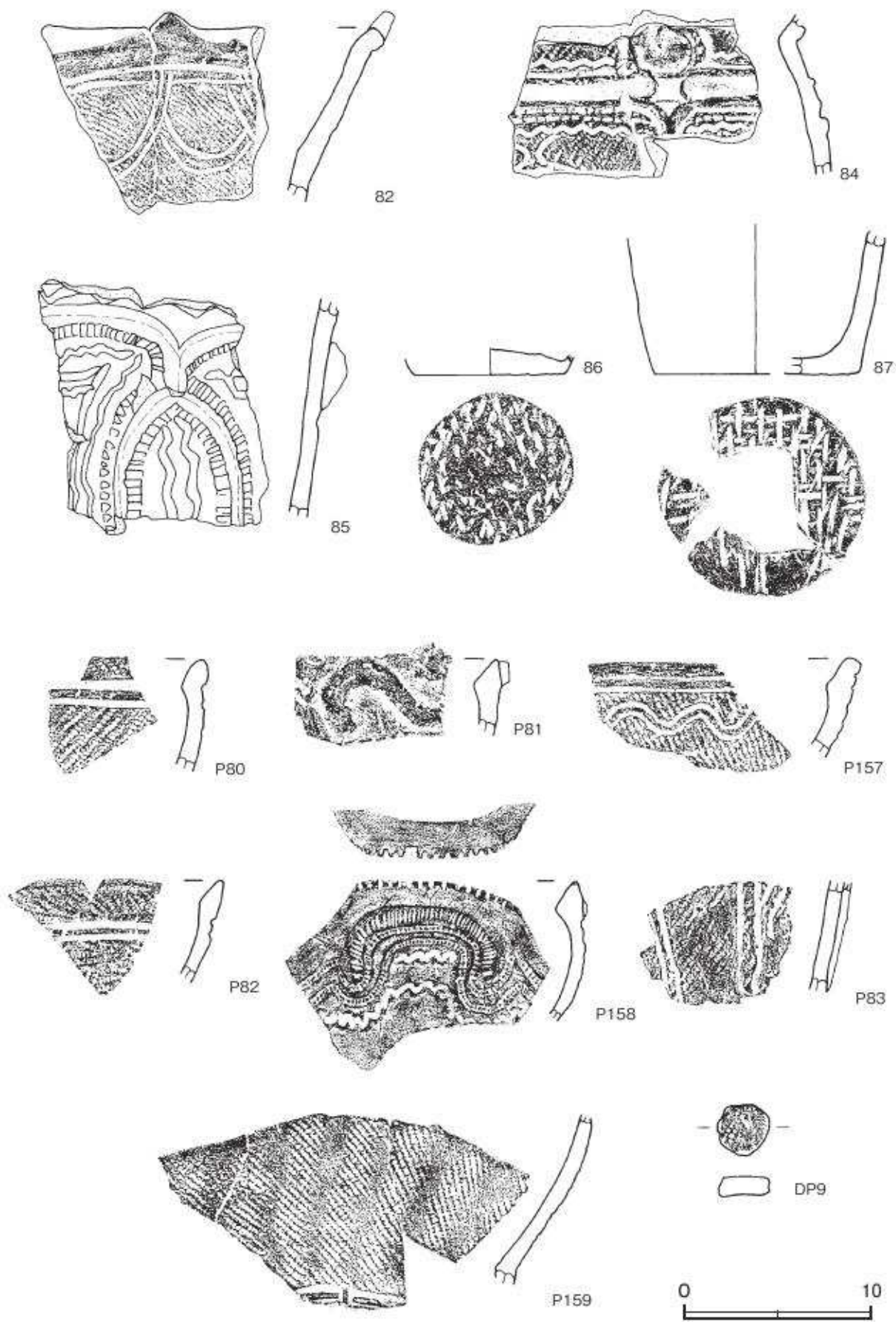
- | | | | |
|--------|-----------|-------|---------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック多量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量 | 7 褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 極暗褐色 | 焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片123点(深鉢121, 浅鉢2), 土製品1点(土器片円盤), 石器4点(石錘), 剥片1点, 破断面のある礫2点, 自然礫4点, 粘土塊1点が覆土中層から底面にかけて散在した状況で出土している。85は南部の覆土下層, 82は北部の覆土中層から下層にかけて出土している。TP159は北部と南部の覆土下層から出土した破片が, 87は南部の覆土下層と北部の覆土中層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。

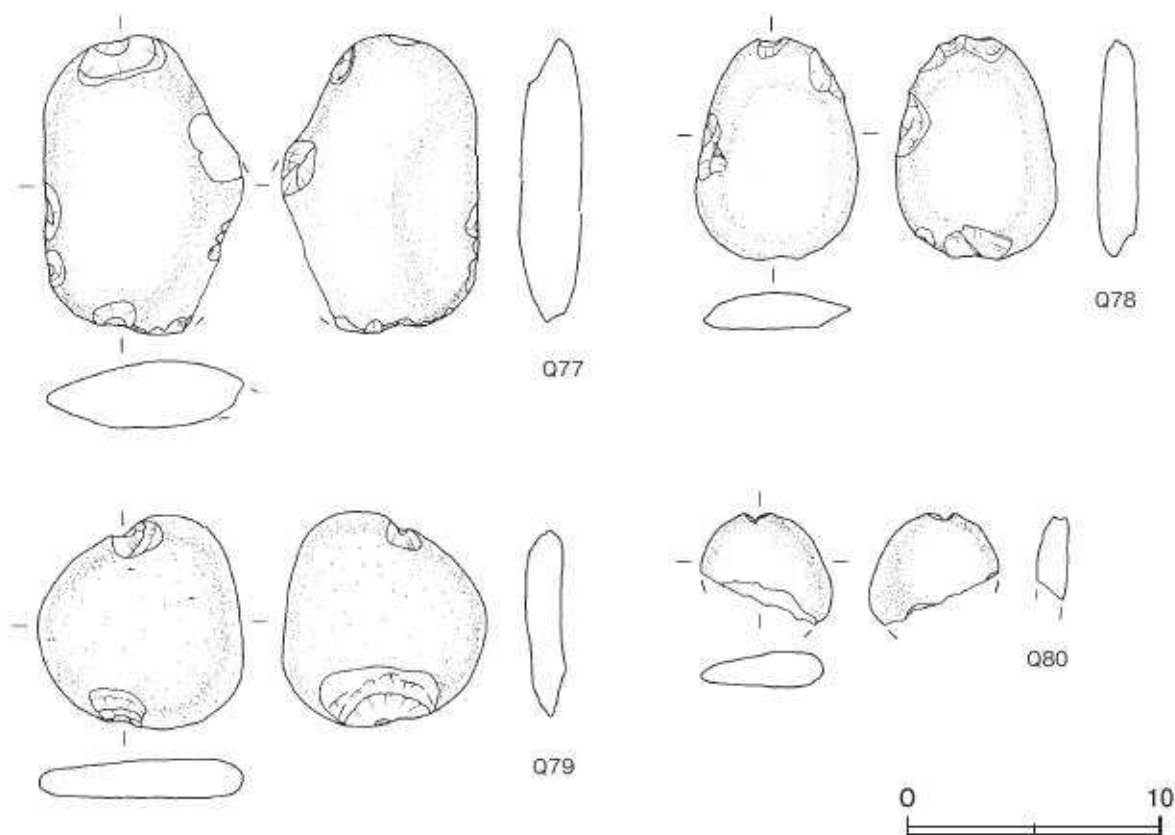
所見 形状から、袋状土坑である。時期は、出土土器から縄文時代中期中葉から中期後葉(阿玉台Ⅳ式期～加曾利EⅠ式期)と考えられる。



第57図 第53号土坑・出土遺物実測図



第 58 图 第 53 号土坑出土遗物实测图 (1)



第59図 第53号土坑出土遺物実測図(2)

第53号土坑出土遺物観察表(第57~59図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
77	縄文土器	浅鉢	-	(3.6)	-	長石・石英・雲母	明褐色	普通	外面無文	覆土中層	10%
78	縄文土器	浅鉢	-	(4.9)	-	長石・石英	赤褐色	普通	隆帯貼付 外・内面磨き	覆土下層	10%
81	縄文土器	深鉢	-	(7.2)	-	長石・石英	黒褐色	普通	柳糸文を施した後、2条一単位の沈線文	覆土下層	10%
82	縄文土器	深鉢	-	(10.8)	-	長石・石英・ 金雲母	にぶい赤褐色	普通	柳糸文施文、2条の平行沈線文	覆土中層 -下層	10%
84	縄文土器	深鉢	-	(8.9)	-	長石・石英	褐色	普通	単節縄文LR施文 隆帯貼付後、沈線と有節沈線	覆土下層	10%
85	縄文土器	深鉢	-	(13.6)	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	明赤褐色	普通	胴部隆帯貼付後、有節沈線・波状の沈線	覆土下層	30%
86	縄文土器	深鉢	-	(11.4)	8.2	長石・石英	灰褐色	普通	底部網代痕	覆土下層	10%
87	縄文土器	深鉢	-	(7.6)	[10.6]	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	明褐色	普通	胴部下端無文 底部網代痕	覆土下層	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP80	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐色	単節縄文RLを縦位回転で施した後、2条の沈線文	覆土中層	
TP81	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	暗褐色	隆帯貼付による横S字文の一部が残存	覆土下層	
TP82	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	単節縄文RLを施した後、2条の有節沈線文	覆土下層	
TP83	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	隆帯貼付と隆帯に沿う有節沈線を施した後、単節縄文LRを施文	覆土下層	
TP157	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐色	単節縄文LRを縦位回転で施文、2条の平行沈線	覆土下層	
TP158	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	波節部に初み、有節沈線と波状の沈線を施文	覆土中層	
TP159	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐色	単節縄文LRを縦位回転で施した後、縦方向にナデ	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP-9	土器片断	2.7	2.8	1.1	9.5	長石・石英	暗褐色	周辺部研磨	覆土中	PE41

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q77	石鉢	11.9	(7.9)	2.7	(334.2)	砂岩	長径方向に挟り調整 周縁部に挟り痕	覆土下層	
Q78	石鉢	8.9	6.5	1.5	128.5	ホルンフェルス	長径・短径方向に挟り調整	覆土下層	
Q79	石鉢	8.7	8.2	1.6	175.6	砂岩	長径方向からややずれた位置に挟り調整	覆土下層	
Q80	石鉢	(4.4)	5.2	1.5	(35.2)	礫岩	挟り調整が1か所残存	覆土中	

第55号土坑 (第60図)

位置 調査区北部のC6h7区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第53号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 開口部は長径1.30m、短径1.12mの楕円形で、長径方向はN-87°-Eである。深さは90cmである。底面は径0.90mの円形で、平坦である。壁は内彎して立ち上がり、くびれ部から直立している。底面からくびれ部までの高さは、68cmである。

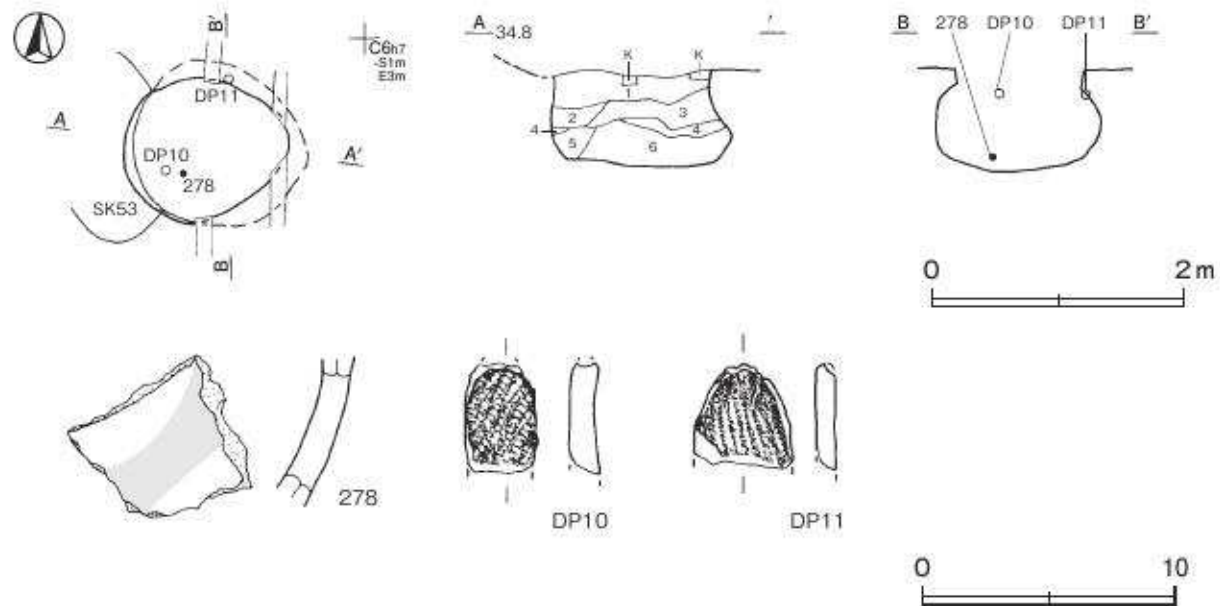
覆土 6層に分層できる。ブロック状の不規則な堆積状況から、埋め戻されている

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|--------|--------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 縄文土器片67点(深鉢)、土製品2点(土器片鉢)、石器2点(石皿、磨石)、剥片1点、破断面のある礫3点、自然礫2点が出土している。278は南部の覆土下層から出土している。DP10は南西部、DP11は北部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 形状から、袋状土坑である。時期は、出土土器と重複関係及び遺構の形状から縄文時代中期後葉(加曾利E I式期以降)と考えられる。



第60図 第55号土坑・出土遺物実測図

第 55 号土坑出土遺物観察表 (第 60 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
278	縄文土器	浅鉢	-	(6.4)	-	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	外面磨き 赤彩	覆土中層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP10	土器片鉢	(4.4)	2.9	1.2	(19.0)	長石・石英	橙	周辺部研磨 両端欠損	覆土上層	
DP11	土器片鉢	(4.2)	3.9	0.8	(15.2)	長石・石英	にぶい褐	周辺部研磨 刻み痕1か所残存 下端欠損	覆土上層	

第 56 号土坑 (第 61・62 図)

位置 調査区北部の C 6 c0 区、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 24 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 開口部は径 0.88m ほどの円形で、深さは 108cm である。底面は径 1.03m の円形で、平坦である。壁はやや内傾して立ち上がっている。

覆土 8 層に分層できる。ロームブロックや焼土が不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

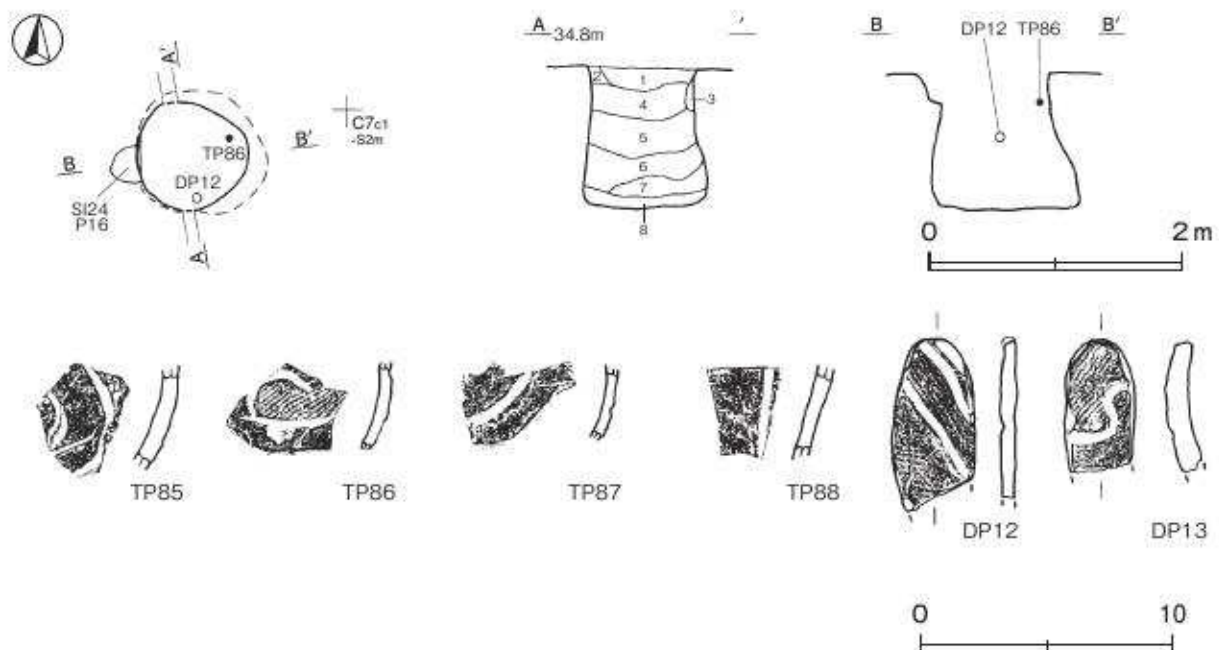
土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|--------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 6 極暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 7 極暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量 | 8 暗褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス粒子・粘土粒子少量 |

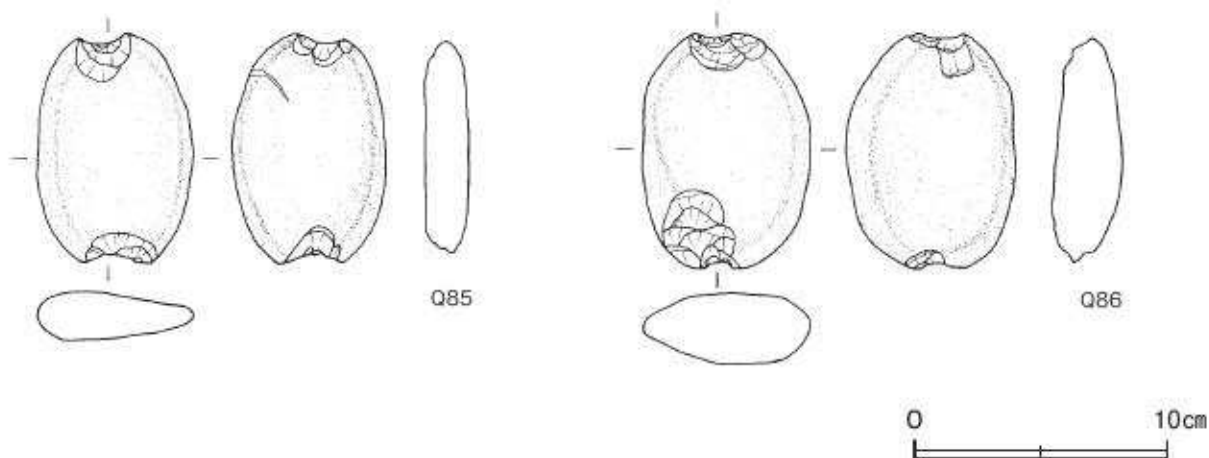
遺物出土状況 縄文土器片 159 点 (深鉢), 土製品 2 点 (土器片鉢), 石器 2 点 (石鉢), 剥片 1 点が出土している。

TP86 は東部の覆土上層から出土している。TP85・TP87・TP88 は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器と遺構の形状から縄文時代後期前葉 (称名寺 1 式期) と考えられる。



第 61 図 第 56 号土坑・出土遺物実測図



第 62 図 第 56 号土坑出土遺物実測図

第 56 号土坑出土遺物観察表 (第 61・62 図)

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴(ほか)	出土位置	備考
TP85	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	単節縄文を施文後、磨消及び沈線文	覆土中	
TP86	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐色	単節縄文 RL を縦位回転で施文後、磨消及び沈線文	覆土上層	
TP87	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐色	単節縄文を施文後、磨消及び沈線文	覆土中	
TP88	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	沈線を施文	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP12	土器片鉢	(6.9)	3.3	0.7	(18.7)	長石・石英	褐色	周辺部研磨 刻み痕不明 製作中に欠損した未製品。	覆土中層	PL41
DP13	土器片鉢	(5.3)	2.8	1.3	(18.0)	長石・石英	明黄褐色	周辺部研磨 刻み痕不明 製作中に欠損した未製品。	覆土中	PL41

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q85	石鉢	9.1	6.2	2.0	150.5	砂岩	長径方向に挟り調整	覆土中	
Q86	石鉢	9.3	6.5	2.8	245.7	泥岩	長径方向に挟り調整	覆土中	

第 57 号土坑 (第 63 図)

位置 調査区北部の C 6 b0 区、標高 34 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は長径 2.18m、短径 1.67m の楕円形で、長径方向は N-15°-E である。深さは 24cm である。

底面は長径 2.15m、短径 1.66m の楕円形で、平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

ピット 深さ 60cm で、北部に位置している。性格は不明である。

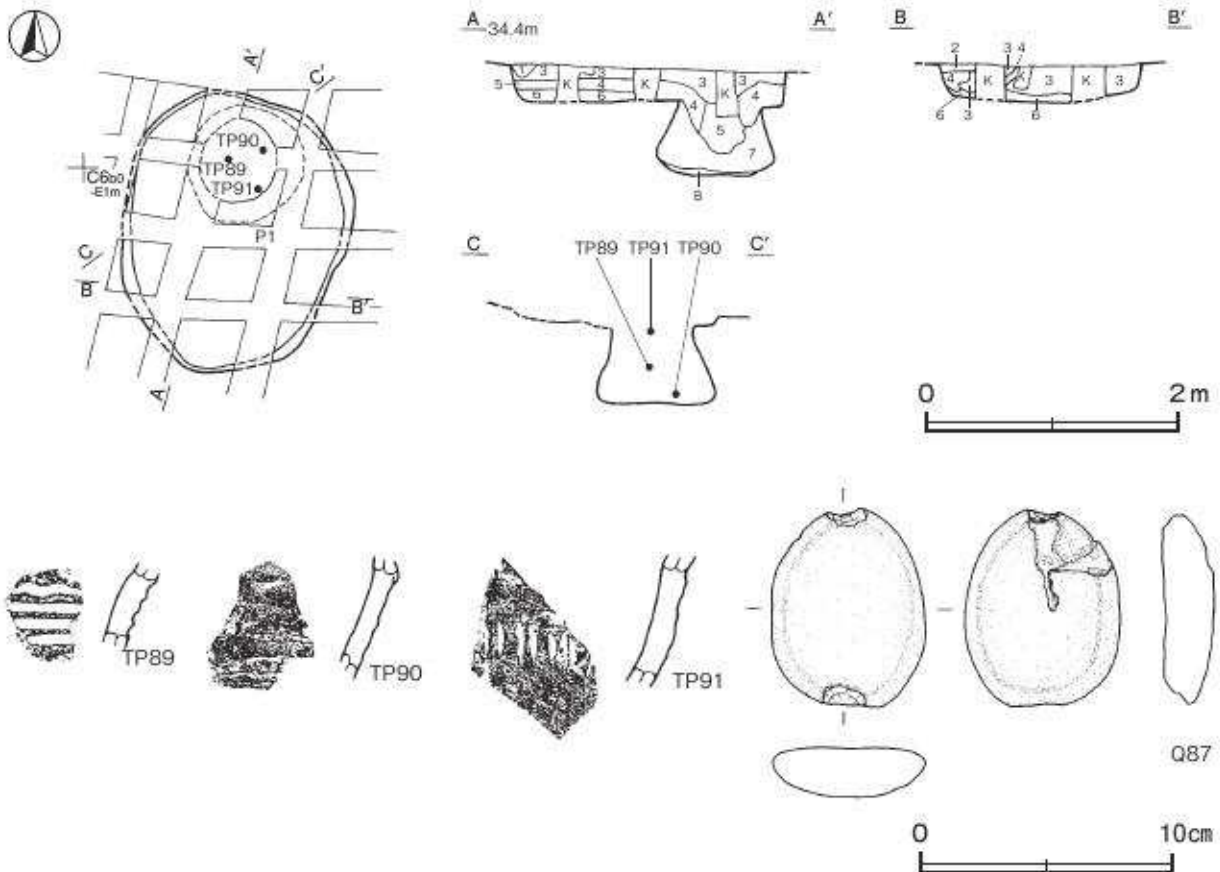
覆土 8 層に分層できる。ブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

1 褐色	ローム粒子中量	5 暗褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ローム粒子少量	6 褐色	ロームブロック中量
3 黒褐色	ロームブロック少量	7 暗褐色	炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子微量	8 暗褐色	炭化粒子中量

遺物出土状況 縄文土器片 53 点 (深鉢)。破断面のある際 1 点が出土している。TP90 は P 1 の底面、TP89 は P 1 の覆土中層、TP91 は P 1 の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 規模や形状、ピットの存在から袋状土坑の下位部分と推定できる。時期は、出土土器から縄文時代中期中葉から中期後葉（阿玉台Ⅳ式期～加曾利EⅠ式期）と考えられる。



第 63 図 第 57 号土坑・出土遺物実測図

第 57 号土坑出土遺物観察表（第 63 図）

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP89	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐色	横位の沈線文	P1 覆土中層	
TP90	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐色	隆帯附付、以下無文	P1 底面	
TP91	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐色	横位の爪形文	P1 覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q87	石鏝	7.9	6.1	2.1	160.9	ホルンフェルス	長径方向に挟り調整	覆土中	

第 59 号土坑（第 64 図）

位置 調査区北部の B 7 g3 区、標高 34 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 攪乱を受けているため、開口部の短径は 1.57m で、長径は 2.04m ほどと推定できる。平面形は楕円形と推定でき、長径方向は N-25°-E で、深さは 62cm である。底面は長径 2.39m、短径 1.95m の楕円形で、平坦である。壁は内彎して立ち上がっている。

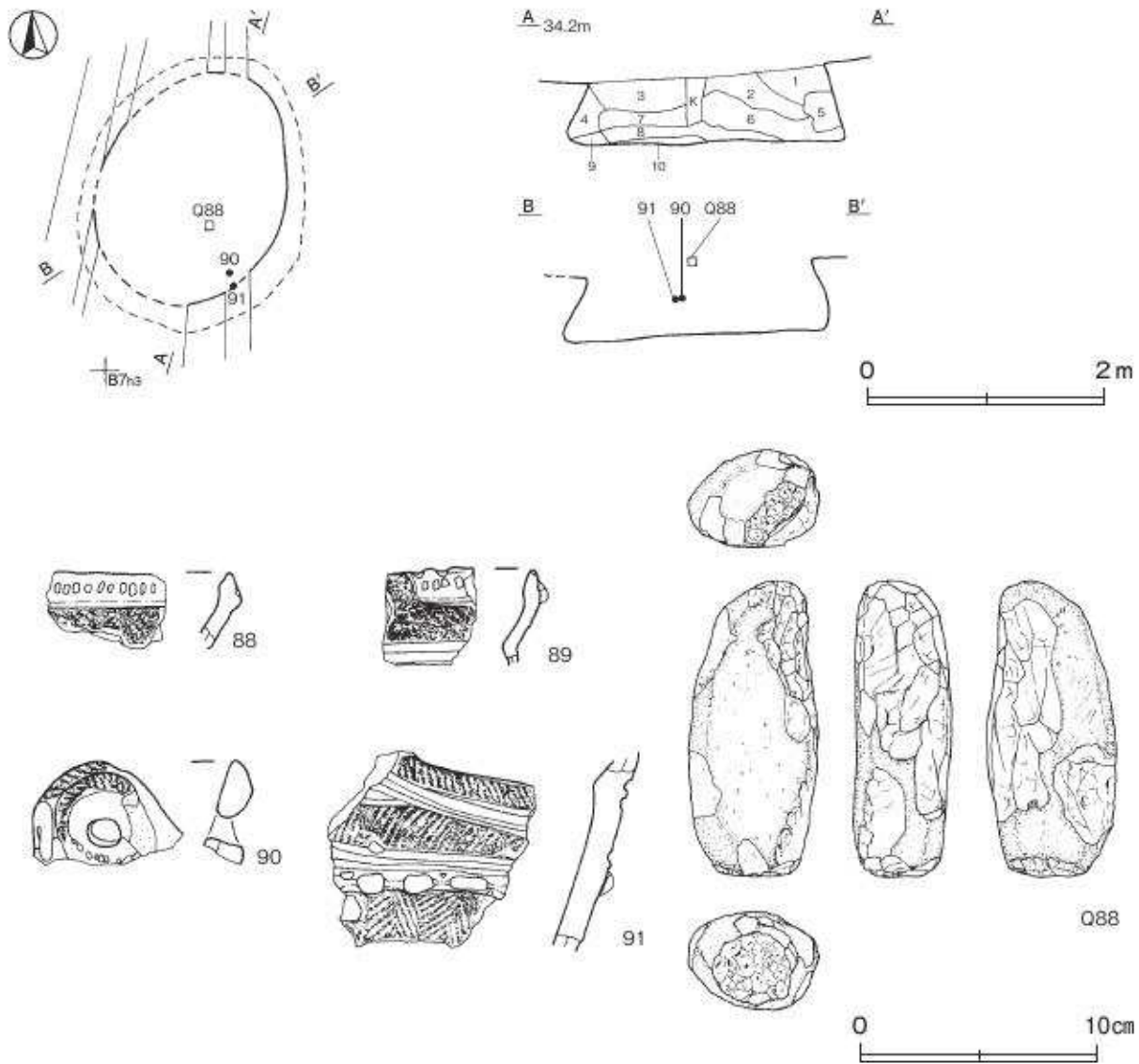
覆土 10 層に分層できる。ブロック状の不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------|--------|-----------------|
| 1 暗褐色 | 炭化粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子・鹿沼バミス粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 7 暗褐色 | 鹿沼バミス粒子多量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 4 極暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量 | 9 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 10 暗褐色 | 炭化粒子少量 |

遺物出土状況 縄文土器片 45 点（深鉢）、石器 1 点（敲石）、自然礫 3 点が出土している。90・91 は、南東壁際の覆土中層から、Q88 は南東部の覆土上層から出土している。

所見 形状から、袋状土坑の下部部分と推定できる。時期は、出土土器から縄文時代中期後葉（加曾利 E I 式期）と考えられる。



第 64 図 第 59 号土坑・出土遺物実測図

第 59 号土坑出土遺物観察表（第 64 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
88	縄文土器	深鉢	—	(3.3)	—	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部に角押文 単節縄文LRを縦位回転で施文	覆土中	10%
89	縄文土器	深鉢	—	(4.0)	—	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部に角押文と棒状工具による押圧	覆土中	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
90	縄文土器	深鉢	-	(4.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	隆帯上に単節縄文施文	覆土中層	10%
91	縄文土器	深鉢	-	(8.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	縄単節文LR・RLを縦位回転で羽状に施文。隆帯に押圧	覆土中層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q88	敲石	125	5.6	4.0	416.0	凝灰岩	端部に痕痕状の敲打痕。榑縁部に打欠調整	覆土上層	PL38

第64号土坑 (第65図)

位置 調査区北部のC6c0区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第49・65号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 開口部は長径1.70m、短径1.48mの楕円形で、長径方向はN-63°-Eである。深さは42cmである。底面は長径1.59m、短径1.24mの楕円形で、平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

ピット 2か所。P1・P2は深さ17cm・39cmで、北部に位置している。性格は不明である。

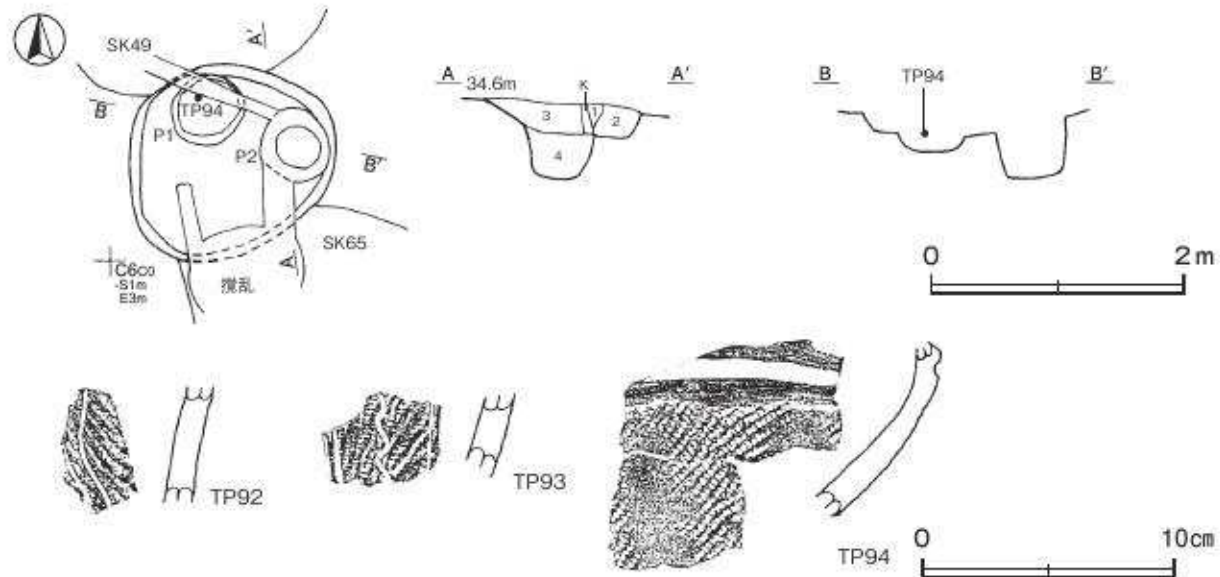
覆土 4層に分層できる。ブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。第4層はP2の覆土である。

土層解説

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1 にごり噴褐色 ローム粒子中量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 褐色 ローム粒子中量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量 |

遺物出土状況 縄文土器片43点(深鉢)、破断面のある礫6点、自然礫3点が出土している。TP94は北部の覆土下層から出土している。TP92・TP93は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器や重複関係から、縄文時代中期後葉(加曾利EⅠ～EⅡ式期)と考えられる。



第65図 第64号土坑・出土遺物実測図

第64号土坑出土遺物観察表 (第65図)

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP92	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	単節縄文RLを施文後、沈線文	覆土中	
TP93	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	単節縄文RLを縦位回転で施文後、沈線文	覆土中	
TP94	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	単節縄文LRを縦位回転で施文後、隆帯貼付及び沈線文	覆土下層	

第 65 号土坑 (第 66・67 図)

位置 調査区北部の C7c1 区、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 64 号土坑に掘り込まれている。

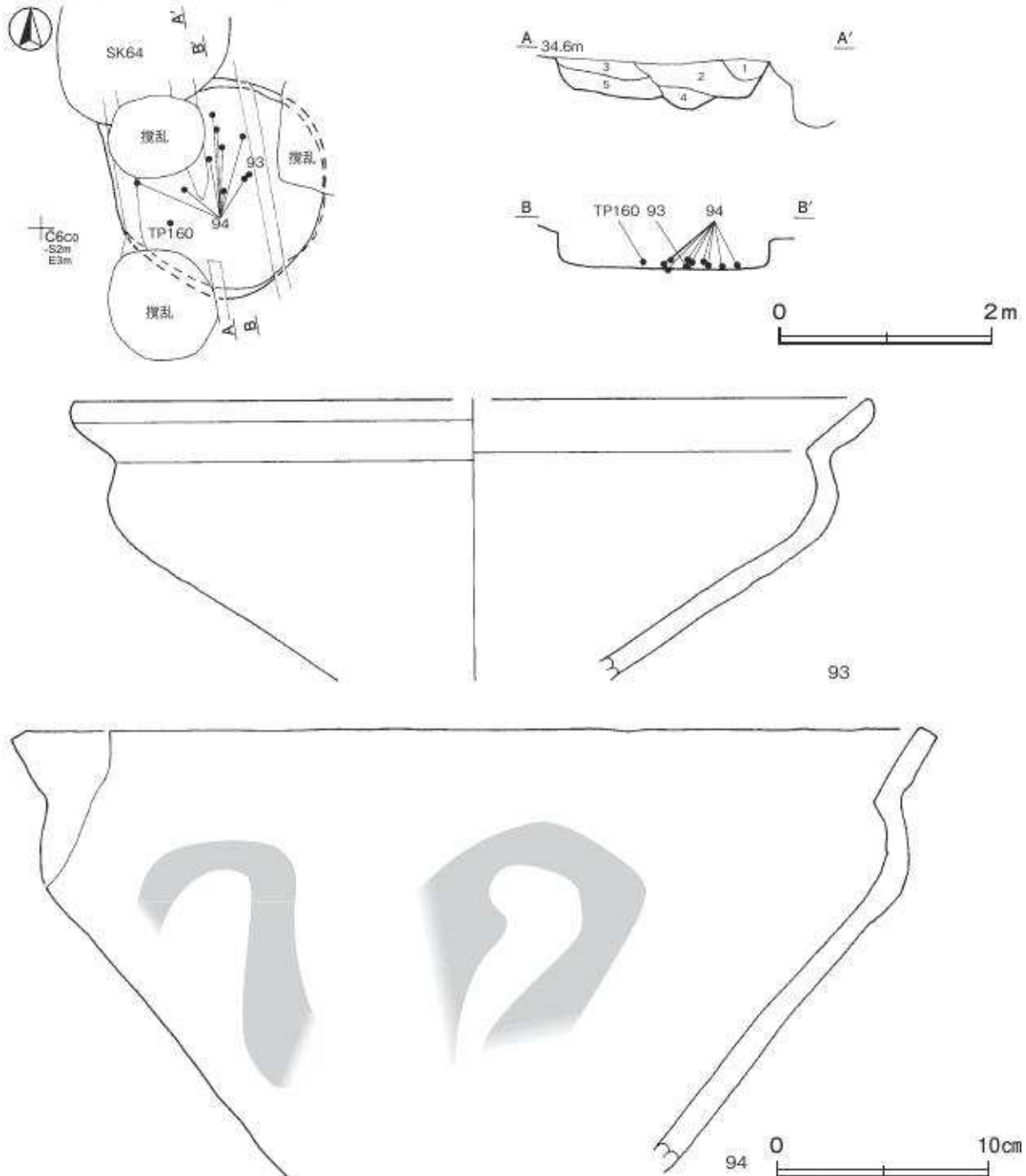
規模と形状 開口部は径 2.07m ほどの円形で、深さは 40cm である。底面は径 1.91m の円形で、平坦である。

壁は南東部がやや内傾し、他は外傾して立ち上がっている。

覆土 5層に分層できる。ブロック状の不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

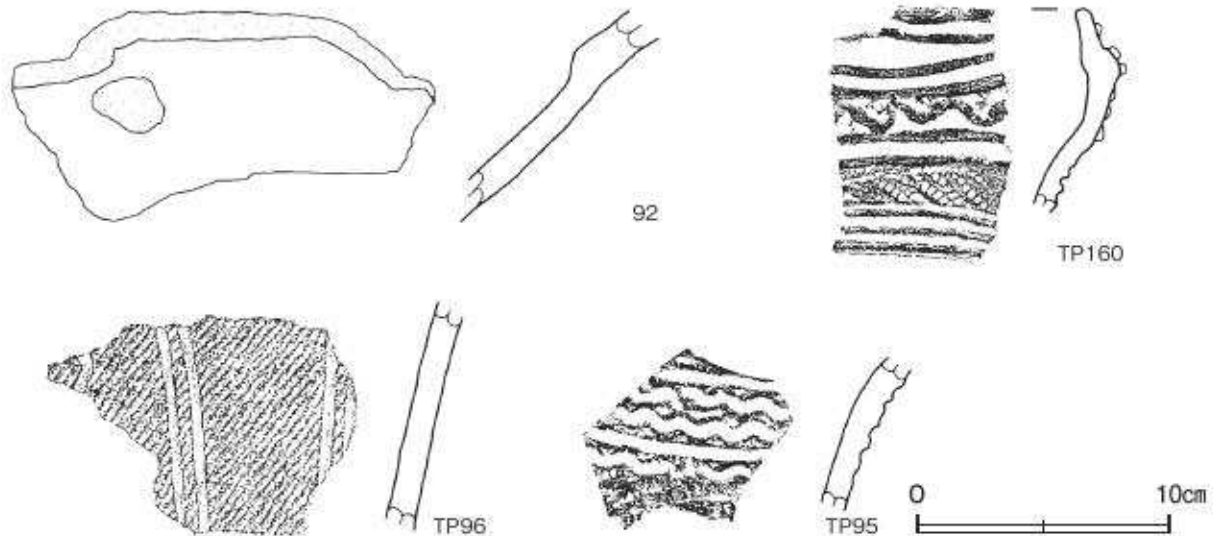
- | | | | |
|-------|--------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量 | 5 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量 | | |



第 66 図 第 65 号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 縄文土器片 134 点(深鉢 131, 浅鉢 3), 破断面のある礫 9 点, 自然礫 8 点が出土している。94 は, 中央部から北部の覆土下層から底面にかけて出土した破片が接合したものである。93 は中央部, TP160 は南西部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は出土土器や重複関係から, 縄文時代中期中葉から中期後葉(阿玉台Ⅳ式期~加曾利ⅤⅠ式期)と考えられる。



第 67 図 第 65 号土坑出土遺物実測図

第 65 号土坑出土遺物観察表(第 66・67 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
92	縄文土器	浅鉢	-	(8.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	外・内面磨き 無文	覆土中	10%
93	縄文土器	浅鉢	[37.8]	(13.3)	-	長石・石英	明赤褐色	普通	外・内面磨き	覆土下層	20%
94	縄文土器	浅鉢	[42.6]	(21.0)	-	長石・石英	橙	普通	外・内面磨き 外面赤彩による曲線文	覆土下層 -底面	50%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP96	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	単節縄文を施文後, 沈線による直線文や山形文	覆土中	
TP96	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐色	単節縄文 RL を縦位回転で施文後, 2 条の沈線文	覆土中	
TP160	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐色	口縁部単節縄文 LR を施文後, 雜種帯を山形に貼付 縄文 RL を施文後, 半級竹管による沈線	覆土下層	

第 66 号土坑 (第 68 ~ 76 図)

位置 調査区北部の B 7j2 区, 標高 34 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 耕作による攪乱を受けているが, 開口部は長径 1.29m で, 短径は形状から 1.10m ほどである。平面形は楕円形と推定でき, 深さは 113cm である。底面は径 2.56m の円形で, 平坦である。壁は底面から内傾してたちあがり, くびれ部から直立している。底面からくびれ部までの高さは, 75cm である。

覆土 17 層に分層できる。ブロック状の堆積状況から, 埋め戻されている。第 10 層は, 厚さ 20cm ほどの焼土層である。

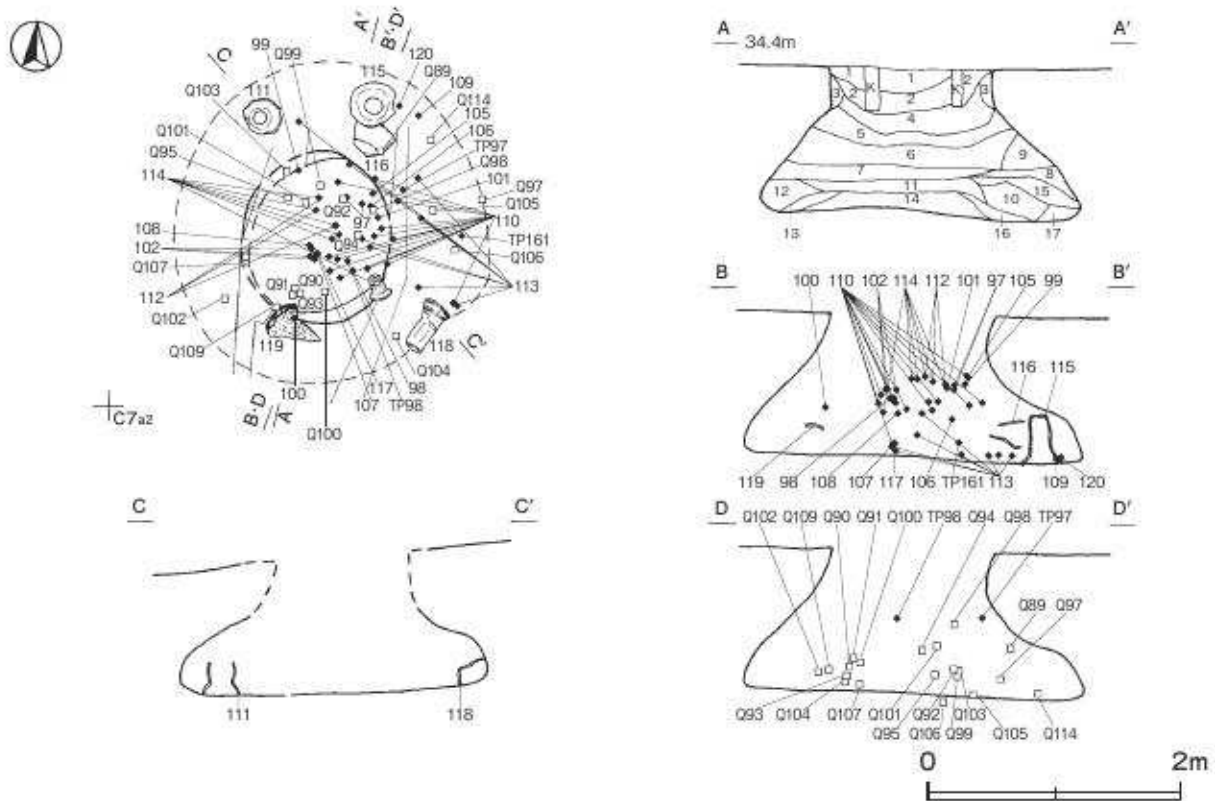
土層解説

- | | | | | | |
|-------|---|-----------|--------|---|------------------------|
| 1 黒褐色 | 色 | ローム粒子少量 | 4 極暗褐色 | 色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | 色 | ロームブロック少量 | 5 黒色 | 色 | 焼土粒子少量・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | 色 | ロームブロック中量 | 6 黒色 | 色 | 焼土ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量 |

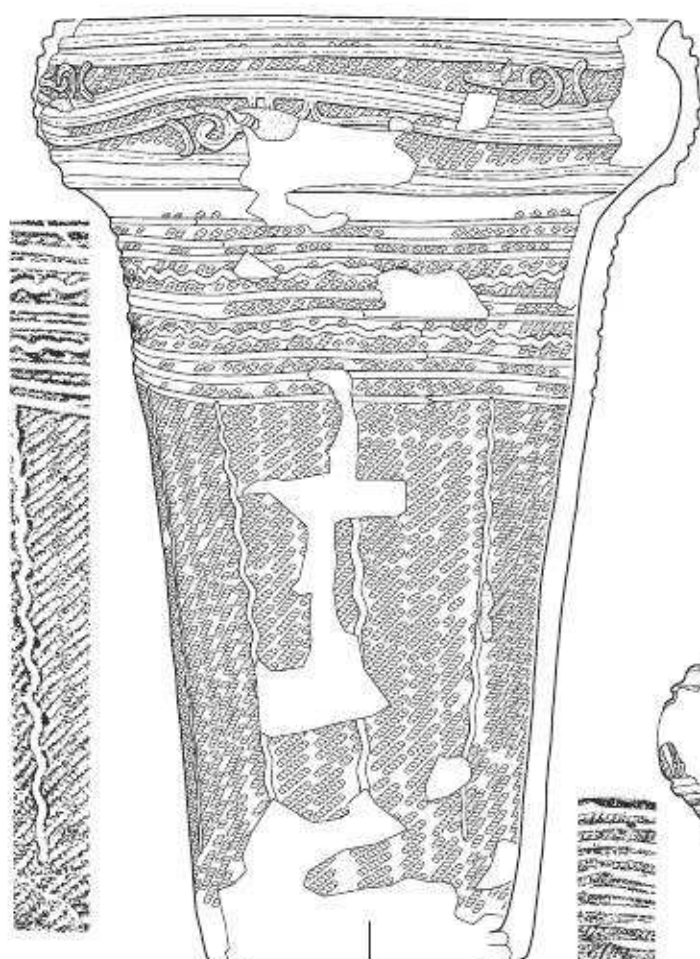
7 極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	13 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
8 褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・鹿沼パミス粒子少量、炭化粒子微量	14 褐色	ローム粒子多量、鹿沼パミス粒子中量
9 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・鹿沼パミス粒子微量	15 褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・鹿沼パミス粒子少量
10 赤褐色	焼土ブロック多量、骨粉少量	16 極暗褐色	焼土粒子中量、鹿沼パミス粒子少量、ロームブロック・炭化物微量
11 極暗褐色	焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子・鹿沼パミス粒子少量	17 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子・鹿沼パミス粒子微量
12 褐色	ローム粒子多量、鹿沼パミス粒子微量		

遺物出土状況 縄文土器片 589 点（深鉢 586、浅鉢 3）、土製品 2 点（土器片円盤、土器片錘）、石器 22 点（石鏃 1、打製石斧 1、磨製石斧 1、磨石 4、敲石 1、石錘 12、軽石製品 1、凹石 1）、剥片 1 点、破断面のある礫 55 点、自然礫 46 点が中央部・北部・東部の覆土中層から底面にかけて出土している。111 は北部の底面から逆位で出土している。115・120 は北東部の底面から逆位で、109 は底部が東方向の横位で、3 個体がまとめて出土している。118 は南東部の底面から口縁部が北東方向の横位で出土している。116 は 115 の南側の覆土下層から出土しており、117 は中央部の覆土下層から横位で、潰れた状態で出土している。113 は北東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。114 はくびれ部付近の覆土中層から口縁部が南東方向の斜位で出土している。119 も 114 と同様の出土状況で、南部の覆土中層から口縁部が北西方向の斜位で出土している。なお、石器のほとんどは覆土下層から出土している。

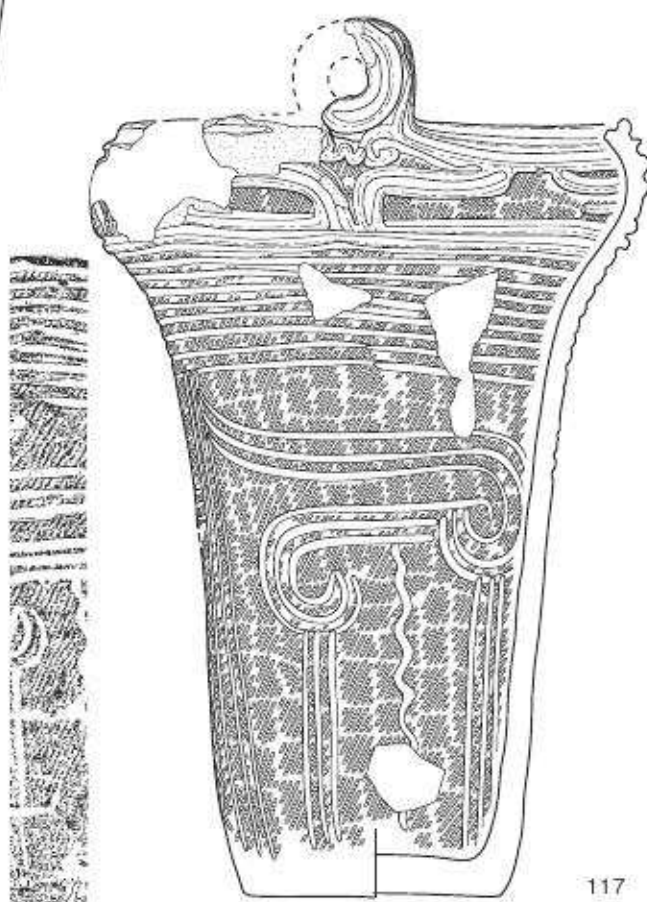
所見 形状から、袋状土坑である。時期は、出土土器から縄文時代中期後葉（加曾利 E 1 式期）と考えられる。109・111・115・120 は土坑の廃絶の際に遺棄されたもので、土器の破片や石器類が土砂とともに埋め戻された状況が看取できる。117 が横位で潰れているのは、埋め戻された際の土圧によるものと考えられ、その後 114 や 119 または破片となった 110 を廃棄し、埋め戻していったと捉えられる。覆土の第 10 層に含まれた骨粉は 5 mm 以下の微細なもので、種別等の判別は出来なかった。



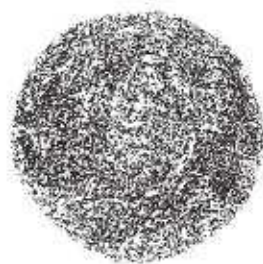
第 68 図 第 66 号土坑実測図



118

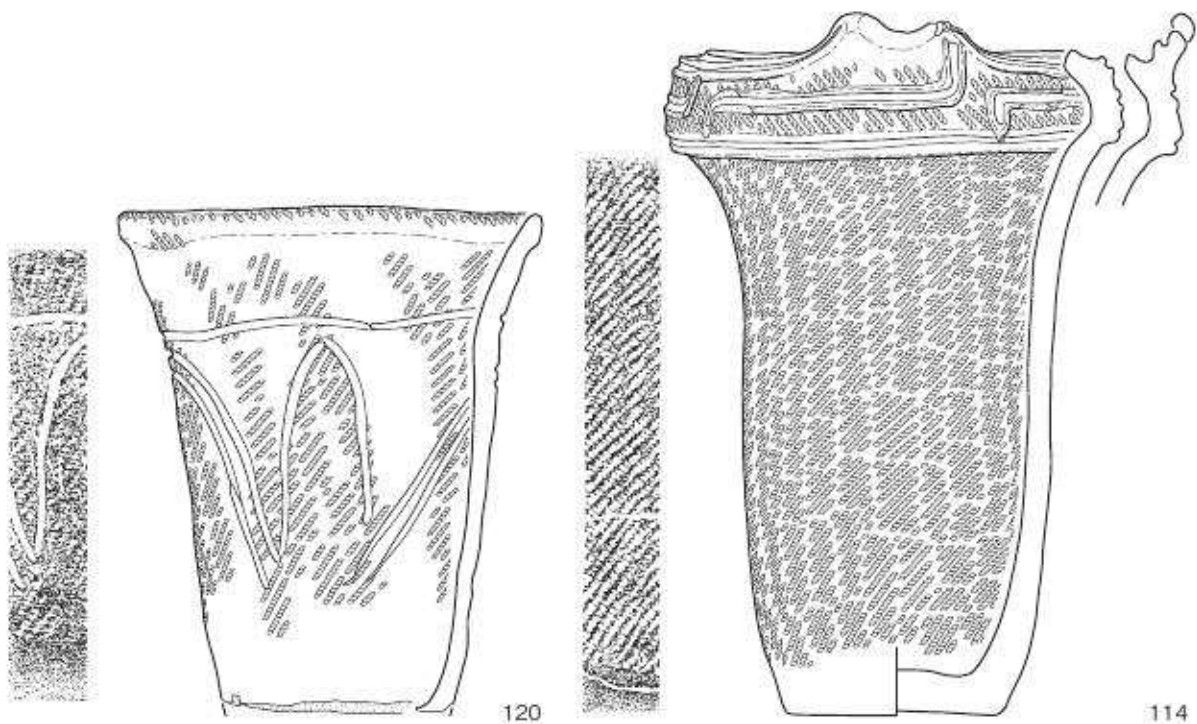


117



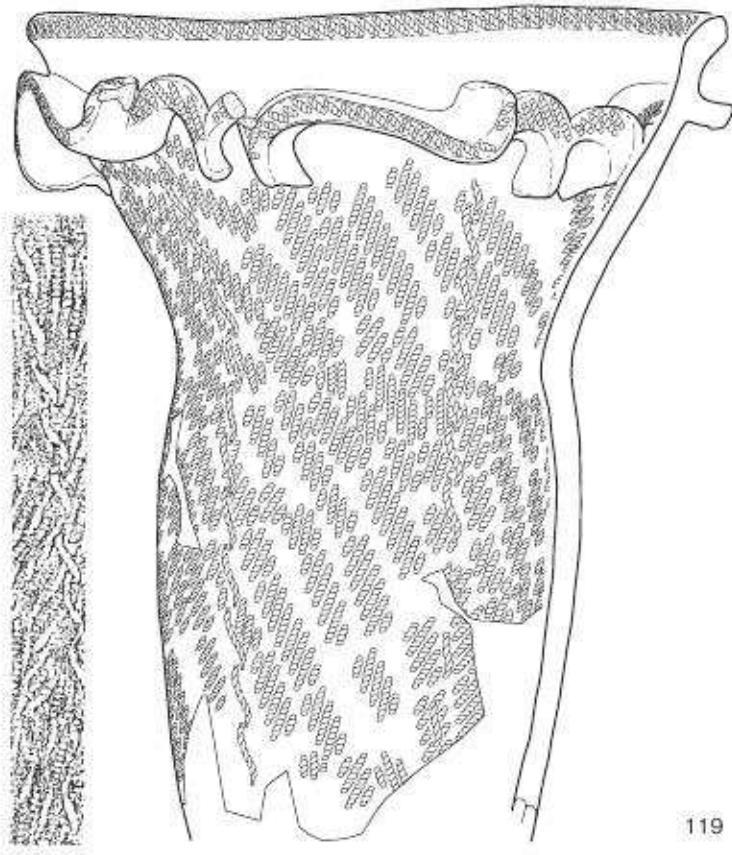
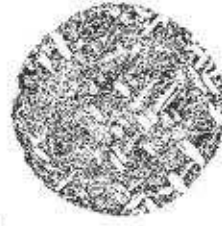
0 10cm

第 69 图 第 66 号土坑出土遗物实测图 (1)



120

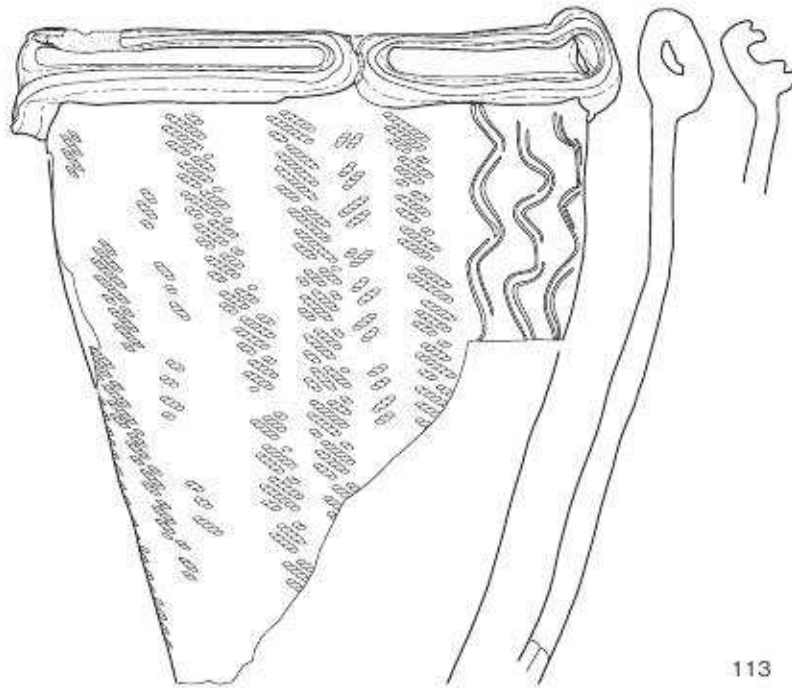
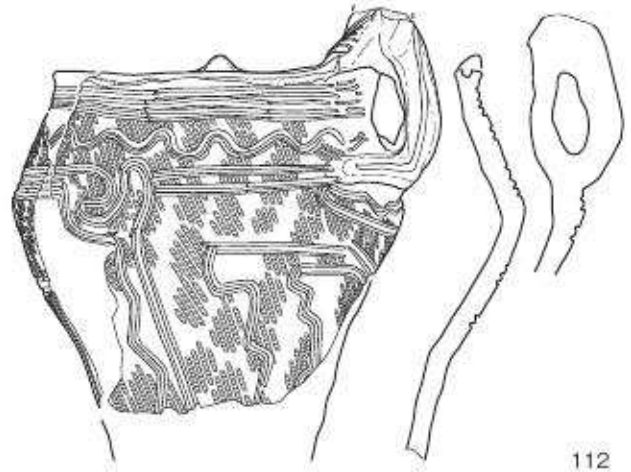
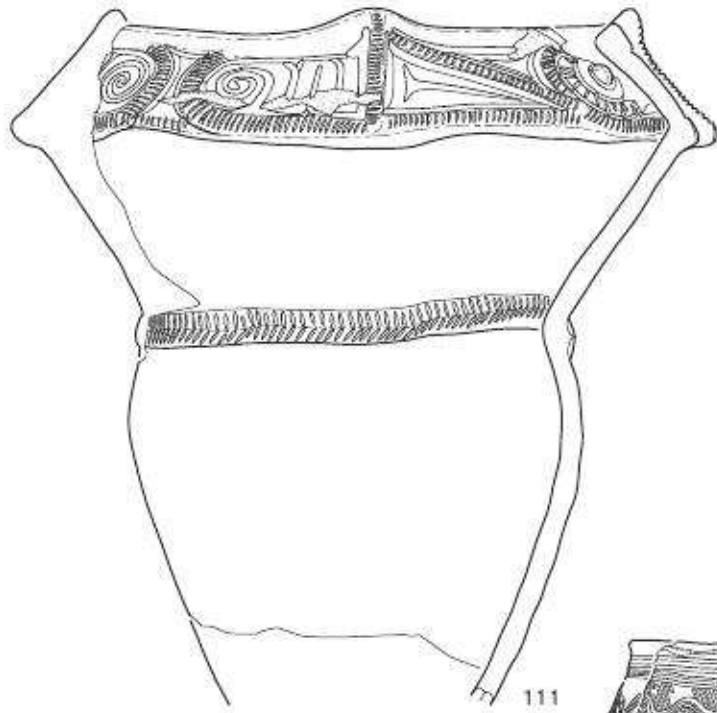
114



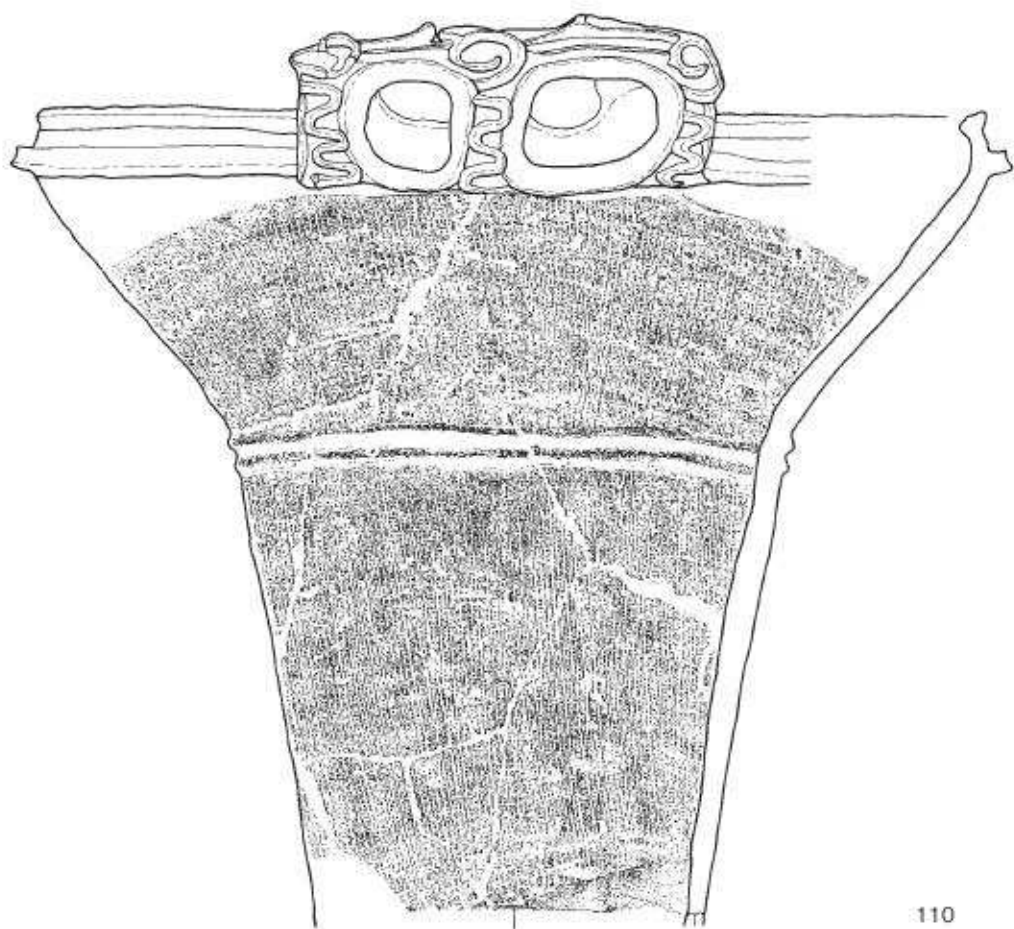
119



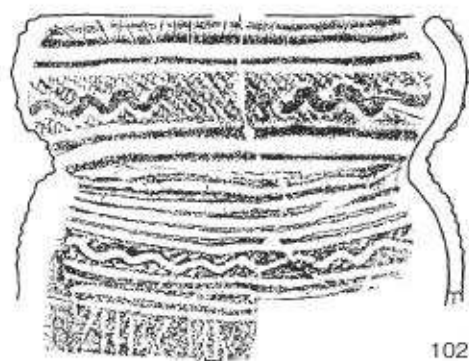
第70图 第66号土坑出土遗物实测图(2)



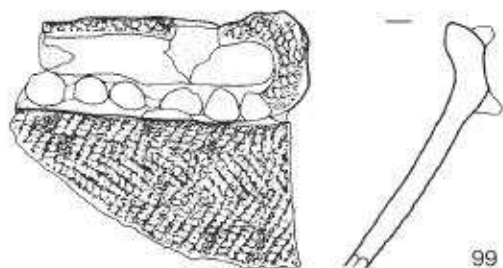
第 71 图 第 66 号土坑出土遗物实测图 (3)



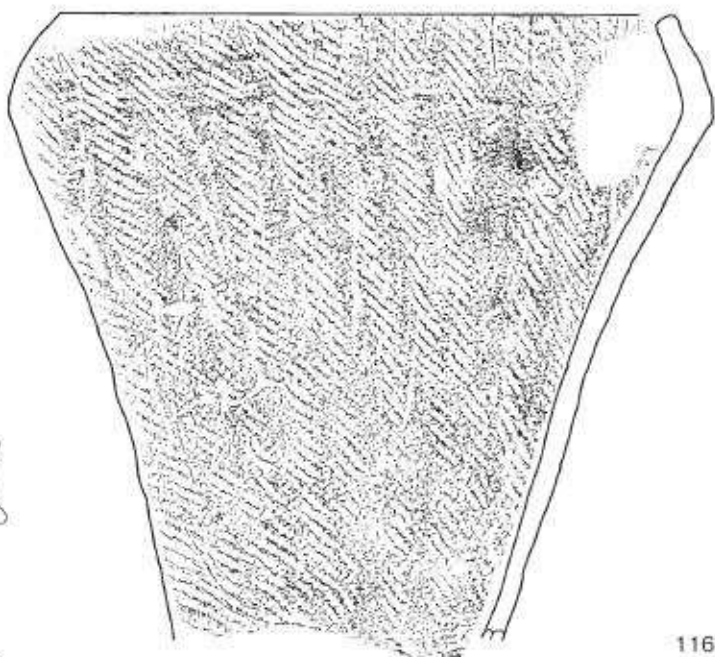
110



102



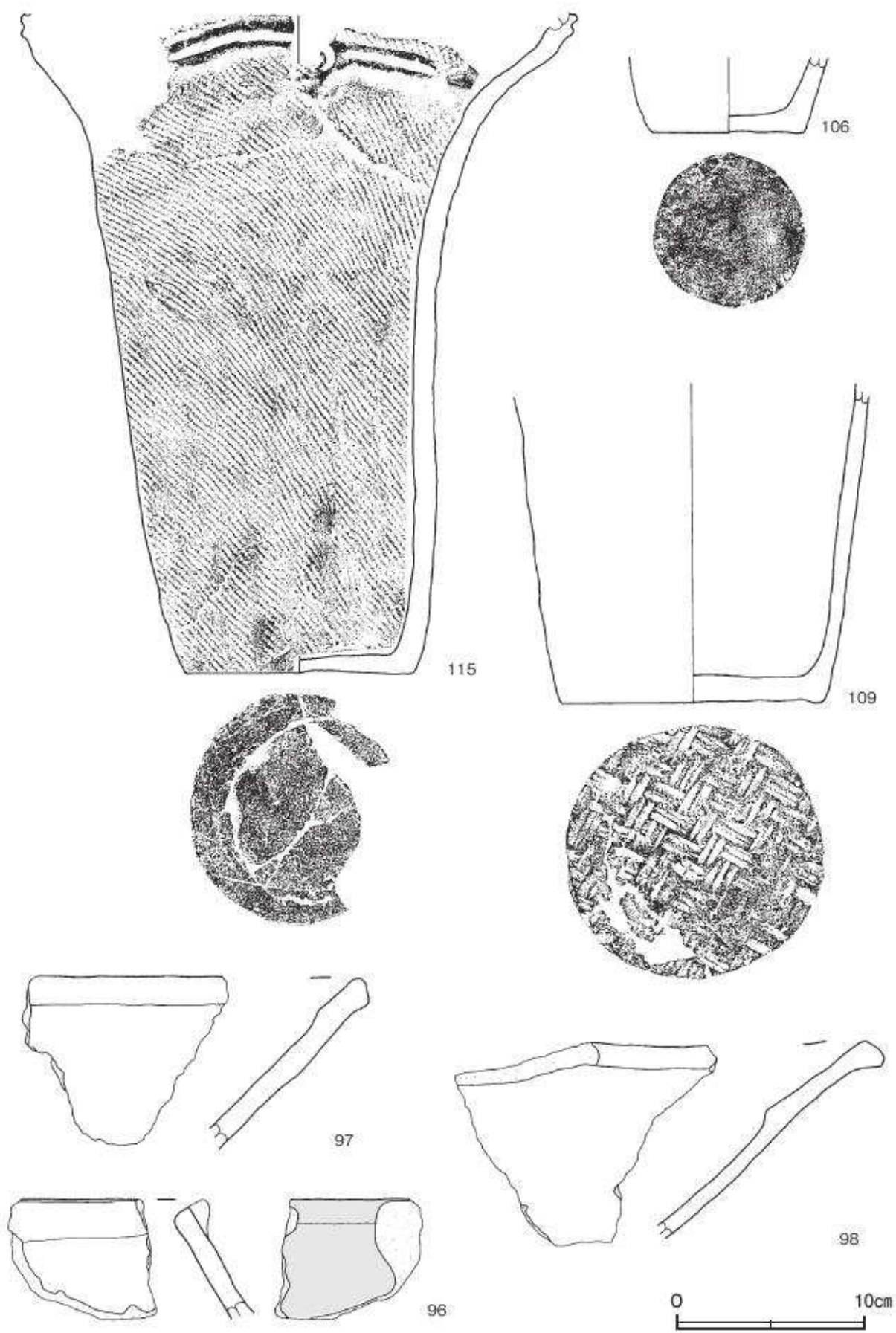
99



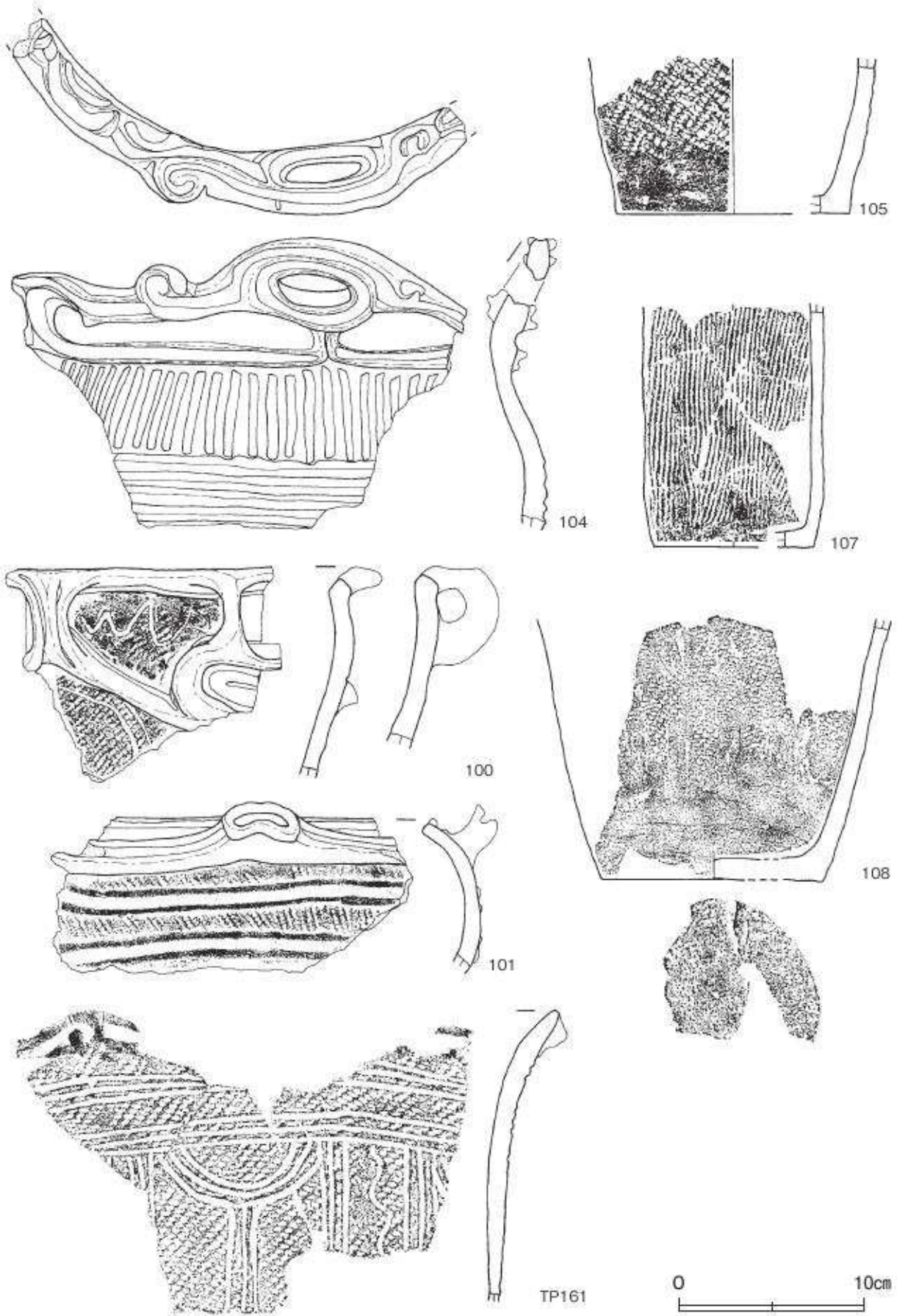
116



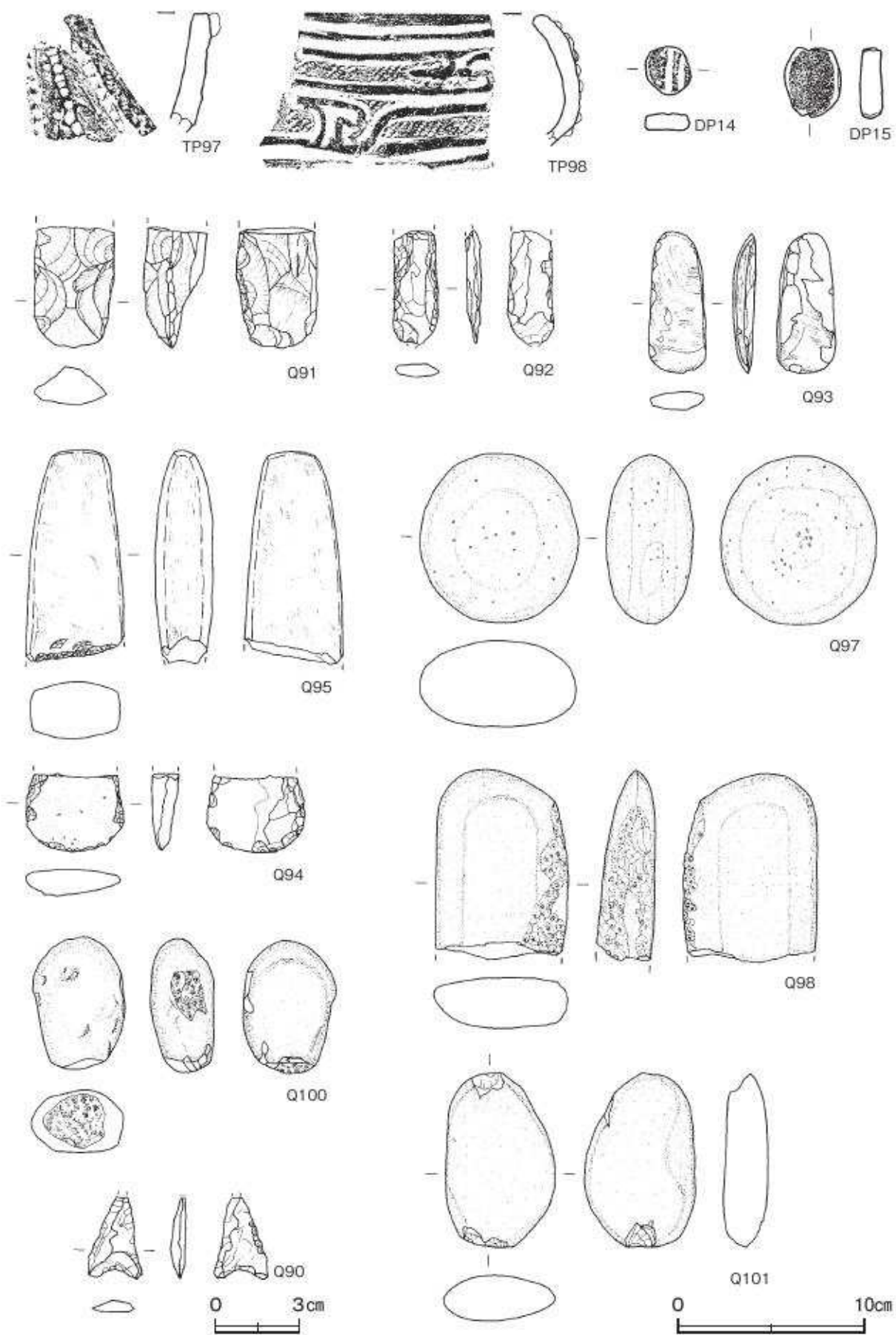
第72图 第66号土坑出土遗物实测图(4)



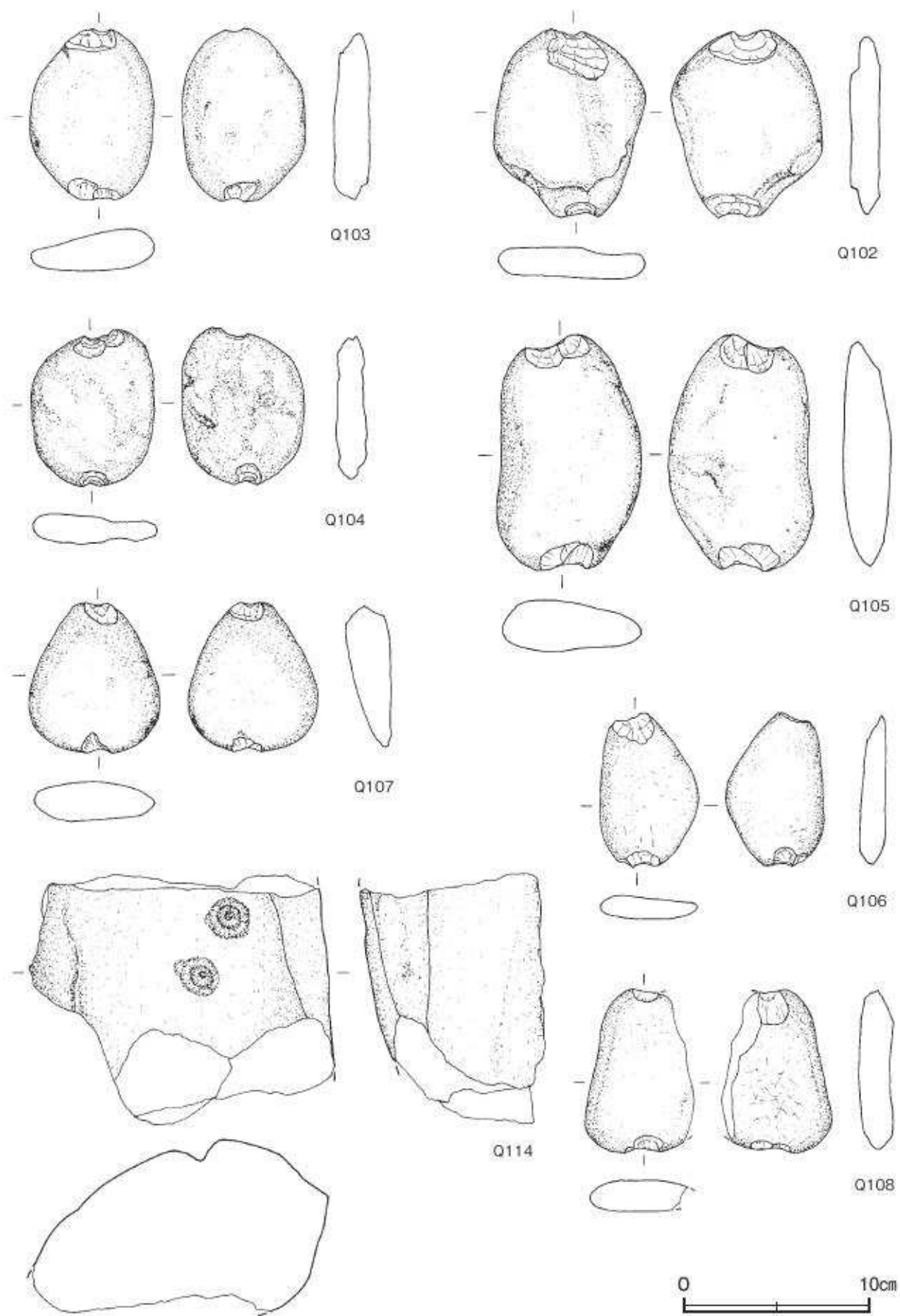
第 73 图 第 66 号土坑出土遗物实测图 (5)



第74图 第66号土坑出土遗物实测图(6)



第75图 第66号土坑出土遗物实测图(7)



第76图 第66号土坑出土遗物实测图(8)

第 66 号土坑出土遺物観察表 (第 69 ~ 76 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
96	縄文土器	浅鉢	-	(6.4)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	外・内面磨き 内面赤彩	覆土中	10%
97	縄文土器	浅鉢	-	(9.0)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	外・内面磨き	覆土中層	10%
98	縄文土器	浅鉢	-	(10.9)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	外・内面磨き 波状口縁一部残存	覆土中層	10%
99	縄文土器	深鉢	-	(10.2)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部・隆帯に縄文 RL 施文 単節縄文 RL を縦位回転で羽状に施文	覆土中層	10%
100	縄文土器	深鉢	-	(11.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	中空把手を作成 単節縄文 LR を施文後 隆帯貼付 隆帯に沿う沈線と山形沈線文	覆土中層	10%
101	縄文土器	深鉢	-	(9.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	大隆帯を把手状に貼付 単節縄文 LR を縦位回転で施文後 隆帯貼付及び沈線	覆土中層	10%
102	縄文土器	深鉢	[15.8]	(11.6)	-	長石・石英	黒褐	普通	単節縄文 RL を施文後 隆帯貼付及び沈線	覆土中層	20% PL29
104	縄文土器	深鉢	-	(15.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部隆帯と沈線による渦巻文と楕円状の把手を作成 大沈線による横位・縦位の条線	覆土中	20%
105	縄文土器	深鉢	-	(8.4)	[12.6]	長石・石英・雲母	黒褐	普通	単節縄文 RL・LR を縦位回転で羽状構成に施文	覆土下層	10%
106	縄文土器	深鉢	-	(4.0)	8.2	長石・石英	橙	普通	外・内面ナデ	覆土下層	10%
107	縄文土器	深鉢	-	(13.2)	[8.6]	長石・石英	明赤褐	普通	赤彩文を施文	覆土下層	20%
108	縄文土器	深鉢	-	(14.2)	[11.9]	長石・石英	にぶい褐	普通	単節縄文 RL を縦位回転で施文	覆土下層	20%
109	縄文土器	深鉢	-	(17.1)	14.0	長石・石英	明赤褐	普通	外面磨き 底部網代痕	覆土下層	40% PL29
110	縄文土器	深鉢	[37.6]	(36.4)	-	長石・石英	にぶい褐	普通	中空状把手を作成 条線文を垂下	覆土中層一 覆土下層	70% PL29
111	縄文土器	深鉢	20.4	(27.6)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部隆帯上に刻み文 胴部キョウヒラ文 植紋文	底面	70% PL28
112	縄文土器	深鉢	[12.8]	(17.9)	-	長石・石英	赤褐	普通	単節縄文 LR を縦位回転で施文後 半截竹管による直線や波状文を描出 把手に沈線	覆土中層	80% PL29
113	縄文土器	深鉢	21.8	(26.9)	-	長石・石英	明赤褐	普通	縄文 LR を縦位回転で施文 管に沈線のある隆帯で楕円形のモチーフを描出 波状の沈線を施文	覆土下層	50% PL28
114	縄文土器	深鉢	14.4	27.9	8.3	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部隆帯と沈線によるクラック文 単節縄文 RL を縦位回転で施文 底部網代痕	覆土中層	90% PL29
115	縄文土器	深鉢	-	(35.4)	12.2	長石・石英・雲母	暗褐	普通	口縁部2条の隆帯による渦巻文 単節縄文 LR を縦位回転で施文	底面	70% PL27
116	縄文土器	深鉢	24.4	(24.8)	-	長石・石英	灰黄褐	普通	単節縄文 LR を縦位回転で施文後 縦位の不明瞭なナデ	覆土下層	80% PL28
117	縄文土器	深鉢	19.9	34.9	10.0	長石・石英	灰褐	普通	口縁部隆帯貼付 隆帯貼付の把手1か所残存 単節縄文 RL を縦位回転で施文後 沈線	覆土下層	90% PL29
118	縄文土器	深鉢	[24.7]	37.6	[12.6]	長石・石英	灰褐	普通	単節縄文 RL を縦位回転で施文後 細隆帯貼付沈線を施文	底面	70% PL27
119	縄文土器	深鉢	27.2	(33.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部と隆帯に単節縄文 LR を縦位回転で施文 胴部単節縄文 RL を縦位回転で施文 横 S 字状に隆帯貼付	覆土中層	100% PL28
120	縄文土器	深鉢	16.7	(20.2)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	単節縄文 RL を縦位回転で施文後 沈線による山形の文様を描出	底面	90% PL29

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP97	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	暗赤褐	口縁部隆帯上に単節縄文施文 以下に有節沈線文	覆土中層	
TP98	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	単節縄文 RL を縦位回転で施文後 細隆帯貼付による文様描出	覆土中層	
TP161	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	暗赤褐	単節縄文 RL を縦位回転で施文後 3条一単位の沈線文	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP14	土器片盤	2.6	2.5	0.9	6.6	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	両辺部研削	覆土中	PL41
DP45	土器片鉢	3.8	3.1	1.3	15.1	長石・石英	にぶい黄橙	両辺部一部研削 両端に刻み痕	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q90	石鏡	(2.9)	2.0	0.5	(25.1)	チャート	両面押し割継 先端部欠損	覆土下層	
Q91	打製石斧	(6.5)	4.3	3.5	(96.7)	頁岩	両面調整 基部欠損	覆土下層	
Q92	磨製石斧	(6.1)	2.4	0.9	(17.9)	頁岩	研削調整 銚線部に連続した割継調整 基部欠損 刃部一部欠損	覆土下層	
Q93	磨製石斧	7.5	3.1	1.1	37.0	頁岩	全面研削調整 銚線部からの割継痕を有する	覆土下層	PL39
Q94	磨製石斧	(4.1)	5.2	1.5	(35.8)	頁岩	両部から銚線部にかけて連続した割継調整 片面に自然面を残す 基部欠損	覆土下層	
Q95	磨製石斧	(11.4)	5.2	3.0	(308.6)	安山岩	全面研削調整 刃部欠損 欠損部に連続した割継痕	覆土下層	PL39
Q97	磨石	9.0	8.5	4.7	588.1	閃緑岩	二面に研削痕	覆土下層	PL39
Q98	磨石	(10.2)	7.2	2.8	(367.0)	閃緑岩	二面に研削痕 側線部に痕痕状の敲打痕	覆土中層	
Q100	敲石	7.2	5.0	3.4	172.2	ホルンフェルス	端部と側線部に痕痕状の敲打痕	覆土下層	PL38
Q101	石鏝	9.4	6.0	2.5	194.5	ホルンフェルス	長径方向に挟り調整	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q102	石鏃	10.2	8.2	1.7	190.8	砂岩	長径方向に挟り調整	覆土下層	
Q103	石鏃	9.3	6.7	2.3	202.3	安山岩	長径方向に挟り調整	覆土中層	
Q104	石鏃	8.5	6.7	1.7	137.1	礫岩	長径方向に挟り調整	覆土下層	
Q105	石鏃	12.8	7.8	2.9	374.2	砂岩	長径方向に挟り調整	覆土下層	
Q106	石鏃	8.3	5.3	1.5	81.0	砂岩	長径方向に挟り調整 側縁部に剥離痕	底面	
Q107	石鏃	8.1	7.1	2.4	168.3	閃緑岩	長径方向に挟り調整	覆土下層	PL42
Q108	石鏃	8.8	(5.9)	1.8	(135.4)	泥岩	長径方向に挟り調整 側縁部に剥離痕	覆土中	
Q114	凹石	(13.5)	(16.4)	(9.9)	(2548.0)	花崗岩	断面V字状の凹み2か所残存 2面を残し欠損	覆土下層	

第81号土坑 (第77・78図)

位置 調査区北部のC7a2区、標高34mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第26号竪穴建物跡に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は長径1.18m、短径0.87mの楕円形で、長径方向はN-82°-Eである。深さは42cmである。底面は長径1.67m、短径1.28mの楕円形で、平坦である。壁は内傾して立ち上がっている。

ピット 3か所。P1～P3は深さ66～86cmで、南壁際に位置している。性格は不明である。

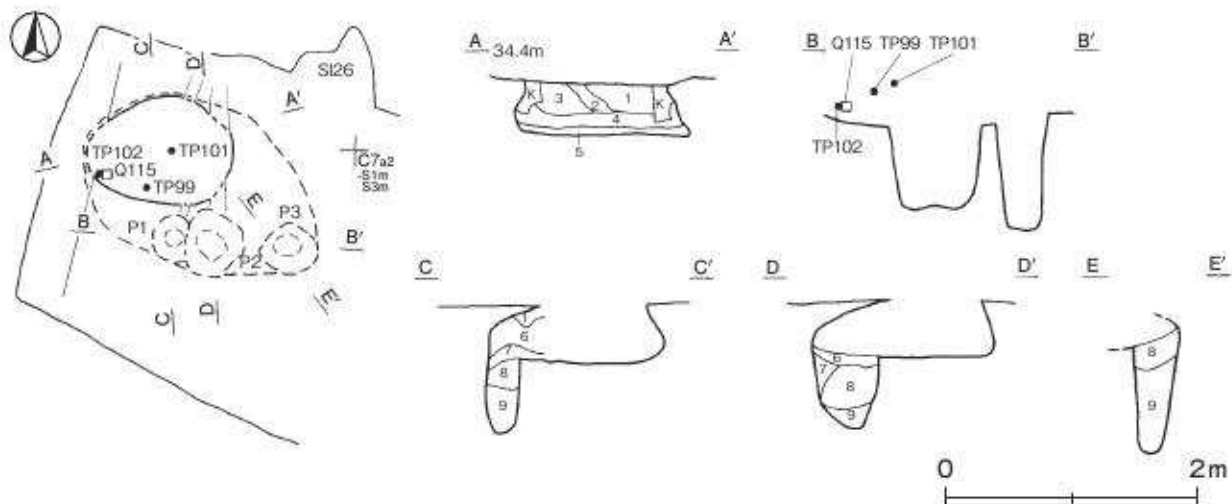
覆土 9層に分層できる。ロームブロックや鹿沼パミス粒子が不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

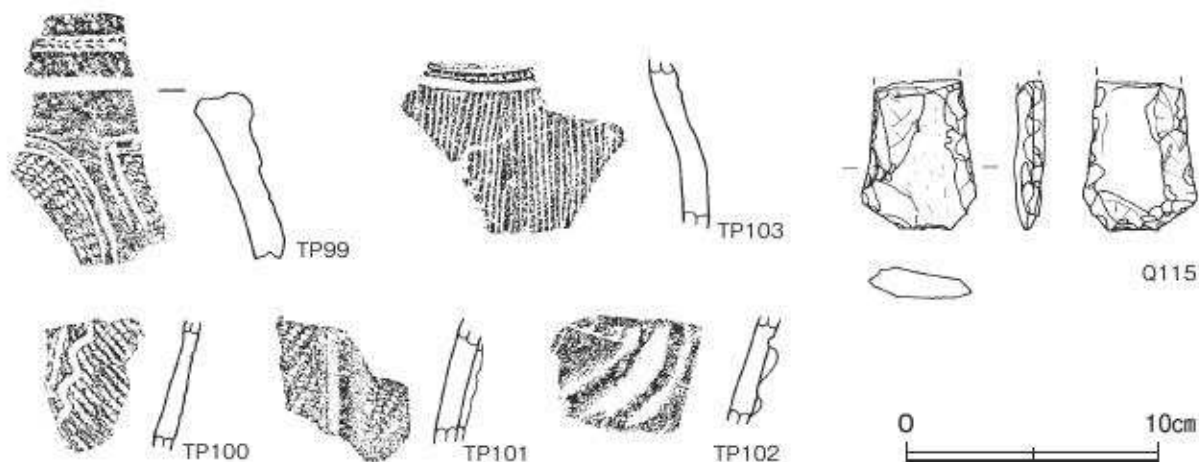
- | | | | |
|-------|-----------|-------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量、鹿沼パミス粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量、鹿沼パミス粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量 | 8 暗褐色 | 鹿沼パミス粒子中量、ローム粒子微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック少量 | 9 褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 褐色 | 鹿沼パミス粒子中量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片60点(深鉢)、石器1点(打製石斧)、破断面のある礫6点が出土している。TP102・Q115は西壁際の覆土下層から出土している。TP99は中央部の覆土中層、TP101は中央部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 形状から、袋状土坑の下位部分と推定できる。時期は、出土土器や重複関係から縄文時代中期後葉(加曾利EⅠ式期)と考えられる。



第77図 第81号土坑実測図



第78図 第81号土坑出土遺物実測図

第81号土坑出土遺物観察表(第78図)

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP99	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色砂子	灰褐色	半縦竹管による2条の沈線文と口縁部に押引文・単節縄文RLを縦位回転で施文	覆土中層	
TP100	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐色	無節縄文RLを施文後、沈線による山形文と押引文	覆土中	
TP101	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	単節縄文LRを施文後、隆帯貼付	覆土上層	
TP102	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	2条の隆帯貼付後、有節沈線文	覆土下層	
TP103	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐色	縦位の捻糸文を施文後、沈線文	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q115	打製石斧	(6.0)	4.6	1.7	(44.5)	頁岩	連続した弱隆調整 自然面を一部残す	覆土下層	

第110号土坑 (第79図)

位置 調査区北部のC6d0区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は長径0.70m、短径0.62mの楕円形で、長径方向はN-82°-Wである。深さは80cmで、底面は平坦である。壁は西部が内傾しており、その他は外傾して立ち上がっている。

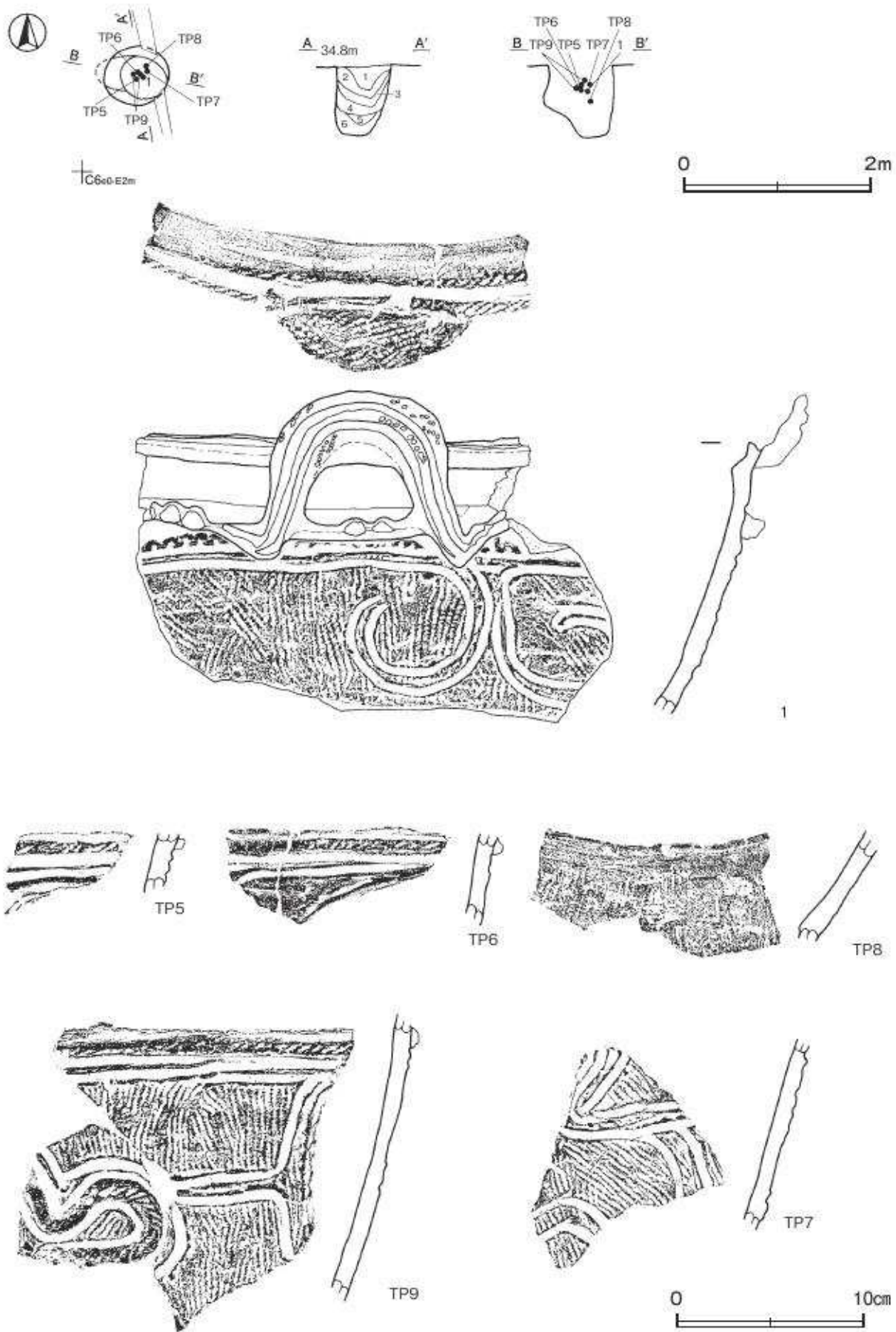
覆土 6層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子が不規則混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------|-------|-----------|
| 1 褐色 | ロームブロック中量 | 4 褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 黒色 | ローム粒子微量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子少量 | 6 黒褐色 | ローム粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片37点(深鉢)が出土している。1は中央部の覆土中層から出土しており、TP5～TP9は1とほぼ同じ位置から密集して出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代中期後葉(加曾利E1式期)と考えられる。規模と形状、遺物の出土状況、周囲に袋状土坑が確認されていることから、袋状土坑の底面を掘り下げたピットだけが残存していたものと考えられる。



第79图 第110号土坑·出土遗物实测图

第110号土坑出土遺物観察表(第79図)

番号	種別	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	(17.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	把手上に縄文施文、口縁部交互突文、単節縄文RLを横位・縦位回転で施文後、沈線文	覆土中層	20%
TP5	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母			褐色			隆帯に単節縄文LR施文、以下に沈線文	覆土中層	
TP6	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母			褐色			隆帯付後、単節縄文施文	覆土中層	
TP7	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母			褐色			単節縄文RLを施文後、沈線による曲線文	覆土中層	
TP8	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母			にぶい褐色			単節縄文RLを施文後、ナデ	覆土中層	
TP9	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母			にぶい褐色			単節縄文RLを斜位回転で施文、隆帯付後、沈線で区画、隆帯に単節縄文RLを施文	覆土中層	

表3 縄文時代の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
11	C 6 e8	N - 6° - W	楕円形	2.00 × 1.65	58 - 70	平坦	外傾・内傾	人為	縄文土器、磨石、敲石、石鏃	本跡→UP 7
12	C 6 d8	-	円形	1.74 × 1.65	53 - 63	平坦	内傾	人為	縄文土器、石斧、削器	
39	C 6 g8	-	円形	1.15 × 1.12	73	平坦	直立	人為	縄文土器、土器片鏃、石鏃	
41	C 6 e9	N - 27° - W	楕円形	2.14 × 1.18	56	平坦	内傾	人為	縄文土器、敲石、石鏃	
43	C 6 b9	-	円形	1.34 × 1.24	66	平坦	内傾	人為	縄文土器、石斧、敲石、石鏃	
44	C 6 c8	N - 24° - E	不整形円形	0.90 × 0.68	82	平坦	内傾・直立	人為	縄文土器、磨石、敲石、石鏃、凹石	
45	C 6 f8	-	円形	1.93 × 1.85	18 - 33	平坦	直立	人為	縄文土器、土器片円鏃、石鏃、石皿	
47	C 6 d0	N - 30° - E	楕円形	2.64 × 1.93	22 - 24	平坦	外傾	人為	縄文土器、土器片円鏃、石鏃、磨石、敲石、石鏃	
48	C 6 i7	-	円形	1.86 × 1.76	25	平坦	直立	人為	縄文土器、環状石斧	
49	C 6 b0	N - 34° - E	楕円形	2.37 × 2.04	84 - 92	平坦	内傾	人為	縄文土器、土器片鏃、石鏃、石斧、磨石、石鏃、軽石製品	本跡→SK64
50	C 6 e9	N - 25° - W	楕円形	1.50 × 1.32	50 - 146	平坦	内傾	人為	縄文土器、土器片鏃、磨石、石鏃、軽石製品	SK51→本跡→SK63
51	C 6 e9	N - 17° - E	楕円形	1.22 × 1.06	39	平坦	内傾	人為	縄文土器	本跡→SK50
52	C 6 c0	-	円形	1.04 × 1.04	78	平坦	内傾	人為	縄文土器、土器片円鏃、石鏃、石斧、石皿、磨石、敲石、石鏃	SI24 P16→本跡
53	C 6 b7	N - 1° - E	[円形・楕円形]	(1.52 × 0.65)	68	平坦	内傾	人為	縄文土器、土器片円鏃、石鏃	本跡→SK55
55	C 6 b7	N - 87° - E	楕円形	1.30 × 1.12	90	平坦	内傾	人為	縄文土器、土器片鏃、石皿、磨石	SK53→本跡
56	C 6 c0	-	円形	0.88 × 0.84	108	平坦	内傾	人為	縄文土器、土器片鏃、石鏃	SI24 P16→本跡
57	C 6 b0	N - 15° - E	楕円形	2.18 × 1.66	24	平坦	外傾	人為	縄文土器	
59	B 7 g3	N - 25° - E	[楕円形]	[2.04] × 1.57	62	平坦	内傾	人為	縄文土器、敲石	
64	C 6 c0	N - 63° - E	楕円形	1.70 × 1.48	42	平坦	外傾	人為	縄文土器	SK69 - 65→本跡
65	C 7 c1	-	円形	2.07 × 2.04	40	平坦	外傾・内傾	人為	縄文土器	本跡→SK64
66	B 7 j2	-	楕円形	1.29 × 1.08	113	平坦	内傾	人為	縄文土器、土器片円鏃、土器片鏃、石鏃、石斧、磨石、敲石、石鏃、凹石	
81	C 7 a2	N - 82° - E	楕円形	1.18 × 0.87	42	平坦	内傾	人為	縄文土器、石斧	本跡→SI26
110	C 6 d0	N - 82° - W	楕円形	0.70 × 0.62	80	平坦	外傾	人為	縄文土器	

2 弥生時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡 13 棟を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

竪穴建物跡

第 1 号竪穴建物跡 (第 80・81 図)

位置 調査区南部の L3d2 区、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 1 号道路側溝 2 に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が調査区域外に延びているため、北東・南西軸は 3.47 m で、北西・南東軸は 2.03 m しか確認できなかった。平面形は隅丸長方形と推定でき、北西・南東軸方向は N-39°-W である。壁高は 10 cm で、壁は直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

ピット 5 か所。P1・P2 は深さ 55 cm・70 cm で、規模と配置から支柱穴と考えられる。P4 は深さ 46 cm で南東壁際に位置し、P5 は深さ 16 cm で南東壁に接して位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P3 は深さ 20 cm で、性格は不明である。

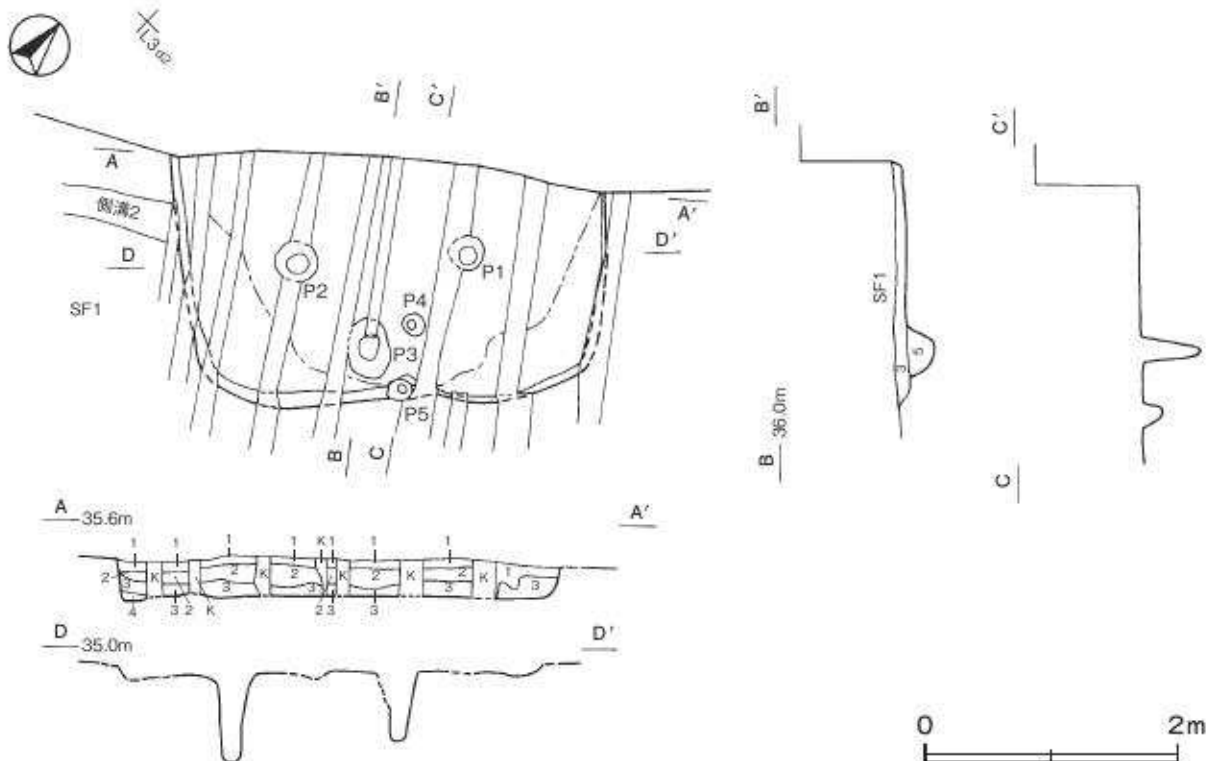
覆土 5 層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

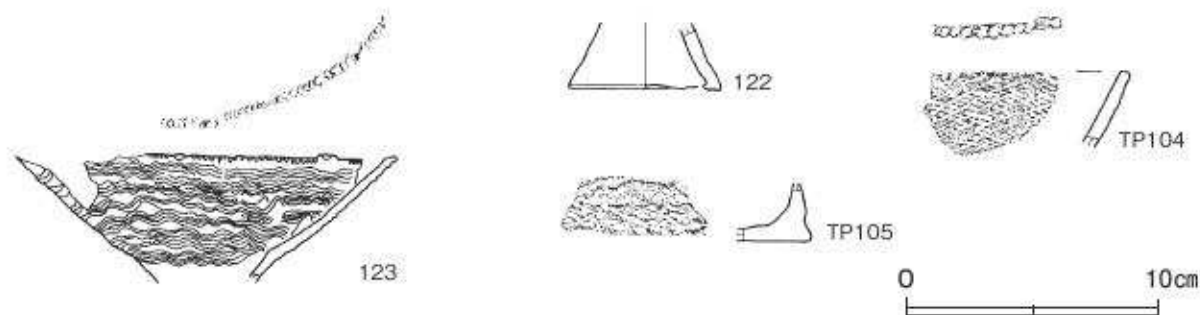
- | | |
|-----------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック微量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 5 褐色 ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 弥生土器片 44 点（高坏形土器 1、広口壺 43）が出土している。122・123・TP104・TP105 は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第 80 図 第 1 号竪穴建物跡実測図



第81図 第1号竪穴建物跡出土遺物実測図

第1号竪穴建物跡出土遺物観察表（第81図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
122	弥生土器	高坏形土器	-	(26)	(5.9)	長石・石英	にぶい橙	普通	脚部 下端部を内側へ折り返し	覆土中	10%
123	弥生土器	広口壺	[15.2]	(5.0)	-	長石・石英	橙	普通	口唇部棒状工具による押圧 小突起を作出 口縁部棒状工具（3本-4本）による波状文	覆土中	10% PL40

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP104	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	口唇部原体押圧 口縁部附加条二種（附加1条）縄文施文	覆土中	
TP105	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	胴部附加条二種（附加1条）縄文施文 底部砂目痕	覆土中	

第3号竪穴建物跡（第82～84図）

位置 調査区南部のK4a7区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号道路側溝7に掘り込まれている。

規模と形状 軸長5.78mの隅丸方形で、主軸方向はN-20°-Eである。壁高は55～60cmで、壁は直立している。

床 ほほ平坦で、東部壁際がやや硬化している。

炉 中央部に付設されている。長径115cm、短径100cmの楕円形で、深さ8cmの地床炉である。炉床は皿状に掘りくぼめられ、炉床面は火を受けて赤変硬化している。第5層上面が炉床面である。

炉土層解説

- | | |
|-------------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 4 にぶい黄褐色 ローム粒子中量 |
| 5 赤褐色 焼土粒子多量、ロームブロック・炭化粒子微量 | |

ピット 15か所。P1～P4は深さ45～65cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P5・P6は深さ17cm・20cmで、南西壁際に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P7～P15は深さ21～37cmで、壁際に規則的に配列されていることから壁柱穴の可能性はある。

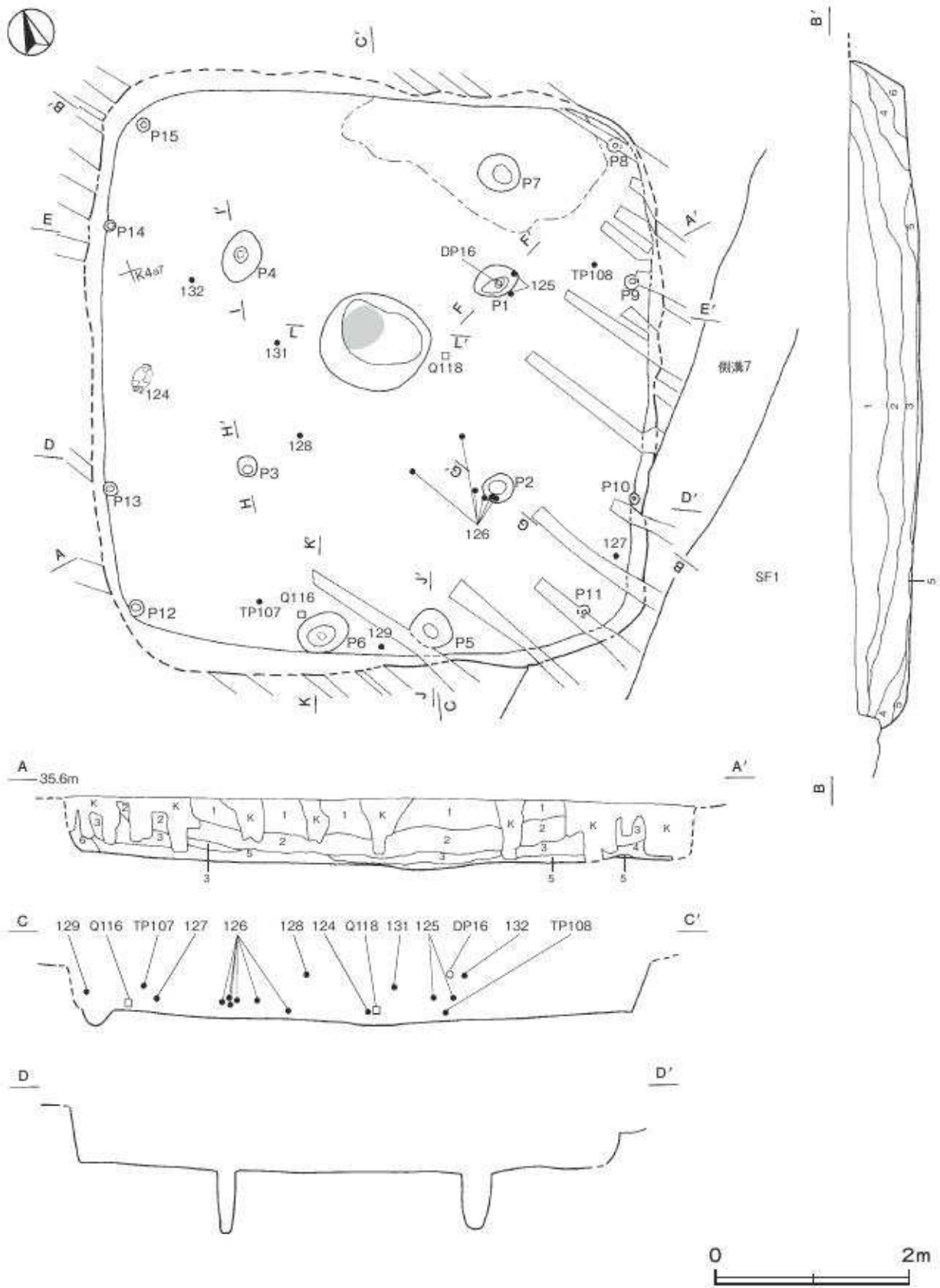
覆土 6層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

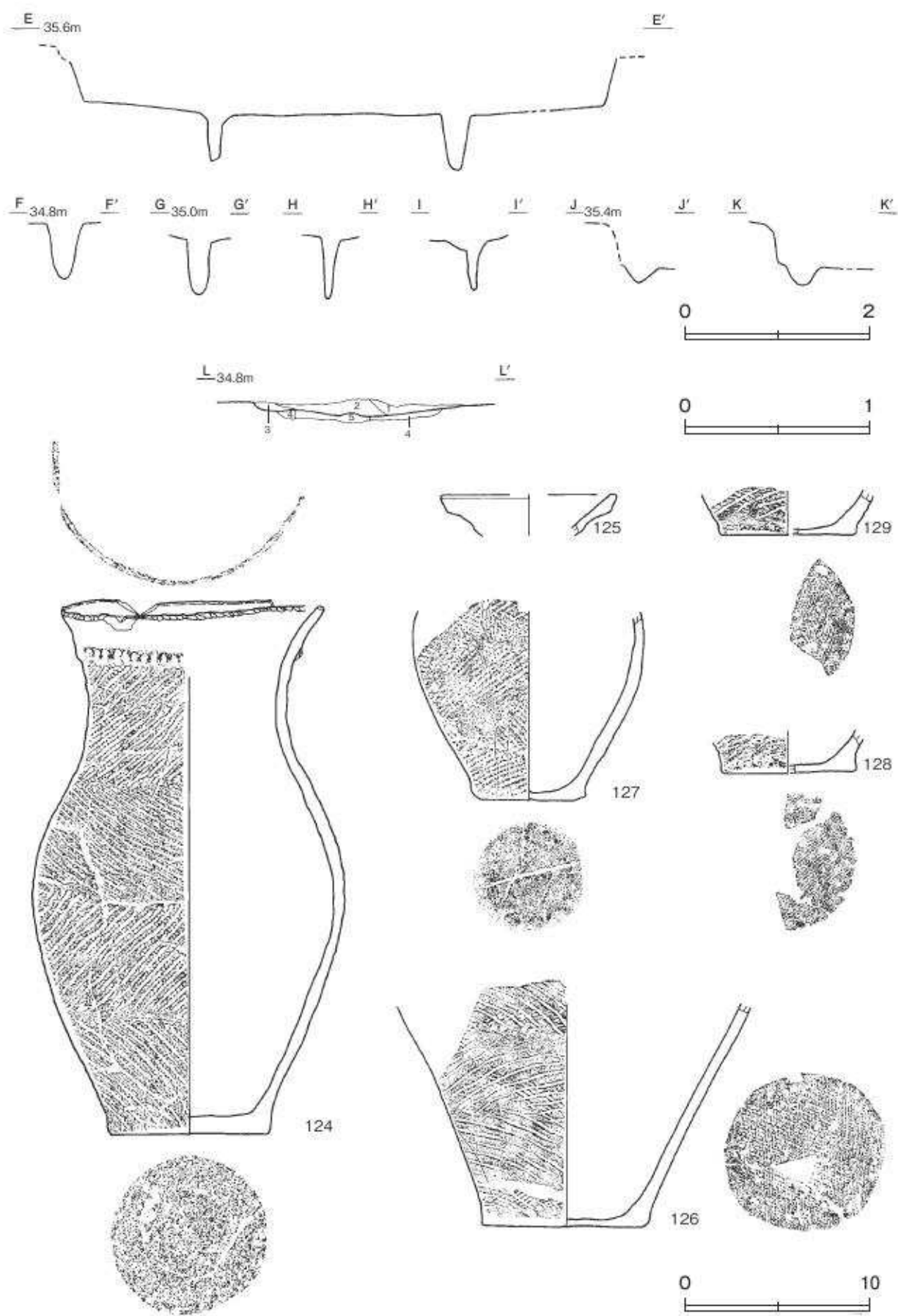
- | | |
|---------------------------|---------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量 |
| 2 黒色 ローム粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色 ロームブロック多量 |

遺物出土状況 弥生土器片416点（広口壺386、手捏土器30）、土製品1点（土玉）、石器3点（敲石2、軽石製品1）、剥片13点、自然礫12点、粘土塊1点が覆土全体から出土している。124は、北西壁際の床面から口縁部が西方向の横位で出土している。126・127は、南部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。

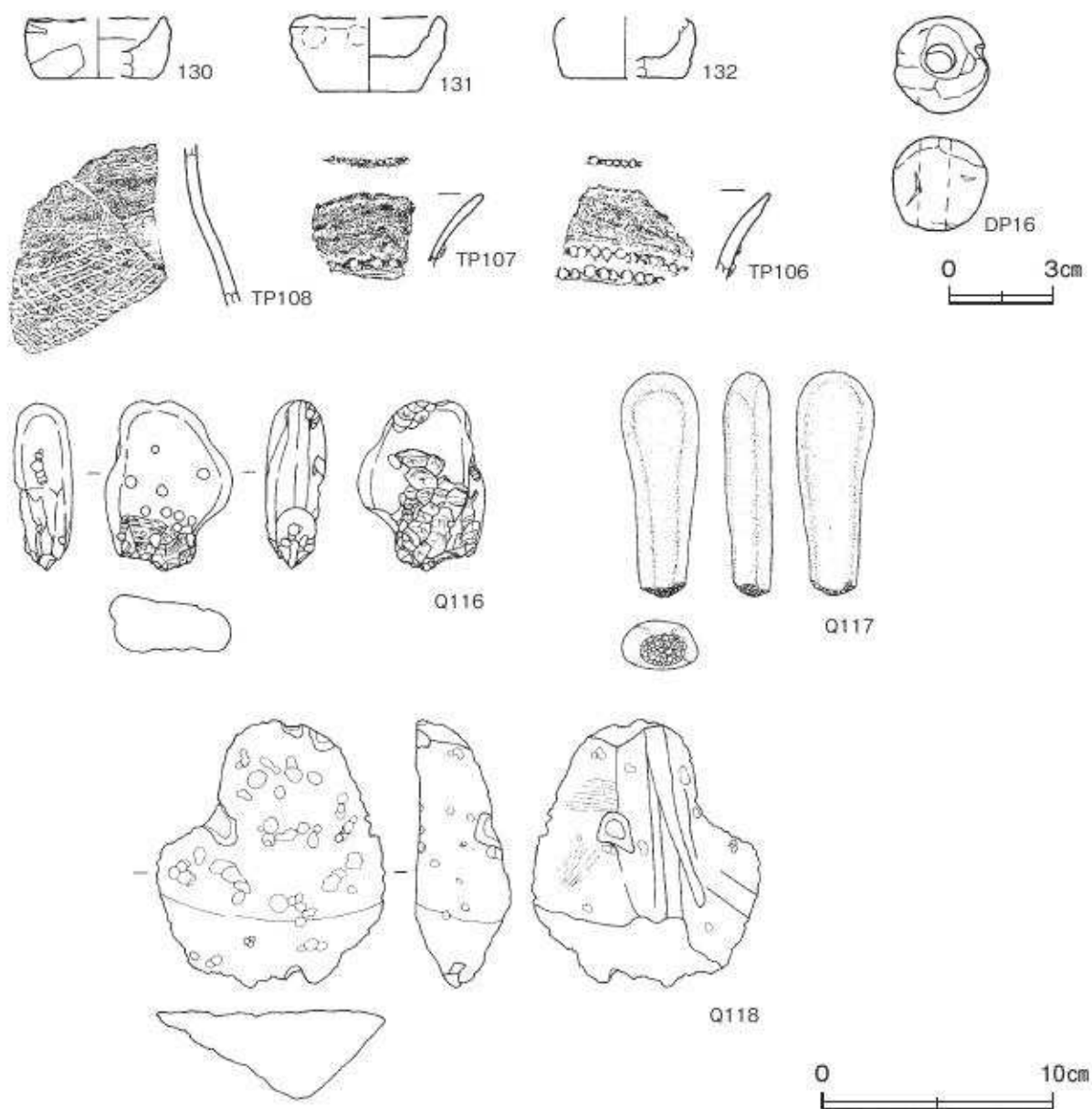
所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第 82 図 第 3 号竪穴建物跡実測図



第 83 图 第 3 号竖穴建物跡・出土遺物実測図



第84図 第3号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第83・84図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
124	弥生土器	広口壺	14.0	28.8	8.6	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部・複合口縁部下端に原体押圧。胴部附加条一種(附加2条)縄文を羽状構成で施文。底部砂目痕	覆土下層	95% PL31
125	弥生土器	広口壺	[9.4]	(22)	-	長石・石英	浅黄	普通	口唇部縄文原体押圧の痕跡一部残存	覆土中層	10%
126	弥生土器	広口壺	-	(12.1)	8.7	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部附加条二種(附加1条)縄文施文。底部布目痕	覆土下層	30%
127	弥生土器	広口壺	-	(10.3)	5.0	長石・石英	橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文を羽状構成で施文。底部砂目痕	覆土下層	30%
128	弥生土器	広口壺	-	(2.3)	7.3	長石・石英	にぶい黄緑	普通	胴部附加条二種縄文施文。底部布目痕	覆土上層	10%
129	弥生土器	広口壺	-	(2.4)	[7.2]	長石・石英	にぶい黄緑	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。底部布目痕	覆土中層	10%
130	弥生土器	手捏土器	[5.8]	2.6	[5.0]	長石・石英	黒灰	普通	ナデ調整	覆土中	40%
131	弥生土器	手捏土器	[6.2]	3.2	4.5	長石・石英	にぶい黄緑	普通	ナデ調整 指頭痕	覆土中層	40%
132	弥生土器	手捏土器	-	(2.6)	[4.8]	長石・石英・赤色粒子	黒褐	普通	ナデ調整	覆土上層	30%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP106	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	口唇部厚体押圧 頸部棒状工具による押圧のある微隆帯2条	覆土中	
TP107	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	にぶい褐色	口唇部棒状工具による押圧 頸部棒状工具による押圧のある微隆帯	覆土中層	
TP108	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	にぶい褐色	頸部衝刺状工具(4本)による稜区画及び波状文 胴部附加条2種(附加1条) 縄文を羽状構成で施文	覆土下層	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP16	土玉	28	2.7	0.9	(17.3)	長石・石英	にぶい黄褐色	一方向からの穿孔 ナデ	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q116	敲石	7.3	5.5	2.5	117.9	瑪瑙	端部に短楕状の敲打痕	覆土下層	PL38
Q117	敲石	9.8	3.3	2.1	94.1	砂岩	端部に短楕状の敲打痕	覆土中	PL38
Q118	磨石製品	11.6	9.9	4.1	74.1	磨石	側縁部にくぼみ残存	覆土下層	

第4号竪穴建物跡 (第85・86図)

位置 調査区南部のK4a3区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北西部が調査区域外に延びているため、北東・南西軸は3.15mで、北西・南東軸は0.91mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定でき、北東・南西軸方向はN-33°-Eである。壁高は9～22cmで、壁は直立している。

床 平坦で、硬化した範囲は認められない。

ピット 2か所。P1・P2は深さ33cm・36cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。

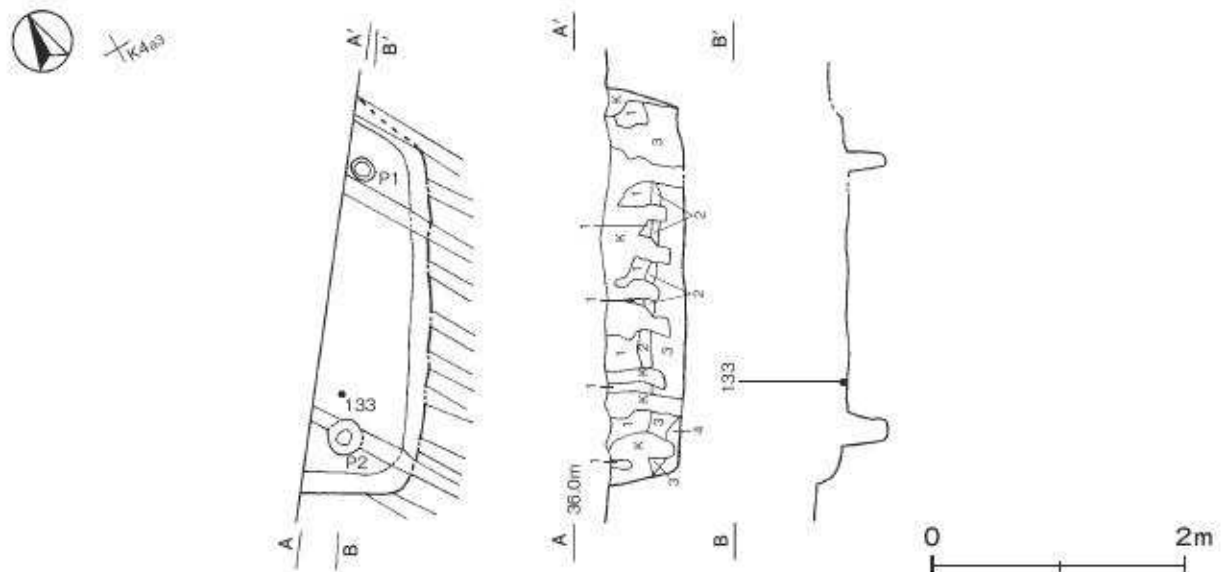
覆土 4層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

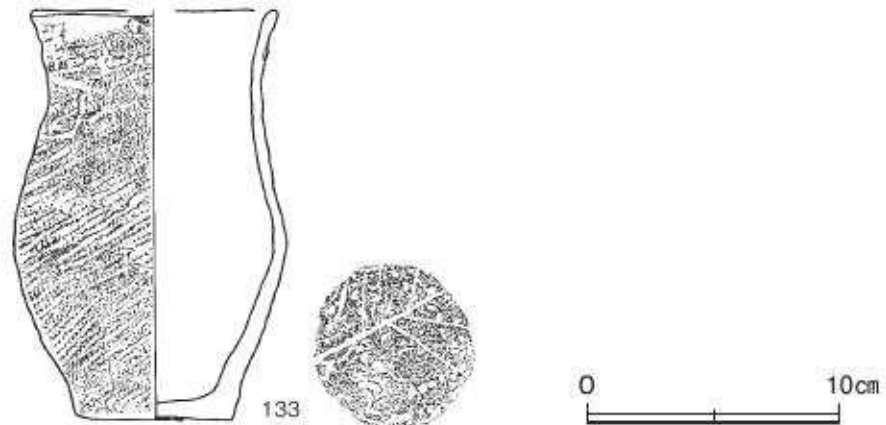
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|----------------|
| 1 黒色 | ローム粒子微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 弥生土器片10点(広口壺)、自然礫1点が出土している。133は、南コーナー部の床面から横位で出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第85図 第4号竪穴建物跡実測図



第86図 第4号竪穴建物跡出土遺物実測図

第4号竪穴建物跡出土遺物観察表（第86図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
133	弥生土器	広口壺	[9.4]	16.2	6.1	長石・石英	淡赤橙	普通	頸部原形押付、口縁部・胴部附加条一種（附加2条）縄文様文	床面	70% PL34

第5号竪穴建物跡（第87図）

位置 調査区南部のJ 4 h5区、標高35 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北西部が調査区域外に延びているため、南北軸は5.88 mで、東西軸は3.90 mしか確認できなかった。平面形は隅丸長方形と推定でき、主軸方向はN-3°-Eである。壁高は6～55 cmで、壁は直立している。

床 平坦で、明らかな硬化面は認められない。

炉 中央部に付設されている。残存している部分は長径69 cm、短径22 cmで、円形または楕円形と推定できる。深さ10 cmの地床炉で、炉床は皿状に掘りくぼめられ、炉床面は火を受けて赤変硬化している。第1層上面が炉床面である。

炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 2 黄橙色 ロームブロック多量、焼土粒子少量

ピット 5か所。P 1は深さ50 cmで、規模と位置から主柱穴と考えられる。P 2は深さ16 cmで、南壁際に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 3～P 5は深さ16～21 cmで、主柱穴を含めて直線的に並んでいることから、補助柱穴の可能性はある。

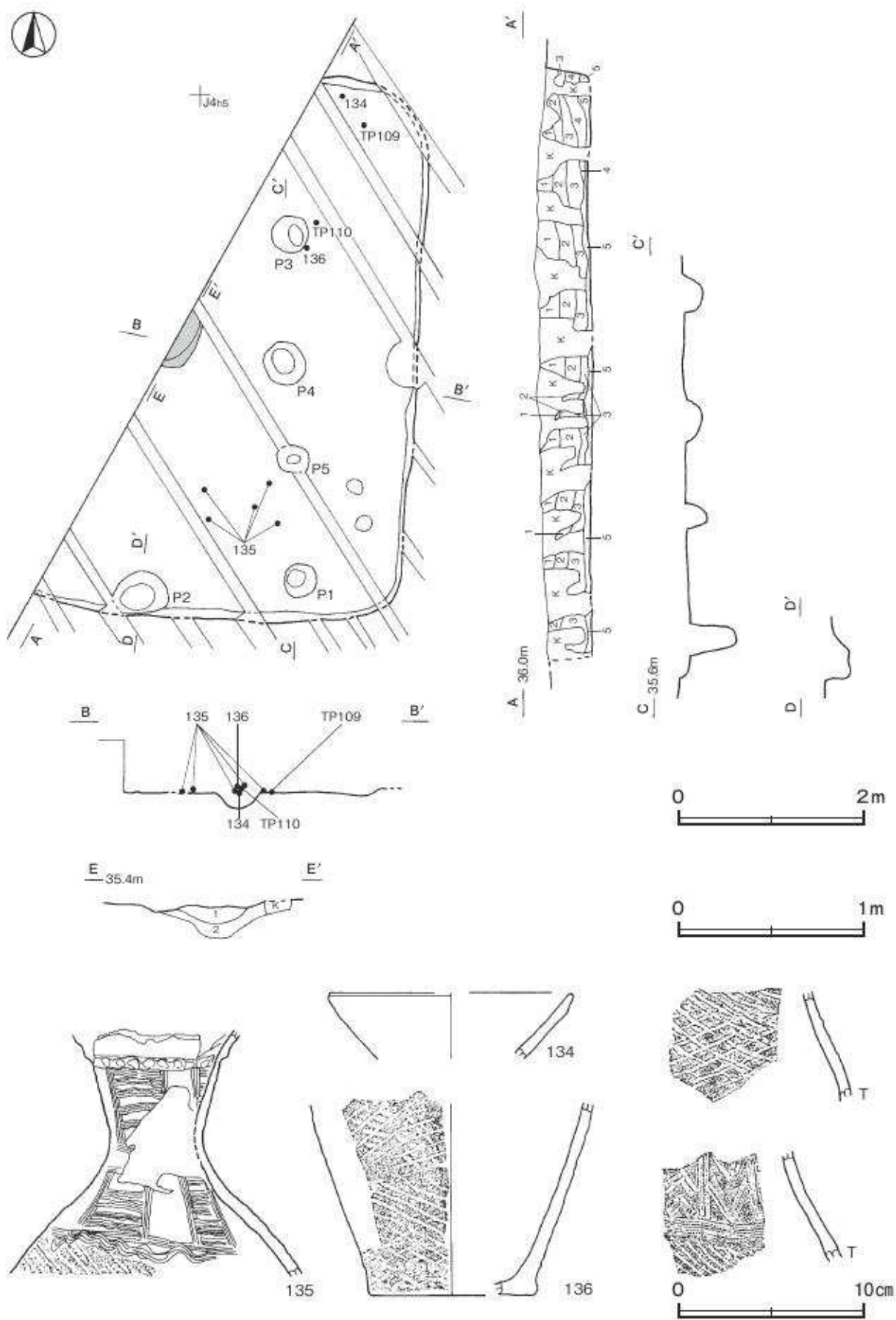
覆土 5層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 4 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
2 黒色 ローム粒子微量 5 暗褐色 ロームブロック中量
3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片25点（高坏形土器1、広口壺24）、石器1点（石錘）のほか、自然礫1点が出土している。134は北東コーナー付近、136はP 3付近の床面からそれぞれ出土している。135は南東コーナー付近の覆土下層から床面にかけて出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第 87 图 第 5 号竖穴建物跡・出土遺物実測図

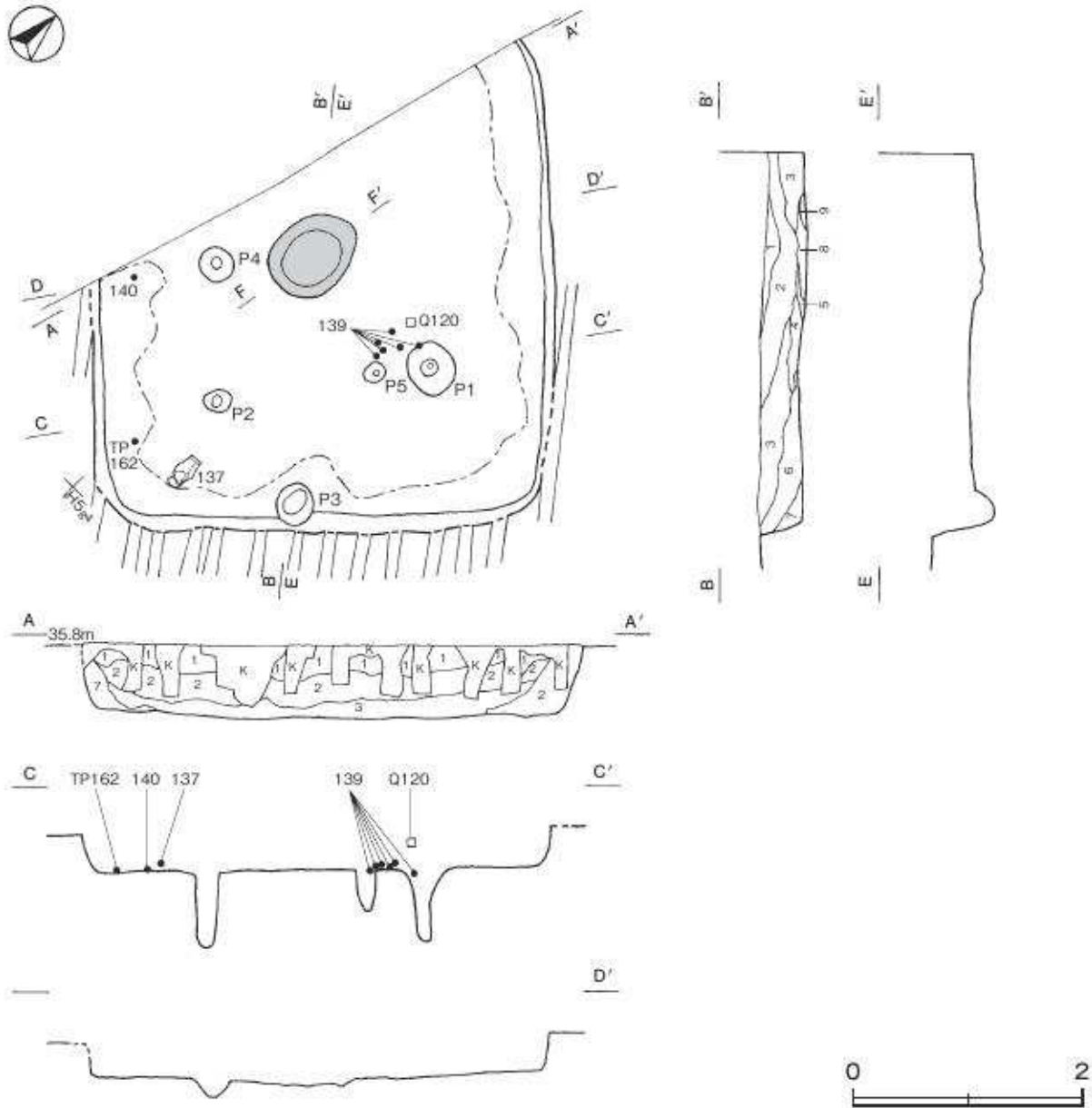
第5号竖穴建物跡出土遺物観察表（第87図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
134	弥生土器	高環形土器	[13.0]	(36)	—	長石・石英・赤色粒子	明黄褐色	普通	口唇部縄文原形押印の痕跡一部残存	床面	10%
135	弥生土器	広口壺	—	(133)	—	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部に刻み目のある横帯1条・頸部及び胴部上位に櫛歯状工具（4本）による2条一単位の縦区画間に流状文を施文	覆土下層 —床面	40%
136	弥生土器	広口壺	—	(104)	[8.8]	長石・石英	橙	普通	胴部附加条二種（附加1条）縄文を羽状構成で施文 底部砂目痕	床面	10%

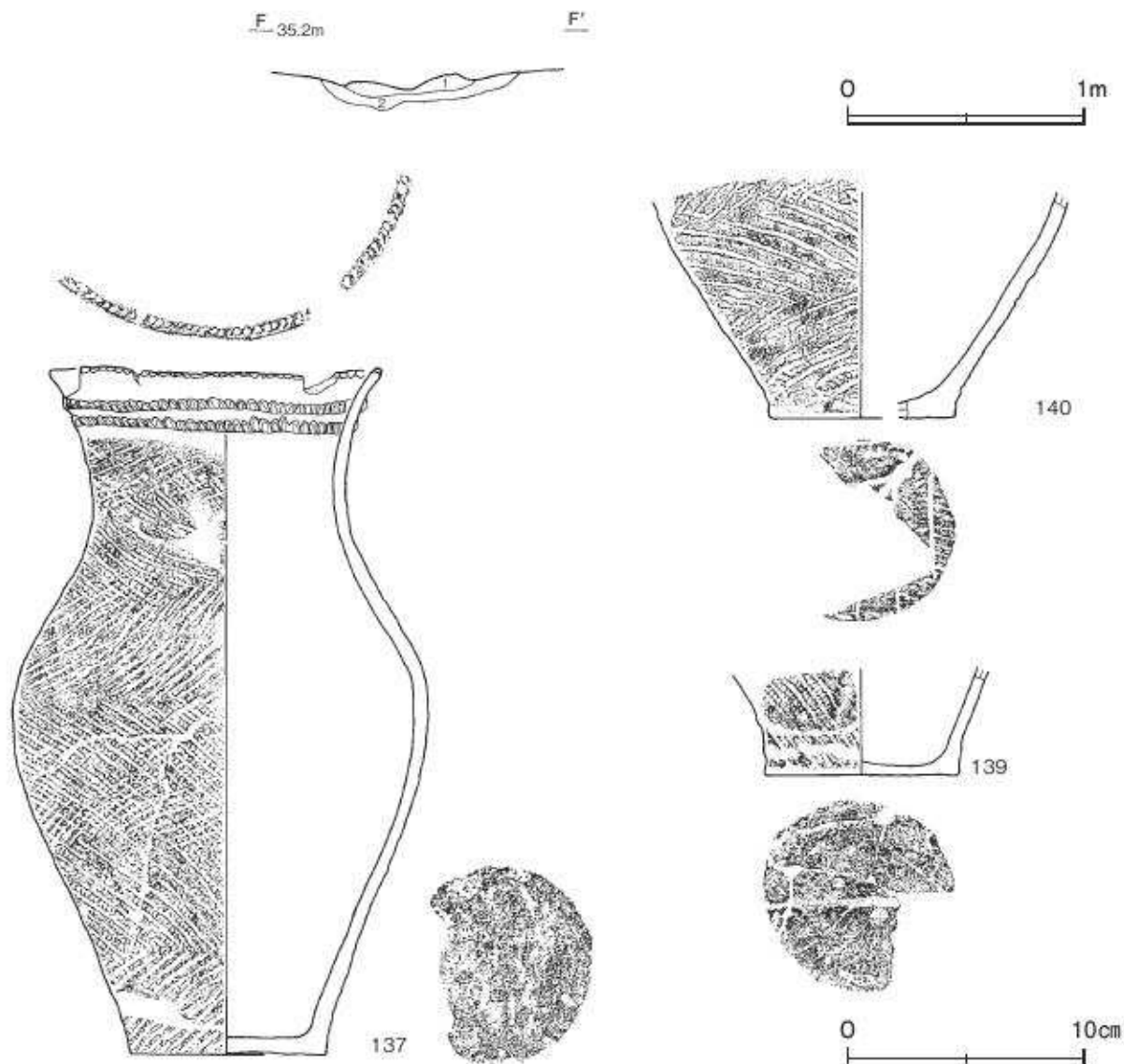
番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP109	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	胴部附加条二種（附加1条）縄文を羽状構成で施文	床面	PL40
TP110	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	黒褐色	頸部櫛歯状工具（5本）による縦区画と山形文を施文	覆土下層	PL40

第6号竖穴建物跡（第88～90図）

位置 調査区南部のH5f4区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。



第88図 第6号竖穴建物跡実測図



第 89 図 第 6 号 竪穴建物跡・出土遺物実測図

規模と形状 西部が調査区域外に延びているため、北東・南西軸は 4.04 m で、北西・南東軸は 4.16 m しか確認できなかった。平面形は隅丸長方形と推定でき、主軸方向は N-39°-W である。壁高は 24 ~ 38cm で、壁は直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。長径 83cm、短径 62cm の楕円形で、深さ 8cm の地床炉である。炉床は皿状に掘りくぼめられ、炉床面は火を受けて赤変硬化している。第 1 層上面が炉床面である。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色、焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量 2 黄褐色、ロームブロック多量、焼土粒子微量

ピット 5 か所。P 1・P 2 は深さ 66・67cm で、規模と配置から支柱穴と考えられる。P 3 は深さ 16cm で、南東壁際に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 4・P 5 は深さ 16cm・38cm で、性格は不明である。

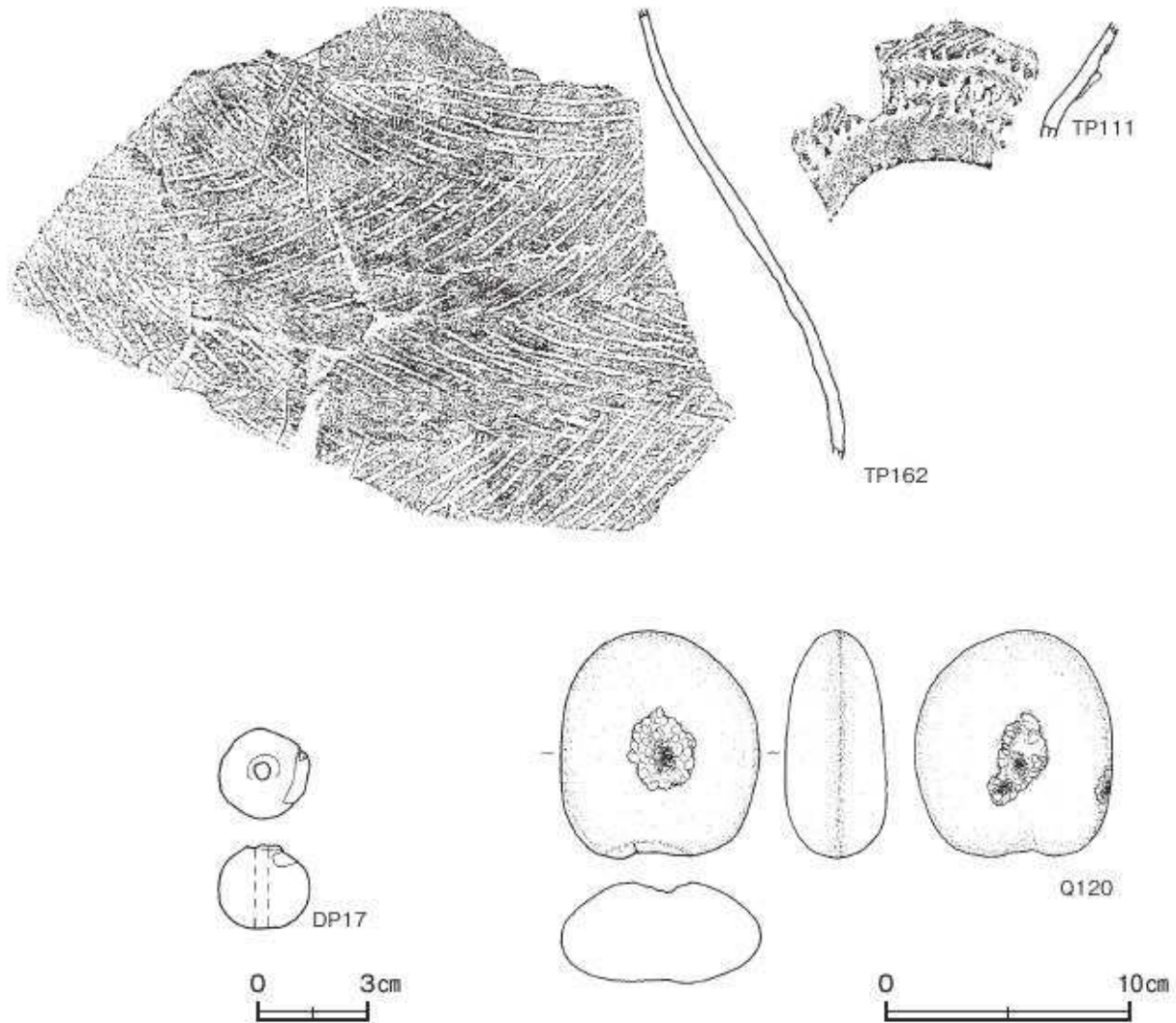
覆土 9 層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量 | 9 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | | |

遺物出土状況 弥生土器片107点（広口壺）、土製品1点（土玉）、石器1点（凹石）、自然礫4点、粘土塊1点が出土している。137は南コーナー付近の覆土下層から口縁部が南東方向の横位で出土している。140は南西壁際の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第90図 第6号竪穴建物跡出土遺物実測図

第6号竪穴建物跡出土遺物観察表（第89・90図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
137	弥生土器	広口壺	[13.8]	29.0	8.4	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口唇部・縁合口縁の下部部に刻み目。胴部附加条一種（附加2条）縄文を羽状構成で施文	覆土下層	80% PL31
139	弥生土器	広口壺	-	(4.6)	8.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文 底部木葉表	覆土下層 →床面	10%
140	弥生土器	広口壺	-	(9.6)	7.6	長石・石英	橙	普通	胴部附加条二種（附加1条）縄文を羽状構成で施文 底部木葉裏	床面	20% PL32

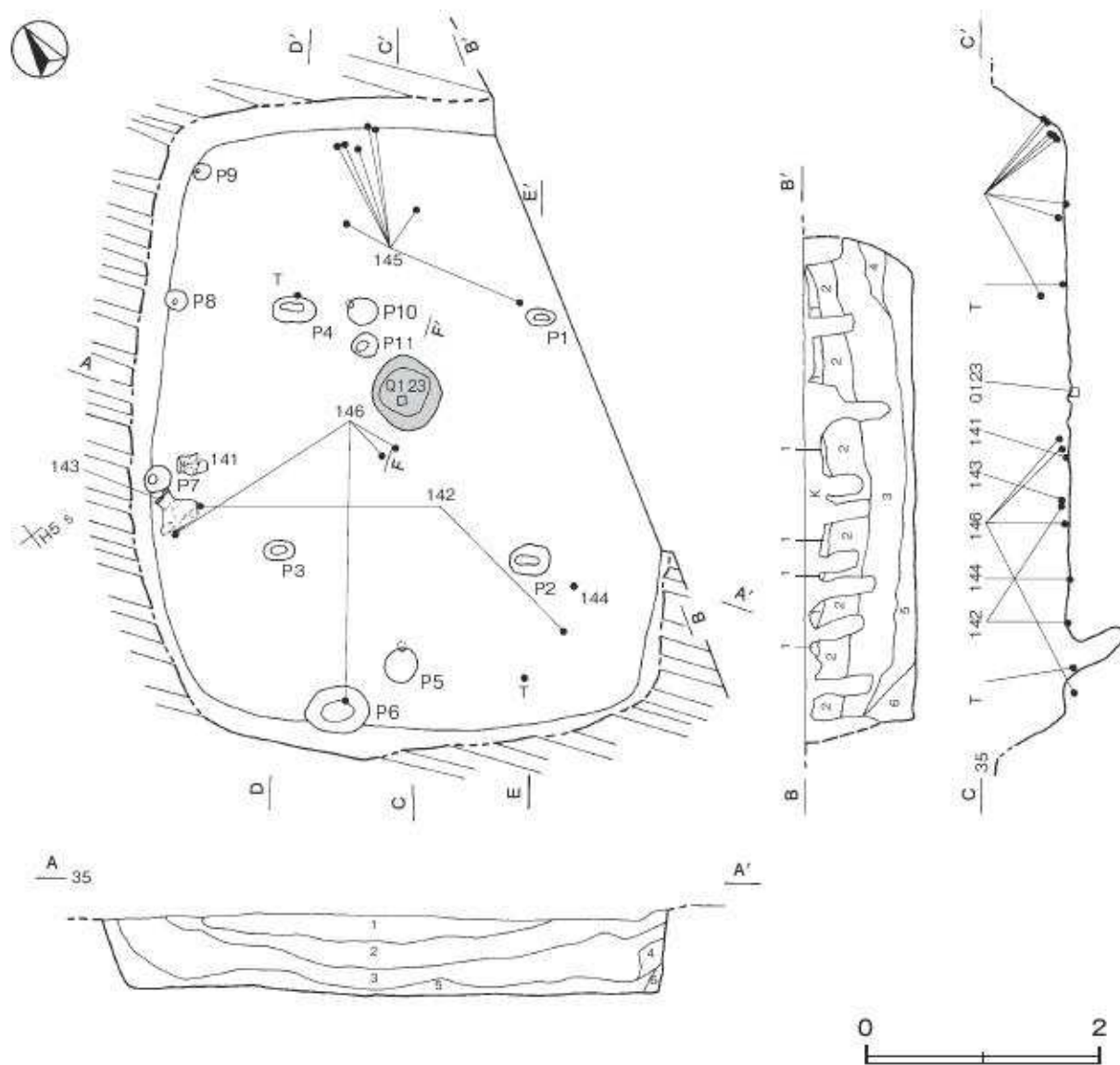
位置	備考
中	PL40
面	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP17	土玉	2.5	2.3	0.4	14.2	長石-石英	明赤褐色	一方向からの穿孔 ナデ	床面	

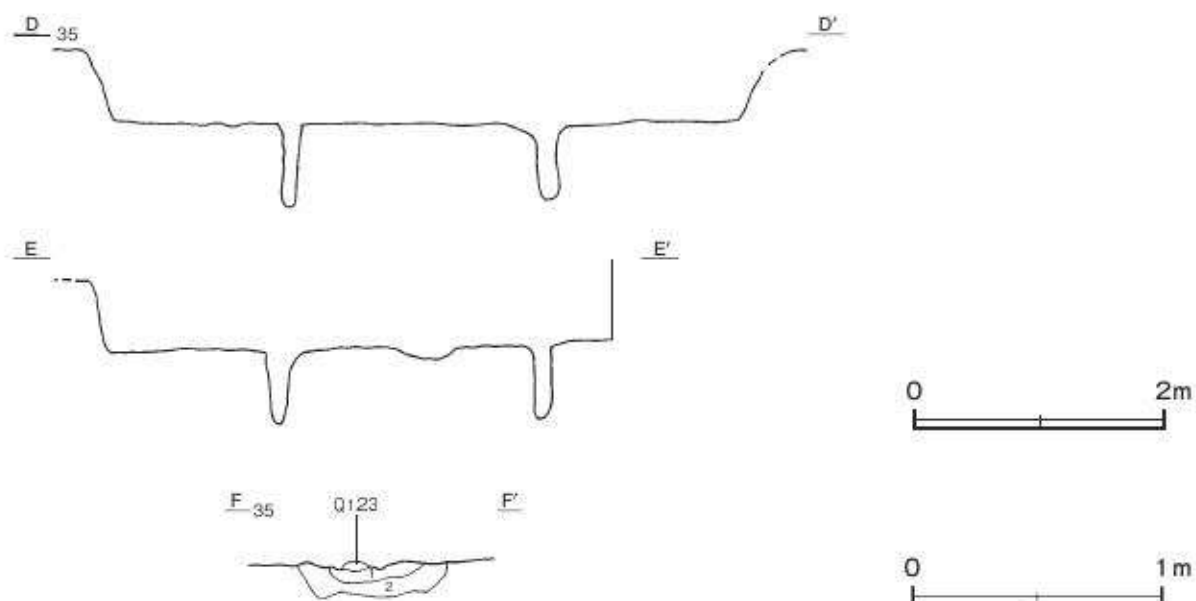
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q120	凹石	9.3	8.1	4.1	471.4	砂岩	くぼみ2か所	覆土中層	

第8号竪穴建物跡 (第91～94図)

位置 調査区中央部のH5g5区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。



第91図 第8号竪穴建物跡実測図(1)



第92図 第8号竪穴建物跡実測図(2)

規模と形状 南東部が調査区域外に延びているが、長軸 5.57 m、短軸 4.46 m の隅丸長方形で、主軸方向は N-42°-E である。壁高は 55cm で、壁は直立している。

床 平坦で、明らかな硬化面は認められない。

炉 中央部に付設されている。径 64cm の円形で、深さ 14cm の地床炉である。炉床は皿状に掘りくぼめられ、炉床面には石が据えられている。炉床面は、火を受けて赤変硬化している。第 1 層上面が炉床面である。

炉土層解説

- 1 略赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量 2 黄褐色 ロームブロック多量、焼土粒子微量

ピット 11 か所。P 1～P 4 は深さ 56～65cm で、規模と配置から支柱穴と考えられる。P 5 は深さ 48cm で、南壁際に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P 7～P 9 は深さ 17～29cm で、壁際に規則的に配列されていることから壁柱穴の可能性がある。P 6・P10・P11 は深さ 15～70cm で性格は不明である。

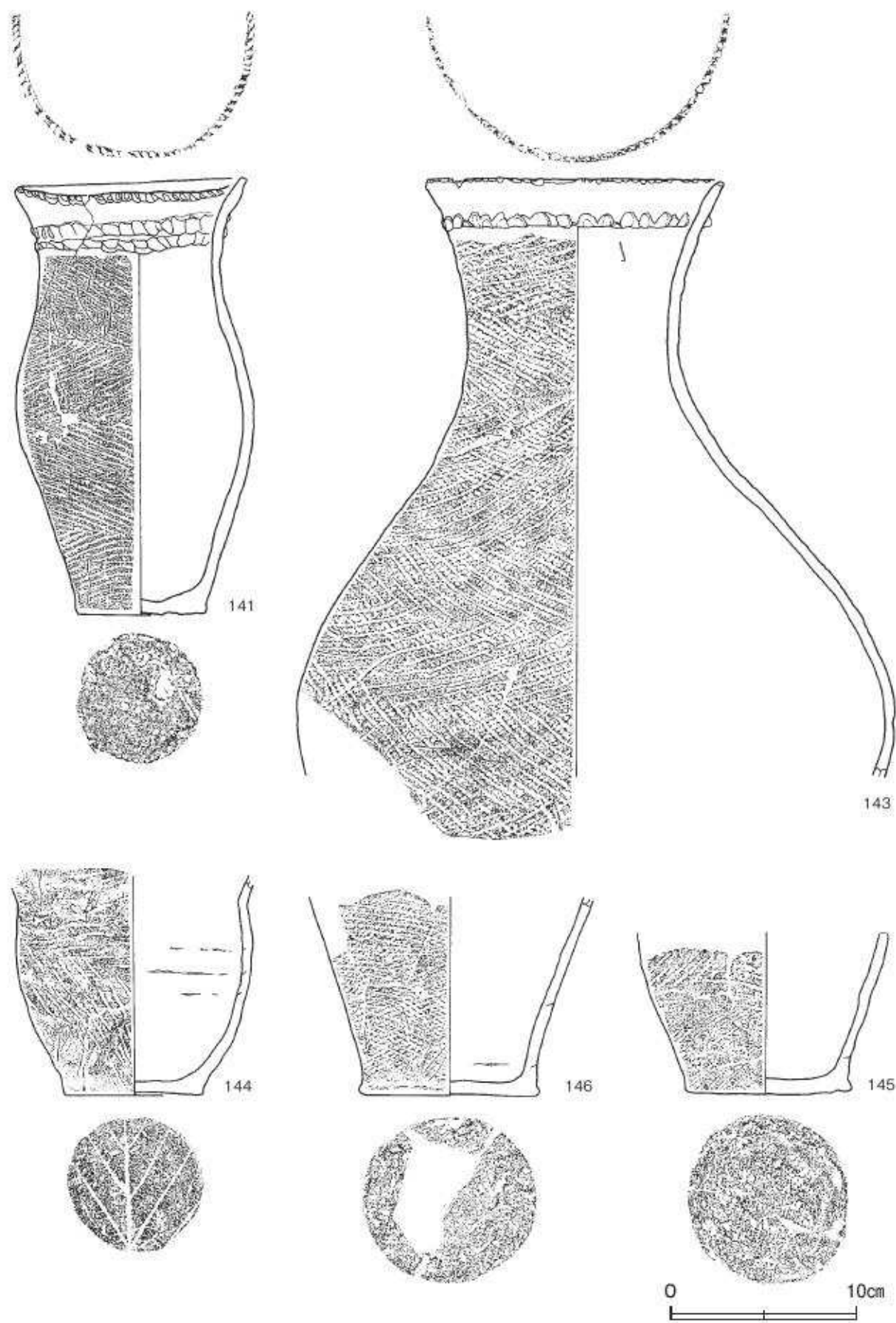
覆土 6層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

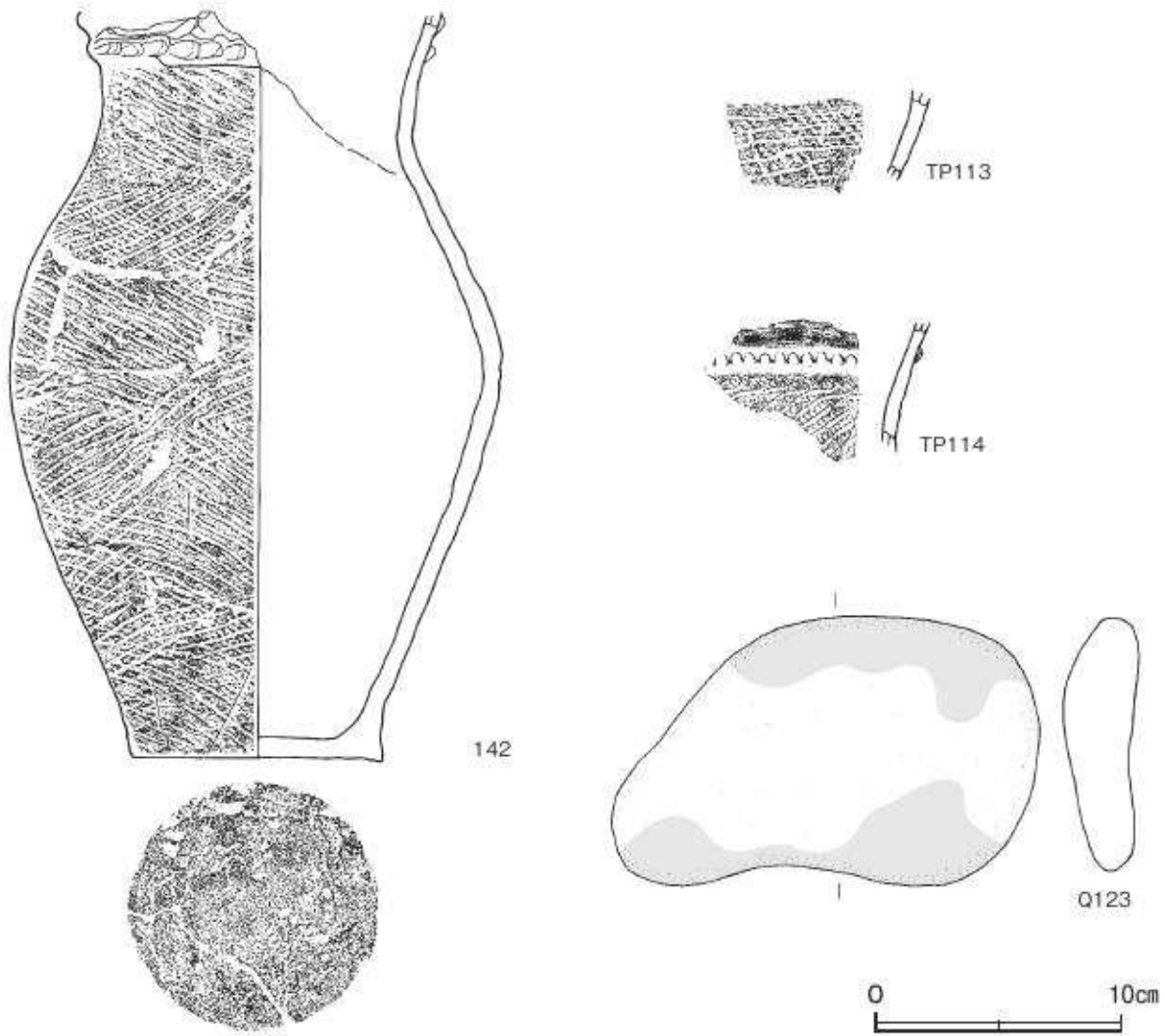
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒色 | ローム粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 略褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 弥生土器片 343 点（広口壺）、石器 5 点（磨石 2、敲石 1、凹石 1、炉石 1）、剥片 5 点、自然礫 1 点のほか、縄文土器片 9 点が出土している。141 は北西壁際の床面、143 は北西壁際の覆土下層から、いずれも口縁部が北西方向の横位で出土している。142 は南コーナー部の床面と北西部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。144 は南コーナー部の床面、145 は北東部、146 は南西部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第 93 图 第 8 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)



第94図 第8号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第8号竪穴建物跡出土遺物観察表(第93・94図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
141	弥生土器	広口壺	121	234	67	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部に刻み目・頸部上位に押圧のある微隆帯2条・胴部附加条二種(附加1条)縄文を施文	床面	90% PL31
142	弥生土器	広口壺	-	303	100	長石・石英	にぶい黄橙	普通	頸部上位に押圧のある微隆帯2条・胴部附加条一種(附加2条)縄文を羽状構成で施文	覆土下層-床面	80% PL32
143	弥生土器	広口壺	157	321	-	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部縄文原形押圧・腹谷口縁の下端部を波状に押圧・胴部附加条一種(附加2条)縄文を羽状構成で施文	覆土下層	50% PL32
144	弥生土器	広口壺	-	(118)	72	長石・石英	にぶい褐	普通	胴部附加条二種(附加1条)縄文を羽状構成で施文・底部本葉痕	床面	30%
145	弥生土器	広口壺	-	(87)	89	長石	にぶい黄橙	普通	胴部附加条二種(附加1条)縄文を羽状構成で施文・底部砂目痕	覆土下層-床面	30%
146	弥生土器	広口壺	-	(107)	95	長石・石英	橙	普通	胴部附加条二種(附加1条)縄文を羽状構成で施文・底部砂目痕	覆土下層-床面	30%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP113	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	灰褐	胴部附加条二種(附加1条)縄文を施文	床面	
TP114	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	黒褐	口縁部に押圧のある微隆帯・頸部附加条一種(附加1条)縄文施文	床面	

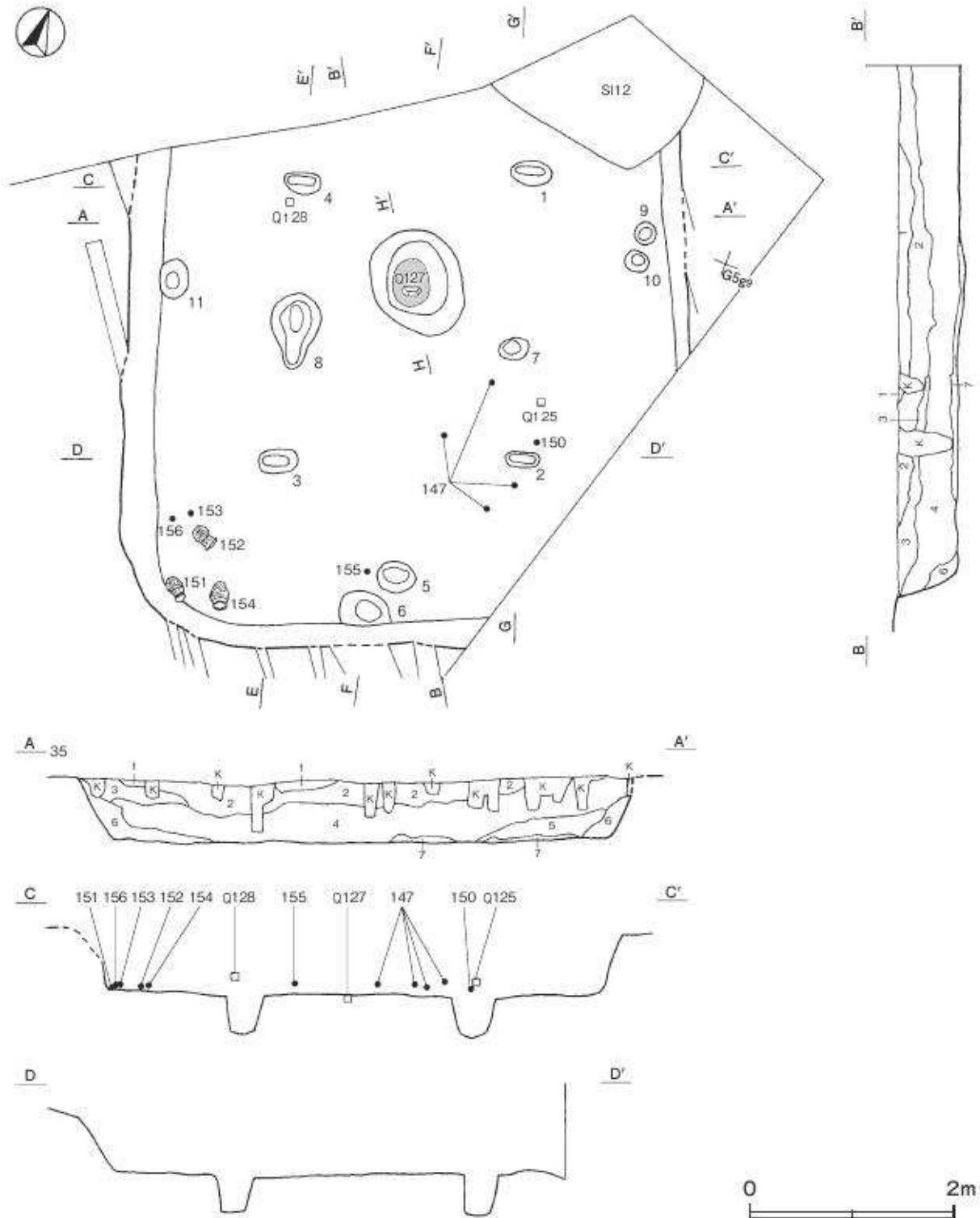
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q123	伊石	109	173	30	7325	砂岩	火や熱を受けた痕跡	加床面	

第 11 号竪穴建物跡 (第 95 ~ 98 図)

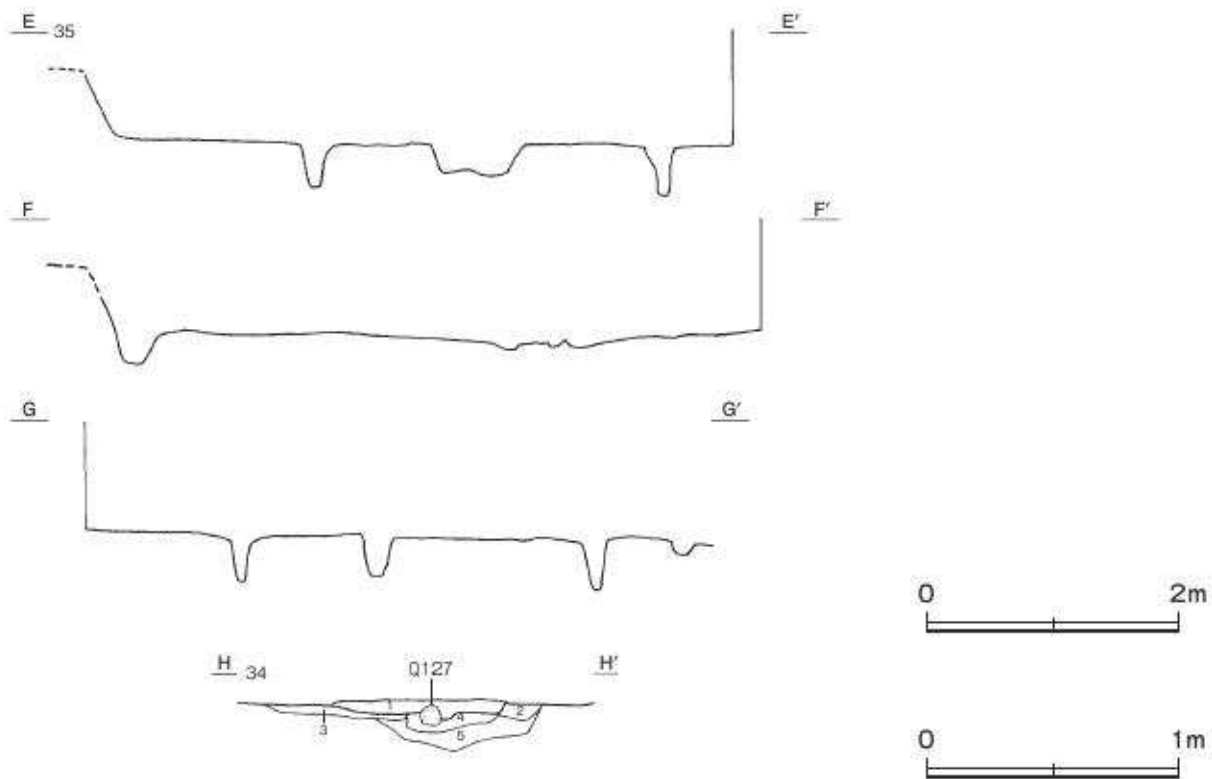
位置 調査区中央部の G 5 g8 区, 標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 12 号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 北部と南東部が調査区域外に延びているため, 東西軸は 5.64 m で, 南北軸は 5.48 m しか確認できなかった。平面形は隅丸長方形と推定でき, 主軸方向は N-17°-W である。壁高は 59 ~ 61 cm で, 壁は外傾して立ち上がっている。



第 95 図 第 11 号竪穴建物跡実測図 (1)



第96図 第11号竪穴建物跡実測図(2)

床 平坦で、明らかな硬化面は認められない。

炉 中央部に付設されている。長径106cm、短径89cmの楕円形で、深さ13cmの地床炉である。炉床は皿状に掘りくぼめられ、炉床面には石が据えられている。炉床面は、火を受けて赤変硬化している。第4層上面が炉床面である。

炉土層解説

- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 5 黄褐色 ロームブロック多量、焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | |

ピット 11か所。P1～P4は深さ32～39cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ26cmで、南東壁際に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6～P11は深さ24～34cmで、性格は不明である。

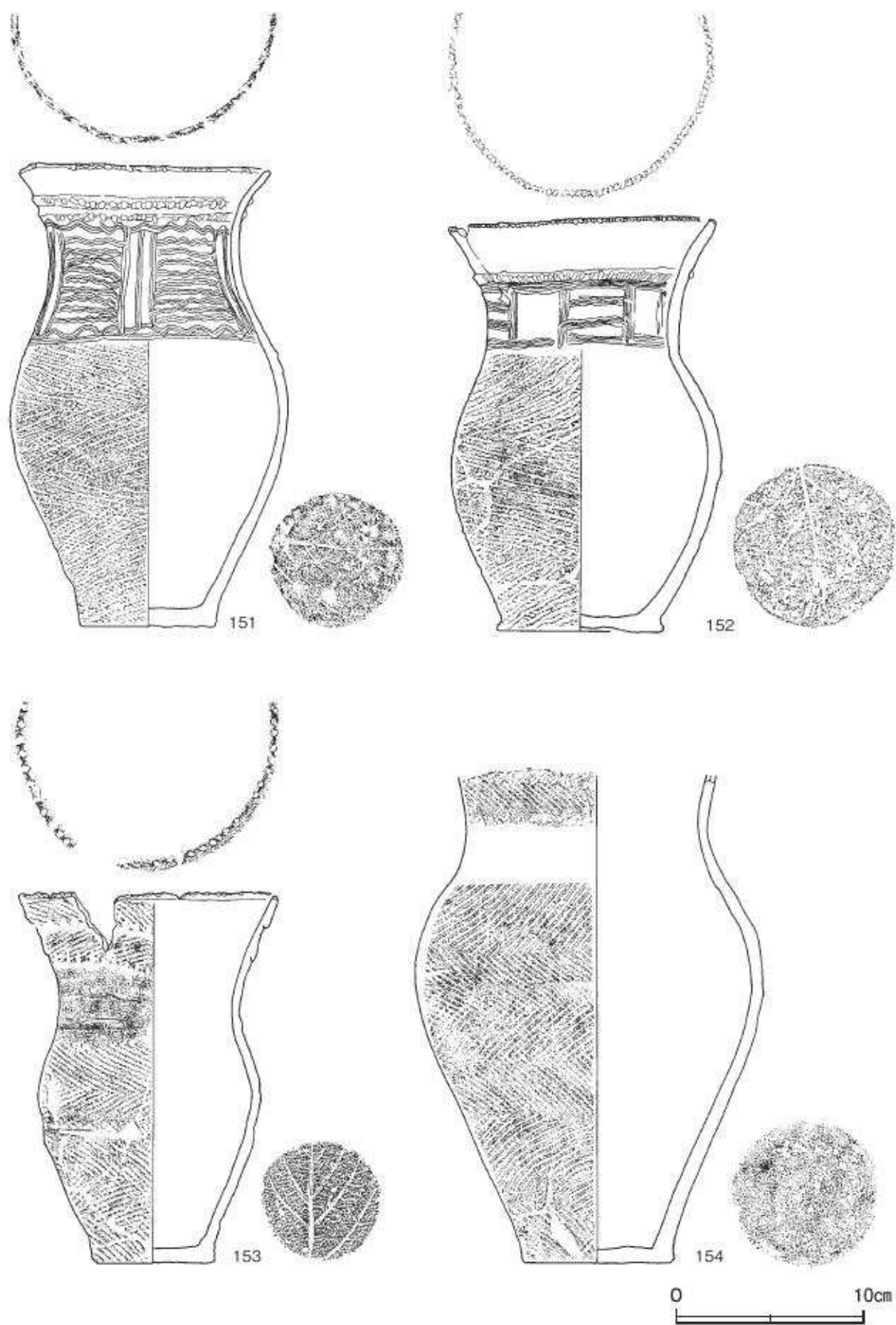
覆土 7層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

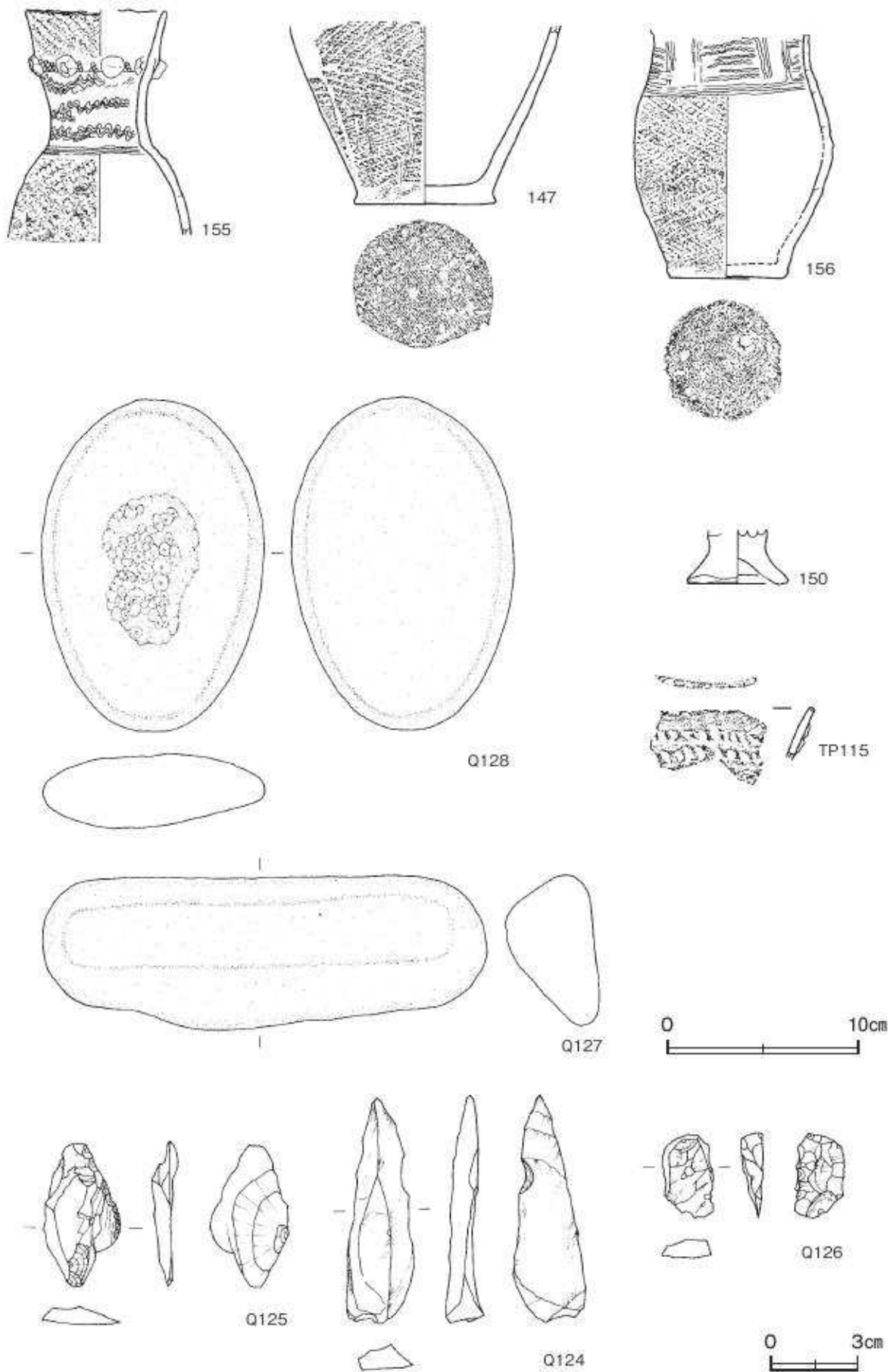
- | | |
|---------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子微量 | 6 褐色 ロームブロック多量 |
| 3 褐灰色 ローム粒子微量 | 7 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | |

遺物出土状況 弥生土器片213点(高坏形土器1, 広口壺212), 石器2点(台石, 炉石), 剥片3点, 自然礫23点, 粘土塊2点が出土している。151～154・156は南コーナー部の床面, 154は覆土下層から口縁部が南東方向の横位の状態でそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第 97 図 第 11 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)



第 98 图 第 11 号竖穴建物跡出土遺物実測图 (2)

第 11 号竖穴建物跡出土遺物観察表 (第 97・98 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
150	弥生土器	高坏形土器	-	(28)	5.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	普通	ナデ調整	覆土下層	10% PL34
147	弥生土器	広口壺	-	(9.2)	7.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	普通	胴部附加条二種(附加1条)縄文を羽状構成で施文。底部布目痕	覆土下層	20%
151	弥生土器	広口壺	13.3	24.7	7.2	長石・石英	にぶい褐色	普通	口唇部縄文原形押圧。胴部柳筒状工具(3本)による縦区画間に波状文を充填。胴部附加条二種(附加1条)縄文を羽状構成で施文	床面	95% PL31
152	弥生土器	広口壺	13.9	22.2	8.6	長石・石英・雲母	褐色	普通	口唇部に割目。胴部柳筒状工具(5本)による縦区画間に波状文を充填。胴部附加条二種(附加1条)縄文を羽状構成で施文	床面	95% PL33
153	弥生土器	広口壺	13.7	19.8	6.1	長石・石英	褐色	普通	口唇部：複合口縁の下縁部に原形押圧。胴部附加条一種(附加2条)を羽状構成で施文	床面	80% PL33
154	弥生土器	広口壺	-	(26.1)	8.0	長石・石英	にぶい褐色	普通	胴部縄文。胴部附加条一種(附加2条)縄文を羽状構成で施文。底部砂目痕	床面	70% PL32
155	弥生土器	広口壺	[7.1]	(11.6)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口唇部に原形押圧及び貼着。胴部柳筒状工具(3本)による波状文。口縁部・胴部に附加条一種(附加2条)縄文を羽状構成で施文	覆土下層	20% PL33
156	弥生土器	広口壺	-	(12.6)	5.9	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄褐色	普通	胴部柳筒状工具(4本)による2条一単位の縦区画で4分割。4か所に波状文を充填	床面	70% PL34

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP115	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	赤褐色	口唇部原形押圧。口縁部棒状工具による押圧のある微隆帯	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q124	割片	7.9	2.3	0.8	14.3	安山岩	側縁部に刃部を形成	覆土中	PL42
Q125	割片	4.9	2.7	0.9	7.4	安山岩	側縁部に2次調整痕を有する	覆土下層	PL42
Q126	割片	2.8	1.8	0.7	2.9	瑪瑙	端部に2次調整痕を有する	覆土中	
Q127	炉石	7.9	22.8	4.8	1394.9	安山岩	火や熱を受けた痕跡	炉床面	PL38
Q128	台石	17.2	11.5	3.8	1023.1	砂岩	わずかなくはみに痕状の敲打痕を有する	覆土下層	PL38

第 14 号竖穴建物跡 (第 99・100 図)

位置 調査区中央部の F 5j9 区、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 105 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 4.60 m、短軸 3.44 m の隅丸長方形で、主軸方向は N-25°-E である。壁高は 20 ~ 26 cm で、壁は直立している。

床 平坦で、出入り口部から炉の周囲にかけて踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。径 80 cm の円形で、深さ 8 cm の地床炉である。炉床は皿状に掘りくぼめられ、炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|------------------------------|-------------------------|
| 1 黒色 炭化粒子多量、ローム粒子微量 | 3 暗赤褐色 焼土粒子中量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 にぶい赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子微量 |

ピット 7 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 51 ~ 65 cm で、規模と配置から支柱穴と考えられる。P 5 は深さ 22 cm で、南西壁際に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6・P 7 は深さ 23 cm・7 cm で、性格は不明である。

覆土 9 層に分層できる。第 1 層は周囲から土砂が流入した堆積状態で自然堆積である。第 2 ~ 9 層は、炭化物や焼土、ロームブロックが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。第 10 ~ 13 層は、堆積していた焼土の土層である。

土層解説

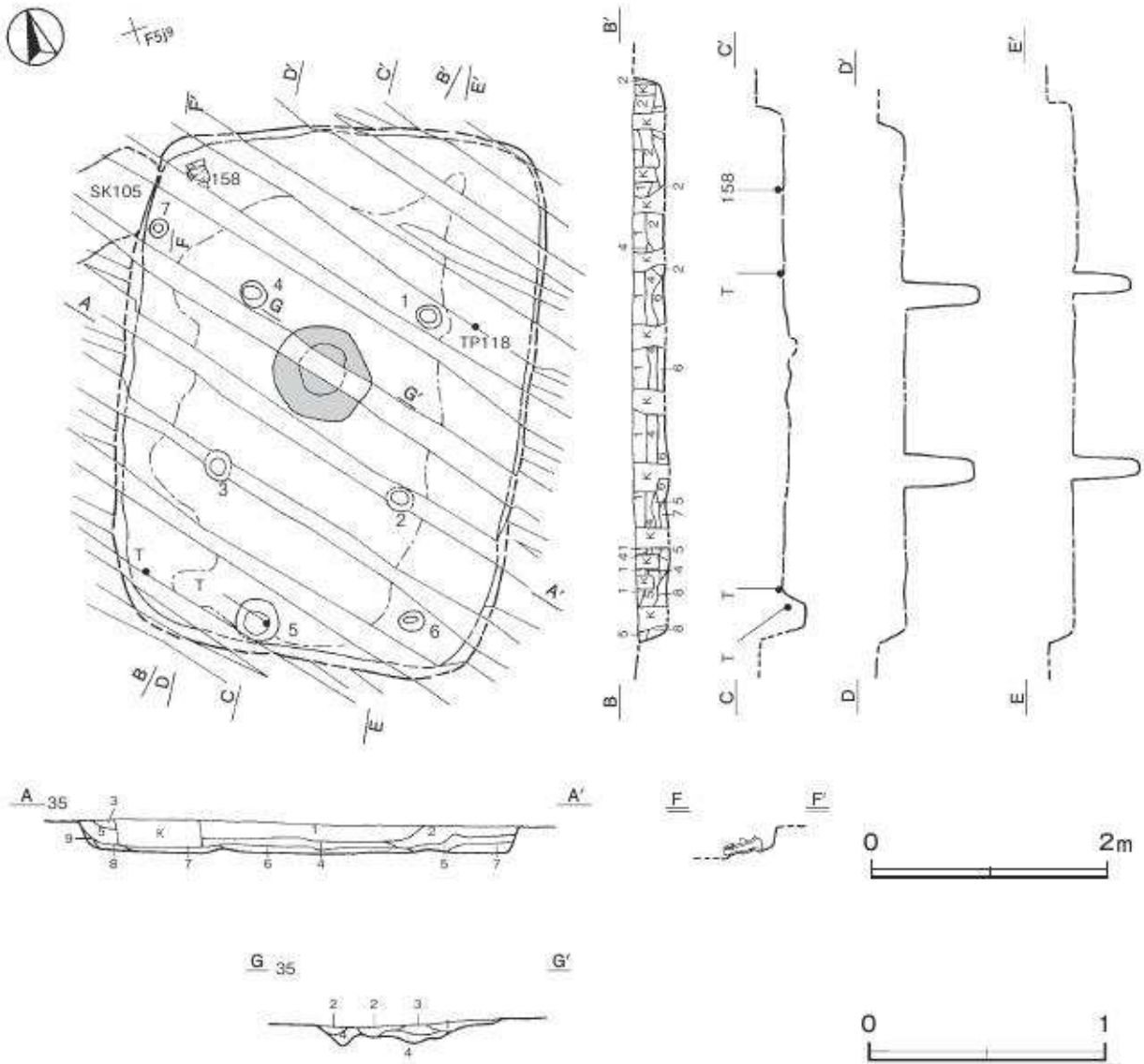
- | | |
|-------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 極暗褐色 炭化物・焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 6 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化物少量、ローム粒子微量 |

- 7 黒褐色 炭化物中量、ローム粒子少量
- 8 極暗褐色 炭化粒子中量、ローム粒子少量
- 9 褐色 ローム粒子多量
- 10 極暗褐色 焼土粒子少量、炭化物微量

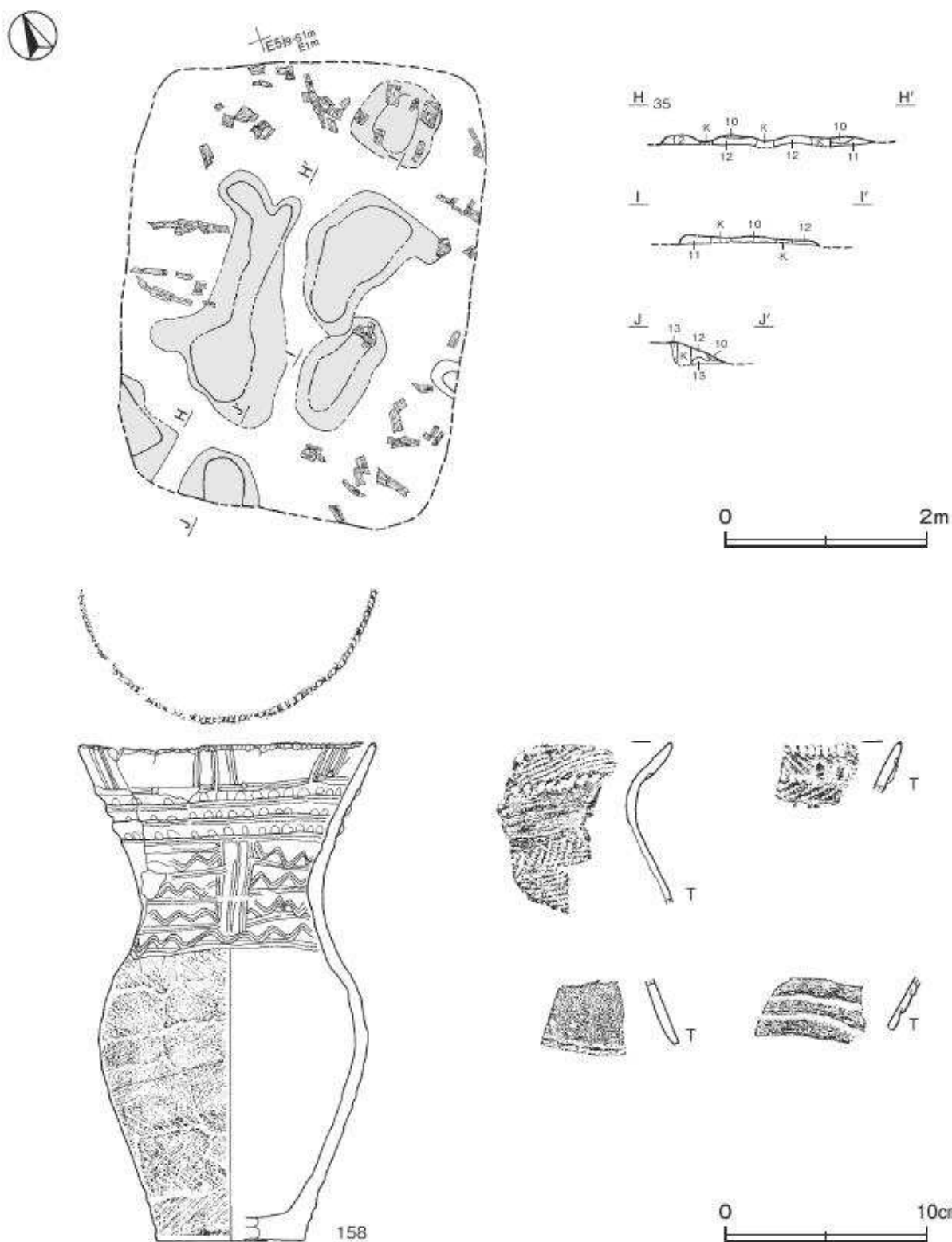
- 11 極暗褐色 焼土粒子中量、炭化物少量
- 12 赤褐色 焼土粒子多量、炭化物少量
- 13 極暗褐色 焼土ブロック・炭化物微量

遺物出土状況 弥生土器片 59 点（高坏形土器 1、広口壺 57、手捏土器 1）、土製品 1 点（紡錘車）、剥片 22 点、自然礫 9 点のほか、縄文土器片 9 点が出土している。158 は、北西コーナー部の床面から口縁部が北方向の横位で出土している。TP118 は南部の床面、TP119 は P 5 の覆土上層からそれぞれ出土している。また、多量の焼土が中央部から、散在するように炭化材や炭化物が壁際から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。炭化材の出土位置が柱穴の配置や部材の方向性を示す状況ではないことと、床面の中央部は炭化材の出土が少なく、火や熱を受けて広く赤変し、最も燃焼した部分と見られることから、建物の廃絶に際して、部材などを集めて燃やしたものと考えられる。



第 99 図 第 14 号竪穴建物跡実測図



第100図 第14号竖穴建物跡・出土遺物実測図

第14号竖穴建物跡出土遺物観察表（第100図）

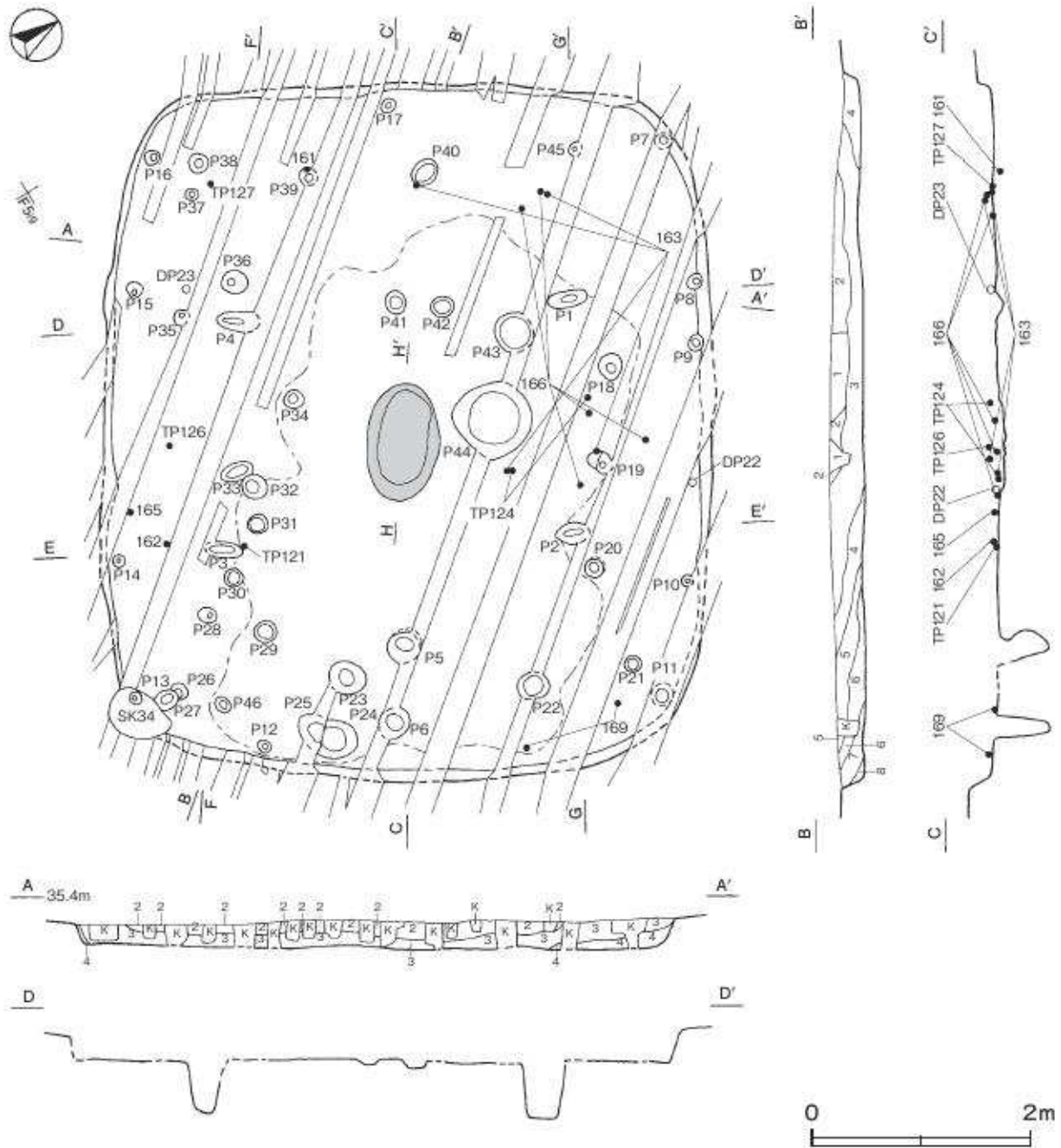
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
158	弥生土器	広口壺	[14.4]	24.9	[7.3]	長石・石英・黒色粒子	にぶい黄褐色	普通	口唇部に刻み目、口縁部極薄状工具「目本」による縦区画間に横走文と波状文を无填、胸部附加条1種（附加2条）鈍文を羽状構成で施文	床面	70% PL33

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP117	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	赤褐色	口縁部棒状工具押圧による押圧のある微隆帯	覆土中	
TP118	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	複合口縁下部部に棒状工具による押圧 口縁部：胴部附加条一様（附加2条）縄文施文	床面	
TP119	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	灰褐色	胴部棒状工具（4本）による沈線文	P5 覆土土層	
TP120	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	暗褐色	口縁部輪痕を残す	床面	

第15号竪穴建物跡（第101～103図）

位置 調査区中央部のF5h9区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第34号土坑に掘り込まれている。



第101図 第15号竪穴建物跡実測図（1）

規模と形状 長軸 6.46 m、短軸 5.60 m の隅丸長方形で、主軸方向は N-55°-W である。壁高は 15～30cm で、壁は直立している。

床 平坦で、出入り口部から炉の周囲にかけて踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。長径 107cm、短径 63cm の楕円形で、深さ 9cm の地床炉である。炉床は皿状に掘りくぼめられ、炉床面は火を受けて赤変硬化している。第 6 層上面が炉床面である。

炉土層解説

- | | |
|----------------------------|-------------------------------|
| 1 極暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 極暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量 | 5 濃い赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量、ローム粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 6 褐色 ロームブロック多量、焼土粒子少量 |

ピット 45 か所。P 1～P 4 は深さ 44～54cm で、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5・P 6 は深さ 49cm・56cm で、南壁際に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 7～P 17 は深さ 14～40cm で、壁際に規則的に配列されていることから壁柱穴の可能性がある。P 18～P 45 は深さ 4～30cm で性格は不明である。

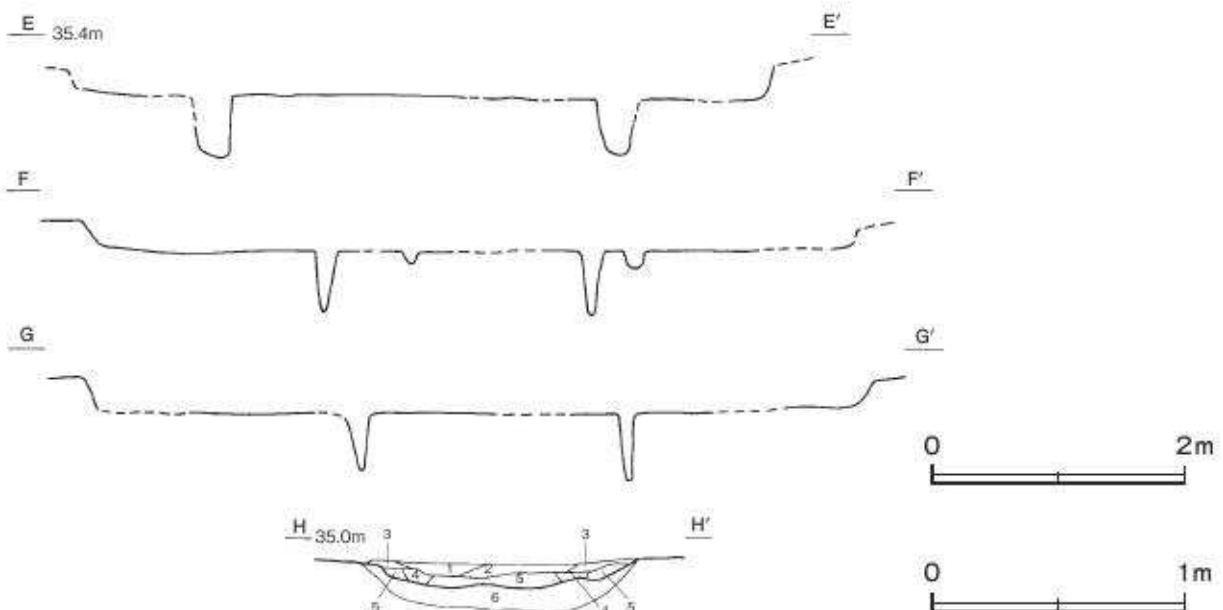
覆土 8 層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

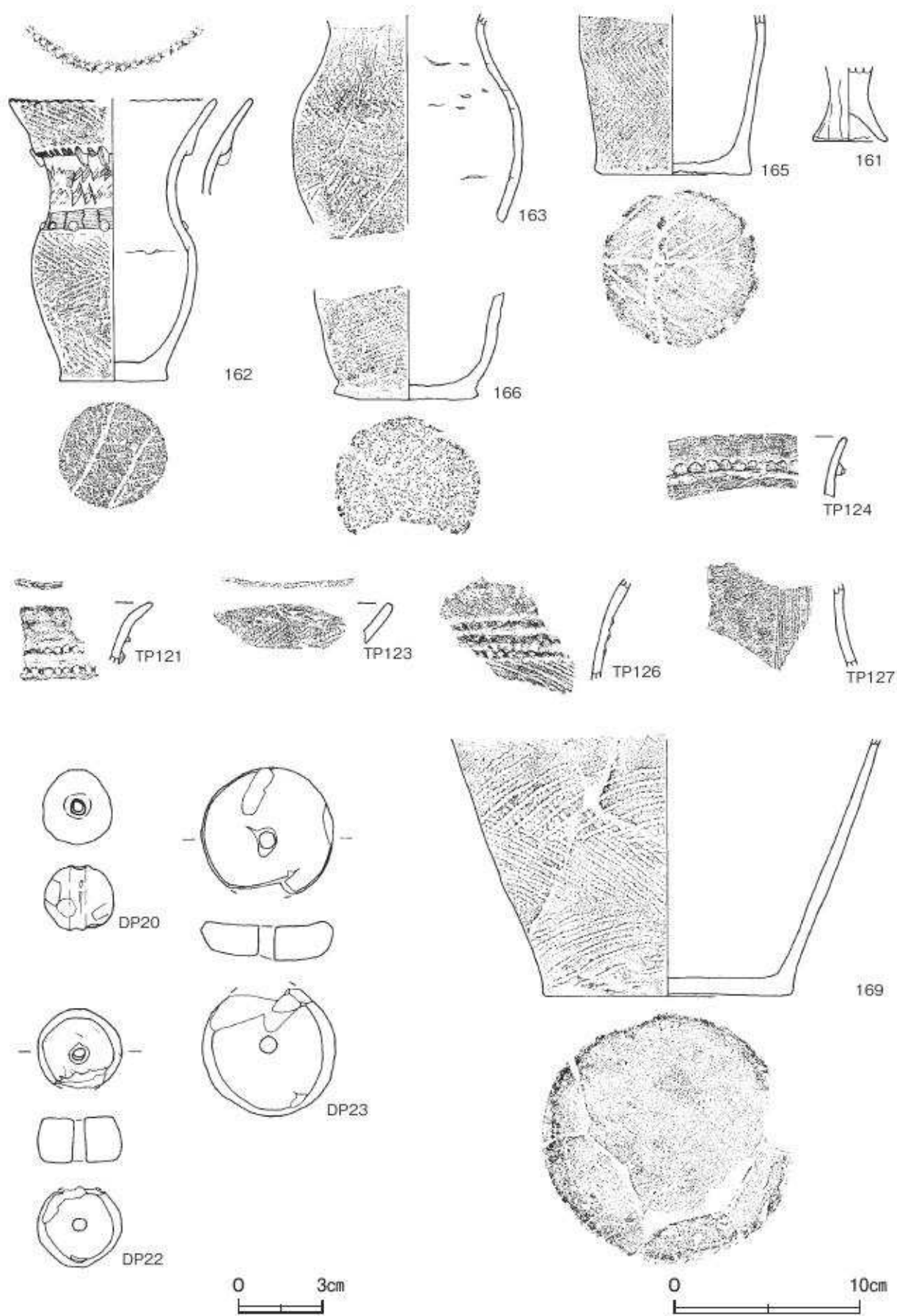
- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1 極暗褐色 炭化粒子少量 | 5 極暗褐色 炭化粒子中量、ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子微量 | 6 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 3 暗褐色 炭化粒子微量 | 7 暗褐色 炭化粒子中量、ローム粒子微量 |
| 4 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量 | 8 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 |

遺物出土状況 弥生土器片 438 点（高坏形土器 1、広口壺 437）、土製品 3 点（土玉 1、紡錘車 2）、剥片 3 点、破断面のある礫 6 点、自然礫 9 点、粘土塊 1 点のほか、縄文土器片 25 点、土製品 1 点（土器片円盤）が覆土全体から出土している。169 は、東コーナー部の覆土下層から床面にかけて出土している。162 は南コーナー部の覆土下層、161 は西コーナー部の床面から出土している。166 は北コーナー付近の覆土下層から出土した破片が接合したものである。TP121 は P 3 付近の床面、TP124 は中央部北東寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第 102 図 第 15 号竪穴建物跡実測図 (2)



第 103 图 第 15 号竖穴建物跡出土遺物実測図

第 15 号竖穴建物跡出土遺物観察表 (第 103 図)

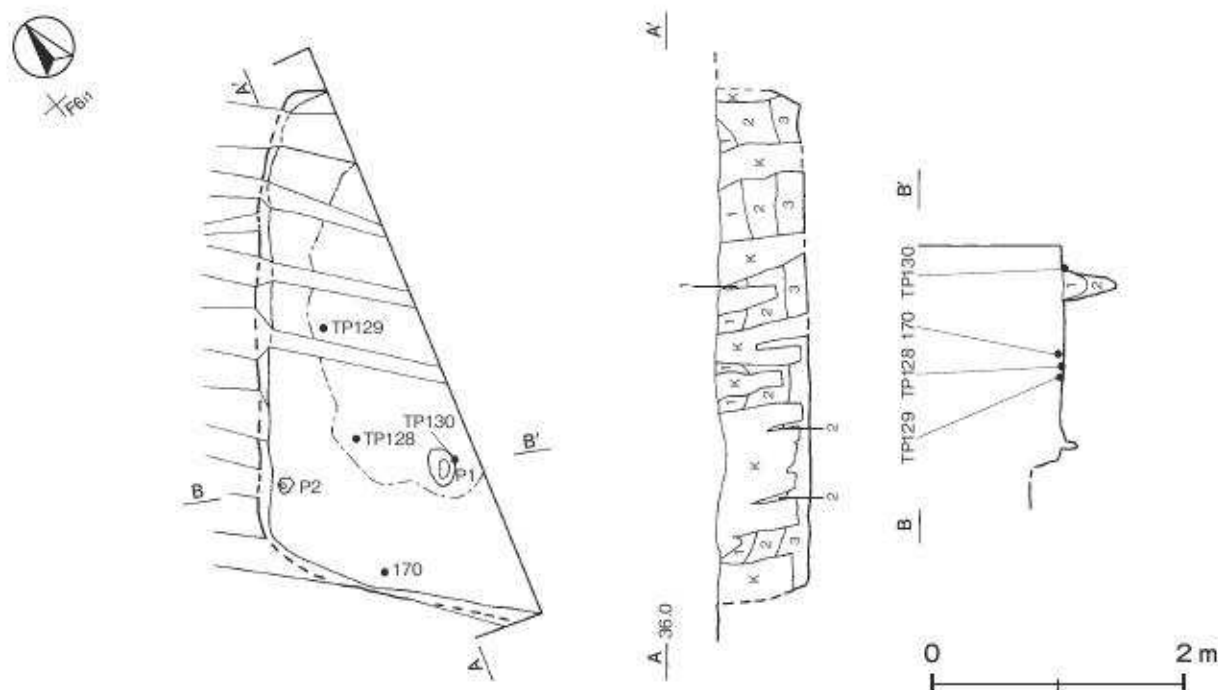
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
161	赤生土器	高坏形土器	-	(4.0)	[4.0]	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	胸部縦位方向のナデ調整	床面	10% PL34
162	赤生土器	広口壺	[11.0]	15.3	5.8	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部・複合口縁の下腹部に原形押圧と彫刻 頸部櫛状工具 (3本) による波状文 頸部下 位櫛状文施文後、ボタン状の貼付	覆土下層	50% PL33
163	赤生土器	広口壺	-	(11.3)	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい橙	普通	頸部素文・胸部附加条一種 (附加2条) 縄文を 羽状構成で施文	覆土上層 - 下層	10%
165	赤生土器	広口壺	-	(8.6)	8.3	長石・石英	橙	普通	胸部附加条一種 (附加2条) 縄文を羽状構成で 施文 底部木葉表	覆土下層	20%
166	赤生土器	広口壺	-	(6.0)	7.8	長石・石英	浅黄橙	普通	胸部附加条二種 (附加1条) 縄文を羽状構成で 施文 底部砂目痕	覆土下層	30%
169	赤生土器	広口壺	-	(13.9)	13.6	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい黄橙	普通	胸部附加条二種 (附加1条) 縄文を羽状構成で 施文 底部砂目痕	覆土上層 - 床面	20% PL32

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP121	赤生土器	広口壺	長石・石英	にぶい黄橙	口唇部原形押圧の痕跡残存 頸部上位に棒状工具による押圧の ある微隆帯2条	床面	
TP123	赤生土器	広口壺	長石・石英	にぶい橙	口唇部原形押圧 口縁部附加条一種 (附加1条) 縄文施文	覆土中	PL40
TP124	赤生土器	広口壺	長石・石英	にぶい褐	口唇部棒状工具による押圧のある微隆帯 頸部附加条二種縄文 施文	覆土下層	PL40
TP126	赤生土器	広口壺	長石・石英	にぶい黄橙	口唇部押圧のある微隆帯 頸部附加条一種 (附加2条) 縄文施文	覆土下層	
TP127	赤生土器	広口壺	長石・石英・雲母	にぶい褐	頸部櫛状工具 (3本) による縦区画の沈線文及び波状文を施文	床面	

番号	器種	径	厚さ (長さ)	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP20	土玉	2.8	2.3	0.6	(15.9)	石英・雲母	橙	一方向からの穿孔 ナデ	覆土中	
DP22	紡錘車	3.0	1.6	0.45	(15.0)	長石・石英	にぶい黄橙	一方向からの穿孔 ナデ	覆土下層	PL37
DP23	紡錘車	4.8	1.4	0.5	(30.0)	長石・石英	にぶい橙	一方向からの穿孔 ナデ	覆土下層	PL37

第 16 号竖穴建物跡 (第 104・105 図)

位置 調査区中央部の F 6 il 区、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。



第 104 図 第 16 号竖穴建物跡実測図

規模と形状 東部が調査区域外に延びているため、北東・南西軸は 3.91 m で、北西・南東軸は 1.92 m しか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定でき、北東・南西軸方向は N-41°-E である。壁高は 20～25cm で、壁は外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

ピット 2 か所。P 1 は深さ 43cm で、規模と位置から支柱穴と考えられる。P 2 は深さ 16cm で、規模と壁際で確認できたことから壁柱穴の可能性はある。

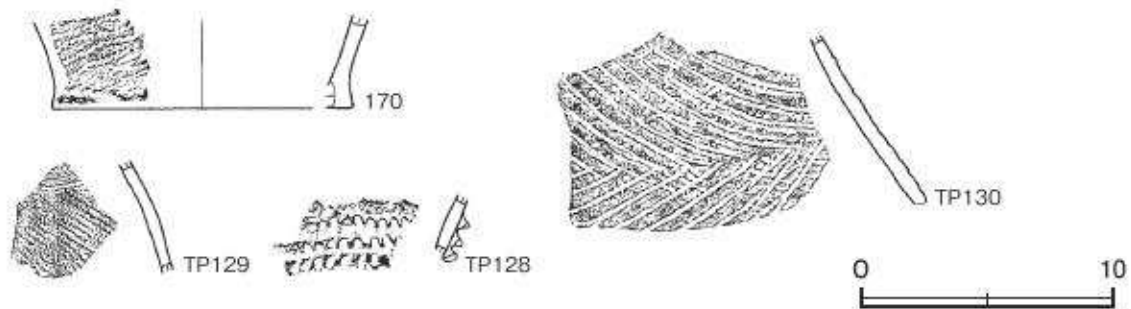
覆土 3層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片 28 点（広口壺）、自然礫 2 点のほか、縄文土器片 7 点が出土している。TP130 は P 1 付近、TP128・TP129 は西部の覆土下層からそれぞれ出土している。170 は西コーナー部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第 105 図 第 16 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 16 号竪穴建物跡出土遺物観察表(第 105 図)

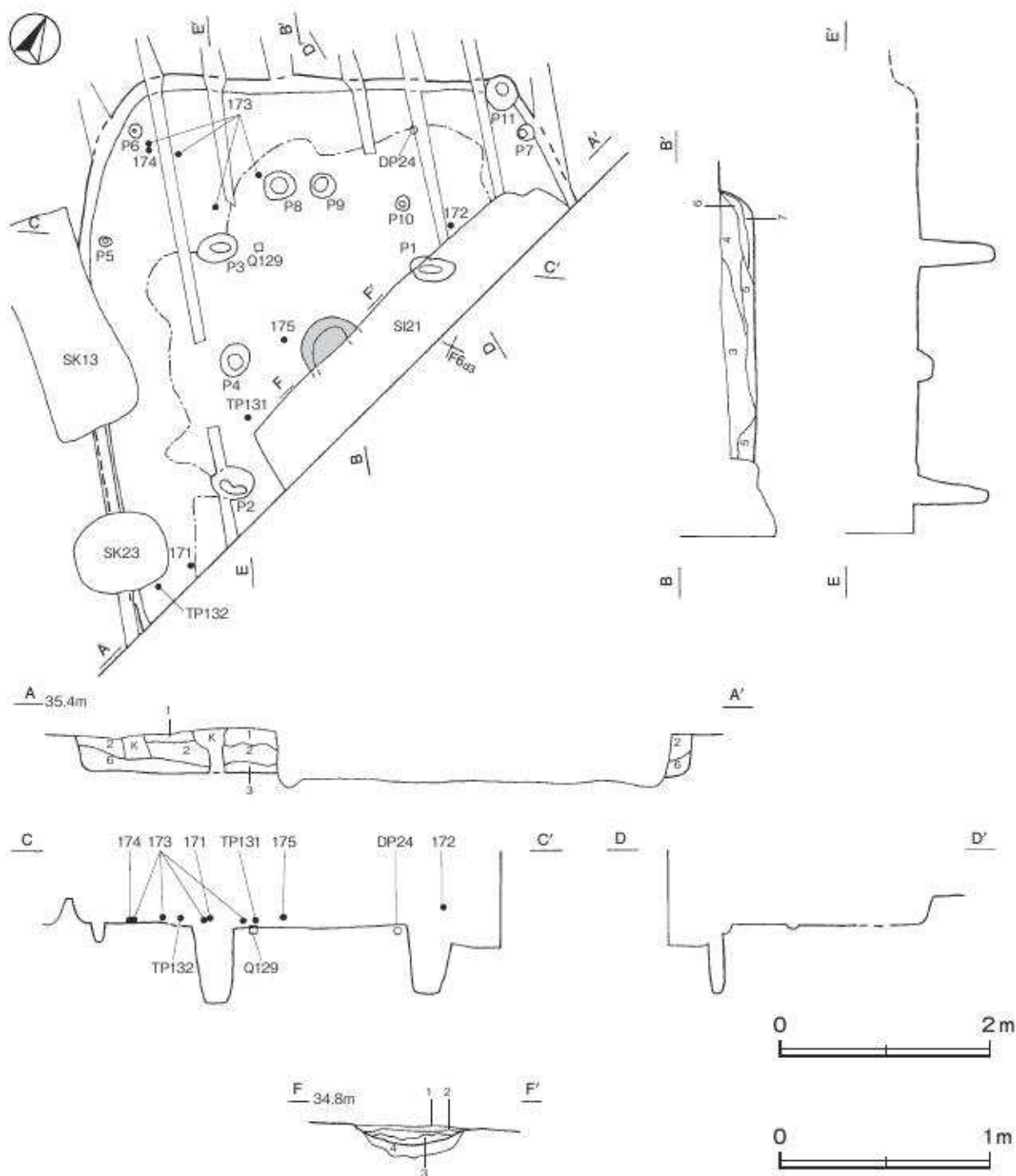
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
170	弥生土器	広口壺	-	(37)	[11.8]	石英・赤色粒子	浅黄	普通	胴部附加条二種（附加1条）縄文施文	床面	10%
TP128	弥生土器	広口壺	長石・石英			にぶい粘			口唇部棒状工具によるゆる押圧のある微隆帯3条	床面	
TP129	弥生土器	広口壺	長石・石英			橙			頸部棒状工具（4本）による沈線文を施文 胴部単節縄文 RLを施文	床面	
TP130	弥生土器	広口壺	長石・石英・赤色粒子			浅黄橙			胴部附加条二種（附加1条）縄文を羽状構成で施文	床面	

第 18 号竪穴建物跡（第 106～108 図）

位置 調査区中央部の F 6 d2 区、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 21 号竪穴建物、第 13・23 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東部が調査区域外に延びているため、北東・南西軸は 4.74 m で、北西・南東軸は 5.36 m しか確認できなかった。平面形は隅丸長方形と推定でき、北西・南東軸方向は N-26°-W である。壁高は 22～33cm で、壁は直立している。



第106図 第18号竪穴建物跡実測図

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。第21号竪穴建物に掘り込まれており、長径58cm、短径32cmしか確認できなかったが、残存している炉床から楕円形と推定できる。深さ10cmの地床炉で、炉床は皿状に掘りくぼめられ、炉床面は火を受けて赤変硬化している。第4層上面が炉床面である。

炉土層解説

- | | |
|------------------------------|------------------------|
| 1 黒色 炭化物多量、ローム粒子微量 | 3 暗赤褐色 焼土粒子中量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 濃い赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子微量 |

ピット 11か所。P 1～P 3は深さ64～74cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 4は深さ15cmで、P 2・P 3の中央に位置していることから補助柱穴の可能性はある。P 5～P 7は深さ21～36cmで、壁際に規則的に配列されていることから、壁柱穴の可能性はある。P 8～P 11は深さ4～28cmで、性格は不明である。

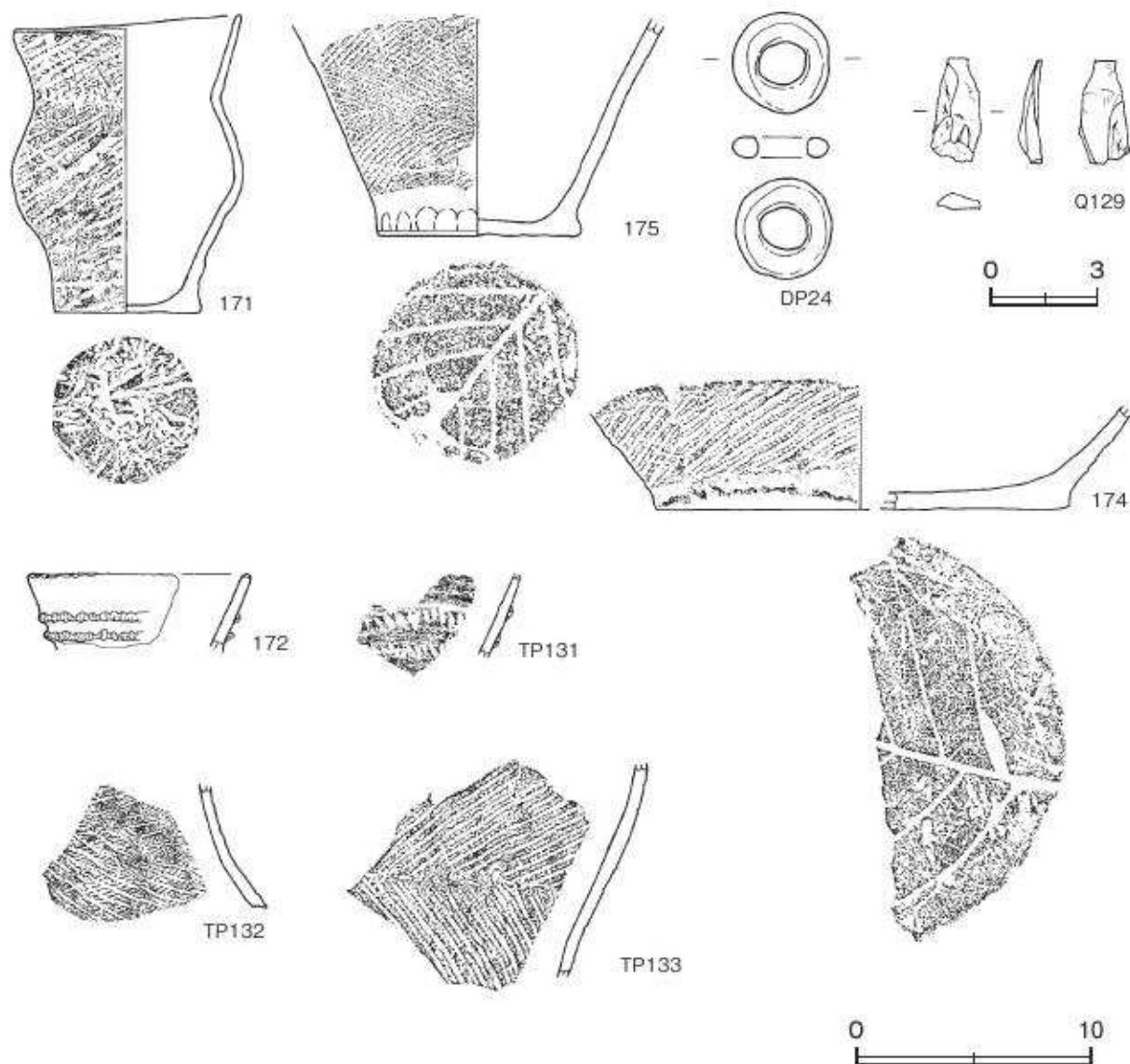
覆土 7層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

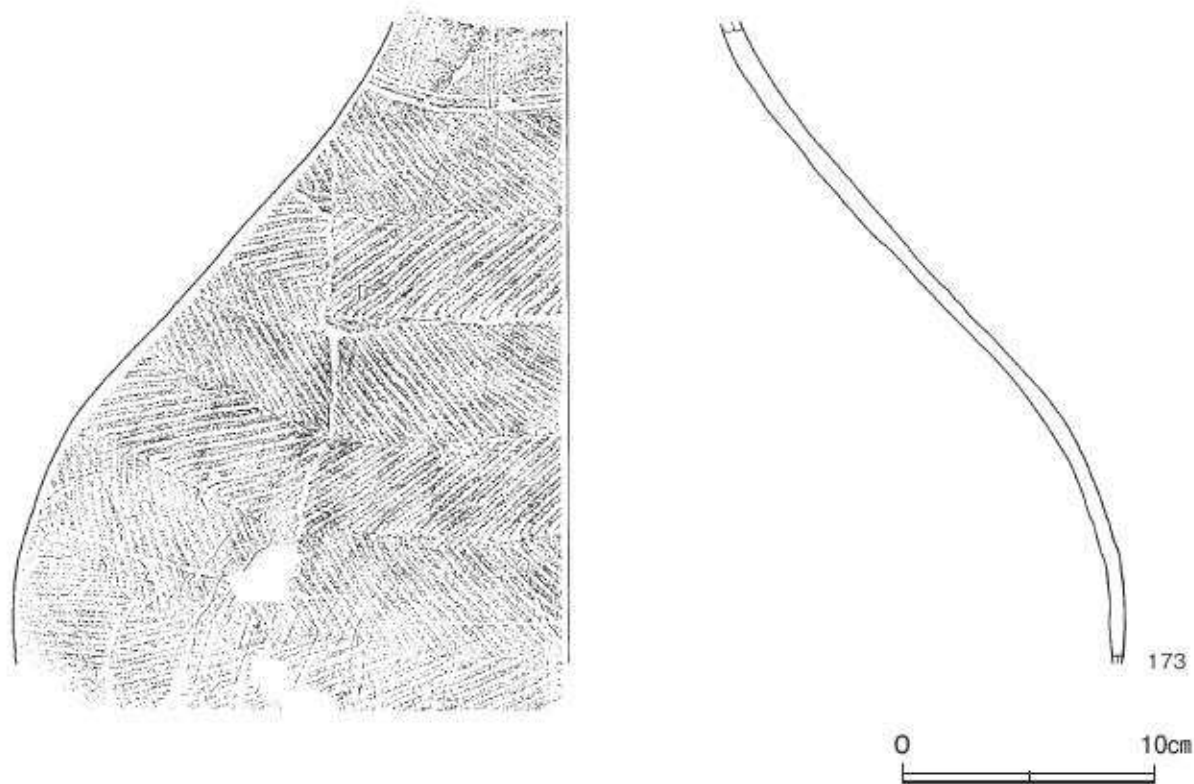
- | | | | |
|-------|------------------|--------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 5 極暗褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子多量 | 6 褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 7 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 弥生土器片110点（広口壺）、土製品1点（環状土製品）、剥片1点、自然礫7点のほか、縄文土器片2点が出土している。171は南壁付近の覆土下層から出土している。173は、西コーナー部の覆土下層にかけて出土した破片が接合したものである。175はP 4付近の覆土下層、TP132は南部の覆土下層、DP24は北コーナー部の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第107図 第18号竪穴建物跡出土遺物実測図（1）



第108図 第18号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第18号竪穴建物跡出土遺物観察表(第107・108図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
171	甕生土器	広口壺	9.5	12.7	6.2	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部下位に縄文原形押圧・口縁部・胴部附加条二種(附加1条)縄文施文	覆土下層	90%・PL33
172	甕生土器	広口壺	(9.2)	(3.3)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原形押圧・口縁部棒状工具による押圧のある微隆帯2条	覆土上層	10%
173	甕生土器	広口壺	-	(25.6)	-	長石・石英	にぶい赤黄	普通	頸部櫛歯状工具(3本)による縦区画・斜格子文と波状文を充填・胴部附加条一種(附加2条)縄文を羽状構成で施文	覆土下層	30%
174	甕生土器	広口壺	-	(4.4)	(17.6)	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄赤	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文・底部木葉痕	覆土下層	10%
175	甕生土器	広口壺	-	(9.3)	8.5	長石・石英	にぶい黄	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文を羽状構成で施文・流筋木葉痕	覆土下層	30%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP131	甕生土器	広口壺	長石・石英	にぶい橙	口唇部原形押圧・口縁部棒状工具による押圧のある微隆帯2条	覆土下層	
TP132	甕生土器	広口壺	長石・石英	にぶい橙	胴部附加条二種(附加1条)縄文を羽状構成で施文	覆土下層	
TP133	甕生土器	広口壺	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	胴部附加条一種(附加2条)縄文を羽状構成で施文	覆土中	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP24	陶土製品	28	0.7	13	5.6	石英・赤色粒子	にぶい黄赤	リング状に成形・ナデ	覆土下層	PL37

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q129	鏡片	29	14	0.6	20	瑪瑙	鋭利な縁縁部を形成	覆土下層	

第19号竪穴建物跡(第109～112図)

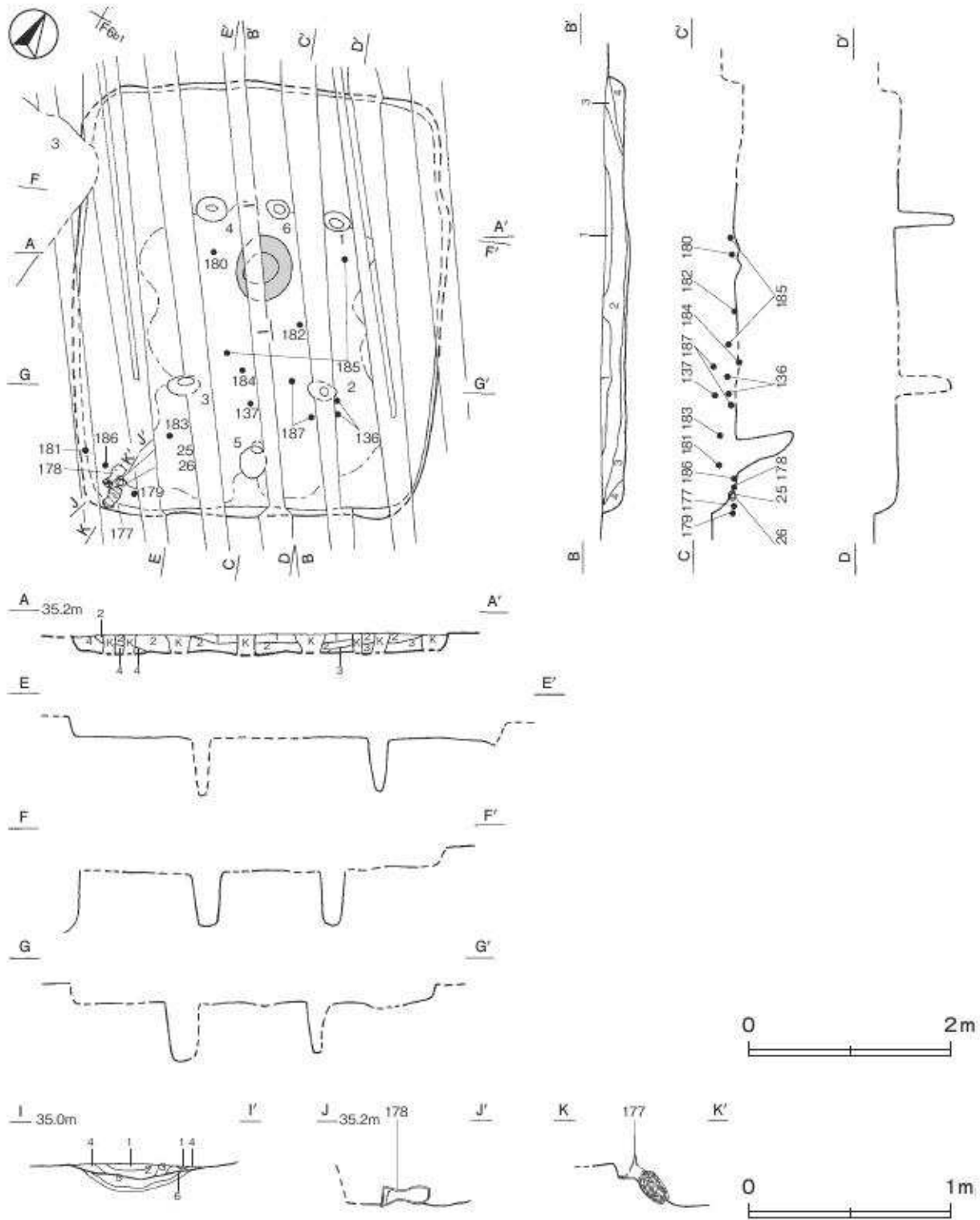
位置 調査区中央部のF6b1区。標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3号竪穴遺構に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.30m、短軸3.67mの長方形で、主軸方向はN-28°-Wである。壁高は10～12cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、出入り口部から炉の周囲にかけて踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。長径64cm、短径55cmの楕円形で、深さ8cmの地床炉である。炉床は皿状に14



第109図 第19号竪穴建物跡実測図

cm掘りくはめられた部分に、ロームや焼土のブロックを多く含む第5・6層を埋め戻して構築されている。炉床面は、火を受けて赤変硬化している。第5層上面が炉床面である。

炉土層解説

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子少量 | 4 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ローム粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量 | 5 暗赤褐色 焼土ブロック多量 |
| 3 黒褐色 焼土粒子中量、ロームブロック微量 | 6 褐色 ロームブロック中量 |

ピット 6か所。P 1～P 4は深さ51～57cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P 5は深さ54cmで南東壁際に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P 6は深さ7cmで、性格は不明である。

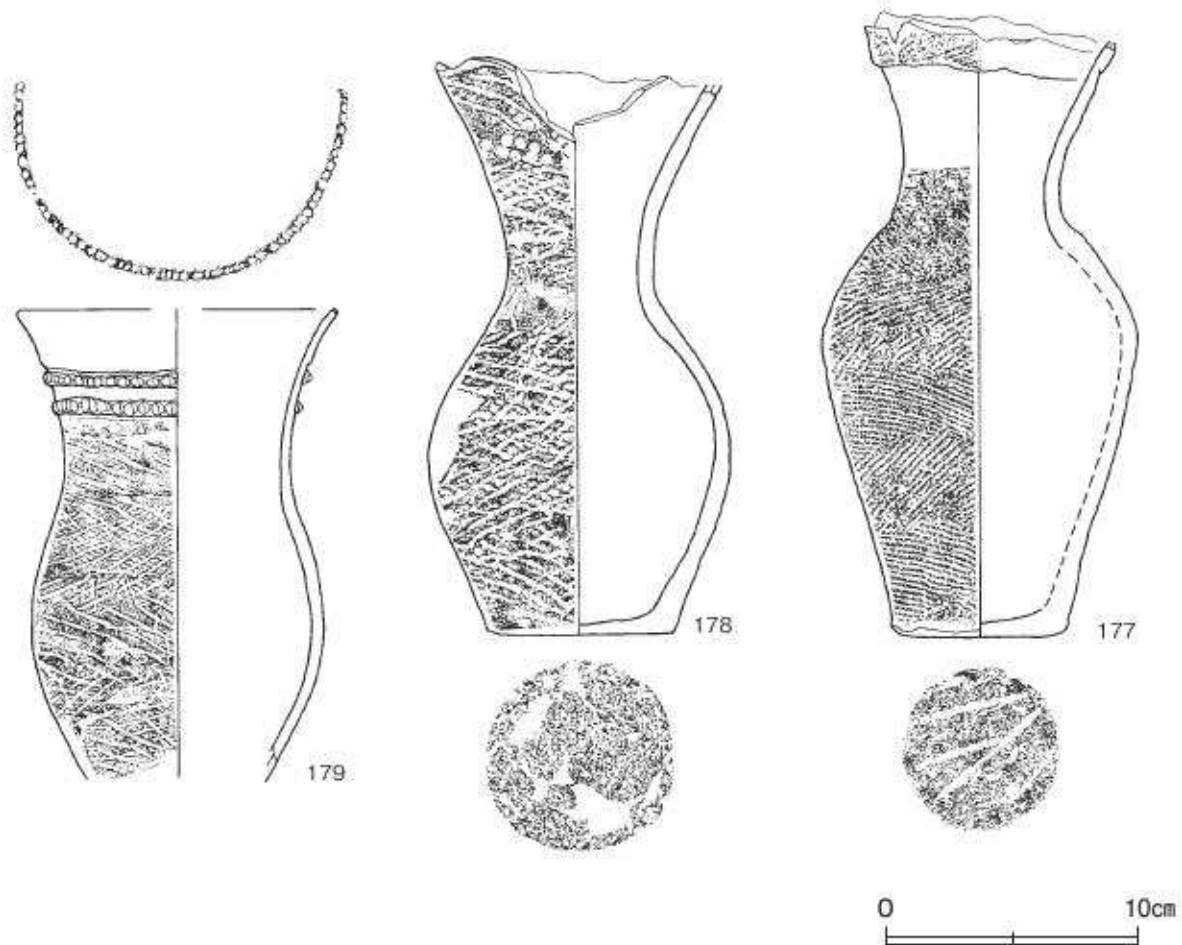
覆土 4層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

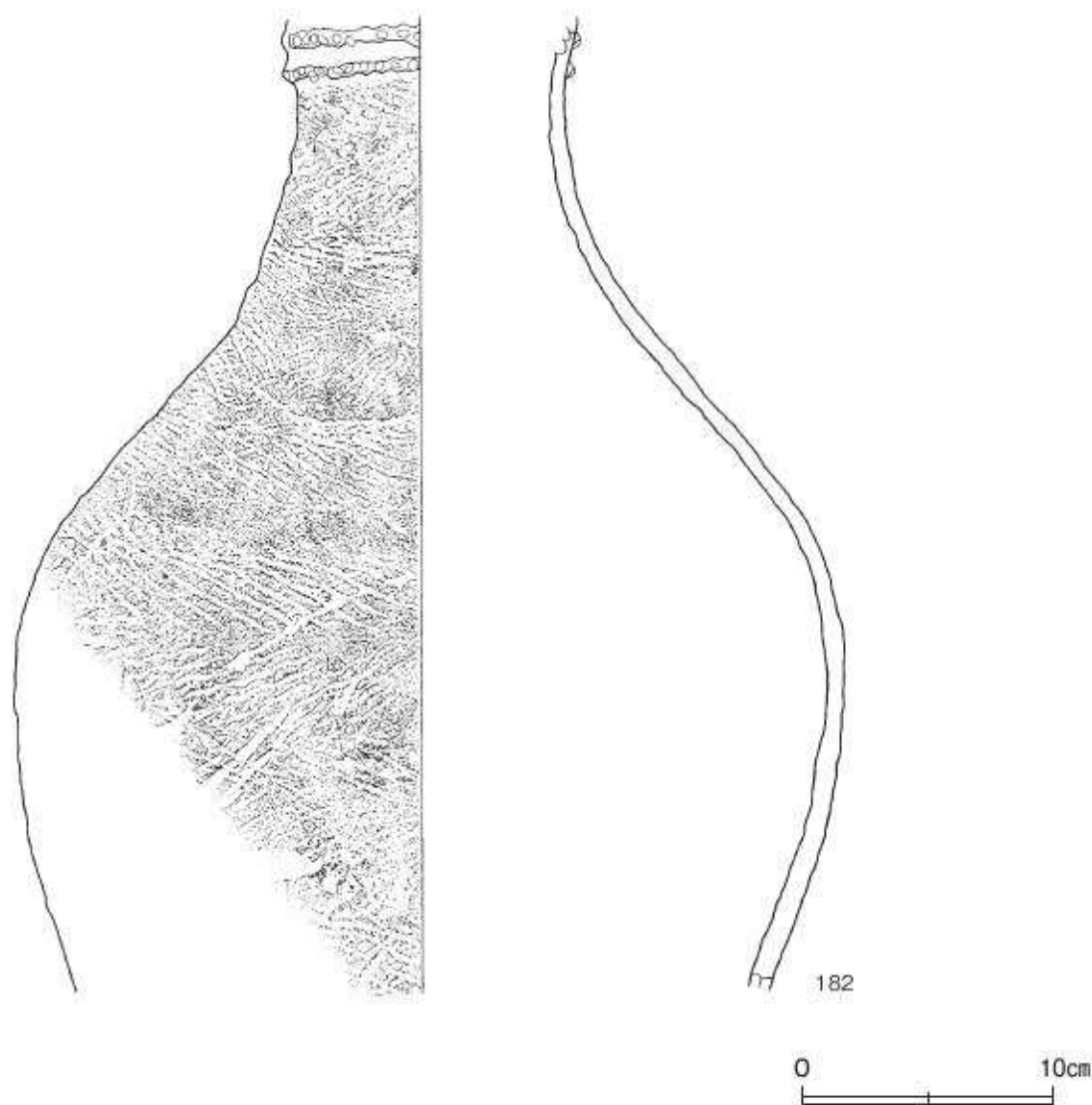
- | | |
|--------------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子少量 | 3 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量 |

遺物出土状況 弥生土器片280点（広口壺）、土製品2点（紡錘車）、石器2点（石錘）、剥片22点、自然礫2点のほか、縄文土器3点が出土している。177・178・179は南コーナー部の床面からまとまって出土しており、177は口縁部が南方向の斜位、178は口縁部が南方向の横位、179は正位で出土している。182は炉の東側、184は炉の南側の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第110図 第19号竪穴建物跡出土遺物実測図（1）



第112図 第19号竪穴建物跡出土遺物実測図(3)

第19号竪穴建物跡出土遺物観察表(第110～112図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
177	弥生土器	広口壺	-	(24.8)	7.0	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	複合口縁に縄文の痕跡、胴部附加条一種(附加2条)縄文を羽状構成で施文。底部本葉痕	床面	95% PL33
178	弥生土器	広口壺	[11.6]	22.7	7.5	長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁部に片口の彩状残存。胴部に円形の刺突文。胴部附加条一種(附加2条)を羽状構成で施文	床面	90% PL33
179	弥生土器	広口壺	12.4	(18.6)	-	長石・石英	灰黄褐色	普通	口唇部縄文全体押圧。胴部捺状工具による押圧のある微隆帯2条。胴部附加条二種(附加1条)縄文を羽状構成で施文	床面	40% PL34
180	弥生土器	広口壺	[21.8]	(4.5)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	複合口縁部下端に刻み目。器面状工具(口縁部4本・胴部3本)による波状文を施文	覆土下層	10% PL40
181	弥生土器	広口壺	-	(5.0)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部捺状工具による押圧のある微隆帯3条。胴部捺状工具(3本)による縦位の区画	覆土上層	10%
182	弥生土器	広口壺	-	(39.6)	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁部捺状工具による押圧。胴部捺状工具による押圧のある微隆帯2条。胴部附加条二種(附加1条)縄文を施文	床面	40%
183	弥生土器	広口壺	-	(4.8)	[13.4]	長石・石英	にぶい褐色	普通	胴部附加条二種(附加1条)縄文施文。底部本葉痕	覆土上層	10%
184	弥生土器	広口壺	-	(23.3)	8.3	長石・石英	にぶい褐色	普通	胴部附加条二種(附加1条)縄文を羽状構成で施文。底部布目表	床面	50% PL34
185	弥生土器	広口壺	-	(14.7)	-	長石・石英・黒色粒子	にぶい褐色	普通	胴部捺状工具(4本)による縦走文。胴部附加条二種(附加1条)縄文を羽状構成で施文	覆土下層	30%
186	弥生土器	広口壺	-	(12.0)	8.5	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	胴部附加条二種(附加1条)縄文を羽状構成で施文。底部布目表	床面	30%
187	弥生土器	広口壺	-	(7.6)	7.4	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	胴部附加条二種(附加1条)縄文を羽状構成で施文。底部布目表	覆土上層 -下層	30%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP136	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	にぶい褐色	頸部衝孔状上孔(3本)による縦区画及び波状文・連弧文を施文・胴部縄文施文	覆土下層	
TP137	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	腹合口縁下端部に原体押圧	覆土上層	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP25	紡錘車	5.0	1.6	0.6	(200)	長石・石英	にぶい黄褐色	一方向からの穿孔 指頭痕	覆土下層	
DP26	紡錘車	3.3	2.2	0.7	(193)	長石・石英	黒褐色	一方向からの穿孔 ナデ	覆土下層	PL37

第 20 号竪穴建物跡 (第 113・114 図)

位置 調査区中央部の F 6 fl 区。標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 11 号溝に掘り込まれている。

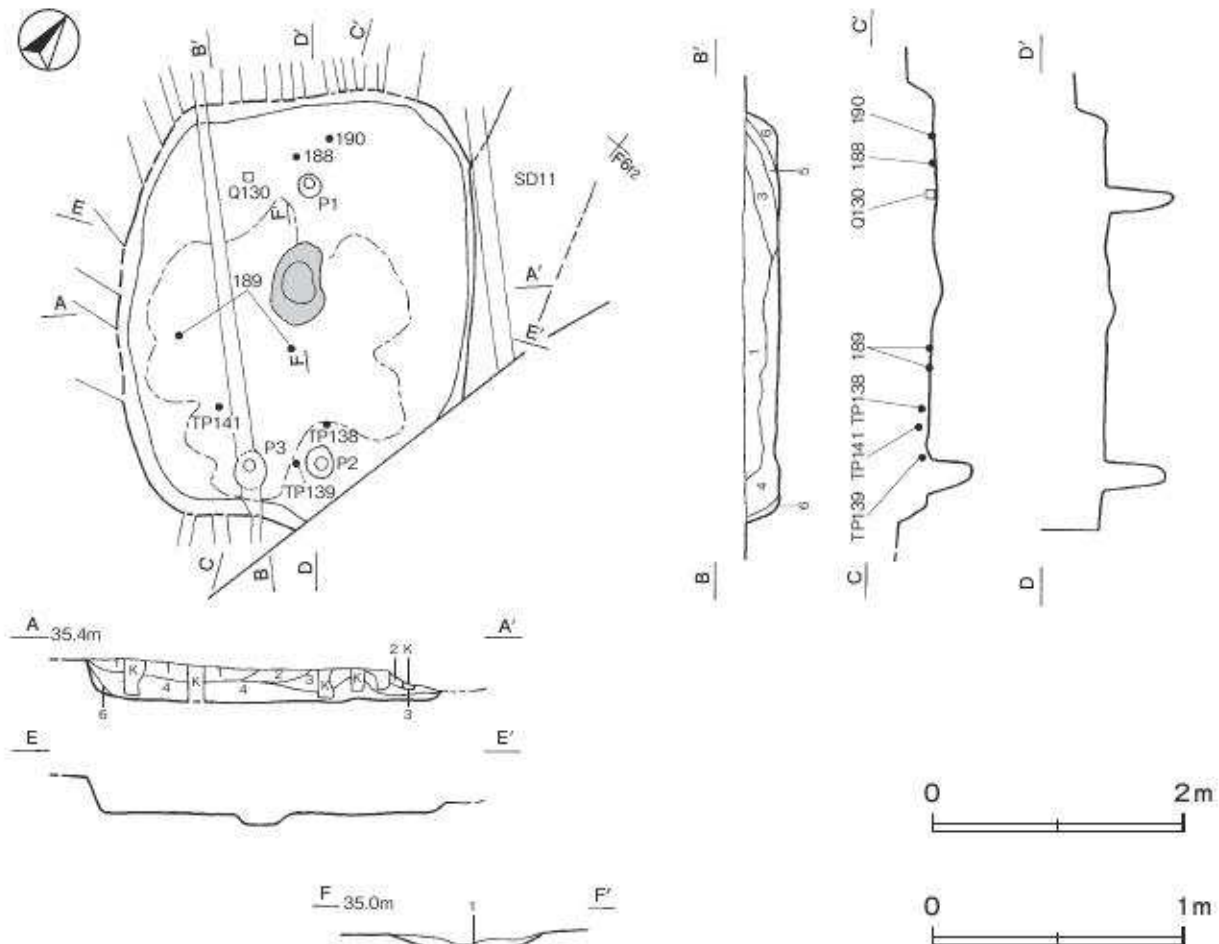
規模と形状 東コーナー部が調査区域外に伸びているが、長軸 3.46 m、短軸 2.86 m で、平面形は隅丸長方形と推定でき、主軸方向は N-40°-W である。壁高は 23 ~ 30 cm で、壁は外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、出入り口部から炉の周囲にかけて踏み固められている。

炉 中央部に付設されている。長径 66 cm、短径 43 cm の楕円形で、深さ 7 cm の地床炉である。炉床は皿状に掘りくぼめられ、炉床面は火を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 黒褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量



第 113 図 第 20 号竪穴建物跡実測図

ピット 3か所。P 1～P 2は深さ53～57cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 3は深さ35cmで、南東壁際に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

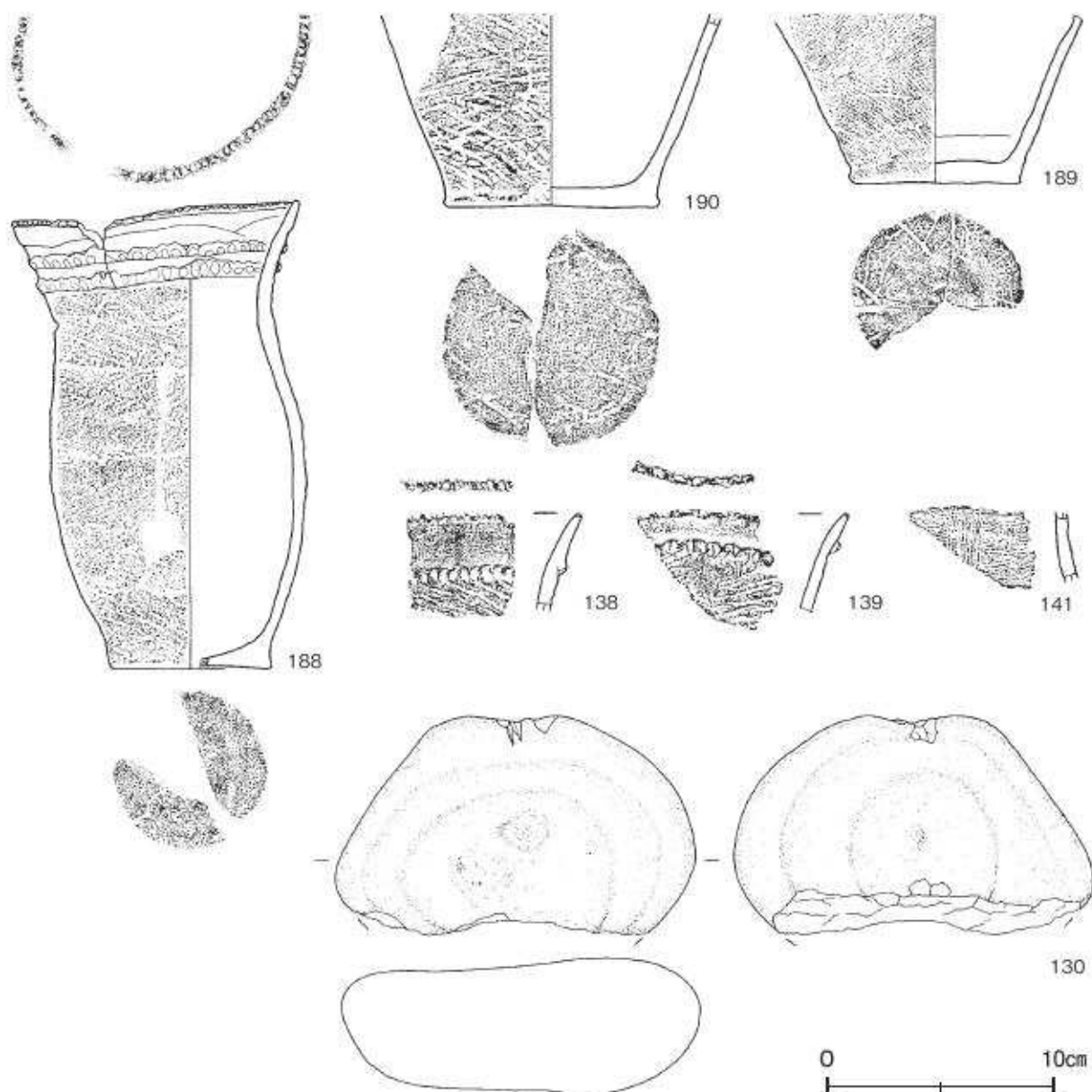
覆土 6層に分層できる。第1～5層は、ブロック状に不規則な堆積状況を示していることから埋め戻されている。第6層は壁の崩落土である。

土層解説

- | | |
|-----------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック微量 | 4 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 ローム粒子少量 | 5 暗褐色 ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック少量 | 6 黒褐色 ロームブロック少量 |

遺物出土状況 弥生土器片89点(広口壺)、石器1点(台石)、剥片15点、自然礫8点のほか、縄文土器2点が出土している。188・190は、北西部の床面から出土している。189は、西部と炉付近の破片が接合したものである。TP138・TP139は南東部、TP141は南コーナー部、Q 130は西コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から弥生時代後期後半と考えられる。



第114図 第20号竪穴建物跡出土遺物実測図

第20号竪穴建物跡出土遺物観察表(第114図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
188	弥生土器	広口壺	125	206	7.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部に刻み目・頸部上位に押圧のある微隆帯2条・胴部附加条一種(附加2条)縄文を羽状構成で施文	床面	70% PL33
189	弥生土器	広口壺	-	(74)	7.4	長石	にぶい黄橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文を羽状構成で施文	床面	20%
190	弥生土器	広口壺	-	(85)	9.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部附加条二種(附加1条)縄文を羽状構成で施文	床面	20%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP138	弥生土器	広口壺	長石・石英・雲母	橙	口唇部原形押圧・複合口縁下端部に原形押圧・頸部附加条二種(附加1条)縄文を施文	覆土下層	
TP139	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい褐	口唇部原形押圧・口縁部條状工具による押圧のある微隆帯1条・胴部附加条一種(附加2条)縄文施文	覆土下層	
TP141	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい褐	頸部桶歯状工具(3本)による縦区画と波状文を施文	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q130	白石	(97)	16.0	6.2	(1305)	礫岩	わずかなくばみに点状の敲打痕	覆土下層	

表4 弥生時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
								主柱穴	出入口	ピット	炉	貯蔵穴				
1	L 3 d2	N-39°-W	隅丸長形	3.47×(2.03)	10	平坦	-	2	2	1	-	-	自然	弥生土器	後期後半	本跡→SF1 個溝2
3	K 4 a7	N-20°-E	隅丸方形	5.78×5.76	55-60	平坦	-	4	2	9	1	-	自然	弥生土器・土玉・礫石・新石器製品	後期後半	本跡→SF1 個溝7
4	K 4 a3	N-33°-E	隅丸長形	3.15×(0.91)	9-22	平坦	-	2	-	-	-	-	自然	弥生土器	後期後半	
5	J 4 b5	N-3°-E	隅丸長形	5.88×(3.90)	6-55	平坦	-	1	1	3	1	-	自然	弥生土器・石鏝	後期後半	
6	H 5 f4	N-39°-W	隅丸長形	(4.16)×4.04	24-38	平坦	-	2	1	2	1	-	自然	弥生土器・土玉・白石	後期後半	
8	H 5 g5	N-42°-E	隅丸長方形	5.57×(4.46)	55	平坦	-	4	1	6	1	-	自然	弥生土器・礫石・礫石・白石・新石器	後期後半	
11	G 5 g8	N-17°-W	隅丸長形	5.64×(5.48)	59-61	平坦	-	4	1	6	1	-	自然	弥生土器	後期後半	本跡→SH2
14	F 5 j9	N-25°-E	隅丸長方形	4.60×3.44	20-26	平坦	-	4	1	2	1	-	自然・人為	弥生土器・紡錘車	後期後半	本跡→SK105
15	F 5 i9	N-55°-W	隅丸長方形	6.46×5.60	15-20	平坦	-	4	2	39	1	-	自然	弥生土器・土玉・紡錘車	後期後半	本跡→SK34
16	F 6 i1	N-41°-E	隅丸長形	(3.91)×(1.92)	20-25	平坦	-	1	-	1	-	-	自然	弥生土器	後期後半	
18	F 6 d2	N-26°-W	隅丸長形	(5.36)×4.74	22-33	平坦	-	3	-	8	1	-	自然	弥生土器片・縄文土器製品	後期後半	本跡→SH21, SK13・23
19	F 6 b1	N-28°-W	長方形	4.30×[3.67]	10-12	平坦	-	4	1	1	1	-	自然	弥生土器・紡錘車・石鏝	後期後半	本跡→SH 3
20	F 6 f3	N-40°-E	隅丸長形	3.46×2.86	23-30	平坦	-	2	1	0	1	-	人為	弥生土器・白石	後期後半	本跡→SD11

3 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡1棟を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

竪穴建物跡

第23号竪穴建物跡 (第115図)

位置 調査区北部のC 6 g0区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 東部が調査区域外に延びているため、南北軸は2.88mで、東西軸は1.33mしか確認できなかった。平面形は隅丸方形または隅丸長方形と推定でき、南北軸方向はN-0°である。壁高は52～57cmで、壁は直立している。

床 平坦で、硬化した範囲は認められない。壁溝が西壁下に設けられている。

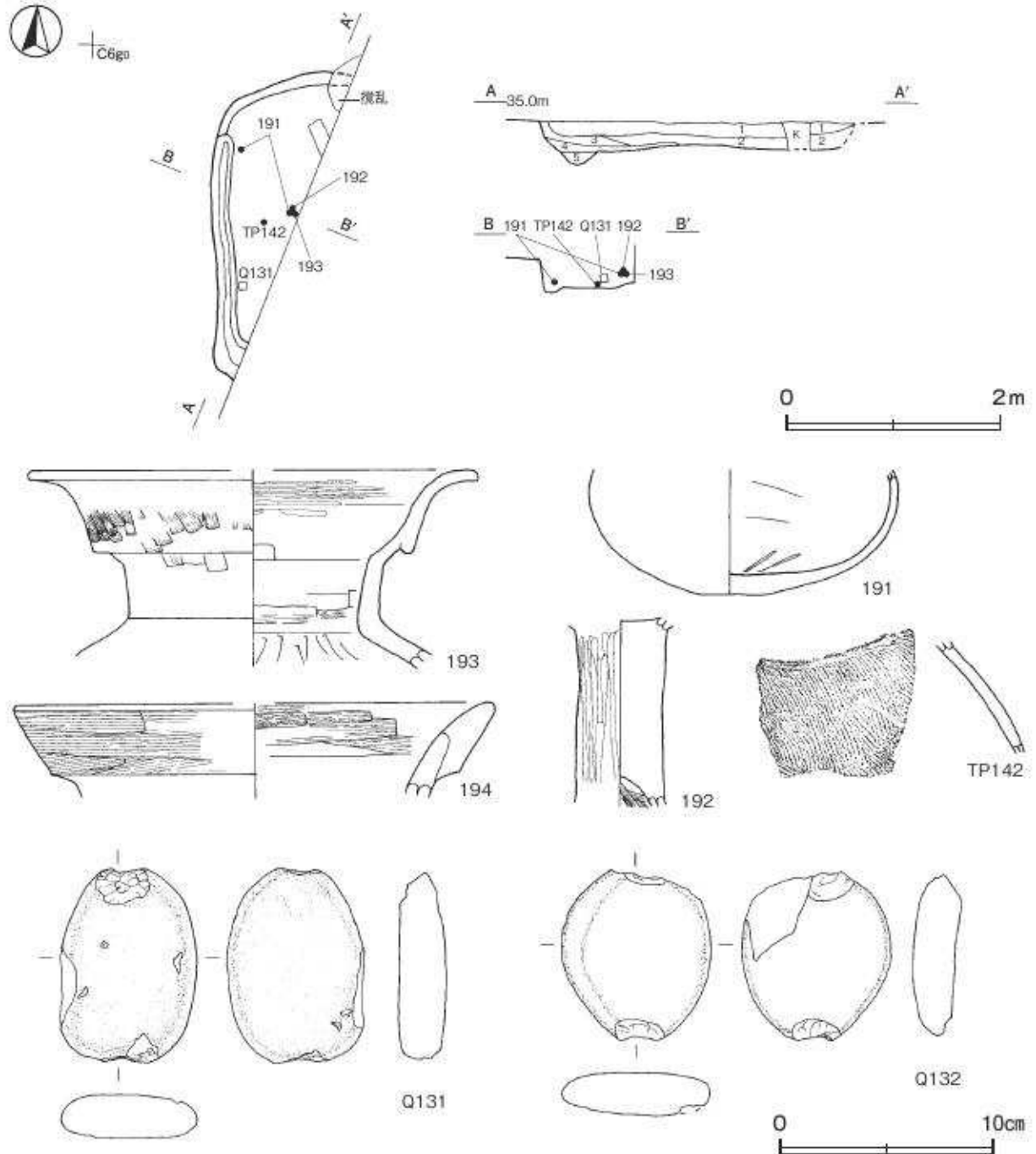
覆土 5層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。第5層は壁溝の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------|-------|---------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 4 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 | 炭化物・ローム粒子少量 | 5 褐色 | ローム粒子多量 |
| 3 極暗褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片43点(埴1, 高坏1, 甕41), 石器2点(石錘)のほか, 縄文土器片48点, 弥生土器片3点, 石器2点(敲石, 凹石)が出土している。TP142は西部の床面, 191・192・193・Q131は西部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から4世紀後葉と考えられる。



第115図 第23号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 23 号 竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 115 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
191	土師器	埴	-	(5.8)	2.7	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	外面単位不明瞭な磨き 内面ヘラナデ	覆土下層	40%
192	土師器	高坏	-	(8.9)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	脚部外面磨き 内面ハケ目調整	覆土下層	20%
193	土師器	甕	[20.6]	(9.4)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外面・頸部ハケ目調整とナデの練り返し 口縁部内面磨き・体部内面ヘラナデ	覆土下層	20% PL34
194	土師器	甕	[22.0]	(4.5)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面ハケ目調整	覆土中	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP142	土師器	甕	長石・石英・赤色粒子	橙	体部外面ハケ目調整	床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q131	石鉢	9.2	6.4	2.1	1865	安山岩	長径方向に抉り調整	覆土下層	
Q132	石鉢	8.0	7.0	2.0	1532	砂岩	長径方向に抉り調整	覆土中	

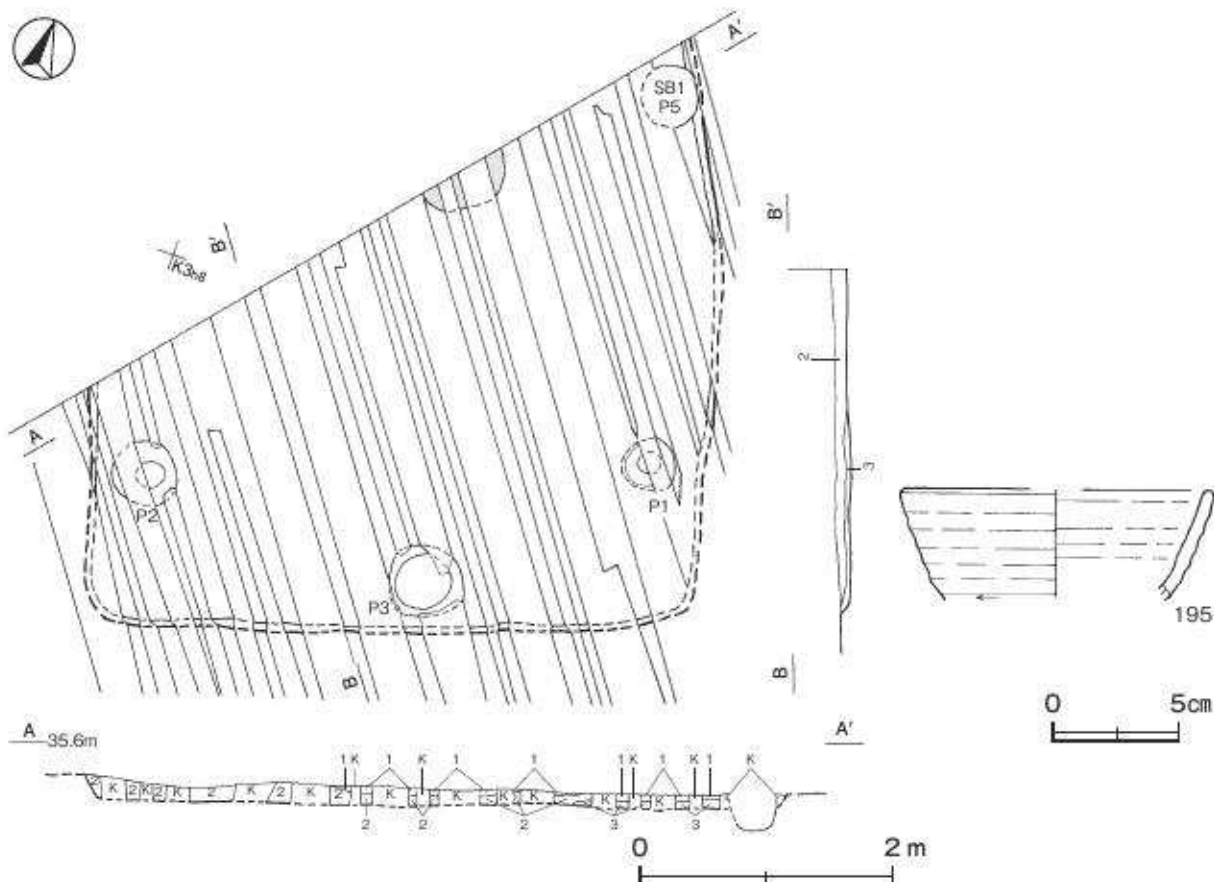
4 奈良時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡 9 棟を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

竪穴建物跡

第 2 号 竪穴建物跡 (第 116 図)

位置 調査区南部の K 3h8 区。標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。



第 116 図 第 2 号 竪穴建物跡・出土遺物実測図

重複関係 第1号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が調査区域外に延びているため、東西軸は5.02 mで、南北軸は4.62mしか確認できなかった。全体に攪乱を受けているが、残存している壁の状況から平面形は方形または長方形と推定でき、南北軸方向はN-10°-Wである。壁高は7～16cmで、壁は直立している。

床 平坦で、明らかな硬化面は認められない。床面の中央部に焼土が散布していた。

ピット 3か所。P1・P2は深さ32cm・33cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P3は深さ48cmで南壁際に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層に分層できる。含有物が均一で、土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック微量 3 暗 褐 色 ロームブロック少量
2 黒 褐 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片34点(坏4、甕30)、須恵器片10点(坏6、蓋4)のほか、弥生土器片4点が出土している。195は覆土中から出土している。

所見 時期は、土師器の坏や須恵器の蓋に奈良時代の特徴が見られることから8世紀代と考えられる。

第2号竪穴建物跡出土遺物観察表(第116図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
195	須恵器	坏	[122]	(44)	-	長石・石英	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り	覆土中	10%

第7号竪穴建物跡(第117～119図)

位置 調査区中央部のH5h4区、標高35 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.18 m、短軸3.26 mの長方形で、主軸方向はN-8°-Eである。壁高は57cmで、壁は直立している。

床 平坦な貼床で、全面が踏み固められている。貼床は、確認面から70～80cm掘り下げた部分にローム土を多量に埋土して構築されている。

竈 北東壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで95cmで、燃焼部幅は51cmである。右袖部は、掘り残した地山に粘土粒子を多量に含む第2層を積み重ねて構築されており、左袖部は基部の地山部分だけを確認した。火床部は床面の高さから深さ5cm掘りくぼめた地山を使用し、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に48cm掘り込まれ、火床部から直立している。

甍土層解説

- 1 暗 褐 色 粘土ブロック・焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 4 灰 褐 色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化物粒子・粘土粒子微量
2 灰 白 色 粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 5 濃い赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量、粘土ブロック・焼土粒子微量

ピット 4か所。いずれも貼床の下位で確認できた。P1～P3は深さ9～28cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P4は深さ5cmで、南壁際に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

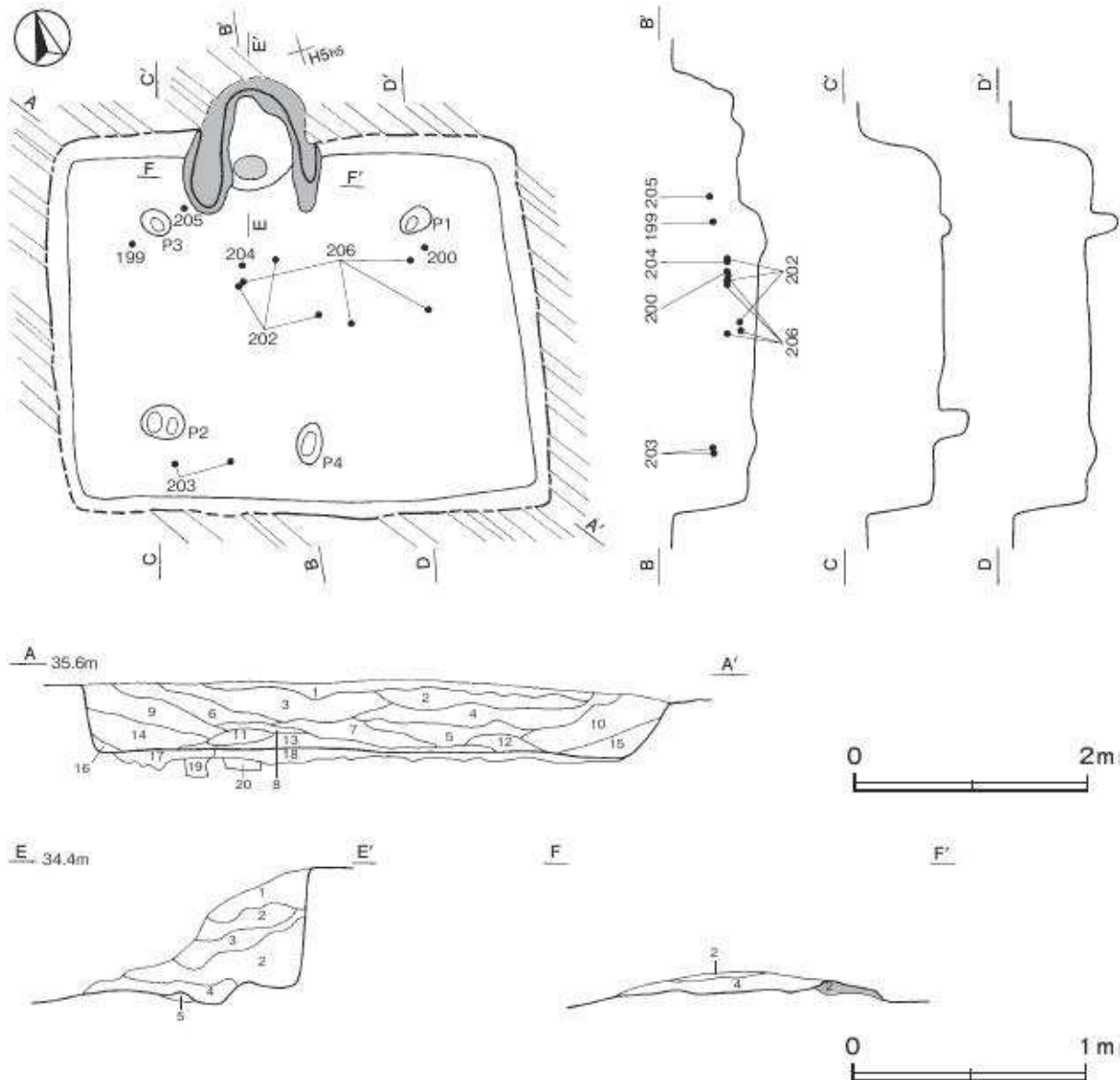
覆土 16層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子、粘土粒子を含有する土砂が不規則に堆積した状況で、埋め戻されている。第17～20層は貼床の構築土である。

土層解説

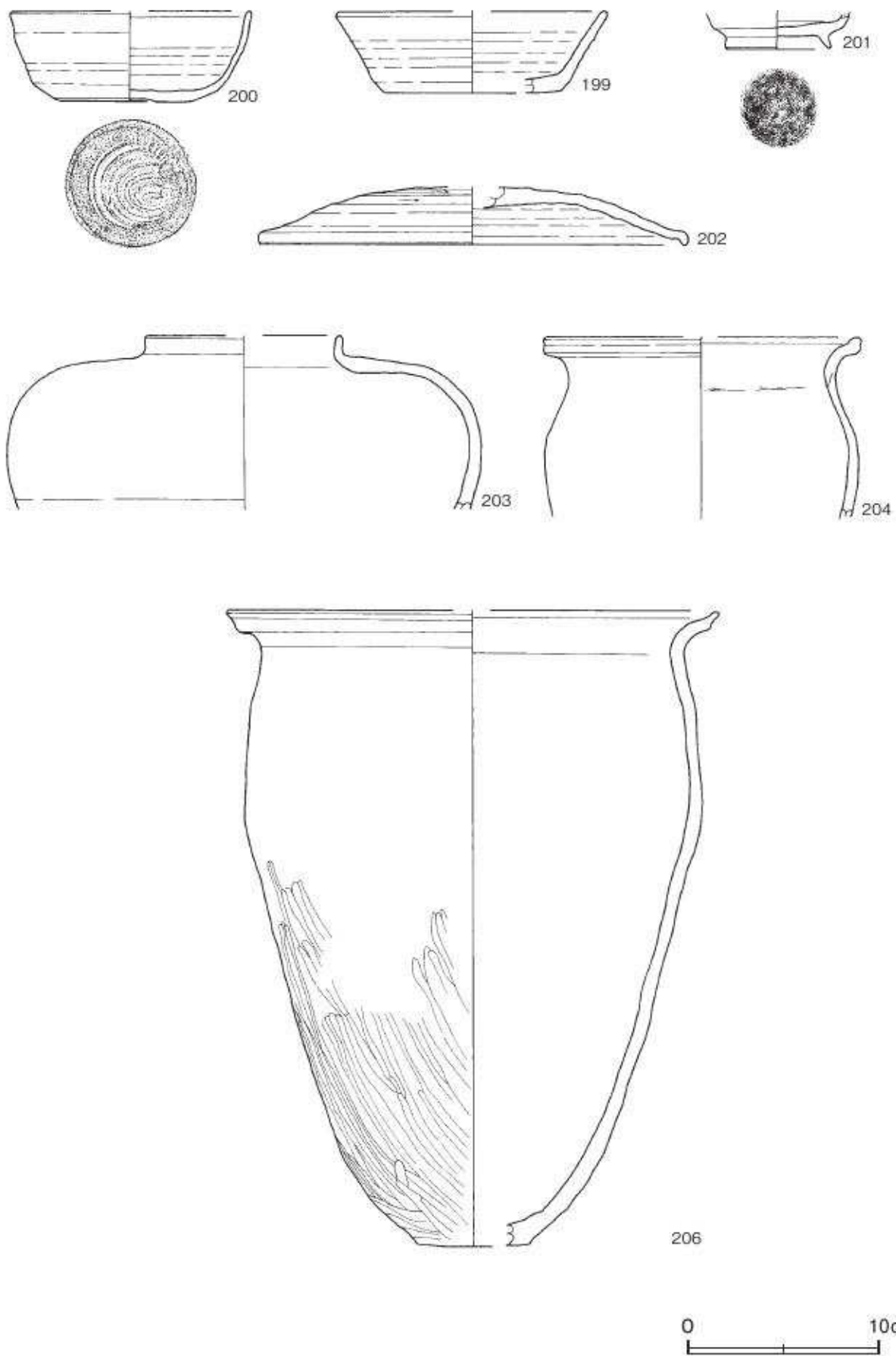
1	黒褐色	ロームブロック少量	11	褐灰色	ローム粒子少量
2	暗褐色	ロームブロック中量	12	黒色	ロームブロック微量
3	暗褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量、炭化粒子微量	13	にぶい黄褐色	粘土ブロック中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量
4	黒褐色	ロームブロック中量	14	灰黄褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
5	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	15	黒色	ローム粒子微量
6	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	16	黒褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量
7	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子微量	17	褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
8	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	18	褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・粘土粒子微量
9	にぶい黄褐色	ローム粒子中量、粘土ブロック、焼土粒子少量	19	暗褐色	ローム粒子多量
10	にぶい黄褐色	ローム粒子多量、焼土粒子微量	20	暗褐色	ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片 15 点（坏 2、甕 13）、須恵器片 17 点（坏 11、高台付坏 1、蓋 1、短頸壺 1、甕 3）、土製品 1 点（管状土錘）、鉄製品 2 点（釘）、鉄滓 5 点、自然礫 11 点、粘土塊 1 点が出土している。202・204 は中央部、200 は北東部の覆土下層から出土している。206 は、中央部と北東部の覆土下層から出土した破片が接合したものである。

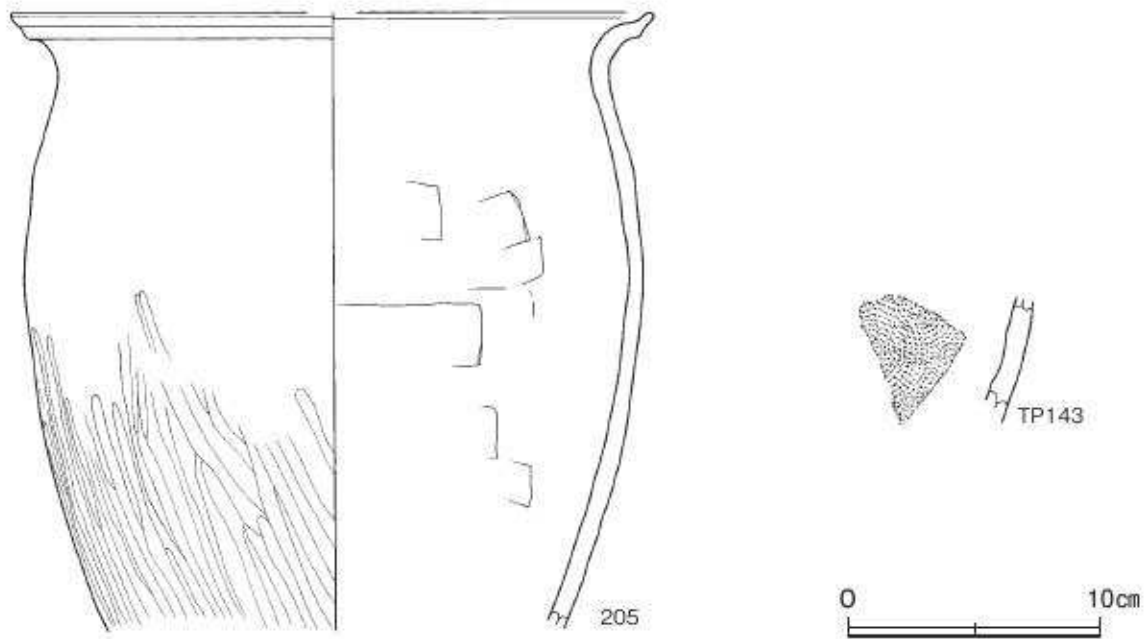
所見 時期は、出土土器から 8 世紀後葉と考えられる。主柱穴を埋め戻した後に貼床が構築されていることから、建て替えが行われたと考えられる。



第 117 図 第 7 号竪穴建物跡実測図



第 118 図 第 7 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)



第119図 第7号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第7号竪穴建物跡出土遺物観察表(第118・119図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
199	須恵器	坏	[14.0]	4.3	[9.0]	長石・石英・針状鉱物	黄灰	普通	底部一方向の手持ちヘラ切り	覆土中層	20% 木葉下蓋産
200	須恵器	坏	[12.6]	4.7	6.8	長石・石英	灰黄	普通	底部回転系切り痕を中央に残し、外周部回転ヘラ削り	覆土下層	60% PL35
201	須恵器	高台付坏	—	(20)	5.3	長石・石英	黄灰	普通	底部高台貼付後、ナデ調整	覆土中	20%
202	須恵器	蓋	[22.2]	(30)	—	長石・石英・雲母・針状鉱物	黄褐	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土下層 一床面	40% 木葉下蓋産
203	須恵器	短頸壺	[10.2]	(9.1)	—	長石	灰青	普通	ロクロナデ 自然釉	覆土中層	20% 植込産
204	土師器	甕	[16.4]	(9.6)	—	長石・石英・雲母	赤褐	普通	口縁部横ナデ	覆土下層	10%
205	土師器	甕	[25.4]	(24.5)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面下半ヘラ磨き 内面ヘラナデ	覆土中層	30%
206	土師器	甕	[25.8]	33.3	[6.0]	長石・石英・雲母	暗赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面下半ヘラ磨き	覆土下層 一床面	40%

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP143	須恵器	蓋	長石・石英・雲母	灰オリーブ	体部外面同心円文の叩き 内面当て具痕	覆土中	

第9号竪穴建物跡 (第120・121図)

位置 調査区中央部のH5c6区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 東半部が調査区域外に延びているため、南北軸は4.53mで、東西軸は2.75mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定でき、主軸方向はN-21°-Eである。壁高は59cmで、壁は直立している。

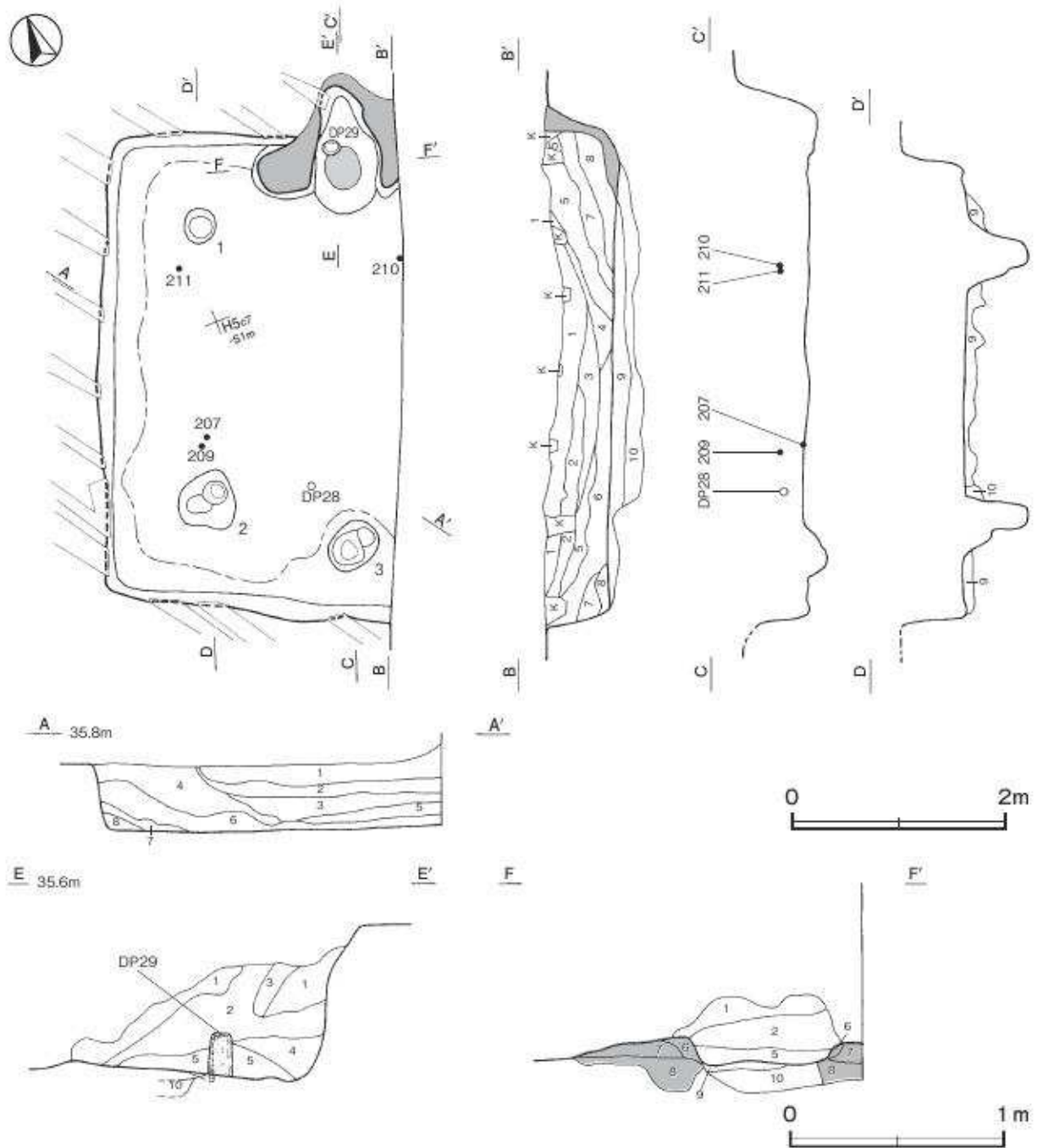
床 平坦な貼床で、壁際まで踏み固められている。貼床は、確認面から壁際は70cmほど、中央部は90cmほど掘り下げた部分にローム土や粘土粒子を埋土して構築されている。

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで118cmで、燃焼部幅は58cmである。袖部は、床面の高さから30cm掘りくぼめた部分に粘土を主体とした第8層を埋土し、粘土粒子を多量に含む第6・7層を積み

上げて構築されている。火床部は、床面の高さから28cm掘りくぼめた部分に粘土粒子を中量含む第10層を20cmの厚さに埋土して皿状に構築されており、火床面は赤変硬化している。火床面の北部には支脚が据えられており、火を受けて赤変している。煙道部は壁外に50cm掘り込まれ、火床部から直立している。

面土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------|--------|--------------------------|
| 1 灰白色 | 粘土ブロック多量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 赤褐色 | 焼土粒子多量、粘土粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 7 灰白色 | 粘土粒子多量、焼土粒子微量 |
| 3 灰白色 | 粘土粒子多量、炭化粒子少量 | 8 明褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 4 黒褐色 | 炭化粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子少量 | 9 赤褐色 | 焼土ブロック多量、粘土粒子少量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 10 明褐色 | 粘土粒子中量、焼土粒子少量 |



第120図 第9号竪穴建物跡実測図

ピット 3か所。P 1・P 2は深さ58cm・56cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 3は深さ22cmで南壁際に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

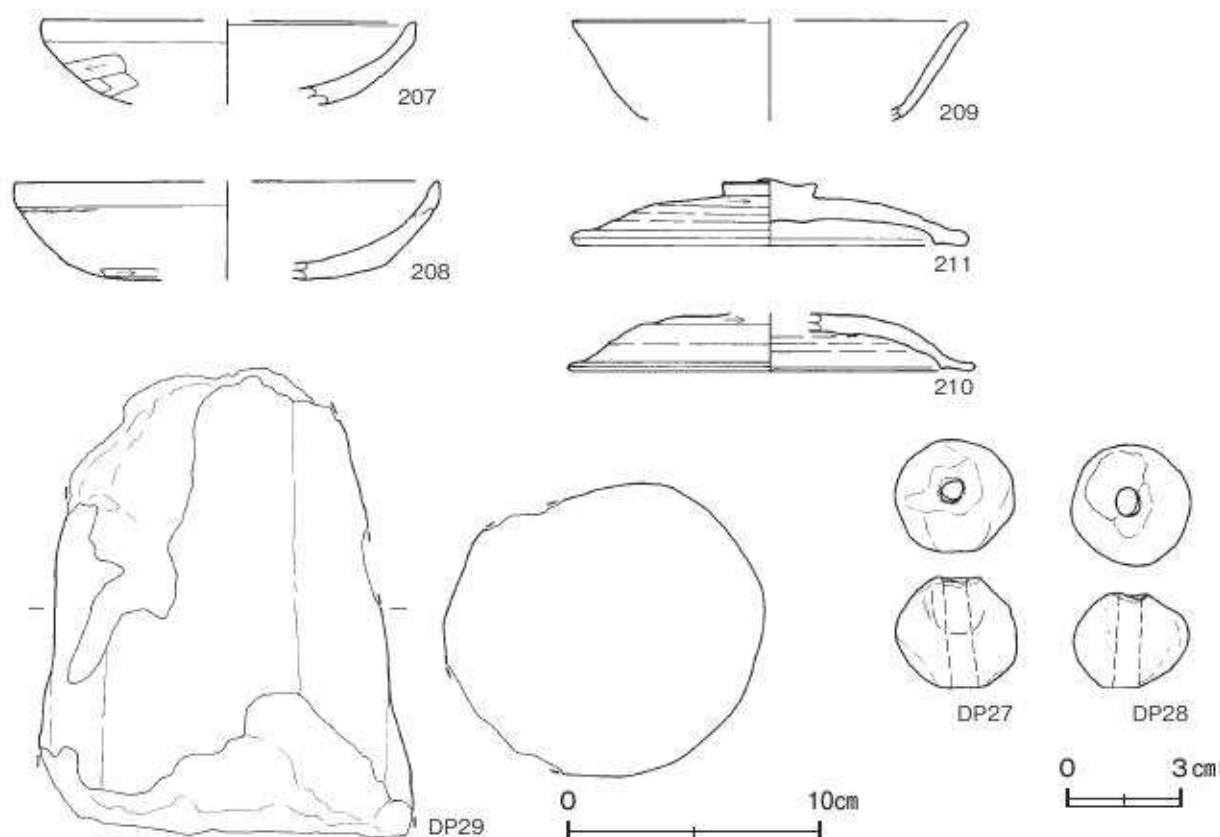
覆土 8層に分層できる。ブロック状の不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。第9・10層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------|---------|-----------------------|
| 1 灰黄褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 灰黄褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量、焼土粒子極微量 | 7 黒色 | ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量 | 9 におろ褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 10 黄褐色 | ローム粒子中量、粘土粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片127点(坏10, 甕117), 須恵器片19点(坏12, 蓋3, 甕4), 土製品3点(土玉2, 支脚1) 鉄滓2点, 自然礫5点, 粘土塊1点のほか, 縄文土器片3点, 弥生土器片9点が出土している。207は西コーナー部の床面から出土している。210は竈前, 211は北コーナー部, 209は西コーナー部, DP28は出入り口ピット付近の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第121図 第9号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第9号竪穴建物跡出土遺物観察表(第121図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
207	土師器	坏	[14.8]	(3.3)	-	長石・石英・雲母	暗赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ倒り	床面	20%
208	土師器	坏	[16.8]	(3.9)	-	長石・石英	暗赤褐	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ倒り	覆土中	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
209	須恵器	坏	[15.6]	(40)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ロクロナデ	覆土中層	10%
210	須恵器	蓋	[15.8]	(23)	-	長石・石英	黄灰	普通	天井部回転へう割り	覆土中層	15%
211	須恵器	蓋	15.3	27	-	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	天井部回転へう割り	覆土中層	95% PL35 新治窯産

番号	器種	径 (長さ)	厚さ (幅)	孔径 (厚さ)	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP27	土玉	3.2	2.9	0.7	25.2	長石・石英	明赤褐	一方向からの穿孔、ナデ	覆土中	
DP28	土玉	3.2	2.5	0.8	21.5	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	一方向からの穿孔、ナデ	覆土中層	
DP29	支脚	(18.6)	15.0	11.6	(2625.1)	長石・石英	明褐	縦方向の面的な成形	火床面	

第10号竪穴建物跡（第122図）

位置 調査区中央部のG5h6区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 西半部が調査区域外に延びているため、南北軸は4.40mで、東西軸は2.54mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定でき、主軸方向はN-20°-Eである。壁高は24～54cmで、壁は直立している。

床 平坦な貼床で、出入り口部から竈の焚口部にかけての中央部が踏み固められている。貼床は、確認面から70～80cm掘り下げた部分にローム土を多量に埋土して構築されている。

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで117cmで、燃焼部幅は49cmである。袖部は、掘り残した地山に粘土ブロックや粘土粒子を含む第2・3・6・9層を積み上げて構築されている。火床部は床面の高さから14cm掘りくぼめた部分に、ロームブロック主体の第10層を7cmの厚さに埋土して皿状に構築されている。火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に32cm掘り込まれ、火床部から緩やかに外傾し、壁外ではほぼ直立している。

竈土層解説

1 にぶい褐色	粘土粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	6 褐灰色	粘土粒子中量、ローム粒子少量
2 明褐灰色	粘土粒子多量、砂粒中量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 灰白色	灰多量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗赤褐色	焼土粒子・粘土粒子多量、砂粒中量、炭化粒子少量	8 赤褐色	焼土粒子多量、炭化粒子微量
4 明褐灰色	粘土粒子中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量	9 灰褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量、焼土粒子微量
5 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	10 褐色	ロームブロック多量

ピット 4か所。P1・P2は深さ54cm・65cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3・P4は深さ26cm・28cmで、南壁際に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

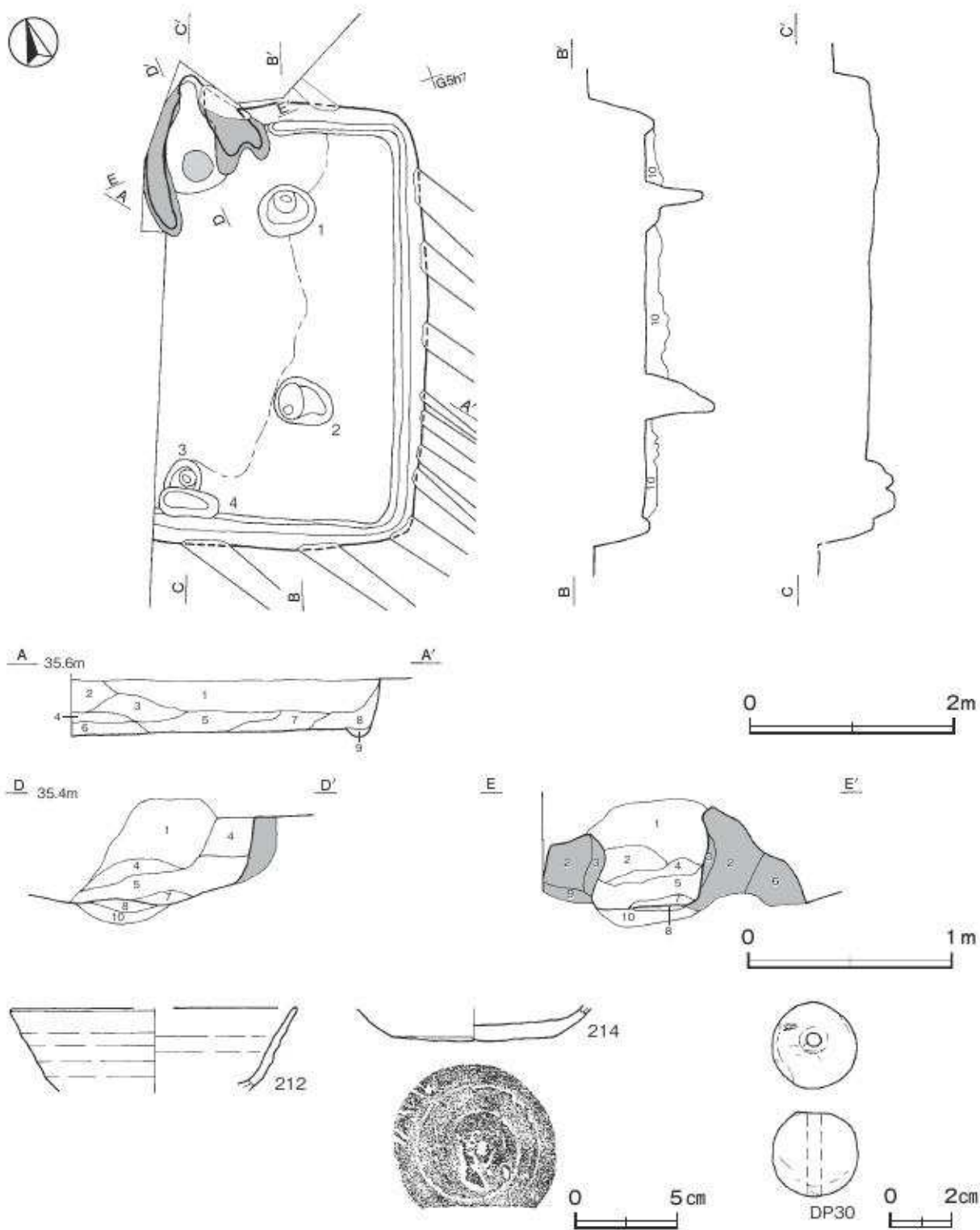
覆土 9層に分層できる。ブロック状の不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。第10層は、貼床の構築土である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 灰黄褐色	ローム粒子中量
2 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	7 褐色	ローム粒子少量
3 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	8 黒色	ローム粒子少量
4 褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量、焼土粒子微量	9 黄褐色	ローム粒子多量
5 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子・粘土粒子微量	10 褐色	ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片59点（甕）、須恵器片10点（坏4、甕6）、鉄滓1点、自然礫4点、粘土塊5点のほか、弥生土器片18点が出土している。212・214・DP30は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器と隣接する第7・9号竪穴建物跡と主軸方向が同じであることから、8世紀前葉と考えられる。



第122図 第10号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第10号竪穴建物跡出土遺物観察表（第122図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
212	須恵器	坏	[14.0]	(4.1)	-	長石・石英・雲母	暗赤褐	普通	口ケロナデ	覆土中	10% 新治産産
214	須恵器	坏	-	(1.7)	8.1	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	底部回転ヘラ切り	覆土中	30% 新治産産

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP30	土玉	2.8	2.8	0.4	21.7	長石	にぶい黄澄	一方向からの穿孔、ナデ	礎土中	

第 12 号 竪穴建物跡 (第 123・124 図)

位置 調査区中央部の G 5 f8 区、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 11 号 竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 大半が調査区域外に位置しているため、南東コーナーだけを確認した。残存している東西軸は 1.93 m で、南北軸は 1.40 m である。平面形は方形または長方形と推定でき、南北軸方向は N-5°-E である。壁高は 48 ~ 67 cm で、壁は直立している。

床 平坦な貼床で、硬化した範囲は認められない。壁下に壁溝が設けられている。貼床は、確認面から 90 cm ほど掘り下げた部分にローム土を多量に埋土して構築されている。

ピット 深さ 52 cm で、規模と位置から支柱穴と考えられる。

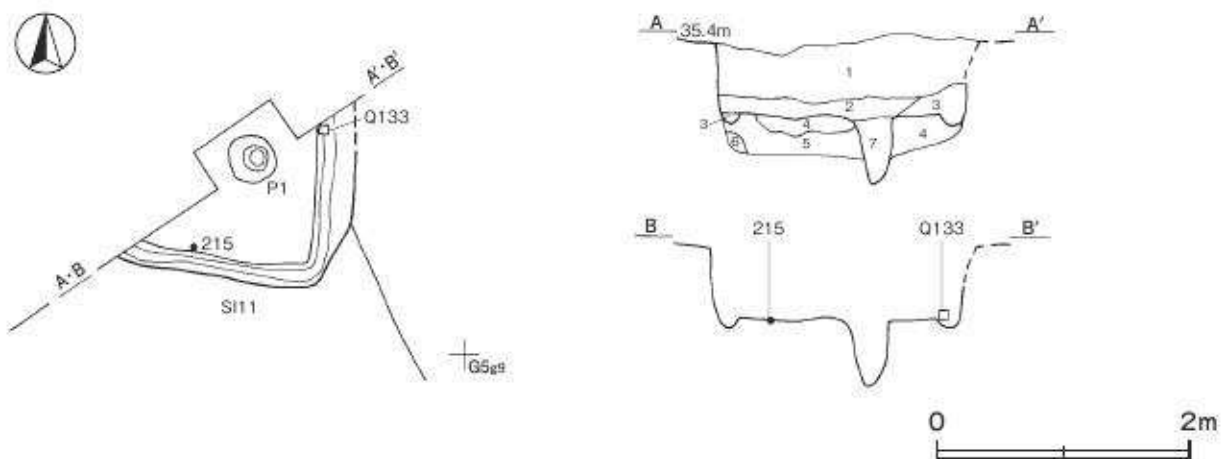
覆土 3 層に分層できる。焼土粒子や粘土粒子を不規則に含有する土砂が堆積した状態で、埋め戻されている。第 4 ~ 6 層は貼床の構築土、第 7 層はピットの土層である。

土層解説

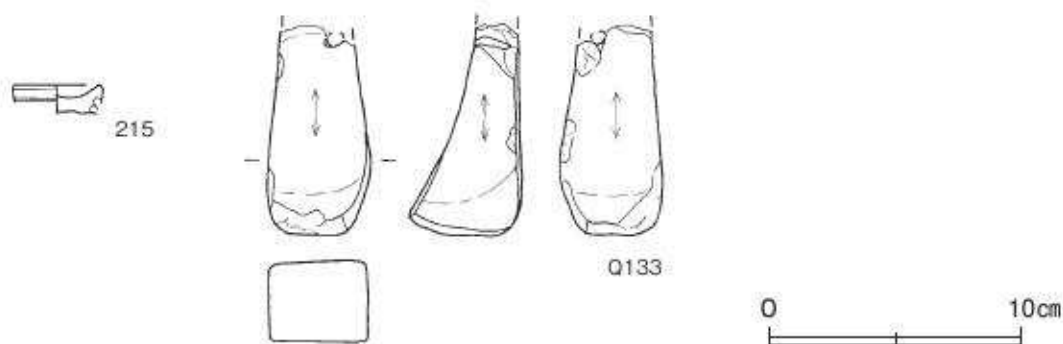
- | | | | |
|-------|----------------------------|-------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 粒子微量 | |
| 2 褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子・炭化粒子微量 | 5 黄褐色 | ロームブロック多量、粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 褐灰色 | 粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黄褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子・粘土 | 7 黒褐色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片 15 点 (坏 3, 甕 12), 須恵器片 3 点 (坏 2, 蓋 1), 石器 1 点 (砥石), 自然礫 1 点のほか、弥生土器 4 点が出土している。215・Q 133 は南東コーナー部の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器と隣接している第 10 号 竪穴建物跡と軸方向が類似していることから、8 世紀代と考えられる。



第 123 図 第 12 号 竪穴建物跡実測図



第 124 図 第 12 号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 12 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 124 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
215	須臾器	壺	—	(1.1)	—	長石	黄灰	普通	ボタン状のツマミ	床面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q133	砥石	(84)	4.1	4.4	(156.9)	凝灰岩	砥面3面 一層に穿孔	床面	PL38

第 13 号竪穴建物跡 (第 125 ~ 127 図)

位置 調査区中央部の G 5 b8 区、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 4.60 m、短軸 4.14 m の長方形で、主軸方向は N - 22° - E である。壁高は 38 ~ 46cm で、壁は直立している。

床 平坦な貼床で、出入り口部から竈の焚口部にかけての中央部が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。貼床は、確認面から中央部は 50cm ほど、各コーナー部は 60 ~ 70cm ほど掘り込んだ部分にローム土を多量に埋土して構築されている。

竈 北壁やや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 131cm で、燃焼部幅は 59cm である。袖部は、掘り残した地山を基部として、粘土ブロックや粘土粒子を含む第 16 ~ 20 層を積み上げて構築されている。火床部は床面の高さから皿状に深さ 11cm 掘りくぼめられた地山を使用し、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 49cm 掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | |
|---------------------------------------|--|
| 1 灰黄褐色 粘土ブロック・ローム粒子中量 | 12 暗赤褐色 焼土粒子中量、粘土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量 |
| 2 浅黄色 粘土ブロック多量 | 13 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 3 にぶい黄色 粘土ブロック多量 | 14 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 4 暗褐色 粘土ブロック・炭化物中量 | 15 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量 |
| 5 黄褐色 粘土ブロック多量 | 16 暗灰黄色 粘土ブロック多量、炭化粒子微量 (締まり強い) |
| 6 にぶい赤褐色 粘土ブロック少量 | 17 黄褐色 粘土ブロック多量 (締まり強い) |
| 7 黄色 焼土ブロック・粘土ブロック中量 | 18 明黄褐色 粘土ブロック多量 (締まり強い) |
| 8 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量、粘土ブロック少量 | 19 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 (締まり強い) |
| 9 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量、粘土ブロック少量、ローム粒子微量 | 20 褐色 粘土ブロック少量、炭化粒子少量 (締まり強い) |
| 10 暗褐色 粘土粒子少量、ローム粒子微量 | |
| 11 にぶい黄色 粘土ブロック多量 (締まり強い) | |

ピット 14 か所。P 1 ~ P 4 は深さ 39 ~ 62cm で、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5 は深さ 28cm で、南壁際に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6 ~ P 8 は深さ 11 ~ 27cm で、

性格は不明である。P9～P14は深さ29～42cmで、貼床の下位で確認でき、支柱穴の内側に位置していることから、建て替え前の支柱穴と考えられる。

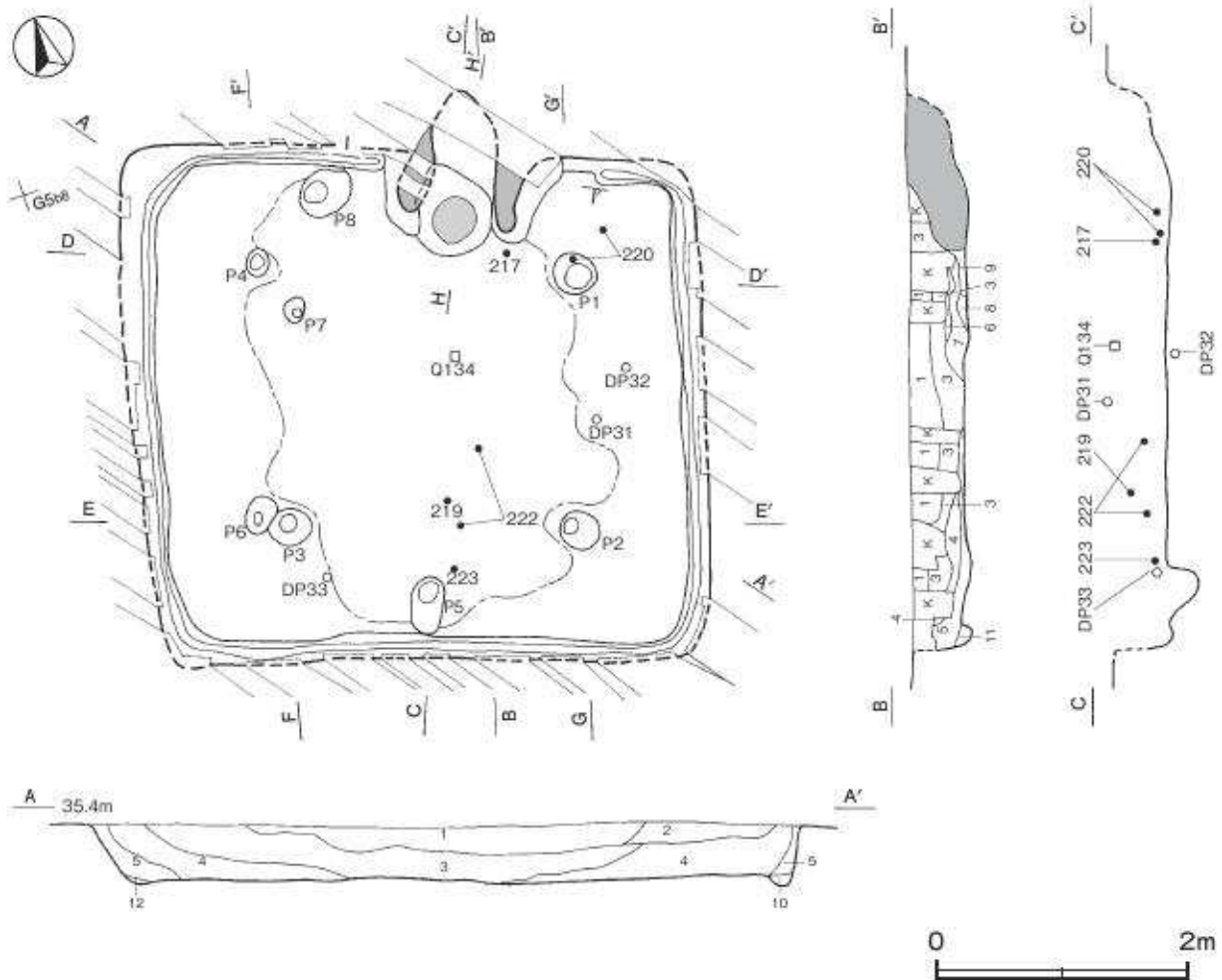
覆土 12層に分層できる。ロームブロックや粘土ブロック、焼土粒子が不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。第13～18層は貼床の構築土である。

土層解説

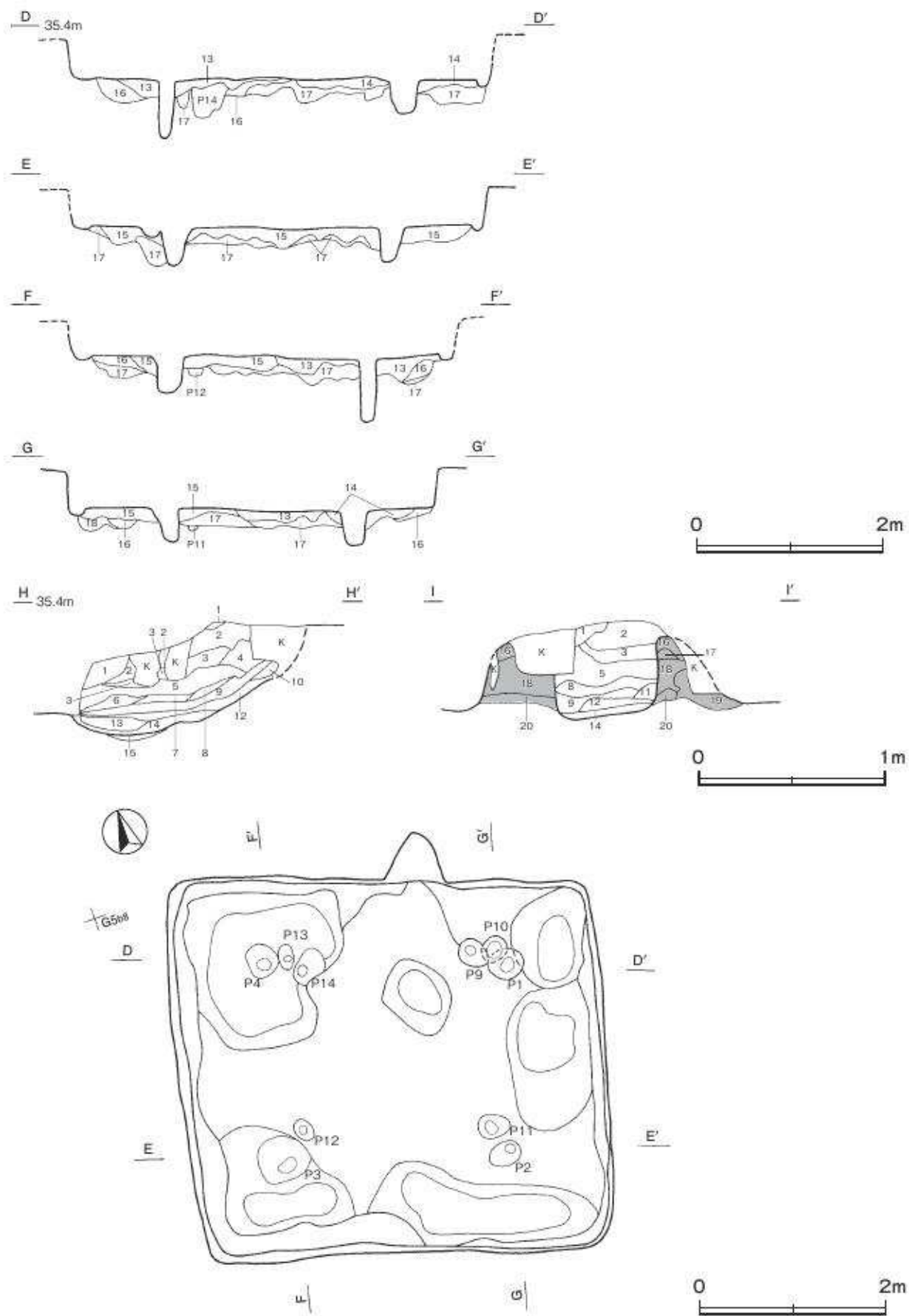
1	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	10	褐色	ロームブロック中量、粘土粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック少量	11	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
3	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	12	暗褐色	ローム粒子少量
4	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	13	極暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子少量
5	暗褐色	ローム粒子中量	14	暗褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量
6	暗灰黄色	粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子微量	15	極暗褐色	ロームブロック少量
7	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子微量	16	褐色	ロームブロック中量
8	暗褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子微量	17	褐色	ロームブロック多量
9	暗灰黄色	粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子微量	18	褐色	ローム粒子多量

遺物出土状況 土師器片183点(坏10, 甕173), 須恵器片16点(坏5, 蓋11), 土製品4点(土玉2, 管状土錘2), 石器1点(石錘), 鉄製品1点(刀子), 自然礫20点, 粘土塊1点のほか, 縄文土器片8点, 弥生土器片23点が出土している。217は竈石袖付近, 220は北東コーナー, 223は出入り口ピット付近の覆土下層からそれぞれ出土している。219・222は出入り口ピット付近の覆土中層から出土している。

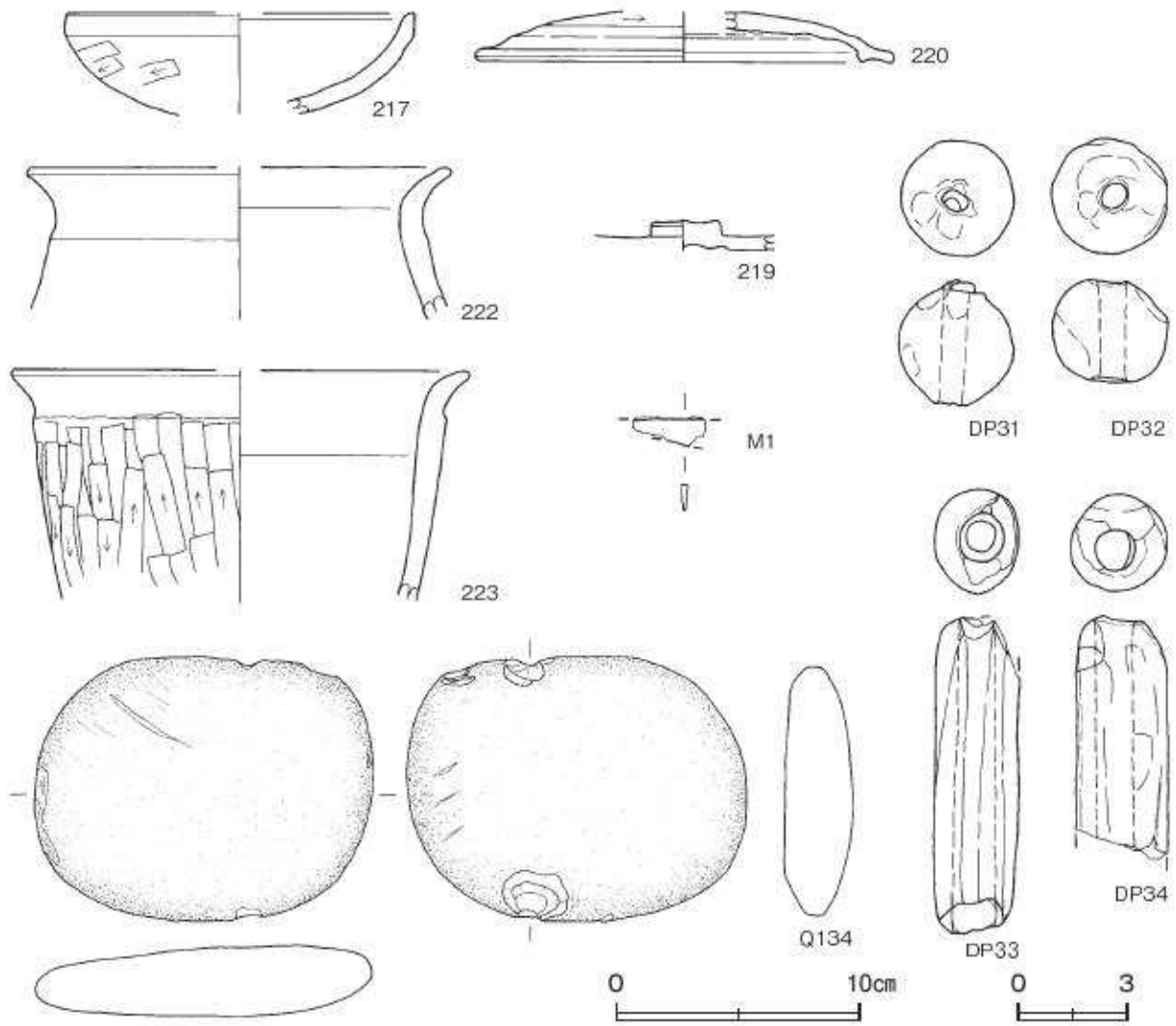
所見 時期は, 出土土器から8世紀前後と考えられる。



第125図 第13号竪穴建物跡実測図(1)



第 126 图 第 13 号竖穴建物跡実测图 (2)



第127図 第13号竪穴建物跡出土遺物実測図

第13号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第127図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
217	土師器	坏	[14.2]	(4.2)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り	覆土下層	20%
219	須恵器	蓋	-	(1.2)	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	ボタン状のツマミ、天井部回転ヘラ削り	覆土中層	10% 新治窯産
220	須恵器	蓋	[17.0]	(2.1)	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土下層	25% 新治窯産
222	土師器	甕	[17.2]	(6.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ、体部内面ナデ	覆土中層	10%
223	土師器	甕	[18.6]	(9.6)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ、体部外面縦位のヘラ削り	覆土下層	10%

番号	器種	径	厚さ(長さ)	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP31	土玉	3.2	3.5	0.7	29.6	長石・石英	にぶい黄橙	一方向からの穿孔、ナデ	覆土上層	
DP32	土玉	3.2	2.8	0.8	28.9	長石	にぶい橙	一方向からの穿孔、ナデ	貼床構築土	
DP33	管状土練	2.8	8.7	1.3	(53.0)	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	一方向からの穿孔、ナデ	覆土下層	PL37
DP34	管状土練	2.7	(6.7)	1.1	(42.4)	長石・石英	にぶい黄橙	一方向からの穿孔、ナデ	覆土中	PL37

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q134	石鏝	10.9	13.9	2.9	632.8	砂岩	短径方向に挟り調整	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	刀子	(3.1)	(1.1)	0.3	(2.4)	鉄	断面三角形 刃部・切先部欠損	貼床導葉土	

第17号竪穴建物跡（第128・129図）

位置 調査区中央部のF5e9区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 西部が調査区域外に延びているため、南北軸は3.56mで、東西軸は2.55mしか確認できなかった。

平面形は方形または長方形と推定でき、主軸方向はN-9°-Eである。壁高は35～37cmで、壁は直立している。

床 平坦な貼床で、出入り口部から竈の焚口部にかけての中央部が踏み固められている。壁下に壁溝が巡っている。貼床は、確認面から50～70cm掘り込んだ部分にローム土を多量に埋土して構築されている。

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで106cmで、燃焼部幅は51cmである。基部は、床面の高さから8～14cm掘くぼめた部分にロームブロック主体の第19・24層と砂粒主体の第20・25層を埋土して構築されている。袖部は、粘土ブロックやローム粒子、砂粒を含む第12～17層をブロック状に積み上げて構築されている。火床部は床面より3cm掘りくぼめた部分で、第21・22層を埋土して構築されており、火床面は赤変硬化している。火床面の北半部には支脚が据えられており、火を受けて赤変している。煙道部は壁外に52cm掘り込まれ、火床部から緩やかに外傾し、壁外では直立している。

竈土層解説

1 灰黄褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック微量	14 オリーブ褐色	粘土ブロック中量
2 暗灰黄色	粘土ブロック多量	15 オリーブ黄色	砂粒多量
3 灰黄褐色	焼土粒子中量、粘土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量	16 にぶい黄色	粘土ブロック多量
4 灰黄褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子微量	17 黄褐色	粘土ブロック多量、ローム粒子中量、砂粒少量
5 暗灰黄色	粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量	18 にぶい黄褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量
6 黒褐色	粘土ブロック・焼土粒子少量	19 褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量
7 暗灰黄色	粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	20 灰オリーブ色	砂粒多量
8 黒褐色	粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	21 にぶい褐色	焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子微量
9 黒褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量	22 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量
10 暗赤褐色	焼土ブロック中量、粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	23 暗灰黄色	粘土ブロック多量、ローム粒子少量
11 暗赤褐色	焼土粒子中量、粘土粒子微量	24 褐色	ローム粒子中量
12 黄褐色	粘土ブロック多量	25 明黄褐色	砂粒多量
13 赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・粘土粒子少量	26 褐色	ロームブロック多量

ピット 3か所。P1・P2は深さ33cm・50cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P3は深さ51cmで、南壁際に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 11層に分層できる。ブロック状の不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。第12～15層は貼床の構築土である。

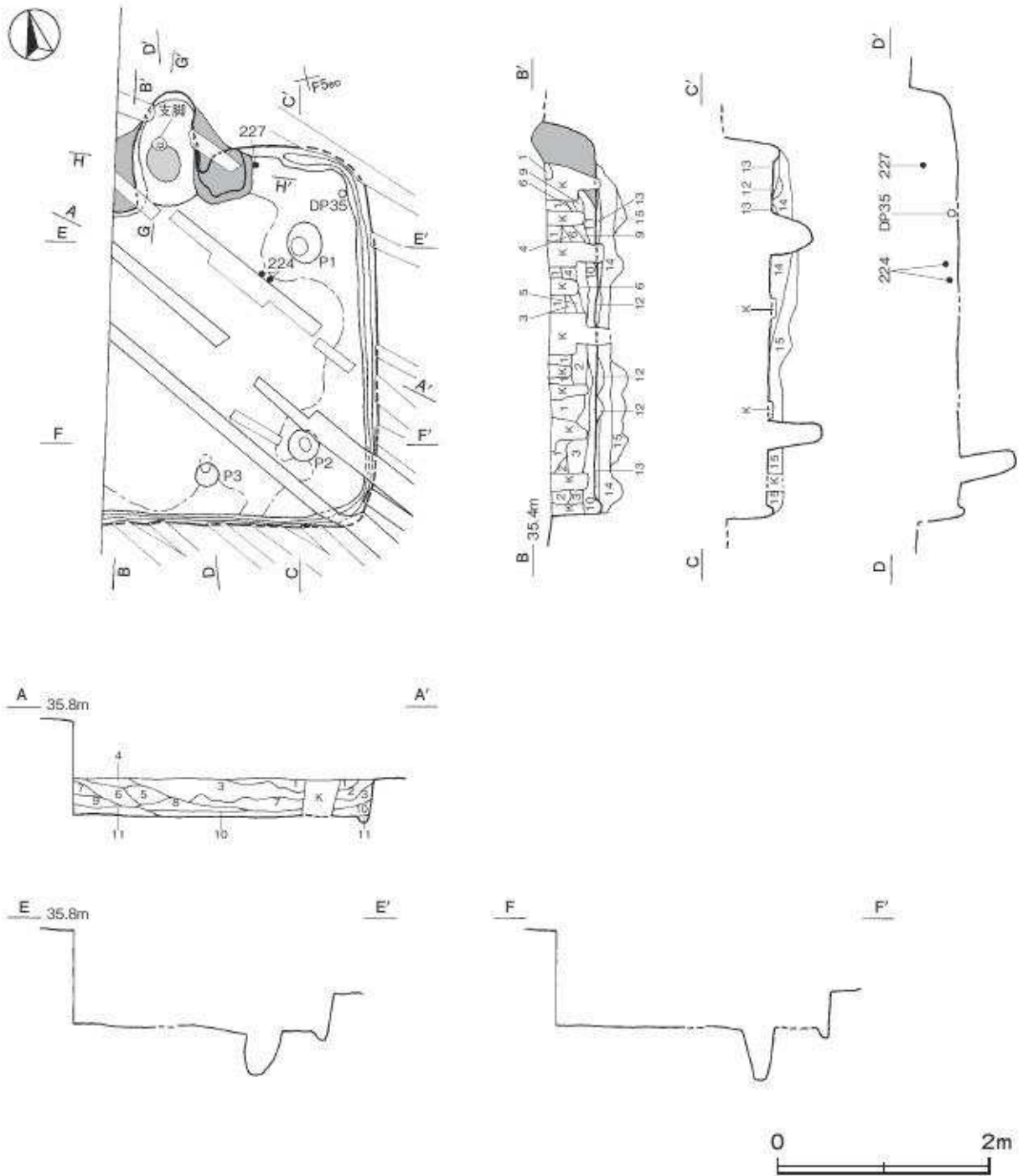
土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	10 黒褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
2 黒褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量	11 極暗褐色	粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	12 極暗褐色	ロームブロック少量（締まり強い）
4 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量	13 褐色	ロームブロック中量（締まり強い）
5 黒褐色	ローム粒子少量、粘土粒子微量	14 褐色	ロームブロック多量
6 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量	15 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
7 黒褐色	ロームブロック少量		
8 褐色	ロームブロック中量		
9 黒褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量		

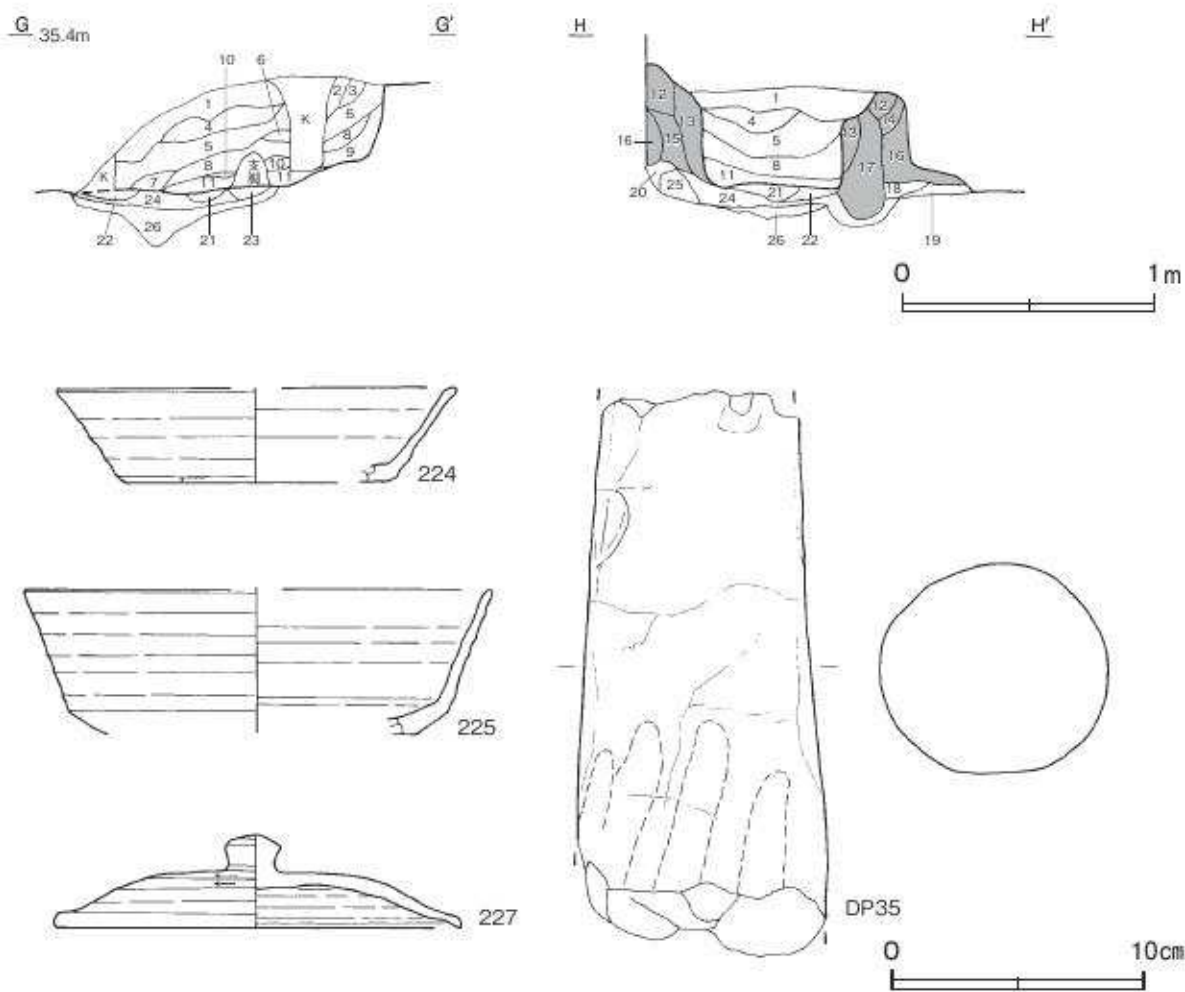
遺物出土状況 土師器片106点（坏1、甕105）、須恵器片21点（坏14、高台付坏1、蓋2、甕4）、土製品1点（支

脚), 自然礫8点が出土している。224はP1付近の覆土下層, 227は竈右袖付近の覆土上層から出土している。DP35は北東コーナー部の覆土下層から出土している。竈内部で出土した支脚は, 熱を受けてもろく, 破損が激しいため図示できなかった。

所見 時期は, 出土土器から8世紀中葉と考えられる。2か所で出土した支脚は, いずれも破断面を有していることから, 本来は1個体のもので, 建物の廃絶にともなって遺棄されたと考えられる。



第128図 第17号竪穴建物跡実測図



第 129 図 第 17 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 17 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 129 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
224	須恵器	鉢	[15.6]	3.8	[10.4]	長石・石英	褐灰	普通	ロクロナデ 体部下端回転ヘラ倒り	覆土下層	25%
225	須恵器	高台付鉢	[18.4]	(5.8)	—	長石・石英	褐灰	普通	ロクロナデ 高台部踏付の痕跡	覆土中	20%
227	須恵器	壺	16.1	3.7	—	長石・石英	黄灰	普通	ツマミ宝珠状 天井部回転ヘラ倒り	覆土上層	90% PL35

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP35	支脚	(22.5)	10.0	(8.2)	(1428.4)	長石	にぶい黄緑	ナデ 指頭痕	覆土下層	

第 21 号竪穴建物跡 (第 130 図)

位置 調査区中央部の F 6 d2 区、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 18 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東部の大半が調査区域外に位置しているため、南北軸は 3.82 m で、東西軸は 0.64 m しか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定でき、南北軸方向は N - 20° - E である。壁高は 44 ~ 50 cm で、壁は直立している。

床 平坦な貼床で、硬化した範囲は認められない。壁溝が西壁の壁下に設けられている。貼床は、確認面から50cmほど掘り込んだ部分にローム土を多量に埋土して構築されている。

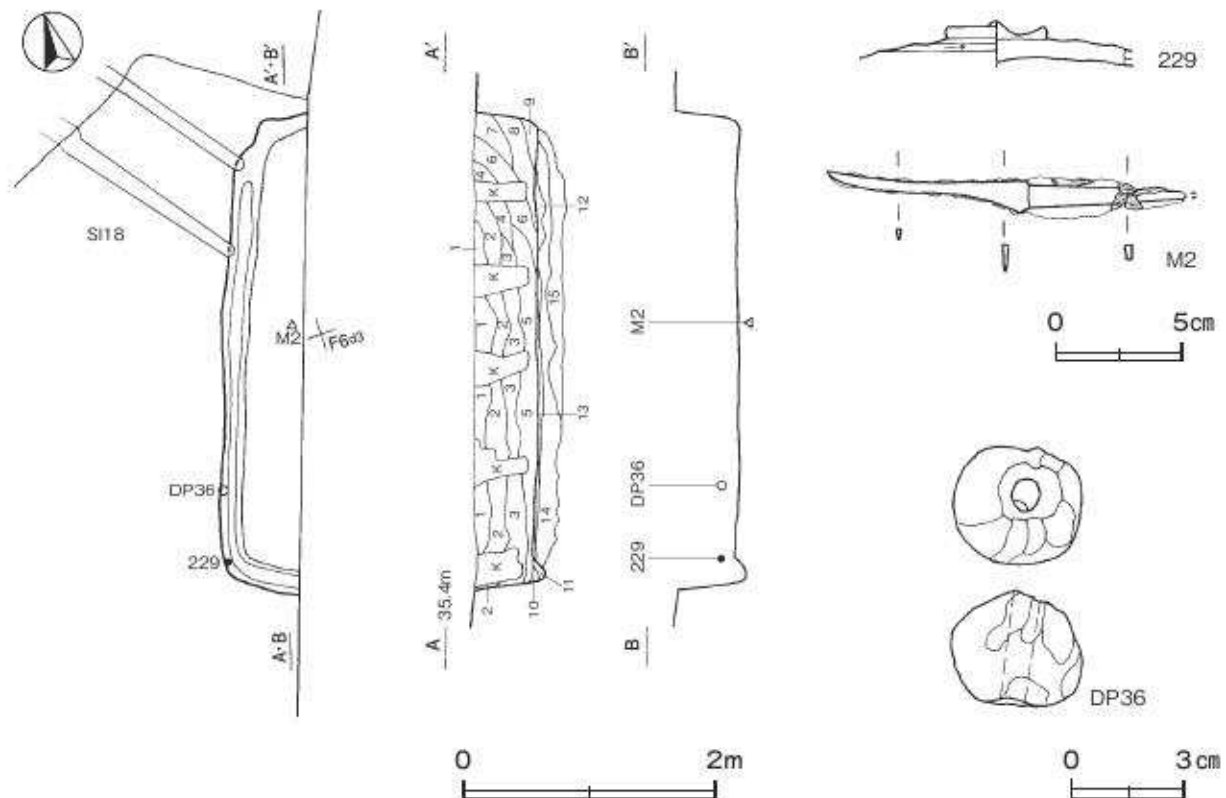
覆土 11層に分層できる。ロームブロックや焼土粒子、粘土粒子が不規則に混じる堆積状況で、埋め戻されている。第12～15層は貼床の構築土である。第6～9層には粘土粒子が含まれており、北壁に竈が付設されていたと推定できる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 9 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 10 黒褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 11 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 12 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 極暗褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 13 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 6 極暗褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック・粘土粒子微量 | 14 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 7 極暗褐色 | 粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 15 褐色 | ロームブロック多量 |
| 8 極暗褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片29点(甕)、須恵器片5点(坏1、蓋3、甕1)、土製品1点(土玉)、鉄製品1点(刀子)、自然礫1点が出土している。229・DP36は南西コーナー部の覆土下層、M2は西壁際の貼床の構築土から出土している。

所見 時期は、出土土器と隣接する第17号堅穴建物跡と軸方向が類似していることから、8世紀前葉と考えられる。



第130図 第21号堅穴建物跡・出土遺物実測図

第21号堅穴建物跡出土遺物観察表(第130図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
229	須恵器	蓋	-	(18)	-	長石・石英	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土下層	20%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP36	土玉	34	3.0	0.7	31.7	長石	にぶい橙	一方向からの穿孔・ナデ	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	刀子	(142)	1.3	0.3	(120)	鉄	刃部断面三角形 茎部断面長方形 茎部一部欠損	貼床構築土	PL41

第26号竪穴建物跡 (第131・132図)

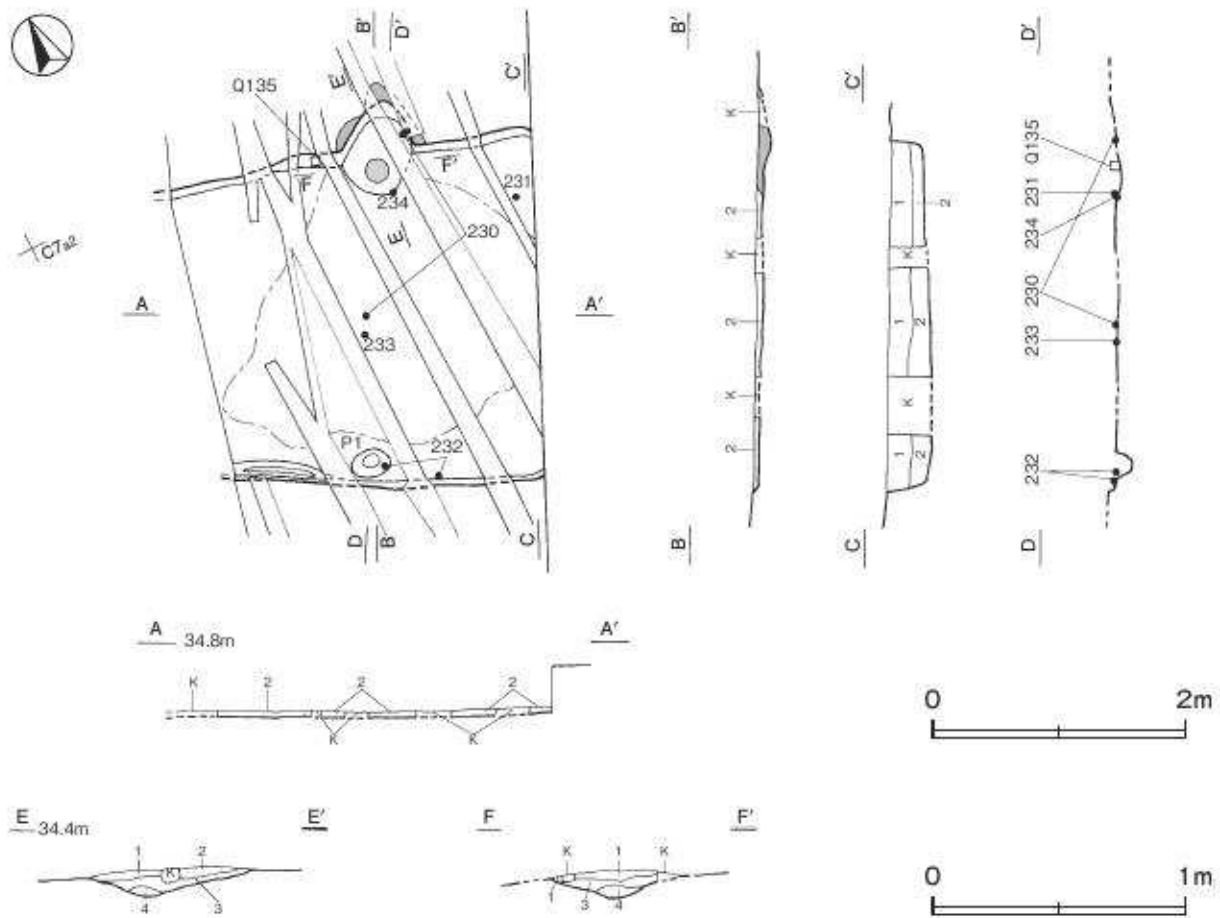
位置 調査区北部のC7a2区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第81号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 西部が削平されており、東部が調査区域外に延びているため、北東・南西軸は2.78mで、北西・南東軸は2.88mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定でき、主軸方向はN-20°-Eである。壁高は2~26cmで、壁は直立している。

床 平坦で、出入り口部から竈の焚口部にかけての中央部が踏み固められている。

竈 北東壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで75cmで、燃烧部幅は56cmである。袖部は、掘り残した地山に粘土を積み上げて構築されている。火床部は床面の高さから5cm掘りくぼめた地山を使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に36cm掘り込まれている。



第131図 第26号竪穴建物跡実測図

覆土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 2 灰黄色 焼土ブロック少量

- 3 暗褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 4 黒褐色 炭化粒子少量

ピット 深さ14cmで、南壁際に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 2層に分層できる。確認できた層は薄いですが、多量の遺物が出土していることから、埋め戻されている。

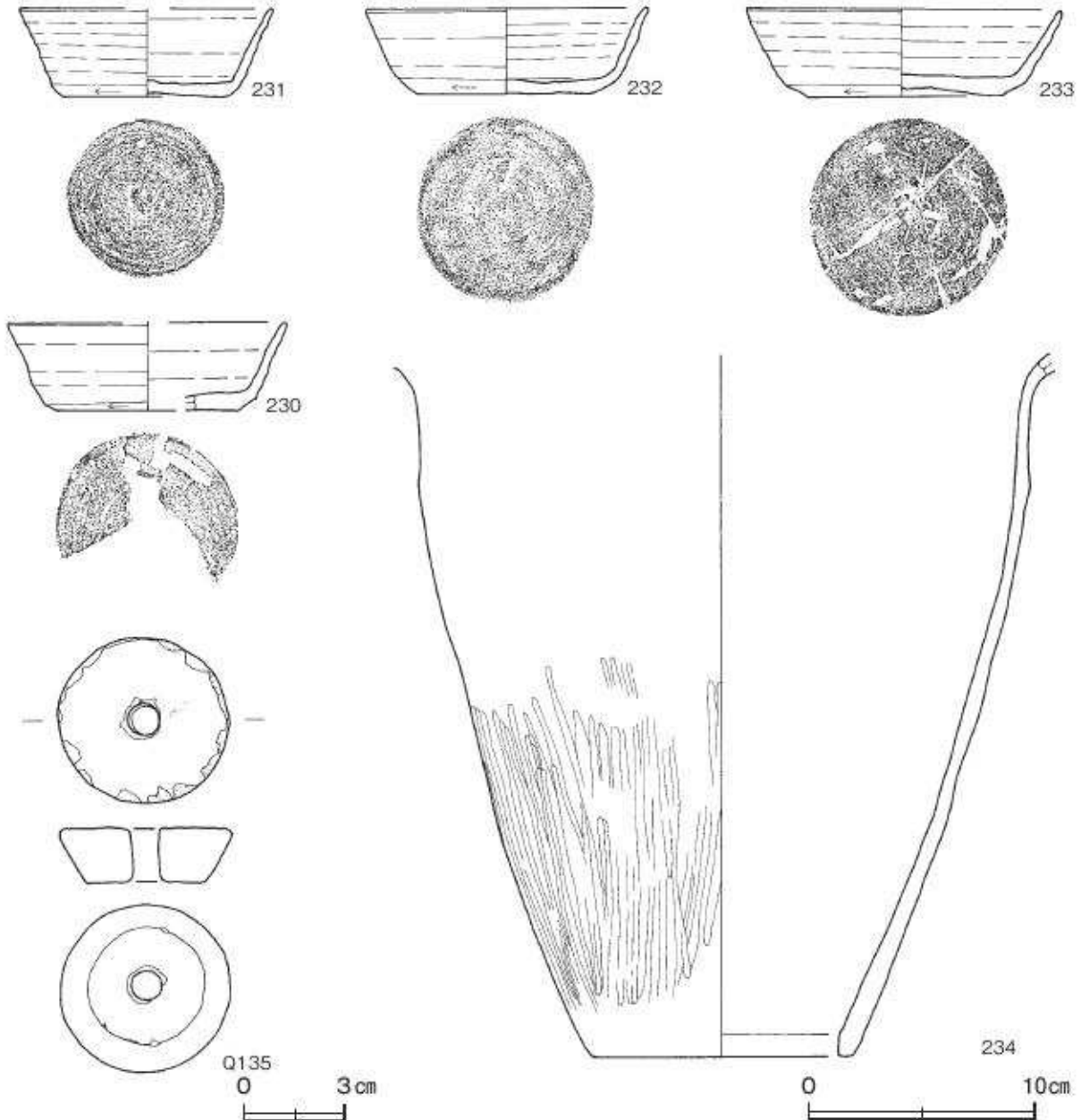
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

- 2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片100点(坏6, 甕93, 甌1), 須恵器片17点(坏8, 甕9), 石器1点(紡錘車)のほか、縄文土器片122点, 土製品3点, 石器13点, 剥片5点, 破断面のある礫47点, 自然礫53点が出土している。232は、南壁際の床面から正位で出土している。233は中央部, 231は東コーナー部の覆土下層からそれぞれ出土している。234は竈から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第132図 第26号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 26 号竖穴建物跡出土遺物観察表 (第 132 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
230	須恵器	坏	[121]	39	8.0	長石・石英・針状鉱物	黄灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土下層	50% PL35 木葉下産産
231	須恵器	坏	[111]	39	7.1	長石・石英・針状鉱物	暗灰黄	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土下層	70% PL35 木葉下産産
232	須恵器	坏	124	38	7.8	長石・石英・針状鉱物	にぶい黄	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	床面	80% PL35 木葉下産産
233	須恵器	坏	140	4.0	8.8	長石・石英	灰黄	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土下層	90% PL35
234	土師器	甗	—	(31.1)	11.5	長石・石英・雲母	橙	普通	体部下端ヘラ磨き	覆土下層	70% PL35

番号	器種	径	厚さ(長さ)	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q135	紡錘車	5.1	1.6	0.9	(532)	泥岩	全面研磨	覆土下層	PL38

表 5 奈良時代竖穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸(m)	(cm)				主柱穴	出入口	ピット	竈	貯蔵穴				
2	K 31b	N-10°-W	正方形	5.02×(4.62)	7-16	平坦	-	2	1	-	-	-	自然	土師器、須恵器	8世紀代	本跡→SB1	
7	H 51b	N-8°-E	長方形	4.18×3.26	57	平坦	-	3	1	-	1	-	人為	土師器、須恵器、管状土師、釘	8世紀 後葉		
9	H 51c	N-21°-E	正方形	4.53×(2.75)	59	平坦	-	2	1	-	1	-	人為	土師器、須恵器、土王、支脚	8世紀 前葉		
10	G 51b	N-20°-E	正方形	4.40×(2.54)	21-54	平坦	(全期)	2	2	-	1	-	人為	土師器、須恵器	8世紀 前葉		
12	G 51B	N-5°-E	正方形	(1.93×1.40)	48-67	平坦	一部	1	-	-	-	-	人為	土師器、須恵器、黄石	8世紀代	SI11→本跡	
13	G 51b	N-22°-E	長方形	4.60×4.14	38-46	平坦	全期	4	1	9	1	-	人為	土師器、須恵器、土王、管状土師、石鏝、刀子	8世紀 前葉		
17	F 51e	N-9°-E	正方形	3.56×(2.55)	35-37	平坦	(全期)	2	1	-	1	-	人為	土師器、須恵器、支脚	8世紀 中葉		
21	F 6d2	N-20°-E	正方形	3.82×(0.64)	44-50	平坦	一部	-	-	-	-	-	人為	土師器、須恵器、土王、刀子	8世紀 前葉	SI18→本跡	
26	C 7a2	N-20°-E	正方形	(2.88)×2.78	2-26	平坦	一部	-	1	-	1	-	人為	土師器、須恵器、紡錘車	8世紀 前葉	SK81→本跡	

5 中世の遺構と遺物

当時代の遺構は、竖穴遺構 17 棟、地下式坑 9 基、井戸跡 1 基、粘土貼土坑 7 基、墓坑 3 基、土坑 3 基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竖穴遺構

第 1 号竖穴遺構 (SK 1) (第 133 図)

位置 調査区中央部の E 6 d5 区で、標高 34 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 2.47 m、短軸 1.60 m の長方形で、長軸方向は N-85°-W である。壁高は 46～48 cm で、北壁・東壁は内傾しており、南壁・西壁は直立している。

床 平坦で、明らかな硬化面は認められない。

ピット 2 か所。P 1・P 2 は深さ 23 cm・17 cm で、性格は不明である。

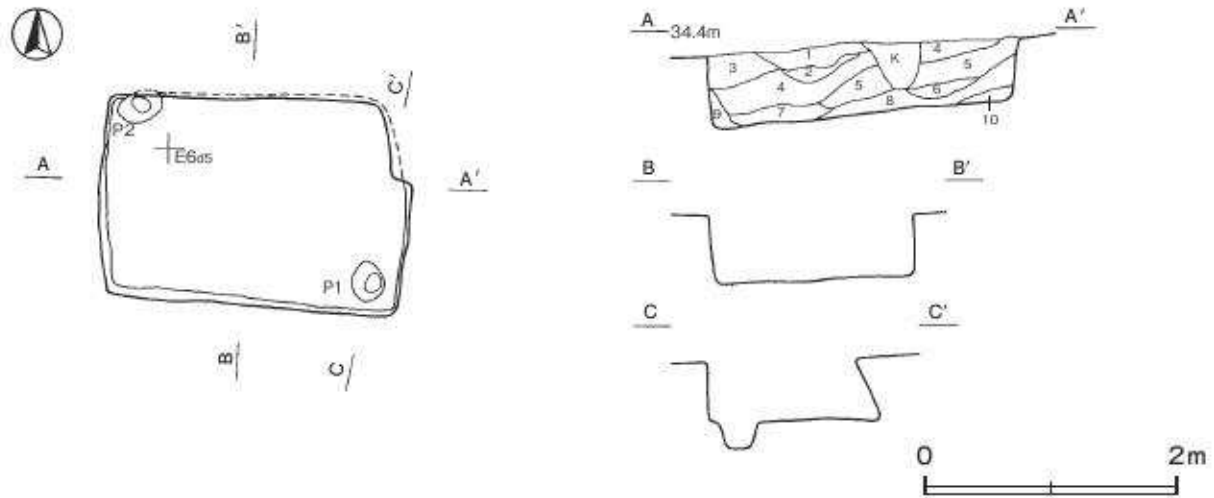
覆土 10 層に分層できる。ブロック状の不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|----------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック多量、鹿沼パミスブロック微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック少量、鹿沼パミスブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック多量、鹿沼パミスブロック少量 | 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、鹿沼パミス粒子微量 |

- | | | | | | |
|---|--------|-----------------------|----|--------|---------------------|
| 5 | にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、鹿沼バミスブロック少量 | 8 | 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 6 | 暗褐色 | ロームブロック多量、鹿沼バミスブロック中量 | 9 | 褐色 | ロームブロック多量、鹿沼バミス粒子微量 |
| 7 | にぶい黄褐色 | 鹿沼バミスブロック多量、ロームブロック中量 | 10 | にぶい黄褐色 | ロームブロック・鹿沼バミス粒子少量 |

所見 時期は、遺構の形態から中世と考えられる。第12号竪穴遺構と並列して確認でき、住居か倉庫と考えられる。



第133図 第1号竪穴遺構実測図

第2号竪穴遺構 (SK 2) (第134図)

位置 調査区中央部のE 6 b5区で、標高34 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.43 m、短軸1.72 mの長方形で、長軸方向はN - 10° - Wである。壁高は40 ~ 53cmで、壁は直立している。

床 平坦で、中央部から南西コーナー部にかけて踏み固められている。西壁際の床面から炭化物と焼土が出土している。

ピット P 1は深さ26cmで、性格は不明である。

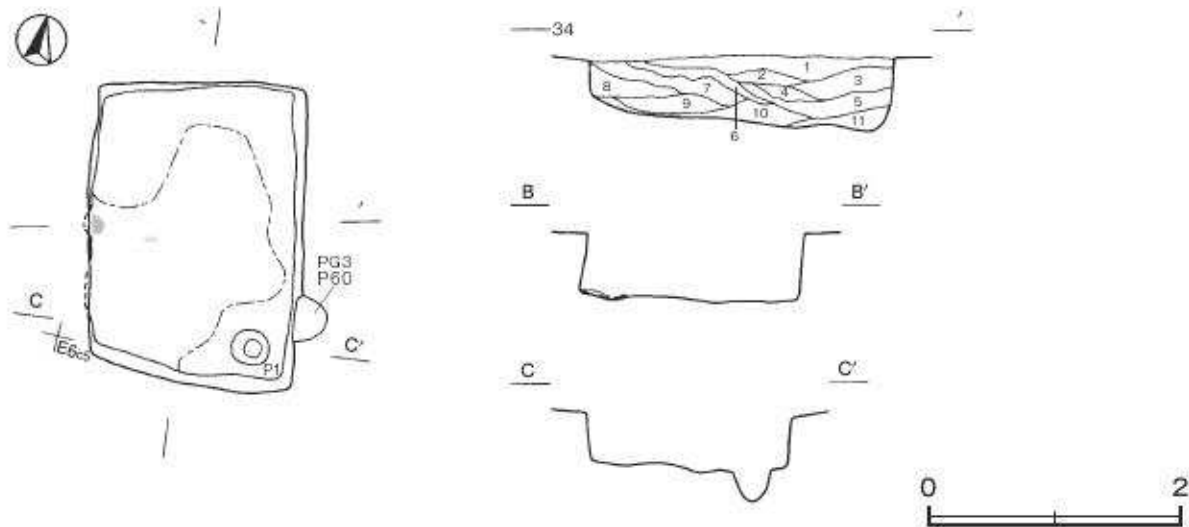
覆土 11層に分層できる。ブロック状の不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | | | |
|---|--------|-----------------------|----|--------|-----------------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼バミスブロック少量 | 7 | にぶい黄褐色 | ロームブロック多量、鹿沼バミスブロック少量 |
| 2 | にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、鹿沼バミスブロック少量 | 8 | 黒褐色 | ロームブロック少量、鹿沼バミスブロック微量 |
| 3 | 黒褐色 | ロームブロック・鹿沼バミスブロック中量 | 9 | 褐色 | ロームブロック多量、鹿沼バミスブロック少量 |
| 4 | 黒褐色 | 鹿沼バミスブロック少量、ロームブロック微量 | 10 | 黒褐色 | ロームブロック多量、鹿沼バミス粒子少量 |
| 5 | にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、鹿沼バミスブロック少量 | 11 | 褐色 | ローム粒子多量、鹿沼バミス粒子微量 |
| 6 | 黒色 | ローム粒子微量 | | | |

遺物出土状況 混入した縄文土器片1点、剥片1点が出土している。

所見 時期は、遺構の形態から中世と考えられる。床面が踏み固められており、頻繁に出入りが行われた様相が見られることから、住居や倉庫と考えられる。炭化物や焼土が確認されたが、火を燃やした痕跡は認められない。



第134図 第2号竪穴遺構実測図

第3号竪穴遺構 (SK14) (第135図)

位置 調査区中央部のE 6 b1区で、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第19号竪穴建物跡を掘り込み、第20号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.20m、短軸1.42mの隅丸長方形で、長軸方向はN-10°-Eである。壁高は76~80cmで、壁はほぼ直立している。

床 平坦で、明らかな硬化面は認められない。

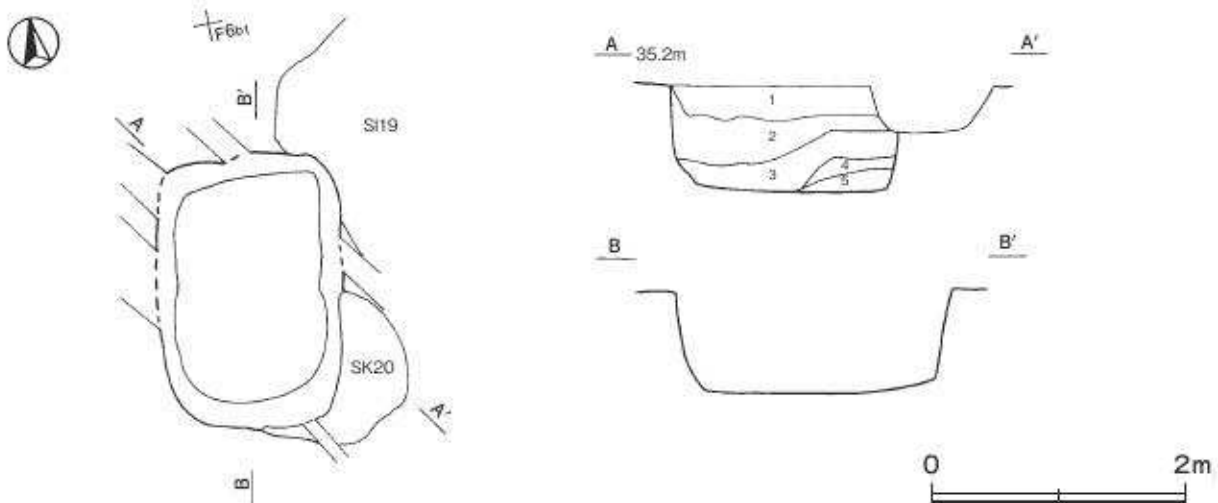
覆土 5層に分層できる。ロームブロックが不規則に中量以上含まれている堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック多量 | 5 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 3 極暗褐色 ロームブロック中量 | |

遺物出土状況 陶器1点(皿)のほか、弥生土器片5点、土師器片44点、須恵器片4点、自然礫6点が出土している。陶器は細片で図示できなかったが、胎土や釉薬の状況から瀬戸・美濃地方産と考えられる。

所見 時期は、出土土器と遺構の形態から中世と考えられる。性格は不明である。



第135図 第3号竪穴遺構実測図

第4号竖穴遺構 (SK24) (第136図)

位置 調査区中央部のE 6c3区で、標高34mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が調査区域外に延びているため、北東・南西軸は2.15mで、北西・南東軸は1.45mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定できる。残存している部分から長軸方向はN-18°-Eである。壁高は27~31cmで、壁はほぼ直立している。

床 平坦で、明らかな硬化面は認められない。

ピット P1は深さ37cmで、性格は不明である。

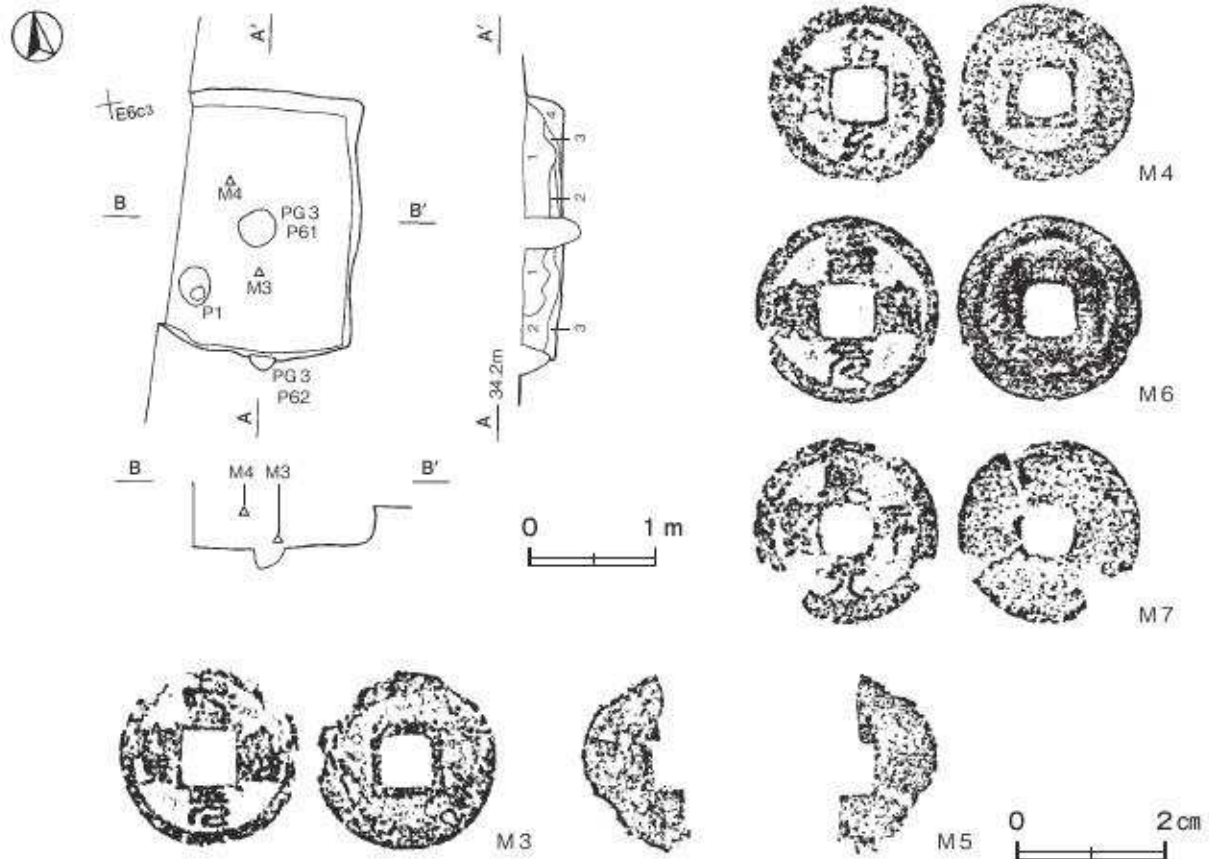
覆土 4層に分層できる。ブロック状の不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|------|------------------|------|-------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック中量, 炭化物少量 | 3 褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック多量, 炭化物中量 | 4 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師質土器片1点(内耳鍋)、銭貨6枚のほか、土師器片1点が出土している。M3は中央部の覆土中層、M4は中央部の覆土上層から出土している。M5~M7は覆土中からそれぞれ出土している。土師質土器片と銭貨1枚は、細片のため図示できなかった。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。銭貨は、埋め戻しの際に投げ込まれたものと考えられる。



第136図 第4号竖穴遺構・出土遺物実測図

第4号竖穴遺構出土遺物観察表 (第136図)

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M3	開寧元寶	2.40	0.67	0.15	(2.42)	1068	銅	篆書	覆土中層	
M4	紹聖元寶	2.39	0.66	0.12	2.82	1094	銅	真書	覆土上層	
M5	—□—	(2.28)	(0.54)	0.14	(0.86)	—	銅	表面・背面凹凸なく銭種不明 □は通。	覆土中	
M6	開寧元寶	2.50	0.68	0.12	1.88	1068	銅	篆書	覆土中	PL41
M7	咸平元寶	2.47	0.65	0.13	(1.81)	998	銅	真書	覆土中	

第5号竖穴遺構 (SK83) (第137・138図)

位置 調査区中央部のE 6 a5区で、標高34 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第78号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.64 m、短軸1.74 mの長方形で、長軸方向はN-7°-Wである。壁高は43~46cmで、壁は北西コーナー部から北部は外傾して立ち上がっており、他は直立している。

床 平坦で、南半部が踏み固められている。

ピット 4か所。P1~P4は深さ17~19cmで、性格は不明である。

ピット土層解説 (各ピット共通)

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 鹿沼バミス粒子多量、ロームブロック少量

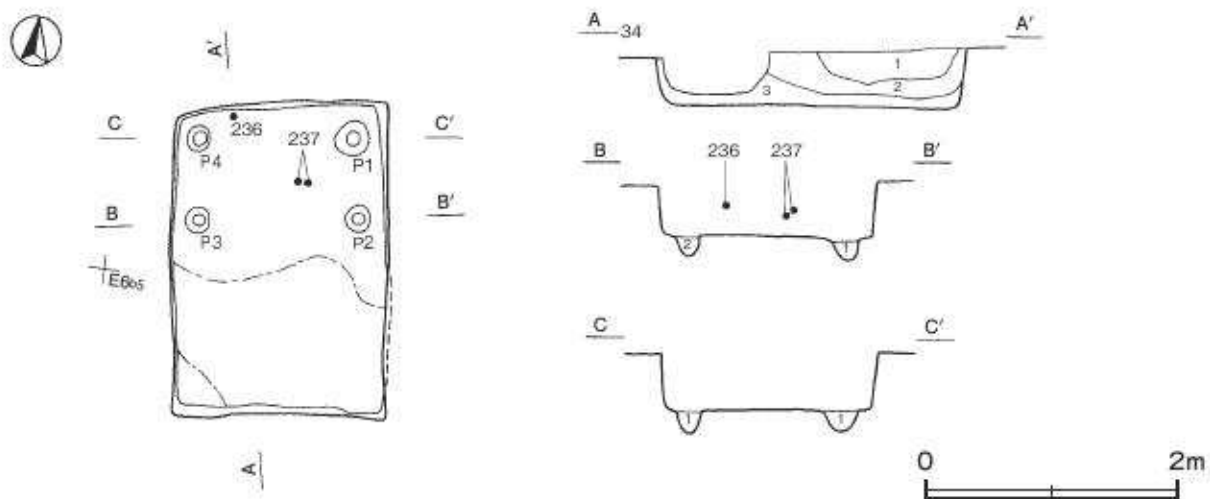
覆土 3層に分層できる。ロームブロックや鹿沼バミスが不規則に混じるブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量
2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子・鹿沼バミス
3 暗褐色 ロームブロック中量、鹿沼バミスブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片6点(内耳鍋5、搗鉢1)のほか、縄文土器片1点、弥生土器片1点、土師器片4点、須恵器片1点、剥片1点が出土している。236・237は北部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器と遺構の形態から中世と考えられる。床面が踏み固められており、頻繁に出入りが行われた様相が見られることから、住居か倉庫と考えられる。



第137図 第5号竖穴遺構実測図



第138図 第5号竪穴遺構出土遺物実測図

第5号竪穴遺構出土遺物観察表 (第138図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
236	土版瓦器	内耳網	-	(6.2)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい釉	普通	口縁部ナア 耳部貼付 外面黒付着	覆土中層	10%
237	土版瓦器	櫛鉢	-	(28)	[12.8]	長石・石英・赤色粒子	椀	普通	外面ナア 5条一単位の櫛目	覆土中層	10% PL36

第6号竪穴遺構 (SK84) (第139・140図)

位置 調査区中央部のE 6 b4区で、標高34 mほどの台地平坦部に位置している。

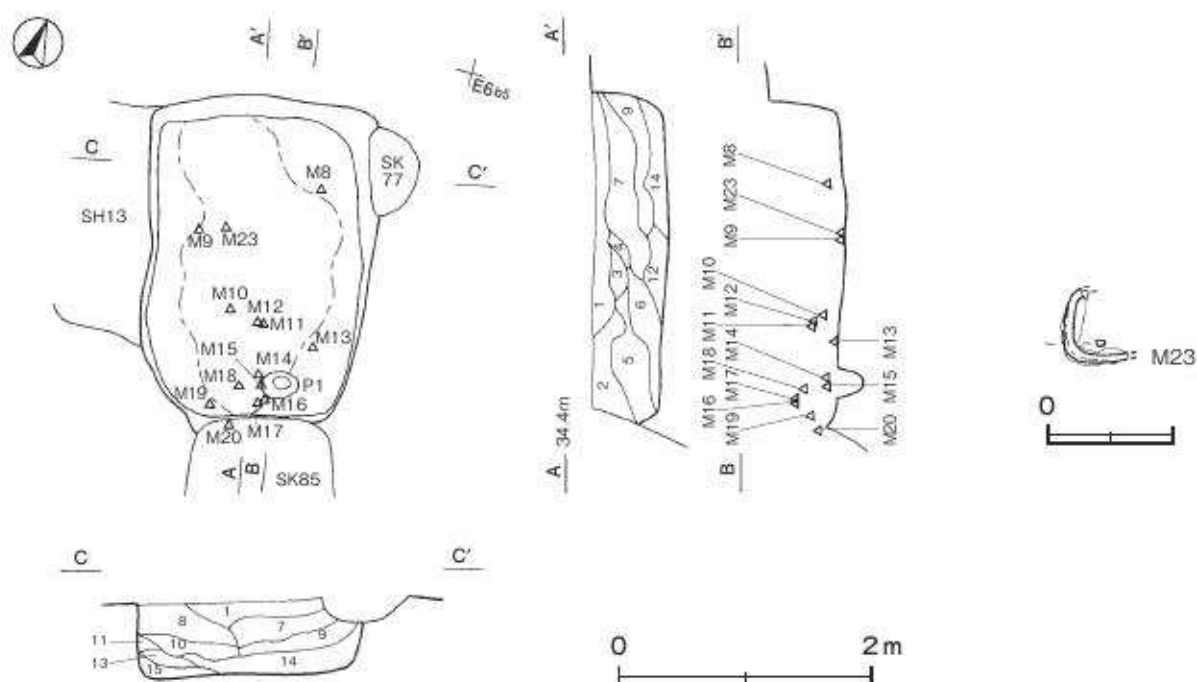
重複関係 第13号竪穴遺構を掘り込み、第77・85号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南東部が削平されているが、長軸2.54 mで、短軸は1.82 mが確認できた。長軸方向はN-13°-Wで、平面形は不整長方形である。壁高は48~58cmで、壁は直立している。

床 平坦で、東壁際及び西壁際を除いて踏み固められている。

ピット P1は深さ19cmで、性格は不明である。

覆土 15層に分層できる。ブロック状の不規則な堆積状況から、埋め戻されている。



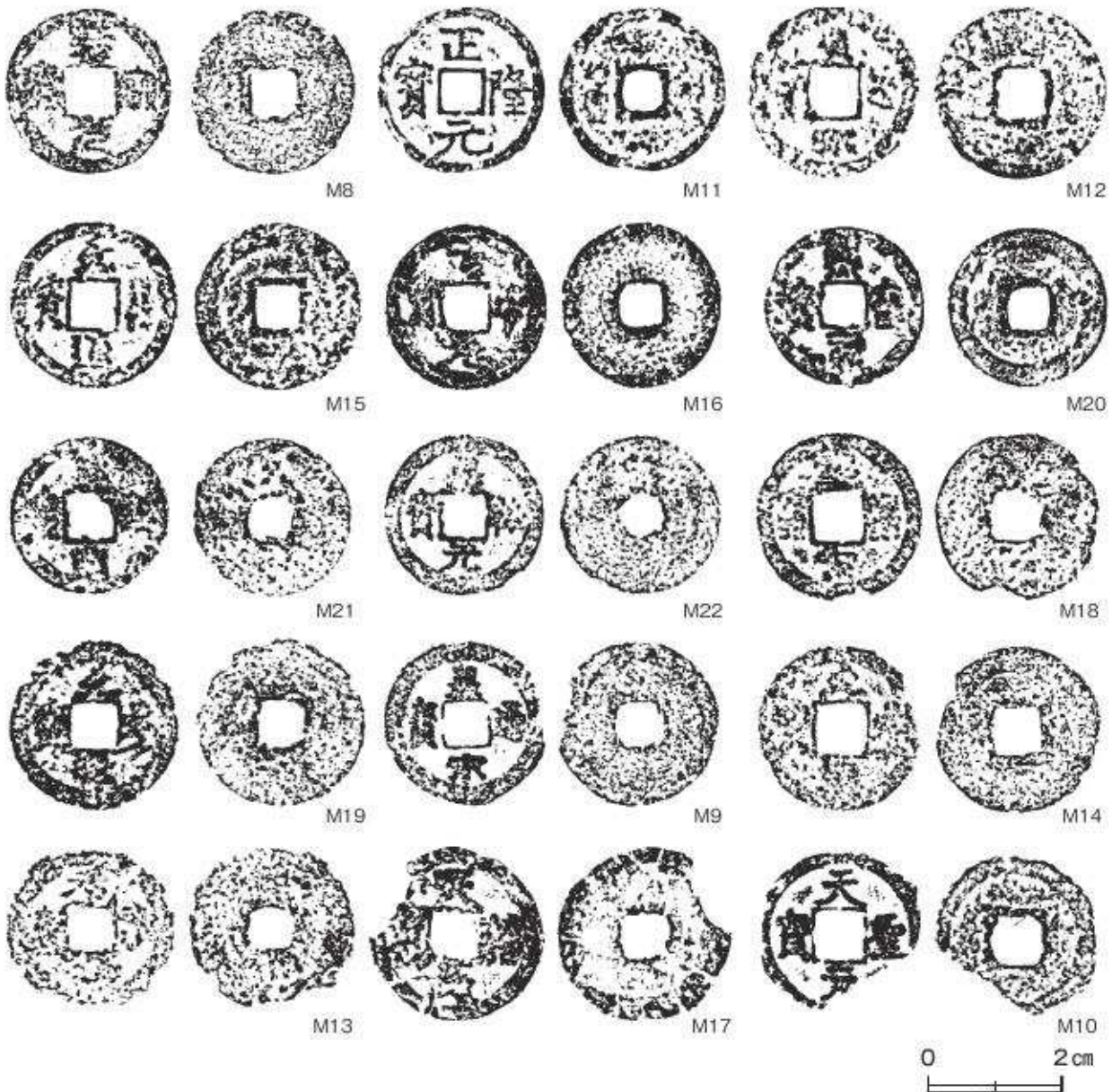
第139図 第6号竪穴遺構・出土遺物実測図

土層解説

1 褐 色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、鹿沼バミス 粒子微量	8 黒 褐 色	ロームブロック少量、鹿沼バミス粒子微量
2 暗 褐 色	ロームブロック中量	9 褐 色	ロームブロック少量、鹿沼バミス粒子微量
3 暗 褐 色	炭化粒子少量	10 黒 褐 色	ロームブロック・炭化粒子少量
4 暗 褐 色	ロームブロック少量	11 黒 褐 色	ロームブロック少量
5 暗 褐 色	ロームブロック・炭化粒子少量	12 暗 褐 色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
6 黒 褐 色	ロームブロック・炭化粒子少量、鹿沼バミス粒子微量	13 黒 褐 色	ローム粒子微量
7 暗 褐 色	ロームブロック中量、鹿沼バミス粒子微量	14 黒 褐 色	ローム粒子・炭化粒子少量
		15 暗 褐 色	ローム粒子微量

遺物出土状況 鉄製品1点(釘)、銭貨18枚のほか、縄文土器片2点、土師器片3点、自然礫5点が出土している。M9・M23は中央部の床面、M13は南部の床面、M8は北部の覆土下層、M10～M12は中央部の覆土中層からそれぞれ出土している。M14・M15、M18～M20は南部の覆土中層、M16・M17は南部の覆土上層から出土している。M21・M22は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。床面が踏み固められており、頻繁に出入りが行われた様相が見られることから、住居か倉庫と考えられる。銭貨は、埋め戻しの際に投げ込まれたものと考えられる。



第140図 第6号竪穴遺構出土遺物実測図

第6号竖穴遺構出土遺物観察表（第139・140図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 23	釘	(5.5)	0.5	0.3	(2.9)	鉄	断面方形 先端部欠損	床面	

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M 8	應寧元寶	2.53	0.69	0.12	2.61	1068	銅	真書	覆土下層	
M 9	皇宋通寶	2.45	0.68	0.16	(2.23)	1038	銅	真書	床面	
M 10	天聖元寶	2.39	0.77	0.17	(1.88)	1023	銅	真書	覆土中層	
M 11	正隆元寶	2.48	0.58	0.16	(2.48)	1157	銅	真書	覆土中層	PL41
M 12	皇宋通寶	2.55	0.71	0.16	2.58	1038	銅	真書	覆土中層	
M 13	天聖元寶	(2.45)	0.70	0.15	(2.21)	1023	銅	真書	床面	
M 14	元豊通寶	2.45	0.70	0.16	(2.45)	1078	銅	行書	覆土中層	
M 15	元豊通寶	2.47	0.69	0.20	3.02	1078	銅	行書	覆土中層	
M 16	治平元寶	2.47	0.71	0.16	3.45	1064	銅	篆書	覆土上層	
M 17	天禧通寶	2.66	0.76	0.18	(2.22)	1017	銅	真書	覆土上層	
M 18	皇宋通寶	2.50	0.73	0.18	(2.72)	1038	銅	真書	覆土中層	
M 19	元豊通寶	2.53	0.72	0.15	(2.09)	1078	銅	行書	覆土中層	
M 20	應寧元寶	2.43	0.65	0.15	2.87	1068	銅	篆書	覆土中層	
M 21	□□□寶	2.41	0.66	0.15	2.42	-	銅	表面・背面凹凸なく銭種不明	覆土中	
M 22	嘉祐元寶	2.41	0.60	0.19	3.07	1056	銅	真書	覆土中	

第7号竖穴遺構 (SK86) (第141図)

位置 調査区中央部のE 6e4区で、標高34mほどの台地平坦部に位置している。

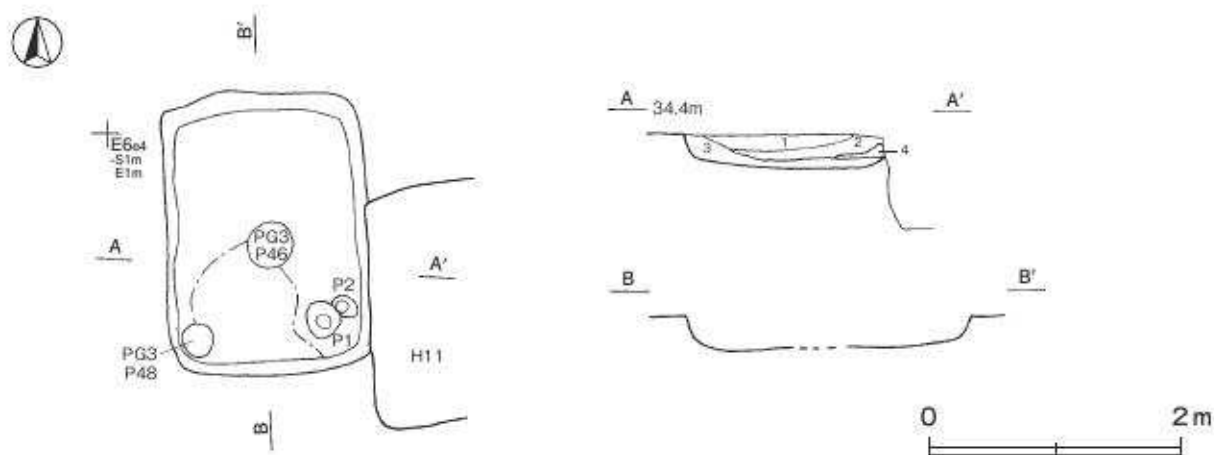
重複関係 第11号竖穴遺構、第3号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.27m、短軸1.57mの長方形で、長軸方向はN-4°-Wである。壁高は19~27cmで、壁は緩やかに立ち上がっている。

床 平坦で、南部が踏み固められている。

ピット 2か所。P1・P2は深さ23cm・15cmで、性格は不明である。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックや鹿沼パミスが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。



第141図 第7号竖穴遺構実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・鹿沼バミスブロック少量 | 3 黒褐色 | ロームブロック中量、鹿沼バミスブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・鹿沼バミスブロック微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量、鹿沼バミス粒子微量 |

遺物出土状況 土師質土器片3点(皿1,内耳鍋2),鉄製品1点(釘)のほか,縄文土器片5点,土師器片5点,石器1点(石錘),自然礫1点が出土している。土師質土器片は,細片のため図示できなかった。

所見 時期は,出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。床面が踏み固められており,頻繁に出入りが行われた様相が見られることから,住居か倉庫と考えられる。

第8号竪穴遺構 (SK87) (第142・143図)

位置 調査区中央部のE6c4区で,標高34mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第9号竪穴遺構,第3号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.38m,短軸1.56mの長方形で,長軸方向はN-86°-Wである。壁高は26cmで,壁は直立している。

床 平坦で,明らかな硬化面は認められない。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックや鹿沼バミスが不規則に混じる堆積状況から,埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|--------|
| 1 褐色 | 鹿沼バミス粒子微量 | 3 暗褐色 | 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼バミスブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片1点(内耳鍋),銭貨1枚のほか,石器1点(石錘)が出土している。M24は西部の覆土上層から出土している。土師質土器片は,細片のため図示できなかった。

所見 時期は,出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。銭貨は,埋め戻しの際に投げ込まれたものと考えられる。

第9号竪穴遺構 (SK88) (第142・144図)

位置 調査区中央部のE6c4区で,標高34mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第8・10号竪穴遺構を掘り込み,第79号土坑,第3号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.62m,短軸1.77mの長方形で,長軸方向はN-81°-Eである。壁高は75cmで,壁は直立している。東壁と西壁は,第8号竪穴遺構と第10号竪穴遺構に接する部分に,ローム土や鹿沼バミスを含む土砂を互層に積み上げ,突き固めて構築されている。

床 平坦で,西半部が踏み固められている。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックや鹿沼バミスが不規則に混じる堆積状況から,埋め戻されている。第7~10層は壁の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|---------|-----------|
| 1 黒褐色 | 鹿沼バミスブロック微量 | 6 極暗褐色 | 鹿沼バミス粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック多量,鹿沼バミスブロック中量 | 7 褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 8 極暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 4 黒色 | ローム粒子極微量 | 9 にい赤褐色 | 焼土粒子中量 |
| 5 極暗褐色 | 鹿沼バミス粒子少量,炭化粒子微量 | 10 黒褐色 | ローム粒子微量 |

遺物出土状況 土師質土器片2点(内耳鍋),銭貨8枚のほか,縄文土器片2点,土師器片2点,自然礫5点が出土している。238は南壁際,M31・M32は中央部の床面からそれぞれ出土している。M30は中央部の覆

土中層から出土している。M 26 は中央部、M 27・M 28 は南壁際、M 29 は北壁際の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。東壁と西壁の第 8 号竪穴遺構と第 10 号竪穴遺構に接する部分は、崩落防止の目的で土砂を突き固めて壁を構築している。床面が踏み固められており、頻繁に出入りが行われた様相が見られることから、住居か倉庫と考えられる。銭貨は、埋め戻しの際に投げ込まれたものと考えられる。

第 10 号竪穴遺構 (SK89) (第 142・145 図)

位置 調査区中央部の E 6c4 区で、標高 34 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 9 号竪穴遺構、第 3 号ピット群に掘り込まれている。

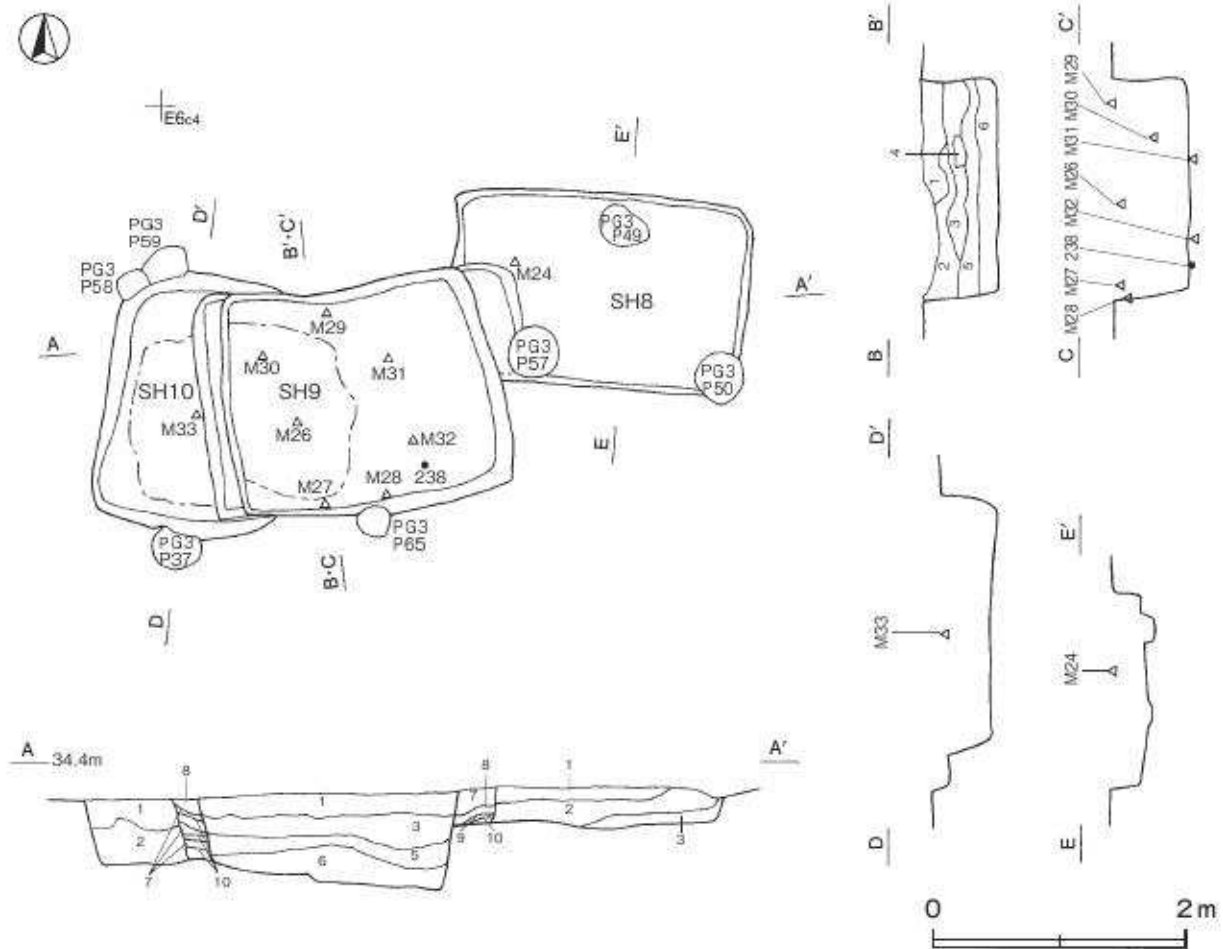
規模と形状 東部が掘り込まれているため、長軸は 2.04 m で、短軸は 1.54 m しか確認できなかった。長軸方向は N-8°-E で、平面形は長方形と推定できる。壁高は 43~45 cm で、壁はほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。

覆土 2 層に分層できる。ロームブロックや鹿沼バミスが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・鹿沼バミスブロック少量 2 黒褐色 ロームブロック・鹿沼バミスブロック少量



第 142 図 第 8~10 号竪穴遺構実測図

遺物出土状況 土師質土器片1点(内耳鍋), 鉄製品2点(鎌, 釘), 銭貨2枚のほか, 縄文土器片1点, 土師器片4点が出土している。M 33は中央部の覆土上層, M 34は覆土中から出土している。土師質土器片と銭貨2枚は, 細片のため図示できなかった。

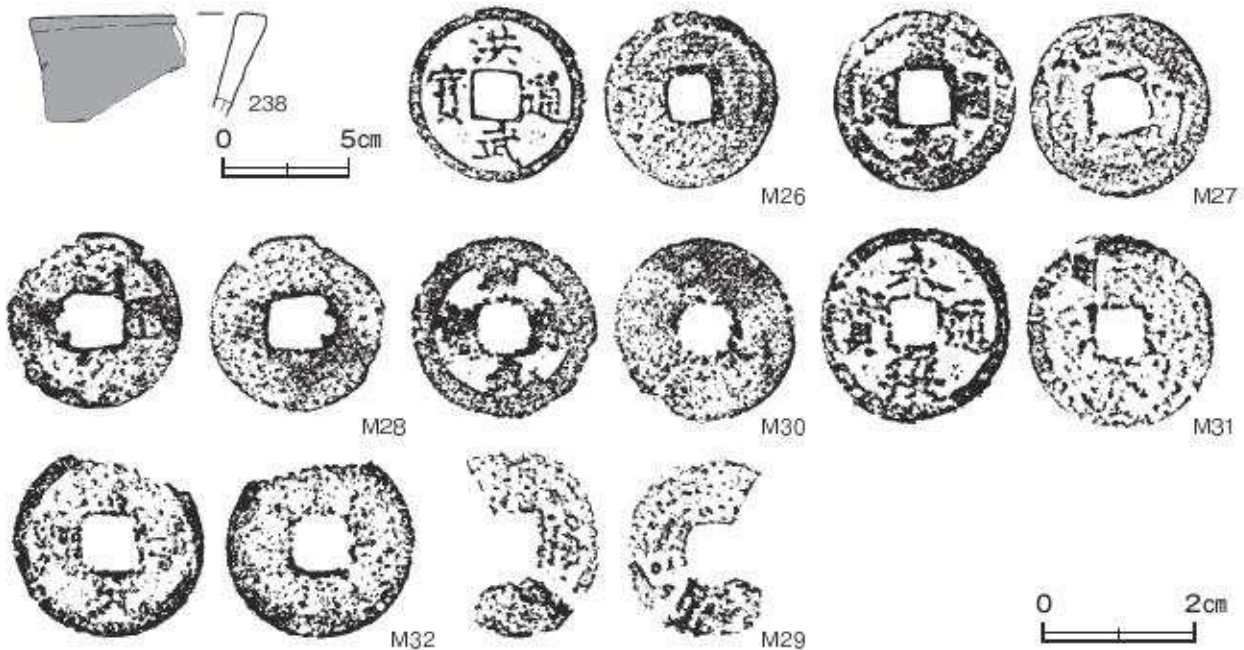
所見 時期は, 出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。床面が踏み固められており, 頻繁に出入りが行われた様相が見られることから, 住居か倉庫と考えられる。



第 143 図 第 8 号竪穴遺構出土遺物実測図

第 8 号竪穴遺構出土遺物観察表 (第 143 図)

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M 24	祥符通寶	234	0.63	0.14	2.84	1008	銅	真書	覆土上層	



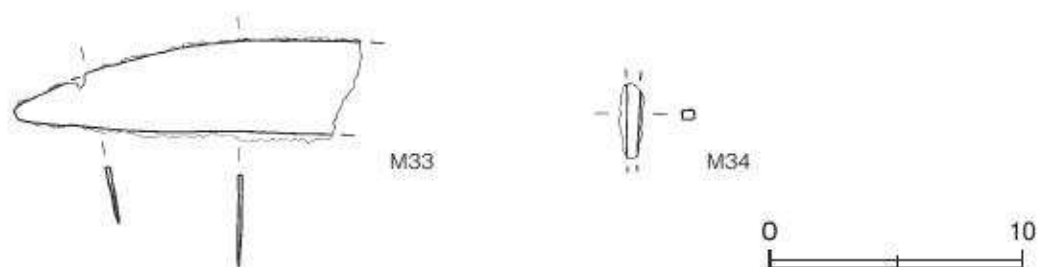
第 144 図 第 9 号竪穴遺構出土遺物実測図

第 9 号竪穴遺構出土遺物観察表 (第 144 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
238	土師質土器	内耳鍋	-	(41)	-	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部ナデ 外面煤付着	床面	5%

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M 26	洪武通寶	234	0.56	0.19	3.91	1368	銅	真書	覆土上層	PL41
M 27	至和通寶	245	0.72	0.15	(2.24)	1054	銅	真書	覆土上層	PL41

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M 28	□□通□	2.35	0.74	0.12	(197)	-	銅	鋳不足	覆土上層	
M 29	開穂□-	2.34	0.72	0.14	(139)	1205	銅	真書	覆土上層	
M 30	聖宋元寶	2.45	0.68	0.13	(195)	1101	銅	行書	覆土中層	
M 31	永樂通寶	2.55	0.61	0.21	(233)	1408	銅	真書	床面	
M 32	熙寧元寶	2.56	0.77	0.15	(197)	1068	銅	真書	床面	



第 145 図 第 10 号竪穴遺構出土遺物実測図

第 10 号竪穴遺構出土遺物観察表 (第 145 図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 33	鎌	(13.8)	3.7	0.2	(43.8)	鉄	断面三角形・基部欠損	覆土上層	PL41
M 34	釘	(3.0)	0.5	0.3	(3.4)	鉄	断面方形・頭部・先端部欠損	覆土中	

第 11 号竪穴遺構 (SK90) (第 146 図)

位置 調査区中央部の E 6e5 区で、標高 34 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 7 号竪穴遺構を掘り込み、第 3 号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 南東部が調査区域外に延びているが、長軸 2.14 m、短軸 1.85 m を確認した。長軸方向 N - 80° - E で、平面形は長方形である。壁高は 67 - 75 cm で、壁はほぼ直立している。西壁を除いた壁の中位には、径 10 - 20 cm の粘土塊が壁に埋め込まれた状態で貼付けられていた。

床 平坦で、中央部東寄りが踏み固められている。

ピット 4 か所。P 1 - P 4 は深さ 9 - 23 cm で、性格は不明である。

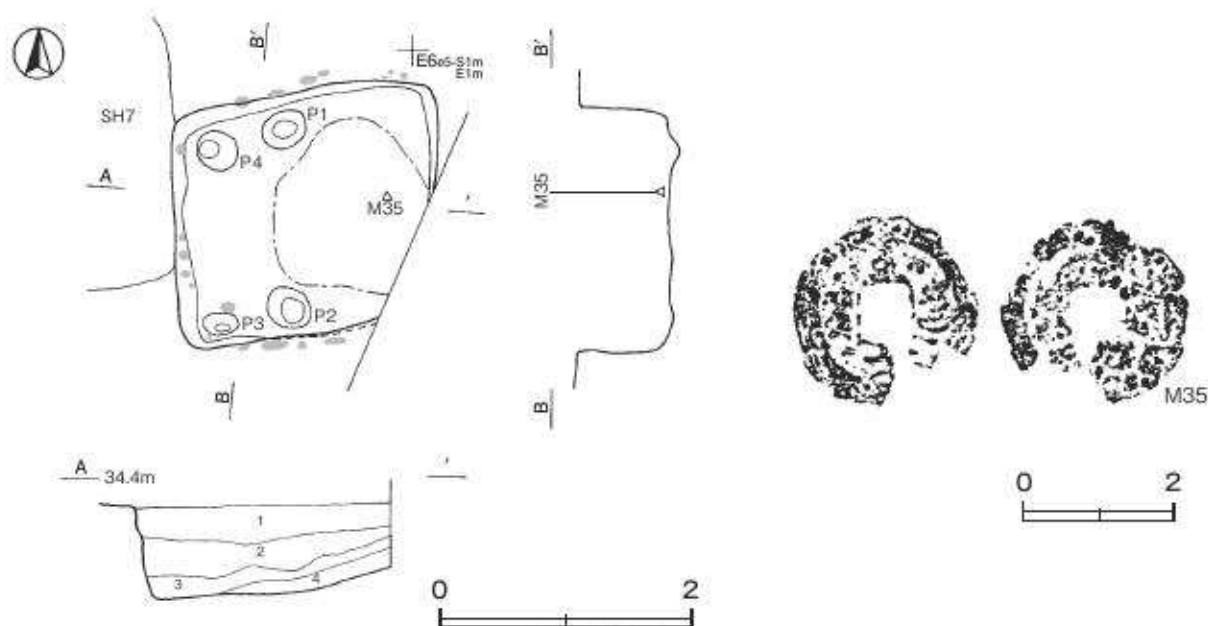
覆土 4 層に分層できる。ロームブロックや鹿沼バミスが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | | | |
|---|----|--------------------------------|---|------|---------------------|
| 1 | 褐色 | ローム粒子多量、鹿沼バミスブロック少量 | 3 | 暗褐色 | ローム粒子少量、鹿沼バミスブロック微量 |
| 2 | 褐色 | ロームブロック多量、鹿沼バミスブロック少量、粘土ブロック微量 | 4 | 極暗褐色 | ロームブロック・鹿沼バミス粒子少量 |

遺物出土状況 銭貨 1 枚のほか、縄文土器片 4 点、土師器片 1 点、自然礫 2 点が出土している。M 35 は東部の覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。床面が踏み固められており、頻繁に出入りが行われた様相が見られることから、住居か倉庫と考えられる。銭貨は、埋め戻しの際に投げ込まれたものと考えられる。



第 146 図 第 11 号竪穴遺構・出土遺物実測図

第 11 号竪穴遺構出土遺物観察表 (第 146 図)

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M35	室造元寶	2.50	0.68	0.12	(1.23)	995	銅	草書	覆土下層	

第 12 号竪穴遺構 (SK92) (第 147 図)

位置 調査区中央部の E 6 d5 区で、標高 34 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 6 号粘土貼土坑を掘り込み、第 3 号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 2.18 m、短軸 1.80 m の長方形で、長軸方向は N - 82° - W である。壁高は 24 ~ 41cm で、壁は直立している。

床 平坦で、中央部から西壁にかけて踏み固められている。南西コーナー部で炭化物が確認できた。

ピット 2 か所。P 1・P 2 は深さ 9 cm・10 cm で、性格は不明である。

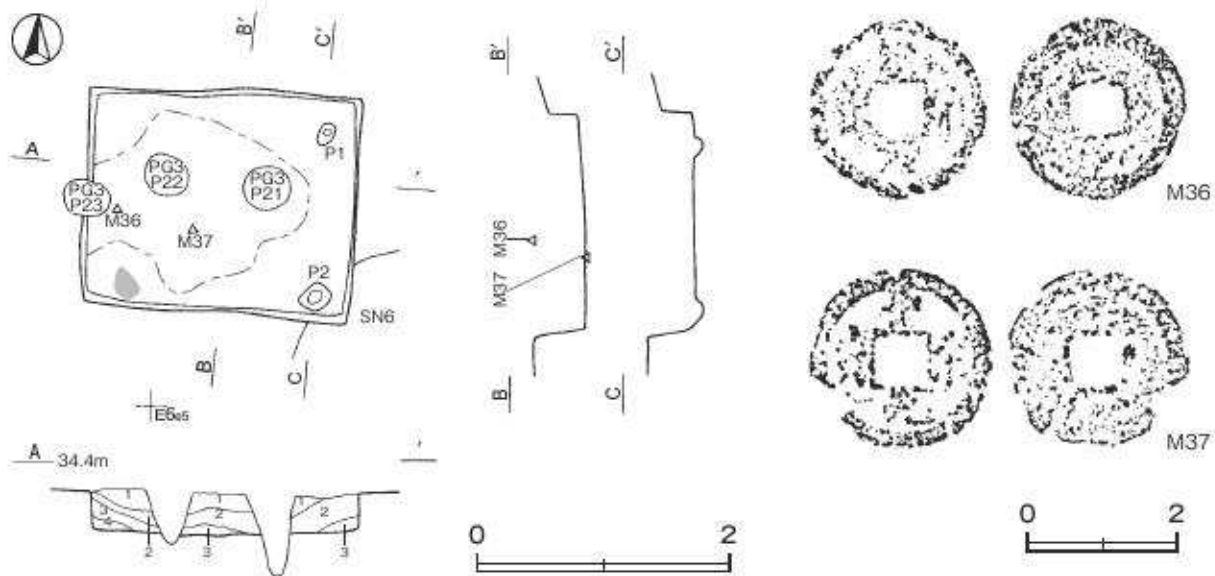
覆土 4 層に分層できる。ロームブロックや鹿沼バミスが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・鹿沼バミスブロック少量 | 3 黒褐色 | ロームブロック中量、鹿沼バミスブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・鹿沼バミスブロック・炭化穀子 | 4 極暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 陶器片 1 点 (甕)、銭貨 3 枚のほか、縄文土器片 2 点が出土している。M 37 は中央部の床面、M 36 は西部の覆土上層から出土している。陶器片は甕の体部で常滑産である。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。床面が踏み固められており、頻繁に出入りが行われた様相が見られることから、住居か倉庫と考えられる。銭貨は、埋め戻しの際に投げ込まれたものと考えられる。



第 147 図 第 12 号 縦穴遺構・出土遺物実測図

第 12 号 縦穴遺構出土遺物観察表 (第 147 図)

番号	銭 種	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	符 徴	出土位置	備 考
M 36	聖宋元寶	2.41	0.66	0.16	298	1101	銅	篆書	覆土上層	
M 37	聖宋元寶	2.42	0.65	0.15	(195)	1101	銅	行書	床面	

第 13 号 縦穴遺構 (SK95) (第 148 図)

位置 調査区中央部の E 6 b4 区で、標高 34 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 6 号 縦穴遺構、第 3 号 ビット群に掘り込まれている。

規模と形状 東部が掘り込まれているため、南北軸は 1.82 m で、東西軸は 0.90 m しか確認できなかった。残存している部分から、南北軸方向は N - 8° - W で、平面形は方形または長方形と推定できる。壁高は 53 cm で、壁は直立している。西壁は、地山部分の内側にロームブロックや炭化粒子を含む土砂を互層に積み上げ、突き固めて構築されている。

床 平坦で、全域が踏み固められていた。

ビット P 1 は深さ 20 cm で、性格は不明である。

覆土 5 層に分層できる。ブロック状の不規則な堆積状況から、埋め戻されている。第 4 - 7 層は壁の構築土である。

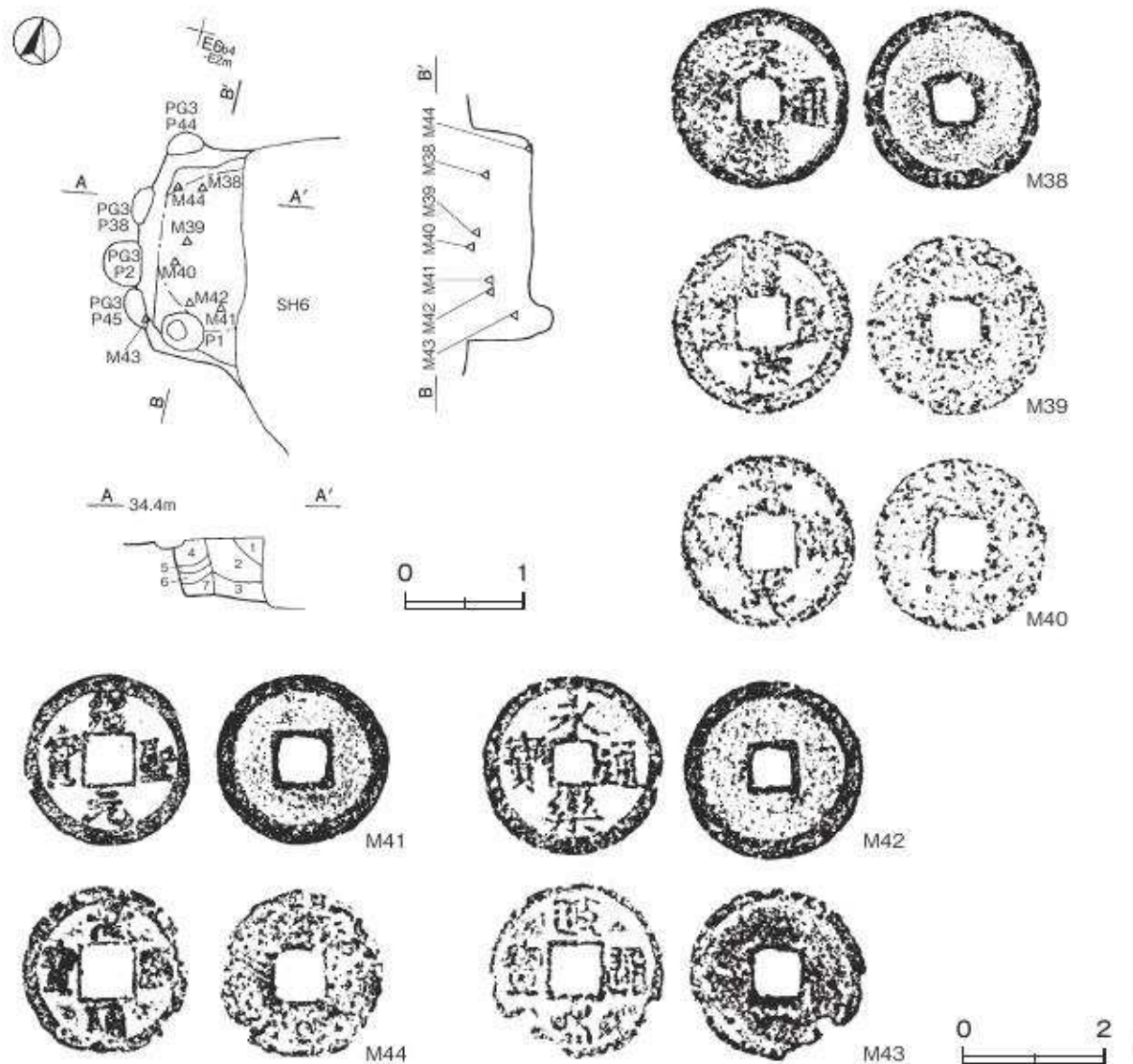
土層解説

- | | | | |
|---------|---------------------|---------|----------------|
| 1 黒 褐 色 | ロームブロック少量、鹿沼バミス粒子微量 | 5 黒 褐 色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 2 黒 褐 色 | ロームブロック少量 | 6 暗 褐 色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗 褐 色 | ローム粒子微量 | 7 黒 褐 色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 4 暗 褐 色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 銭貨 8 枚のほか、土師器片 1 点、自然礫 4 点が出土している。M 44 は西壁際の覆土下層、M 43 は覆土中層、M 38 - M 42 は覆土上層からそれぞれ出土している。銭貨 1 枚は、細片のため図示できなかった。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。互層に突き固めた壁は、第 9 号 縦穴遺構にも認められ、壁の崩落を防止する目的で構築したものと考えられる。床面が踏み固められており、頻繁に出入りが

行われた様相が見られることから、住居か倉庫と考えられる。銭貨は、埋め戻しの際に投げ込まれたものと考えられる。



第148図 第13号竪穴遺構・出土遺物実測図

第13号竪穴遺構出土遺物観察表 (第148図)

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M38	宋通元寶	256	0.57	0.20	2.80	960	銅	真書	覆土上層	
M39	紹聖元寶	259	0.70	0.18	2.75	1094	銅	篆書	覆土上層	
M40	景祐元寶	249	0.77	0.16	2.02	1034	銅	真書	覆土上層	
M41	紹聖元寶	246	0.70	0.18	2.53	1094	銅	行書	覆土上層	PL41
M42	永樂通寶	257	0.60	0.18	3.15	1408	銅	真書	覆土上層	PL41
M43	政和通寶	253	0.69	0.18	(2.64)	1111	銅	篆書	覆土中層	PL41
M44	元祐通寶	245	0.73	0.18	(1.59)	1086	銅	篆書	覆土下層	

第 14 号 竪穴遺構 (SK96) (第 149 図)

位置 調査区中央部の E 6 d3 区で、標高 34 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 3 号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 2.25 m、短軸 1.77 m の長方形で、長軸方向は N - 15° - W である。壁高は 30 ~ 38 cm で、壁は直立している。

床 平坦で、中央部南西寄りが踏み固められている。

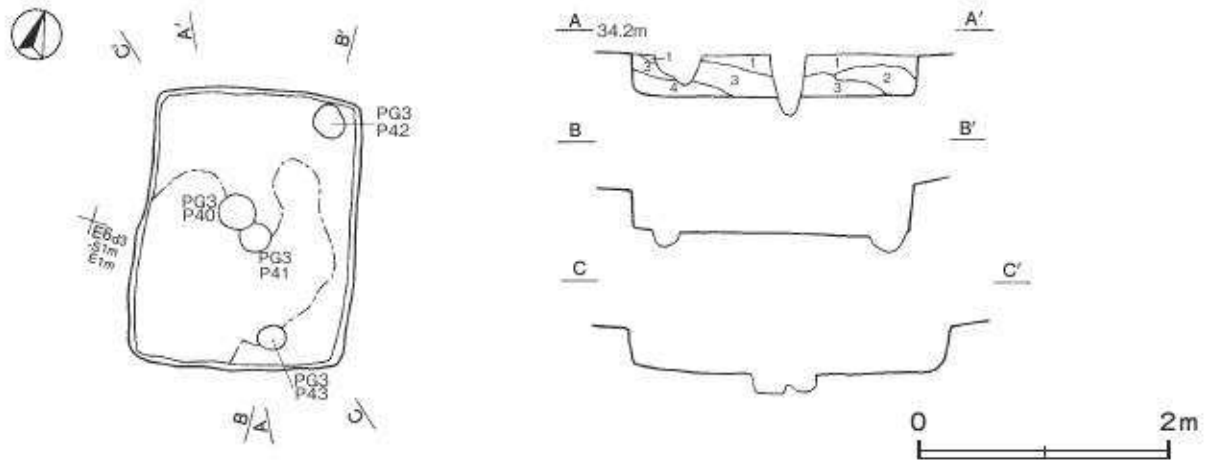
覆土 4 層に分層できる。ロームブロックや鹿沼バミスが不規則に混じるブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|------|-----------------------|------|-----------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック中量、鹿沼バミスブロック少量 | 3 褐色 | ロームブロック多量、鹿沼バミスブロック中量 |
| 2 褐色 | ロームブロック多量、鹿沼バミスブロック微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量、鹿沼バミス粒子少量 |

遺物出土状況 銭貨 1 枚が覆土中から出土しているが、細片のため図示できなかった。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。床面が踏み固められており、頻繁に出入りが行われた様相が見られることから、住居か倉庫と考えられる。



第 149 図 第 14 号 竪穴遺構実測図

第 15 号 竪穴遺構 (SK97) (第 150 図)

位置 調査区中央部の E 6 e3 区で、標高 34 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸 2.30 m、短軸 1.89 m の長方形で、長軸方向は N - 85° - E である。壁高は 40 ~ 50 cm で、北壁・東壁が内傾し、南壁・西壁は直立している。

床 平坦で、西半部が踏み固められている。炭化物が床面で踏み固められた状態で確認できた。

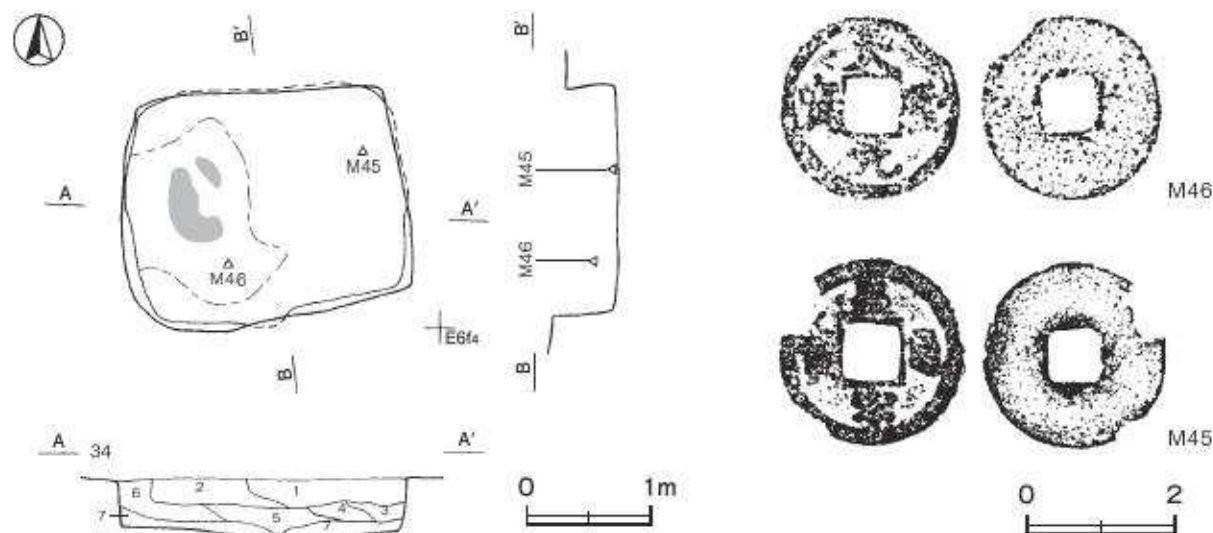
覆土 7 層に分層できる。含有物が不規則に混じるブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック、鹿沼バミスブロック少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子、鹿沼バミス粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック、鹿沼バミス粒子少量 | 6 暗褐色 | ローム粒子、鹿沼バミス粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子少量 | 7 黒褐色 | ロームブロック中量、鹿沼バミス粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック、炭化粒子、鹿沼バミス粒子少量 | | |

遺物出土状況 銭貨 2 枚のほか、縄文土器片 1 点、弥生土器片 1 点、土師器片 1 点、剥片 1 点、自然礫 3 点が出土している。M 45 は東壁際の覆土下層、M 46 は中央部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。床面が踏み固められており、頻繁に出入りが行われた様相が見られることから、住居か倉庫と考えられる。銭貨は、埋め戻しの際に投げ込まれたものと考えられる。



第150図 第15号竪穴遺構・出土遺物実測図

第15号竪穴遺構出土遺物観察表（第150図）

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M45	皇宋通寶	251	0.76	0.13	(1.78)	1038	銅	真書	覆土下層	
M46	天聖元寶	247	0.74	0.17	(2.59)	1023	銅	真書	覆土中層	

第16号竪穴遺構（SK100）（第151図）

位置 調査区中央部のE6d4区で、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3号墓坑、第94号土坑、第3号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.13m、短軸1.74mの長方形で、長軸方向はN-86°-Wである。壁高は44～50cmで、西壁は外傾して立ち上がっており、他の壁は直立している。

床 平坦で、明らかな硬化面は認められない。東半部の床面で炭化物が確認できた。

ピット 2か所。P1・P2は深さ20cm・22cmで、性格は不明である。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックや鹿沼バミスが不規則に混じるブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。

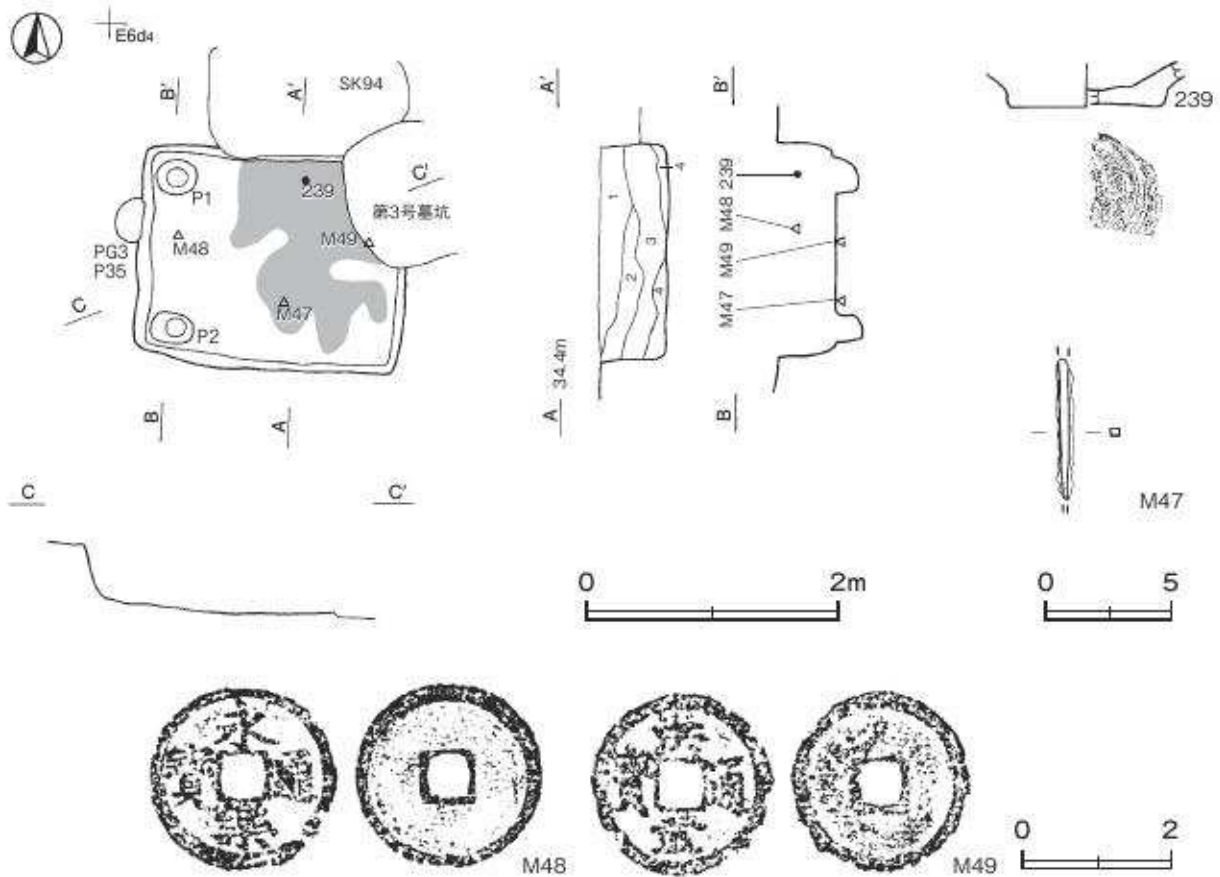
土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|--------|------------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子・鹿沼バミス少量、粘土粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック中量、鹿沼バミスブロック・炭化物少量、粘土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物・鹿沼バミス粒子少量 | 4 極暗褐色 | 炭化粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師質土器片1点（皿）、鉄製品1点（釘）、銭貨2枚のほか、縄文土器片5点、土師器片1点、が出土している。239は北壁際の覆土中層、M47は中央部の床面、M49は東壁際の床面からそれぞれ出土している。M48は西壁際の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。炭化物が床面に広がっているが、施設内で火を

燃やした痕跡はない。部材を燃やした後、炭化材が廃棄された状況である。銭貨は、埋め戻しの際に投げ込まれたものと考えられる。



第151図 第16号竖穴遺構・出土遺物実測図

第16号竖穴遺構出土遺物観察表（第151図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
239	土師質土器	皿	-	(12)	(6.0)	長石・石英・金雲母・赤色粒子	橙	普通	外・内面ナデ 底部回転糸切り	覆土中層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M47	釘	(5.7)	0.4	0.3	(3.0)	鉄	断面方形 頭部・先端部欠損	床面	PL41

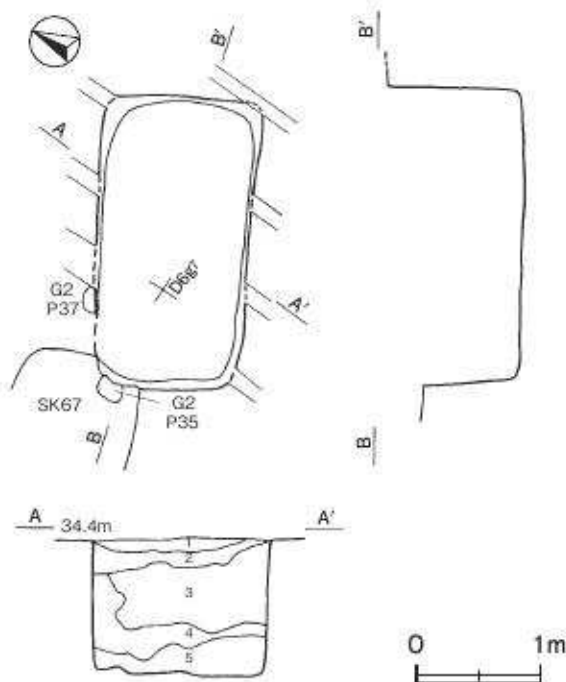
番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M48	永樂通寶	2.49	0.57	0.15	274	1408	銅	真書	覆土中層	PL41
M49	洪武通寶	2.41	0.55	0.14	(271)	1368	銅	真書	床面	

第17号竖穴遺構 (UP 8) (第152図)

位置 調査区中央部のD 6f7区で、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第67号土坑、第2号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.32m、短軸1.25mの長方形で、長軸方向はN-60°-Eである。壁高は100~104cmで、壁は直立している。



床 平坦で、明らかな硬化面は認められない。

覆土 5層に分層できる。ブロック状の不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、鹿沼バミスブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量、鹿沼バミス粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・鹿沼バミスブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック・鹿沼バミス粒子少量

遺物出土状況 土師質土器片1点（内耳鍋）のほか、縄文土器片14点、土師器片30点、須恵器片2点が出土している。土師質土器片は、細片のため図示できなかった。

所見 時期は、出土土器や遺構の形態から中世と考えられる。性格は不明である。

第152図 第17号縦穴遺構実測図

表6 室町時代縦穴遺構一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模		壁高 (cm)	壁面	床面	内部施設 ピット	覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸 (m)									
1	E 6 d5	N-85°-W	長方形	2.47 × 1.60	46-48	内傾・直立	平坦	2	人為		中世		
2	E 6 b5	N-10°-W	長方形	2.43 × 1.72	40-53	直立	平坦	1	人為		中世	本跡→PG 3	
3	E 6 b1	N-10°-E	隅丸長方形	2.20 × 1.42	76-80	直立	平坦	-	人為	陶器	中世	SH19→本跡→SK20	
4	E 6 c3	N-18°-E	[方形・長方形]	2.15 × (1.45)	27-31	直立	平坦	1	人為	土師質土器、鉄貨	中世	本跡→PG 3	
5	E 6 a5	N-7°-W	長方形	2.64 × 1.74	43-46	外傾・直立	平坦	4	人為	土師質土器	中世	本跡→SK78	
6	E 6 b4	N-13°-W	[不整形長方形]	2.54 × 1.82	48-58	直立	平坦	1	人為	鉄製品、鉄貨	中世	SH13→本跡→SK77・85	
7	E 6 e4	N-4°-W	長方形	2.27 × 1.57	19-27	傾斜	平坦	2	人為	土師質土器、鉄製品	中世	本跡→SH11, PG 3	
8	E 6 e1	N-86°-W	長方形	2.38 × 1.56	26	直立	平坦	-	人為	土師質土器、鉄貨	中世	本跡→SH 9, PG 3	
9	E 6 e1	N-81°-E	長方形	2.64 × 1.77	75	直立	平坦	-	人為	土師質土器、鉄貨	中世	SH 8・10→本跡→SK79, PG 3	
10	E 6 e1	N-8°-E	[長方形]	2.04 × (1.54)	43-45	直立	平坦	-	人為	土師質土器、鉄製品、鉄貨	中世	本跡→SH 9, PG 3	
11	E 6 e5	N-80°-E	長方形	2.14 × 1.85	67-75	直立	平坦	4	人為	鉄貨	中世	SH 7→本跡→PG 3	
12	E 6 d5	N-82°-W	長方形	2.18 × 1.80	24-41	直立	平坦	2	人為	陶器、鉄貨	中世	SN 6→本跡→PG 3	
13	E 6 b4	N-8°-W	[方形・長方形]	1.82 × (0.90)	53	直立	平坦	1	人為	鉄貨	中世	本跡→SH 6, PG 3	
14	E 6 d3	N-15°-W	長方形	2.25 × 1.77	30-38	直立	平坦	-	人為	鉄貨	中世	本跡→PG 3	
15	E 6 c3	N-85°-E	長方形	2.30 × 1.89	40-50	内傾・直立	平坦	-	人為	鉄貨	中世		
16	E 6 d4	N-86°-W	長方形	2.13 × 1.74	44-50	外傾・直立	平坦	2	人為	土師質土器、鉄製品、鉄貨	中世	本跡→第3号墓坑, SK34, PG 3	
17	D 6 f7	N-60°-E	長方形	2.32 × 1.25	100-104	直立	平坦	-	人為	土師質土器	中世	本跡→SK67, PG 2	

(2) 地下式坑

第1号地下式坑 (第153・154図)

位置 調査区中央部のE 6 h3区で、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

。

- 6° - Eである。

m、横幅 0.53 mの楕円形である。深さは 43cmで、壁は緩やかに傾斜しており、主室の底面と 42cmの段差をなしている。

である。天井部は崩落しており、確認面から底面までの深さは、傾斜面は認められない。四面の壁は直立している。

ピット 4か所。P 1～P 4は深さ 15～23cmで、性格は不明である。

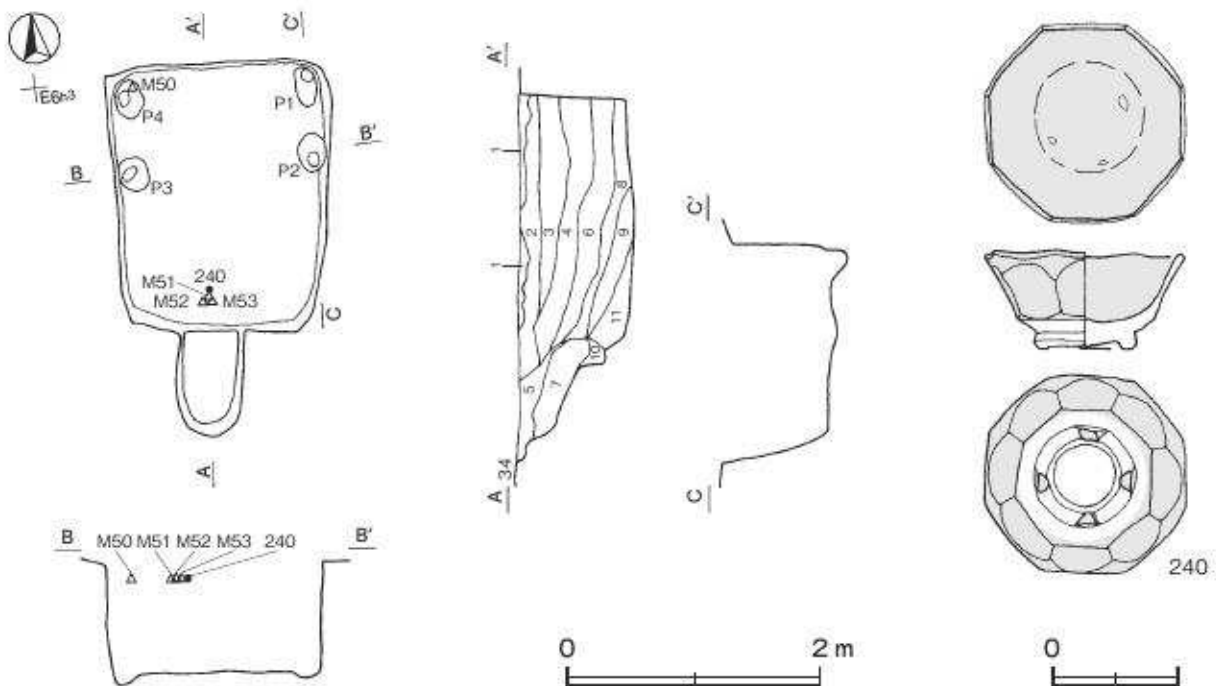
覆土 11層に分層できる。第7～11層は竪坑から流入した土砂で、第3～6層は天井部や壁の崩落土である。第2層は天井部崩落後の窪地を多量のローム土で埋め戻している層である。第1層は、埋め戻し後の窪地に周囲からの土砂が流入した様相で、自然堆積と考えられる。

土層解説

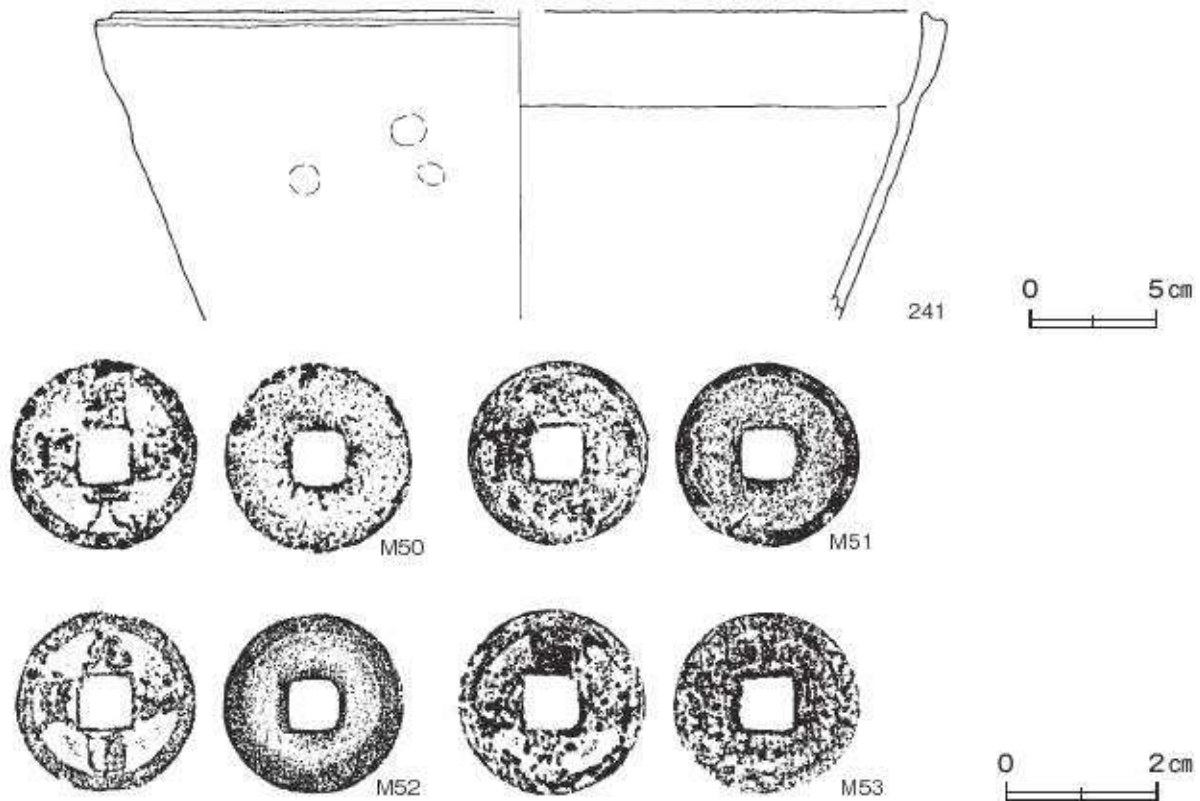
1	暗褐色	鹿沼バミス粒子少量、ロームブロック微量	7	褐色	ロームブロック・鹿沼バミス粒子中量
2	褐色	ロームブロック多量(締まり普通)	8	褐色	鹿沼バミス粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子微量
3	褐色	ロームブロック多量(締まり強い)	9	褐色	ロームブロック・鹿沼バミス粒子少量
4	褐色	ロームブロック・鹿沼バミス粒子中量	10	褐色	鹿沼バミス粒子中量、ロームブロック少量
5	褐色	ローム粒子・鹿沼バミス粒子中量	11	褐色	ロームブロック少量
6	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量			

遺物出土状況 土師質土器片 7点(内耳鍋)、磁器 1点(八角小坏)、銭貨 4枚のほか、土師器片 1点が出土している。240は M51～M53が坏内に納められた状態で、主室南部の覆土上層から出土している。M50は主室北西コーナー部の覆土上層から出土している。241は主室の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物から 15世紀後半と考えられる。八角小坏は覆土第3層の上面から出土していることから、本跡が崩落した後の窪地を第2層で埋め戻す際に銭貨とともに遺棄されたものと考えられる。第5・10号地下式坑も埋め戻す際に土器類が遺棄されており類似している。遺構の形態から、倉庫または埋葬施設と考えられる。



第 153 図 第 1 号地下式坑・出土遺物実測図



第154図 第1号地下式坑出土遺物実測図

第1号地下式坑出土遺物観察表 (第153・154図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
241	土質土器	内耳鍋	32.0	122	—	長石・石英	橙	普通	口唇部沈線・口縁部ナデ・外面指頭痕	覆土中	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
240	磁器	八角小鉢	8.0	3.9	3.8	凝帯	灰白	良好	白磁釉	外・内面施釉・底部ヘラ削り	中国(明) 15世紀後半	覆土上層	100% PL36

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
M50	開元通寶	2.49	0.75	0.18	(3.96)	621	銅	真書	覆土上層	PL41
M51	政和通寶	2.46	0.75	0.15	2.66	1111	銅	真書	覆土上層	
M52	元祐通寶	2.42	0.72	0.15	2.85	1086	銅	行書	覆土上層	
M53	皇宋通寶	2.52	0.73	0.13	3.27	1038	銅	真書	覆土上層	

第2号地下式坑 (第155図)

位置 調査区中央部のE 6 h2区で、標高35 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号ピット群に掘り込まれている。

軸長・軸方向 軸長は2.87 mで、軸方向はN-4°-Eである。

竪坑 主室の南壁中央部に位置し、奥行0.71 m、横幅0.59 mの楕円形である。深さは60 cmで壁は外傾して立ち上がっている。底面は主室に向かって傾斜しており、主室の底面と39 cmの段差をなしている。

主室 奥行2.12 m、横幅1.56 mの長方形である。天井部は崩落しており、確認面から底面までの深さは89 cm

である。底面は平坦で、堅坑付近から中央部にかけて踏み固められている。北壁・東壁は内傾しており、南壁・西壁は直立している。

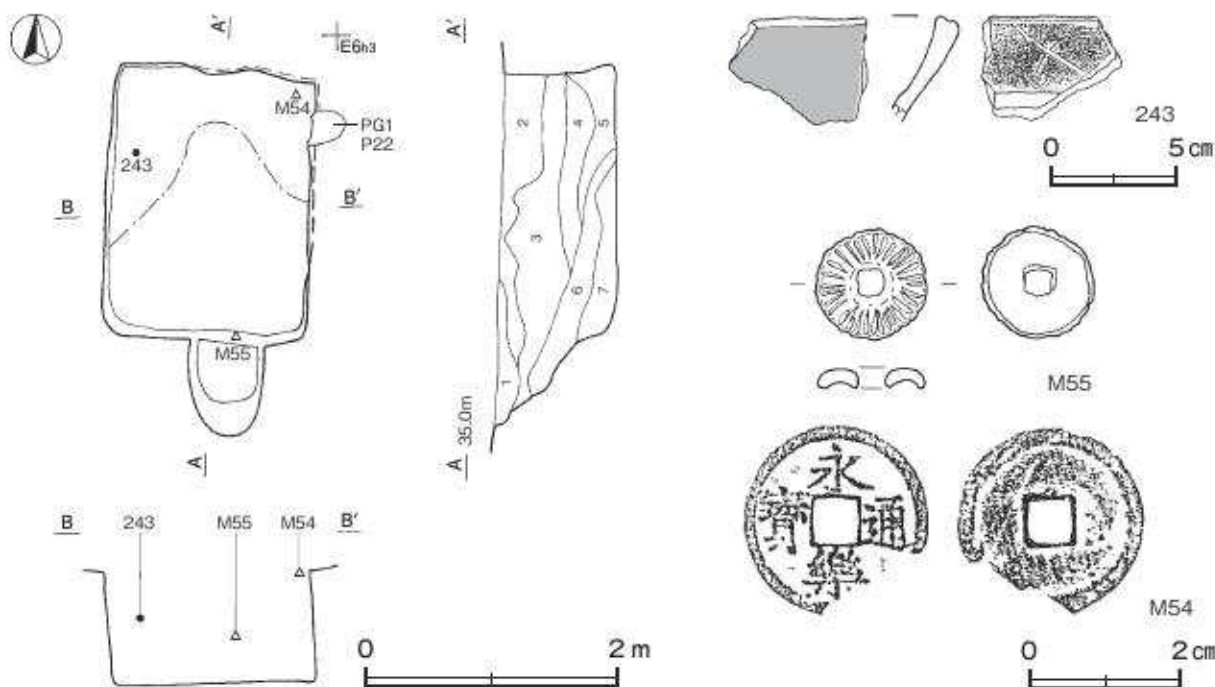
覆土 7層に分層できる。第6・7層は堅坑から流入した土砂で、第2～5層は天井部や壁の崩落土である。第1層は、天井部崩落後の窪地に周囲からの土砂が流入した様相で、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|----------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、鹿沼パミスブロック微量 | 5 褐色 | ロームブロック少量、鹿沼パミスブロック微量 |
| 2 黒褐色 | 鹿沼パミス粒子中量、ロームブロック少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミスブロック・炭化粒子、少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量 | 7 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、鹿沼パミスブロック微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片5点（内耳鍋）、銭貨2枚のほか、縄文土器片1点、弥生土器片1点、須恵器片3点、自然礫1点が出土している。243は主室西壁際、M55は主室南部の堅坑付近の覆土中層、M54は主室北東コーナーの覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。底面が踏み固められており、頻繁に出入りが行われた様相が見られることから、倉庫としての用途が考えられる。



第155図 第2号地下式坑・出土遺物実測図

第2号地下式坑出土遺物観察表（第155図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
243	土師質土器	内耳鍋	-	(42)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部沈線、口縁部内面ヘラ書き「×」、外面保付着	覆土中層	10%
番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴		出土位置	備考
M54	永繁通寶	2.49	0.61	0.14	(228)	1408	銅	真書		覆土上層	PL41
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M55	銅り金具	1.5	0.3	0.4	0.9	銅	表面に放射状の刻み、一方向からの穿孔		覆土中層		

第3号地下式坑 (第156図)

位置 調査区中央部のE6h2区で、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号墓坑に掘り込まれている。

軸長・軸方向 軸長は2.61mで、軸方向はN-89°-Eである。

堅坑 主室の西壁中央部に位置し、奥行0.60m、横幅0.68mの不定形である。深さは54cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は主室に向かって傾斜しており、主室の底面と48cmの段差をなしている。

主室 奥行1.98m、横幅1.62mの不整長方形である。天井部は崩落しており、確認面から底面までの深さは1.08mである。底面は平坦で、堅坑付近から中央部にかけて踏み固められている。北壁・東壁は直立しており、南壁と西壁は内傾している。

ピット 4か所。P1~P4は深さ10~18cmで、性格は不明である。

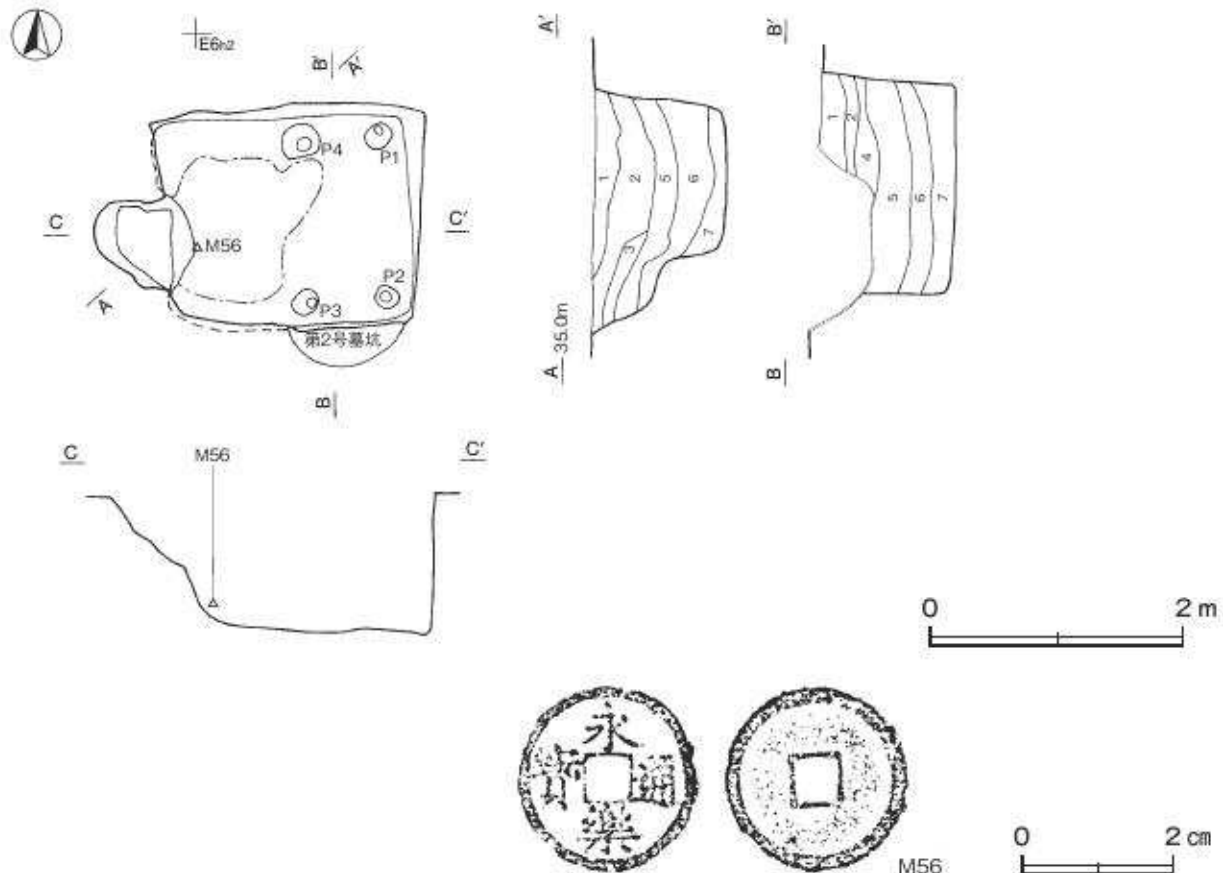
覆土 7層に分層できる。第5~7層は天井部や壁の崩落土である。第1~4層は、含有物が不規則に混じる堆積状況であることから、天井部崩落後の窪地に埋め戻された層と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量 | 5 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | 6 褐色 | ロームブロック中量、鹿沼パミスブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量、鹿沼パミスブロック少量 |
| 4 極暗褐色 | ローム粒子少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片1点(内耳鍋)、銭貨1枚、自然礫1点が出土している。M56は主室西部の堅坑付近の覆土下層から出土している。土師質土器片は、細片のため図示できなかった。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。底面が踏み固められており、頻繁に出入りが行われた様相が見られることから、倉庫としての用途が考えられる。



第156図 第3号地下式坑・出土遺物実測図

第3号地下式坑出土遺物観察表（第156図）

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M56	永樂通寶	2.46	0.57	0.13	238	1408	銅	真書	覆土下層	PL41

第4号地下式坑（第157・158図）

位置 調査区中央部のE6g2区で、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号ピット群に掘り込まれている。

軸長・軸方向 軸長は3.22mで、軸方向はN-95°-Eである。

竪坑 主室の西壁中央部に位置し、奥行0.72m、横幅0.55mの不整楕円形である。深さは39cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は主室に向かって緩やかに傾斜しており、主室の底面に続いている。

主室 奥行2.44m、横幅1.72mの隅丸長方形である。天井部は崩落しており、確認面から底面までの深さは87～112cmである。底面にはやや凹凸があり、竪坑付近から中央部にかけて踏み固められている。四面の壁は直立している。

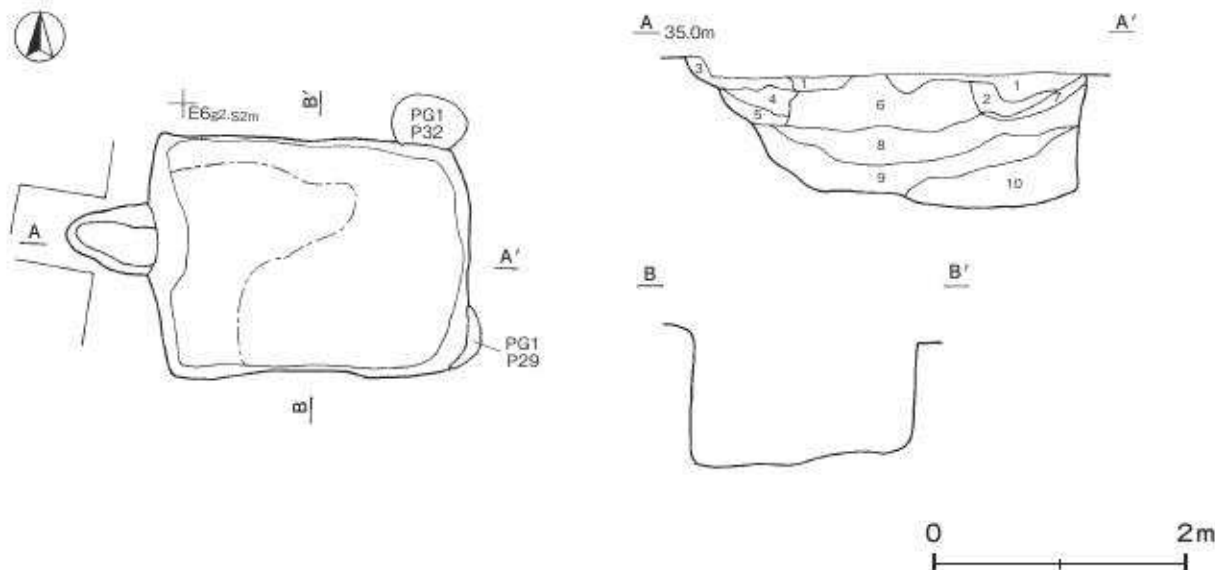
覆土 10層に分層できる。第4～10層は天井部や壁の崩落土である。第1～3層は、不規則なブロック状の堆積状況であることから、天井部崩落後の窪地に埋め戻された層と考えられる。

土層解説

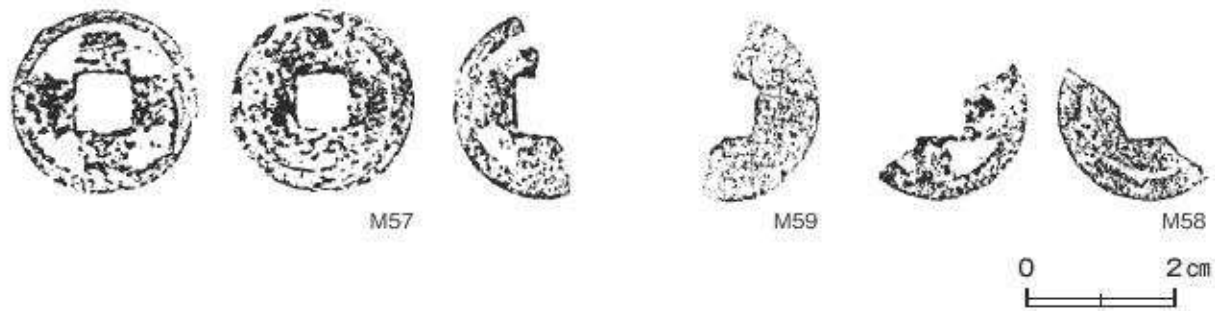
- | | | | |
|--------|---------------------|---------|-------------------|
| 1 黒 褐色 | ローム粒子少量、鹿沼パミス粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック多量、鹿沼パミス微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック多量、鹿沼パミス粒子微量 | 7 黒 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黄 褐色 | 鹿沼パミス粒子中量、ロームブロック少量 | 8 褐色 | ロームブロック多量 |
| 4 褐色 | ロームブロック中量、鹿沼パミス粒子微量 | 9 褐色 | ロームブロック中量 |
| 5 暗 褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス粒子少量 | 10 黒 褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師質土器片5点（内耳鍋）、銭貨3枚のほか、弥生土器片6点、土師器片5点、須恵器片4点が出土している。M57～M59は覆土中からそれぞれ出土している。土師質土器片は、細片のため図示できなかった。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。底面が踏み固められており、頻繁に出入りが行われた様相が見られることから、倉庫としての用途が考えられる。



第157図 第4号地下式坑実測図



第 158 図 第 4 号地下式坑出土遺物実測図

第 4 号地下式坑出土遺物観察表 (第 158 図)

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鑄年	材質	特徴	出土位置	備考
M57	天聖元寶	2.48	0.71	0.16	3.50	1023	銅	篆書	覆土中	
M58	-□通-	2.38	-	0.13	(1.39)	-	銅	表面・背面凹凸なく銭種不明	覆土中	
M59	-□寶	(2.47)	0.75	0.12	(1.10)	-	銅	表面・背面凹凸なく銭種不明	覆土中	

第 5 号地下式坑 (第 159 図)

位置 調査区中央部の E 6 a6 区で、標高 34 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 27 号土坑に掘り込まれている。

軸長・軸方向 軸長は 2.98 m で、軸方向は N - 41° - E である。

竪坑 主室の南西壁中央部に位置し、奥行 0.90 m、横幅 0.92 m の不整楕円形である。深さは 1.50 m で、壁は直立している。底面は平坦で、主室の底面と 19cm の段差をなしており、踏み固められている。

主室 奥行 2.14 m、横幅 3.86 m の長方形である。天井部は中央部が崩落しており、確認面から底面までの深さは 1.73 m である。底面は平坦で、竪坑付近から中央部にかけて踏み固められている。四面の壁は直立しており、上位で内傾して天井に続いている。底面から残存している天井部までの高さは、1.46 m である。

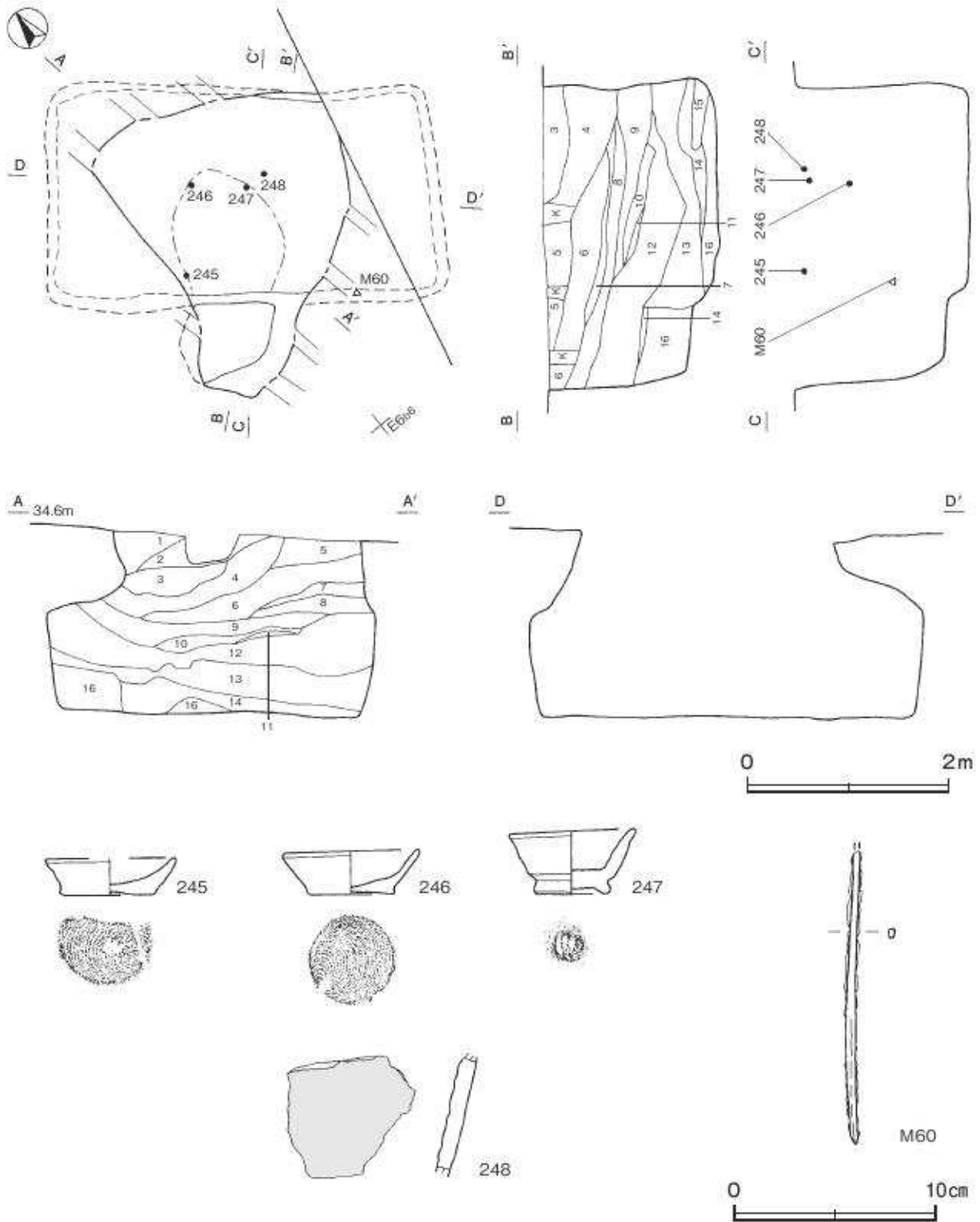
覆土 16 層に分層できる。第 13 ~ 16 層は天井部の崩落土である。第 1 ~ 12 層は黒褐色や暗褐色の土砂で、大小のロームブロックを不規則に含んでおり、ブロック状の堆積状況であることから、天井部崩落後の窪地に埋め戻された層である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量	9 黒褐色	ローム粒子少量、鹿沼パミス粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック少量	10 暗褐色	ロームブロック少量、鹿沼パミス粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子中量	11 暗褐色	ローム粒子中量
4 褐色	ロームブロック多量 (締まり強い)	12 黒褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス粒子微量
5 黒褐色	ローム粒子少量	13 褐色	ロームブロック多量
6 黒褐色	ロームブロック中量	14 褐色	ロームブロック多量、鹿沼パミス粒子微量
7 極暗褐色	ロームブロック少量	15 暗褐色	ロームブロック多量
8 黒褐色	ロームブロック少量、鹿沼パミス粒子微量	16 褐色	ロームブロック多量、鹿沼パミス粒子少量

遺物出土状況 土師質土器片 3 点 (小皿)、陶器 1 点 (瓶類)、鉄製品 1 点 (簀笥) のほか、縄文土器片 13 点、弥生土器片 2 点、土師器片 5 点、須恵器片 1 点、石器 1 点 (凹石)、自然礫 6 点、粘土塊 1 点が出土している。245 は主室南部の竪坑付近、247 は正位で主室中央部の覆土上層から出土している。246 は正位で主室中央部、M60 は主室南部の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土遺物から16世紀後半と考えられる。堅坑から中央部にかけて踏み固められ、頻繁に出入りが行われた様相が見られることから、倉庫としての用途が考えられる。土師質土器片の小皿は、埋め戻す際に遺棄されたものと考えられ、第1・10号地下式坑にも同様の事例が見られる。



第159図 第5号地下式坑・出土遺物実測図

第5号地下式坑出土遺物観察表 (第159図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
245	土師質土器	小皿	[6.4]	18	4.4	長石・石英	明赤褐	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土上層	60% PL36
246	土師質土器	小皿	6.6	2.2	4.2	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土中層	95% PL36
247	土師質土器	小皿	6.2	3.2	3.6	長石・石英・黒色 粒子・赤色粒子	にがい赤製	普通	外・内面ロクロナデ 底部回転糸切り後高台貼付	覆土上層	90% PL36

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	絵付・釉薬	文様・特徴	産地・年代	出土位置	備考
248	陶器	甕	—	(6.1)	—	長石	オリーブ黒	良好	鉄釉	外面施釉 外・内面ロクロナデ	瀬戸・美濃系	覆土上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M60	箱	(14.6)	0.6	0.5	(8.6)	鉄	断面長方形 一方の端部欠損	覆土中層	PL41

第6号地下式坑 (第160・161図)

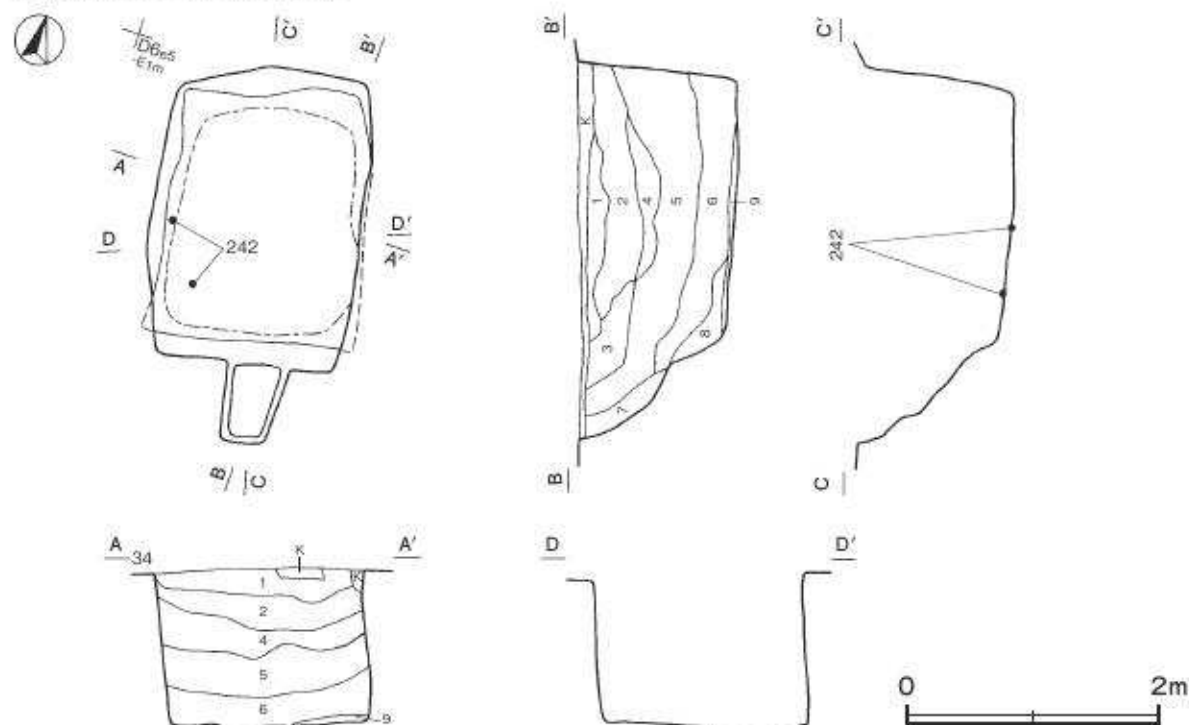
位置 調査区北部のD6e5区で、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

軸長・軸方向 軸長は3.00mで、軸方向はN-13°-Wである。

竪坑 主室の南壁中央部に位置し、奥行0.64m、横幅0.48mの隅丸長方形である。深さは85cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は主室に向かって緩やかに傾斜しており、主室の底面に至っている。

主室 奥行2.18m、横幅1.54mの隅丸長方形である。天井部は崩落しており、確認面から底面までの深さは1.10～1.25mである。底面は平坦で、壁際を除いてはほぼ全面が踏み固められている。東部の壁は内傾し、他の三面は直立している。

覆土 9層に分層できる。第7～9層は、竪坑から流入した土砂で、第4～6層は天井部や壁の崩落土である。第1～3層は、ロームブロックや鹿沼パミス粒子が不規則に混じる堆積状況であることから、天井部崩落後の窪地に埋め戻された層である。



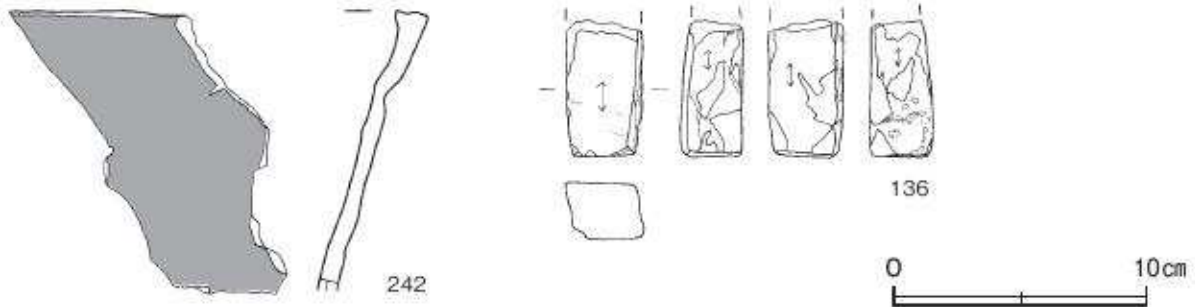
第160図 第6号地下式坑実測図

土層解説

- | | | | |
|----------|----------------------------------|--------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼バミス粒子少量 | 6 褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック多量、鹿沼バミスブロック少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼バミスブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量、鹿沼バミス粒子微量 | 8 藍暗褐色 | 鹿沼バミスブロック・ローム粒子少量 |
| 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック・鹿沼バミス粒子中量 | 9 黒色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量（粘性強い） |
| 5 褐色 | ロームブロック多量、鹿沼バミスブロック少量
(締まり強い) | | |

遺物出土状況 土師質土器片6点（内耳鍋）、石器1点（砥石）のほか、縄文土器片4点、土師器片4点、鉄滓2点、剥片1点、自然礫5点、粘土塊1点が出土している。242は南西壁付近の底面、Q136は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。主室の底面が踏み固められており、頻繁に出入りが行われた様相が見られることから、倉庫としての用途が考えられる。



第161図 第6号地下式坑出土遺物実測図

第6号地下式坑出土遺物観察表（第161図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
242	土師質土器	内耳鍋	-	(11.1)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部ナナ、外面煤付着	底面	10%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
Q136	砥石	(5.4)	3.1	2.3	(65.4)	凝灰岩	紙面4面			覆土中	

第7号地下式坑（第162図）

位置 調査区北部のC68区で、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第11号土坑を掘り込んでいる。

軸長・軸方向 竪坑の位置する西部が調査区域外に延びているため、軸長は2.15mしか確認できなかった。軸方向はN-102°-Eである。

竪坑 主室の西壁中央部に位置し、確認できた長さは、奥行0.30m、横幅0.88mである。平面形は、方形と推定できる。深さは1.77mで、壁は直立している。底面は主室に向かってわずかに傾斜しており、主室の底面に至っている。

主室 奥行1.84m、横幅2.10mの長方形である。天井部は崩落しており、確認面から底面までの深さは1.83mである。底面は平坦で、全面が踏み固められている。四面の壁は直立しており、右上から左下方向に幅12cmほどの工具痕が確認できた。

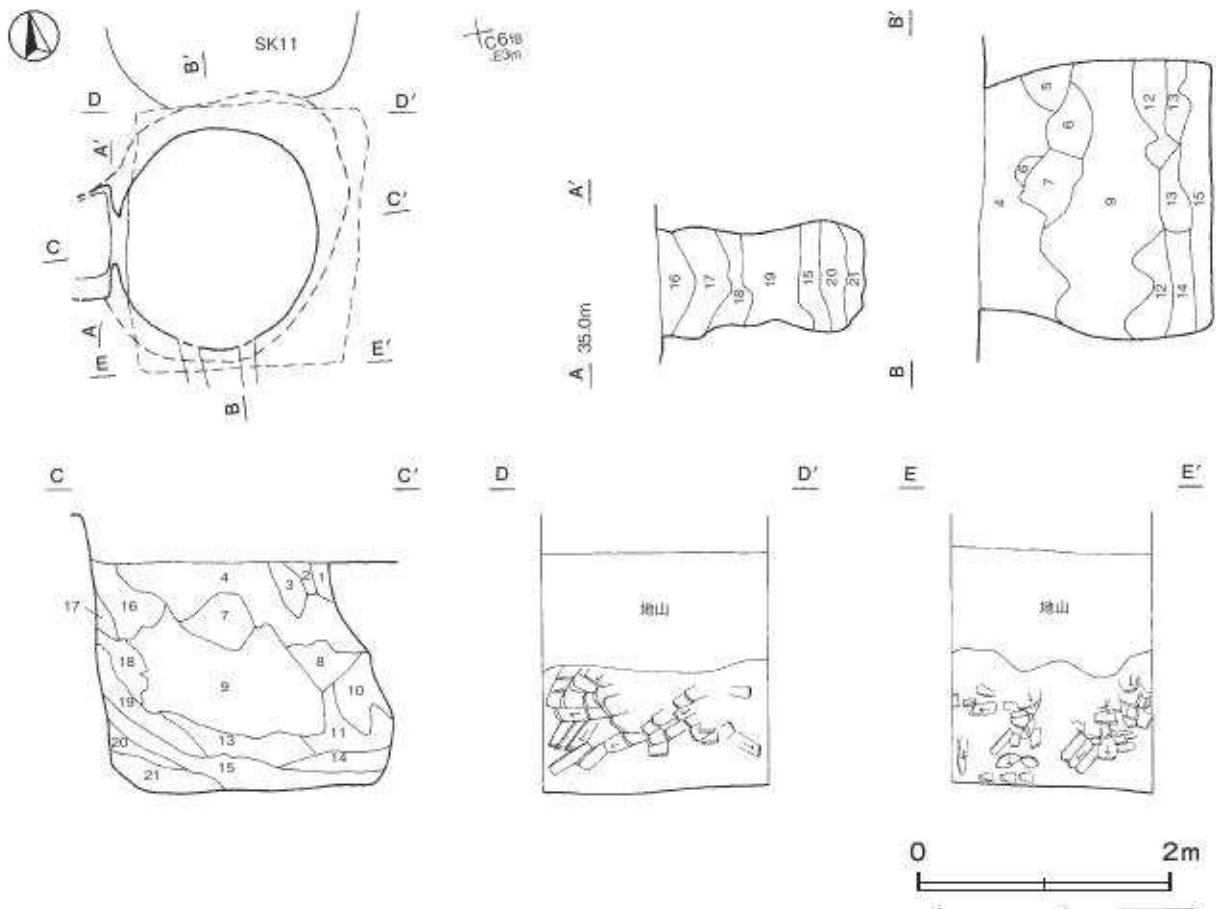
覆土 21層に分層できる。第15～21層は竪坑から流入した土砂で、第7～14層は天井部や壁の崩落土である。第1～6層は、ブロック状の不規則な堆積状況であることから、天井部崩落後の窪地に埋め戻された層である。

土層解説

1	褐色	ロームブロック中量	12	褐色	ロームブロック中量 (締まり弱い)
2	黒褐色	ロームブロック少量	13	明黄褐色	鹿沼パミス粒子多量
3	暗褐色	ローム粒子少量	14	褐色	ロームブロック・鹿沼パミス粒子多量
4	黒褐色	ローム粒子微量	15	黒褐色	ロームブロック・鹿沼パミス粒子少量
5	極暗褐色	ローム粒子微量	16	黒褐色	ロームブロック少量, 鹿沼パミス粒子微量
6	暗褐色	ロームブロック少量	17	暗褐色	ロームブロック少量, 鹿沼パミス粒子微量
7	褐色	ローム粒子少量	18	黒褐色	ロームブロック少量, 鹿沼パミスブロック微量
8	褐色	ロームブロック多量 (締まり普通)	19	暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミスブロック少量
9	褐色	ロームブロック多量 (締まり強い)	20	褐色	ローム粒子中量
10	褐色	ロームブロック多量, 鹿沼パミス粒子微量	21	褐色	ロームブロック多量, 鹿沼パミスブロック少量
11	黒褐色	ロームブロック少量 (締まり弱い)			

遺物出土状況 土師質土器片2点(内耳鍋)のほか、縄文土器片388点、土師器片17点、須恵器片2点、土製品2点、石器5点、剥片2点、破断面のある礫16点、自然礫27点が出土している。土師質土器の内耳鍋は、細片で図示できなかつた。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。主室の底面が踏み固められており、頻繁に出入りが行われた様相が見られることから、倉庫としての用途が考えられる。



第162図 第7号地下式坑実測図

第9号地下式坑 (第163図)

位置 調査区北部のD 6e7区で、標高34mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号ピット群に掘り込まれている。

軸長・軸方向 軸長は2.54 mで、軸方向はN-15°-Wである。

竪坑 主室の南壁中央部に位置し、奥行0.74 m、横幅0.67 mの不整形である。深さは66cmで、壁は直立している。底面は階段状に主室の底面に向かい、主室の底面と26cmの段差をなしており、踏み固められている。

主室 奥行1.96 m、横幅1.34mの長方形である。天井部は崩落しており、確認面から底面までの深さは1.00～1.10 mである。底面は平坦で、竪坑付近から中央部にかけて踏み固められている。北壁・南壁は直立し、東壁・西壁は内傾している。

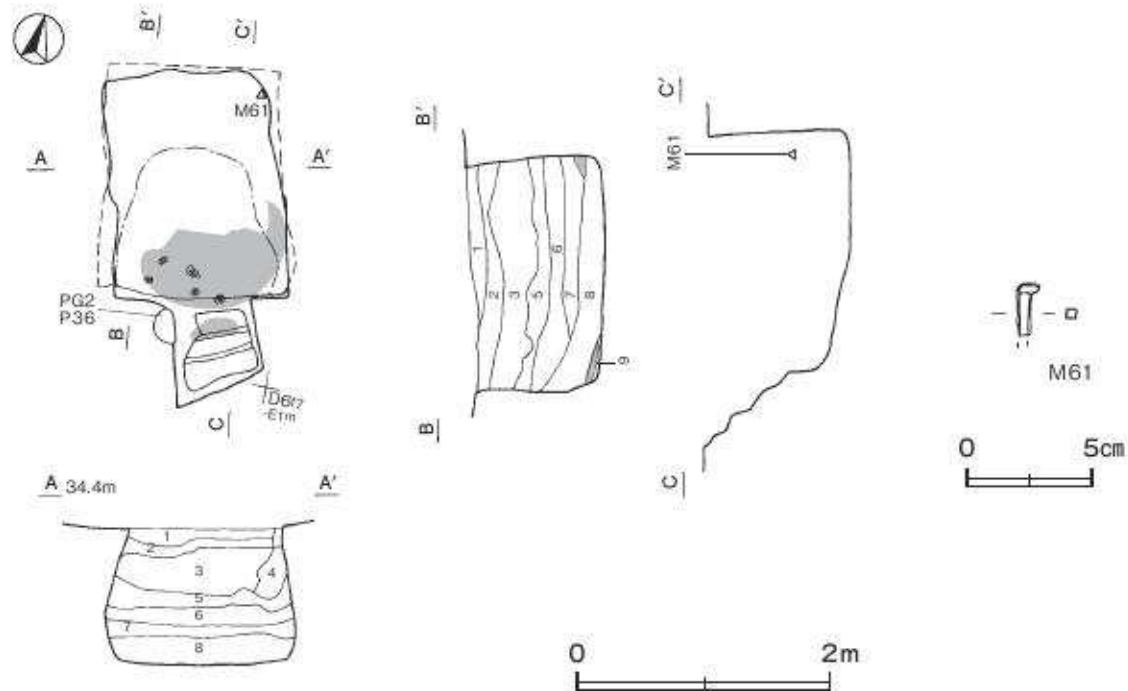
覆土 9層に分層できる。第8層が天井部の崩落土である。第1～7層は大小のロームブロックが混じる堆積状況であることから、天井部崩落後の窪地に埋め戻された層である。第9層は、炭化物や焼土を不規則に含む層である。

土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------------|--------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 6 極暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子少量 | 8 暗褐色 | ローム粒子多量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量 | 9 黒褐色 | 炭化物中量、ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 5 極暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、鹿沼バミス粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片5点(内耳鍋)、鉄製品1点(釘)のほか、縄文土器片29点、土師器片14点、須恵器片1点、石器2点、鉄滓11点、自然礫5点が出土している。M61は主室北東コーナー部の覆土中層から出土している。土師質土器片は、細片のため図示できなかった。

所見 時期は、出土遺物と遺構の形態から中世と考えられる。竪坑から主室の底面にかけて踏み固められ、頻繁に出入りが行われた様相が見られることから、倉庫としての用途が考えられる。竪坑付近の炭化物や焼土は、炭化物や焼土粒子が不規則に混じることや底面が焼けていないことから、竪坑から投げ込まれたと考えられる。



第163図 第9号地下式坑・出土遺物実測図

第9号地下式坑出土遺物観察表(第163図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M61	釘	(20)	0.9	0.4	(1.7)	鉄	断面方形 先端部欠損	覆土中層	

第 10 号地下式坑 (第 164・165 図)

位置 調査区北部の D 6 e7 区で、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

軸長・軸方向 軸長は 3.15 m で、軸方向は N - 66° - E である。

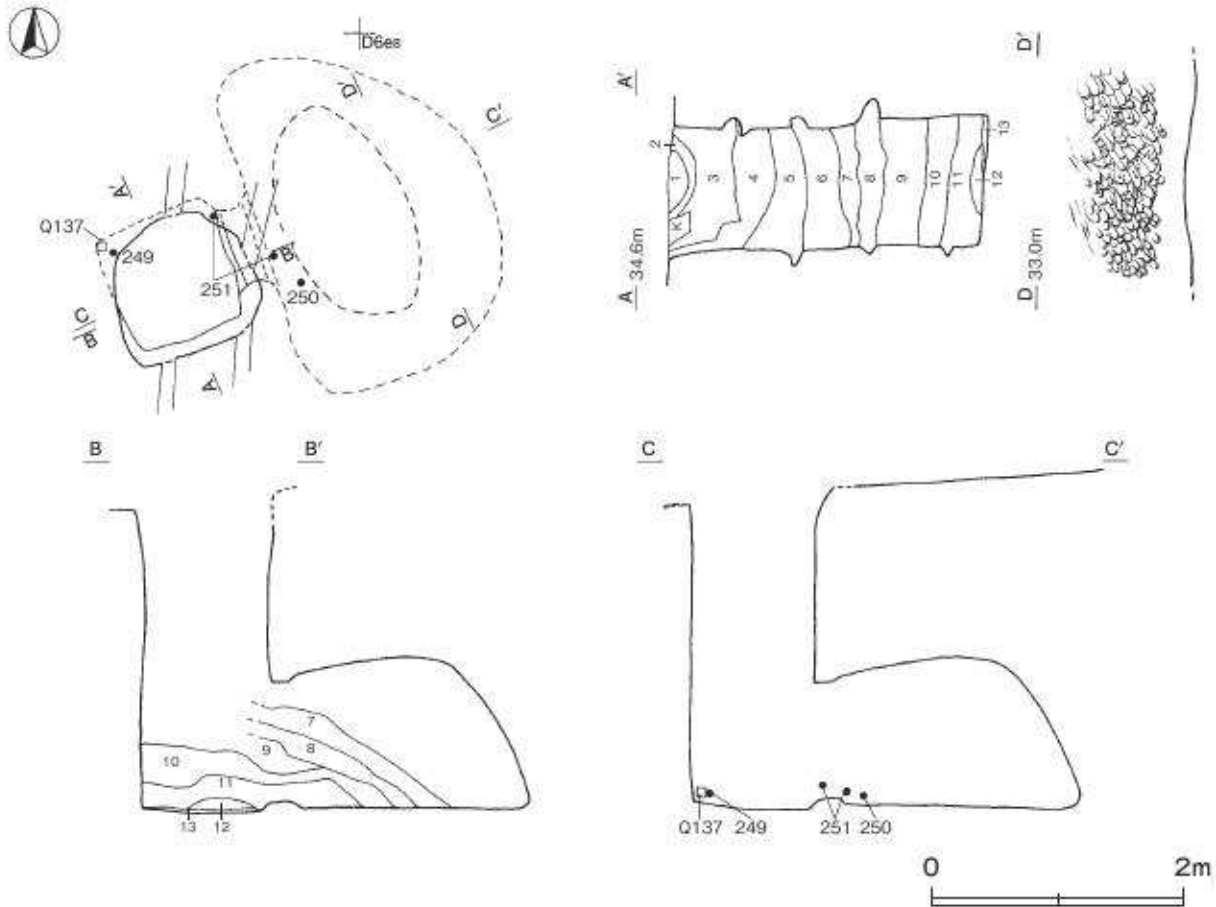
竪坑 主室の西壁中央部に位置し、奥行 1.16 m、横幅 1.10 m の方形である。深さは 2.56 m で、壁は直立している。北壁と南壁には、約 60cm 間隔に奥行 10cm ほどの昇降用の足かけ穴が確認できた。底面は平坦で、連結部の底面に幅 26cm、高さ 6cm の帯状の高まりがある。

主室 奥行 1.80 m、横幅 2.75 m の不整楕円形で、確認面から底面までの深さは 2.43 ~ 2.63 m である。底面から天井部までの高さは 1.19 m で、天井部はドーム状である。底面は平坦で、全面が硬化している。壁には右上から左下の方向に幅 13cm ほどの工具痕が確認できた。

覆土 13 層に分層できる。第 3 ~ 13 層は、ほぼ水平に堆積しているが、ロームブロックやローム粒子、鹿沼パミス粒子が不規則に混じる堆積状況であることから埋め戻された層である。第 1・2 層は周囲から土砂が流入した様相を示しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

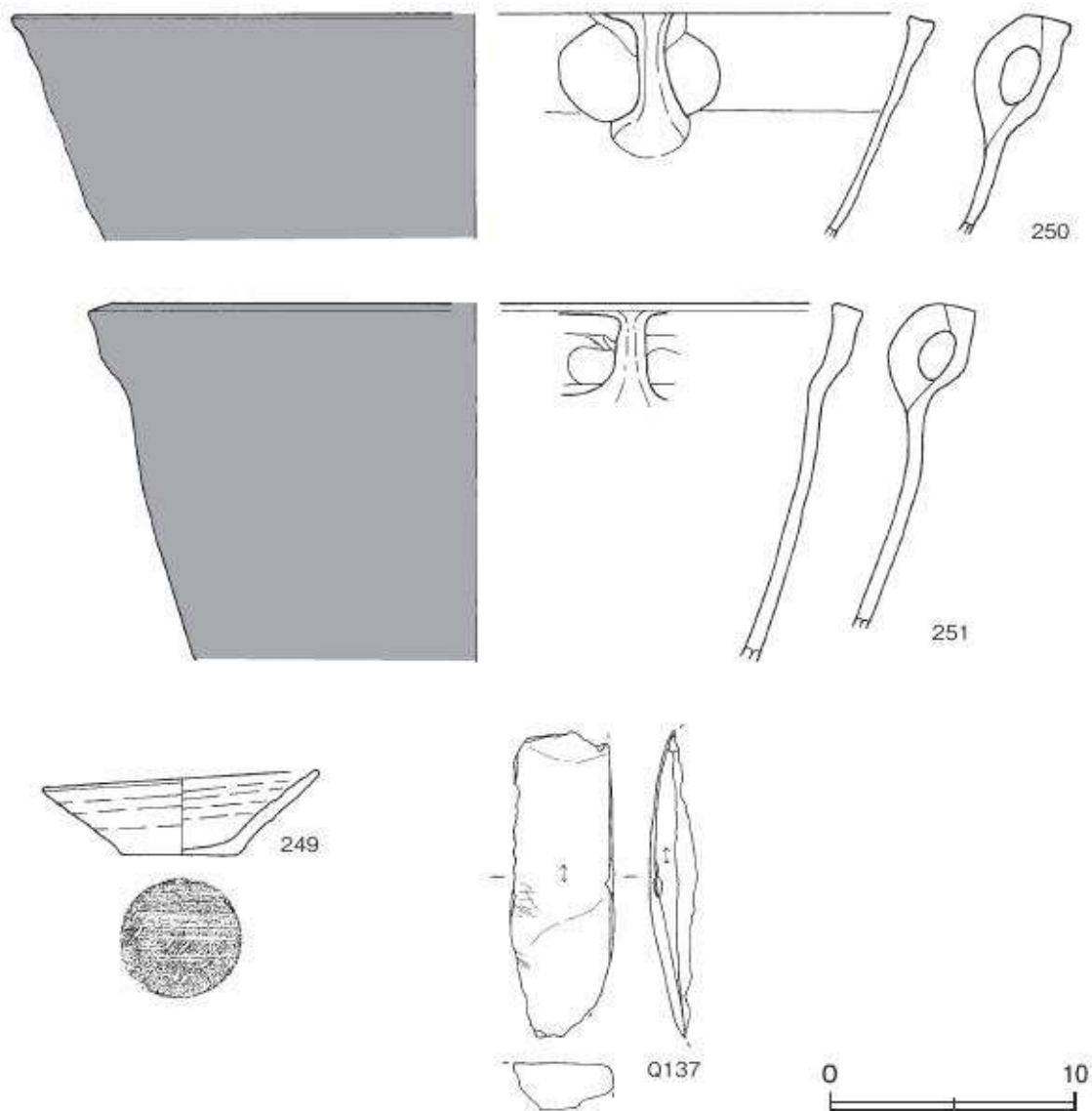
- | | | | |
|--------|-------------------|--------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量 | 9 暗褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス粒子少量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 10 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック多量 | 11 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子・鹿沼パミス粒子微量 |
| 5 褐色 | ローム粒子多量 | 12 暗褐色 | ロームブロック中量、鹿沼パミスブロック少量 |
| 6 褐色 | ローム粒子多量、鹿沼パミス粒子微量 | 13 黒褐色 | 鹿沼パミス粒子中量、ローム粒子微量 |
| 7 褐色 | ローム粒子多量、鹿沼パミス粒子少量 | | |



第 164 図 第 10 号地下式坑実測図

遺物出土状況 土師質土器片 19 点 (皿 3, 内耳鍋 16), 磁器 1 点, 石器 1 点 (砥石) のほか, 縄文土器片 43 点, 弥生土器片 1 点, 土師器片 1 点, 土製品 1 点, 石器 2 点, 破断面のある礫 5 点, 自然礫 6 点が出土している。249 は逆位で竪坑の北西コーナー部, 250 は主室の南西部, 251 は主室の南西部と竪坑の北東コーナー部 覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土遺物から 16 世紀後半と考えられる。底面は, 砂層まで掘り込んであり, 全面が硬化していた。竪坑の北壁と南壁には昇降用の足かけがあり, 頻繁に出入りが行われた様相が見られることから, 倉庫としての用途が考えられる。土師質土器片の皿は, 埋め戻す際に遺棄されたものと考えられ, 第 1・5 号地下式坑にも同様の事例が見られる。



第 165 図 第 10 号地下式坑出土遺物実測図

第 10 号地下式坑出土遺物観察表 (第 165 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
249	土師質土器	皿	11.1	3.4	4.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	明黄褐色	普通	外・内面口タクロナテ 底部板目圧痕	覆土下層	100%, PL.36
250	土師質土器	内耳鍋	[35.4]	(9.8)	-	長石・石英・金雲母	明赤褐色	普通	口縁部ナデ 耳部貼付 外面煤付着	覆土下層	10%
251	土師質土器	内耳鍋	[29.4]	(14.5)	-	長石・石英	暗褐色	普通	口縁部ナデ 耳部貼付 外面煤付着	覆土下層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q137	砥石	(125)	(4.3)	(1.9)	(100)	凝灰岩	砥面2面	覆土下層	PL38

表7 室町時代地下式坑一覽表

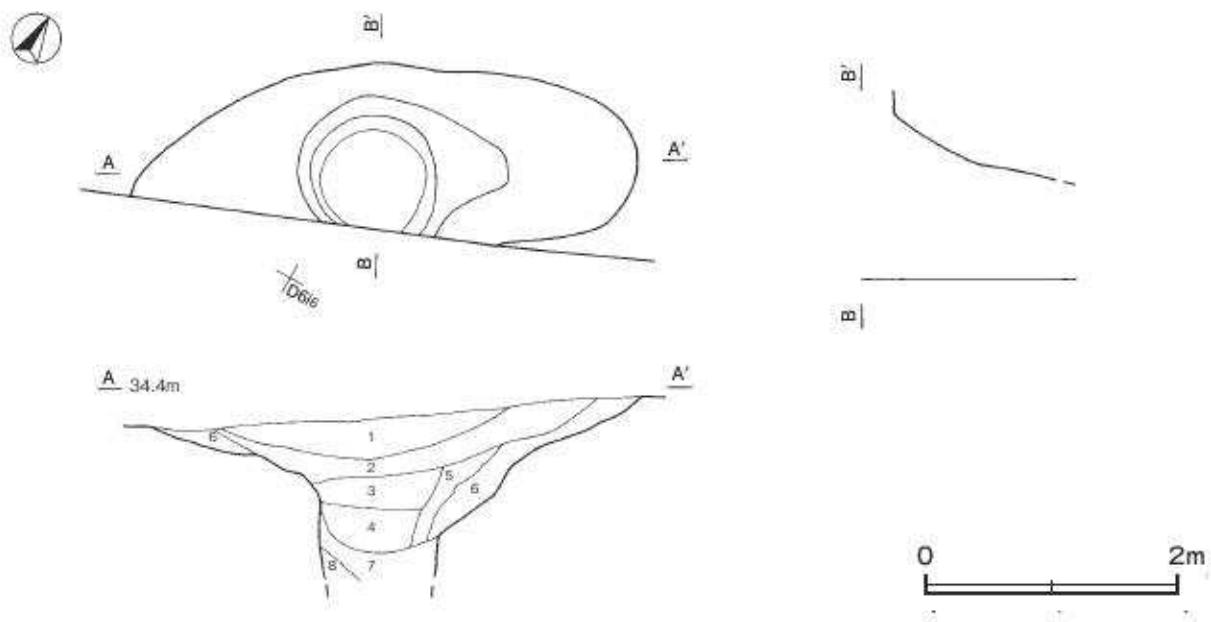
番号	位置	軸方向	平面形		軸長 (m)	主室規模			竪坑規模			覆土	主な出土遺物	備考
			主室	竪坑		奥行 (m)	幅 (m)	深さ (cm)	奥行 (m)	幅 (m)	深さ (cm)			
1	E 6 h3	N-6°-E	楕円長方形	楕円形	2.95	1.98	1.53	87-90	0.82	0.53	43	人為・自然	土師質土器、磁器、銭貨	本跡→PG 1
2	E 6 h2	N-4°-E	長方形	楕円形	2.87	2.12	1.56	89	0.71	0.59	60	自然	土師質土器、銭貨	本跡→PG 1
3	E 6 h2	N-89°-E	不整形方形	不定形	2.61	1.98	1.62	108	0.60	0.68	54	人為	土師質土器、銭貨	本跡→第2号墓坑
4	E 6 g2	N-95°-E	楕円長方形	半楕円形	3.22	2.44	1.72	87-112	0.72	0.55	39	人為	土師質土器、銭貨	本跡→PG 1
5	E 6 a6	N-41°-E	長方形	不整形円形	2.98	2.14	3.86	173	0.90	0.92	150	人為	土師質土器、陶器、漆	本跡→SK27
6	D 6 e5	N-13°-W	楕円長方形	楕円長方形	3.00	2.18	1.54	110-125	0.64	0.48	85	人為	土師質土器、砥石	
7	C 6 f8	N-102°-E	長方形	[方形]	(2.15)	1.84	2.10	183	(0.3)	0.88	177	人為	土師質土器	SK11→本跡
9	D 6 e7	N-15°-W	長方形	不整形方形	2.54	1.96	1.34	100-110	0.74	0.67	66	人為	土師質土器、釘	本跡→PG 2
10	D 6 e7	N-66°-E	不整形円形	方形	3.15	1.80	2.75	243-263	1.16	1.10	256	人為・自然	土師質土器、砥石	

(3) 井戸跡

第1号井戸跡 (第166図)

位置 調査区北部のD 6 h6区、標高34 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南東部が調査区域外に延びており、長径は4.06 mで、短径は1.32 mしか確認できなかった。平面形は楕円形と推定でき、長径方向N-32°-Eである。上部は漏斗状に掘り込まれており、北東部は96cm、南西部は69cmまで緩やかに傾斜しており、下位部分は径95cmの円筒形である。深さ1.32 mまで掘り下げたが、崩落の危険があるため以下の調査を断念した。湧水は確認できなかった。



第166図 第1号井戸跡実測図

覆土 8層に分層できる。第3～8層は、ロームブロックや鹿沼バミスが不規則に混じるブロック状の堆積状況から、埋め戻された層である。第1・2層は、均質な土砂が周囲から流入した堆積状況で、埋め戻されたあとの窪地に自然に堆積したことを示している。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・鹿沼バミス粒子微量	5 褐色	ロームブロック中量、鹿沼バミスブロック少量
2 極暗褐色	鹿沼バミス粒子少量、ローム粒子微量	6 褐色	鹿沼バミスブロック・ローム粒子中量
3 黒褐色	ローム粒子・鹿沼バミス粒子少量	7 極暗褐色	ロームブロック・鹿沼バミス粒子少量
4 黒褐色	鹿沼バミス粒子少量、ローム粒子微量	8 褐色	ロームブロック多量、鹿沼バミスブロック少量

遺物出土状況 土師質土器片1点（内耳鍋）のほか、縄文土器片2点、土師器片3点、石器2点、剥片1点が出土している。土師質土器片は、細片のため図示することができなかった。

所見 時期は、出土土器と遺構の形態から中世と考えられる。南側に墓坑が存在することから、墓域に伴う井戸と考えられる。

(4) 粘土貼土坑

第1号粘土貼土坑（第167図）

位置 調査区中央部のH5e6区、標高35mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸1.33m、短軸1.27mの隅丸長方形で、長軸方向はN-46°-Wである。深さは58cmで、底面は平坦で南部から北部に向かって傾斜している。壁は外傾して立ち上がっている。壁面と底面には、厚さ5～12cmの粘土が貼られている。

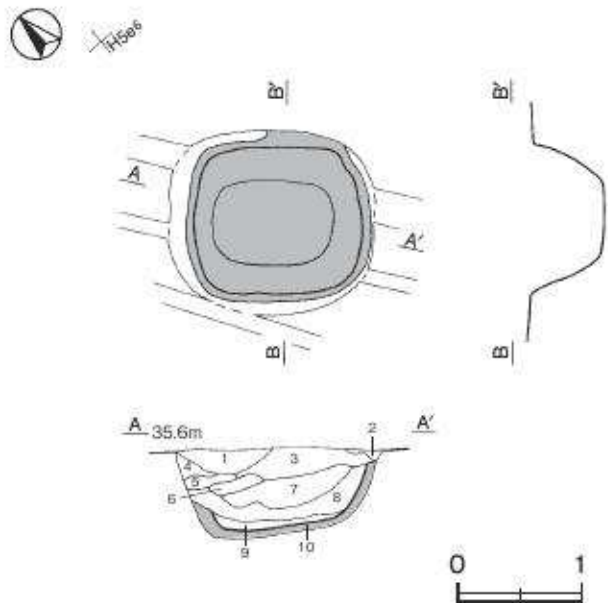
覆土 9層に分層できる。ブロック状の不規則な堆積状況から、埋め戻されている。第10層は壁面と底面に貼られた粘土である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量
3 黒褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック少量、粘土粒子微量
5 暗褐色	ローム粒子中量
6 黒褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量
7 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量
8 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
9 オリーブ黒色	粘土ブロック中量、ローム粒子微量
10 灰オリーブ色	粘土ブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片1点（皿）のほか、縄文土器片8点、須恵器片6点、鉄滓1点、自然礫2点が出土している。土師質土器片は細片のため、図示できなかった。

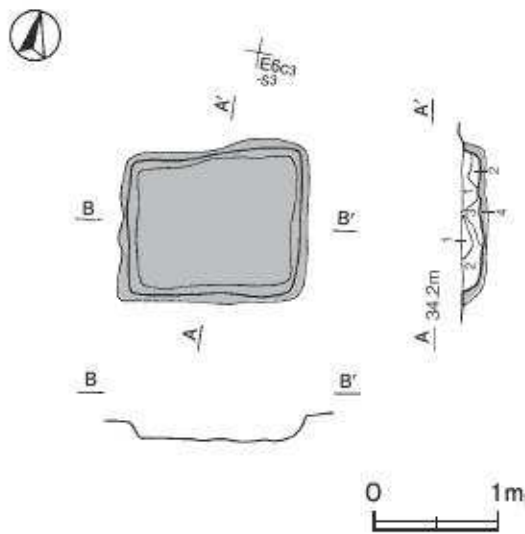
所見 時期は、出土土器と遺構の形態から中世と考えられる。ほぼ全面に粘土が貼られていることから、液体を蓄えたものと考えられる。



第167図 第1号粘土貼土坑実測図

第2号粘土貼土坑（第168図）

位置 調査区中央部のE6d2区、標高34mほどの平坦な台地上に位置している。



第168図 第2号粘土貼土坑実測図

規模と形状 長軸1.34m、短軸1.14mの長方形で、長軸方向はN-80°-Eである。深さは20cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。壁面と底面には、厚さ2~10cmの粘土が貼られている。

覆土 3層に分層できる。ブロック状の不規則な堆積状況から、埋め戻されている。第4層は壁面と底面に貼られた粘土である。

土層解説

- | | | |
|---|--------|---------------------|
| 1 | 灰オリーブ色 | 粘土ブロック多量、ロームブロック微量 |
| 2 | 褐色 | ロームブロック中量、鹿沼パミス粒子少量 |
| 3 | 褐色 | ロームブロック中量、鹿沼パミス粒子微量 |
| 4 | 灰オリーブ色 | 粘土ブロック多量 |

所見 時期は、遺構の形態から中世と考えられる。ほぼ全面に粘土が貼られていることから、液体を蓄えたものと考えられる。

第3号粘土貼土坑 (第169・170図)

位置 調査区中央部のE6e2区、標高34mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸2.28m、短軸1.94mの長方形で、長軸方向はN-84°-Eである。深さは52cmで、底面は平坦である。壁はほぼ直立している。壁面には、厚さ6~12cmの粘土が貼られている。底面に粘土を貼りつけた痕跡が確認できたことから、全面に粘土が貼られていたと推定できる。

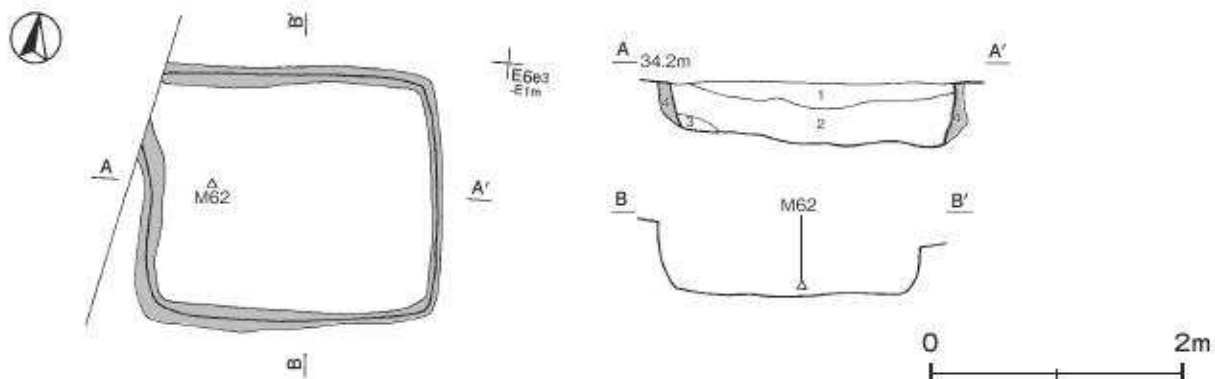
覆土 3層に分層できる。ロームブロックや粘土、鹿沼パミスが不規則に堆積しており、埋め戻されている。第4層は壁面に貼られた粘土である。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|-----------------------|---|--------|-----------------------|
| 1 | 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 | 3 | 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子中量、粘土ブロック少量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子中量 | 4 | 灰オリーブ色 | 粘土ブロック多量 |

遺物出土状況 土師質土器片6点(皿1、内耳鍋5)、陶器1点(甕)、銭貨1枚のほか、縄文土器片27点、弥生土器片2点、土師器片3点、石器1点、自然礫4点が出土している。M62は西部の覆土下層から、252は覆土中から出土している。陶器は細片のため図示できなかったが、常滑産である。

所見 時期は、出土遺物から中世と考えられる。壁面に貼られた粘土が10cm前後あることから、液体を蓄えた施設の可能性がある。



第169図 第3号粘土貼土坑実測図



第170図 第3号粘土貼土坑出土遺物実測図

第3号粘土貼土坑出土遺物観察表 (第170図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
252	土製土器	内耳鍋	-	(8.3)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部ナデ 耳部貼付 外面煤付着	覆土中	10%

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M62	天聖元寶	2.35	0.67	0.18	(2.32)	1023	銅	真書	覆土下層	PL41

第4号粘土貼土坑 (第171図)

位置 調査区中央部のD6f5区、標高34mほどの平坦な台地上に位置している。

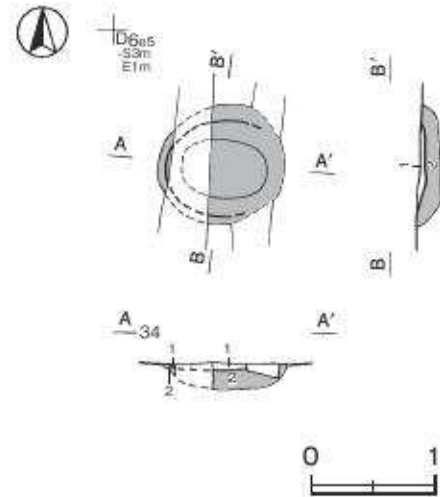
規模と形状 径1.00mほどの円形である。深さは6cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。壁面と底面には、厚さ8～15cmの粘土が貼られている。

覆土 単一層である。層厚が薄く、堆積状況は不明である。第2層は壁面と底面に貼られた粘土である。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量、鹿沼パミス粒子微量
- 2 灰オリーブ色 粘土ブロック多量

所見 時期は、遺構の形態から中世と考えられる。全面に粘土が貼られていたことから、液体を蓄えたものと考えられる。



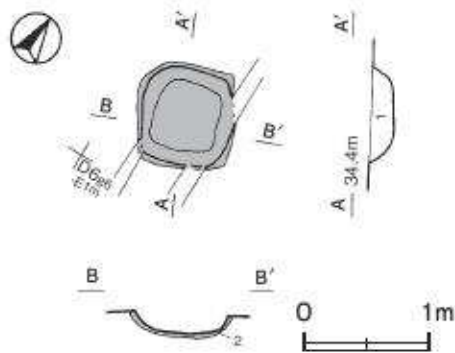
第171図 第4号粘土貼土坑実測図

第5号粘土貼土坑 (第172図)

位置 調査区中央部のD6f6区、標高34mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸0.76m、短軸0.72mの方形で、長軸方向はN-18°-Wである。深さは16cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。壁面と底面には、厚さ2～4cmの粘土が貼られている。

覆土 単一層である。ロームブロックが不規則に混じる堆積状況から埋め戻されている。第2層は壁面と底面に貼られた粘土である。



第172図 第5号粘土貼土坑実測図

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 灰オリーブ色 粘土ブロック多量

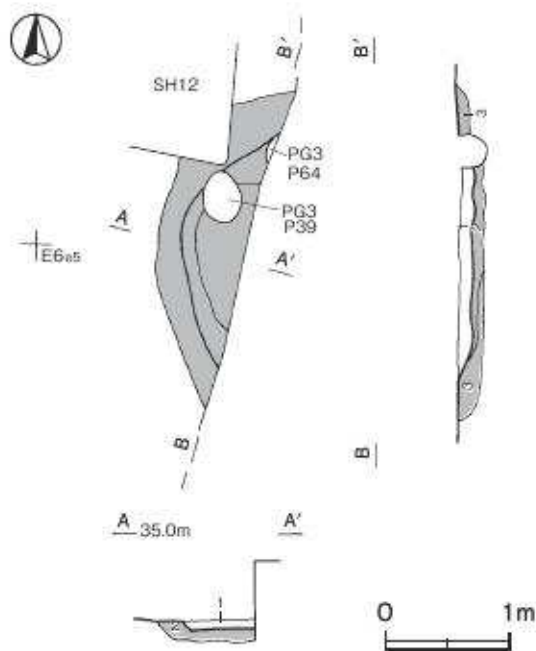
遺物出土状況 混入した縄文土器片4点、弥生土器片2点、土師器片12点、自然礫1点が出土している。

所見 時期は、遺構の形態から中世と考えられる。全面に粘土が貼られていたことから、液体を蓄えたものと考えられる。

第6号粘土貼土坑 (第173図)

位置 調査区中央部のE 6 d5区、標高34mほどの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第12号堅穴遺構、第3号ピット群に掘り込まれている。



第173図 第6号粘土貼土坑実測図

規模と形状 南東部が調査区域外に延びているため、北東・南西軸は0.98mで、北西・南東軸は0.64mしか確認できなかった。平面形は方形または長方形と推定できる。深さは14cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。壁面と底面には、厚さ4～18cmの粘土が貼られている。

覆土 単一層である。層厚は薄い。粘土ブロックやローム粒子が不規則に堆積している状態で、埋め戻されている。第2・3層は壁面と底面に貼られた粘土である。

土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子少量、ローム粒子微量
- 2 灰オリーブ色 粘土ブロック中量、鹿沼パミス粒子少量、ローム粒子微量
- 3 灰オリーブ色 粘土ブロック・ローム粒子中量

所見 時期は、遺構の形態から中世と考えられる。全面に粘土が貼られていたことから、液体を蓄えたものと考えられる。

第7号粘土貼土坑 (第174図)

位置 調査区中央部のE 6 i2区、標高35mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸1.98m、短軸1.10mの隅丸長方形で、長軸方向はN-87°-Eである。深さは35cmで、底面には凹凸がある。壁は外傾して立ち上がっている。壁面と底面には、厚さ5～20cmの粘土が貼られている。

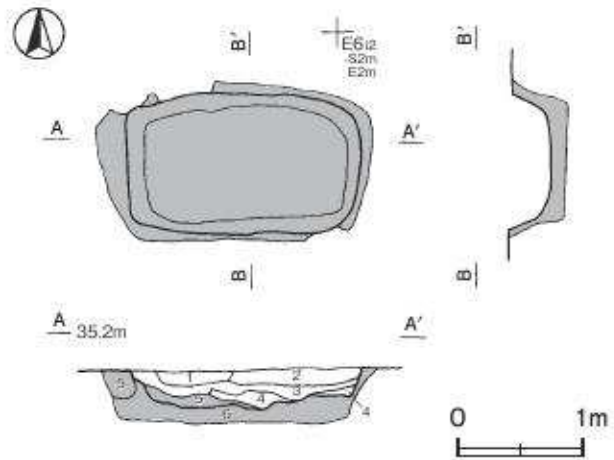
覆土 4層に分層できる。ロームブロックや粘土、鹿沼パミスが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。第5・6層は壁面と底面に貼られた粘土で、一部崩落している。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量
- 3 褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子多量、粘土粒子少量
- 5 暗褐色 粘土ブロック中量、ローム粒子少量
- 6 灰オリーブ色 粘土ブロック多量

遺物出土状況 混入した土師器片1点、須恵器片1点、剥片2点、自然礫1点が出土している。

所見 時期は、遺構の形態から中世と考えられる。全面に粘土が貼られていたことから、液体を蓄えたものと考えられる。西壁は粘土が2層に貼ってあり、内側の壁の下位部分が残存していたことから、壊れた部分を修復したものと考えられる。



第174図 第7号粘土貼土坑実測図

表8 室町時代粘土貼土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		粘土厚 (cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)						
1	H5e6	N-46°-W	隅丸長方形	1.33×1.27	58	5-12	外傾	平坦	人為	土師質土器	
2	E6d2	N-80°-E	長方形	1.34×1.14	20	2-10	外傾	平坦	人為		
3	E6e2	N-84°-E	長方形	2.28×1.94	52	6-12	直立	平坦	人為	土師質土器、陶器、銭貨	
4	D6f5	-	円形	1.00×0.96	6	8-15	緩斜	平坦	不明		
5	D6f6	N-18°-W	方形	0.76×0.72	16	2-4	緩斜	平坦	人為		
6	E6d5	-	方形・長方形	0.98×0.64	14	4-18	緩斜	平坦	人為		本跡→SH12・PG3
7	E6i2	N-87°-E	隅丸長方形	1.98×1.10	35	5-12	外傾	平坦	人為		

(5) 墓坑

第1号墓坑 (第175図)

位置 調査区中央部のE6i3区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号ピット群に掘り込まれている。

規模と形状 長軸1.40m、短軸1.30mの不整隅丸方形で、長軸方向はN-27°-Wである。深さは89cmで、底面は平坦である。壁はほぼ直立している。

覆土 4層に分層でき、埋め戻されている。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、鹿沼バミスブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、鹿沼バミスブロック微量
- 3 褐色 ロームブロック多量
- 4 褐色 ロームブロック多量、鹿沼バミスブロック微量

埋葬の状況 北部から頭蓋骨と上腕骨の一部が出土した。下肢骨は確認できなかったが、頭蓋骨と上腕骨の出土位置と歯の出土状況から、北頭位で顔を西方に向けた埋葬と考えられ、右側臥屈葬と推定できる。

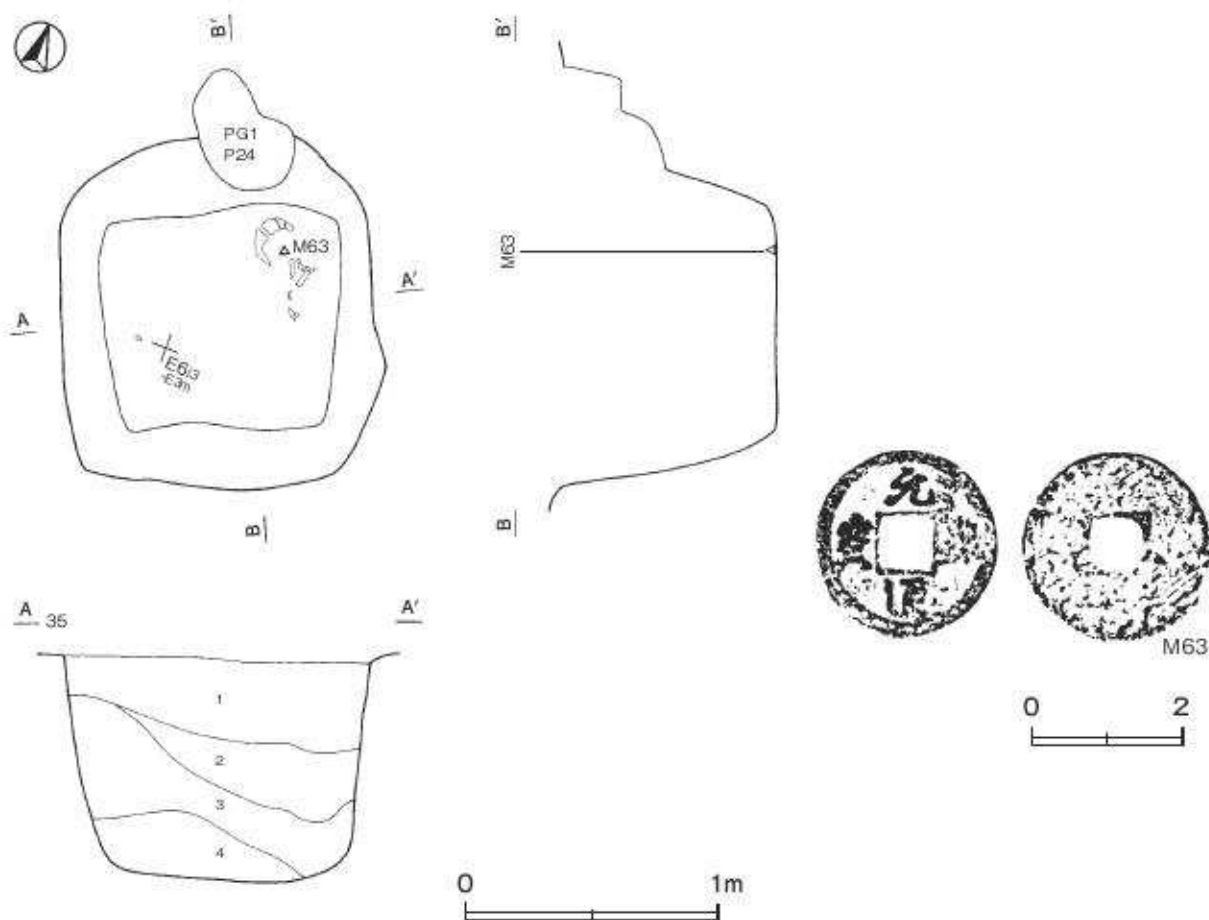
性別と年齢 性別不明 老年。

遺骸の特徴 頭蓋骨や体幹骨の腐朽が進んでおり、性別を判定できる特徴は見いだせない。歯は、13本確認できたが、上顎と下顎が崩れており、上顎右上の小白歯2本だけ位置が明らかである。上顎の前歯3本、下顎

の前歯3本、上下左右は不明の小白歯5本がそれぞれの形状から確認できた。いずれの歯も齶歯である。また、他の2本は、歯冠がほとんど残存せず、歯根だけであり、位置や名称は不明である。確認できた歯の本数が少ないのは、生前に抜けている可能性が高く、齶歯の進行や歯の状況から高齢者と考えられる。

遺物出土状況 銭貨1点が北東コーナーの覆土下層から出土している。銭貨にわずかに繊維が付着しており、銭貨を布の袋に入れて副葬した可能性がある。

所見 時期は、出土遺物と重複関係から中世と考えられる。



第175図 第1号墓坑・出土遺物実測図

第1号墓坑出土遺物観察表（第175図）

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M63	元祐通寶	2.48	0.70	0.18	2.98	1086	銅	裏書	覆土下層	

第2号墓坑（第176図）

位置 調査区中央部のE6h2区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3号地下式坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.52m、短径1.14mの楕円形で、長径方向はN-2°-Wである。深さは48cmで、底面は平坦である。壁は東部が外傾し、その他は緩やかに立ち上がっている。

覆土 6層に分層でき、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------------------|------------------------|
| 1 極暗褐色 炭化物中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 4 暗褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 極暗褐色 炭化物・ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 | 6 極暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量 |

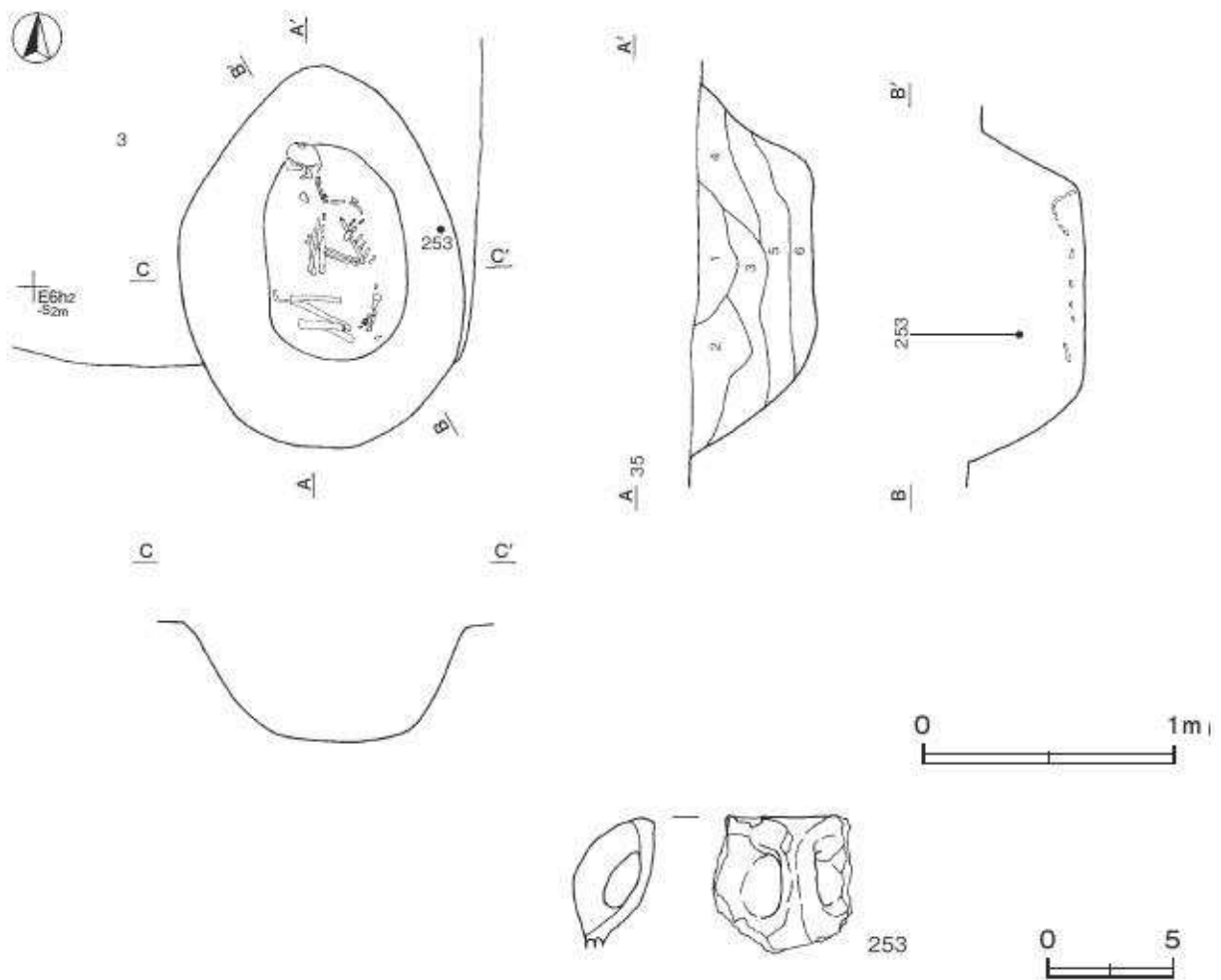
埋葬の状況 確認できた骨格から北頭位西面右側臥屈葬での埋葬と捉えられる。両腕は体前面に曲げた状態で置かれていた。

性別と年齢 性別不明 壮年

遺骸の特徴 頭蓋骨や体幹骨の腐朽が進んでおり、性別を判定できる特徴は見いだせない。確認できた歯は21本で、上顎7本、下顎14本である。歯の摩耗が進んでおり、齧歯も多く、確認できない歯は生前に抜け落ちている可能性がある。下顎右下の第3臼歯を確認できたが、他の第3臼歯が齧歯等によって抜け落ちている状況であれば、萌芽したあとと長い時間が経過していることが推定できる。齧歯の進行や歯の状況から高齢までは達していないと考えられる。

遺物出土状況 土師質土器片2点（内耳鍋）のほか、土師器片1点、須恵器片4点が出土している。253は東部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土遺物と重複関係から中世と考えられる。



第176図 第2号墓坑・出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
253	土師器	内耳罐	—	(55)	—	長石・石美	にぶい褐色	普通	口縁部ナデ 耳部貼付 外面煤付着	覆土中層	10%

第3号墓坑 (第177図)

位置 調査区中央部のE 6 d4区、標高34 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第16号竪穴遺構、第94号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸1.16 m、短軸0.83 mの隅丸長方形で、長軸方向はN-23°-Wとである。深さは64cmで、底面は平坦である。壁はやや外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層でき、埋め戻されている。

土層解説

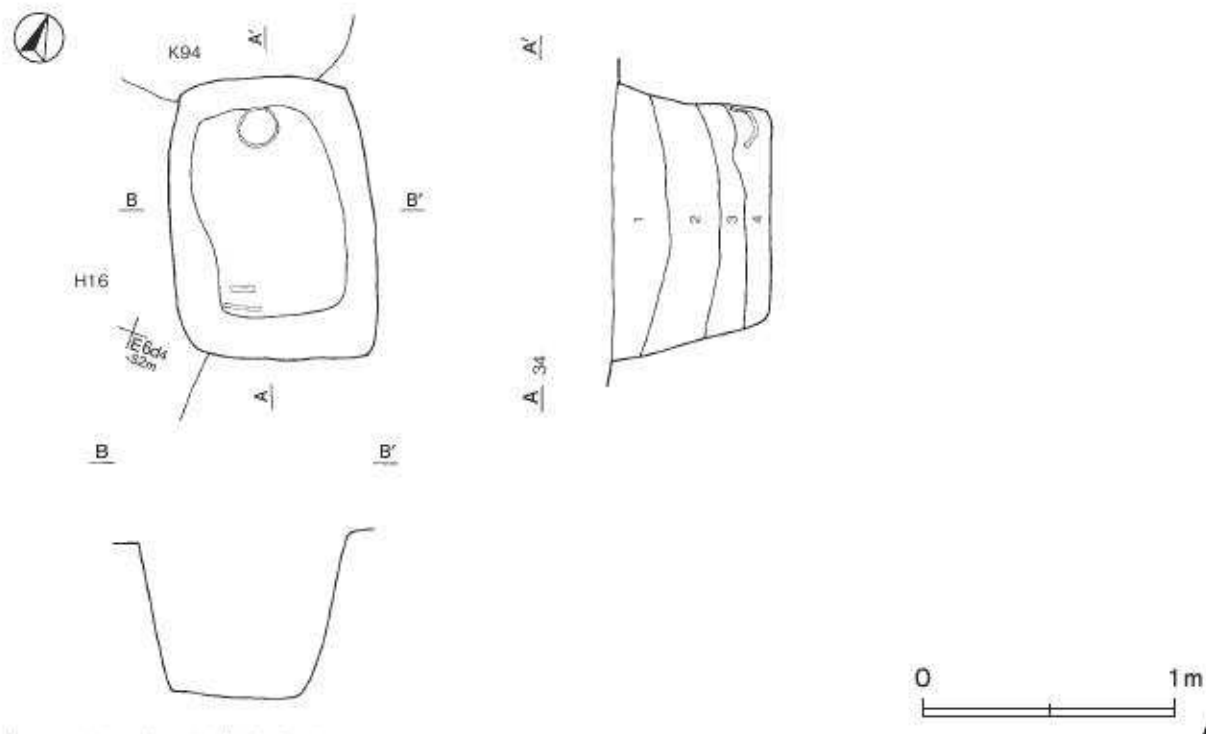
- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス粒子少量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、鹿沼パミスブロック少量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス粒子少量 |

埋葬の状況 北部から頭蓋骨と下肢骨の一部が出土した。頭蓋骨と下肢骨の出土位置と歯の出土状況から、北西頭位で顔を西方に向けた埋葬と考えられ、右側臥屈葬と推定できる。

性別と年齢 性別不明 若年

遺骸の特徴 頭蓋骨や体幹骨の腐朽が進んでおり、性別を判定できる特徴は見いだせない。確認できた歯は齶歯が皆無で、摩耗の度合いも少ない。また、上顎左右の第3臼歯の歯冠が確認でき、萌芽前と見られることから、年齢は20歳前後と推定できる。

所見 時期は、重複関係と遺構の形態から中世と考えられる。南側約30 mには、第1号墓坑が存在しており、遺構の形態が類似していることから、ほぼ同じ時期に埋葬されたと推定できる。



第177図 第3号墓坑実測図

表9 室町時代墓坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	埋葬形態	主な出土遺物	備考
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)						
1	E 6i3	N - 27° - W	不整圓九方形	1.40 × 1.30	89	平坦	直立	人為	北原位西直右側臥屈葬	裁貨	本跡→PG 1
2	E 6i42	N - 2° - W	楕円形	1.52 × 1.14	48	平坦	外傾・緩斜	人為	北原位西直右側臥屈葬	土師質土器	UP-3→本跡
3	E 6d4	N - 23° - W	隅丸長方形	1.16 × 0.83	64	平坦	外傾	人為	北原位西直右側臥屈葬		SH16・SK94 →本跡

(6) 土坑

第 27 号土坑 (第 178 図)

位置 調査区中央部の E 6a6 区、標高 34 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 5 号地下式坑を掘り込んでいる。

規模と形状 西部が削平されているため、短径は 0.57 m で、長径は 0.86 m しか確認できなかった。不整楕円形と推定でき、長径方向は、N - 55° - E である。深さは 32 cm で、底面は平坦で、南部に向かってやや傾斜している。南壁は直立し、その他の壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2 層に分層できる。ロームブロックやローム粒子が不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

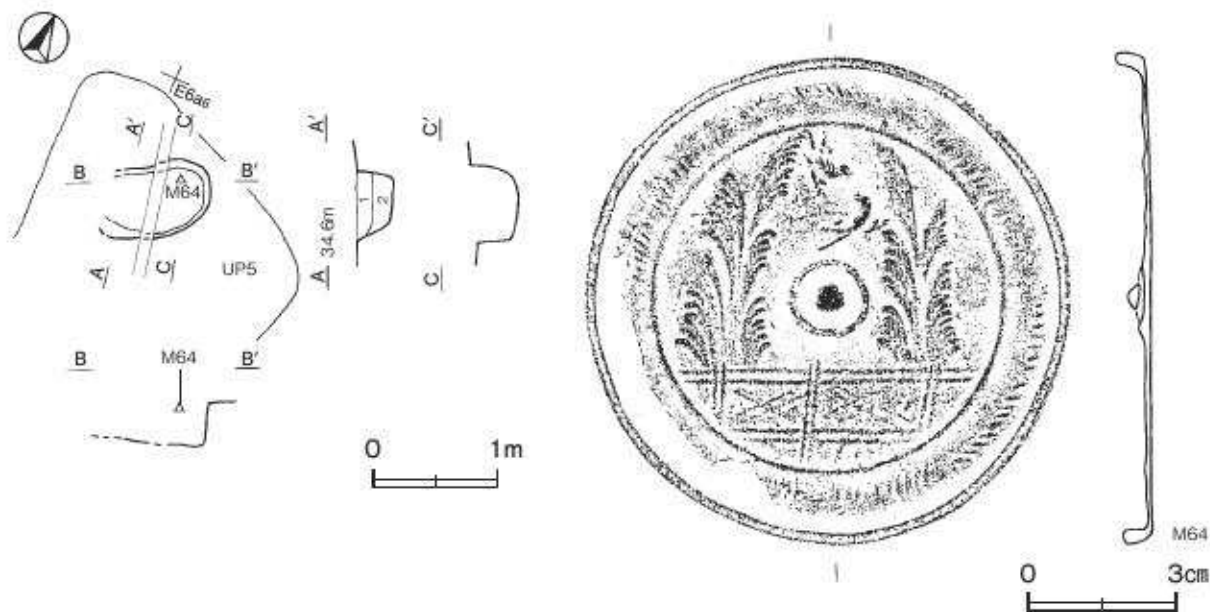
土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量

2 極暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 金属製品 1 点 (和鏡) が覆土上層から出土している。

所見 時期は、重複関係から中世以降と考えられる。和鏡は、竹垣薄双鳥鏡でその特徴から平安後期の作と考えられ、長く伝世したものと推定できる。鏡は、経塚に埋納されるという事例もあり、本跡の南側に 3 基の墓坑も確認されていることから、葬送に関連した施設の存在が想起される。



第 178 図 第 27 号土坑・出土遺物実測図

第 27 号土坑出土遺物観察表 (第 178 図)

番号	器種	径	紐の径	厚さ (縁)	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 64	鏡	9.8	0.25	0.6	(65.5)	銅	竹垣薄双鳥鏡 鏡面の厚さ 0.1cm	覆土上層	

第 85 号土坑 (第 179 図)

位置 調査区中央部の E 6 b4 区、標高 34 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 6 号堅穴遺構を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸 1.40 m、短軸 1.17 m の隅丸長方形で、長軸方向は、N - 15° - W である。深さは 64 cm で、底面は平坦である。壁はほぼ直立している。

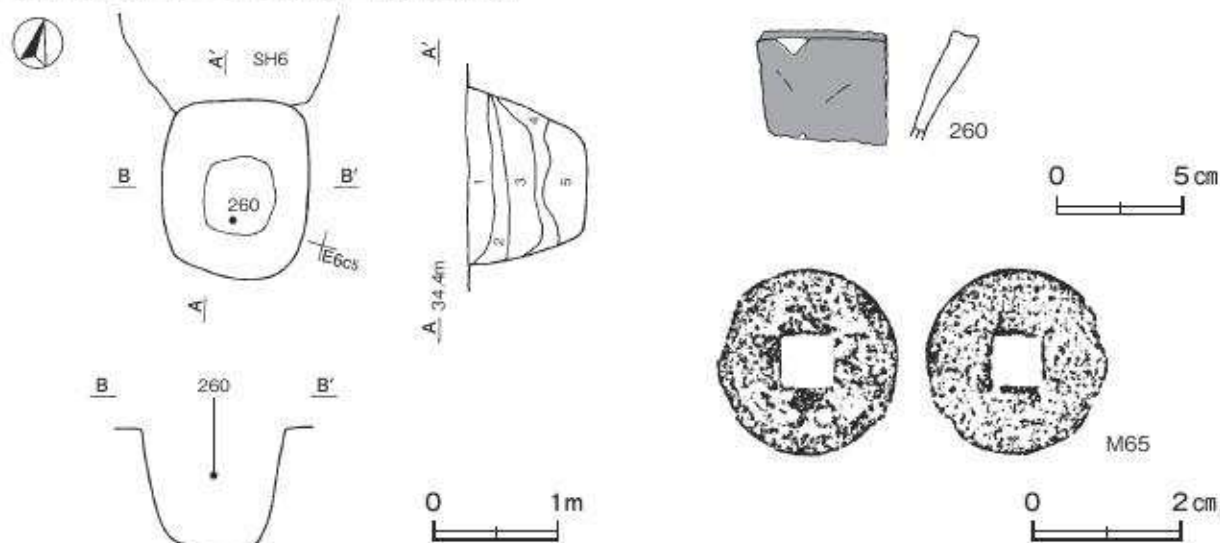
覆土 5 層に分層できる。ブロック状の不規則な堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 | 鹿沼パミスブロック中量、ロームブロック少量 | 4 褐色 | ロームブロック中量、鹿沼パミスブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、鹿沼パミスブロック微量 | 5 褐色 | ロームブロック多量、鹿沼パミスブロック少量
(詰まり弱い) |
| 3 極暗褐色 | 鹿沼パミスブロック中量、ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片 1 点 (内耳鍋)、銭貨 1 点が出土している。260 は覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土遺物や重複関係から中世と考えられる。第 1・3 墓坑と規模や形状が類似しており、銭貨が出土していることから墓坑の可能性はある。



第 179 図 第 85 号土坑・出土遺物実測図

第 85 号土坑出土遺物観察表 (第 179 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
260	土師質土器	内耳鍋	-	(4.5)	-	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	口縁部ナデ 外面採付者	覆土中層	10%

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M65	天聖元寶	2.51	0.71	0.17	(2.41)	1023	銅	裏書	覆土中	

第 111 号土坑 (第 180・181 図)

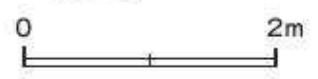
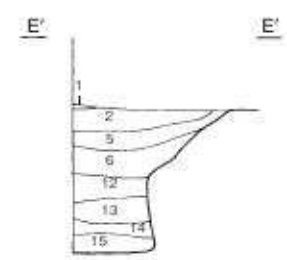
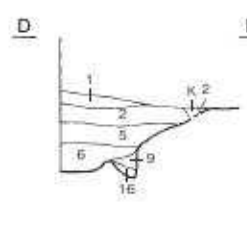
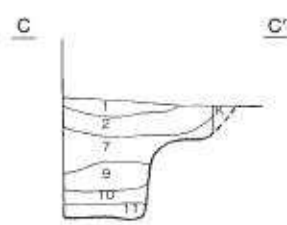
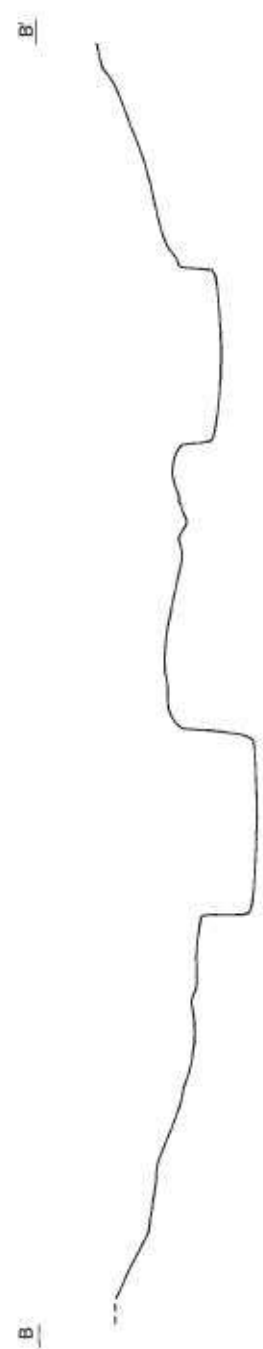
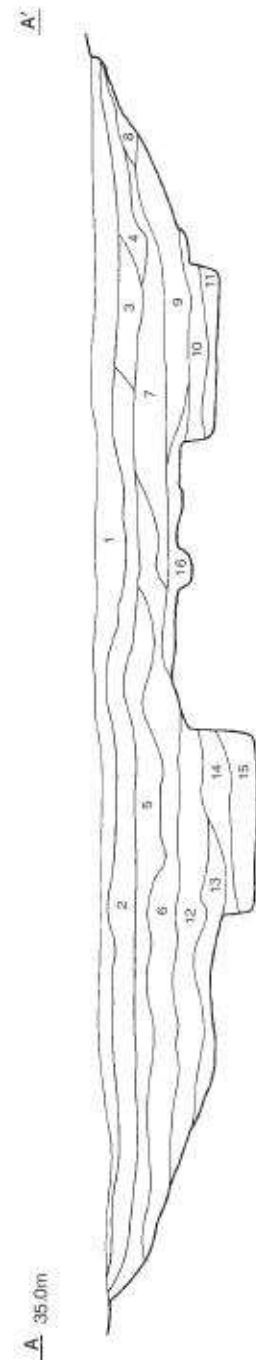
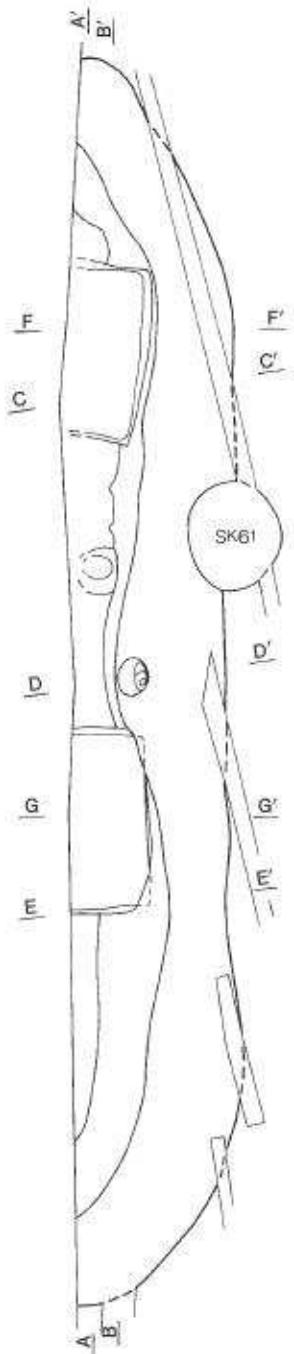
位置 調査区中央部の C 6 i6 区、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 61 号土坑に掘り込まれている。

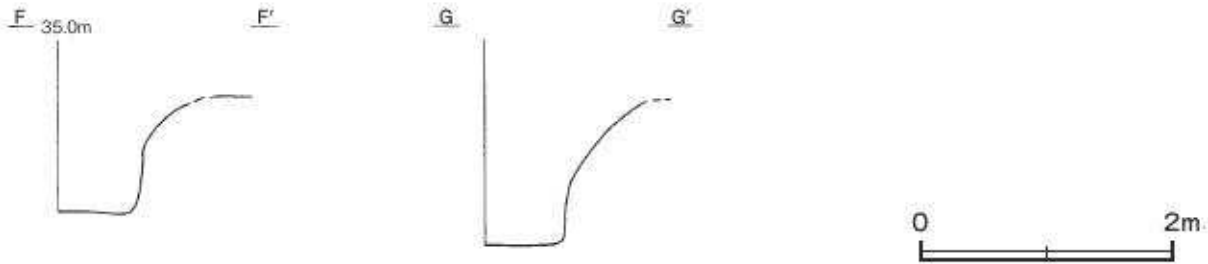
規模と形状 西部が調査区域外に延びているため長軸は 9.90 m で、短軸は 1.40 m しか確認できなかった。残存している部分から南北方向の長楕円形と推定でき、南北軸方向は、N - 14° - E である。北壁・東壁・南壁



D660



第 180 图 第 111 号土坑实测图 (1)



第 181 図 第 111 号土坑実測図 (2)

は緩やかに傾斜して立ち上がっている。底面には方形または長方形と推定できる掘り込みが2か所確認でき、深さはそれぞれ1.21mと1.02mである。四角形部分の底面はいずれも平坦で、壁は直立している。

覆土 16層に分層できる。第1～4層は周囲からの土砂が流入した様相を示し、自然堆積である。第5～16層は大小のロームブロックや鹿沼バミスブロックが不規則に混じる堆積状態で、方形の下層部分から中層にかけては、一括でほぼ水平に埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|-----------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 9 黒色 | ロームブロック・鹿沼バミスブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック微量 | 10 にぶい黄褐色 | ロームブロック多量、鹿沼バミス粒子中量 |
| 3 褐色 | ローム粒子中量 | 11 褐色 | ロームブロック多量、鹿沼バミスブロック少量 |
| 4 褐色 | ロームブロック中量 | 12 黒褐色 | ローム粒子少量、鹿沼バミス粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック少量 | 13 暗褐色 | ローム粒子・鹿沼バミス粒子少量 |
| 6 黒色 | ローム粒子少量 | 14 暗褐色 | ロームブロック少量、鹿沼バミス粒子微量 |
| 7 黒色 | ロームブロック少量 | 15 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼バミスブロック少量 |
| 8 黒褐色 | ローム粒子・鹿沼バミス粒子少量 | 16 暗褐色 | 鹿沼バミスブロック中量、ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師質土器片2点(内耳鍋)、陶器片2点(天目茶碗、甕)のほか、縄文土器片294点、土師器片37点、須恵器片3点、石器5点(石錘)、剥片14点、破断面のある礫7点、自然礫3点が出土している。土師質土器や陶器は細片のため図示できなかったが、天目茶碗は胎土や釉の状況から瀬戸・美濃産、陶器の甕は常滑産と考えられる。

所見 時期は、出土土器から中世と考えられる。覆土の堆積状況から、長楕円形の掘り込みと底面の2か所の四角形の掘り込みは一体のものと捉えることができる。本跡の性格は不明であるが、「当財団調査報告」第82集白石遺跡では、平面形状や掘方が類似した遺構を中世の墓として報告している。

表 10 室町時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(軸)×短径(軸)(m)	深さ (cm)					
27	E 6a6	N-55°-W	[不整楕円形]	0.86×0.57	32	平坦	直立・外傾	人為	縄	UP:5→本跡
85	E 6b4	N-15°-W	隅丸長方形	1.40×1.17	64	平坦	直立	人為	土師質土器、銭貨	SH 6→本跡
111	C 6a6	N-14°-E	長楕円形	9.90×1.40	121	平坦	直立・急傾	人為	陶器	本跡→SK61

6 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、道路跡2条、遺物包含層1か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 道路跡

第1号道路跡（第182図・付図）

位置 調査区南部のJ 5h4～M 2b2区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

確認状況 現道と並行しており、道路跡に伴う側溝7条とともに確認した。東半部は現道の下位に位置しているため、道路と側溝の全容については確認できなかった。

重複関係 第1号竪穴建物跡、側溝1・5・6・7の上位に位置している。側溝2は第1号竪穴建物跡を、側溝5は側溝6を、側溝7は第3号竪穴建物跡をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と形状 南端と北端が調査区域外へ延び、東半部が現道の下位に位置しているため、長さは171.51m、幅は21～352cmしか確認できなかった。M 2b2区から北方向（N-55°-E）にほぼ直線的に延びている。5期にわたって使用されており、最下面は地山面で、層厚28cmの構築土中に4面の路面が確認できる。路面は平坦で、南端と北端の最下面の高低差は27cmであり、南に傾斜している。

構築土 10層に分層できる。大小のロームブロックが不規則に混じる路面の構築土である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	6 黒褐色	ローム粒子微量（締まり強い）
2 にぶい黄褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	7 黒色	ローム粒子・焼土粒子微量（締まり強い）
3 黒褐色	ロームブロック少量（締まり強い）	8 黒褐色	ロームブロック少量
4 暗褐色	ロームブロック中量（締まり強い）	9 にぶい黄褐色	ロームブロック多量（締まり強い）
5 黒褐色	ローム粒子・細礫微量（締まり強い）	10 黒褐色	ロームブロック微量（締まり強い）

側溝1（SD1）

位置 調査区南部のK 3i9～L 2f0区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南西部と北東部が調査区域外へ延びているため、長さは46.18mしか確認できなかった。L 2f0区から北東方向（N-54°-E）に路面と並行して直線的に延びており、上幅33～108cm、下幅40～90cm、深さ10cmである。底面は平坦で、確認できた範囲での高低差はみられない。断面はU字状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土 単一層である。ロームブロックが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック微量
-------	-----------

側溝2（SD2）

位置 調査区南部のK 3h0～L 2e0区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南西部と北東部が調査区域外へ延びているため、長さは45.40mしか確認できなかった。L 3h0区から北東方向（N-55°-E）に路面と並行して直線的に延びており、上幅26～98cm、下幅10～70cm、深さ6～12cmである。底面は平坦で、確認できた範囲では北東部から南西部に向かって傾斜し、高低差は5cmほどである。断面はU字状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土 単一層である。ロームブロックが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量
-------	-----------

側溝3（SD3）

位置 調査区南部のK 3h0～L 3a5区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 北東部が調査区域外へ延びているため、長さは22.60mしか確認できなかった。K 3h0区から北東方向（N-57°-E）に路面と並行して直線的に延びており、上幅22～56cm、下幅21～60cm、深さ8～14cmである。底面は平坦で、確認できた範囲では南西部から北東部に向かって傾斜し、高低差は13cmほどで

ある。断面はU字状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土 2層に分層できる。ロームブロックが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック微量 | 2 暗褐色 ロームブロック中量 |
|-----------------|-----------------|

側溝4 (SD4)

位置 調査区南部のK3g0～L3b4区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南西部と北東部が調査区域外へ延びているため、長さは35.08mしか確認できなかった。K3g0区から北東方向(N-53°-E)に路面と並行して直線的に延びており、上幅52～80cm、下幅18～42cm、深さ23～29cmである。底面は平坦で、確認できた範囲では北東部から南西部に向かって傾斜し、高低差は13cmほどである。断面はU字状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土 6層に分層できる。大小のロームブロックが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量 | 5 黒褐色 ロームブロック少量、小礫微量 |
| 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 6 褐色 ロームブロック多量 |

側溝5 (SD5)

位置 調査区南部のM2a4～M2b2区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南西部と北東部が調査区域外へ延びているため、長さは10.40mしか確認できなかった。M2b2区から北東方向(N-54°-E)に路面と並行して直線的に延びている。東半部が現道の下位に位置しているため、確認できた上幅は12～30cmで、下幅は18～80cm、深さは10～18cmである。底面は平坦で、確認できた範囲では、高低差はみられなかった。断面はU字状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量 | 3 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量 | |

側溝6 (SD6)

位置 調査区南部のL2h7～M1d0区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南西部と北東部が調査区域外へ延びているため、長さは37.50mしか確認できなかった。M1d0区から北東方向(N-54°-E)に路面と並行して直線的に延びており、上幅24～74cm、下幅34～50cm、深さ10～24cmである。底面は平坦で、高低差はみられない。断面はU字状で、壁は緩やかに傾斜し立ち上がっている。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックが不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 1 におい青褐色 ロームブロック多量 | 3 黒褐色 ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量 |

側溝7 (SD7)

位置 調査区南部のJ5h3～K3e2区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南西部と北東部が調査区域外へ延びているため、長さは54.90mしか確認できなかった。K3e2区から北東方向(N-45°-E)に路面と並行して直線的に延びており、上幅14～80cm、下幅30～70cm、深さ20～28cmである。底面は平坦で、高低差は認められない。断面はU字状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

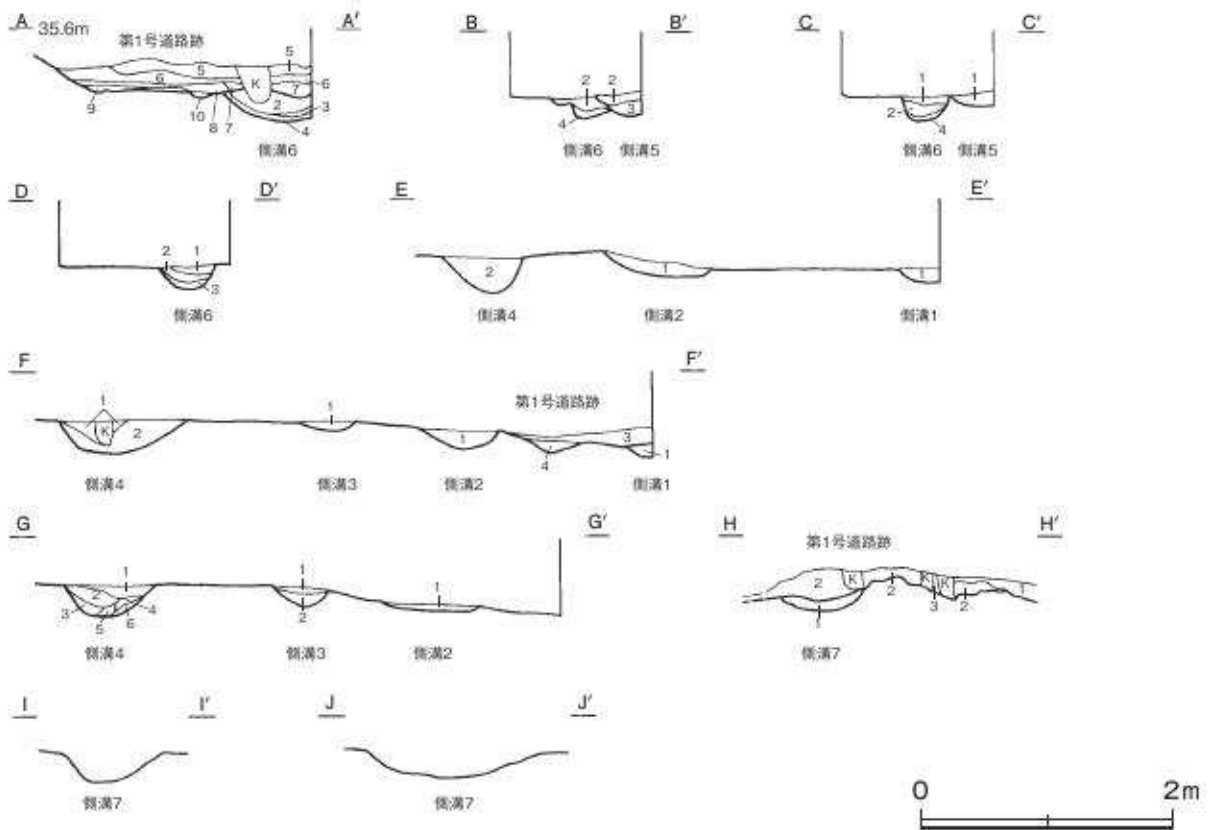
覆土 単一層である。ローム粒子が不規則に混じる堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黄褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 路面からは陶器片2点(甕)のほか、弥生土器片1点、土師器片1点、須恵器片4点、石器1点が出土している。側溝2からは土師質土器片1点(内耳鍋)のほか、土師器片3点、須恵器片2点、鉄製品1点(釘)が出土している。側溝3からは混入した弥生土器片1点、土師器片17点、須恵器片6点が出土している。側溝4からは磁器片1点(碗)、自然遺物1点(大型哺乳類の歯)のほか、弥生土器片1点、土師器片19点、須恵器片15点、鉄滓1点、石器1点(石錘)、破断面のある礫1点が出土している。大型哺乳類の歯は、エナメル質が残存するだけであり、牛または馬と考えられる。側溝7からは陶器片1点、自然遺物13点(馬歯)のほか、土師器片20点、須恵器片38点、鉄滓1点が出土している。馬歯は、左右不明であるが上顎と下顎の小白歯と大白歯が確認できたことから成体とみられ、残存している歯では、4.7cmが最大の歯冠高である。大歯の有無を確認できなかったため、雌雄は不明である。側溝2出土の土師質土器片、側溝7出土の陶器片、側溝4出土の磁器片はいずれも細片のため図示できなかったが、胎土や釉薬の状況から陶器片は瀬戸・美濃産で、磁器片は青磁の碗とみられる。

所見 時期は、出土土器や側溝1～7との関連から、中世から江戸時代にかけてと考えられる。当遺跡の南西約1.5kmには江戸時代の松川陣屋跡、北東約300mには夏海宿が所在し、本跡はそれらを結ぶ旧街道であったと推定できる。本跡は道路幅の変更の際して側溝を埋め戻しながら路面を作り変えているとみられる。路面の最下面と側溝6は同時期に使用されたと考えられるが、それ以外の路面と側溝の関係については不明である。



第182図 第1号道路跡実測図

側溝一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	K 339-L 210	N-54°-E	直線	(46.18)	0.33-1.08	0.40-0.90	10	U字状	緩斜	人為		本跡→SF 1
2	K 330-L 240	N-55°-E	直線	(45.40)	0.35-0.98	0.10-0.70	6-12	U字状	緩斜	人為	土師質土器	SI 1→本跡
3	K 330-L 3a5	N-57°-E	直線	(22.60)	0.22-0.56	0.21-0.60	8-14	U字状	緩斜	人為		
4	K 330-L 3b4	N-53°-E	直線	(35.08)	0.52-0.80	0.18-0.42	23-29	U字状	緩斜	人為	磁器	
5	M 2a4-M 212	N-54°-E	直線	(10.40)	0.02-0.30	0.18-0.80	10-18	U字状	緩斜	人為		側溝 6→本跡→SF 1
6	L 217-M 140	N-54°-E	直線	(37.50)	0.24-0.74	0.34-0.50	10-24	U字状	緩斜	人為		本跡→側溝 5→SF 1
7	J 513-K 3e2	N-45°-E	直線	(54.90)	0.14-0.80	0.30-0.70	20-28	U字状	緩斜	人為	陶器、馬歯	SI 3→本跡→SF 1

第2号道路跡 (第183図・付図)

位置 調査区南部のD 6j6～E 6a4区、標高34mほどの台地平坦部に位置している。

確認状況 現道と並行しており、道路跡に伴う側溝1条とともに確認した。

規模と形状 東端と西端が調査区域外へ延び、北半部が現道の下位に位置しているため、長さは6.09mで、幅は29cmしか確認できなかった。E 6a4区から北東方向(N-59°-E)にはほぼ直線的に延びており、路面は当初地山面を使用し、後に黒色土の上面を路面としている。路面は平坦で、確認できた範囲で高低差はみられない。

側溝 上幅は81cmで、深さは16cmである。断面はU字状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

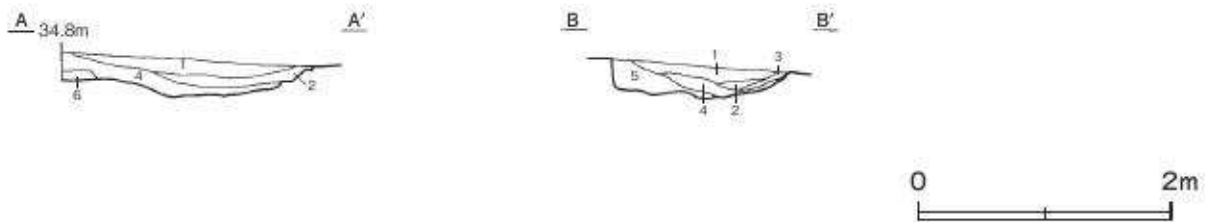
覆土 6層に分層できる。第1～5層は、路面から側溝に土砂が流入した様相の自然堆積である。第6層は路面の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量(締まり弱い) | 5 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量(締まり強い) |

遺物出土状況 混入した土製品1点、鉄滓1点、破断面のある礫9点が出土している。

所見 時期は、公図に記載されている字境とほぼ一致していることと、周囲の同じ面から中世の遺構が確認されていることから、中世から江戸時代かけてと考えられ、生活道路として使用されていたものとみられる。



第183図 第2号道路跡実測図

表11 江戸時代道路跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模			断面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長さ(m)	幅(m)	層厚(cm)				
1	J 514-M 212	N-55°-E	直線	(171.51)	0.21-3.52	28	-	人為	陶器	SI 1-3→本跡
2	D 6j6-E 6a4	N-59°-E	直線	(6.09)	0.29	6	-	自然		

(2) 遺物包含層

第1号遺物包含層 (第184～186図)

位置 調査区北部のB7b5区、標高29～32mの台地縁辺部に位置している。

確認状況 トレンチ調査の結果、中層から縄文土器を主体とする遺物が深さ1mまで存在することが確認できた。そこで、遺物包含層として掘り下げた。ローム層上面の標高は南西部が32.4m、東部は30.8mである。北東部は2m掘り下げたがローム層は見られず、地山面はさらに下位にあると推定できる。旧地形は、南東方向から北西方向に傾斜する斜面地であったと考えられ、現在の地形から、台地の北東方向から入る谷の谷頭部分であると考えられる。遺物は南西の谷頭の斜面地に多く散布し、北東方向に向かって少なくなる。また、下層では遺物の出土が見られないことから、出土遺物の記録を終了した時点で掘り込みも終了している。遺物包含層の範囲は、調査区域外に延びているため、南西・北東方向は32.5m、北西・南東方向は13.5mしか確認できなかった。

調査の方法 堆積土を10cmずつ掘り下げ、遺物の出土地点を記録した。

堆積土 9層に分層できる。台地から流入した土砂が斜面地の傾斜に沿って堆積した様相を示していることから、自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量	6 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
2 褐色	ローム粒子中量	7 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
3 灰褐色	ローム粒子微量	8 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック少量	9 黒褐色	ローム粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック少量		

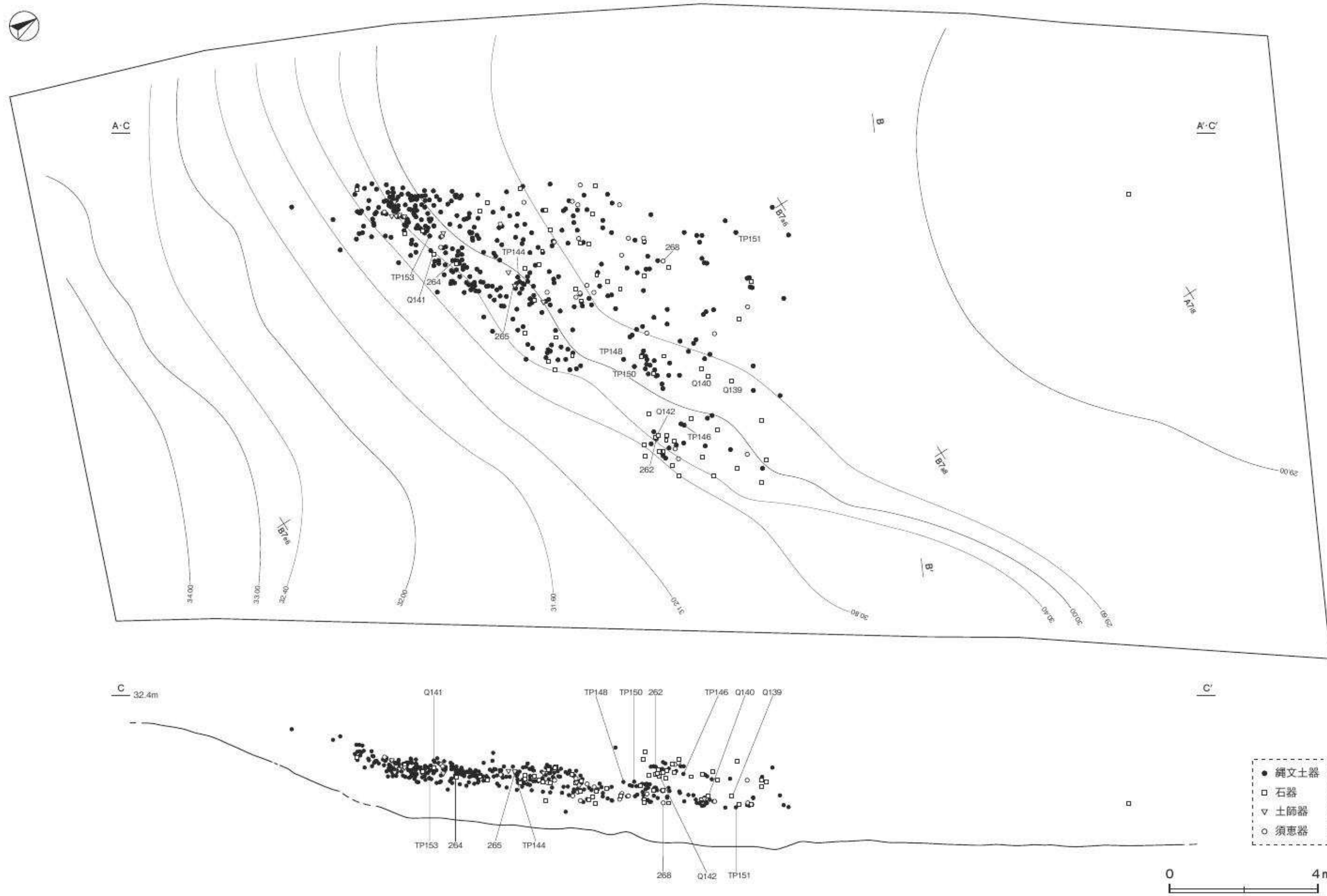
遺物出土状況 縄文土器片5195点(深鉢5192, 浅鉢2, 注口土器1)、弥生土器片4点(広口壺)、土師器片417点(坏5, 甕412)、手捏土器2点、須恵器片103点(坏28, 高台付坏1, 蓋10, 甕64)、土師質土器片4点(内耳鍋)、陶器片3点(天目茶碗1, 碗1, 皿1)、磁器片3点(碗)、土製品6点(土器片錘4, 土器片円盤2)、石器131点(石鏃2, 打製石斧7, 磨製石斧2, 石皿1, 磨石15, 敲石9, 石錘82, 軽石8, 凹石5)、剥片104点、破断面のある礫139点、自然礫83点、鉄滓3点(7.34g)が出土している。土器は南西部の斜面地に集中し、傾斜に沿って遺物が出土している。縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、陶磁器等の時期差のある土器片が混在し、層位によって時期が異なる状況ではない。262・TP146は東部の上層、268・TP151は北部、264・265・TP144・TP153は南西部の中層からそれぞれ出土している。267は、南西部の斜面地の堆積土中から出土しており、底部に「大屋厨」と墨書されている。

土器は大きさが10cm以下のものが多く、断面の摩耗しているものも多い。縄文土器は、中期の土器に加え、後期の土器も出土しており、弥生土器は出土点数が極めて少ない。土師器は、古墳時代の坏や甕類をはじめ、奈良時代・平安時代の特徴が見られるものもある。須恵器は、奈良時代や平安時代の特徴を持つものである。陶器や磁器は細片で図示できなかったが、天目茶碗は、胎土や釉薬の様子から瀬戸・美濃産とみられ、磁器の碗は染付が施されている。

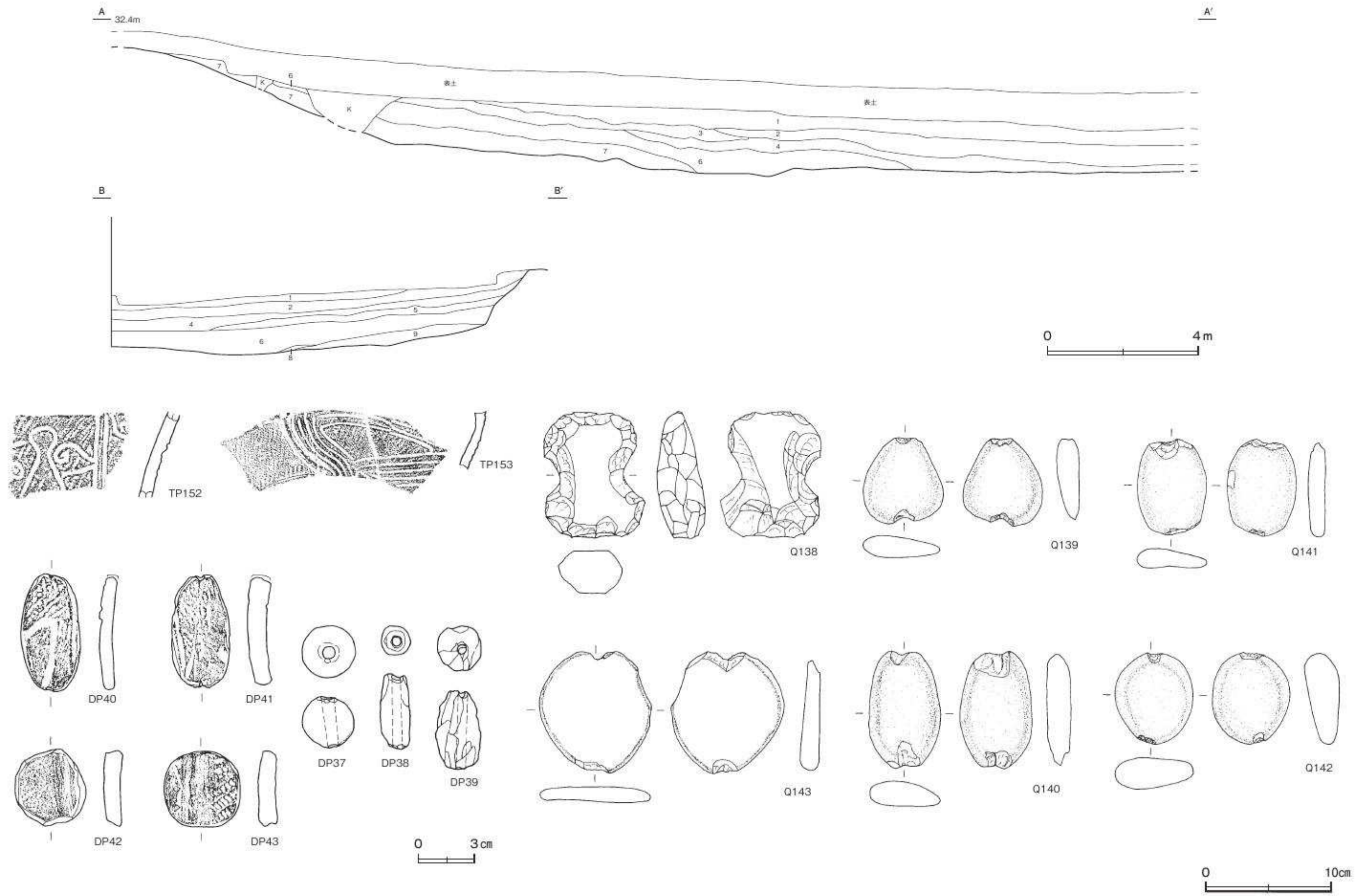
所見 台地上に散在していた土器類が、斜面地に土砂とともに流れ込んだ状況と捉えられる。流れ込んだ遺物に時期差があることから、江戸時代のある時期に比較的短期間で堆積したと考えられる。



第 184 图 第 1 号遺物包含層出土遺物実測図



第 185 図 第 1 号遺物包含層実測図



第 186 图 第 1 号遺物包含層・出土遺物実測図

第1号遺物包含層出土遺物観察表(第184・186図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴・手法の特徴ほか	出土位置	備考
261	縄文土器	浅鉢	-	(8.8)	9.5	長石・石英・雲母	橙	普通	外・内面磨き	堆積土中	40% PL36
262	縄文土器	深鉢	-	(6.6)	-	長石・石英・雲母	明褐色	普通	単節縄文LRを施文後縦方向の沈線	上層	10%
263	縄文土器	深鉢	-	(8.8)	-	長石・石英・赤色粒子	黒褐色	普通	細隆帯による区画とS字状文・斜方向の沈線を施文	堆積土中	10%
264	縄文土器	深鉢	-	(9.8)	[10.8]	長石・石英・雲母	黄褐色	普通	単節縄文LRを施文	中層	10%
265	土師器	甕	[19.8]	(4.8)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部内面へウナデ	中層	10%
266	土師器	高台付外	[12.6]	(3.8)	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	内面黒色処理	堆積土中	10%
267	須恵器	高台付坪	-	(5.5)	8.2	長石・石英・針状鉱物	灰	普通	底部回転へうくり 底部に墨書「大屋厨」	堆積土中	60% PL36 木葉下層産
268	須恵器	高台付坪	-	(2.9)	[10.0]	長石・石英・針状鉱物	暗灰黄	普通	ロクロナデ	中層	20% 木葉下層産

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP14	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	単節縄文LRを縦方向に施文後、磨消及び沈線を施文	中層	
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	単節縄文施文後、斜方向の沈線や横方向の沈線を施文	堆積土中	
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	単節縄文RLを縦方向に施文後、隆帯と隆帯に沿う沈線文	上層	PL40
TP17	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	単節縄文RLを施文後、沈線文	堆積土中	
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐	単節縄文RLを縦方向に施文後、磨消と沈線文	中層	PL40
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	沈線による弧状のモチーフを描出 微細な連続した刺突文を施文	堆積土中	PL40
TP150	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐	三角形状をモチーフとした沈線文	中層	PL40
TP151	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	縦方向に隆帯貼付け後、山形沈線文を施文	中層	PL40
TP152	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	単節縄文RLを縦方向に施文後、沈線による直線や断手文を施文	堆積土中	PL40
TP153	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	単節縄文LRを施文後、細隆帯貼付と沈線文	中層	PL40

番号	器種	径(長さ)	厚さ(幅)	孔径(厚さ)	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP37	土玉	2.8	2.7	0.7	19.2	長石・石英	にぶい黄褐	一方からの穿孔 ナデ	堆積土中	
DP38	管状土鉢	4.0	1.6	0.5	8.3	長石・雲母	にぶい褐	一方からの穿孔 ナデ	堆積土中	
DP39	管状土鉢	4.2	2.4	0.5	23.2	長石・石英	橙	一方からの穿孔	堆積土中	
DP40	土器片鉢	6.2	3.2	0.8	19.1	長石・石英	にぶい橙	周辺部研磨 端部に刻み痕	堆積土中	
DP41	土器片鉢	5.9	3.1	1.1	25.5	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	周辺部研磨 端部に刻み痕	堆積土中	
DP42	土器片皿	4.1	3.8	0.9	18.4	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	周辺部研磨	堆積土中	
DP43	土器片皿	4.0	4.1	0.9	20.1	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	周辺部研磨	堆積土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q138	打製石斧	10.0	8.1	3.8	343.5	砂岩	連続した割縁調整 両面に自然面を残す	堆積土中	
Q139	石鏃	6.9	6.4	1.7	102.5	砂岩	長径方向に抉り調整	中層	
Q140	石鏃	9.4	5.8	2.0	164.9	安山岩	長径方向に抉り調整	中層	
Q141	石鏃	7.7	5.6	1.6	90.6	砂岩	長径方向に抉り調整	中層	
Q142	石鏃	7.3	6.3	2.5	164.2	砂岩	長径方向に抉り調整	中層	
Q143	石鏃	9.8	9.1	1.3	179.9	砂岩	長径方向に抉り調整	堆積土中	

7 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格が明確でない竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡1棟、土坑62基、溝跡4条、ピット群3か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第22号竪穴建物跡（第187図）

位置 調査区中央部のE6i4区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

確認状況 遺構確認面で、炉の痕跡とピットを確認した。

規模と形状 確認状況及び建物跡の東部が調査区域外に延びていることから、明確な規模は不明であるが、炉と柱穴の配置から軸長4mほどと推測した。

床 平坦で、明らかな硬化面は認められない。

炉 柱穴の配置からほぼ中央部に付設されていると推定できる。長径66cm、短径46cmの楕円形で、深さ6cmの地床炉である。炉床は皿状に掘りくぼめられ、炉床面は、火を受けて赤色硬化している。第1層上面が炉床面である。

炉土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 3か所。P1・P2は、深さ47・36cmで、規模と位置から主柱穴と考えられる。P3は深さ56cmでP2に掘り込まれていることから、柱を建て替えているものと考えられる。

ピット土層解説

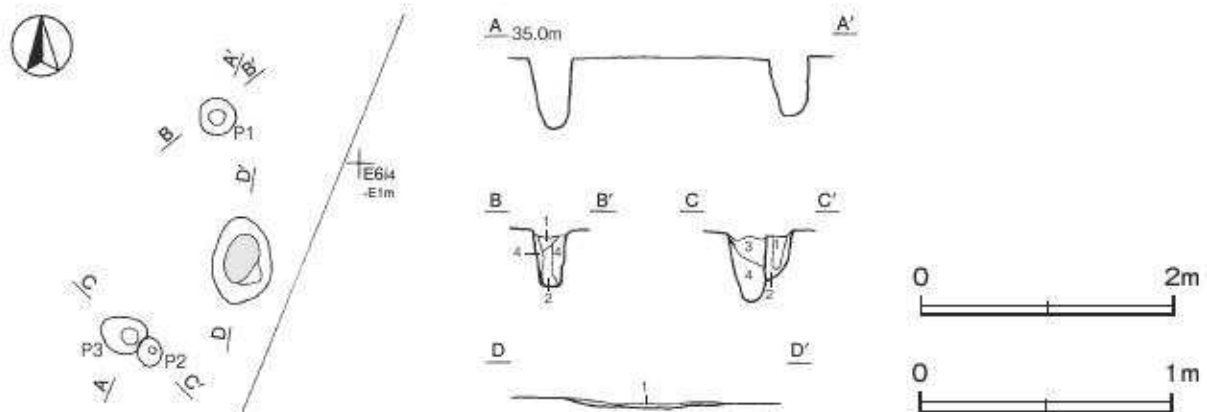
1 暗褐色 ロームブロック中量

2 褐色 ロームブロック中量

3 褐色 ローム粒子中量

4 褐色 ローム粒子少量

所見 炉とピットの存在から建物跡と認定した。伴う遺物が出土しなかったため時期は不明であるが、本跡の南側23～100mには弥生時代の竪穴建物跡が6棟確認されていることから、本跡も同時期の可能性がある。



第187図 第22号竪穴建物跡実測図

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第188図）

位置 調査区中央部のK3g9区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

確認状況 柱穴5か所を調査区域外と接する位置で確認した。

重複関係 第2号竪穴建物跡を掘り込んでいる。第9号土坑との新旧関係は不明である。

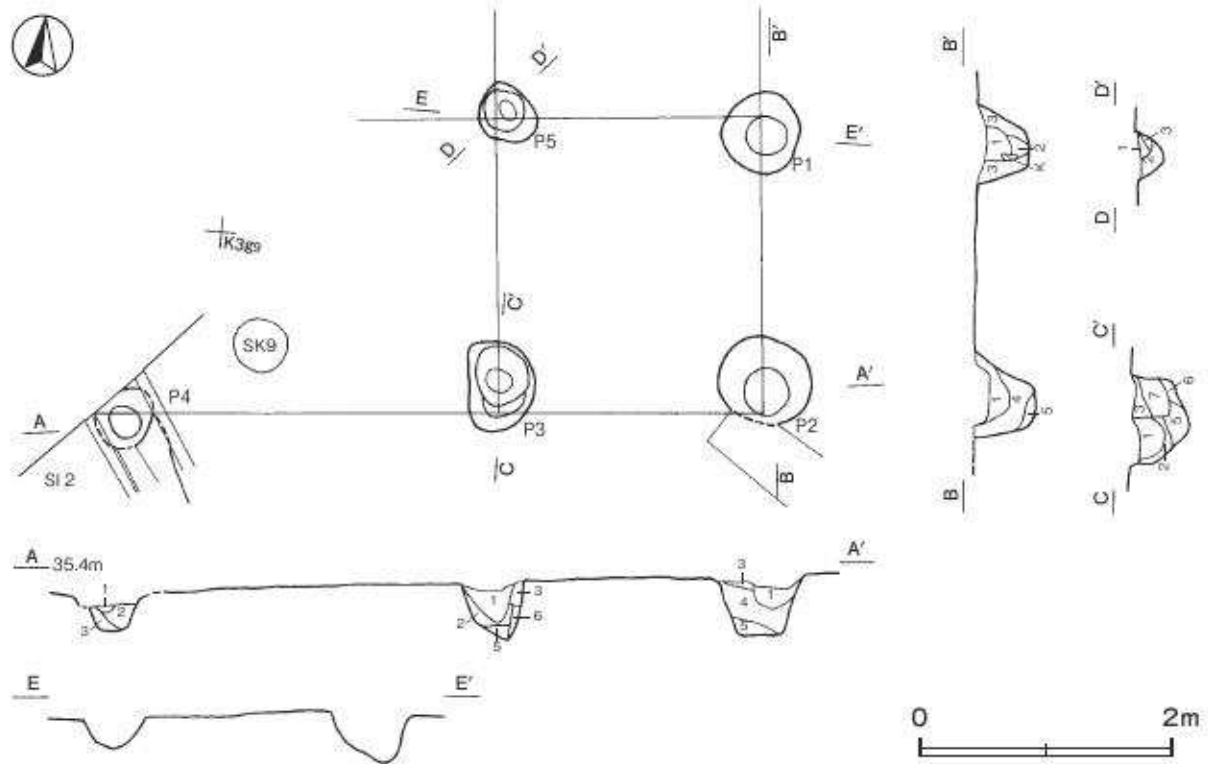
規模と構造 確認できた範囲では、桁行2間、梁行1間の側柱建物跡で、桁行方向はN-86°-Eの東西棟である。規模は桁行5.12m、梁行2.14mで、面積は10.9㎡である。柱間寸法は桁行は2m(7尺)・3m(10尺)、梁行は2m(7尺)である。

柱穴 5か所。平面形は円形または不整形円形で、長径51~84cm、短径44~51cmである。深さは21~52cmで、掘方の断面は、逆台形とU字状である。

柱穴土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック多量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

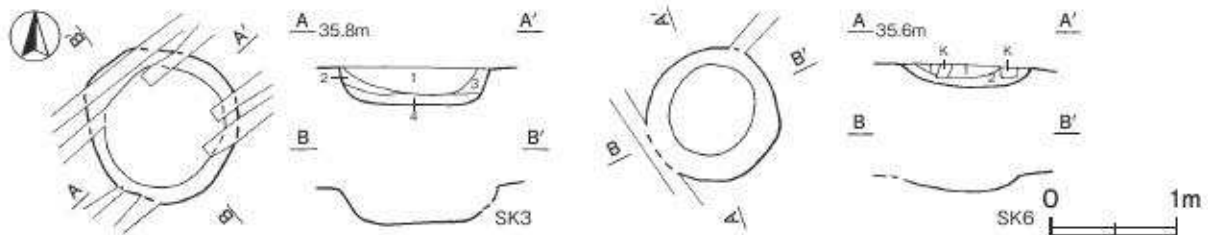
所見 時期は、重複関係から奈良時代以降と考えられるが、伴う遺物が出土しなかったため明確な時期は不明である。北部と西部の調査区域外に柱穴の列が延びている可能性もあり、総柱建物跡も想定できる。



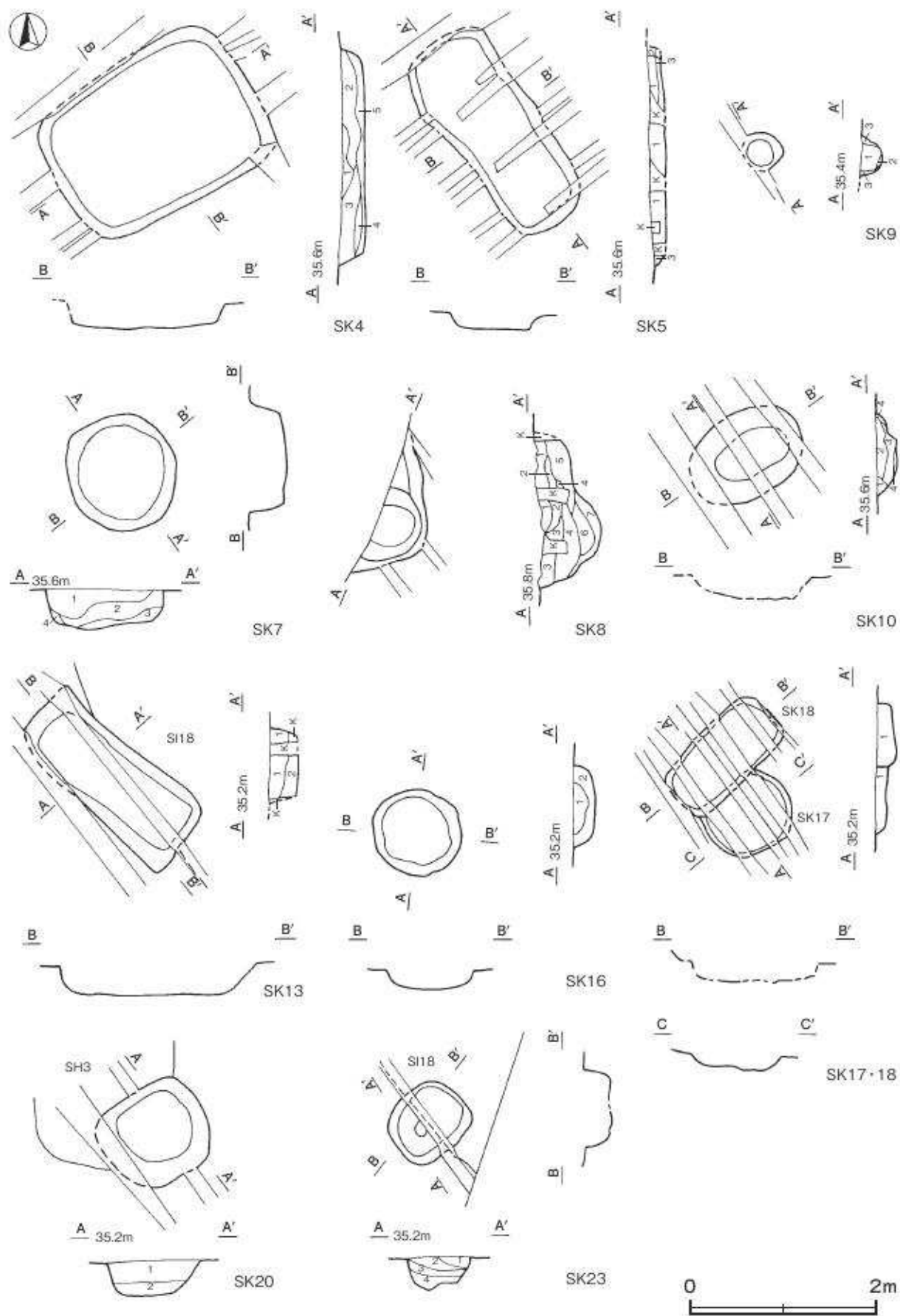
第188図 第1号掘立柱建物跡実測図

(3) 土坑

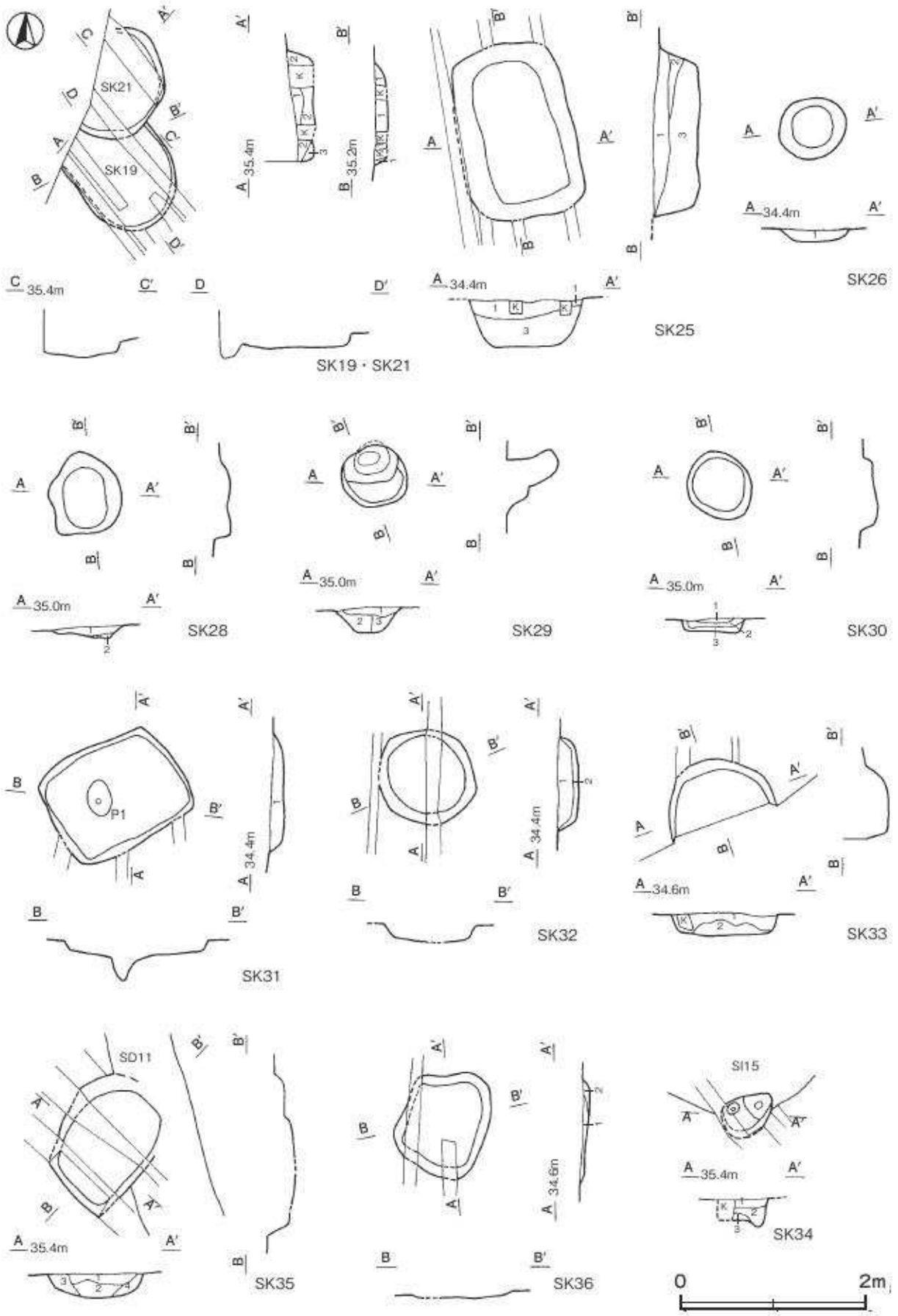
時期や性格が明確でない土坑に関しては、規模・形状等を実測図(第189~194図)と一覧表で掲載する。



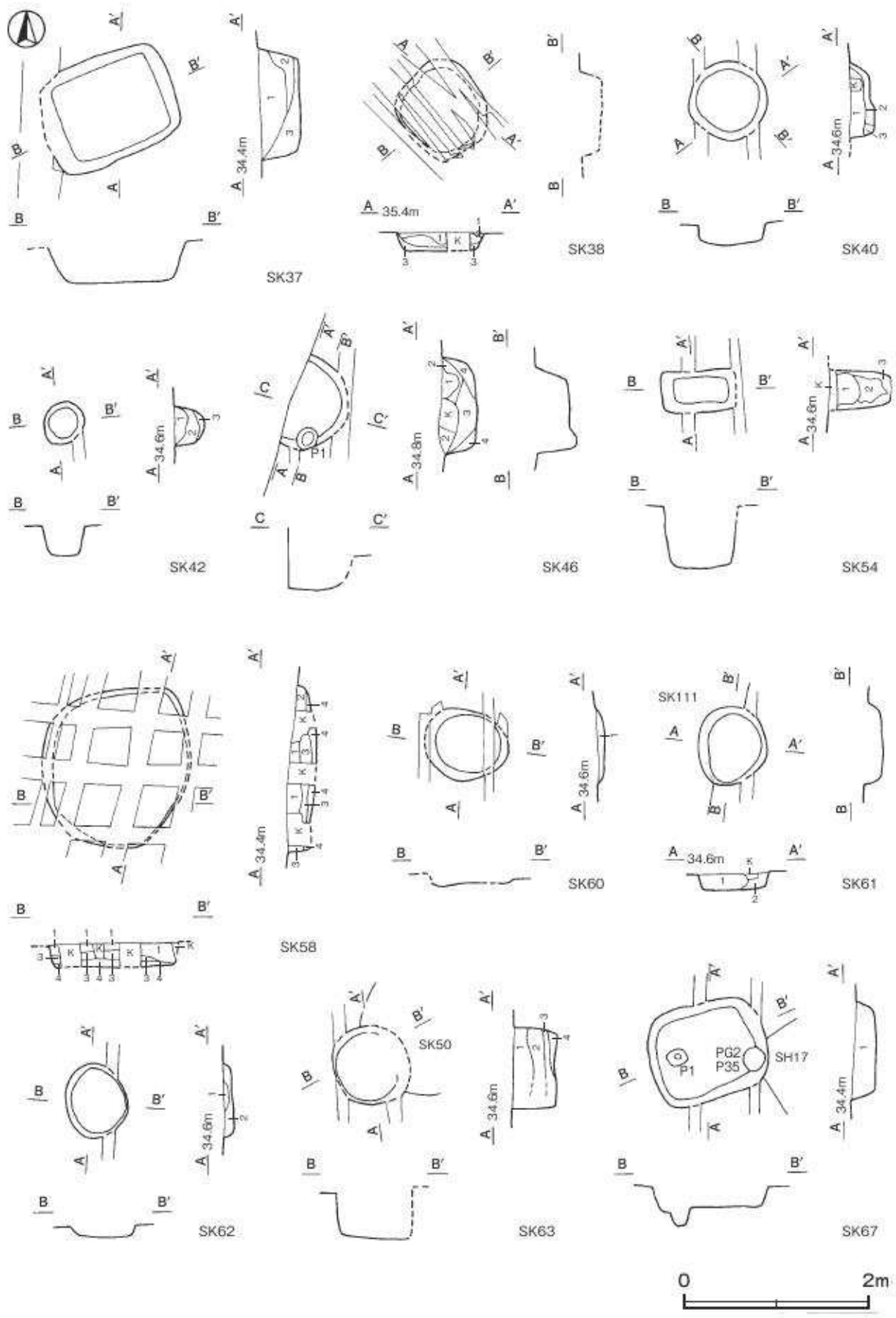
第189図 その他の土坑実測図(1)



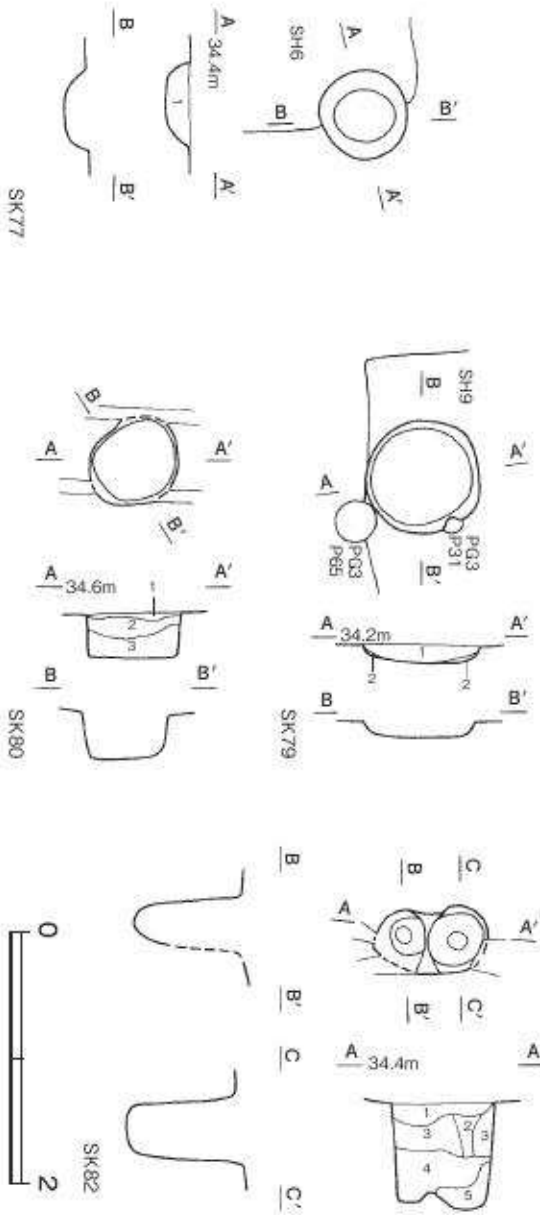
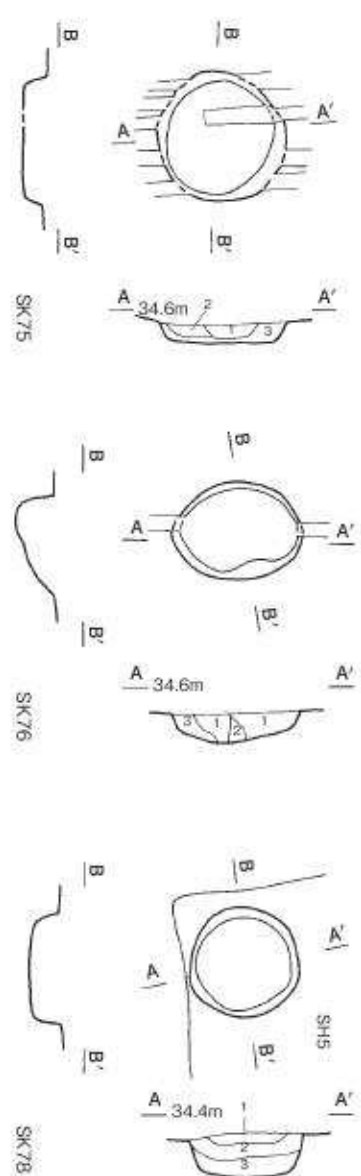
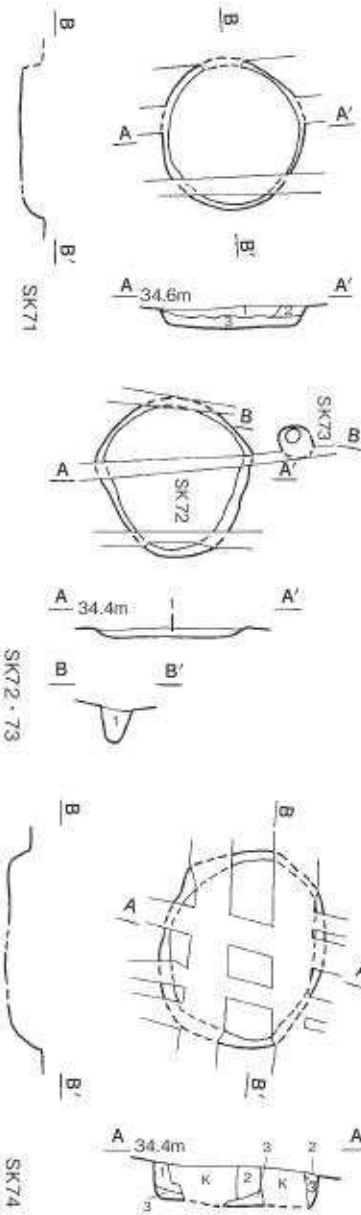
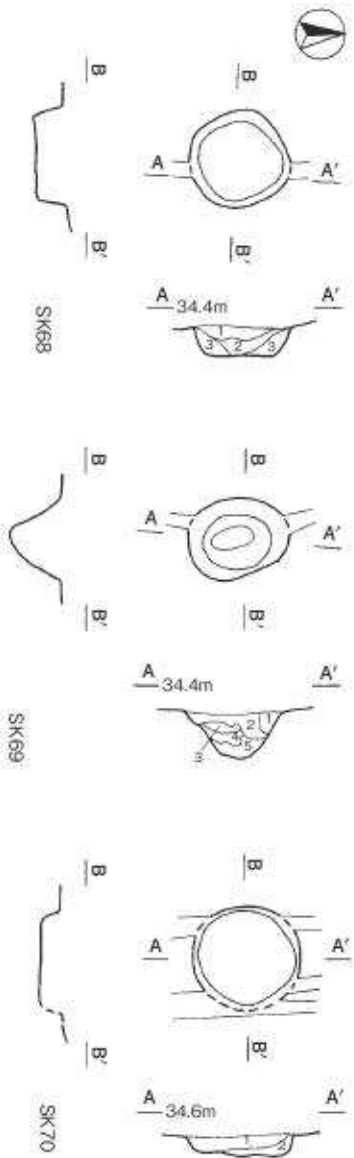
第 190 図 その他の土坑実測図 (2)



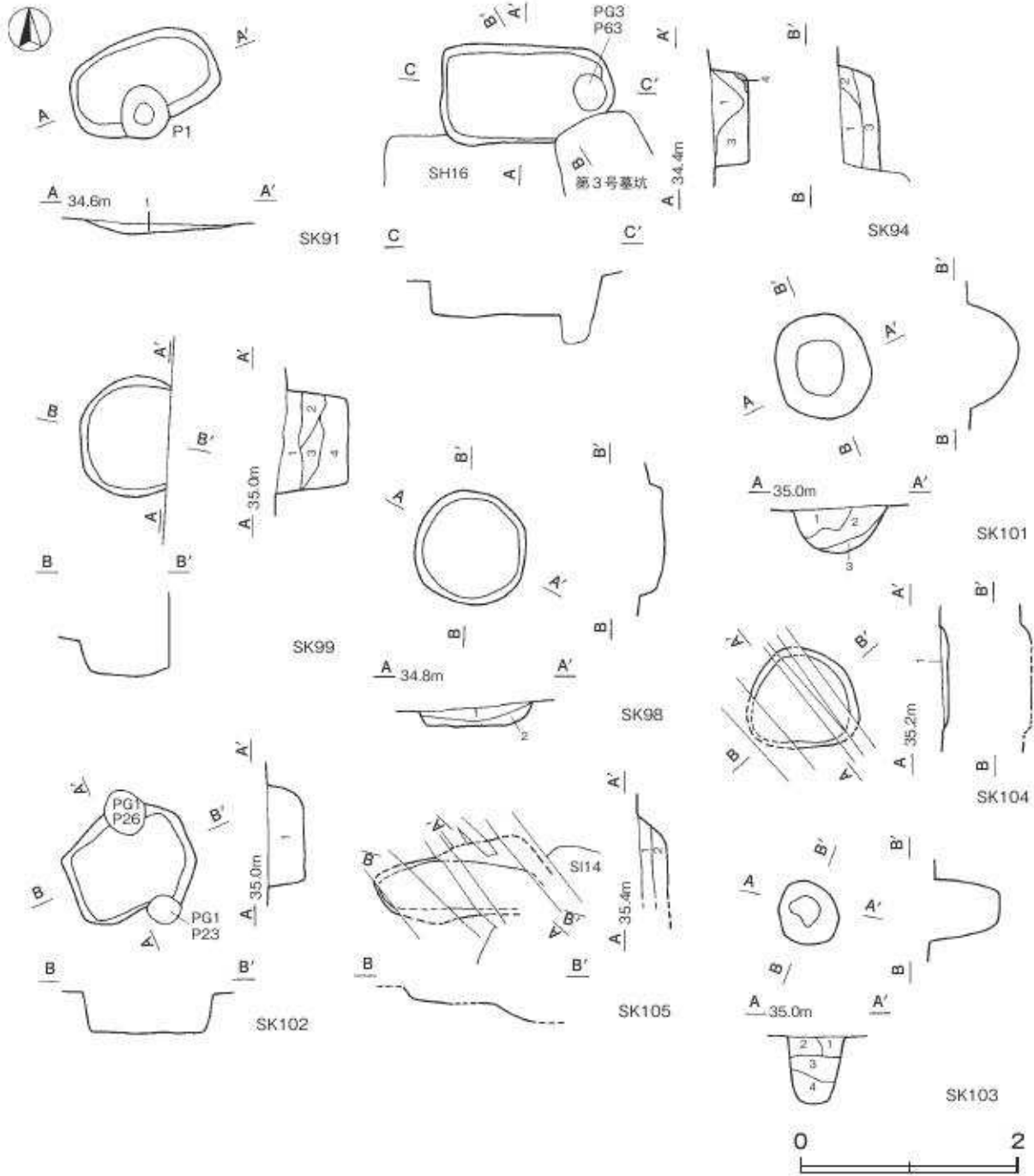
第 191 図 その他の土坑実測図 (3)



第 192 図 その他の土坑実測図 (4)



第193図 その他の土坑実測図(5)



第194図 その他の土坑実測図(6)

第3号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック多量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量 炭化粒子微量

第4号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック多量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量

第5号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック多量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量

第6号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

第7号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック多量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量

第8号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 7 褐色 ロームブロック中量

第9号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

第10号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子中量、ローム粒子微量

第13号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

第16号土坑土層解説

- 1 弱暗褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量

第17号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

第18号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック紐量

第19号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

第20号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第21号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第23号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

第25号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、鹿沼バミス粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック中量、鹿沼バミスブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック多量、鹿沼バミスブロック少量

第26号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量

第28号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量

第29号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

第30号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子多量

第31号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量

第32号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

第33号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量

第34号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第35号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 褐色 ローム粒子多量

第36号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ロームブロック多量

第37号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック多量、鹿沼バミスブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量、鹿沼バミスブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック中量、鹿沼バミス粒子少量

第38号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子多量

第40号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 弱暗褐色 ロームブロック少量

第42号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子多量

第46号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ロームブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子多量

第54号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第58号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子多量
- 3 褐色 ローム粒子多量、鹿沼バミス粒子少量
- 4 褐色 ロームブロック・鹿沼バミス粒子中量

第60号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

第61号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

第62号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量

第 63 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

第 67 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量

第 68 号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック中量
- 3 暗褐色 鹿沼バミス粒子少量

第 69 号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック・鹿沼バミス少量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、鹿沼バミスブロック微量
- 3 褐色 鹿沼バミスブロック中量、ロームブロック少量
- 4 暗褐色 鹿沼バミスブロック・ローム粒子少量
- 5 褐色 ロームブロック少量、鹿沼バミス粒子微量

第 70 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量

第 71 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

第 72 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量

第 73 号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量

第 74 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子多量

第 75 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量

第 76 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第 77 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・粘土粒子少量、鹿沼バミス粒子微量

第 78 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック微量

第 79 号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、鹿沼バミス粒子微量

第 80 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 鹿沼バミスブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック多量
- 3 褐色 ロームブロック中量

第 82 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量

第 91 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、鹿沼バミス粒子微量

第 94 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 2 黒褐色 鹿沼バミスブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・鹿沼バミスブロック少量
- 4 灰オリーブ色 粘土ブロック多量

第 98 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 極暗褐色 ロームブロック微量

第 99 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック中量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量

第 101 号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子多量

第 102 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

第 103 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、鹿沼バミス粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量

第 104 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

第 105 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

表 12 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
3	J 4b0	-	円形	1.26 × 1.20	30	平坦	傾斜	自然		
4	J 5h1	N-57°-E	隅丸長方形	2.35 × 1.70	30	平坦	外傾	人為		
5	J 4b0	N-38°-W	隅丸長方形	[2.36] × 0.96	16	平坦	傾斜	自然		
6	E 6j3	-	[円形]	1.04 × [1.04]	16	起伏	傾斜	自然		
7	J 4d0	-	円形	1.26 × 1.23	40	平坦	外傾・直立	人為		

番号	位置	長径方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				直径×規径 (m)	深さ (cm)					
8	I 4j8	N-6°-W	[隅丸方形・隅丸長方形]	1.20 × 0.80	27-60	凹凸	外傾・緩斜	人為		
9	K 3g9	-	[円形]	0.43 × [0.41]	23	平坦	外傾・緩斜	人為		
10	H 5e6	N-60°-E	[楕円形]	[1.30] × 0.92	24	平坦	緩斜	人為		
13	F 6d2	N-50°-W	長方形	2.08 × 0.81	34	平坦	外傾	人為	SH18 → 本跡	
16	F 6j3	N-56°-W	楕円形	1.00 × 0.90	22	皿状	緩斜	自然		
17	F 6c1	N-52°-E	[円形・楕円形]	0.95 × [0.75]	12-15	凹凸	緩斜	人為		本跡 → SK18
18	F 5c0	N-43°-E	隅丸長方形	[1.38] × 0.69	17-20	皿状	外傾	人為		SK17 → 本跡
19	F 5b0	N-49°-W	[楕円形]	[1.33] × 1.08	15	平坦	外傾・緩斜	人為		本跡 → SK21
20	F 6b1	N-53°-E	[楕円形]	[1.13] × 1.00	18	平坦	外傾・緩斜	人為		SH 3 → 本跡
21	F 5b0	N-30°-E	[円形・楕円形]	1.23 × [0.72]	21	平坦	直立・外傾	人為		SK19 → 本跡
23	F 6d2	N-49°-E	楕円形	0.86 × 0.72	28	平坦	外傾	人為		SH18 → 本跡
25	E 6b5	N-11°-W	[隅丸長方形]	1.90 × [1.28]	50	平坦	外傾	人為		
26	E 6a4	N-56°-E	楕円形	0.75 × 0.67	13	皿状	緩斜	人為		
28	E 6g4	N-14°-W	不定形	0.67 × 0.76	12-17	凹凸	直立・緩斜	人為		
29	E 6g3	N-64°-W	楕円形	0.72 × 0.67	9-55	平坦	外傾	人為		
30	E 6g3	N-37°-W	楕円形	0.77 × 0.70	10-20	平坦	直立・外傾	自然		
31	D 6f6	N-59°-E	隅丸長方形	1.50 × 1.08	20	平坦	外傾	人為		
32	D 6g6	-	円形	1.10 × 1.05	20	平坦	外傾	自然		
33	D 6b6	N-70°-E	[円形・楕円形]	1.19 × [0.69]	25	平坦	外傾・緩斜	人為		
34	F 5i0	N-53°-E	[楕円形]	[0.62] × 0.42	21-30	凹凸	外傾	人為		SH15 → 本跡
35	F 6e1	N-40°-E	[楕円形]	[1.33] × 1.08	28	皿状	外傾	人為		SD11 → 本跡
36	D 6c6	N-22°-E	不整形円形	1.18 × 0.90	20	平坦	緩斜	自然		
37	D 6b6	N-66°-E	[長方形]	[1.50] × 1.14	37-42	平坦	外傾	人為		
38	F 5g0	N-39°-W	[方形]	[0.95] × 0.93	21-23	平坦	外傾	人為		
40	C 6f8	-	円形	0.89 × 0.86	24	皿状	直立・外傾	人為		
42	C 6e8	N-38°-E	楕円形	0.49 × 0.39	32	平坦	直立	人為		
46	C 6g7	N-20°-E	[楕円形]	1.02 × [0.66]	38	平坦	外傾	人為		
54	C 6e8	N-88°-E	[長方形]	[0.82] × 0.46	70	平坦	直立	人為		
58	C 6b0	N-28°-E	[楕円形]	1.86 × [1.64]	26	平坦	直立	人為		
60	C 6i7	N-83°-W	[楕円形]	[0.83] × 0.78	12	平坦	緩斜	人為		
61	C 6j6	N-14°-E	[楕円形]	0.86 × [0.74]	18	平坦	外傾	人為		SK111 → 本跡
62	D 6a6	N-2°-W	楕円形	0.82 × 0.68	12	平坦	外傾	人為		
63	C 6e9	-	[円形]	0.86 × [0.80]	50	平坦	直立	人為		SK50 → 本跡
67	D 6f6	N-75°-E	楕円形	1.28 × 1.08	24	平坦	外傾	人為		SH17 → 本跡 PG 2 上新田不明
68	D 6d7	-	円形	0.74 × 0.74	24	平坦	外傾	人為		
69	D 6e6	N-21°-W	楕円形	0.80 × 0.62	40	皿状	外傾・緩斜	人為		
70	D 6b8	-	[円形]	0.86 × [0.85]	13-17	平坦	直立	人為		
71	C 6g8	-	円形	1.18 × 1.14	19	平坦	外傾	人為		
72	C 6e9	-	円形	1.19 × 1.15	9	平坦	緩斜	人為		
73	C 6b9	N-40°-E	楕円形	[0.32] × 0.25	28	平坦	直立・外傾	人為		
74	C 6b0	N-78°-W	楕円形	1.58 × 1.30	29	平坦	外傾	人為		
75	C 6g9	-	円形	1.04 × 1.01	16-18	平坦	外傾	人為		
76	D 6c7	N-1°-W	楕円形	1.02 × 0.80	32	皿状	直立・緩斜	人為		
77	E 6b4	-	円形	0.70 × 0.70	18	皿状	外傾・緩斜	人為		SH 6 → 本跡
78	E 6b5	-	円形	0.88 × 0.87	23-25	平坦	外傾	人為		SH 5 → 本跡
79	E 6c4	-	円形	0.93 × 0.88	27	平坦	外傾・緩斜	人為		SH 9 → 本跡 PG 3 上新田不明

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(古→新)
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
80	D 6 d7	N-25°-W	楕円形	0.72 × 0.66	37	平坦	直立	人為		
82	B 7 j2	N-3°-E	不整楕円形	0.90 × 0.48	86-92	凹凸・重積	直立	人為		
91	E 6 e4	N-67°-E	隅丸長方形	1.39 × 0.80	10	平坦	緩斜	人為		
94	E 6 d4	N-88°-W	楕円形	1.60 × 0.92	34	平坦	直立・外傾	人為		SH16→本跡→ 第3号墓坑 PG.3と新旧不明
98	E 6 g2	-	円形	1.06 × 1.05	22	平坦	外傾	人為		
99	E 6 g4	-	[円形]	1.10 × (0.80)	37-49	平坦	直立・外傾	人為		
101	F 6 a3	N-0°	楕円形	0.96 × 0.87	45	平坦	外傾・緩斜	人為		
102	E 6 j1	N-68°-E	楕円形	1.16 × 0.98	38	平坦	外傾	人為		本跡→PG.1
103	E 6 h1	N-40°-W	楕円形	0.60 × 0.52	62	平坦	外傾	人為		
104	F 6 c1	-	[円形]	[1.02] × 0.96	8	平坦	緩斜	自然		
105	F 5 j8	N-73°-E	[楕円形]	[1.57] × 0.78	32	平坦	緩斜	人為		SH4→本跡

(4) 溝跡

第8号溝跡 (第195図・付図)

位置 調査区南部のJ 4 g9～J 4 j4区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

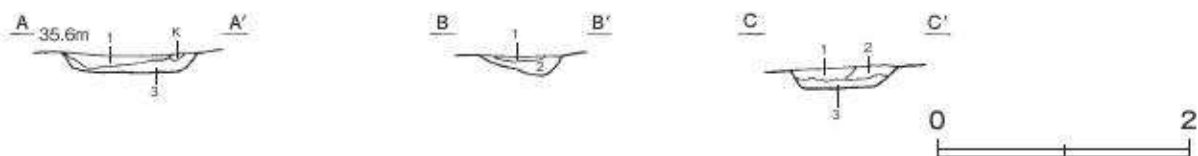
規模と形状 確認できない部分があったため、南西端部から北東端部までの長さ25.6mしか確認できなかった。J 4 j4区から北東方向(N-58°-E)に直線的に延びており、上幅52～110cm、下幅32～86cm、深さ12～16cmである。底面は平坦で、確認できた範囲では中央部が高く、両端の北東部と南西部で低くなっており、高低差は12cmほどである。断面は逆台形状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土 3層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色、ローム粒子微量、炭化粒子極微量
2 黒褐色、ロームブロック少量
3 暗褐色、ロームブロック少量

所見 第1号道路跡と12～15mの間隔で並行して並行して走っているが、関連や性格については不明である。



第195図 第8号溝跡実測図

第9号溝跡 (第196図・付図)

位置 調査区中央部のG 5 j5～H 5 b7区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第10号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 南東部と北西部が調査区域外まで延びているため、長さは11.70mしか確認できなかった。H 5 b7区から北西方向(N-45°-W)に直線的に延びており、上幅80～150m、下幅26～46m、深さ16～30cmである。底面は平坦で、確認できた範囲での高低差はみられない。断面はU字状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

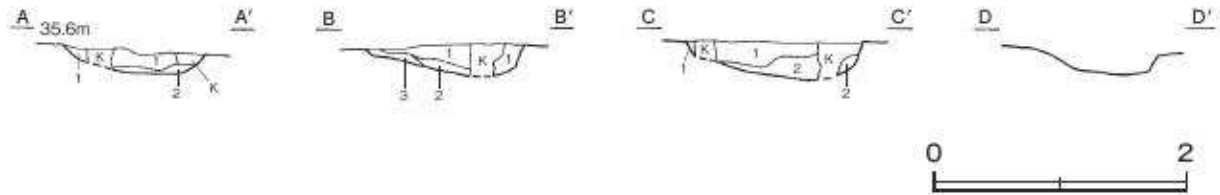
覆土 3層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------|------|-----------|
| 1 黒色 | ローム粒子微量 | 3 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 褐灰色 | ローム粒子少量 | | |

遺物出土状況 混入した縄文土器片13点、土師器片15点、須恵器片10点、石器2点、破断面のある礫1点、自然礫2点が出土している。

所見 時期、性格ともに不明である。



第196図 第9号溝跡実測図

第10号溝跡 (第197図・付図)

位置 調査区中央部のG5j8～H5a6区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第9号溝跡に掘り込まれている。

規模と形状 北東部が調査区域外まで延びているため、長さは10.02mしか確認できなかった。H5a6区から北東方向(N-55°-E)に直線的に延びており、上幅132～146cm、下幅82～124cm、深さ26～36cmである。底面は平坦で、確認できた範囲での高低差はみられない。断面は逆台形状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

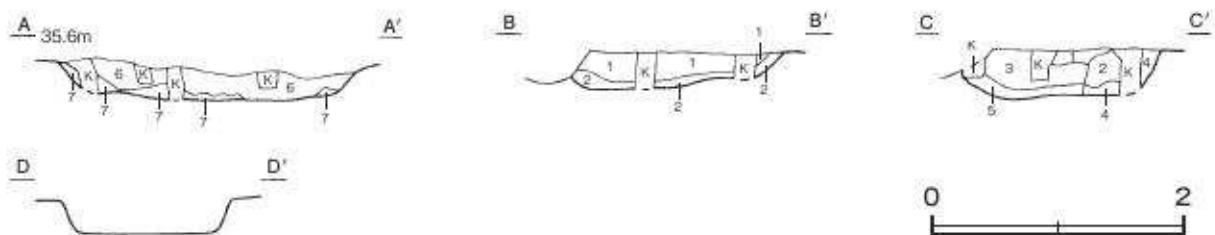
覆土 7層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|--------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 6 灰黄褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 褐色 | ローム粒子中量 | | |

遺物出土状況 混入した弥生土器片3点、土師器片17点、須恵器片2点、鉄滓2点、粘土塊1点が出土している。

所見 時期、性格ともに不明である。



第197図 第10号溝跡実測図

第11号溝跡 (第198図・付図)

位置 調査区中央部のF6d1～F6f2区、標高35mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第20号竪穴建物跡を掘り込み、第35号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南東部が調査区域外まで延びているため、長さは9.03 mしか確認できなかった。F 6 d1 区から北西方向 (N - 13° - W) に直線的に延びており、上幅 65 ~ 96cm, 下幅 47 ~ 60cm, 深さ 10 ~ 22cmである。底面は平坦で、確認できた範囲での高低差は見られない。断面はU字状で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

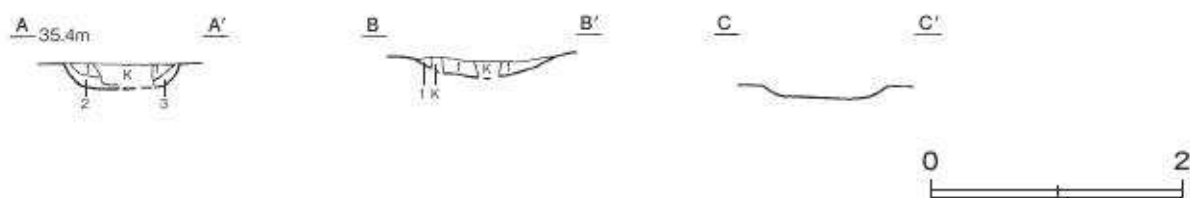
覆土 3層に分層できる。周囲から土砂が流入した堆積状況を示していることから、自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 極暗褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 土師質土器片 2点 (内耳鍋), 陶器片 1点 (碗類), 金属製品 1点 (煙管) のほか、縄文土器片 2点, 弥生土器片 6点, 土師器片 31点, 須恵器片 5点が出土している。いずれも細片で、図示できなかった。

所見 時期は、出土遺物から江戸時代以降と考えられ、公園に掲載されている字境とほぼ一致していることから、区画溝の可能性はある。



第 198 図 第 11 号溝跡実測図

表 13 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
8	J 4 g9 - J 4 j4	N - 58° - E	直線	(25.6)	0.52 - 1.10	0.32 - 0.86	12 - 16	池台形	緩斜	自然		
9	G 5 j5 - H 5 b7	N - 45° - W	直線	(11.70)	0.80 - 1.50	0.26 - 0.96	16 - 30	U字状	緩斜	自然	土師質土器	SD10 → 本跡
10	G 5 j8 - H 5 a6	N - 55° - E	直線	(10.02)	1.32 - 1.46	0.82 - 1.24	26 - 36	池台形	緩斜	自然		本跡 → SD 9
11	F 6 d1 - F 6 e2	N - 13° - W	直線	(9.03)	0.65 - 0.96	0.47 - 0.60	10 - 22	U字状	緩斜	自然	土師質土器、陶器	SI20 → 本跡 → SK35

(5) ビット群

ビット群 3 か所は、中世の遺構が集中する区域で確認した。建物跡を想定できる柱穴の配置が認められないので、ビット群として以下に掲載する。

第 1 号ビット群 (第 199・200 図)

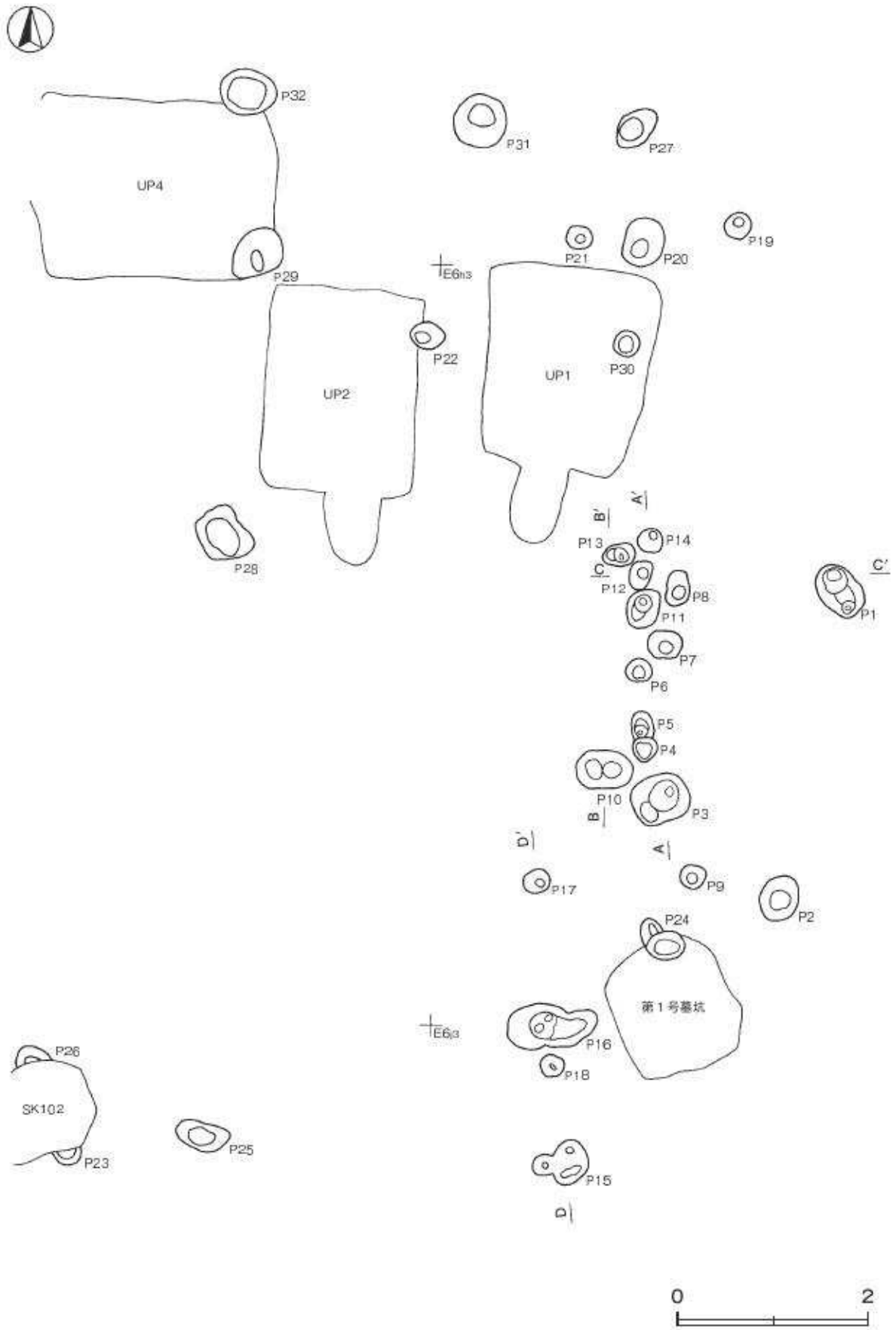
位置 調査区中央部の E 6 g2 ~ E 6 j3 区、標高 35 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 1・2・4 号地下式坑、第 1 号墓坑を掘り込み、第 102 号土坑に掘り込まれている。

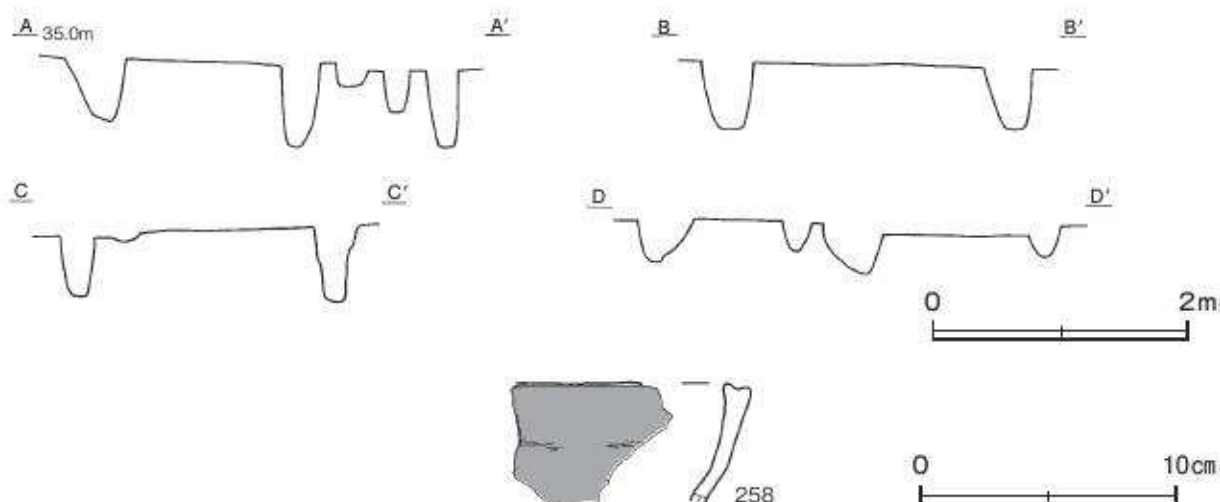
規模と形状 ビット 32 か所が東西 8.8 m, 南北 11.6 m の範囲に位置している。各ビットは長径 25 ~ 95cm, 短径は 23 ~ 55cm の円形または楕円形で、深さは 15 ~ 65cm である。

遺物出土状況 土師質土器片 3点 (内耳鍋) のほか、弥生土器片 1点, 須恵器片 1点も出土している。258 は P 26 の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物と重複関係から中世以降と考えられる。第 1 ~ 4 号地下式坑や第 1 号墓坑の周囲にもビットが確認できたことから関連も考えられるが、明らかではない。



第199図 第1号ピット群実測図



第200図 第1号ピット群・出土遺物実測図

ピット計測表

ピット 番号	規模 (cm)			ピット 番号	規模 (cm)			ピット 番号	規模 (cm)		
	長径 (軸)	短径 (軸)	深さ		長径 (軸)	短径 (軸)	深さ		長径 (軸)	短径 (軸)	深さ
1	60	40	37-59	12	34	24	50	23	32	(16)	15
2	51	41	55	13	35	25	52	24	40	28	40
3	60	50	50	14	27	24	62	25	58	30	41
4	26	25	20	15	58	45	34	26	36	(16)	20
5	(27)	23	50	16	95	47	42	27	52	35	45
6	26	25	46	17	28	24	25	28	60	48	60
7	36	29	65	18	25	23	24	29	62	26	47
8	38	24	25	19	28	26	30	30	30	28	30
9	29	25	16	20	52	42	58	31	55	55	45
10	59	40	56	21	28	23	51	32	60	36	61
11	44	35	47	22	38	28	47				

第1号ピット群出土遺物観察表 (第200図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
258	土師質土器	内耳鍋	-	(4.7)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部沈線および條付着 口縁部ナデ	P26 覆土中	10%

第2号ピット群 (第201図)

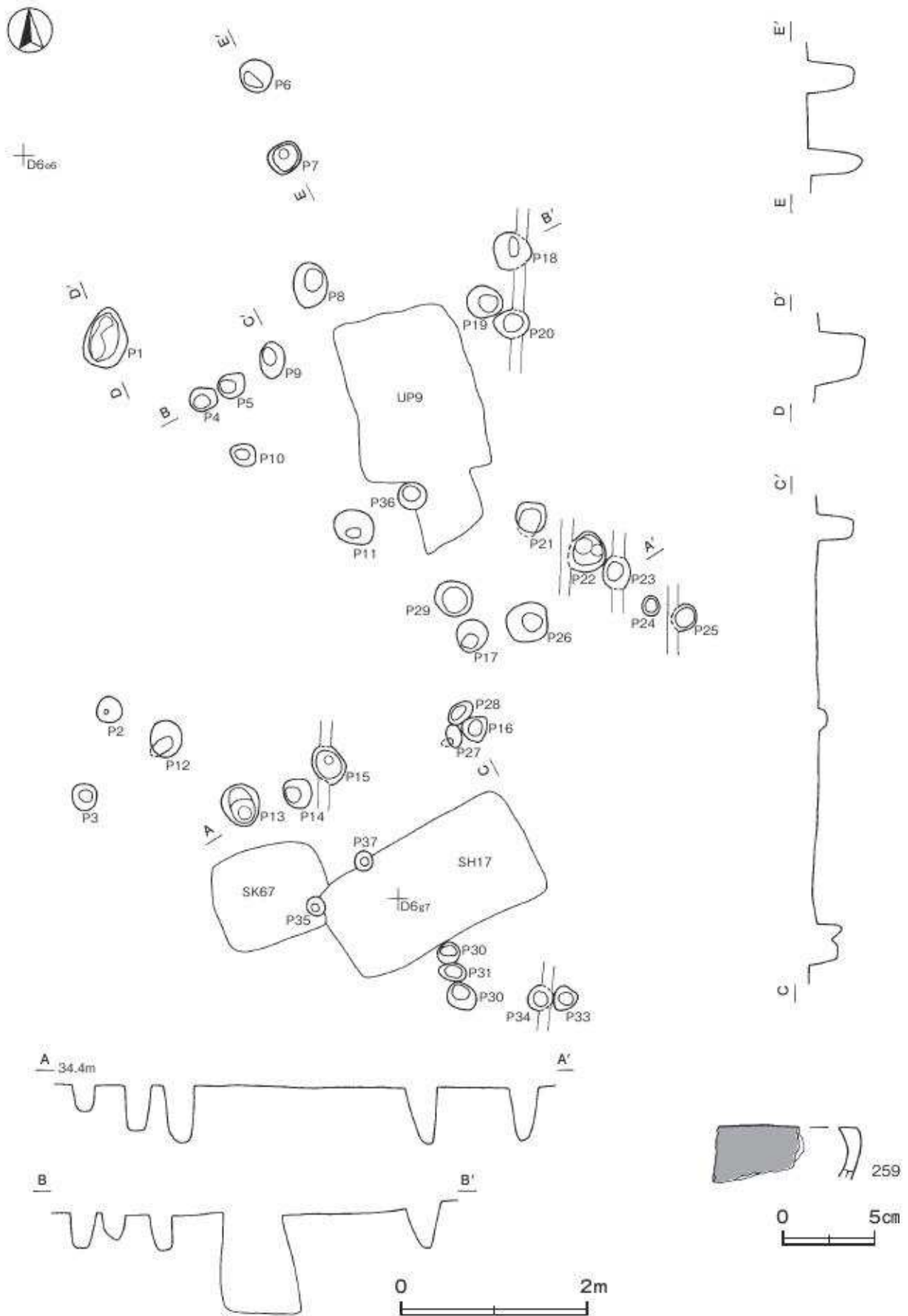
位置 調査区中央部のD 6 d6～D 6 g7区、標高34mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第17号堅穴遺構、第9号地下式坑、第67号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 ピット37か所が東西6.7m、南北120mの範囲に位置している。各ピットは長径19～66cm、短径17～45cmの円形または楕円形で、深さは25～69cmである。

遺物出土状況 土師質土器片2点(内耳鍋)のほか、縄文土器片6点、破断面のある礫1点も出土している。259はP 23の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土遺物と重複関係から中世以降と考えられる。第17号堅穴遺構、第9号地下式坑の周囲にもピットが確認できたことから関連も考えられるが、明らかではない。



第201図 第2号ピット群・出土遺物実測図

ピット計測表

ピット 番号	規 模 (cm)			ピット 番号	規 模 (cm)			ピット 番号	規 模 (cm)		
	長径 (軸)	短径 (軸)	深さ		長径 (軸)	短径 (軸)	深さ		長径 (軸)	短径 (軸)	深さ
1	66	45	57	14	34	31	51	27	25	17	52
2	27	26	57	15	42	34	60	28	32	19	39
3	29	29	27	16	31	26	32	29	42	39	69
4	30	25	37	17	35	33	49	30	33	28	46
5	27	26	25	18	41	40	44	31	28	20	40
6	35	34	50	19	40	35	26	32	23	23	42
7	35	30	58	20	38	31	32	33	26	25	26
8	49	36	60	21	33	33	66	34	26	26	31
9	39	26	40	22	43	41	43-45	35	20	18	33
10	27	24	36	23	(36)	29	51	36	30	29	51
11	43	38	40	24	19	17	52	37	22	20	25
12	40	35	55	25	30	25	35				
13	44	40	29	26	48	43	65				

第2号ピット群出土遺物観察表 (第201図)

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手法の符数はか	出土位置	備 考
259	土師質土器	内耳鍋	—	(31)	—	長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁部ナデ 外面煤付着	P23 覆土中	10%

第3号ピット群 (第202図)

位置 調査区中央部のE 6 b3～E 6 f2区、標高34 mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2・4・6・7～14・16号竪穴遺構、第6号粘土貼土坑を掘り込み、第79・85・94号土坑、第3号墓坑に掘り込まれている。

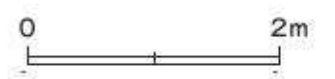
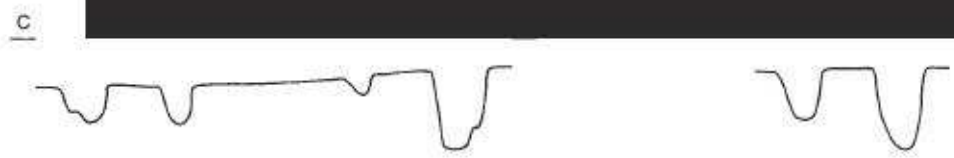
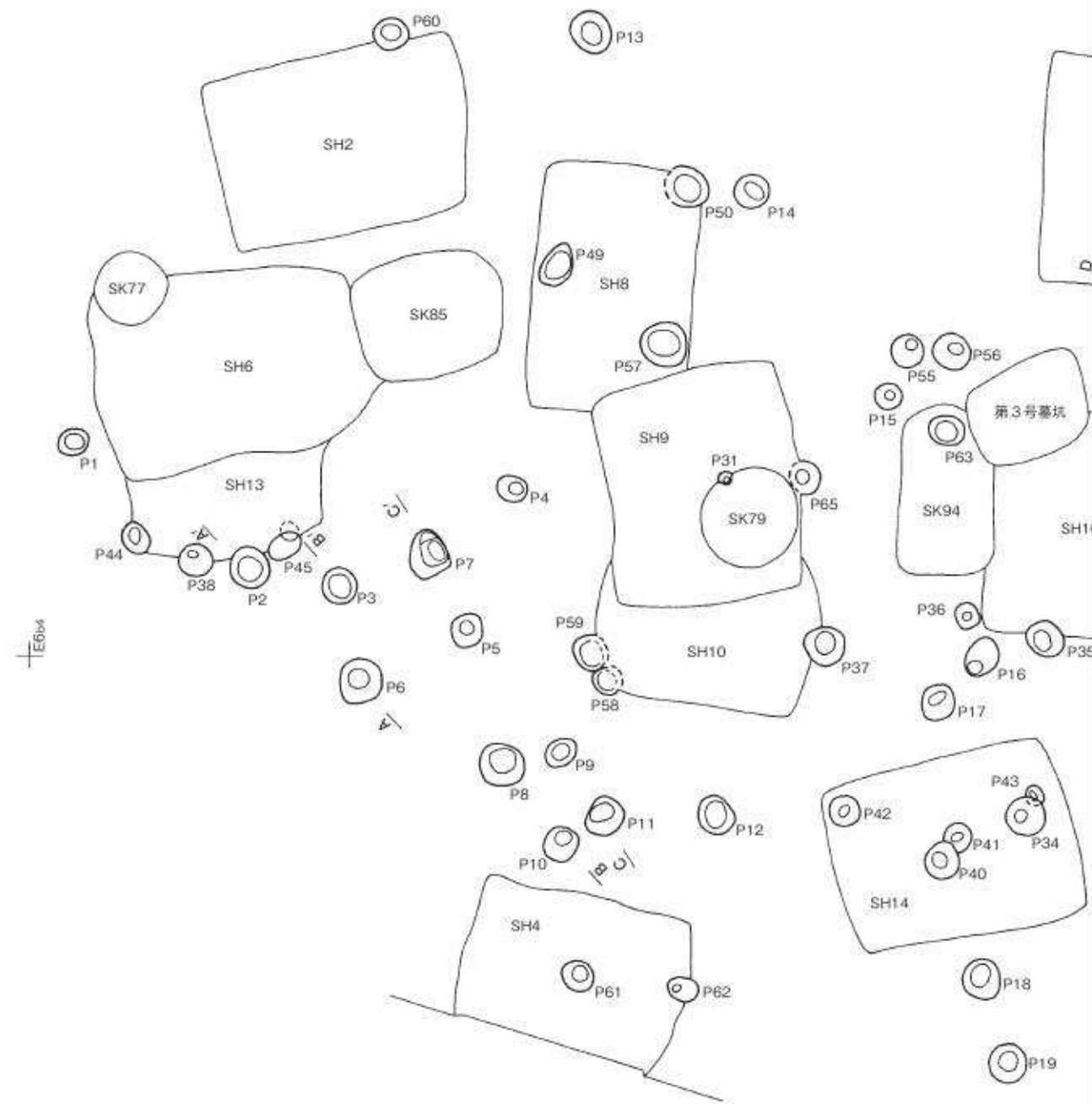
規模と形状 ピット65か所が東西10.0 m、南北14.5 mの範囲に位置している。各ピットは長径15～52cm、短径は15～42cmの円形または楕円形で、深さは10～66cmである。

遺物出土状況 土師質土器片2点(内耳鍋)のほか、破断面のある礫1点も出土している。土師質土器片は細片のため図示できなかった。

所見 時期は、出土遺物と重複関係から中世以降と考えられる。第2・4・6・7～14・16号竪穴遺構、第3号墓坑、第6号粘土貼土坑の周囲にもピットが確認できたことから関連も考えられるが、明らかではない。

ピット計測表

ピット 番号	規 模 (cm)			ピット 番号	規 模 (cm)			ピット 番号	規 模 (cm)		
	長径 (軸)	短径 (軸)	深さ		長径 (軸)	短径 (軸)	深さ		長径 (軸)	短径 (軸)	深さ
1	32	27	14	9	31	25	29	17	37	30	53
2	40	38	47	10	36	31	56	18	34	31	47
3	35	33	37	11	38	36	30	19	39	34	55
4	29	25	38	12	35	33	30	20	35	36	32
5	34	29	24	13	35	33	49	21	24	22	38
6	46	40	40	14	44	38	28	22	37	37	66
7	47	38	63	15	33	32	38	23	35	31	42
8	45	42	45	16	26	25	40	24	37	29	58



第202図 第3号ピット群実測図

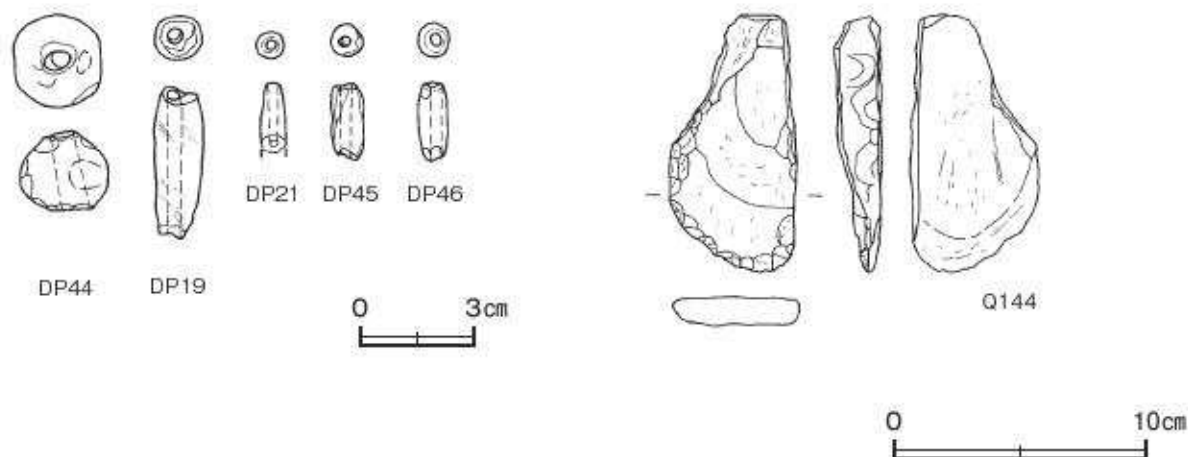
ピット 番号	規 模 (cm)			ピット 番号	規 模 (cm)			ピット 番号	規 模 (cm)		
	長径(軸)	短径(軸)	深さ		長径(軸)	短径(軸)	深さ		長径(軸)	短径(軸)	深さ
25	38	33	45	39	44	33	49	53	31	24	35
26	30	26	15	40	35	32	60	54	39	30	43
27	50	41	45	41	27	27	55	55	33	29	52
28	41	(31)	46	42	32	28	53	56	38	31	33
29	47	41	65	43	(19)	15	45	57	41	40	44
30	43	38	60	44	32	25	33	58	27	(16)	28
31	15	15	59	45	36	22	38	59	36	(21)	18
32	31	30	42	46	39	36	35	60	31	30	65
33	40	38	42	47	52	39	66	61	31	29	18
34	38	35	34	48	24	21	50	62	17	14	10
35	39	34	21	49	42	28	36	63	33	30	62
36	24	23	38	50	42	36	38	64	27	(6)	24
37	39	38	17	51	30	29	24	65	30	30	65
38	32	30	47	52	46	31	35				

表 14 ピット群一覧表

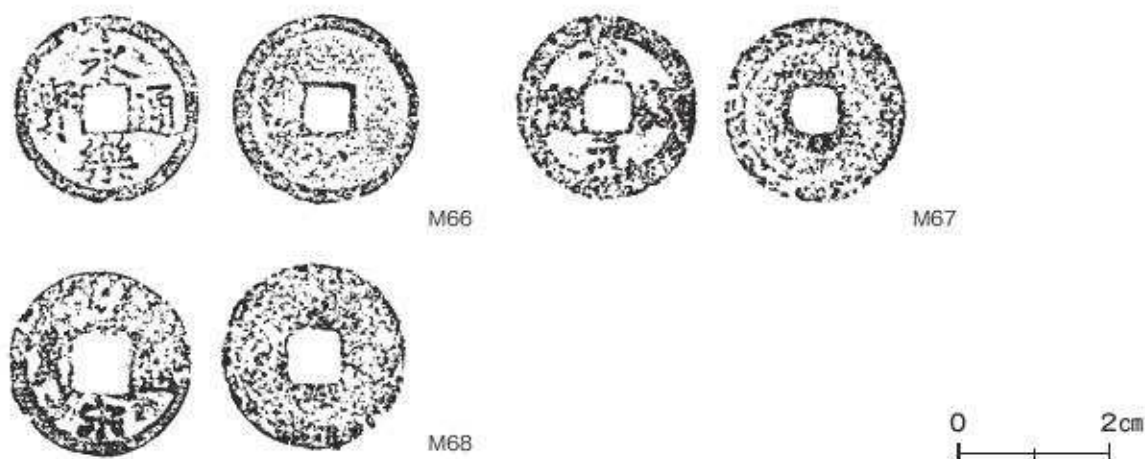
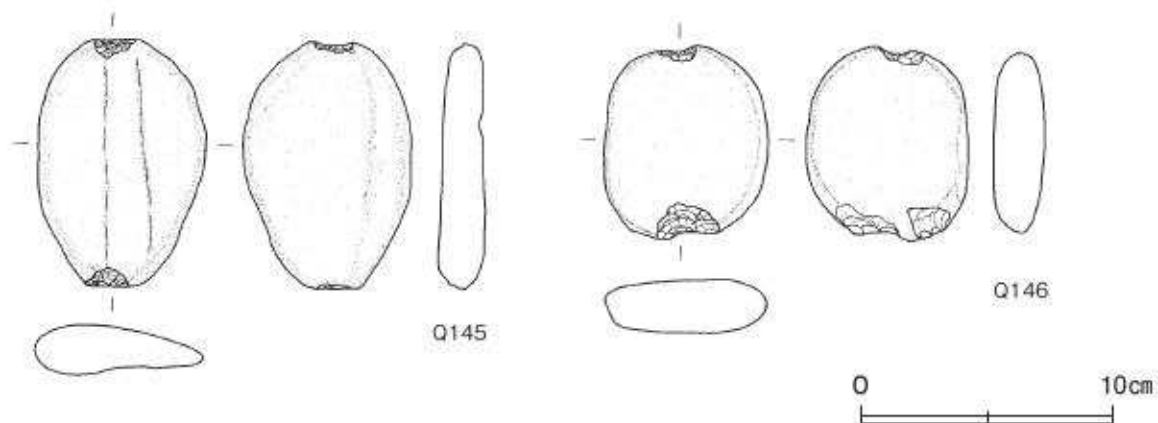
番号	位 置	柱 穴 (cm)					主な出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
		柱穴	平面形	長径(軸)	短径(軸)	深さ		
1	E6g2 - E6j3	32	円形・楕円形	25 - 95	23 - 55	15 - 65	土師質土器	UPI・2・3、第1号墓坑→本跡→SK102
2	D6d6 - D6g7	37	円形・楕円形	19 - 66	17 - 45	25 - 69	土師質土器	SH17、DP・9、SK67→本跡
3	E6b3 - E6f2	65	円形・楕円形	15 - 52	15 - 42	10 - 66	土師質土器	SH2・4・b・7 - 14・16、SN・6→本跡、SK79・85・94、第3号墓坑

(6) 遺構外出土遺物 (第 203・204 図)

遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第 203 図 遺構外出土遺物実測図 (1)



第 204 図 遺構外出土遺物実測図 (2)

遺構外出土遺物観察表 (第 203・204 図)

番号	器種	径	厚さ (長さ)	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP44	土玉	35	3.1	1.0	37.8	長石	にぶい黄褐色	一方向からの穿孔、ナデ	SF 2	
DP19	管状土鉢	13	4.0	0.4	5.9	長石・石英	にぶい褐色	一方向からの穿孔、ナデ	SI11	PL37
DP21	管状土鉢	07	(1.8)	0.3	(0.9)	石英	にぶい黄褐色	一方向からの穿孔、ナデ	SI15	
DP45	管状土鉢	13	3.1	0.4	4.8	長石・石英	灰褐色	一方向からの穿孔、ナデ	SKY04	
DP46	管状土鉢	14	3.1	0.5	4.8	長石・石英・雲母	黒褐色	一方向からの穿孔、ナデ	表土	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q144	打製石斧	102	5.1	1.9	111.6	頁岩	片面打欠調整 片面研磨調整	SI26	
Q145	石鉢	9.8	6.7	2.0	176.2	砂岩	長径方向に抉り調整	SI26	
Q146	石鉢	7.7	6.5	2.1	151.1	砂岩	長径方向に抉り調整	SI26	

番号	銭種	径	孔径	厚さ	重さ	初铸年	材質	特徴	出土位置	備考
M66	水滸通寶	2.52	0.62	0.12	3.30	1408	銅	真書	表土	
M67	崇寧元寶	2.46	0.63	0.16	3.18	1004	銅	真書	表土	
M68	皇宋通寶	2.45	0.70	0.17	3.18	1038	銅	真書	SI18	

第4節 ま と め

1 はじめに

今回の調査で、竪穴建物跡 26 棟（縄文時代 2・弥生時代 13・古墳時代 1・奈良時代 9・時期不明 1）、土坑 88 基（縄文時代 23・中世 3・時期不明 62）、竪穴遺構 17 基（室町時代）、地下式坑 9 基（室町時代）、井戸跡 1 基（室町時代）、墓坑 3 基（室町時代）、粘土貼土坑 7 基（室町時代）、道路跡 2 条（江戸時代）等を確認した。その結果、縄文時代中期から集落が形成され、江戸時代に至るまでの先人の営みの一部が明らかになった。ここでは、当遺跡の主な遺構や遺物について若干の考察を加え、まとめとしたい。

2 縄文時代

縄文時代の主な遺構は、竪穴建物跡と袋状土坑である。これらの遺構と出土遺物から縄文時代の集落の様相について考えてみたい。

(1) 袋状土坑の時期と集落について

ア 出土土器の編年

袋状土坑は、出土土器の様相から中期後葉の加曾利 E I 式期を中心としていることが確認できた。阿玉台式期後半の様相が見られる個体や大木式の文様構成が見られる個体なども散見され、加曾利 E I 式期と関連する土器や後期の称名寺式や堀之内式土器なども見られる。ここでは、加曾利 E I 式期の土器を先学の編年¹⁾と照らし合わせ、区分と考察を行うことにする。

① 第 1 期（加曾利 E I 式 古段階）（第 205・206 図）

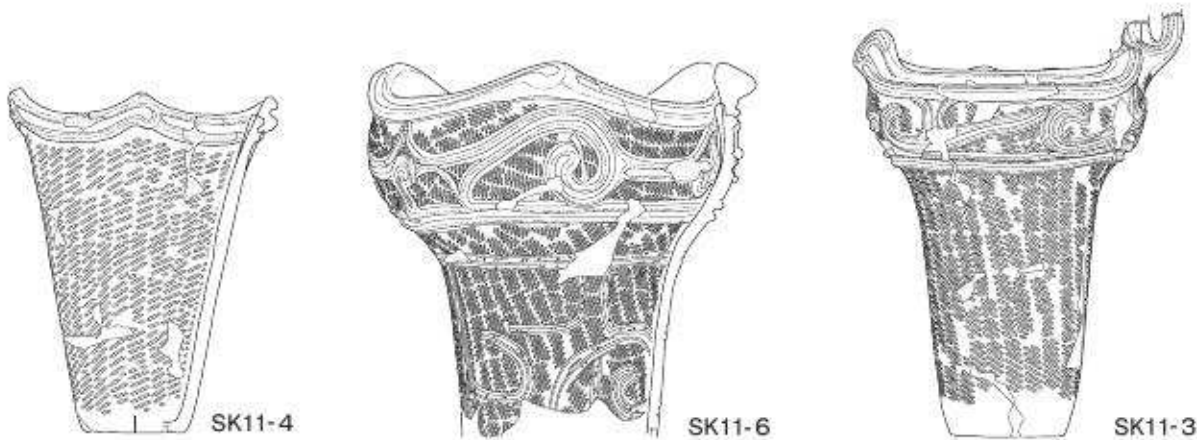
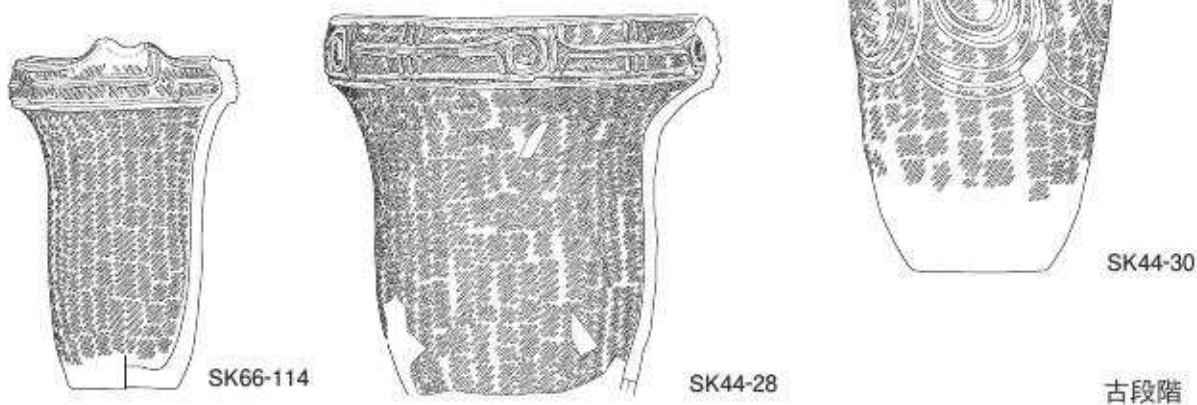
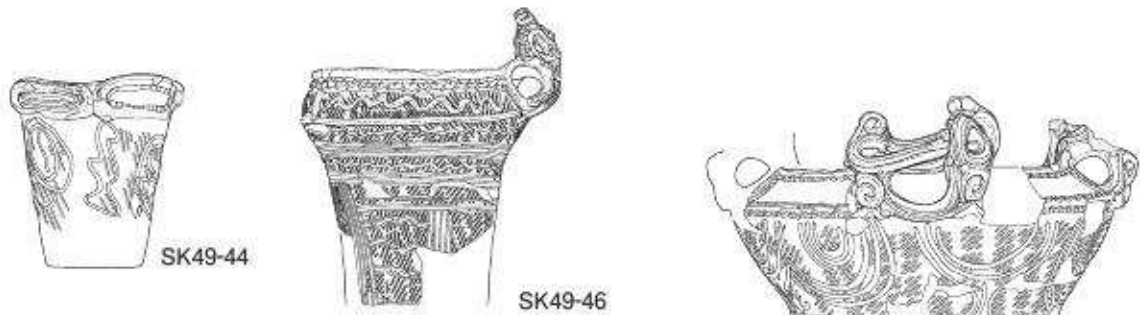
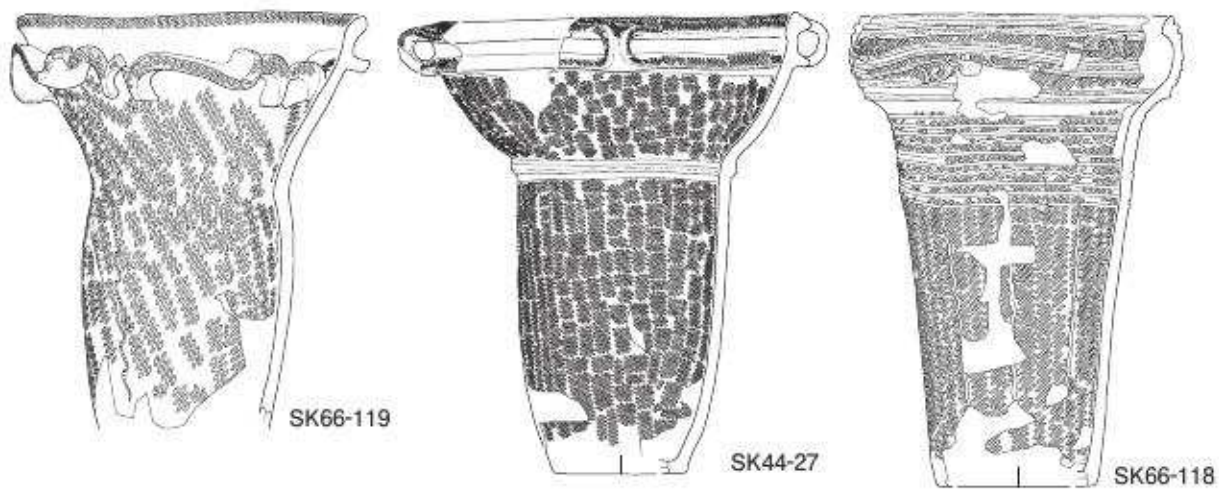
この時期の土器の文様の特徴としては、中空の把手が目立ち、口縁部に横 S 字状文やクランク状文の隆帯が貼り付けられている。この隆帯は細く、地文の縄文の上に貼り付けただけのものである。また、細い隆帯で描出された文様を持つ個体もある。口縁を 4 単位の波状口縁とし、把手を作出することも特徴的である。頸部に無文帯を持つ土器も見られ、胴部に 2 条から 3 条の沈線を垂下させたり、山形文や波状文が施された土器も出現する。

この時期には、第 44・49・66 号土坑出土の土器群が当てはまる。30・46 には中空の把手が付いており、28・114 は細い隆帯で横 S 字状文やクランク状文が施されている。また、27・30・46 は口縁部から胴部を 3 単位に分ける文様構成で形作られており、大木式土器の影響が見られる。

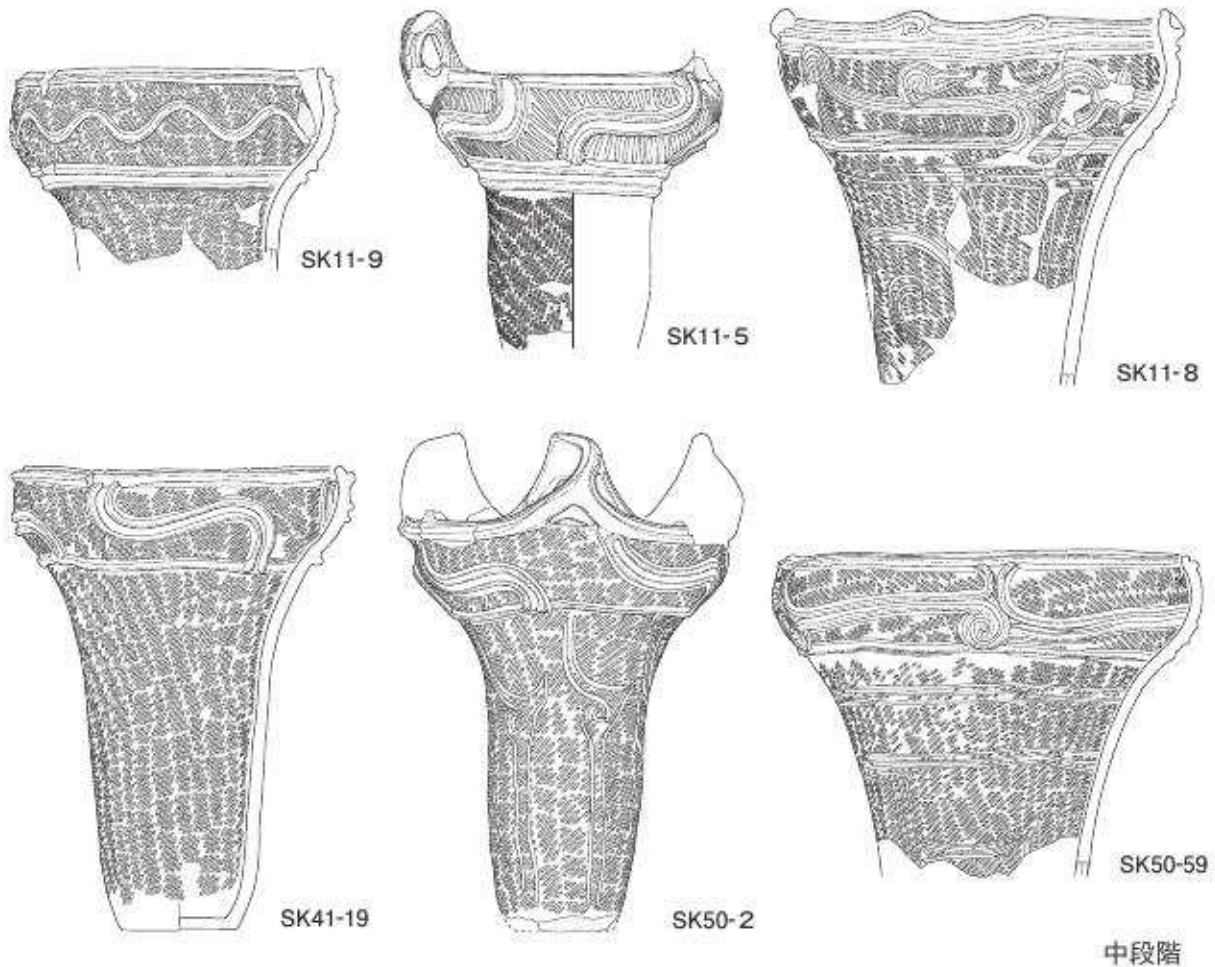
② 第 2 期（加曾利 E I 式 中段階）

前段階に見られた口縁部の形態は、幾分簡素化し、突出の少ない波状口縁へと変化が見られる。また、隆帯で描出される文様はクランク状文や波状文が主流となり、隆帯の先端が渦巻状へと変化を見せている。隆帯を貼り付けた後に隆帯に沿う沈線を施したり、貼付けた隆帯上に沈線を施したりする文様も見られる。この渦巻文は、隆帯とその両側に沿う沈線で描かれることが多く、横位の S 字文を配するようになる。口唇部に沈線を巡らせ、波頂部で渦を巻くように描出する文様も見られる。頸部に無文帯を持つ個体も継続して存在している。

この時期には、第 11・41・50 号土坑出土の土器群が当てはまる。4 は突出の少ない波状口縁で、口



第 205 図 加曾利 E I 式土器集成図 (1) (S = 1 / 6)



第206図 加曾利E I式土器集成図(2) (S=1/6)

唇部には波頂部で渦を巻く沈線が施されている。前段階より太い隆帯には沈線が沿い、3・6は渦巻文や横S字文が描出されている。59は、口縁部に縦位の短い隆帯で上下の区画と連繋する文様が施されており、2・19には、沈線が沿う2条の隆帯によってクランク文が施されている。

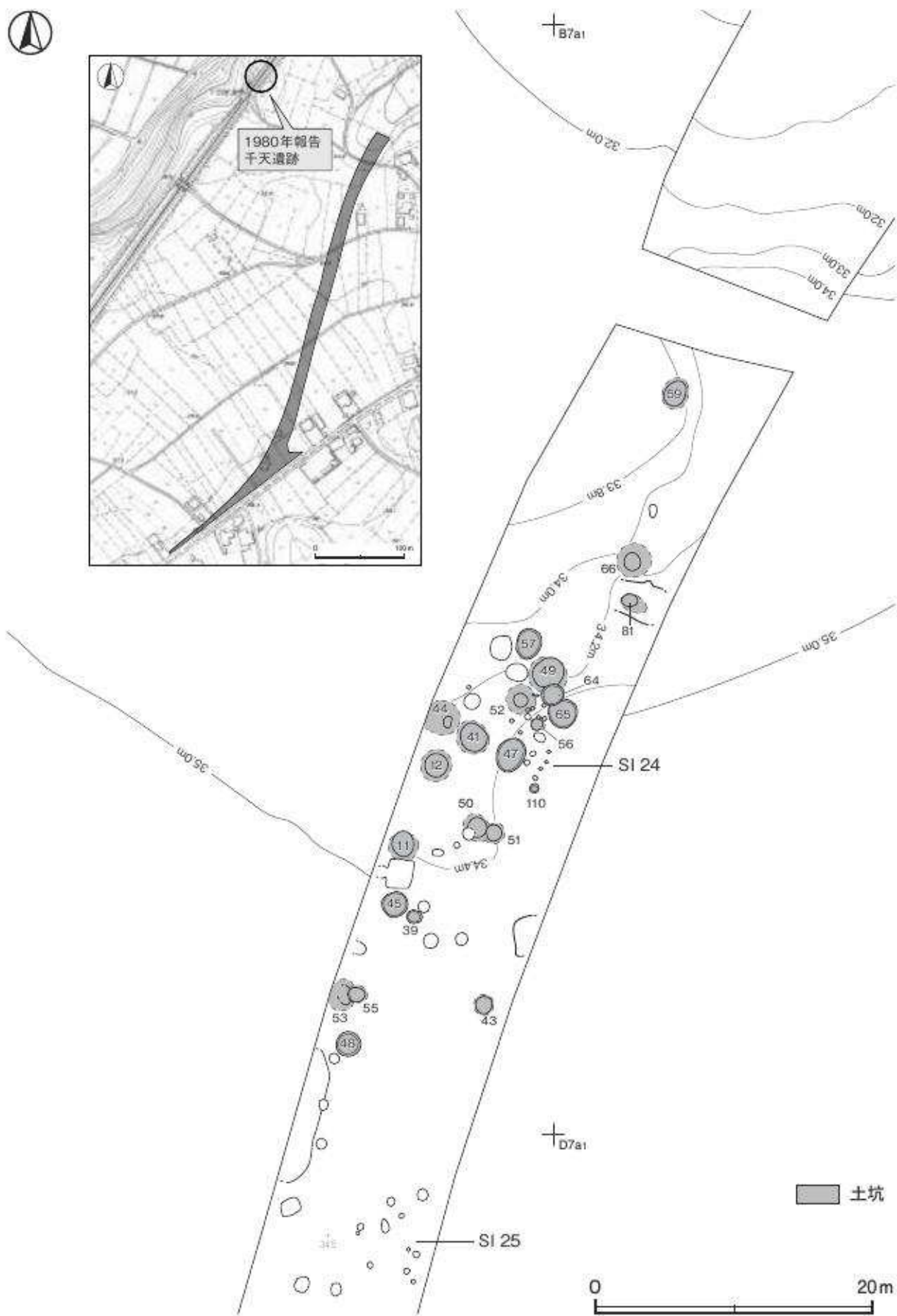
③ 第3期(加曾利E I式 新段階)

この段階になると、口縁部の文様帯が狭くなり、前段階で派生した隆帯先端の渦巻文が肥大化する。また、渦巻文と区画文を交互に配する文様が登場し、沈線が沿う2本の隆帯によって描出されることが通例となる。横位のS字文に剣先文が付され、沈線を沿わせた隆帯による横位の波状文もみられる。

当遺跡では、典型的な新段階の時期の土坑は確認できなかった。但し、第50号土坑の54(第46図)は、口縁部に楕円形の区画文が配された深鉢で、渦巻文と区画文を交互に配する文様とはやや趣が異なるものであるが、新段階の様相に近い土器であると考えられる。この土器の位置付けについては、第50号土坑出土の一括資料を含め、今後の検討が必要である。

イ 袋状土坑の形態と時期について

縄文時代の袋状土坑は、貯蔵用の土坑と考えられており、阿玉台式期には開口部が50cm前後で深さ1mほど、最大内径が約1~1.5mの規模のものが数多く確認されている。袋状土坑の形態変化は、阿玉台



第 207 図 縄文時代 竪穴建物跡、土坑位置図

式期から加曾利 E 式期の前半までに内径（断面形状最大の径）が開口部の口径を上回り、徐々に相互の径の差が少なくなっていく傾向をたどっている²⁾。当遺跡では上半部が削平されている土坑が大半で、推測の域を出ることはできないが、下半部の壁の内傾の度合いから見ると、加曾利 E I 式期の袋状土坑の形態を追認することができると思われる。

縄文時代の土坑を時期で分けると、阿玉台Ⅲ式期から阿玉台Ⅳ式期が 1 基、阿玉台Ⅳ式期から加曾利 E I 式期が 5 基、加曾利 E I 式期が 13 基、加曾利 E I 式期から E II 式期が 1 基、加曾利 E III 式期が 1 基、称名寺 1 式期が 1 基、堀之内式期が 1 基となる。加曾利 E I 式期の土坑数が最も多く、この時期に頻繁に袋状土坑を活用していたとみられる。また、前述のように加曾利 E I 式期の中において、土器の様相から古段階から中段階までの時間の幅が読み取れ、この時期の竪穴建物跡に袋状土坑が近接して位置していたと考えられる。

(2) 袋状土坑と集落の関係について（第 207 図）

竪穴建物跡は、調査区域の北部に 2 棟と少ないながらも確認でき、その北西側に袋状土坑が位置している。袋状土坑は、南西から北東に連続して配置されていることから、円形に配置された土坑群の一部とみられ、竪穴建物跡との位置関係から、調査区北部の谷に面した竪穴建物跡群が土坑を取り囲むように調査区域外にも延びていることを示唆している。

縄文時代中期後葉の集落は、環状に配置されていたことがこれまでの研究で明らかにされており、当遺跡も同様と考えられる。谷口康浩氏は、千葉県の事例を取り上げ環状に配置された集落の内側に袋状の土坑が円形に配列されることを指摘し、これらの集落構造が茨城県域や栃木県域でも同じようにみられると述べている³⁾。鈴木保彦氏は、住居群が環状に配された内側に土坑が環状に巡っていることを述べ、関東地方では共通する現象と言及している⁴⁾。

既報告の千天遺跡⁵⁾は、今回の調査区域から北西 150 m の距離に位置しており、縄文時代の竪穴住居跡 1 軒、土坑 35 基が報告されている。その中で中期後半に比定される土坑は 17 基で、円形に配置された土坑群の一部であることが看取できる。今回の調査区域は、幅 10 m 程の道路改良工事に伴うものであるため、集落全体を捉えることは困難であるが、潤沼に面した台地上に立地し、建物跡や土坑群が確認されていることから、当遺跡内には環状集落が点在していたと考えられる。

(3) 出土した石錘について

袋状土坑からの出土遺物は土器とともに石器も多く、敲石や磨石と比較すると石錘の数が非常に多い。石錘は、弥生時代以降の遺構でも出土しており、第 1 号遺物包含層でも目立っている。遺跡全体を通して出土総数は 170 点で、内訳は表 15 に示したとおりである。石錘は、漁労に使用されたと考えられており、これまでの調査報告によると、海岸部に近接する遺跡や河川流域の遺跡での出土が顕著である。大洗町内のおんだし遺跡⁶⁾では、98 点の石錘が出土しており、現在の漁法も例に挙げながら用途についての考察が加えられている。当遺跡から出土した石錘も漁労に

表 15 出土石錘一覧表

時代	主な遺構	出土数	時代別小計
縄文	袋状土坑	50	50
弥生	竪穴建物跡	1	1
古墳	竪穴建物跡	2	2
奈良	竪穴建物跡	4	4
室町	竪穴遺構	2	9
	地下式坑	4	
	土坑	3	
江戸	道路・側溝	2	84
	包含層	82	
その他	土坑・溝	3	20
	表土	17	
総計			170

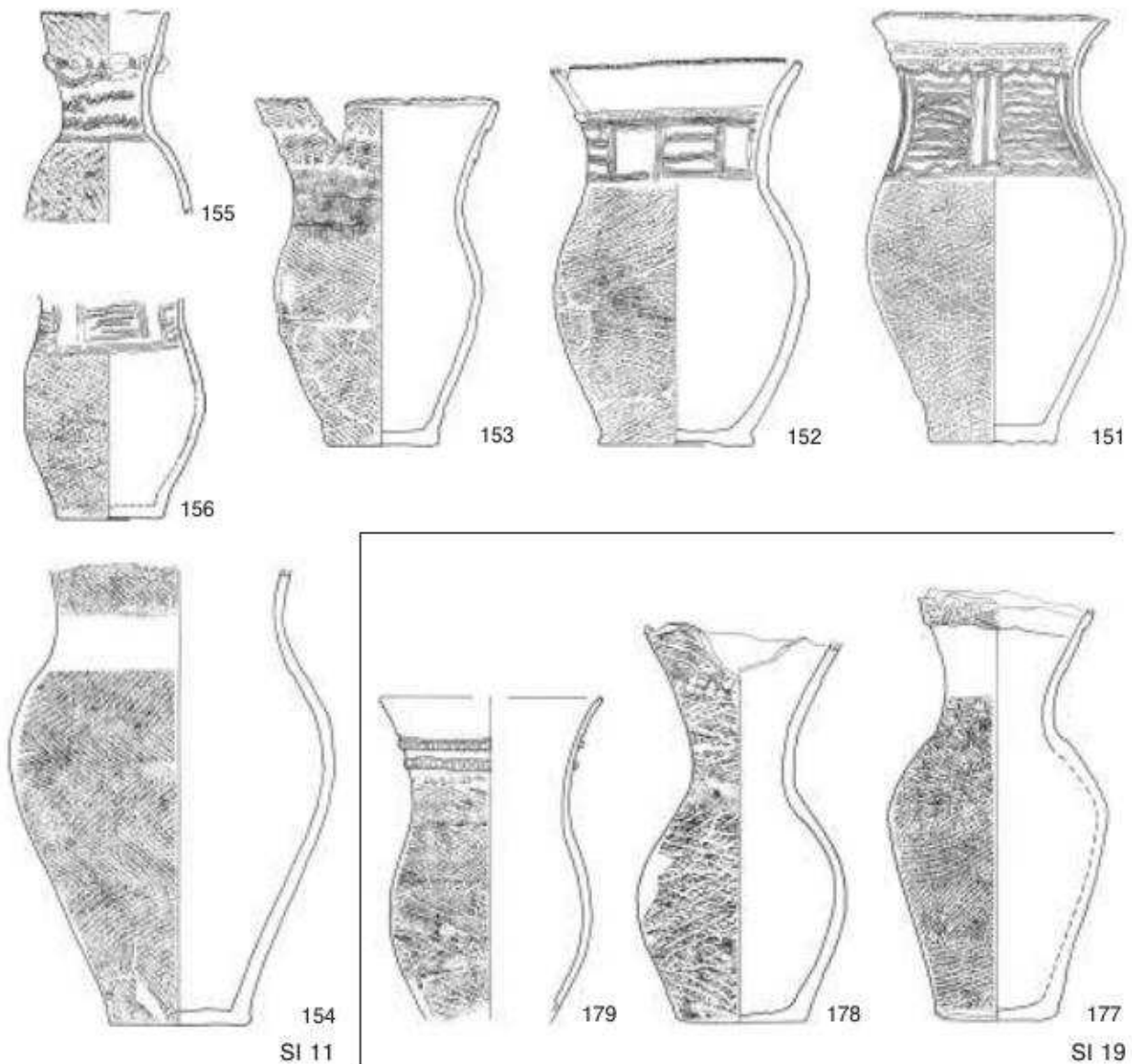
使用されていた可能性は高く、圧倒的に縄文時代に使用されていたことが分かる。当遺跡の東側が海に、西側が内水面に面していることから、この道具を用い海や湖沼の恩恵を受けて生活していたと考えられる。

2 弥生時代

今回の調査で確認できた竪穴建物跡 13 棟は、弥生時代後期後半の時期に比定される。ここでは、これらの建物跡の土器の様相について検討し、当遺跡の集落の様子について考察を加えたい。

(I) 十王台式土器について (第 208・209 図)

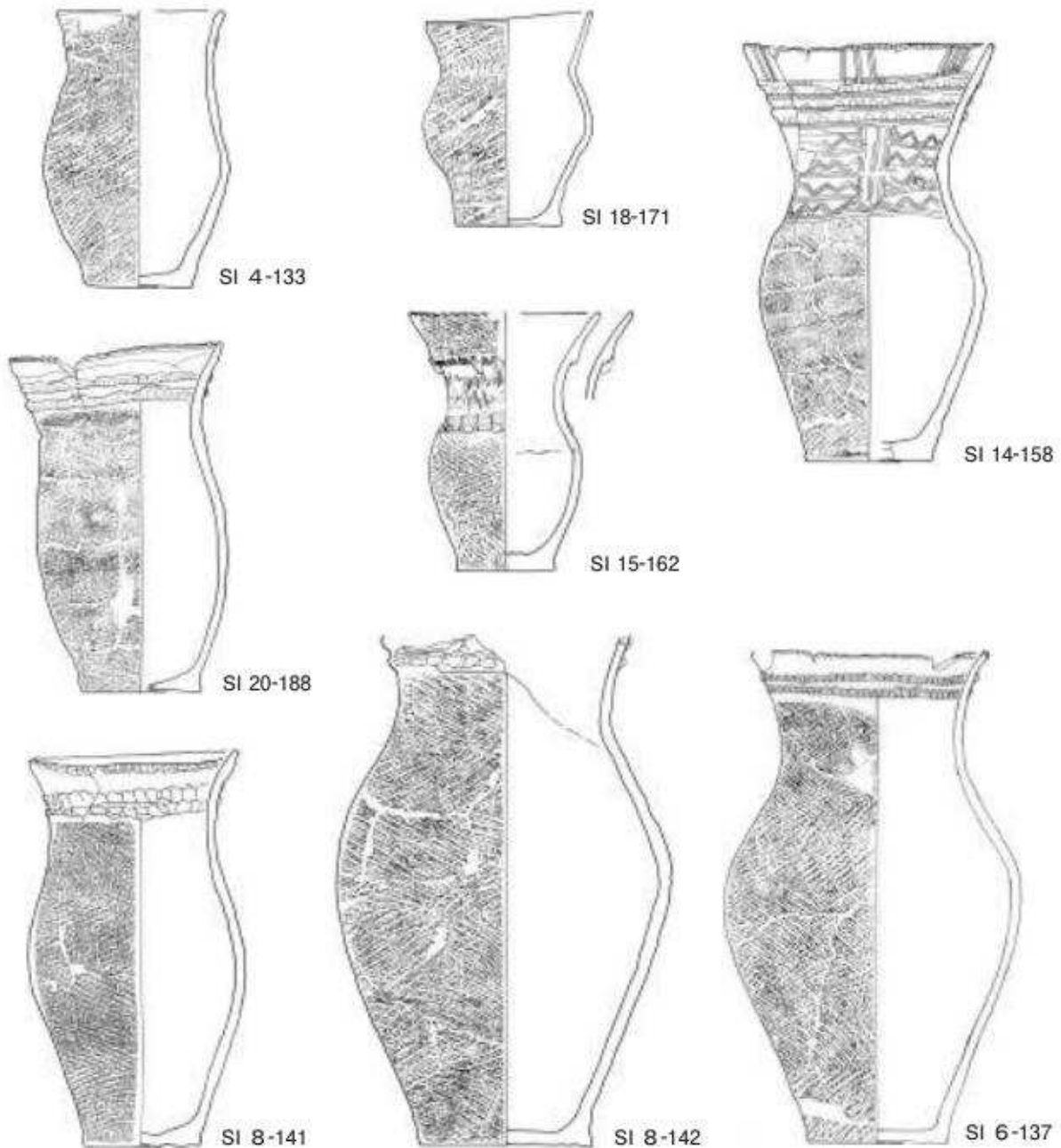
弥生時代後期後半に位置づけられる土器が出土している。これらの土器の文様帯は、口縁部・頸部・胴部に分かれており、頸部には櫛歯状工具で沈線を施し、胴部には縄文を施文している。頸部文様帯はスリットで区画されており、3～5本を単位とした櫛歯状工具で沈線や波状文を施している。胴部は、附加条縄



第 208 図 弥生土器集成図 (1) (S = 1 / 4)

文による羽状構成の施文が主流となっている。これらは十王台式土器に見られる文様で、以下、当遺跡出土の弥生土器について述べることにする。

151～156は、第11号竪穴建物跡から出土した土器の一群である。152は口辺部が無文で、頸部は櫛歯条工具により縦の区画をして、横走文と無文帯を交互に配している。頸部文様帯の幅は、器高の15%で、頸部の最も細い部分に施文されており、頸部の上端には隆起線が1本貼られ、棒状工具による刻み目が施されている。胴部には、附加条2種（附加1条）縄文による羽状構成の文様が施されており、頸部文様帯の沈線による区画と胴部の縄文は、胴部の最上位部分を境としている。151は、152に類似し、頸部の文様については152よりも密に沈線が施され、波状文も見られる。



第209図 弥生土器集成図(2) (S = 1 / 4)

153 は二重の複合口縁で、折り返し部下端に原体押圧が施されており、154 とともに頸部は無文帯となっている。155 も複合口縁で、折り返し部下端に原体押圧が施され、等間隔の貼瘤がつけられている。153～155 の土器は、県南部の上稲吉式土器や県西部で出土例の多い二軒屋式土器に見られる文様の特徴を包含している。

177～179 は、第19号竪穴建物跡の南コーナー部の床面から出土した土器の一群である。177 は口辺部に縄文が施文され、頸部は無文帯である。胴部は附加一種（附加2条）縄文による羽状構成の文様が施されており、他の広口壺の縄文と比較すると細い縄を使用している。179 は口辺部が無文で、2条の微隆帯に刻みが施されている。櫛歯状工具の文様はなく、胴部から連続した羽状構成の縄文が施文されている。

158 は第14号竪穴建物跡から出土した土器で、口辺部には櫛歯状工具（3本一単位）による3条の縦位の沈線が施されている。口辺部と頸部は3条の隆起線により区画されており、隆起線には指頭による押圧がみられる。頸部は櫛歯状工具（3本一単位）により口辺部から続く縦区画を施し、沈線による横走文と波状文を交互に充填している。

これらの土器群は、十王台式の成立期にあたりとみられ、先学の土器編年⁷⁾に照らし合わせると十王台1式期の段階と考えられる。

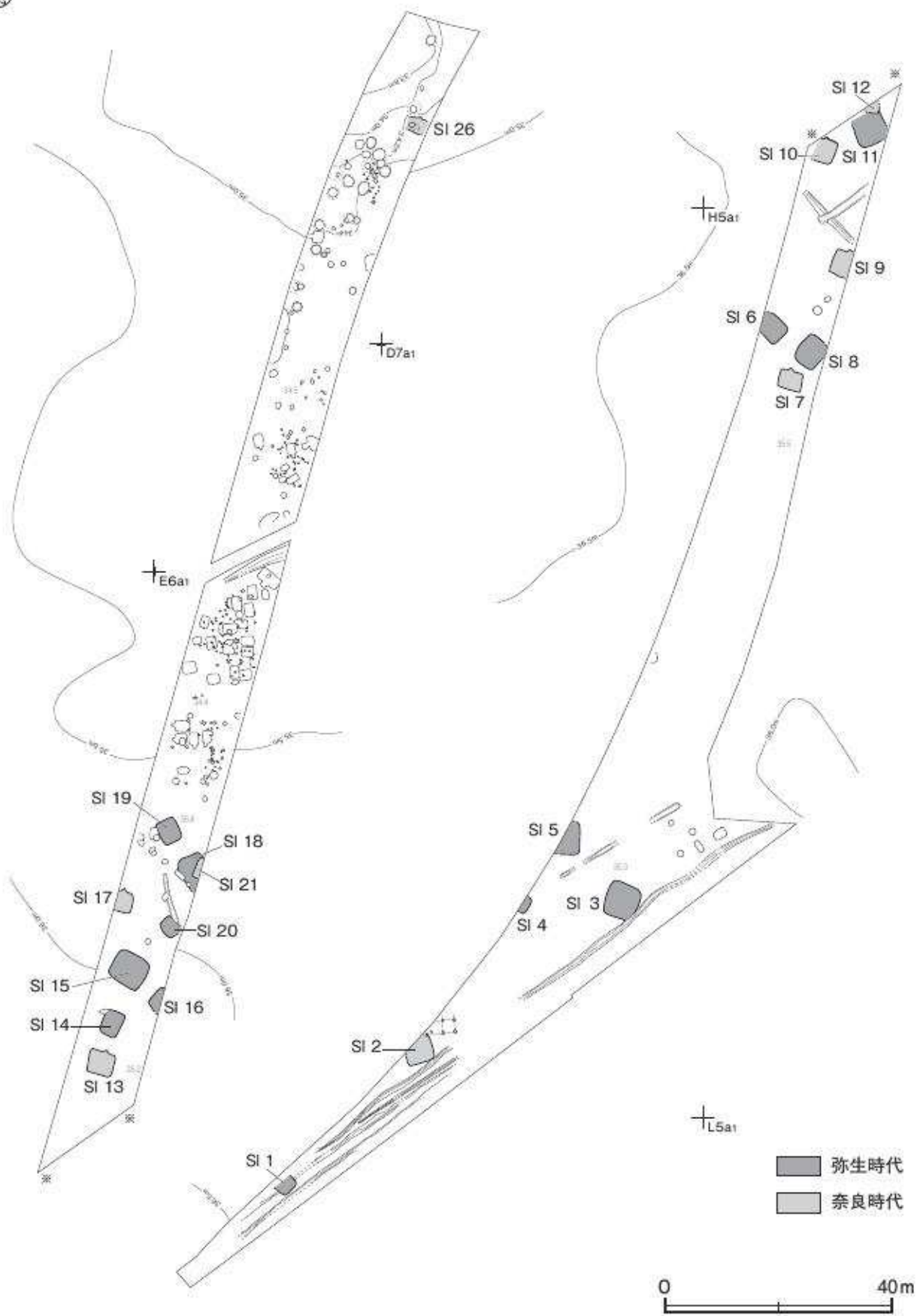
(2) 集落の様相について（第210図）

弥生時代の竪穴建物跡の分布は、大きく二つのまとまりが確認できる。一つのまとまりは中央部に所在する第6・8・11・14・15・16・18・19・20号竪穴建物跡の一群で、もう一つのまとまりは南部に所在する第1・3・4・5号竪穴建物跡の一群である。二つのまとまりは、各建物跡出土の土器様相から十王台式土器の成立期に営まれていたと考えられる。これらの竪穴建物跡には大きな時期差がないことから、二つのまとまりは大きなまとまりの一部分で、合わせて一つの集落を形成している可能性がある。そして、第14号竪穴建物跡の廃絶の例から、新しい生活の地を求めて移動していったことも想定される。

この集団の周辺では、既報告の千天遺跡で8軒⁸⁾、南藤太郎遺跡で27軒⁹⁾の弥生時代の住居跡が確認されており、同じ台地上にそれぞれの集落を営んでいたといえる。また、当遺跡から北へ約2kmに位置する長峯遺跡¹⁰⁾では17軒、北北東へ約2.5kmに位置する官女平遺跡¹¹⁾では3軒の弥生時代の住居跡も確認されている。長峯遺跡の第1・20・24・42号住居跡からは、十王台1式期直前の十王台1a式期の土器が出土している。また、北北東へ約3kmの対岸の台地上には髭釜遺跡¹²⁾が所在し、後期を中心とした住居跡が断続的な調査によって200軒ほど確認されている。第32・33号住居跡は、千天遺跡と同時期の十王台1式期と目され、十王台2式期の住居跡や十王台式土器成立以前の住居跡も散見できることから、当遺跡周辺では集落の時期毎の消長が読み取れる。さらに、当遺跡から北北東へ約3.6kmの一本松遺跡¹³⁾では後期の住居跡82軒が報告されており、潤沼川下流域には十王台1式期とその前後の時期の集落が盛期を迎えていたと考えられる。

(3) 広口壺の出土状況について

竪穴建物跡の土器の出土状況に特徴的な事例があるので、ここでふれておくことにする。建物跡の主に南部や西部の壁ぎわにおいて、広口壺が横位で出土していることである。当遺跡では、第6・8・11・14・19号竪穴建物跡の5棟で確認でき、その多くは口縁部が壁の方向を向いている。これらの事例は、長峯遺跡の第1・11・42号住居跡、髭釜遺跡の第37・43号住居跡、一本松遺跡の第48・106号住居跡で



第 210 図 弥生時代及び奈良時代 竪穴建物跡位置図

も見ることができ、後期後半の建物廃絶時に行われていた土器を遺棄する形態である可能性が高い。

第14号竪穴建物跡は、建物廃絶後に部材を建物跡内で燃やしたと捉えられ、158の土器が口縁部を北方向の壁に向けた状態で焼土や炭化物を含む覆土の中から出土している。この土器は表面が火を受けており、出土状況から土器を壁際に横位で、あるいは正位で遺棄した後、建物の廃絶に伴って部材を燃やしたとみることができる。当遺跡で唯一の廃絶の様相が残された建物跡であるので、全ての建物がこのような廃絶方法をとっていたとは言い切れないが、今後の事例の増加を待って実証できることを期待したい。

3 奈良時代

奈良時代の竪穴建物跡は、9棟確認できた。ここでは奈良時代の竪穴建物跡について考察を加えたい。

(1) 出土土器と時期について

奈良時代の土器の様相を以下に述べる。

ア 8世紀前葉

第9・10・13・21・26号竪穴建物跡出土土器が該当する。210・211・220の須恵器の蓋は返りがついており、230・233の坏は底部が厚く、底径は8cmほどで同時代の須恵器の中では口径に対して底径が広い。

イ 8世紀中葉

第17号竪穴建物跡出土土器が該当する。224は底径の大きな須恵器の坏で、227の蓋は返りが消滅し、つまみが宝珠状に高くなっている。

ウ 8世紀後葉

第7号竪穴建物跡出土土器が該当する。200は底径の縮小した須恵器の坏で、201は底径が5cmほどの高台付坏である。

(2) 建物跡と集落の様子 (第210図)

土器様相に基づいて奈良時代の竪穴建物跡を時期区分すると以下のようなになる。第2・12号竪穴建物については、遺物の出土状況や遺構の形態から8世紀代とした。

8世紀前葉・・・第9・10・13・21・26号竪穴建物跡

8世紀中葉・・・第17号竪穴建物跡

8世紀後葉・・・第7号竪穴建物跡

8世紀代・・・第2・12号竪穴建物跡

これらの竪穴建物跡の配置を見てみると、第7・9・10・12・13・17・21号竪穴建物跡が中央部に集中しており、一つのまとまりを形成している。各時期における建物の棟数は、前葉が5棟、中葉が1棟、後葉が1棟、8世紀代が2棟であり、奈良時代を通じて営まれていた集落の一部であることが看取できる。第2号竪穴建物跡は南部に、第26号竪穴建物跡は北部にそれぞれ1棟あるだけで、集落としての様相は確認できなかったが、中央部の集落の様相から推定すると、南端部や北端部の調査区域外にも竪穴建物跡のまとまりがあり、集落が存在している可能性が高い。

今回の調査区域内においては、奈良時代に限定された集落であり、次の時代には別の場所に移っていったものとみられる。また、周辺で奈良時代の集落が確認されているのは皿沼遺跡¹⁴⁾で、10軒の竪穴住居

跡が報告されており、鹿島台地の北端部に奈良時代の集落が点在していたことが想定される。

(3) 「大屋厨」の墨書土器と大屋郷について

調査区域の最北端部に位置する遺物包含層から、底面に「大屋厨」の文字が墨書された須恵器高台付坏が出土している。この包含層は縄文時代から奈良時代を経て、江戸時代までの出土遺物が確認できた。包含層における遺物は、時期差のある土器類が混在した状況であり、傾斜地に台地上の遺物が比較的短期間に流れ込んだものとみられる。

律令期、当遺跡のある地域は「大屋郷」とされ、鹿島台地の最北端には「宮田郷」が所在していたとされている¹⁵⁾。二つの郷は、半島状に海に突き出た台地上を占めていたものと考えられている。宮田郷は現在の大洗台地上や大貫台地上にあり、大屋郷は現在の大洗町の南部と鉾田市（旧旭村）の北部にまたがる地域であったとされている。旧旭村を南から北に向かって酒沼に注ぐ河川に大谷川があり、昭和時代の町村合併までは大谷村が存在し、大屋の地名が残っていた。「大屋厨」の墨書土器が当遺跡の遺物包含層から出土したことによって、この地域が大屋郷であったことが裏付けられたと考える。

4 室町時代

当時代の主な遺構は、竪穴遺構 17 基、地下式坑 9 基、粘土貼土坑 7 基、墓坑 3 基、土坑 3 基などである。これらの遺構の時期や性格について、遺構や遺物の出土状況をもとにして触れておくことにする。

(1) 竪穴遺構と地下式坑、粘土貼土坑の時期について（第 211 図）

竪穴遺構と地下式坑、粘土貼土坑は、主に調査区北部に密集している。出土した土師質土器片や陶磁器は細片が多く、時期を特定するまでには至らなかったが、土器の様相や出土した銭貨が北宋銭を中心としていることから、室町時代の範疇に収まる遺構群であると考えられる。

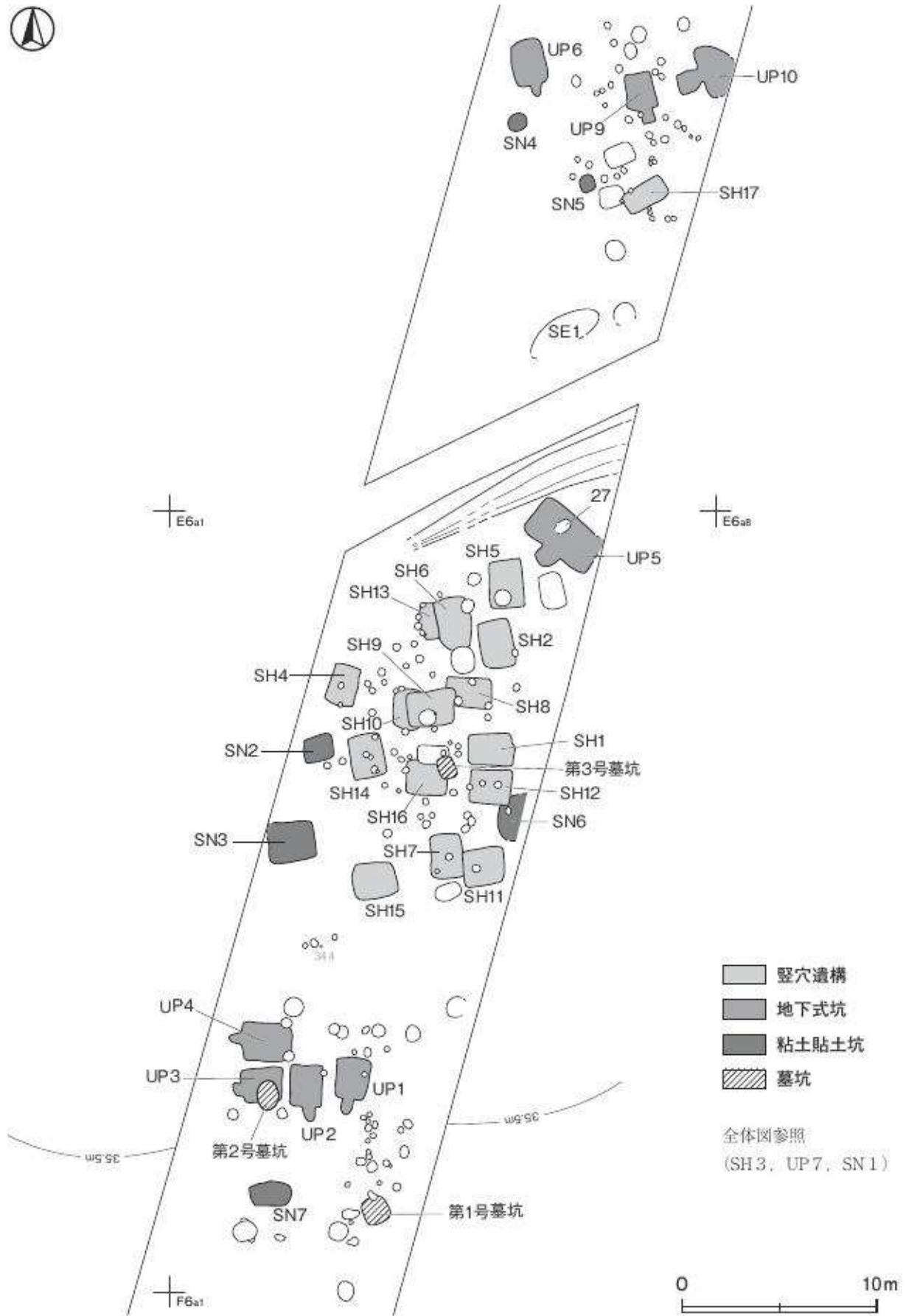
(2) 竪穴遺構と地下式坑の性格について

竪穴遺構は、これまでの研究から生活空間であるとされているが¹⁶⁾、当遺跡で確認できた竪穴遺構は、ピットは確認できたものの上屋を想定できる配置とは言い難いもので、遺構の周囲に確認できたピットについても竪穴遺構との関連を見出すことはできなかった。ただし、竪穴遺構には硬化面が認められたものが多く、頻繁に人の出入りがあったと想定されることと、土師質土器片、陶器片、銭貨の出土から、居住のための施設や倉庫として機能していたことが考えられる。

竪穴遺構 17 基のうち、ピットが 10 基、硬化面が 11 基の遺構で確認できた。遺物は土師質土器片や陶器片、金属製品であり、いずれかが 15 基の遺

表 16 竪穴遺構内部施設及び出土遺物一覧表

番号	ピット	硬化面	主な出土遺物			
			土師質土器	陶器	鉄製品	銭貨 (枚)
1	2	-	-	-	-	-
2	1	○	-	-	-	-
3	-	-	-	皿	-	-
4	1	-	内耳鍋	-	-	6
5	4	○	内耳鍋 播鉢	-	-	-
6	1	○	-	-	釘	18
7	2	○	皿 内耳鍋	-	釘	-
8	-	-	内耳鍋	-	-	1
9	-	○	内耳鍋	-	-	8
10	-	○	内耳鍋	-	線 釘	2
11	4	○	-	-	-	1
12	2	○	-	甕	-	3
13	1	○	-	-	-	8
14	-	○	-	-	-	1
15	-	○	-	-	-	2
16	2	-	皿	-	釘	2
17	-	-	内耳鍋	-	-	-



第211図 室町時代 遺構位置図

構で出土している。17基の全てが人為的に埋め戻されており、遺物は覆土下層から上層にかけて出土している。銭貨の出土は11基で見られ、埋め戻す際に銭貨を投げ込んでいるものとみられる。このような出土状況は、第1～5・10号地下式坑でも認められ、完形の土器や銭貨を埋め戻しの際に遺棄している。第1号地下式坑では輸入磁器の八角小杯に銭貨が埋納された状態で覆土上層から、第5号地下式坑では土師質土器の小皿が覆土中層と上層から、第10号地下式坑では土師質土器の皿が覆土下層からそれぞれ出土しており、地下式坑の廃絶に伴って土器類を遺棄したものとみられる。由比ヶ浜中世集団墓地で確認された竪穴の床下小土坑からは、銭貨入りの土師質土器の皿が重なった状態で出土しており、地鎮埋納物の可能性が指摘されている¹⁷⁾。銭貨を器に埋納した状態は、第1号地下式坑の出土状況と類似しているが、当遺跡の場合は出土位置が上層であることから、廃絶の段階での遺棄と考えるのが妥当である。以上のことから、当遺跡の土器や銭貨の出土状況は、中世の遺構の廃絶の一例となると考えられ、今後の事例の蓄積によって、遺構廃絶の様相がさらに明らかになると考えられる。

(3) 和鏡の出土について

第27号土坑から和鏡が出土している。この土坑は第5号地下式坑を掘り込んでおり、出土遺物と遺構の様相から中世に位置づけられる。この和鏡は、鏡面の薄さや紐の造り、背面の文様から平安末期の作とみられ¹⁸⁾、伝世したものと考えられる。文様は、手前に竹垣、奥に薄が対になるように位置し、その間に2羽の鳥が描かれている。文様が類似した和鏡は、県内では土浦市(旧新治村)の東城寺の経塚から6面出土している。このうち1面は竹垣薄双鳥鏡で、当遺跡出土和鏡と同じモチーフで描かれているが同范ではない。

鏡の出土事例は、上述のような経塚に埋納されたものや墓坑の副葬品とするものがあげられる。本跡の場合、覆土上層からの出土であり、墓坑以外の遺構である可能性が高いが、本跡の南側には墓坑3基が確認できており、これまでの出土例から、本跡は葬送に伴う施設の可能性があることを指摘しておきたい。

4 おわりに

今回の報告は、調査区域が長さ530m、幅15mほどで南西から北東に向かって細長いことから、遺跡の全容を捉えるところまでは至らなかったが、各時代の遺構や遺物の様相の一端を確認することができたと考えている。調査結果から、鹿島台地とそれを取り巻く河川や湖、海などの地理的環境との関連を視野に入れながら遺跡の様相に迫ることに努めた。推測の域を脱しない部分は多々あるが、今回の調査報告が地域の歴史の解明の一資料となるとともに、各時代の遺構や遺物の研究の一助となれば幸いである。

註

- 1) a 大川清 鈴木公雄 工業普通編『日本土器辞典』雄山閣 1996年12月
b 小林達雄編『総覧 縄文土器』アム・プロポーション 2008年6月
- 2) 横堀孝徳「前田村遺跡の円筒状土坑について」『研究ノート』6号 財団法人茨城県教育財団 1997年6月
- 3) 谷口康浩『環状集落と縄文社会構造』学生社 2005年3月
- 4) 鈴木克彦 鈴木保彦編『集落の変遷と地域性』『縄文集落の多様性I』雄山閣 2009年10月
- 5) 村田健二編『千天 鹿島線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』大洗地区遺跡発掘調査会 1980年3月
- 6) おんだし遺跡調査団編『茨城県おんだし遺跡』『大洗文化財調査報告書』第5集 茨城県大洗町教育委員会 1975年6月

- 7) a 弥生時代研究班「茨城県後期弥生式土器編年の検討(Ⅲ)」『研究ノート』3号 財団法人茨城県教育財団 1993年7月
 b 鈴木素行編「武田石高遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編」『ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告』第15集 1998年1月
 c 海老沢珍他「東日本弥生時代後期の土器編年」東日本埋蔵文化財研究会 2000年1月
- 8) 註5に同じ
- 9) 千種重樹編『南藤太郎 鹿島線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』大洗地区遺跡発掘調査会 1980年3月
- 10) 大洗町長峯遺跡調査団編「茨城県大洗町長峯遺跡」『大洗町文化財調査報告書』第4集 大洗町教育委員会 1973年12月
- 11) 小林健太郎「官女平遺跡 一般県道長岡大洗線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第221集 2004年3月
- 12) 井上義安編『髯釜 鹿島線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』大洗地区遺跡発掘調査会 1980年3月
- 13) 井上義安編「一本松遺跡」一本松埋蔵文化財発掘調査会 2001年3月
- 14) 井上義安・千葉隆司編「皿沼遺跡 サイプレスカントリー・クラブ造成地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」大洗町埋蔵文化財発掘調査会 1995年1月
- 15) 大洗町史編さん委員会「大洗町史」大洗町 1986年3月
- 16) 中・近世研究班「中世の竪穴遺構について」『研究ノート』創刊号 財団法人茨城県教育財団 1991年7月
- 17) 小野正敏編『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会 2001年3月
- 18) a 青木豊『和鏡の文化』八木書房 1992年7月
 b 青木豊『和鏡の文化史 水鏡から魔鏡まで』刀水書房 1992年7月
 c 久保智康「中世・近世の鏡」『日本の美術』第394号 至文堂 1999年3月

参考文献

- 茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
 永井久美男編『新版・中世出土銭の分類図版』高志書院 2002年4月

写 真 図 版

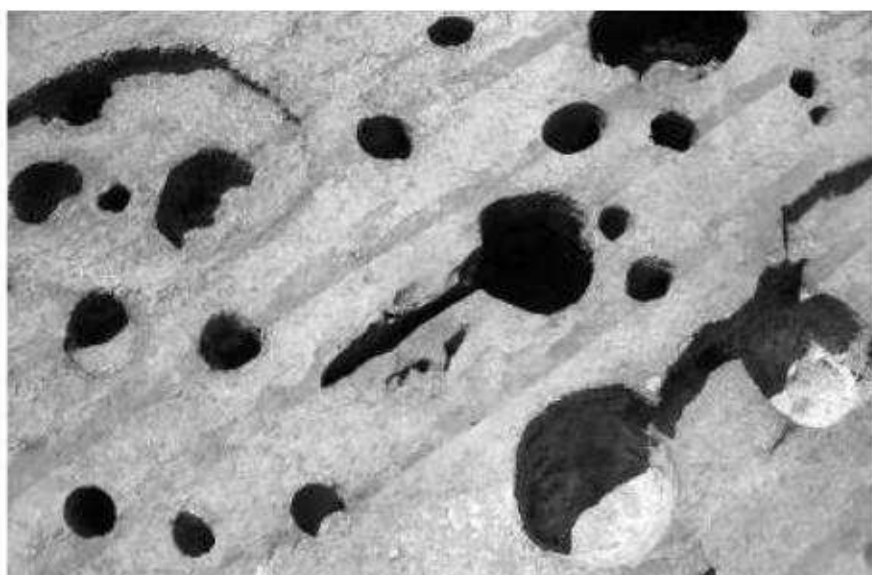


調査区域遠景（南上空から）

袋状土坑群
完掘状况



第24号竖穴建物跡
完掘状况



第11号土坑
遺物出土状况①



PL2



第 11 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况 ②



第 11 号 土 坑
完 掘 状 况



第 12 号 土 坑
土 層 断 面

第 41 号 土 坑
完 掘 状 况



第 44 号 土 坑
遗 物 出 土 状 况



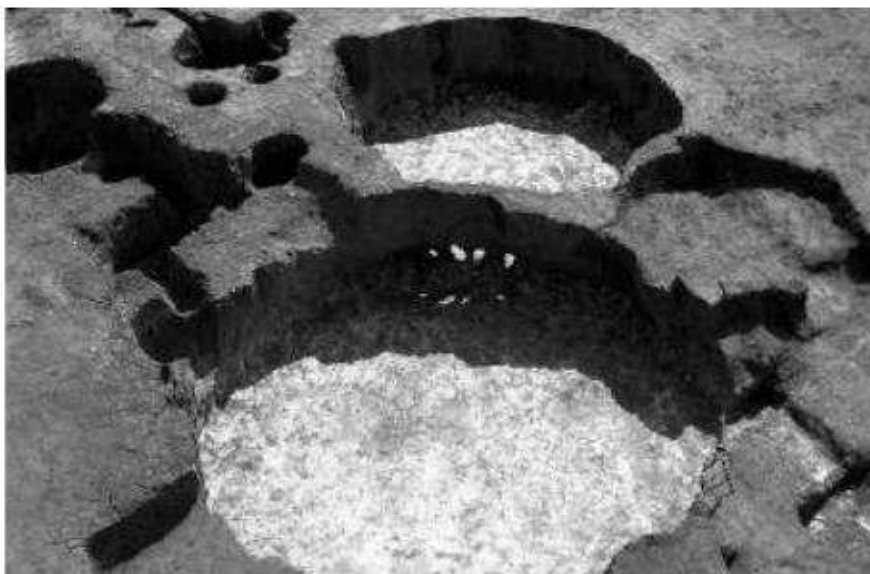
第 45 号 土 坑
遗 物 出 土 状 况



PL4



第 49 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



第 49·52·64 号 土 坑
完 掘 状 况



第 50 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况

第 52 号 土 坑
遺物出土狀況①



第 52 号 土 坑
遺物出土狀況②



第 65 号 土 坑
遺物出土狀況



PL6



第 66 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况 ①



第 66 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况 ②



第 66 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况 ③

第3号竖穴建物跡
遺物出土状況①



第3号竖穴建物跡
遺物出土状況②



第3号竖穴建物跡
完掘状況

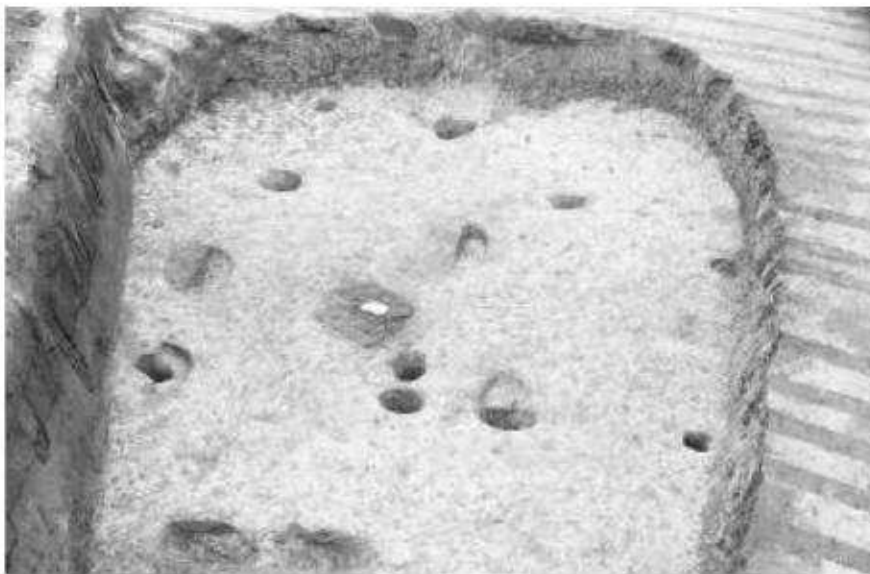




第6号竖穴建物跡
遺物出土状況①



第6号竖穴建物跡
遺物出土状況②



第8号竖穴建物跡
完掘状況

第8号竖穴建物跡
完掘状況



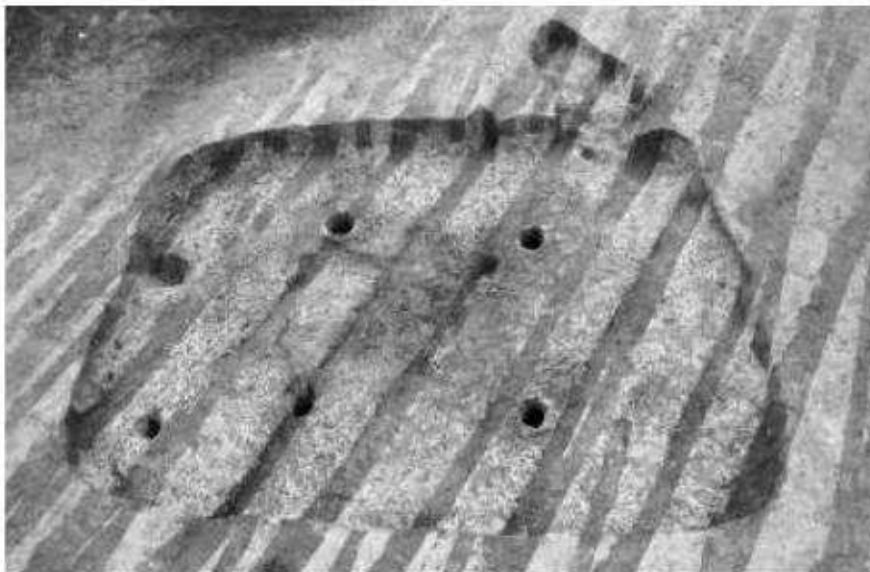
第11号竖穴建物跡
遺物出土状況



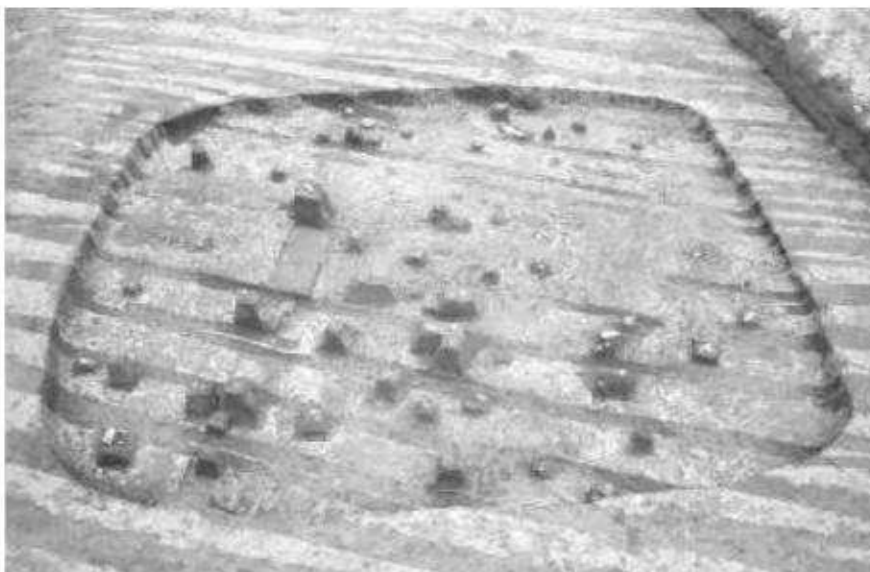
第11号竖穴建物跡
完掘状況



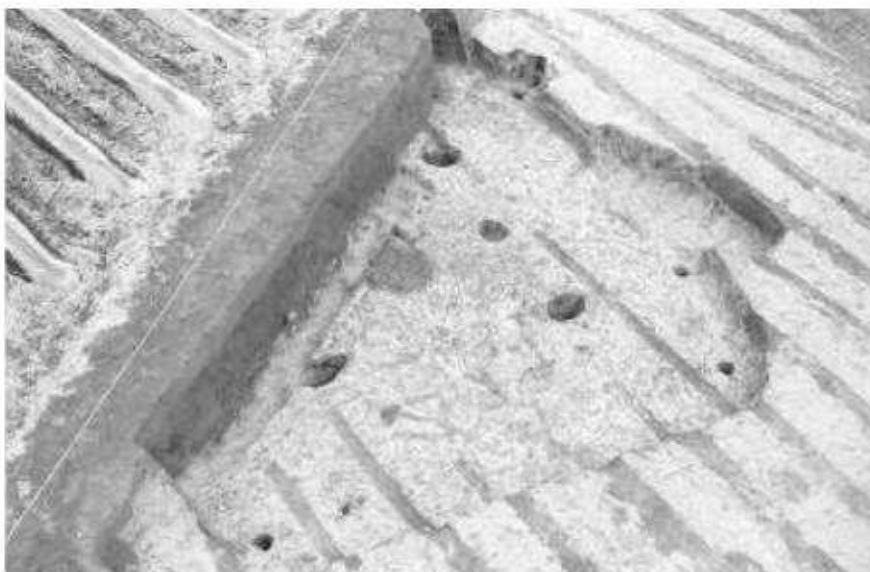
PL10



第14号竖穴建物跡
完 掘 状 況



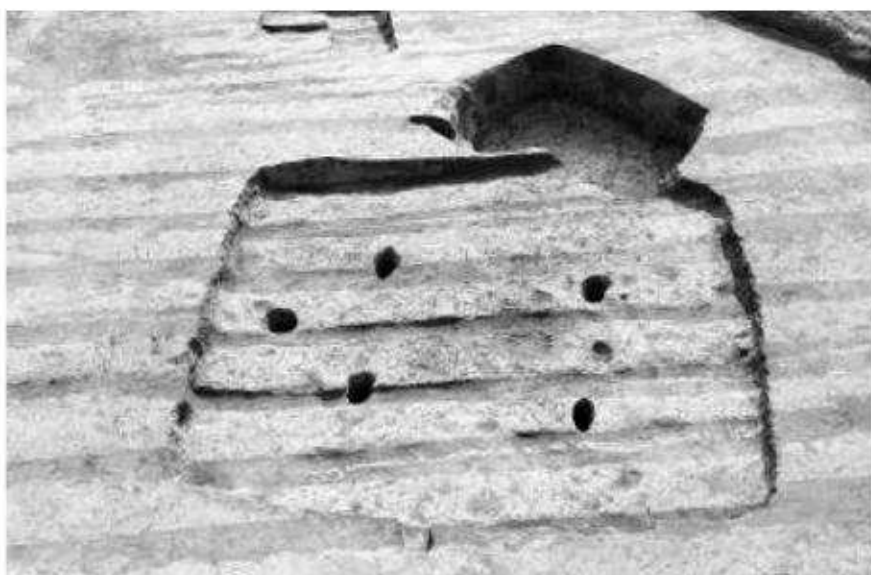
第15号竖穴建物跡
遺 物 出 土 状 況



第18・21号竖穴建物跡
完 掘 状 況



第19号竖穴建物跡
遺物出土状況



第19号竖穴建物跡
第3号竖穴遺構
完掘状況



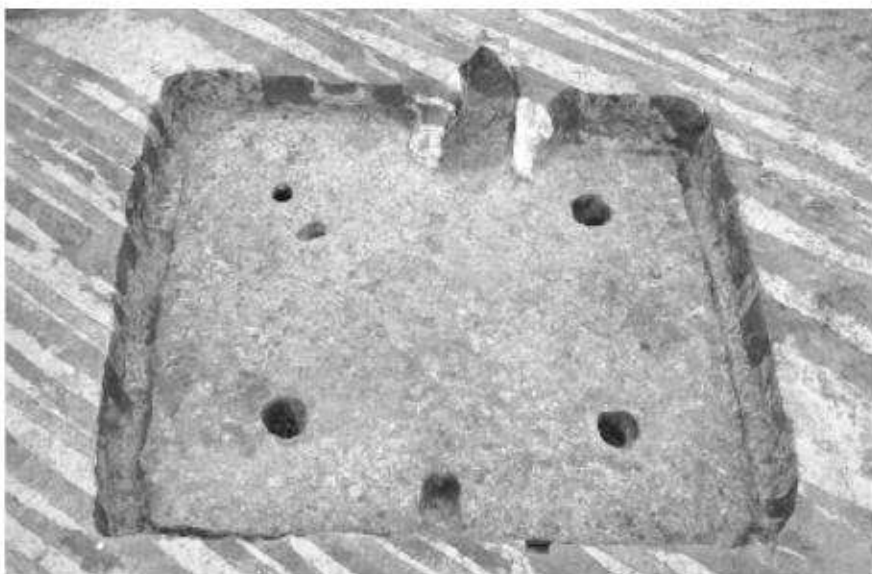
第23号竖穴建物跡
完掘状況



第7号竖穴建物跡
完 掘 状 況



第10号竖穴建物跡
完 掘 状 況



第13号竖穴建物跡
完 掘 状 況

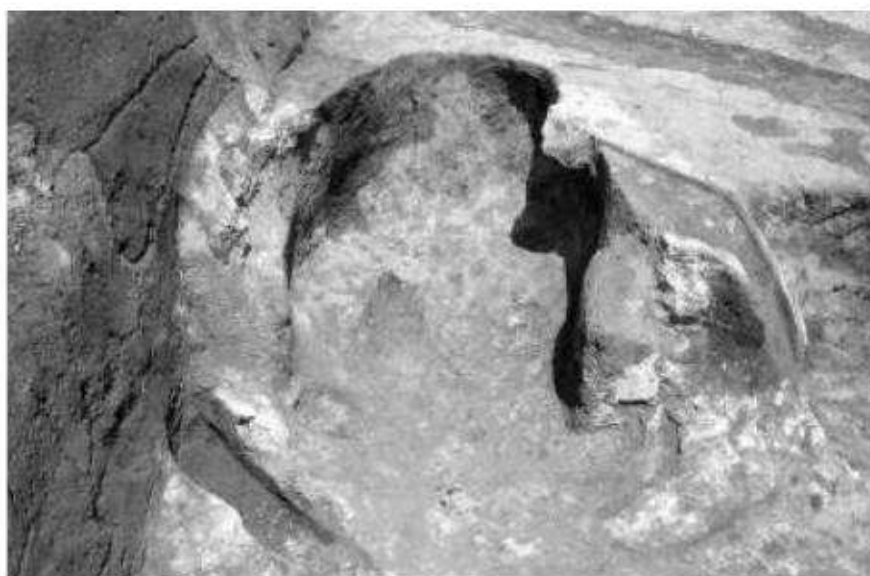
第13号竖穴建物跡
掘方完掘狀況



第17号竖穴建物跡
完掘狀況



第17号竖穴建物跡
竈完掘狀況



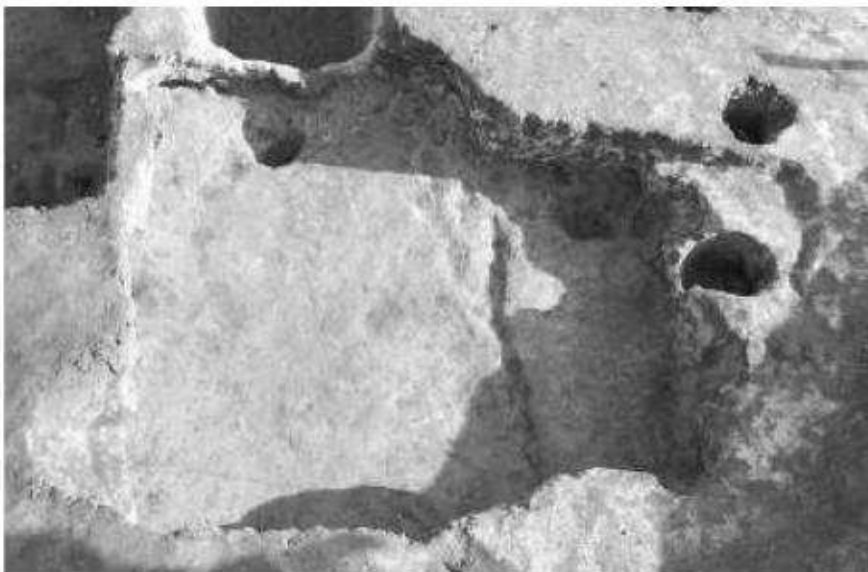
PL14



豎穴遺構・地下式坑群
完掘状況



第1号豎穴遺構
完掘状況



第6・13号豎穴遺構
第85号土坑
完掘状況

第8・9・10号竖穴遺構
完掘状況



第16号竖穴遺構
完掘状況



第1号地下式坑
遺物出土状況





第1~4号地下式坑
完掘状況



第5号地下式坑
完掘状況



第7号地下式坑
完掘状況



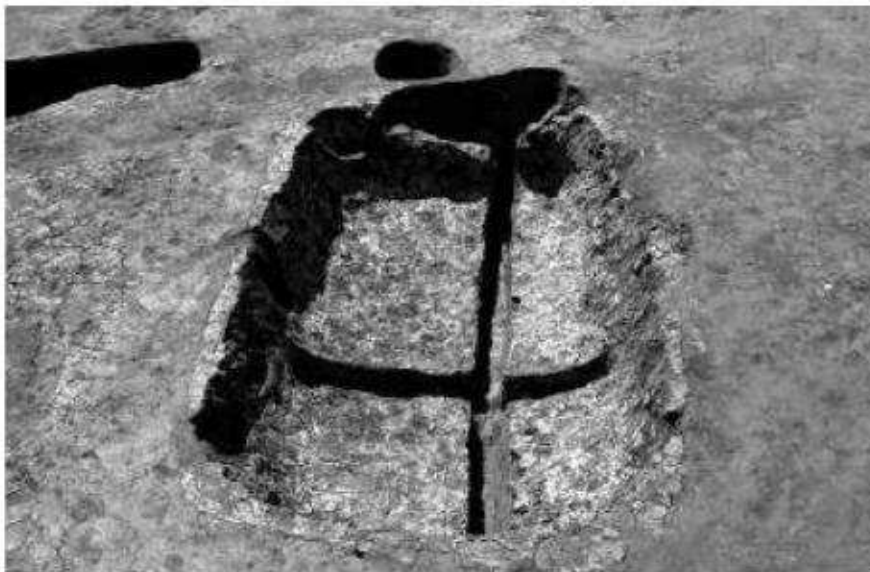
第10号地下式坑
遺物出土狀況



第1号井戸跡
完掘狀況



第5号粘土貼土坑
完掘狀況



第7号粘土貼土坑
完掘狀況



第2号墓坑
人骨出土狀況



第27号土坑
遺物出土狀況

第 27 号 土 坑
完 掘 状 况



第 1 号 遺 物 包 含 層
遺 物 出 土 状 况 ①



第 1 号 遺 物 包 含 層
遺 物 出 土 状 况 ②



PL20



第1号道路跡 側溝1～4 完掘状況



第1号道路跡 側溝5・6 完掘状況



第1号道路跡 側溝7 完掘状況



第2号道路跡 側溝 完掘状況



第 49 号 土 坑
出 土 土 器



第 44 号 土 坑
出 土 土 器



第 11 号 土 坑
出 土 土 器





PL24



第44号土坑 出土土器



第49号土坑 出土土器





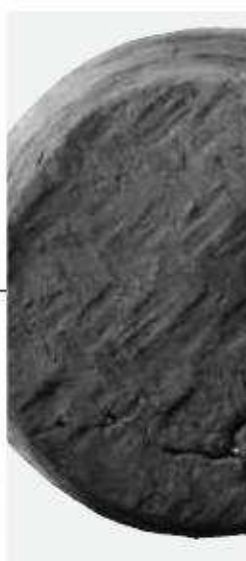
SK66-115



SK66-118

第66号土坑 出土土器





第66号土坑 出土土器

PL30



第11号竖穴建物跡
出土土器



第19号竖穴建物跡
出土土器



第8号竖穴建物跡
出土土器



第3・6・8・11号竖穴建物跡 出土土器



第6・8・11・15号竖穴建物跡 出土土器



SI 11-155



SI 18-171



SI 15-162



SI 11-153



SI 11-152



SI 20-188



SI 19-178



SI 19-177



SI 14-158





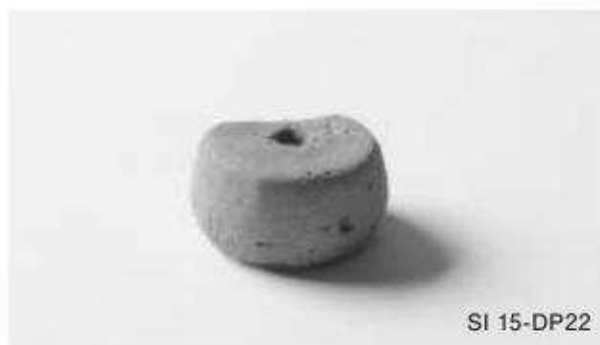
第7・9・17・26号竖穴建物跡 出土土器



第5号竖穴遺構，第1・5・10号地下式坑，第1号遺物包含層 出土土器



SI 18-DP24



SI 15-DP22



SI 15-DP23



SI 19-DP26



遺構外-DP19



SI 13-DP33



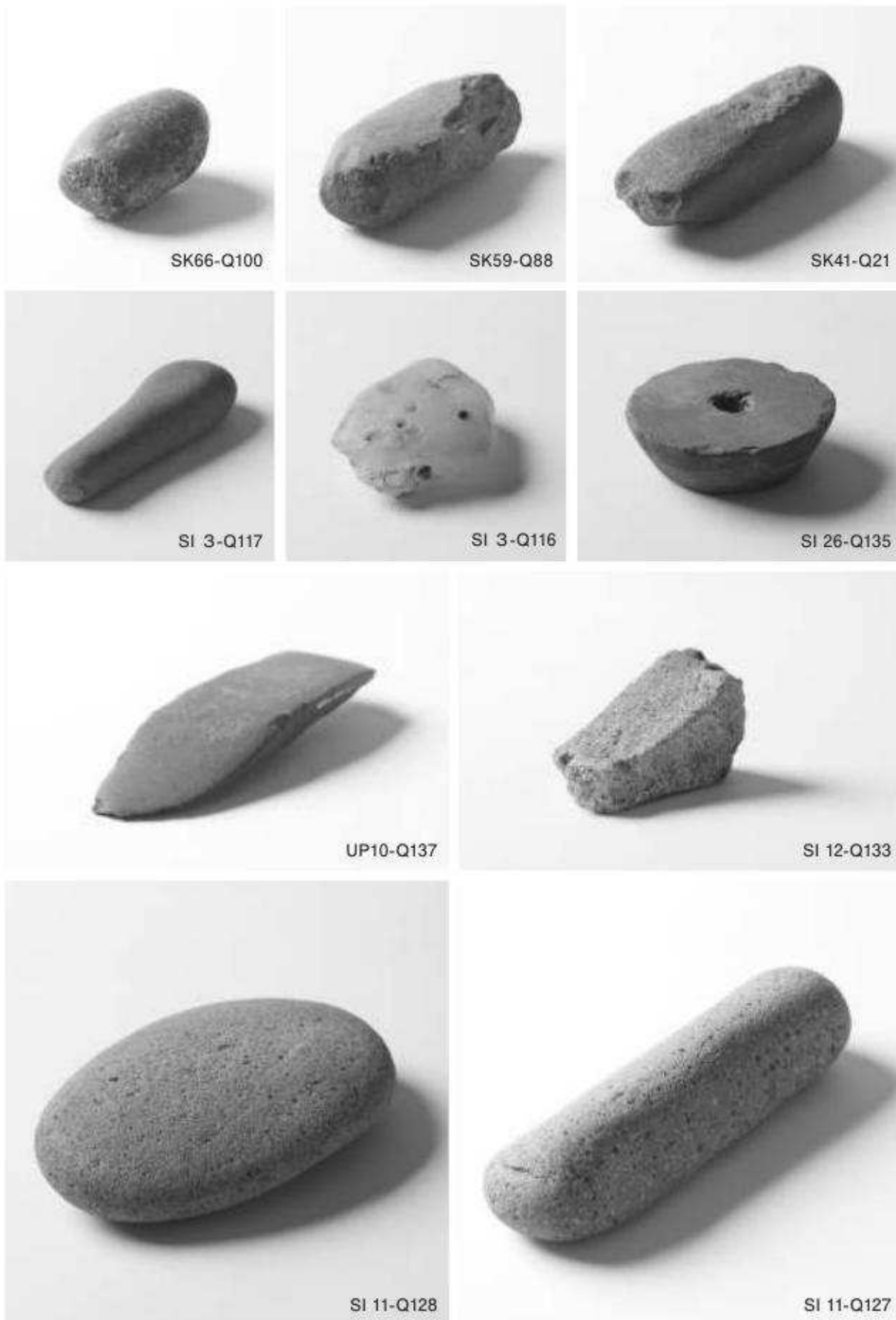
SI 13-DP34



土玉 (弥生)

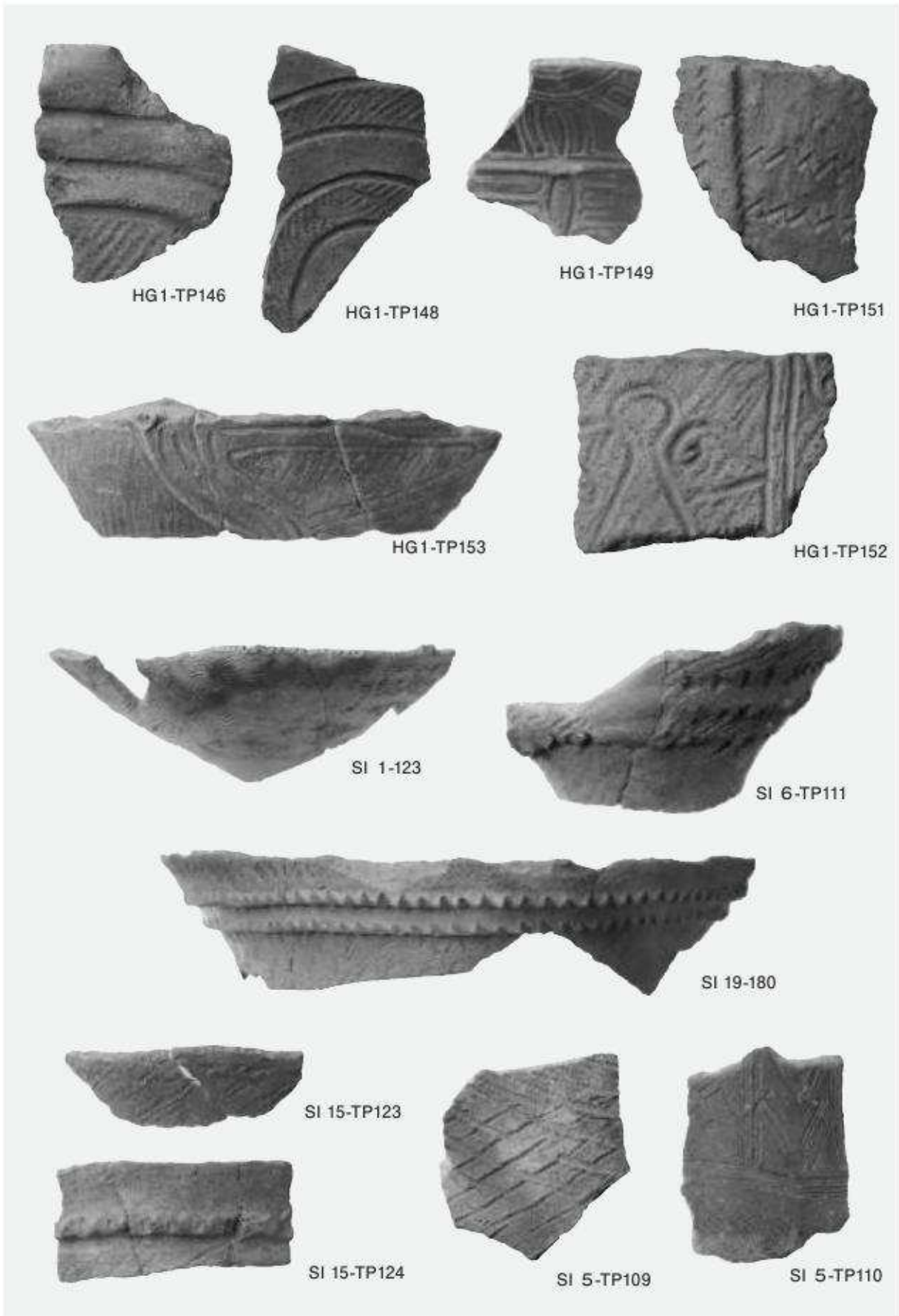


土玉 (奈良)

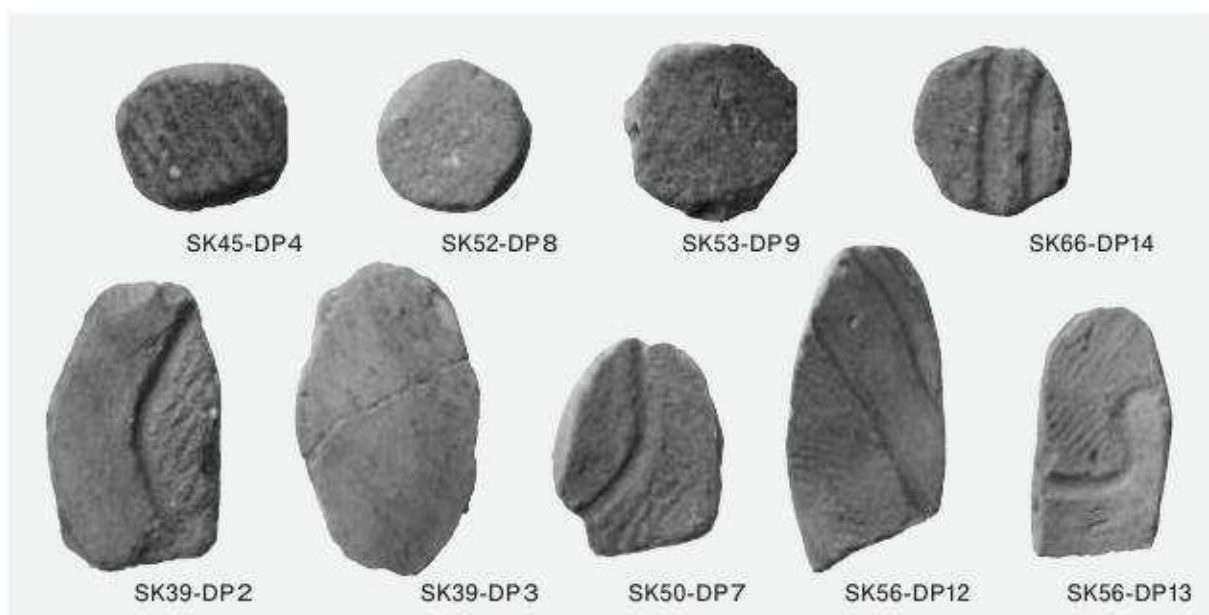
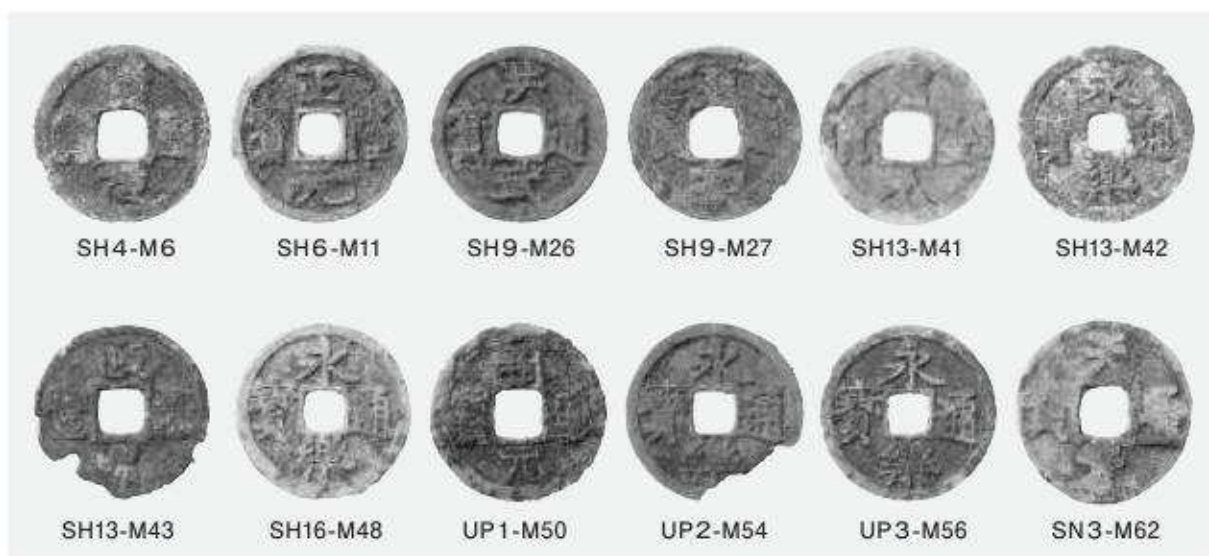
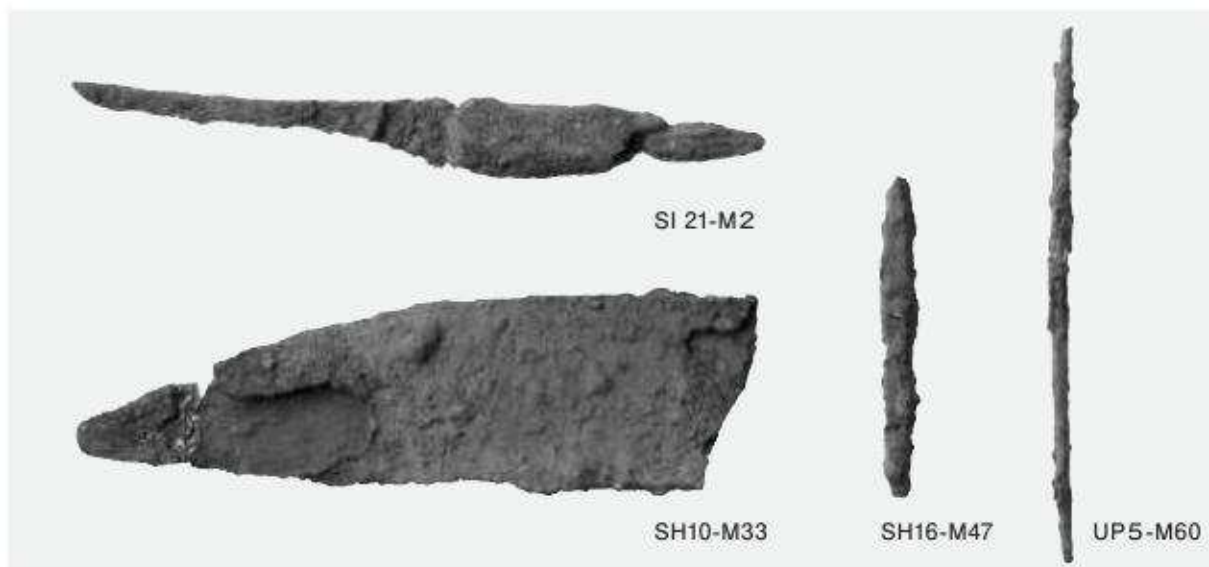


第3·11·12·26号竖穴建物跡，第41·59·66号土坑，第10号地下式坑 出土石器

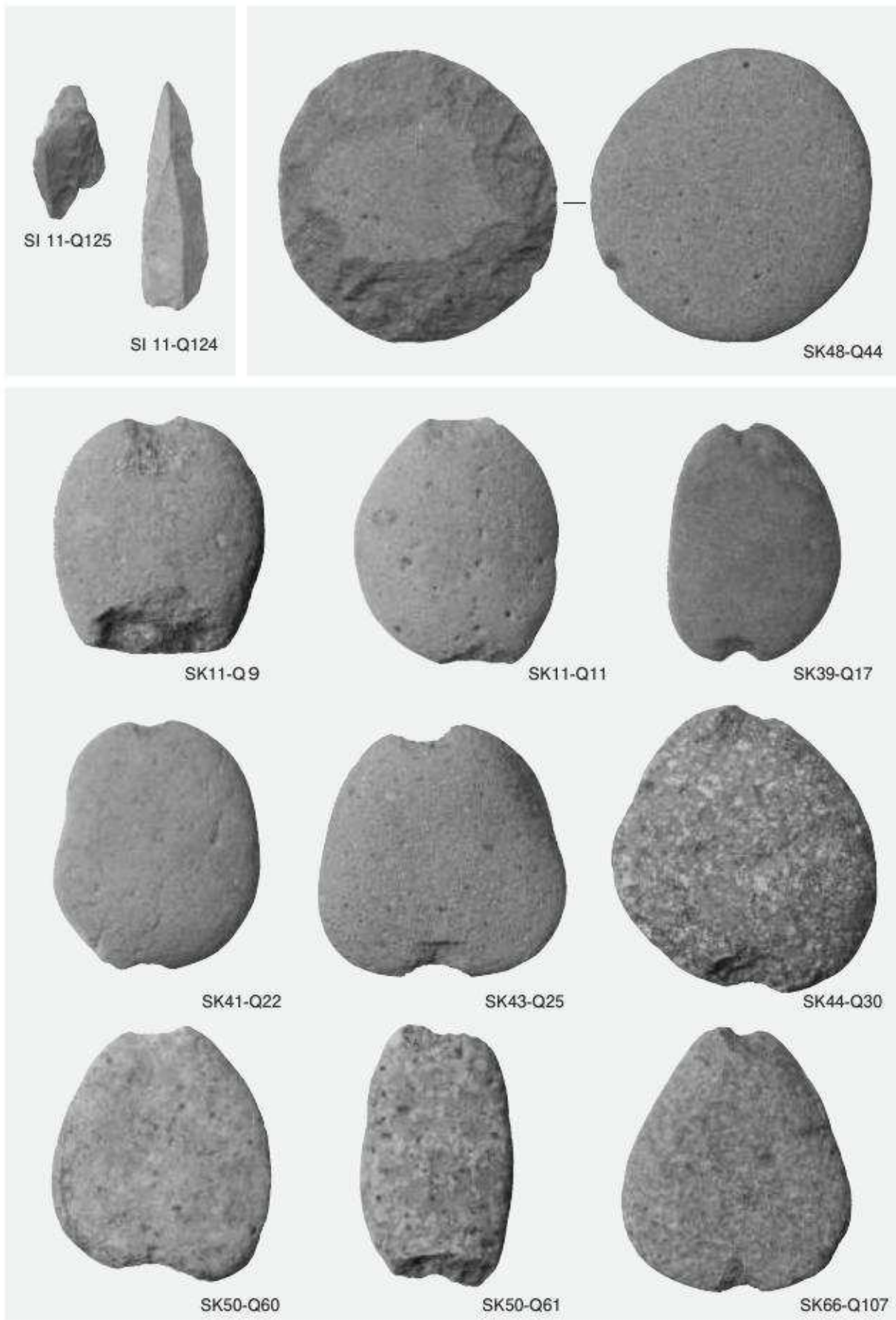




第1・5・6・15・19号竪穴建物跡，第1号遺物包含層 出土土器



豎穴建物跡，豎穴遺構，地下式坑，粘土貼土坑，土坑 出土金屬製品錢貨・土製品



第11号竖穴建物跡，第11・39・41・43・44・48・50・66号土坑 出土石器

抄 録

ふりがな	ちてんいせき							
書名	千天遺跡							
副書名	主要地方道大洗友部線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第384集							
著者名	寺内 久永							
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2014(平成26)年3月12日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
千天遺跡	茨城県東茨城郡大洗町神山町796番地ほか	08309 - 013	36度 17分 12秒	140度 32分 56秒	30 ~ 35m	20130101 ~ 20130331 20130401 ~ 20130930	3,531㎡ 3,169㎡	主要地方道大洗友部線道路改良事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
千天遺跡	集落跡	縄文	竪穴建物跡	2棟	縄文土器(深鉢・浅鉢) 土製品(土器片・土器片・土器片)		遺物包含層からは、「大屋厨」と墨書された須恵器の高台付坏、中世の土坑からは和鏡「竹垣薄双鳥鏡」が出土している。	
		弥生	竪穴建物跡	13棟	弥生土器(高坏形土器・広口壺) 土製品(紡錘車)・支脚			
		古墳	竪穴建物跡	1棟	土師器(坏・甕)			
		奈良	竪穴建物跡	9棟	土師器(坏・甕) 須恵器(坏・高台付坏・蓋・甕) 土製品(土玉・管状土鍾・支脚) 金属製品(刀子・鎌・釘)			
		室町	竪穴遺構	17基	土師質土器(皿・内耳鍋)			
		江戸	地下式坑	9基	磁器(小坏)			
	墓跡	室町	井戸跡	1基	金属製品(釘・銭貨・和鏡)			
			粘土貼土坑	7基				
その他	時期不明	土坑	62基	土師質土器(皿・内耳鍋)				
		溝跡	4条	土製品(管状土鍾)				
ピット群	3か所							
要約	縄文時代は谷部に面した環状集落の一部、弥生時代と奈良時代は台地上に営まれた集落の一部、室町時代は竪穴遺構や地下式坑に代表される生活のための施設などが確認でき、時代ごとに生活の場を変化させていた人々の暮らしの一端を垣間見ることができた。							

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 7 Home Premium ServicePack1
	編集	Adobe InDesign CS5
	図版作成	Adobe Illustrator CS5
	写真調整	Adobe Photoshop CS5
	Scanning	6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000
	図面類	EPSON ES-10000G
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CS5でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第384集

千天遺跡

主要地方道大洗友部線道路改良
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成26（2014）年 3月10日 印刷

平成26（2014）年 3月12日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587
H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 いばらき印刷株式会社
〒319-1112 那珂郡東海村村松字平原3115-3
TEL 029-282-0370

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第 384 集

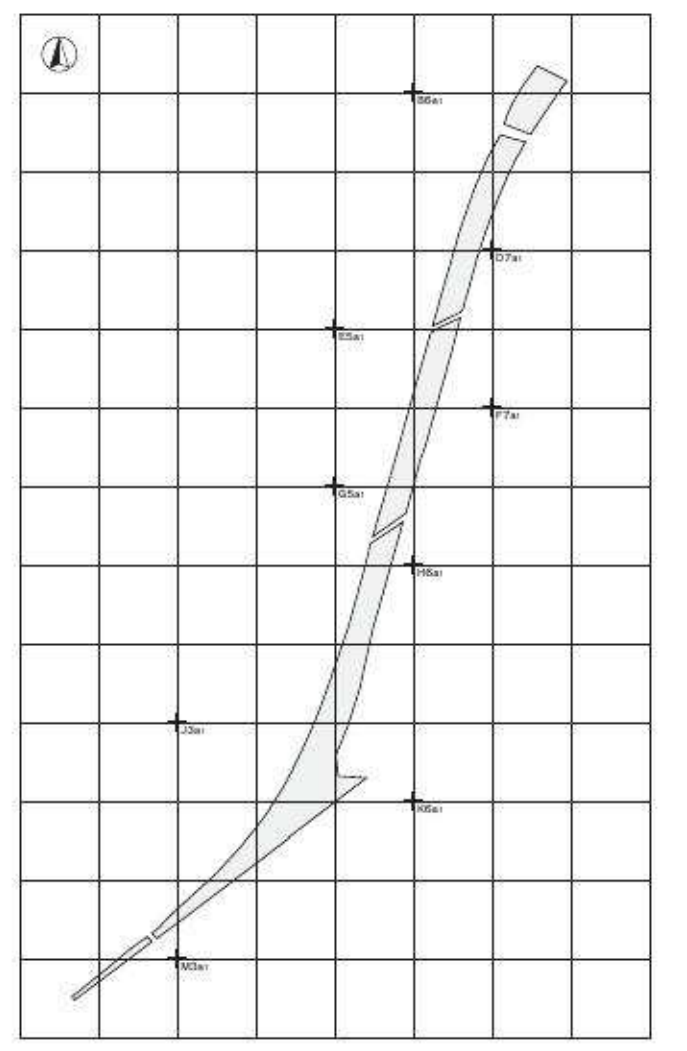
千天遺跡遺構全体図



X=32,280m Y=64,200m
TBSa1

X=32,120m Y=64,200m
TF5a1

X=31,840m Y=64,120m
TM2a1



第1号道路跡 硬化面

